ジ・オウム

サブカルチャーとオウム真理教

20世紀末ニッポンに燃然と姿を現わした、前代未聞のサブカル・カルト教団、オウム真理教を若き識者／不見識者が徹底検証！　上祐氏ら有名幹部の入信のきっかけとなった幻の「トワイライト・ゾーン」誌ルポ再録や、世界のカルト教団グッズガイドなど、オウムと日本のダークサイドをこの一冊に結集！

飴屋法水
伊藤ガビン
宇川直宏
大澤真幸
岡田斗司夫
岸倉ベル
木村重樹
黒田一郎
小泉雅史
小林昌廣
小谷真理
椹木野衣
清水アリカ
白川昌生
高井志生海
武邑光裕
谷崎テトラ
永瀬唯
中原昌也
西原珉
根本敬
能勢伊勢雄
福居ショウジン
福田和也
村上隆
村崎百郎
毛利嘉孝
若野行博

フランク編

ジ・オウム
サブカルチャーとオウム真理教
プランク編

はじめに

正論VS正論もしくは妄想VS妄想、これがこの本のテーマです。みんな自分が正しいと主張する事だらけですから簡単に答えはでません。一方は「君、それは間違っている」といい、又一方で「君こそそんなことは妄想に過ぎない」なんていっているのだから大変です。ですからこの一冊で「いろいろな人がいろいろな事を考えているのが重要だね」ということを実感してもらえたら幸いです。

[after WILD FANCY ALLIANCE by SCHA DARA PARR]

プランク　椹木野衣／木村重樹

ジ・オウム——サブカルチャーとオウム真理教　目次

はじめに　3

その①　**ジ・オウムズ・アドヴェンチャー・オヴ・ウルトラ★サブカルワールド**

サブカルチャー最終戦争後のポスト・オウム時代に……　椹木野衣×飴屋法水×福居ショウジン　8
オウム真理教の家郷　福田和也　36
終末という理想　大澤真幸　44
オウムとサリンとはりぼて　白川昌生　72
だれが「オウム・サリン事件」を起こしたのか——「日本教」と「オウム真理教」　毛利嘉孝　86
「サブカルチャー的悪夢」と革命的想像力　清水アリカ　98
＊
オタクの王様、オウム問題を語る　岡田斗司夫　104
『少年ジャンプ』の中で生きる手錬——『アキラ』の結末とオウム　村上　隆　116
キンタマを出したオウム真理教　伊藤ガビン　120
カルトとしての父権制　小谷真理　128

その②　**サブ・カルトの精神世界と身体宇宙**

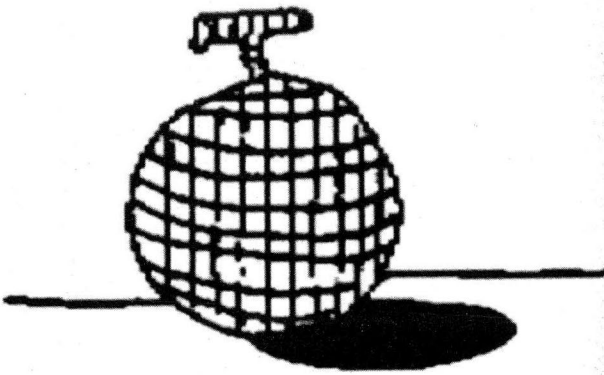
20世紀末を自己演出した〝脱聖〟の背後力学　武邑光裕　140
対抗文化（カウンターカルチャー）としてのオウム　谷崎テトラ　156

大本教霊学から見たオウム真理教　能勢伊勢雄　192
タントラ・ヨガのコミック化――阿含宗との対比からみたオウム真理教　若野行博　182
導師（グル）なき時代の覚醒論　黒田一郎　170
＊
最終的な理想国を築くために神をめざす超能力者「麻原彰晃」（再録）　レポート・高井志生海　202
救済計画に踏みきった〝超能力戦士（ウォリアーズ）〟たちの誤謬　高井志生海　210
ヨーガ実践者からみたオウム騒動　岸倉ベル　230
鹿島とも子論――きたるべき身体について　小林昌廣　240
極楽をうしなった不幸――オウム真理教のつたない地獄　西原珉　250

その③

これって「オウム真理教」だよね～！

麻原彰晃の原風景　根本敬　270
綺想科学と妄想兵器にまみれたオウム・テクノロジー　永瀬唯　272
ゲス事件／ゲスメディア／ゲス視聴者　村崎百郎　300
＊
やっぱり逃げないわけにはいかないじゃんか！――4・15東京脱出　小泉雅史　324
地球征服を企む、ある男臭いアジア人の話　中原昌也　328
すべては70年代ってこと？――オカルト、超能力、大予言　木村重樹　334
忘れ形見はおんな唱法――オウムVSカルト軍団ドバドバ大進撃!!　宇川直宏　348



その①

ジ・オウムズ・アドヴェンチャー・オヴ・ウルトラ★サブカルワールド

サブカルチャー最終戦争後のポスト・オウム時代に…

（鼎談）椹木野衣×飴屋法水×福居ショウジン

さわらぎ・のい：一九六二年生まれ。美術評論家。八〇年代後半に「シミュレーショニズム」を提唱、多分野に影響を与えた。展覧会のキュレーションなどもつとめる。著作に『ヘルタースケルター』（トレヴィル）、『神は細部に宿る』（村上龍との共著・浪漫新社）他。近刊に『テクノデリック』（集英社）。

あめや・のりみず：一九六一年生まれ。アーティスト・演出家。東京グランギニョルやM・M・Mなどの演劇活動を経て、九〇年にテクノクラートを結成。発表の場を美術に移す。レントゲン藝術研究所での個展のほか、『人間の条件展』『トランス・カルチャー展』などのグループ展にも参加する。

ふくい・しょうじん：一九六一年生まれ。映画監督。8ミリ作品『ゲロリスト』（85）『キャタピラ』（88）制作後、16ミリ作品『ピノキオ964』を公開し、92年日本映画プロフェッショナル大賞特別賞受賞、ロッテルダム映画祭招待上映を経て94年ヨーロッパで上映される。現在『ラバーズ・ラバー』制作中。

椹木　今回の事件では世代のことが盛んにいわれています。新人類と呼ばれて得体のしれない期待をかけられたり、オタクと呼ばれて気味悪がられたりしてきた「僕ら」に対する「正体」が一気にさらけ出されたと思っているひとたちも多いんじゃないでしょうか。まあ、偶然といってしまえばそれまでなんだけど、例のM君はもちろん、今回でいうと上祐、それから宅八郎なんかが僕と同じ歳なんですね（笑）。まあ、彼らに対してとりたててシンパシーを感じているわけではないにせよ、どこの世界からもどこかではみ出してしまうあたり、僕とかも本当に美術評論家なのかいな？という疑問はいつもあるし、たしかに考えるべきポイントはありそうです。つまり、日頃僕らが表現

したり文章を書いたりするうえで気になっていた様々なモチーフが、今回の問題を契機にして、市民社会に対してネガティヴなかたちで浮かび上がってきているという事はたしかにある。

＊

ここではそのなかでも、サブカルチャーの問題を取り上げようと考えています。ただ、アニメやオタクをめぐっての日本流サブカルチャーは、その手のジャーナリズムなど、やるべきところがやるでしょうから、ここではもう少し幅広い文脈を考えてみたい。それは具体的にいうとパンク／ニューウェイヴ／インダストリアル／ポスト・インダストリアル／ノイズといった、実際僕らに対してはアニメなんかよりずっと影響力のあった「船来」のサブカルチャーの抱えていたモチーフの数々が、やはり今回の問題を語るうえで欠かせないものになっているということなんですね。

より具体的にいってしまえば、スロッビング・グリッスル（TG）とかSPKとかキャバレー・ボルテールとか、あのあたりのポスト・パンクのバンド（？）が抱えていた興味の対象というのが……自己言及的な批判の戦略であったとはいえ……洗脳であったり薬物によるトランスとか、監禁、拷問、死の恐怖、医療技術や軍事技術などの先端テクノロジーの問題、そして反近代、反教育、さらに世界最終戦争というヴィジョンだったりして、そういうふうに並べてみれば、オウムが使っていたモチーフにきわめて近いものがあるわけです。

だけど、一方でオウム真理教がそういう影の部分を覆い隠すかのように、「優しさ」とか「癒し」とかいうイメージに収斂していくのに対して、たとえばノイズだったりポスト・インダストリアルだったりは、むしろそういう「優しさ」とか「癒し」みたいな表面的な「救済」を徹底的に批判して、むしろ騒音や雑音のような異物に積極的に身を晒して生きていく方向を探っていたと。そういう根本的な違いは、最

ノイズ・インダストリアル・ユニットのサンプルとして……スロッビング・グリッスル（TG）のメンバーと犬

初に確認しておかなければならない。それから、やっぱりオウムのあのくそダサい音楽と、TGとかの意外なくらいの「趣味の良さ」との決定的な違いは、これはあんがい大きい問題だと思う。逆に、TGのジェネシスがオカルトがかってサイキックTVを結成して、どんどんダサくなっていくと、今度はかなりオウムっぽくなってくるという逆説も見ておく必要があるとは思いますけど。

メディア内リアリティの行方

椹木　そういう視点に立って、福居さんと飴屋さんが今までやられてきた仕事、作られてきた作品との関連において、今回の一件をどう考えられているかを、最初に話していただきたいと思ってます。福居さんにせよ飴屋さんにせよ、かたや映画、かたや演劇というふうにジャンルこそ違えど、そのあたりのポスト・パンクのムーヴメントに触れたのが、表現活動に入ることになった大きなきっかけではなかったと思います。そしてまたそのことが、演劇界や美術界、映画界で活動していくうえで、そういう体験のない人たちから「なんかこいつらわからないな」という「感じ」を与えているひとつの理由でもあると思うのです。

福居　まず端的にいって今回の一件には大きなショックを受けたね。それは現在僕が撮影中の新作『ラバーズラバー』という映画の中で自分が描こうとした設定がオウムとあまりにも似ていたということがある。具体的にいえば薬物投与、拉致監禁、拷問、爆音とかがそれにあたります。もちろんオウムは現実、映画はフィクションと割り切ってしまえばそれまでだけど、そう簡単に割り切れないところもあって、映画撮影の現場を知っているひとならわかると思うけど、煮つまってくると、ほとんどスタッフの監禁に近い状態までいくことがあるんですね。それに、僕らは予算の関係上、セットや美術にしても極力その場で作ったりしてましたから、そうすると周囲住民への騒音や悪臭騒ぎというのも実際に起こりかねない。劇中では、人を殺してしまうという設定もあるし。

椹木　福居監督は、そうはいっても自分のやっていることはエンターテインメントでありフィクションだという認識があるわけでしょう。でなければ映画である理由がない。極端な話、映画はおもしろければなんでもいいとすらいえる。にもかかわらず今回、ショックを受けたということは、現実の出来事の方が自分の映画よりも「おもしろかった」と認めざるを得ないということなんでしょうか。

福居　たしかに、映画ということで考えたときには、何よりもおもしろいということが優先されます。ところが、だからこそ、そこで較べてみてどっちがおもしろいかって考えたら、単純にオウム（報道）のほうがおもしろいんじゃないか。

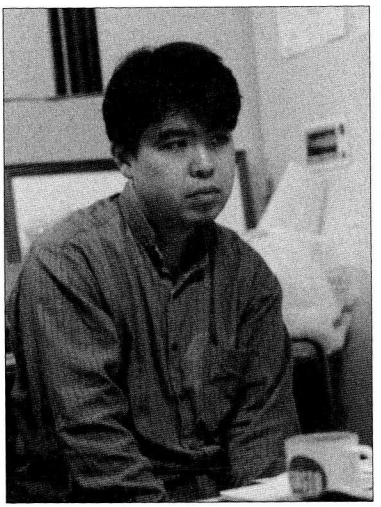
　ここのところテレビを通じてリアルタイムで提示された映像だって、現実

とはいうけれど、当然カット割りされて演出された世界なわけでしょう。

前作の『ピノキオ$\sqrt{964}$』の時、僕は劇場に馬鹿でかいスピーカーを運び込んで、爆音で上映するということをしたんですが、それはある意味で観客に対する監禁に近い発想だったし、現実と虚構のぎりぎり、もしくは合法と犯罪ぎりぎりみたいなところが売りでもあったわけです。でもそれはオウムなんかに較べたら、やはり映画にすぎないし、犯罪でもなんでもなかったんだな、という感じがします。

とにかくここ二カ月ほど、毎日先の読めないドラマを観ているような感覚に陥ったことはたしかだから、それはとうてい映画ではできないですね。

椹木　ちょっと前に、知人から『ガメラ』がすごいから、絶対観なければダメだっていわれて、ほとんど最終日間近だったんであわてて渋谷に観に行ったんです。そしたらハチ公のあたりで号外が出てて、それを皆が奪うようにして読んで大興奮してる。それが横浜駅異臭事件だった。ヘリコプターはガンガン頭上を飛んでいるし、まだ実態がつかめてないものだから、渋谷も危ないんじゃないかっていう感じで緊張感がすごく高まっていた。でもまあ、新しいガメラの緊張感はそれどころじゃないだろうっていうんで、迷わず映画館に行ったんです。そうしたら渋谷の夕方過ぎなのに、お客さんも十人ぐらいしかいない。入っているひともみんな号外読んだりしてて、あきらかにそっちのほうに興奮してたし、映画館から家に電話しているひともいるし、始まる前に帰ったひともいたんじゃないかな、そういう状態でした。映画そのものは最近の日本映画の中でもすごくいい出来だったけれど、それでもやっぱり早くここ（劇場で『ガメラ』を観るという現実）を出て、メディアが作りあげた「オウム」という虚構の世界にアクセスしたいっていう気持ちがあって、その時映画館で上映されている『ガメラ』という虚構の方が妙に現実的というか、ノンフィクションみたいな印象を受けたんですよね。というのも、下手をして渋谷でガスが撒かれて、それが劇場まで漂って来ようものなら、一瞬にしてスクリーンの前の現実がテレビのモニターのなかの世界に変貌してしまうわけですよ。こうなるとほとんどデヴ



椹木野衣（撮影：落合星文）

ィッド・クローネンバーグの『ヴィデオドローム』や、フィリップ・Kディックの『ヴァリス』の描いた、あの脱出不可能な悪夢の世界そのものですよね。もちろん、気付いたときにはもう命がないわけだから、それどころではないんだけど。

オウム報道で相対化された現実（ダブル・バインド）

椹木　メディアの演出の問題にしても、湾岸戦争なんかの時よりも事態はいっそう進んでいて、あの時は、戦争がお茶の間に送られてくることによって、現実が相対化されてしまうとはいっても、結局のところお茶の間そのものが戦場と化すことは絶対にありえないわけだから、やはりテレビのなかは虚構、お茶の間は現実というはっきりしすぎるくらいの線引きができたわけです。ところが今回は、ひょっとして近隣でサリンが撒かれようものなら、お茶の間とテレビのなかの世界とが本当に相対化されてしまうわけで、いわばお茶の間が瞬時にしてテレビのなかの世界になってしまう。

ただ、それとすぐれた映画がもっている、もともとフィクションとはいいきれない性質とは、はっきりわけるべきでしょう。たとえば僕が福居監督の『ピノキオ～』を中野武蔵野館で最初に観たあと、外に出たときに、逆に今まで自分が暮らしてきた東京の日常というものがメディアによって作り上げられたフィクションだったっていうことがよくわかったんです。逆に『ピノキオ～』の中に流れているリアルな音の撮り方とかカメラがとらえた世界とか、そちらのほうが本来のリアリティなのではないかと考えさせられて、劇場から一歩外に出た途端、東京が福居監督の映画のようにリアルに観えてきたんですね。つまり『ピノキオ～』は、どんなにそれが荒唐無稽な設定であったとしても、音や光、そして動きといった次元でいえばきわめてリアルなものがあって、メディアによって惰性化している僕らの感覚を叩き起こすというか、リアリティを再発見させるというか、まあ洗脳を解くといってもいいんだけれど（笑）そういうところがある。

ところが今回の報道は、逆に現実と非現実との関係を徹底的に相対化してしまう。なにしろ今回のテレビ報道ときたら、ドラマやワイドショーで培った必要以上に現実を脚色する手法で散々煽るだけ煽っておいて、「みなさん、この事件は現実です。興味本位で行動することは厳に慎んでください」と注意したかと思えば、その直後には炎をバックにした扇動的な題字が、恐怖映画さながらの効果音といっしょにバーンと映るんだから、これはもう無茶苦茶というよりは、結果的によくできたダブル・バインドになってますよ。

今回、マスメディアの問題がいろいろいわれていて、洗脳やサブリミナル効果なんかの弊害が議論されているんだけど、実は最大の問題は、そういう得体の知れない疑似心理学の類なんかではなくて、報道におけるダブル・バインドの問題だと思う。そもそも、毒

ガスを撒いた当事者が毒ガスを撒かれたと主張することからして、そうなんですね。

福居　今回の一件で僕が一番関心があるのは、麻原逮捕の瞬間から、ずーっと護送されてくる経緯を放送した、あのときの映像ですね。撮る場所はせいぜい何箇所かに限定されているのに、何十台ものカメラを、ヘリやバイクに載せて追いかけていく。しかも、それを各局がいろいろな方法論でやっていて、基本的には望遠のアップ、俯瞰の引き絵なんですが、それをザッピングするようにあれこれ組み合わせながら観ていくと、もうこれは映画のカット割りでは太刀打ちできないな、という感じすらしてくる……。

飴屋　いや、しかし、オウムに比べたらしょせん映画なんかフィクションだということではないですよね。映画はもちろんフィクションであると同時に、それを福居さんが製作するということも、スクリーンに映すということも、観客がそれを観てしまうということも、あきらかに現実なわけでしょ。むしろ重要なのはそっちの方で、二時間その体験を選び取ったとか、そのせいで何かが変わっちゃったとかいう、現実抜きで「いい作品」だなんてことはありえないわけでしょう。それは、あえて強調しておきたいんですよ。

　だからこそ『ピノキオ$\sqrt{964}$』というタイトルがすごいわけ。だって、映画のタイトルがその映画の上映時のコマ数の数字なんだから、こんなに目の覚める話ってないじゃない。それこそ福居さんの最大の関心事が「作品」というより、観客という他人を前提とした「上映」という「現実」に向かってる証拠なわけで、だから所詮「フィクションや」とかいいながら、福居さんのことをきわめて「現実志向」の強いひとって僕は確認しているわけなんですよ。しかも、わざわざ「現実化」する作業だからこそ「福居」という責任の所在をたえず明確にしなくちゃいけないわけでしょ。それに対してオウム報道なんかは、先に報道、つまり「これはフィクションではなく現実だ」っていう免罪符っていうか、アリバイがあるから、何の責任の所在もなく、それこそ人々の「虚構志向」を爆発させられるわけじゃない。

　だから「いまや現実はフィクションを超えた」なんて、よくあるフレーズにしても、本来「現実」とか「報道」

福居ショウジン（撮影：落合星文）

ってのはおもしろいとかおもしろくないとかいうものじゃないんだよ。「そうか」ってものでしょ。それが「おもしろい」って思えちゃうのは、その「報道」なり「現実」なりをきっかけとして「虚構志向」に火がついちゃった時でしょう。

だからここ数カ月、日本中がこんなに盛り上がっちゃったのは、直接のオウムの被害者は別としても、いささか乱暴にというか誤解をおそれずにいえば、日本中が「日本の現実」ということをアリバイにして、ロマンティックというか、夢見がち（もちろん悪夢も夢だし）な数カ月を送ったんだと……それはもちろん僕も含めてそうですけど……そういうことだと、いまは思ってますけどね。

椹木　そうですね。国中でひとつの悪夢を共有できてしまうというのは、本当に日本の悪いところで、もちろんオウムは裁かれてしかるべき犯罪行為をやったわけなんだけど、正義を盾に国民が一致団結して、必要以上にフィーヴァーする必要はないわけで、オウムがカルトならこちらも負けないくらいカルトっぽいですよね。太平洋戦争の時だって、世界の正義を口実とした悪夢が日本をカルト国家化させていたわけだし。

ハルマゲドンという締め切り

椹木　さて、ざっくばらんに話をする前に、その前提として飴屋さんにもあらかじめ聞いておきたいことがあります。福居さんのやっているような映画というのは、いずれにしても一時間五十分とかそういう時間の中で完結している以上、それを観ている間に経過する、時計で計れる時間というのがイコール、フィクションの枠というふうにいえないこともないわけですが、一方で飴屋さんとかがやられてきた仕事を考えると、演劇形式のものはともかく、美術形式のものに関していうと、そういう時間的な完結性はないわけですよね。たとえばギャラリーという枠で発表しているとはいっても、ギャラリーの内とギャラリーの外という区分そのものを相対化するところにテクノクラートのプロジェクトのひとつ『ダッチライフ』などのコンセプトはあったわけで、そうすると逆に映画ならばこれはフィクションですからといえば済みそうなところが、飴屋さんの作品には実際に血液や精液が生々しいかたちで扱われているわけだから、ことはそう単純には済まなくなってくる。となると今度は、現実と虚構の境界線というより、合法か犯罪かという境界線が見え隠れしてくる。もちろんテクノクラートは「犯罪」を志向するような単純なユニットではないから（笑）、はじめからオウムなどとは一線が引かれているとはいえ、一般の目からすると、部分的にかなりオウム的に見えてしまうのではないかと思うのですが、そのあたりについてお聞きしてみたい。まずは、今回の一件についての印象といったあたりから、教えてください。

飴屋　うーん。実はショックというこ

とでは、福居さん同様、僕も今回の事件の報道が始まってから二〜三カ月、ほとんど活動停止といったぐらい……情けないけどショックでしたね。

最初に実感としてあったのは、やはり同世代ということ。それは単に年齢が、ということもあるけど、八〇年代のことから含めて……つまり、たとえばここにいる三人はすべて八〇年代初頭くらいから自分の活動を始めてるはずですよね。ところが、オウムもやはりそのころからいままで活動を続けて、成長してきたわけですよ。だから、別々のところで、しかしずっと並行して走っていたんだということも、すごく考えました。

どうしてそんなふうに意識してしまうかといえば、やはり『漂流教室』とか『風の谷のナウシカ』とか、『アキラ』とか、あるいはサイバーパンクとか、そして椹木さんがいったようにポストパンクのヴィジョンとか、そういった、自分も深く体験したモチーフが、あきらかにオウムにもはりついているわけで……。だから、僕も八〇年代には演劇をやっていたんだけど、その時のヴィジョンがいきなり現実の事件として目の前に現われてきたというような感じがしてしまったわけです。

さらに僕の場合は、九〇年代に入ったころからひとつの方向転換があって、それまで演劇のイメージのなかで扱ってきたモチーフを、「演劇だからこそ成立する」といったかたちではなく、現行の社会の中で少しでも現実化していこうということで、オリジナルの薬物を造ったり、結婚制度に変わるオリジナルな夫婦のシステムとか親子のシステムを造っていくということを始めた経緯があります。現実とかかわりながら実際にそういうものを造ってみることで、現行のシステムに対する批判の可能性と不可能性を同時に検証してみようとしたわけです。

そこへきてオウムのひとたちがいきなり出てきて、あれだけの実行力と規模で、オリジナルな薬物から出家のシステムから、教育制度から様々なテクノロジーに至るまで、現実に造っていることがわかってしまった（ように見えた）と。これはすごい、自分はこんなにチマチマやっているのに、なんてすごいんだ、と最初は正直に思ったわけです。それがまたショックだった。

ところが時間が経つにつれ、どうもちがうぞ、おかしいぞと気づいたわ

飴屋法水（撮影：落合星文）

けです。どうもこれは「すごすぎる」し、「実行力がありすぎる」し、「おもしろすぎる」んじゃないか。というのは、自分が「芝居」をやめて『ダッチライフ』シリーズなんかにかかわる過程で、あきらかに捨てざるをえなかったのが、そうした「おもしろみ」であって、それは「フィクション」ならではのものなんですよ。

椹木　「自作自演」という言葉に代表されるように、オウムのひとたちは自分たちの作った物語に完全にはまっていたわけだから、そういう意味ではじめから「おもしろさ」を追求していたともいえますね。だから映画的ともいえるし、文字通り「芝居」がかっているともいえる。現実と虚構の境界にいるというよりは、完全に虚構の世界に没入していて、最終的には世界をこの虚構で覆いつくそうとしている。

　こんなことは当たり前の話で、あらためて確認するまでもないのだけれども、やはりそういう偏見が一部にあるようだからいっておけば、そのへんはテクノクラートとは決定的に違うわけです。飴屋さんはさっきオリジナルな薬物を造るといってたけれど、誤解のないように付け加えておけば、それはつねに合法／非合法という現実をふまえつつ、できうる範囲でウダウダとやっているわけでしょう。ところがオウムは最初から「結果」だけを追求しているから、すぐ短絡的に「サリンだ」ということになってしまい、あまつさえそれを現実に撒いたりしてしまう。結果を追求する態度と、おもしろさを追求する姿勢というのは、基本的に同じですからね。そこで切り捨てられているのは、困難な細部であり、過程といったものです。

飴屋　そうです。実際に現実の諸条件と向かい合えば、自分の物語なんていうのは、捨てたり、変更したり、修正を絶えず繰り返したりせざるをえなくなるはずで、展開ひとつとっても、あんなに速いわけはないんです。だから、あのスピードとスケールは、「すぐれた実行力」というより、やはり「無理」と呼ぶべきものじゃないか、と。

椹木　なぜそういう無理が効いたかというと、やっぱりはじめから「締め切り」が設定されていて、目頭に人参がぶらさがっていたからでしょう。それが「ハルマゲドン」ですよね。

飴屋　ええ。ハルマゲドンです。ハルマゲドンがわからない。かりに僕もオウムも、現行の様々なシステムに批判的に対峙しうる可能性としてオリジナルのシステムを考えたのだとしても、なぜ、そこでハルマゲドンが出てくる必然性があるのか。

虚構の現実化／ポアという暴力

飴屋　しかし、正直、はじめのうちは自分とオウムをかなり混同して混乱し続けたのは事実です。僕自身、現行のシステムに対峙するには、イメージではなく、こちらも現実に機能しうるものをつくらなきゃダメだと考えて、自分のまわりに理系の人間や医療従事者を集めていたわけですよ。

それで、医療目的ではない輸血をやったり、化学食品をつくったり、細菌の培養とか、精液の保存とか……あまつさえ、強制捜査で薬品が押収されるのを見ていたら、自分たちが作品制作のためにいつも買っている製薬会社のダンボールなんですね。当然、「製薬会社は販売の際のチェックが甘いのではないか？」などという批判など、ダイレクトに自分にかかわってきてしまわざるを得ない。

しかも、「科学と仏教」というテーマにせよ、「出家」というテーマにせよ、「全国民が洗脳されてる」といういい草にせよ、言葉として受け取ることごとく正しいとも思えるんです。さらに、テクノクラートでは新作として、オリジナルの憲法や六法をつくる予定がありました。そしたら、真理国憲法なんてものまでできた……そりゃあ、ちょっとは、自分がオウムではなくテクノクラートであること、アーティストであることの意味がどこにあるのか、かなり混乱しても不思議はないですよ。

椹木　ただ、オウムは技術的にも予算的にもかなり大規模で、資産は一説に一千億円とかいわれてますよね。テクノクラートは非常に限定された予算のなかで、オウムなんかに較べると失礼ながら、取るに足らないような予算と技術的環境のなかで作品を作っているわけだけれど、飴屋さんとしては、そういった問題が解決されていれば、制作の規模を拡張しますか。ある意味で、予算と技術の問題さえ解決されていれば、オウムのようになっていたと思いますか。それとも、コンセプトのなかに、社会と真っ向から対立するほどはやらないという部分が、何らかのかたちで盛り込まれているのですか。

飴屋　その、社会と真っ向から対立するというのは、要するに彼らが行なったテロ、あるいはクーデター的な部分を指していってるわけですよね。しかし、椹木さんはあれをテロとかクーデターとして位置づけますか？

椹木　横暴な国家権力に対する、最後に残された抵抗手段と意志表明としてのテロという意味からすると、彼らのやり方はそうとうズレていますよね。それならおもしろがって疑似的な憲法なんか作ってる場合じゃないという気はする。弱者の抵抗というよりは、むしろ既成の権力を装っている感じですね。たしかに技術力も資産もあったかもしれないけれど、現実から遊離してる部分がすごくて、日本国と対立したつもりになったところで、ことクーデターに及べば、たちどころに粉砕されてしまうわけでしょう。やっぱりどこかで決定的に「ごっこ」っぽくて、だから逆にいうと本気で革命を起こそうとか、国家から独立しようとしていたとはどうしても思えない。今までのイデオロギー集団のような具体的な犯行声明なんかなにもないし、はじめから「やってない、われわれはやられた側だ」の一点張りでしょう。

そういう意味では、テロとかクーデタといった従来のいい方の中では、オウムを形容する適当な言葉が見つから

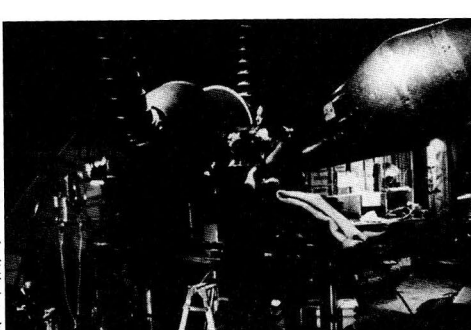
ない。右翼的でも左翼的でもない。逆にいえばなんでもありですね。そういう意味ではイデオロギーが実質を持たない日本の現状を反映しているともいえる。

飴屋　へんですよね。たしかに彼らにはテクノクラートなんかが及びもつかない「現実化」への実行力があるように見えるし、それゆえ国家にも拮抗できうるかのようなノリも感じられるわけだけど、それはあくまでもオウム内部の「早川ノート」の世界で通用するだけのノリでしかなく、現実感を喪失しているとしかいいようがない。あのダイナミズムから出てくる「おもしろみ」は、やはりフィクション特有のものでしかない。だから、オウムにおいては強力な「現実化」と「現実感の喪失」――このふたつが同居してしまっている。

　しかし、そもそも「現実感を喪失」してしまってる前提の上に成り立つ作業を「現実化」と呼べるのか、ということですよね。ここでさっきの質問に答えると、僕がある発想において、部分的ではあれ彼らと同じようなことを考えたとしても、そして仮に十分な条件がそろったとしても――いや、十分な条件なんかそろわないってのがそれこそ「現実」なんだけど――、彼らのようにはなりようがありませんね。

　僕にとっての「現実化」する作業というのは、いやおうなく「現実」と向かい合うということなわけで、いまいったように十分な条件がそろわないというのも現実だし、自分の能力の限界も現実だし、法律による規制や、作業にかかわるひとの個別の感情や立場、あるいはそれが身体にかかわるものであれば、身体そのものの許容量であるとか、そういった、自分の発想にとってはむしろ障害にしかならないようなものこそがリアルなわけだし、そういった現実を無視してしまえば、それこそ自分の発想の可能性も不可能性はおろか、何も検証することはできないでしょう。

　だから、むしろそうした障害に向き合ってウダウダ悩んだり、変更を余儀なくされたりするということ、それこそが目的というか、それを楽しんでいるというところがあります――いや、もちろん同時に苦しいんだけどね。逆にいえばだからこそ、自分が「現実化」という作業に移行する際には、それまでの活動が持っていたようなある種の「おもしろさ」というか「スケール」とか「ダイナミズム」を破棄する覚悟をしたわけですよ。僕にできることは、それこそチマチマと、1ミリ2ミリと



2点とも、福居ショウジン監督次回作品
『ラバーズ・ラバー』より

いったスケールで社会にアプローチしていくしかないと思ってますから。

一方、想像力のダイナミズムなりスケールなりを失わないまま、それを「現実化」しようとしたら、それはやはり、映画なり演劇なり漫画なり、やはり「フィクション」というフィルターを通しつつ「現実化」するということが、やはりいまでも最も有効なことだと思うし、「現実」を踏まえたうえで行なうことのできる、それが唯一の方法だと思うんですよ。

だから、福居さんが映画を撮るということは、やはり、荒唐無稽なまでのフィクションでありながら、やはり「現実化」と呼ぶべき作業だと思う。通常、「現実」とされてるシステムやモノがきわめてフィクショナルだという事実をふまえていえば、フィクション（映画）を現実化する作業こそが、「現実」を多様化する作業そのものなんだと思う。

それにひきかえ、オウムの行なった「現実化」というのは、あきらかに現実を無視することで可能になったわけでしょう。教団内での意見の異なる信者とか、オウムに反対するひととか、宗教というだけで毛嫌いするひととか、そういう現実を一方的に「ポア」してしまう。他者、異物、みんな「ポア」ですよ。彼らにしてみれば、そういったバッドな面も含みうることこそが現実なんだと思っていたのかもしれない。けれども、破綻、摩擦が引き起こす醜さこそが僕の考える「現実」なのに対して、「ポア」は摩擦ではなく、やはり一方的な力の行使でしかない。

だから、オウムのやった強引なまでの現実化というのは、結局、現実化というより現実の虚構化という感じになってしまう。徹底的に現実を無視して、役者でもない現実の個別の人間を、すべてみずからの物語の登場人物にしてしまう。ミス・キャストだと思ったら、即ポアですよ。それは演出家のやり口だって（笑）。

椹木　でも、飴屋さんも演出家だったわけでしょう（笑）。

飴屋　あ、そうでした（笑）。逆に、演劇の演出家だった立場からいわせてもらえば、映画や演劇というのは、「芝居がかった」という言葉に代表されるように、演技とかドラマとかを前提とした虚構志向の強い表現であると同時に、一方で、アニメとか漫画とかと違って、きわめてノイズの多い表現でもあるんですよ。

演出家にとっての役者というのは、たしかにいわれたように演技こそしますけど、漫画のように自分の描いた絵

ではないわけで、やはり、時には自分のイメージの障害となりうるほどの他者であり、異物でもあるんですよ。演劇でいえば、単純に二時間内での役者の体力の限界とか、映画なら役者だけでなくロケ地の風景なんて現実もあるわけです。だから、自分の方法が映画、あるいは演劇ということにきわめて自覚的な演出家なら、異物に対して一方的な力を行使するなんてことはありえないはずなんです。

だから、今度の福居さんの映画『ラバーズ・ラバー』と、オウムの醸し出すイメージがどんなに似ていても、イメージに対する態度として考えれば正反対ですよ。福居さんの行為が「現実化」であり、オウムの行為が「虚構化」であるということもあるけれど、それ以上に同じイメージに対して払っている行為の価値とクオリティにおいて、福居さんの作品の方が数段、すぐれているわけです。だから、もしオウムのような「現実」が現われた今となっては、この程度の虚構（映画）にはもはや力がないのでは、なんていうひとがいたら、それこそ、オウムの安易な「虚構志向」のワナにまんまとハマッたっていうことになるのではないかな。

ホーリーネームというナルシシズム

椹木　オウムの幹部なんか見ていると、もう外見からして完全に「キャラ立ち」しているものね。顔つきとか性格とかの割り当てが完璧に分業化されているというか、なんていうかあれはほとんど『サイボーグ009』でしょう。なり切っているという意味では、相当のナルシシズムが入っていると思う。そういう意味では、例のホーリーネームが果たした役割ってのは大きいと思う。

飴屋　ホーリーネームね。これも一見すると芸名とかペンネームと混同されがちなんだけど、やはりきちんと差異化しておくべきだと思うんだよ。たとえば、ここにいる三人は、みな芸名というか、本名を伏せて創作活動をやっていますよね。

椹木　ここにいる三人どころか、この本に登場する人たちには、なんか異常にその手が多い。男なのか女なのか、いったいどこのひとなのか、それ以前に名前なのか（笑）。表紙に並んだ顔ぶれを見ると、ほとんど百鬼夜行というか……。

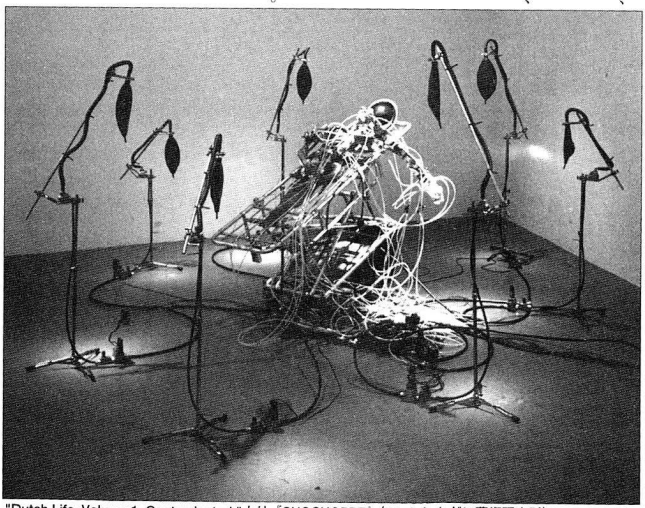
飴屋　でも、それにはさしたる意味はないわけでしょう。まあ、いくばくかの虚構志向は含まれているだろうけど、どちらかといえば、おそらく椹木さんにしても、とにかく本名でさえなけりゃなんでもいい、といった性急な必要性の結果だと思うんですよ。それは、そもそも本名だって、ご先祖なり親なりの欲求が勝手につくりあげた虚構なわけだし、その程度の「たったひとつのもの」に自分が規定されることを嫌うあまりに名前をかえるわけじゃない。だから、自分に多様性をあたえているひとつの多様性のひとつのきっかけにしかすぎないと思うんです。

椹木　物書きの世界でいうと、ペンネームとかっていうのは、きょうび流行

らないしダサい感じがするんだけど、その一方で、パソコン通信なんかしてみると、名前の複数化っていうのが、人格の複数化と同時進行して、ますます盛んになってきているという現状もあるわけです。だから、それを仮想の現実の中での仮想の多様性にとどめずに、積極的に現実の中に応用していくことも、ありだと思う。

ただ、その場合重要なのは、名前が書き換え可能だということと、複数の名前を同時に持つということの違いですね。名前が書き換え可能というのは、「偽名」という言葉があるように、その名において行なわれることに責任を取らなくていいということですから、現実には犯罪、あるいはそれにたぐいする行為の際に使われやすい。ペンネームにしたって、書いたことに責任を取りたくないひとが使うペンネームと、そうでないペンネームっていうのは、あきらかに重みが違うわけです。後者の場合は、名前が書き換え可能ということよりは、複数の名前による複数の人格が生みだす、もしかしたらたがいに矛盾するかもしれない複数の責任を前提に、それらをどうにかして「現実」のなかでアンサンブルにおさめていくという、高度にポリフォニックな行為だと思う。

ところが極端な話、オウムのホーリーネームっていうのは、輪廻転生を前提とした名前の書き換えともいえるわけで、ある意味では今生の行為についての責任は取らなくていいっていう考え方なのね。一見すると逆じゃないかって思えるかもしれないんだけど、それは因果応報とかいろいろな方便が悪用されているだけで、たとえばサリンをまくという「悪」の意味が、転生においては「善」に変換されるなんていうのを聞いちゃうと、これは現実の複数化にもとづく新しい責任の発明ではなく



"Dutch Life, Volume 1, Contaminated,"より『SHOCHORTT』(92. レントゲン藝術研究所)
撮影：黒川未来夫

て、虚構の複数性による古い責任の放棄につながっていますよね。

それにしても、単純にいって、パスポートの名前と、日頃自分が社会的に認知されている名前が異なるのは、これは体験したひとしかわからないものがありますね。でも、自分の「本当の名前」を固定しようというのは、最終的には不可能なはずで、誰の本名にしても、ある時、人工的に作られた虚構にもとづいたものであることにはちがいない。まあ、そのことに気づいてしまえばあらためて名前を複数化する必要もないのかもしれないけど、それでもやっているのは、これはもう「業」という感じですかね（笑）。

もっとも、国家なんかにとっては一人一名のほうがよほど管理しやすいはずなので、やるのとやらないのとではだいぶ違いがでてくるというのはありますけど。もちろん、よくも悪くも気楽なペンネームなんかと違って、名前の複数化を強制されている人たちもいるわけだから、それはそれで考えなければいけない大問題なのだけれど、ただ大きな視点で見れば、名前の複数化っていうのは、徐々にではあれ、行なわれていくべきだと思う。

飴屋　たしかに、オウムのホーリーネームっていうのは、物語の中での役割がもともと決まっているわけですよね。それは、芸名というよりは役名なんですね。だから、そのひとが取りえたかもしれない多様性を、たったひとつのものに規定していくための名前なんです。これは、多様な人格を得るために役者になろうとして芸名をつけたひとが、「ジェームス・ボンド」っていう役で一生演っちゃうのと同じで、たったひとつのものをせっかく捨てたのに、また別のたったひとつのものを演じ続けなければいけないことになるわけ。熱心な仏教徒でありながらひとを殺した「ミラレパ」という役とか……。

仏典か何かに残ってるミラレパの顔が笑ってるのみて、ゾッとしましたね。逮捕の時に新実智光が笑っていたというのは、それの演技だったんですね。けっきょく、名前に意味がありすぎるんですよ。たしかに、オウムの提示するシステムっていうのは、最初はすごく開放感があると思うんだ。それまでの自分をがんじがらめにしてきたシステムから、オウムに入ることでズバッと切り離されて、別の自分になれる。でも、それがどんなに壮大な物語であるにせよ、たったひとつの物語の中の役割でしかないなら、いずれひどい閉塞感を味わうことになるに決まってますよ。そういうロマンチックな物語で現実が変わるわけないってのは、とっくの昔に確認されたことだと思うんだけどね。

オウム事件は文学として回収され得るか？

椹木　うん、ここでその話につなげる形で別のことを問題にしてみたいんだけど、オウムがかぎりなくクロだということがはっきりしてくるにつれ、今度は脱会信者のアフターケアみたいな

ことがいわれ始めたでしょう。たしかに、一般の家庭とか会社とかのレベルでいうと、かなり迫害されることになりかねないと思うんだど、逆にいうと表現の世界、つまり映画とか美術とか演劇でも小説でも何でもいいんだけど、逆にそういう人達を歓迎する風潮があると思うんですよね。

というのは、ちょっと前に瀬戸内寂聴がテレビで脱会信者のひとと対談してるのを見たんだけど、「やっぱりあなた小説書きなさいよ」ってな感じのことをいうんですね。で、それに対して脱会信者の方は、なんかあんまりピンときてないという対応だったんです。

でもそれはもっともだなっていうふうに思ったのは、特に文学の世界はそうなのかもしれないけれども、ここ二十年ぐらい小説を書くに値する大きなテーマっていうのがなかったわけでしょう。何も書くことがないにもかかわらず、小説っていう形式を成立させなくてはいけないという部分から、一種のミニマリズムっていうか、村上春樹とか吉本ばななの小説が出てきた必然性があったわけだけど、それもさすがに行き詰まってしまって、ましてや冷戦も崩壊して世界がふたたび歴史の渦の中に巻き込まれていくのを目の当たりにしたりすると、やっぱり文学に値する大文字のテーマが必要なんじゃないかという風潮が文学界にはある思うんです。

そうしたところへ、ここにきてまさに文学的な大きいテーマが出てきたものだから、やっぱり既成の社会の中ではそれをうまく作品という商品の中に回収していこうっていう動きが出てきても不思議ではないですよね。

ところが、オウムの信者達はそういう商品を媒介とする社会を否定しようとして入信していったわけだから、その体験を商品化しろといわれても、ピンと来ない可能性はある。でも、オウムはいろいろな商品開発をしていたし、出版に関してはおもいっきり俗受けする本もガンガン出していたわけだから、まあアンビヴァレントですけどね。

福居　映画化の話は今後、出てくると思いますよ。麻原教祖の役をたけしにやらせるとか、そういう話は現実にあって、ただそれも実はオウムのほうが何年も前から、そういう企画書を映画会社に持っていってたらしいんですけどね。まぁオウムっていっても最初の頃だから、全然相手にもされなかったらしいんだけど。でもいまなら飛びつくよね。何で飛びつくかっていうと、結局客が入るから。そのレベルでしかいまの映画は動かない。

ただね、もし映画化するということになったとき一番重要なのは、事実関係をどうするかっていうことですよね。むかし、熊井啓っていう映画監督が社会派と称して、下山事件とか、帝銀事件を映画化したんだけれど、あれは検証しながら見せていって、ことの真実はここにあるんじゃないかっていうようなやり方なんですね。やっぱり今回もそのレベルでしか作られないだろうと思う。ただ、今回の事件に関していうと、オウムの人達の設定がすでにS

Fしてしまっているわけだから、ドキュメンタリーっていう視点が有効に機能するかどうかは疑問だと思う。

ただ、正直いって今回の事件は、TVを見ているかぎり、映画なんか見るよりもずっとスリリングだったわけだし、しかもそれが自分の生活のリズムにちゃんと組み込まれてしまって、へタしたらそれが一日すべてだった時もあった。となると、もうオウムを題材にした映画は作らない方がいいなっていう気がするね。

椹木　でも展開が「おもしろい」という一方で、彼らの踊りとか音楽のカッコ悪さっていうか、ダサさというか、それはやっぱり不快ではなかったですか？　というのも、冒頭にいったパンクからポスト・インダストリアルへと至る流れの中に僕らが見ていたのは、ある種のカッコ良さだったと思うんですね。しかもそのカッコ良さっていうのも、いまは死語になりつつあるけれど、邦楽／洋楽という枠組みがあった時に、邦楽はカッコ悪いから一切聴かずに、舶来の美学を追求するという動機づけに、実は支えられていたと思うんです。

だから、パンクとかニューウェイヴに走ったひとの動機のひとつには反日本的な美意識という部分がかなりあったのではないかな。向こうでリアルタイムに体験したひとにとっては、パンクやニューウェイヴっていうのはむしろダサくてもいいから、マッチョ的なカッコ良さからは訣別しようというものだったわけでしょう。

とにかく、洋楽の優位という考え方からすると、やっぱオウムってのは一種許し難いくらいダサいわけで、歌なんかにしてもけっきょくアニメソングやニューミュージック風だったりして、非常に邦楽的なんですね。

それからもうひとつ似た対比を出しておくと、これまた日本的ないい回しで、文系／理系っていうのがあるでしょう。当初は、オウムなんてのは文系の集団だから、サリンなんか作れるはずがないという意見もあったんだけど、いまでは理系のエリート集団の犯罪という感じになってきている。となってくると、理系の集団というのは美意識とかカッコ良さなんかよりも論理的な緻密さとか、ある形式的な整合性とかを持ってないと実際にサリンを作ったりできないわけだから、さっきいった美意識の部分が切り捨てられていくっていうのは、ある種当然の帰結っていう気もしてきたんですね。もっとも、革命を標傍する集団というのはいつの時代も理系の集団のはずで、そうでなかったら爆弾ひとつできやしない。日本の新左翼なんかでも、理系の大学生が果たした役割は無茶苦茶大きかったわけでしょう。文系の学生なんてのは、革命の美意識を盛り上げるだけ盛り上げておいて、何もできないわけだから。

福居　ただ、そこをカッコ悪いの一言で片付けちゃったらちょっと違うかなっていう気がする。というのは、オウムの歌にしても、毎日毎日あれだけ流されたら、ふっと気がついたら口ずさんでいた（笑）時が正直いってあった

し、まぁ、踊りを踊るってことはないけど（笑）。でもあの踊りにしても、カッコ悪いというよりは幼稚という感じだね。だけどすごく分かり易いし、それを何回も聞かされたり見せられたりしたら、あれがすべてになっちゃうだろうっていう「とっつき易さ」は絶対あると思う。

椹木　たしかに、彼らの音楽がもしノイズ系のものだったりして、ヴィジュアル的にもＴＧばりの演出があって、思いきり日本ばなれしていたりしたら、絶対ひとは集まらない（笑）。そうなるとあんな大きな規模で社会化するってこともないわけで、その意味じゃ彼らが効率を考えてああいう、あえてダサい、幼稚なものを使った可能性もあると思いますけどね。音楽なんかに細部にわたってこだわっていたら、ハルマゲドンなんかできっこないんだから。「音楽は地球を救う」っていうのは、そういう意味でしょう（笑）。

福居　たしかにアニメソングを聞いた印象に近かったな。

椹木　ということは、メディアなんかのいい方だとオウムは反国家的だとか反社会的だとかいうようなことになっているんだけど、美意識に関していえば、実は日本という国が持ってる「ダサさ」を確実に共有して、そこにかぎっていえば、オウムを全面的に憎しむならば、その気持ちは、日本を憎しむ気持ちと並行する部分があるはずなんですね。日本のとるに足りない音楽とか踊りとかオウムのとるに足りない音楽とか踊りとかは、結果的に非常に良く似ている。オウムを憎めば日本を憎むことになってしまうし、日本を好きならばオウムのことも好きになるはずという部分が、こと彼らの美意識に限っていえばあるし、そこにつけこまれたといういい方もできるのではないか。そうなると、あくまで日本人として、オウムも日本も不快だという自分の場所っていうのはどういう立場なんだろうかってことを、いま一度考えざるを得ないっていう感じがしますね。

オウムと日本の『非実力派宣言』

椹木　いずれにしても、オウムを壊滅せよとばかりに攻撃する一般市民が守ろうとしている「日常」を、それこそオブラートのように包みこんでいる文化イデオロギーと、オウムの救済や癒しの文化イデオロギーというものが、ほとんど相似であることは、いったいどう解釈すべきなのか。もし彼らが根本的に反日本的なシステムなり発想なりっていう原点からことを考えるのであれば、趣味とか美意識のレベルでも

『非実力派宣言』　森高千里

根本的な刷新を考えると思うんですよね。音楽なんてのは、真っ先に否定しなければいけない。つまり、一方で憲法まで作って近代日本の制度に対するアンチを唱えながらも、文化的な部分では、戦後民主主義が作ってきた、まさに平和ボケの音楽をそのまま踏襲しているわけでしょう。

あと、もっともだと思ったのは、オウムの中では美術が異常に軽視されているじゃない。アニメやコミックにはあれだけ金をかけているのに、発砲スチロールのシヴァ神とか、麻原の気持ち悪い磔刑図とか、そんなものしかない。これは、『ぴあ』とか『東京ウォーカー』とかのジャンルの価値づけと同じなのね。最初に映画（オウムの場合はアニメ）があって、そのあとが音楽でしょう。その次に演劇とか舞踏とかあって、美術なんてのはおしりの方に申し訳程度なんだから、それとオウムの価値観がいっしょっていうのは、彼らも若年層に対する動員（布教）を優先していたということがわかる。ま

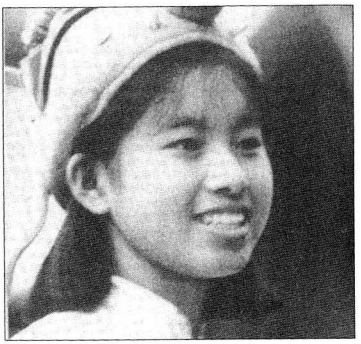
あ、そうはいっても芸能部門はちょっと弱いかな（笑）。

飴屋　でも、選挙のときに出てきた象の帽子をかぶった女の子たちは完全に日本のアイドル風ですよね。

椹木　ああ、オウム・シスターズね。滅法かわいいんでしょう。歌や踊りは全然駄目なんだけど。

飴屋　しかも、アイドルの中でも、八〇年代中期のニュアンス……要するにおニャン子ですよね。唄や踊りは、ダメというよりは積極的にダメというか、積極的に幼稚というか。きわめて日本的なロリコン魂をくすぐるというか……しかも、象の帽子でしょ。それから、あの麻原彰晃の顔のかぶりもの、あれはスゴイよ。あそこまでいくとさ、ダサイというよりグロテスクだね。となると、おニャン子というよりは森高千里という感じか……いや、僕は森高にけっこうハマってたんですよ。あの『非実力派宣言』のころね。

あの気持ち悪さは無視できないというか、七〇年代の子供の頃から自分が



培われてきた日本文化の最も最低のイメージとか、かくしておきたい自分の育ちというか、そういったものが正面切って現われたというか……それでもう、吐き気がするほど、恥ずかしくてイヤなんだけど、何度も何度も聞いているうちに、だんだん気持ち良くなってきてしまう。これに身をまかしちゃえば何か楽になれるなーみたいな……森高の「ダイ、ダイ、ダイ、ダイッ」と麻原の「ショコ、ショコ、ショーコー」はおどろくほど似ている。それから、ディズニーに対するサンリオのピューロランドで流される「ピューロー、ピューロー」というリフレインやイチゴの香り。エレクトリカル・パレードに対抗するキティちゃんとけろけろけろっぴーのパレードの、超ダサい唄と踊り……。

椹木　だからそれは、「日本」であることのひとつの戦略ですよね。欧米に追いつけ追い越せのモダニズムでやってはみたものの、けっきょくのところ最後の一線で根深い西洋中心主義にぶつかってしまうと、やすやすと実力主義のモダニズムを捨て去って、「非実力派宣言」をしてしまう。それまでは実力がないことをコンプレックスにしていたのに、これからは実力がないことを売り物にできるんだから、もう怖いものなしですよね。これが日本のポストモダンの実態です。

　オウムも良く似ている。宗教としての実力はないんだけれども、とにかく建築にしても教義にしても修行にしても歌も踊りも、ひらきなおってひとまず「非実力派宣言」をしてしまう。あとは人気と効率（たとえばサリン）だけを追求しよう、と。世間はそれを宗教としてはあまりに陳腐だというのだけれども、それが日本を海外から見たときのおのれの姿だということには、なかなか気がつかない。僕がキュレーションして飴屋さんにも参加してもらった『909』展（95・於レントゲン芸術研究所）なんかも、そのあたりの可能性とあやうさを同時に扱うものだったんですけどね。

飴屋　しかし、日本の「非実力派宣言」ということでいえば、オウム以前に、「天皇教」というか、天皇制の「非実力派宣言」をぬきには語れませんよね。その巧妙さこそが、日本の仏教と衝突することもなく、仏教をここまで形骸化させているともいえるかもしれない……。

　さっき憲法の話が出たけれども、あの憲法によって、天皇は人間宣言をしたというか、「非実力派宣言」をして象徴となったわけですよね。そして、そのことによって戦争責任を免れた、と。実力がないなら責任も取れないということでしょう。しかし、天皇を現人神に頂いて日本が起こした犯罪があるのは事実なわけで、逃れられない実力者であるはずの天皇と、実力を捨てたあとの、あの雑草を愛でるお爺さんとしての天皇は同一人物なわけですよ。このあたりも、オウムの暴力性が「救済」という言葉で隠蔽されていくのに似ているよね。

　だから、オウムが憲法をつくったといっても、それはけっきょく、ひとつも現行の憲法に対する批判力たりえていないというか、単に日本国が真理国に変わっただけというか……それとも、非実力者としての天皇が許せなくて、実力を備えた現人神を復活させるべく、真理国憲法をつくったんでしょうか。しかし、だとしたらそれは「非実力派宣言」以上に、歴史意識も現実意識も欠いていますよね。

　たしかに「非実力派宣言」をした以降に生まれた僕らには歴史意識がないですよ。しかし、歴史意識がなくとも、やはり僕らは僕らで戦争の責任を取るべきだというくらいの現実意識はあるわけで。だいたい、歴史意識なんかなくとも、目の前に日本に傷付けられた他者が、現にいるという現実だけで充分でしょう。だから、僕らにとって重要なのは、実力を捨てて責任も取らないというのではなく、もちろん実力を取り戻すというのでもなく、責任だけ取って、そのうえで実力を捨てればいいんだと思うけど……。

椹木　まあ、武力を永久に放棄した日本国憲法それ自体が、ある種の「非実力派宣言」なわけですからね。

　ただ、そこで一応確認しておきたいのは、責任を引き受けざるをえないのはやはりわれわれ一人一人なのであって、逆に言えば、だからこそ、最終的には「国家」のレベルでの補償体制を形成していかなければならない。そうしたプロセスを経ずに、特定の誰か一人に問題を集中させて、そこだけに議論を集中させるというのでは……それこそが問題を生み出す体質なわけだから……これは根本的な解決にはならない。

　今回の事件にもそういうところがあって、麻原を一方的に断罪するだけではなく、国民一人一人がこの問題についての「責任」を自覚すべきだというのは、これは中沢新一の意見なんだけれど――中沢さんは敗戦処理の問題をオウム事件の事後処理の問題に重ねて論じていたから。

出家に憧れた「理系」たち

飴屋　いずれにせよ、どうもオウムには日本に対峙するように見えて、日本のなかにもうひとつ別の日本をつくろうとしているとしか思えないトリックのようなものを感じますね。さっきの理系と文系の話もそうだけど、理系に見せかけながら、結局は文系というか、それもトリックでしかない気がする。

椹木　ヘッドギアなんかに関しては、どうですか？

飴屋　実際に脳波を送れてるのか、さらにシンクロしていくことが可能なのか……理系というならそこを曖昧にすることは許されないはずでしょう？

福居　そう思う。その通りだね。

飴屋　結局、彼らがそれらのテクノロジーを「現実化」させたように見えたのは、その様子を伝える映像が流れたのが、映画のなかではなくニュースだっただけのことですよ。

だから、これは現実なんだと思っただけで、そこはオウムの「内部」なんだから。本来、虚構が現実化するというのは、ヴェルヌの『月世界旅行』がアポロになるというようなことで、それだっていまだに旅行まではできない。それが「現実」ということでしょう。それは、ひどく難しいことなんだ。いっぺんにできることじゃない。彼らが難しいことをやすやすと実行してしまうのは、やはり、オウムの中にそれを検証すべき他者が存在しないからなんだと思う。

福居　全部中途半端で終わってますよね。

飴屋　だから「オウムみたいな文系の集団がサリンなんかつくれるはずがない」といった著名な批評家がいたみたいだけど、それはいまとなっては一種の失言とも受け取られかねない。でも僕はむしろ、今となってはその人は鋭いというしかない。だって批評家は、べつに犯罪の捜査官じゃないんだから。むしろ、実はオウムが体質的に理系集団ではありえないことを指摘したわけでしょう。

だから、オウムをバッシングするときに、宗教が科学に頼るのは変だとか、宗教団体らしからぬ施設だとか、だから彼らは宗教じゃないというのは、ぜんぜんトンチンカンな話で、むしろ問題は、彼らがちっとも科学的でなく、しょせん、いわゆる宗教団体と文系革命ロマンの合体でしかなかったことが問題なわけでしょう。

椹木　そのあたりでいうと、刺殺された村井というのは、どうですか。

飴屋　実は、僕にとってのオウムというのは、麻原でも上祐でもなく、村井だったのね。「科学と宗教」を本気で合体させようとしているのだとしたら、その可能性を握っていたのは、村井だろうと。真の科学者があああいうふうにたえずおだやかな宗教家でありえるというのは、僕にはかなりリアリティがあったんですよ。

だって、科学的な態度を純粋につきつめれば、当然、人間一人の命なんて重くもなんともないわけだし、それはある意味では仏教的な悟りの境地とも

いえないことはないわけで……。仏教だって、火葬して墓つくってみたいなことをしないで、「輪廻転生」というのは、ひとは死ぬと土に帰って他の生物の栄養となることを表わしているとか、DNAの連続性の問題を指摘していると解釈すれば、それはそれで科学的なわけですよ。だから科学といっても、物理や化学だけでは駄目で、そのなかに必ず分子生物学なり生物学なりを含んでいないと駄目なんだけどね。

だから、僕は村井に期待し、そして裏切られたわけなんだけど、それを最も象徴しているのが、村井がオウムに入るきっかけとなった『かもめのジョナサン』ですよ。あんな、五木寛之が訳した小説に感化されちゃうのが、文系の証拠ですよ。もちろん、カモメというのはメタファーなんだろうけど、自分はまわりのカモメ（俗な大衆）と違って、高く飛ぼうとするカモメだなんて、いかにも文系にしか通用しないメタファーでしょう。科学者なら、ただのカモメに興味があるのよ。ただのカモメを観察し続ければ、一匹だけ高く飛ぼうとしているジョナサンは、むしろすべての人間のメタファーだと気づくはずだよ。

「高いステージ」なんて言葉で、精神性とどこにでもある上昇志向とを履き違えて、みずからを美化し、他者をただのカモメと傲慢にもひとくくりにしてしまえる、科学者にあるまじき現実意識の甘さが、あの微笑みの正体だったなんて、ほんとにガッカリですよ。ぜんぜん理系じゃないね。あれで「理系のエリートは人間を学習していない」なんて意見が出て来るんだから、嫌んなっちゃう。けっきょく村井の造ったものでちゃんと機能したものなんて、あるのかな。あ、プルシャか（笑）。

椹木　その辺がね……オウムの規模はすごいっていういい方があるんだけども、そういうシステム上の緻密さとか、理論的な整合性ということでいうと、そうはいっても国家とかのほうが圧倒的にすごかったりするわけじゃない。国家の犯罪性や殺人兵器の規模にしても、もうまったく桁が違うわけでしょう。それに比べると圧倒的にスカスカの組織ですよね。

出家にしても、じゃあ市民社会から出家して何かオルタナティヴな世界があるのかというと、実際出家した人達っていうのも、結局は電話で事務的な連絡を取っていたり、物を作ったり売ったりしてノルマに追われていたりするわけで、そういう意味では本来の出家する意味は失われている。やっぱり市民社会の中に身を置きつつ、ただ、それを甘受することはできないので、不快なシステムに関してはわずかばかりでもそれを変革してくっていうことをまず念頭において、ウダウダとやっていくしかないのでは。そういうディテールの追求をやめてしまって、何か壮大なヴィジョンがあるんじゃないかと飛躍しないことが重要じゃないかな。

飴屋　そうです。その点で僕は宅八郎を評価しているんです。実のところ社会をほんの少しでも具体的に変えるとしたら、それは壮大なヴィジョンや、

組織的なテロではなく、きわめて細部の事柄に関して、ひとりで筋を通そうとしている「ゆきゆきて宅八郎」ですよ（笑）。しかし、でも、出家っていう言葉は魅力的だったけどな。

福居　すごく魅力的だったね。フレーズっていうことで考えるとものすごく魅力的だよね。

オウムに入れば食えるんや！

椹木　ただよくよく考えてみると、僕にしてもここにいるひとにしても、もうすでに出家してるという部分がかなりあって、気がついてみると標準的な日本人の生き方からはずれてきていて、家庭も形成するわけじゃないし、型通りに就職して日本の社会に貢献しているわけでもないので、オウムの場合でいっても、普通に家庭を持って生活しながら週末は道場に通っている「在家」の立場なんかに較べたら、よっぽど出家に近いのではないか。だとしたら、わざわざ上九一色村まで行って出家する理由もないって気は強くしますね。

飴屋　ええ、だからオウムの出家を批判できるのは、ヒューマニズムや親子の絆とかそういうことではなく、「家」を出て上九に行ったら、そこもまた「家」だったということですよね。

椹木　出家の反対は家出だけどね（笑）。そうするとあまりカッコ良いものじゃないことがわかる。

福居　考えてみると、たしかに僕もすでに出家してる要素が多大にあるしね。去年の夏にレントゲン藝術研究所で次回作の撮影をしていたときだって、撮影のやりかた自体がもう、スタッフを出家させてるみたいな状態で、夏の間中ずっと、あそこに寝泊させてるみたいな状態でね（笑）。

椹木　だからレントゲンはサティアンだなんていわれるわけだ（笑）。

福井　テレビではサティアンは汚くて不潔で、こんなのは人間の住むところじゃないとかいわれてたけど、それよりもひどかったでしょう。（一同爆笑）風呂なんか全然入らないし。

椹木　ゴキブリがでるから汚いっていわれているけど、それなら中央線沿線の安アパートはどうなるのか（笑）。だから当然そのあたりは、どうして高潔なはずの宗教が、そういう汚い劣悪な環境の中に身を置かなきゃいけないのかとか、どうして宗教をそこまで科学的な技術を駆使してバックアップしなければならないのかとかね、そういう疑問が今オウムに対してつきつけられているけど、それは見方を変えれば、じゃあ何で美の探求に化学薬品が必要なんだとか、どうして映画芸術が監禁に近いようなことまでしなきゃいけないのか、って問いつめられてるのと基本的には変わらないわけですよ。

福居　だけどその答えがすごく見つけにくい状態になってきましたよね。ただ、形態は似ているけれども、絶対に違うところがあるはずでね。

椹木　それは何ですか。

福居　オウムに関していうと、もちろん本気で修行したくて入ってくるひとも多いとは思うんだけど、働きたくな

いけど、とりあえずオウムに入れば…
…

飴屋　「オウムに入れば、食えるんや！」って連呼してましたよね（笑）。

福居　あそこに出家すればね、働かなくても毎日修行さえしていけばタダでメシ食えるし、住むところも心配しなくていいし、家賃、光熱費はもちろん、電話代なんか考えなくていいよね。僕のところにいても絶対に食えないから。

椹木　実際にはそういうひともたくさん入ってるんじゃないかな。

福居　ましてや、あれだけドラッグまで作ってるわけだから、イニシエーションとかいってればどんどん呑める（笑）という連中とかね。

　ところが自分のことを考えてみると、食うものもろくに食わずに、いまの六畳の部屋で毎日毎日編集している作業というのはかなりきつくて、それを考えると、出家はなんて素晴らしいんだとか思ったりしてね（笑）。

　ところが、出家の実情がどんどん暴露されてくるといろんなことがわかってきて、ワークと称してありとあらゆることをやっているわけでしょう。つまり単純にいっても、彼らは休んでないよね。寝る時間以外はすべて修行とワークなわけでしょう。でもそうなると、僕にしてみれば映画を撮影することはいわばワークなわけですよね。ワークとかいってるけど、簡単にいえば、ノー・ギャランティというとこですよ。

椹木　ワークっていうとたとえばライフワークという言葉があるように、ある達成っていうかね、創作というか、そういうニュアンスがあるし、宗教的な修行という意味もあるので、魅力的な言葉かもしれないけど、要はボランティアなわけですよね。

古いタイプの集団像

飴屋　集団ということでいえば福居さんの現場も集団作業だし、僕もテクノクラートという集団でやってるし、オウムも集団なわけですよ。だから、集団のあり方ということに関しては、考えざるをえない。

福居　彼らはサティアンを自分達で作っているわけでしょう。そういうのを考えていくと映画の美術と同じなのね。

椹木　ただ、集団のあり方としては、オウムはけっこう古いタイプの集団ですよね。あきらかに麻原彰晃という巨大な中心が設定されているわけだから。

飴屋　僕は昔、状況劇場というところにいて、唐十郎というカリスマに師事していた経験があるから、それをすごく思い出しちゃうのね。

　唐さんの才能を十分に評価した上でいうんだけど、やっぱりああいう集団の在り方ってのは古典的すぎて、僕は嫌だったね。だから自分で独立して始める時は、そういう集団というものに対する断絶からスタートしてるわけですよ。もちろんそれゆえ、唐さんはいまでもずっと集団を維持してるわけだし、僕は解散ばっかりしているわけだけど……いや、僕もワークとか、やったんだよ。

椹木　ワークって名前がついてるの？

飴屋　名前はついてないけど、同じだね。自分で稽古場たてたりするんだよ。コンクリの基礎からやってね。で、そういう作業は無給なのに、なぜ皆、納得してやれるかというと、それはすべて唐さんのカリスマ性ということに集約しているわけ。

椹木　いわば単純な労働じゃなくて、やっぱり最終目的に奉仕する神聖なワークということ？

福居　僕も石井聰亙監督のところにいて弟子状態だったから、石井さんの家にずっと寝泊まりしてて、身の回りの世話もするみたいな感じでしたね。車で迎えに行ってまた家に連れて帰ることも含めて全部やってたから、それは当然助監督の仕事だったし、ワークですよね。

　ただ、それはいわゆる東映とかああいうところのシステムの中に全部組み込まれていて、映画芸術とかいったって、日本ではけっきょく徒弟制度でしょう。戒律めいたものもあるし。僕はもう、そういうところからはいいものは出てこない感じがした。僕は石井監督をすごく尊敬していたし、ある意味ではカリスマだったから、その場所に一回飛び込んでみたんだけど、現実はまったく違うんだよね。いい映画を作っていくっていうことと全然関係ない雑務があまりにも多すぎちゃって、それは多分オウムも同じだと思う。間違いなく雑務がとてつもなく多いと思う。

椹木　そういう意味でいうと、日本でよきものとされている演劇とか、映画とか、舞踏なんかもそうだし、もっといっちゃうと、ある種の編集集団とかもそういうところありますよね。いってみればワークと拉致監禁、それからグルの存在とお布施、あと洗脳でしょう。そういう意味では日本の文化の方法論そのものにも、今回の事件はある問題を投げかけていますよね。

福居　反日本的といわれてるのも、全体の中のある部分を指してると思うね。

椹木　オウムの犯罪性そのものが、日本という国家集団の犯罪性そのもののミニチュアでしかないというところは変わらないんだけど、ただ、オウムという集団はヒエラルキックなピラミッド集団というよりは、つねに麻原と信者との一対一のコミュニケーションによって成立していたということが指摘されているわけで、それを考えると日本というよりは、ひとりのカリスマを頂く文科系の集団の方が、集団の性質そのものとしては近いのかもしれない。

カリスマなき「集団」の可能性

椹木　気になるのは、飴屋さんのテクノクラートや福居さんのホネ工房が、そうした旧来の表現集団とどういう点において異なるのかということですよね。

飴屋　まず、「カリスマ」という古典的な価値観をまったく認めないことだね。で、集団内にカリスマがいなくて金にもならないとなれば、当然ひとは離れていくわけ。

　たとえばステージをやった九三年には僕のまわりには八十人くらいひとが

いた。でも、今は三人。ね、二年間で七十七人やめたってことですよ。こんなに不安定な、弱い組織はないでしょう。まあ、あとは企画ごとに一時的にひとを呼んだり、またバラしたり……。集団としては、ほんとうにもろい、小規模なものです。しかし、そのことを積極的に良しとしないかぎり、けっきょく、集団は以前の集団のあり方に戻ってしまうでしょうね。

福居　そのへんは飴屋さんと同じですね。結束力が弱いので、なにかあるとすぐゼロに戻ってしまう。最初からひとを集め直さなければいけなくなる。ある意味ではとんでもない無駄をやっているわけです。

椹木　小規模で機能的なかわりに、ある意味でいつ解散してしまうかわからない「もろさ」を積極的に肯定していくというのは、すでにパンクの問題意識のなかにありましたよね。産業化したピラミッド型のビッグ・ロックのヒエラルキーに対して、パンクは最小ユニットで絶えずひとが揺れ動いているかわりに、その都度最も機能的なフォーメイションを形成できた。

　僕らはとかくオウムの持っている「規模」に圧倒されてしまうんだけど、そういう部分で考えていくと、オウムのやり方はパンク以前の、いわばプログレッシヴ・ロックのやり方に近いですよね。

飴屋　だから、この集団という問題もね、オウムと自分の差別化を考えるうえで、けっこう重要なことですよ。冒頭の話に戻れば、たしかに僕は、オウムの人々に対して、非常な同世代感を抱いた。しかし一方で、どうしようもないほどの世代の距離も感じざるをえないんです。

　同世代の人間があいう組織に耐えられるわけないっていうのが、僕の世代感覚のひとつの支えにもなっているわけです。パンクなりが持っていた反日本としての美意識の中には、音楽としての美意識のみならず、そういったバンドなりグループなりのあり方にまつわる美意識も含んでいたわけですよね、いや、それを美意識といってしまっては誤解されるかもしれないけど…それは、あこがれるべき美意識ではなく、「あこがれたりするのよそーぜ」といったことが、むしろおたがいの最低限の確認事項だったはずなんですよ。

　ところが、オウムのようなあれだけの集団を構成していくには、やはりカリスマなりハルマゲドンなり、何かドラマチックでロマンチックな要素に頼らざるをえないんでしょうけど。でも、ハルマゲドンとか最終戦争とか、そういったカタストロフに対するあこがれさえ、八〇年代後半には、冷戦終結とともにとどめをさされたはずですよね。

　核戦争後の廃墟なんてヴィジョンを提出した（それこそ当時腐るほどいた）表現者は、少なくともこの、冷戦終結という変化を無視することなく、そのような形での世界の終結は起こりえないということ、しかし、それでも延々と続いていくだろう日常を、ニヒルな諦観を持って全面肯定するのではなく、少しずつでも修正していく方法を検証

するという作業は、避けて通れなかったことだと思うんですよ。

そこをサボって、そのままハルマゲドンというドラマで押し切ろうとしたツケが、それこそオウムを破局に導いたということだと思います。

椹木　ハルマゲドンといってしまうと、ドラマチックに世界が破局を迎えるイメージが強調されちゃうんだけど、他方では環境、人口、食糧の問題にしても、世界がどんどん悪くなってきているのは現実ですからね。逆に少しずつ悪くなるかぎりにおいて、そうしたことに対するリアリティは透明化してしまう。

極端な話、ハルマゲドンというのは、一九九九年には世界は終わるけれども、とりあえず今は大丈夫という認識でしょう。むしろ常に少しずつひどくなっているという認識のほうが重要なんじゃないか。そうなれば何を具体的に現実レベルでやっていけばいいのか考えざるを得ないわけで、あまり大仰な物語に身を没入させて酔っている余裕はないと思う。もちろんオウムは現実にいろいろな対策を練っていたんだろうけど、それがハルマゲドンという結果から逆照写されてしまうのはいかにもまずい。実際には何が起こるかわからないからこそ、イメージに頼ることなく現実を分析しなければならないわけでしょう。

＊

まあ、総括ができようはずもないわけですが、今回の事件をきっかけに、やはり日本のサブカルチャーは一定の後退を余儀なくされるとは思うんです。ただ、前進するばかりが能ではないし、少なくともオウムという集団にどんなかたちではあれ参照点のある活動を行なってきたひとならば、社会と自分との距離感を冷静に見つめ直すべき時期に来ていたのだとは、思います。もっとも、オウムを全面否定するという態度は、けっきょくのところオウムが、すでに全面否定された人達のルサンチマンの集団であった以上、問題の解決になるどころか、より深刻な問題の再発につながるだけでしょう。

僕らは、勇気をもって、オウムの残した暗い痕跡を直視しつつ、やはりふたたび歩を進めていくしかない。ただし、けっして方向を見誤ってはならないと思います。そのとき意外なくらい信頼できる導きになるのが、テレヴィジョンやラモーンズのささやかな抵抗の音楽だということに、僕は少しばかり誇りを感じています。

（95・5・22／東池袋・館屋宅・於）

鼎談者たち（撮影：落合星文）

オウム真理教の家郷

福田和也

ふくだ・かずや：一九六〇年東京生まれ。慶應義塾大学文学部仏文科卒業。同修士課程修了後、文芸評論家として、論壇誌等でも活躍。平成四年『日本の家郷』（新潮社）で第五回三島由紀夫賞を受賞。著書に『内なる近代の超克』（PHP）『遥なる日本ルネサンス』（文藝春秋）等がある。

昨年末から、今年の春にかけて、保田與重郎について書いていた。

文芸誌の連載というと聞こえがいいが、どうしても手をつけられなかった書き下しのかたを取られた形で、しかもおまえのような奴に毎月目次をうめさせるのはしのびないから一月おきに百五十枚ずつ載せてやる、という乱暴というかいい加減な約束をさせられたのである。

そんな約束をしても、二ヶ月かけて少しずつ百五十枚ずつも書くような性分をしていないから、どうしたってそんな枚数がかけている訳がないので、締切近くなると、といっても分量が分量だから直前ということではなくて十五日から二十日くらい前なのだが、多少緊迫する。緊迫するといったってたいした物書きではないから、せいぜい社屋の片隅の湿っぽい部屋に閉じこめられるくらいのものだが。

そんなこんなで昨年末から春にかけてのかなりの部分を、麹町辺の出版社の中で過ごしたのだが、面白いと言えば、面白かった。面白いというのは、阪神大震災も、地下鉄サリン事件もカンヅメ部屋で聞

いたからである。

夜半をすぎると、原稿待ちの編集者が入れ代わりやってきて仕入れたばかりの情報を教えてくれた。今から考えればほとんどがかなり悪質なデマばかりだったのだが、笑いころげたり深刻になったりで、その気になって知り合いに電話して、その仕入れたばかりの与太をさらに流通させていた。

地震もそうだったが、さらにオウム関連の事件が立てつづけに起こる中で、日本浪漫派について批評文を書いているのは、実に奇妙な気分だった。といっても、それがなぜ「奇妙」なのかを、その時よく考えたわけではなかったが。

∴

売文業をいとなんでいる者として、私もまったく無縁というわけにはいかずに、連載ものなどでは触れたものが一つ二つあったのだが、それでもオウム真理教については、あまり書かなかった。ほとんど書かなかったといってもいいと思う。

といって別に、何かのポリシィがあってやらなかったわけではない。いくつかあった注文を、何となく断っているうちに、いつのまにか世間が落ちついてきただけである。まぁ宗教学者でもないし、社会問題の専門家でもないし、注文する方もどうでもよかったのだろう。

しかし、何で書く気にならなかったかというと、そこそこの、理由のようなものがないわけではない。

第一に、噂だの与太だのの段階で、楽しみきってしまったところがあって、文章にするという気分にならなかった。知り合いの編集者や物書きの間で、奇説、珍説を交換していることの方がリアルで、文章という次元にすくいとるようなものではないように感じられた。すくなくとも、自分の文章の対象にはなりえないという気がずっとしていた。何しろ抜群の与太がいくつもあったのである。大新聞の有名記者から、ＣＩＡの陰謀なんですと真顔で詳細を聞かせられたこともあるし、今日もっともラディカルといわれている思想家は、背後に中東産油国がいるのだと教えてくれた。

このように仕事の対象としてでなく、「楽しめ」てしまった理由は、反語的だがこの事件が本質的に

退屈なものだ、という認識があるのではないかと思う。

「国民雑誌」の編集長から、「戦後最大の事件です」などと興奮して話かけられてしまうと、こちらも商売上興奮しなければならない事は分かっているのだが、どうも興奮しきれなかった。

あるいは、つきあいのある霞ケ関の役人が、非常にオウムを高く評価する（評価しているから、徹底的にやられたんだろうが）のを聞いたりすると、たしかにそうだろうな、と納得しながら、その話に納得させられてしまうことが退屈なのである。

オウム事件が退屈だというのは、オウムが、「日常性」にほかならないからである。この事件は私たちが、この日常の中で消費している「パッ」とした出来事が、かたまっておきたにすぎない。

現在、オウム真理教の「崩壊」を前にして、「ハルマゲドン」など来ないと宣言し、あるいは「終わらない日常」が続いていく、その日常にいかにして厚みを加えるかが私たちの課題だ、といった説教が蔓延している。

今は、そういう説教の、「退屈」であることに安住しきっている「退屈」さについては語らない。

だが片一方に「日常」をおいて、もう一方に「ハルマゲドン」を置くことの、視野の狭さは指摘しておかねばならないだろう。それは、片方に「市民社会」を置いて、もう一方に「オウム」を置くのと同じことだ。そしてこのような、視野の狭さこそが、オウム事件を成立させたのである。

私は、「わが国の会社社会は、オウム真理教と同質だ」といった議論をしているわけではない。そうではなくて、私たちが今生きている「日常」というのは、「ハルマゲドン」的なものをすでに内包しているのである。私たちが「平穏無事」という形でイメージする「日常」とは、それ自体ハルマゲドン的なものからの距離において意識され生きられているのであって、「日常」と「ハルマゲドン」的なものはセットになって、「現実」を構成している。

言うまでもなく、このような認識もある意味で「常識」である。少なくとも八十年代以降、「ポスト・モダン」と呼ばれるような現象において「イージー」な持続と「クラッシュ」としての切断が、互いに補いあって現実を構成しているという認識は、

一般化し、通俗化したはずだ。

今オウムを語る言説が、まったくそうした意識抜きに「ハルマゲドン」を「日常」に対比する言説が横行していることは、指摘しておく必要がある。前に視野の狭さが、オウム事件を成立させた大きな要因であると書いたが、このような忘却と、視野の狭さは同一のものである。

報道を中心とする国民的な興奮と、それにこたえていくオウム側のエスカレーションの組み合わせの相乗作用的な盛り上がりは、余りにも月並みで見えすいていた。日本中が、あるいは世界中のメディアが、嬉々として巻き込まれていることに、自分もまた楽しみながら辟易せざるをえない。

ようするに、この事件は、よく出来たディズニーランドのアトラクションのようなものだ。それを誰もが分かっているはずなのに、まるで「カリブの海賊」が実在しているようにふるまっている。その方が、面白いことはたしかだが。だがボードリヤールを引用するまでもなく、ディズニーランドが見世物であり、大規模な娯楽産業として日本経済の一部分をなしているだけでなく、わたしたちの「現実」の一部をなしていることは、当然了解しておくべきではないだろうか。

私は浅田彰氏が、『諸君』での中沢新一との対談で示したようには、オウムを軽蔑しきることは出来ない。それでも彼のいらだち、あるいは善意を装いつつ中沢新一氏の転向を促す意地悪さの底意は分かるような気がする。

オウムをめぐる事件の、あられもない八十年代的展開にたいして、浅田氏は辟易したのではないか。「日常性」をめぐる、さまざまな強度のスペクタクルという「ポスト・モダン」の戦略が、何の衒いもなく進行していくことへの嫌悪を感じたに違いない。

「ポスト・モダン」の完成は、はじめもなければ終わりもない、すべてが相対的な「日常」においてなされるのではない。

「起源」や、「ハルマゲドン」といった、相対化しえないはずの「絶対的」なものが、一つの装置として「日常」に含まれた時に、それは完成するのである。

それは、知的なポスト・モダニティの完成が、柄谷行人による憲法九条の擁護や、浅田によるマイノ

リティの権利要求といった「モダン」な理念の消費によって行われたことによく示されている。浅田氏が苛立っている愚劣さは、オウム事件の八十年代的エスカレーションだけではなく、言論や報道の中の、「日常」と「ハルマゲドン」のなしている仕組みへの自意識のなさに対してでもあるだろう。

オウム事件に際して「社会秩序」とか「治安」といった問題までもが、完全にゲームの領域に取り込まれていったわけだが、そこで弾圧の必要を語った「ゴーマン」な者たちも、その不当を述べた論者たちも、あまりにもあからさまにその役割を演じた。

八十年代には、役割を演じることのいかがわしさを、誰もが、程度の差はあれ認識していた。だが、今は、その意識が限りなく零に近づいている。

もしもオウム真理教事件に、社会的な意味を見いだそうとするならば、何よりもこの「演じる者」の自意識の消滅に見るべきだろう。それは同時に、現在オウムをめぐって流通している説教や言説が、こうした意識の消滅を前提にしていることも意味している。

湾岸戦争以来、大震災でも、地下鉄サリン事件においても語られたが、八十年代的なシミュレーションが崩壊して、血が流れるような現実が露呈してきた、といった認識が流通している。

確かにクウェートやイラクにおいて、それはボスニアでも、ルワンダでも同じことだが、実際に人は死んでいる。阪神においても、地下鉄においても、現実の被害は出た。しかし、このような「ハード」な現実は、ポスト・モダン的な社会を引き裂いたのではなく、むしろ強化したのではないだろうか。

圧倒的な悲惨をも報道ゲームの中にとりこむことによって、あるいは明らかな破れ目をその裡に抱え込むことによって、私たちは、ゲームをプレイし、演じているという自意識を、銜い無く忘れられるようになったのではないだろうか。

∴

そんな訳で、オウムについて書くことに私は、ウンザリしていた訳だが、それなのにここに拙文を加えていただく気持ちになるのは、編者の一人である樋木野衣氏から手紙を戴いたためだった。その中で

椹木野衣氏は、オウムを私のテーマとしての「日本」との関係から論ずるように求めていた。そのポイントとして氏は、①原爆を体験した日本だけが、ハルマゲドンを演出しえた、②オウムの上九一色の施設は、拙著『内なる近代の超克』における、無限の増築とつながるのではないか、③オウムもまた、『日本の家郷』を作ろうとしたのではないか、という提起をした。

私は、①にたいしては、余り同感しなかった。オウムのハルマゲドンの問題は、先の大戦での経験よりも、やはり日本の大衆社会の性格が深くかかわっていると思う。ただ、②③については、少なからぬ刺激を受けた。

オウムの新興宗教としての、著しい特徴の一つは、建築への執着の無さだろう。これまでの近代宗教は、その趣味の善し悪しは別として、大規模な本堂や本部を精力を傾けて作ってきた。だが、オウムはその点についてまったく関心をもっていないように思われる。規模はともかくとして、外観はほとんど町工場や飯場のようなものばかりだ。

そうした造形的意志の淡泊さに比して、その増殖の無計画な加速には、ある種の迫力がある。そこには造形とは別の建築への意志を感じざるを得ない。無論そこには活動にとっての必要性があったのだろうが、武装化に通底する加速度の快感もあっただろう。

前に論じたように、現象としてのオウムは完全に「日常」の中に取り込まれてしまった。だが、現象としてのオウムが取り込まれた事と、主体としての

上九一色村の建物

オウムの意志はまったく別である。むしろ合反しており、こと志しに反して「日常」に取り込まれてしまったのである。あるいはより本質的に言えば、素朴に逃れようとしてがゆえに「日常」の装置として機能してしまった。

それは、「日常」を逃れて、「実感」を求める運動の、当然の帰結という事が出来るだろう。

私たちの社会は、「実感」という信仰をもっている。より精確に言えば「本来性」というべきかもしれない。あるべき生活、あるべき自己、あるべき人生といったものの「手応え」が喪失されている、事物や感情がもつべき重さ、感触をもっていないという感覚がポスト・モダンの社会には蔓延している。

本当の自分を取り戻したい、生の手応えを味わいたいといった紋切り型、それを、より広義にとらえて、ノスタルジィといってもいいかもしれない。

大事なのは、このノスタルジィは、私たちが安住する故郷を失ったために生まれたというわけではない、ということである。

まったく逆に、ノスタルジィが生まれて、その結果として「失われた」故郷が求められた。

つまり突然ある時期に近代人は、自分があるべき「本来的」自己を失っているという想念をいだくようになったのである。その結果として「故郷」というイメージが形成された。

そして、この本来性の回復をめざすさまざまな運動――コント、デュルケムからバタイユに至る社会学、ナショナル・トラストからグリーン・ピースに及ぶエコロジィ、ワグナーからトッド・ラングレンにいたる全体音楽――は、二十世紀特有の価値探求としての「ファシズム」として考察することが出来る。

これらの本来性を回復する運動が、運動の加速性にリアリティを見いだすということは、広く見られる現象である。そしてナチが必然的に戦争を企まざるをえなかったように、オウムにとっても武装化は必然であった。

穏健なヨガ団体としてのオウムはまともだったが、突然非本質的なハルマゲドンが侵入してきたという命題は、ナチスはダイナミックな社会変革だったが、冒険主義的な戦争をはじめて失敗してしまったという議論と等しくナンセンスである。本質的に、それ

が身体的経験であろうと、社会的経験であろうと、加速度によって「日常」から「実感」を奪還するという戦略をとってしまった以上、速度を落とす事は運動の崩壊を意味するものであり、その点で最終戦争は必然である。

その点からすれば、オウムの「建築」は、加速度によって「本来性」を捏造する試みの、痕跡だと云うことが出来る。

確かにオウムの建築の即物性には、ある種の「本来的」な雰囲気があると指摘しうるかもしれない。そのバラック性、タコ部屋性のうちに、「故郷」を見いだすような視点が可能となるかもしれない。ナチスによってウィーン市内に作られたベトンの砲台のような、近代性を捩切った「本来性」をオウム・バラックはもっているとみなしうるかもしれない。

だが、それは「家郷」と呼びうるものだろうか。それは誠に狭い路を通って応えられるべき問いである。

私たちは、ナチのトーチカと、上九一色村の間に、ディズニーランドをおいて考えなければならないだろう。

ナチ＝ディズニーランド＝オウムという系列は、テクノロジィの利用（無論その位相は異なっているが）による本来性回復の大地と規定することが出来る。

このような本来性や実感の虚構装置は家郷なのか。そこには、何が欠けており、過剰なのか。そこで問われるべきなのはおそらく「くらし」である。

「くらし」とは、スタティックな「日常」ではない。むしろ「日常」から出ようとあがくものが、その行方を見失った時に、途方に「くれて」あらわれるものなのだ。

その点からすれば、オウムは、今こそ「家郷」を見いだしつつあるといえるかもしれない。「実感」も「本来性」も、さらなる空しさに帰してしまい、虚構装置としてのホーム・ランドが廃墟になった時、彼らは家郷の「くらし」を見いだしつつある。

無辜の民を殺戮した最悪の殺人犯として逃亡し、貸し別荘や、ウィークリィー・マンションに潜伏した者たちの目に写った富士の麓は、家郷の湿り気をもっているのではないか。

そして、おそらく、私たちの逃亡もまた、さほど遠からず、家郷を見いだすだろう。

終末という理想

大澤真幸

おおさわ・まさち：一九五八年松本市生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士号取得。千葉大学文学部助教授。主な著書に『行為の代数学』『身体の比較社会学Ⅰ、Ⅱ』『資本主義のパラドックス』『意味と他者性』『電子メディア論』、訳書にスペンサー・ブラウン『形式の法則』（共訳）など。

1・二つの戦争の間に起きたこと

【1】世界大戦に敗北してからちょうど半世紀を経た年に、日本は思わぬ仕方で再び戦争（世界戦争）を経験することになった。ここで「戦争」と呼んだのは、もちろん「サリン事件」と総称されている一連の出来事のことである。日本の首都東京の地下鉄に（そして松本の住宅地に）毒ガス・サリンを突然ばらまくという前代未聞のテロは、一九八〇年代の後半に結成された新々宗教オウム真理教の教団メンバーたちによってなされたに相違ないと、現在、ほとんどの日本人がかなり強い確信をもって推定している。この教団と警察――あるいは警察を支持する日本社会のマジョリティ――との間の関係は、国家間の戦争として了解された。それは、第一に、毒ガスを一般市民が多数集まっている場所に発生させるというテロ行為があまりに凶悪で、もはや、法の効力の下にある通常の犯罪とは考えられず、法の実効性を完全に無視する戦争行為と映ったからであり、そして第二に何よりも、教団自身が、自らを独立の「国家」に擬していたからである。

「戦争」の原因となったと信じられているオウム真理教は――これをめぐって事件後夥しい量の言説が生産されたことからも示唆されるように――日本社会の〈現在〉にある必然性をもって現れた、と多くの人々によって直観された。しかし、どのような意味における必然性なのか？　まずは、先の戦争（第二次世界大戦）敗北後五十年の現代日本社会の流れの中で、オウム真理教がどのような位置をもつのかを概観することから、考察を開始しよう。

見田宗介は、戦後四十五年の段階で書いた論文の中で、「現実」がどのような形態の「反現

実」に準拠することによって組織されているかに応じて、戦後史を三つの段階に区別しうる、と論じている。現実が秩序を有することができるのは、それが参照することができる反現実の様相があるからである。しかし、反現実の様相は一つではない。このことは、「現実」という語が三つの代表的な反対語を有する、ということに示される。すなわち、「現実と」理想」、「現実と」夢」、「現実と」虚構」。見田によれば、日本社会の戦後史において、現実が照準している反現実の様相は、「理想→夢→虚構」の順に転換してきた。この内、「夢」という語は、「理想」と「虚構」の両方に引き裂かれるような両義性をもっている。「夢」は、ある種の「理想」という意味にも（「将来の夢」）、「虚構」という意味にも（「夢のようにはかない」）使われる。それゆえ、中核的な意味素にのみ注目するならば、三段階はさらに、「理想→虚構」の二段階に圧縮することができるはずだ。

理想と虚構の相違はどこにあるのか？　理想も虚構も、ともに現実世界ではないという点において、すなわち可能世界であるという点において共通している。しかし、それらが可能世界として現実世界との間に有する関係が異なっている。理想は、未来において現実に着地することが予期（期待）されているような可能世界である。だから、理想は、現実の因果的な延長上になくてはならない。その意味では、理想は、純粋な可能世界ではなく、むしろ広義の現実世界の一局面である。それに対して、虚構は、現実への着地ということについてさしあたって無関連でありうる可能世界であり、それゆえ純粋な反現実である。

戦後日本社会は、人々が理想との関係において現実を秩序だてていた段階から、虚構との関係で現実を秩序だてる段階へと転換してきた、とおおむね整理することができる。転換点をどこに見定めるべきか？　五十年を折半する中間点は、一九七〇年である。七〇年前後の時期に、理想の段階から虚構の段階への転換が生じたと考えられる。ほぼこの転換点の位置に、連合赤軍事件（一九七二年）がある。サリン事件以降、多くの人が、オウム真理教と連合赤軍との間の「類似」を感覚した。この広く共有された感覚には、根拠がある。

オウム真理教が戦後史の中で占める位置に関して、ここで示したい提題を、第一次近似として述べておけば、次のようになる。連合赤軍――およびそれに同時代性を感覚した人々――が、理想の時代の終焉（あるいは極限）を代表しているとするならば、オウム真理教は、虚構の時代の終焉（極限）を代表するような位置を担ったのだ、と。もちろん、オウム真理教団が行ってきたことと連合赤軍に帰せられる悲劇――そしてそれらの原因――は、それ自身として取り出せば、まったく異なっている。しかし、それぞれが戦後史を構成する二つの段階の極値を象徴しているという意味では――つまりそれぞれが歴史的なコンテキストの中で占める位置のみに注目するならば――両者の間には、述べたような照応関係がある。

ところで私は、ここで提案した命題を「第一次近似」であると述べておいた。この命題は暫定的なもので、後のもう少し厳密な考察の中で棄却されることになるからである。

【2】理想の時代の序盤（一九六〇年あたりまで）を――知識人の水準で――社会的にリードした理想は、二つの対立しあう覇権国によって表象された。もちろん、「アメリカ（自由と民主主義）」と「ソ連（コミュニズム）」が、理想を表象する覇権国である。これらの理想を標榜する知識人は「進歩派」と呼ばれ、保守主義的な権力と対抗した。進歩派知識人の代表者の一人丸山真男は、「『現実』主義の陥穽」（一九五七年）の中で、保守的な通常の「現実（リアリスト）」主義に対して、現実に変革志向的にかかわる自らの理想主義を、もう一つの「現実」主義として

対置している。見田宗介が述べるように、丸山のこの論は、理想への志向が、それ自身、現実への志向であることを、よく示している。

理想の時代の、大衆的な水準での黄金期は、一九六〇年代である。もちろん、これは、高度成長期にあたる。この時期、たとえば、国民の圧倒的な大多数によって広範に欲求された家電製品が、大衆的な「理想」に物質的な表現を与えた。念のために述べておけば、経済成長や科学・技術の進歩があったから理想が抱かれたのではなく、逆に、理想が可能的な「現実」として広く（世界的規模で）信憑されたがゆえに、経済が成長することができ、また科学や技術が進歩していると感受されたのである。

宗教学者は、十九世紀以降に生まれた宗教を「新宗教」と呼ぶ。新宗教の中でも、一九七〇年以降に生まれたとりわけ新しい宗教と、それ以前の相対的に旧い宗教とは、教義内容や信者の人格類型等において、かなり異なっていることが知られており、前者が「新々宗教」、後者が「旧新宗教」と呼ばれ、区別されている。もちろん、オウム真理教は、新々宗教の中でも後期に属している。新宗教の性格の転換期は、ちょうど、戦後史全体の転換点――理想の時代／虚構の時代を分かつ転換点――でもある。

旧新宗教への入信動機は、比較的少数の明確な主題に分類できることが知られており、それらは、「貧・病・争」という標語によって要約されている。すなわち、貧困、重病、家族的な不和などからくる極端な生活苦が、旧新宗教へと入信する理由を構成しているのである。このことは、（少なくとも戦後の）旧新宗教が理想の時代に対応する宗教であった、ということを示している。理想の時代――社会が全体として理想へと疎外されている時代――において、最大の不幸とは、理想から永続的に疎外されることである。「貧・病・争」は、理想への到達・接近が著しく困難になりうるような――理想からの永続的な疎外を余儀なくするような――宿命的な環境条件を代表している。不幸は――既に理想への疎外によって条件づけられている以上は――理想を到達の蓋然性が十分に高い現実性として恢復することによってしか解消されない。旧新宗教が果していたのは、まさに、このようにして不幸を解消することによって、理想から疎外された少数の人々を理想の圏域へと引き戻すことである。だから旧新宗教が約束する救済は、どうしても、いわゆる「現世利益」でなくてはならない。

【3】 一九七〇年代――とりわけその後半――以降の虚構の時代とは、情報化され記号化された疑似現実（虚構）を構成し、差異化し、豊穣化し、さらに維持することへと、人々の行為が方向づけられているような段階である。「情報社会」、「脱産業社会」、「消費社会」等々と名付けられ、分析されてきたのが、虚構の時代の下にある社会であった。

虚構の時代の黄金期は、八〇年代である。虚構の時代は、見田宗介が指摘するように、たとえば「（東京）ディズニーランド」（一九八三年開園）によって象徴されよう。ディズニーランドは、慎重な配慮によって――たとえば入場者が自然に使用してしまう視線の配備を巧妙に計算に入れることで――外部の現実を徹底して排除しており、このことによって虚構の（幻想の）空間として自律している。ディズニーランドの興行的な成功は、日本社会が虚構の時代のただ中にあったことを示している。

また明治以降の東京の「盛り場」の変遷を辿った吉見俊哉の研究によれば――見田もこの研究を引用しつつ再確認しているように――戦後の盛り場の中心は、新宿から渋谷へと移行した。渋谷が東京のイメージを代表するような盛り場になるのは、一九七〇年代後半以降のことである。渋谷が成功したのは、とりわけ西武系資本の投入によって、街の全体が、消費社会に適合した、「ハイパーリアル」でオシ

ャレな空間へと仕立てあげられたからである。要するに、渋谷は虚構の時代に適合した盛り場だったのだ。

新々宗教が要請されたのは、このような時代においてである。もはや、入信動機の主流は、「貧・病・争」ではない。信者たちの入信動機を全体として通覧すると、どこに焦点があるのか定めがたい、多様で散乱した理由の集合を得ることになる。主たる救済の様態も、現世利益から現世離脱へと転換する。現世＝現実を離脱した志向性は、もちろん、ある種の虚構（霊的世界）へと向けられ、そのことによって、現実と虚構との価値配分が逆転し、虚構の方に圧倒的な重要性が宣かれることになる。

オウム真理教は、このような新々宗教の典型である。「典型である」というのは、数ある新々宗教の平均値的な一般像を示している、ということではない。そうではなくて、新々宗教の中核的な特徴と見なされている主要な性質をほとんどすべて、徹底させ純化させた形式において所有しているという意味において――したがってその極端性のゆえにむしろ少数派であることにおいて――オウムは典型なのである。要するに、オウム真理教は、新々宗教の理念型的な代表なのである。したがって、オウム真理教の例外性は、それが時代的な必然の外部にあったことに由来するのではなく、むしろ逆に、その必然をあまりに純粋に体現しすぎたせいであるかもしれないのだ。

【4】オウム教団が前提にしていた世界が虚構的であるということは、既に多くの論者によって強調されてきた。それは、一種の仮想現実（ヴァーチャル・リアリティ）であり、劇画調であり、情報的である、と。あまりにも反復されたこの陳腐な論点を、あらためてここで緻密に確認する必要はないだろう。若干の補強だけをしておこう。

オウム真理教は、自身の教団を一種の「国家」として擬制し、これに対応して一般の人々も、多少なりとも、この教団を、仮想的・虚構的な国家として想念した。この点にオウム真理教が依拠した虚構の顕著な特徴がある。この特徴は、教団が活用した虚構の「虚構性」を強化したことの帰結として、少なくとも部分的には、説明することができる。先述したように、理想は現実世界と地続きの可能世界である。他方で、虚構は現実世界と独立の可能世界である。「国家」という自己了解は、虚構のこのような現実世界からの独立性の水準を表示しているだろう。国家とは、少なくとも規範に関して自己充足的で外部に依存しない閉鎖した共同体である。そうであるとすれば、自身を虚構として現実から純化しようとすれば、それは、どうしても、「国家」に隠喩を求めるような自律的な空間として構成されるに違いない。もっとも一方で、自身を独立の国家として構想し、それゆえに外部の社会との紛争において、いかなる法規範も前提にしない戦争の様相を与えながら、他方では、多くの紛争を、法規範に徹底的に依拠することによって――したがって自他が異なる国家として対峙するのではなく、単一の国家に下属している二つの部分であるとの了解の下で――解決を図ろうとする、という奇妙な両義性が見出されることにも留意しておく必要があろう。

オウム真理教が出家という信仰の形態にきわめて高い価値をおく必然性も、同じ点に由来しているだろう。出家を規定しているのは、空間的な移動ではなく、また共同体所属の転換でもない。ある身体の移動が「出家」と呼ばれるような根源性を呈するのは、それが間世界的移動として――つまり同一の現実世界内の移動ではなく現実世界から可能世界への移動として――企図されているからである。したがって、身体が共同体の間を「出家」という形式において移動するときには、移動前に所属していた共同体と移動後に所属する共同体の間で、それぞれを被覆する規範の共通性が

極小化されざるをえない。同じ間世界的な移動を、移動する当人や迎え入れる共同体の視点ではなく、離脱した共同体に残留している者の視点で捉えれば、それは「拉致」や「監禁」として現れるであろう。オウム真理教団と外部の社会との間の紛争は、まずはこの拉致と監禁に関わるものとして生じたのであった。

2・両方向からの越境

【1】日本の戦後の半世紀が理想の時代から虚構の時代への転換として把握しうること、そしてオウム真理教が虚構の時代の先端に登場するような宗教であったこと、これらのことを述べてきた。しかしこのような理解によっては、「戦争」が惹き起こされてしまった理由を説明することはできそうにない。このような理解に立脚した場合には、「虚構（フィクション）」と「現実」とが取り違えられた、とでも説明されるのだろう。だが問題は、虚構と現実との落差がいかにして埋められたのか、虚構がいかにして現実としても機能しえたのか、にあるのだ。ここまでに提起してきた単純な構図の中では、この最も重要な問題は説明されないままに遺棄され、結果を記述する命題だけが突然のように結論として提起されるにとどまるだろう。問題に接近するためには、ここまで第一次近似として提起してきた戦後史の構図を、もう少し繊細な理解に置き換える必要がある。

そのためには、オウム真理教が虚構の時代に対して担ったのと同じ位置価を理想の時代の中で担った集団が、すなわち連合赤軍――というより正確には連合赤軍に同時代性を自覚した人々――が、戦後史の展開に与えた効果を、あらためて考察してみることが、示唆を与えるだろう。われわれの最初の理解は、連合赤軍事件こそが、理想の時代の完全な終結を、したがってその挫折を、象徴している、というものであった。しかし、このような述べ方では、必要な精度が欠けている。

理想の時代の末期には、既に理想の時代の内に包摂するのが困難であるような現象が突出しつつあった。理想の時代の最終局面は、一九六〇年代末期のラディカルな学生たちの運動によってこそ特徴づけられるだろう。この運動は、もちろん、革命を志向する運動として、何らかの「理想」を掲げてはいた。しかし、その理想は、理想というものの所有のされ方として、既に末期的なものであったと言わざるをえない。このことは、六〇年代末期の若者の社会運動を、そのおよそ十年前の大規模な社会運動、すなわち六〇年安保の闘争と比較してみると、よく理解できる。

六〇年安保の運動は、戦後の進歩派知識人が有したような積極的な理想を掲げて導かれた。六〇年安保とは、アメリカ的なものであれ、ソ連的なものであれ一般に積極的な理想を有することと、理想をもたない体制的な現実主義に徹することとの間の闘争であると、理解されていたのである（そして、理想主義者が敗北したことで、見田宗介は、理想の時代は、具体的にはここに終息した、と論じている）。それに対して、六〇年代末期の学生運動が掲げた理想は、六〇年安保の運動を導いたような戦後的な理想――戦後民主主義（アメリカ）やスターリニズム（ソ連）――を否定することのみをその実質的な内容としていた。理想の否定を理想とすることによって、運動は、政治的な具体性を欠落させ美学的な装いを帯びた。そして、連合赤軍の活動は、このような六〇年代末期の運動の延長上に、その極端でほとんど最終的な形態として現れたのである。

同じことは、「知識人」の運動の水準だけではなく、大衆的な水準でも認めることができる。理想の時代の大衆的な表現こそが、高度成長であった。しかし、六〇年代末期は、高度成長の限界が自覚された段階でもある。たとえば「公害」という社会問題が、このような自覚に

対応して認められる。今し方論じた学生運動も、もちろん、このような社会問題の認知を、一つの背景としてもいた。

だから、理想の時代の末期は、むしろ理想の時代を否定する運動や感覚によって特徴づけられるのであり、それらの運動や感覚は、この否定的なスタンスによってかろうじて理想の時代につなぎとめられていたのだ。見田が理想の時代と虚構の時代の中間に――ここでの基本的な構図からは削除した――「夢の時代」という段階を設定したのも、理想の時代の内部に今示唆したような変質が見出されるからであろう。ともあれ、ここで確認すべきことは、理想の時代は、その展開の過程で、自己否定に導かれていくらしい、ということである。

【2】連合赤軍とその悲劇を同時代的なものとして――つまり自分自身の問題として――引き受けざるをえなかった人々とは、世代的に言えば、主として、「団塊の世代」に属する人々である。団塊の世代とは、そこ(連合赤軍事件)までの人生が、「理想の時代」と重なっていた人々であると、言っても良いだろう。

団塊の世代に属する優れた思想家は、共通の課題をかかえているように見える。彼らの思想的課題の中核は――この論考でここまで使ってきた言葉で表現すれば――理想を否定しつつ、いかにしてなお理想を維持するか、といったほとんど解答不能な問いに集約させることができるように見えるのである。

たとえば、そのような思想家の代表的な例の一人として、竹田青嗣を見ることができる。竹田の鮮烈な問題意識に満ちた井上陽水論はよく知られている。竹田が、陽水(ちなみに彼も団塊の世代に属する)に魅かれるのは、陽水の曲がまさに、今述べた解答不能な問いに直面しているのを直観するからである。

竹田は、「陽水の快楽」の冒頭で、陽水のファーストアルバム『断絶』(これが出たのは連合赤軍事件の年である)の冒頭に収められた「あこがれ」という曲を、「陽水の登場に実にふさわしい響きをもつ」ものとして分析している。この曲で、陽水は、「さびしい時は男がわかる/笑顔で隠す男の涙/男は一人旅するものだ/荒野をめざし旅するものだ/ラララ…/これが男の姿なら/私もつい　あこがれてしまう」と歌い、同じ様にして、続いて女性の理想像を示し、やはり「私もつい　あこがれてしまう」と反復する。

竹田によれば、この曲は、世界(理想的な男性や女性)へのあこがれを歌ったものではない。「私もつい　あこがれてしまう」には、微妙な両義的態度が結晶しているというのである。ここには、第一に、歌われている男性や女性の理想像(ロマン的世界)が、幻想に過ぎないことを対象化＝距離化する、覚めた認識がある。しかし、これだけでは、青春の喪失や挫折を自己哀惜したり、苦々しく語る定型に収まってしまう。しかし、陽水の曲には、第二に、理想像の挫折にもかかわらず、理想を憧憬する欲望・志向性を維持しようとする態度が認められるのだ。通常は、ロマン的世界＝理想の挫折を痛烈に認識した場合に、人は、一切の理想を放棄し、理想を奥深で噛みつぶす現実主義者(リアリスト)に反転する。しかし、竹田によれば、陽水の場合には、同じ認識を共有しつつ、逆に自分の中の現実主義者(リアリスト)としての側面を噛みつぶし、(理想像のまさに「理想」としての対象性ではなく)理想へとあこがれる内的な欲望＝志向性のみを保持しようとしたのだ。幻想に固執する理想主義者でもなく、しかし一切に対してアイロニカルなだけの現実主義者でもない、緊張にみちた中間的な立場を竹田は評価する。

同じことは、加藤典洋や彼が評価する村上春樹(みな団塊の世代に属する)についても言うことができるが、ここでは詳しく論じることはやめておこう。ただ、大江健三郎のパロディーと思われる、村上春樹の「1973年のピ

*「あこがれ」(作詞：井上陽水)

ンボール』にだけ簡単に言及しておきたい。一九七三年は、連合赤軍事件の翌年であり、この作品は、この事件が不可避にもたらした転換に触発されているに違いないからである。この小説の中では、出来事らしい出来事は何も起きない。ただ、主人公は、日本に三台輸入されただけで製造中止になった幻のピンボール・マシーンを捜し当てようとするだけである。「ピンボール・マシーンを獲得すること」がこの小説の内部での「理想」だが、もちろん、これはくだらないことである。くだらないことを理想としてしまうことで、したがって、これをたとえば日本や世界に革命をもたらすといった「重要な理想」と等価なものとして並べることで、(重要な)理想の幻想性が暴かれ、破棄されてしまう。しかし、なお理想を追求する——マシーンを捜し歩く——態度だけは保持されるのである。こうして、村上は、井上と同じ両義性を——おそらくアイロニーにより近づいた地点で——引き受けるのだ。

さて、理想が既に否定されてしまっており、それにもかかわらず、理想へと志向する態度のみを保持する場合に、その志向性の先端に開示される対象は、いかなる性質を帯びることになるだろうか？ 一方では、その現実性が否定されながら、他方では、それを憧憬する志向のみが保持されているような対象とは、もはや、ほとんど虚構にほかなるまい。理想が自己否定的に変質したとき、そこに現れのは、限りなく虚構に近い何かである。

たとえば井上陽水は、一九七三年に発表した「夢の中へ」——この曲は彼にとって初めてのビックヒットであった——において次のように歌う。「探しものは何ですか？ 見つけにくいものですか？」と問い、言外に探しものを求める作業を断念するように勧めたあと、「夢の中へ、夢の中へ、行ってみたいと思いませんか？」と誘うのだ。「カバンの中も、つくえの中も、探したけれど見つからない」探しもの、「休む事も許されず、笑う事も止められて、はいつくばって はいつくばって」追求しなければならない対象とは、「理想」であろう。「探すのをやめた時、見つかることもよくある話」だと陽水は言う。その通りであろう。しかし積極的な「理想」として探究することをやめたとき、見つかる何かとは、もはや理想ではなく、「夢」つまり虚構である。竹田青嗣は、この曲を好まない。ここでは、「理想」から「虚構」への越境が完了してしまっているからである。竹田は移行状態の微妙な中間的位置を評価するのだ。

【3】それゆえ、ここで主張したいことは次のようなことである。第一に、団塊の世代の最も良質な代表者たちが試みたことは、理想の理想としての有り様を単純に放棄したり拒否することではなく、まさに理想の理想性に固執し、それを徹底させることであったということ。第二に、そのような徹底によって理想は自己否定へと導かれ、ほとんど虚構に近いものとして再生するということ。理想を否定へと導くような理想性への徹底は、虚構の肯定へと接続しているのだ。われわれは最初、「理想の時代／虚構の時代」という二分割を与えておいた。しかし、この分割を導くような連続性があるように見えるのだ。理想への内在があるでメビウスの帯を辿っていくような仕方で、やがて虚構へと裏返っていくのである。

連合赤軍が象徴しているのは、単純な「理想の時代の終結」ではない。理想の時代が虚構の時代へと反転していく接点のような場所を、連合赤軍が象徴したのである。

以上のような連関は、哲学的には、次のようなことを示唆している。通常は、現実がまずあって、虚構は、そこからの二次的な構成物であると考えられている。ところで、現実は理想を準拠にして秩序だった全体として定位することができた。理想それ自身は、先にも述べたよ

＊『夢の中へ』(作詞：井上陽水)

うに、現実の一局面である。しかし、その理想の理想性を純化させた場合には、それは虚構へと転化するらしい、ということが、ここでの考察から結論された。そうであるとすれば、今や、こう言うべきである。現実こそが、虚構に準拠して構成されているのだ、と。現実の虚構への依存性を勘案するならば、むしろ、現実の方もまた一種の虚構だ、と言うことすらできるだろう。

もっとも、このように虚構と現実の序列を反転させる哲学的な命題は、現在では、ありふれたものである。ポスト・モダンの哲学（虚構の時代の哲学）が、あるいは「仮想（ヴァーチャル）現実（リアリティ）」や「ハイパーリアリティ」の意義に着眼するメディア論が主張していることは、だいたいこんなことである。ここでは、しかし、後の哲学的な考察が命題として取り出すような結論が、連合赤軍に衝撃を受けた人々の経験の内に既に伏在していた、ということを強調しておきたいのである。

【4】連合赤軍は、理想から虚構への反転を象徴している。オウム教団が、サリンをばらまく犯行に関与しているのだとして、このことがわれわれを驚愕させるのは、ここに、連合赤軍が代表していたのとは逆方向の反転を、つまり虚構の方がその徹底によって今度は理想（現実）へと反転し、理想（現実）として機能している様を見るからではないか。先に見たように、理想の時代は、その末期に、自己自身を否定する段階を含んでいた。これと同様に、虚構の時代も、その内部に、自己自身を否定するような段階を含んでおり、われわれはそうとはあまり強く自覚することなく、既にこの否定の段階に入っていたのではないか。そしてこのような自己否定の先端に、オウム真理教が現れたのである。連合赤軍の悲劇が確認され、理想の時代が完全に終結した後から振り返ると、理想の時代の内部にあった自己否定の段階が見えてくる。同様に、サリン事件の後から振り返ることでのみ発見されるような、自己否定の段階が、虚構の時代の内部にも孕まれているように思われるのだ。

中沢新一や他の何人かの論者が、麻原彰晃師と彼が率いるオウム教団は、革命家である、と評した。彼らが革命集団に見えるのは、彼らの虚構が、それ自身、現実化されるべき理想としても機能しているからである。虚構が理想へと反転する、何らかの機（メカニズム）制が存在すると、考えざるをえない。それは何か？

とりあえずは、次のことは、容易に確認しうる。オウム真理教団は、麻原師なしでは、とうてい成り立つまい。麻原師の存在を欠き、彼の教義だけが存在しているという状態においては、オウム真理教の今日までの発展は、ありえなかっただろう。麻原師を含む教団の全体を考えた場合には、ここで、虚構へのベクトルと理想（現実）へのベクトルが混交しているのを想像することができる。

しばしば指摘されるように、教団の熱心なメンバーの中心は、二十歳代後半から三十歳代の半ばの世代にあたる。この世代は、「新人類」とか「オタク」などと呼ばれる若者たちを輩出した年齢層にあたる。もちろん、「新人類」や「オタク」は、虚構の時代の世代的な対応物であると言ってよいだろう。

他方で、麻原師のみは、「理想の時代」に内属していると見なしうるような諸属性を有している。もう少し厳密に言い換えれば、理想の時代が不可避に孕まざるをえないような影の部分を想起させる諸属性を、麻原師は担っているように見えるのだ。年齢的には、麻原師も、団塊の世代よりも後の世代に属しており、新人類やオタクの世代に近い。しかし、彼が担った宿命は、彼の世代としては例外的に、むしろ、理想の時代に属している。理想の時代が不可避にはらまざるをえない否定的な影（不幸）は、「貧・病・争」という標語に要約され、この標語

が表現するような環境に置かれた者が、旧新宗教の下に集まったのだ、と先に述べた。麻原師の人生に関して言うと、まさに、標語が表示するすべての点が、つまり「貧」と「病」と「争」のすべてが当てはまるのである。

もちろん、私は、麻原師の私的なルサンチマンが革命的な破壊への衝動に帰結した、と論じたいわけではない。教団の主要メンバーと麻原師との今見たような対照が、およそ次のような推定を誘うのである。教団の基底的な心性としては、虚構への強力な志向が支配的であろう。この支配的な志向性を、麻原師自身も共有しているだろう。と同時に、この支配的な志向性に、麻原師の存在が喚起してしまうような「理想＝現実への志向」が混入したとき、言わばそれが触媒のように作用して、虚構への志向が、それ自体、理想への志向として結晶していったのではないか。もちろん、このような語り方は、比喩にしか過ぎない。どのようにして「触媒」が作用しえたのかを、事態に即して解明しなくてはならないだろう。

オウム真理教が、一九九〇年の衆議院総選挙の宣伝のために配付した『未来を開く転輪聖王』という漫画がある。この漫画は、麻原彰晃師の半生を描いたものだが、完全な作り話である。しかし、切通理作は、この漫画を、「漫画を好きな人間の心情」を正確に反映しており、「描き手側の、本質的な意味での『正直さ』がある」と高く評価している。この漫画では、主人公のショウちゃんは、劣等生で不器用な人物として描かれている。彼は、好きな女の子にプレゼントを買おうとアルバイトに集中していたため、受験に失敗し、また肝心のプレゼントも渡しそびれてしまう。結局、勉学への意欲を失い、工場で働くが友人も得られない。ある日、彼はちょっとしたきっかけから、かつての同級生で、現在は一流大学に通う優等生の友人に裏切られ、万引きの濡れ衣を着せられてしまう（ちなみにこの友人の名前は「大作」である）。この体験が引き金となって、ショウちゃんは超能力を獲得する。後に教祖となったショウちゃんは、超能力を駆使して、かつての憧れたあの女の子が恋人（実は大作）に捨てられたことで絶望し、自殺しようとしているところを、助けたりする。

この漫画では、主人公は、恋人を得るとか、受験で成功するとか、あるいは信頼しうる友人を得るといった現世的＝現実的な理想のすべてから疎外される。だが、この疎外は、超現世的な——つまり虚構の世界へと飛躍する——超能力によって、乗り越えられてしまう。逆に言えば、ここでは虚構への没入が、理想の獲得と等価なものとして作用しているのである。

いずれにせよ、この漫画が直接に表現しているのは寓話のようなものであり、この宗教の教義や実践の全体からすれば、ごく部分的なものでしかない。虚構が徹底されたとき、メビウスの帯のような回路を通じて、理想＝現実へと再反転してくるのではないか、という仮説を提起してきた。オウム真理教にとって、究極の理想とは何か？　虚構を経由して理想へと回帰してくるとき、その理想は、実は、もともとの理想とはまったく異なった——ほとんど対立する——ものに変貌しているのである。彼らが提起する理想とは、破局的な戦争をともなう終末なのだから。終末が理想となりうるのはなぜか？　言い換えれば、終末として提起されたときに、虚構が理想として機能することができるのはなぜか？

3・終末という理想

【1】オウム真理教は、世界最終戦争（ハルマゲドン）を経由する世界の終末が、遠くない未来において確実に到来するものと、想定している。終末の時は、未来の不定の時点に予期されているのではなく、麻原師の予言を通じて、確定的なものとして規定されている。もっともその終末がどの

時点として確定されるかということは予言の時期によっていくぶん異なってはいる。

少なからぬ新宗教が、破局的な終末を予期している。とりわけ、虚構の時代の新宗教、つまり新々宗教において、破局的な終末への危機感を表明するものが圧倒的に増大していること、しかも、新々宗教が予期する終末は、切迫の程度が高いこと、これらのことに注目しておかなくてはならない。大和の宮(一九八一年創立、幸福の科学(一九八六年)等においては、とりわけ終末が切迫したものと考えられており、多くの同時代的現象が、終末への予兆と解釈されてきた。いくぶん旧い新宗教においても、特に虚構の時代の開始の前後から、終末が近いことを予言するものは多い。早い段階から終末を唱えていた教団としては、統一教会、エホバの証人、真光等が知られている。あるいは、麻原師をはじめオウム教団の初期メンバーの多くがかつて入っていたことで注目された阿含宗(一九五四年創立)の桐山靖雄も、一九八一年以降、一九九九年に破局が訪れるとする終末論を唱えてきた。

新々宗教が唱える終末論的な世界観のブームの端緒に遡ると、五島勉の著した『ノストラダムスの大予言』につきあたる。周知のように、この本によると、一九九九年の七の月に空から降りてくる「恐怖の大王」によって人類は滅亡の危機に遭遇する。注目すべきは、この五島の最初の本が出版された年が、一九七三年であった、ということである。オイル・ショックの年にあたる一九七三年は、連合赤軍の悲劇的事件の翌年(そして村上春樹の小説が象徴的な道標を打ち立てた年)であり、高度成長が既に終わっているということを抗いようもない事実として人々に自覚させた年でもある。要するに、この年は、理想の時代から虚構の時代へのコーナーを曲がりきった年なのである。オウム真理教をはじめいくつかの新宗教が、終末の予言の根拠(の一つ)として、ノストラダムスの予言に言及してきた。ちなみに、私が直接に話を聴くことできたオウム真理教信者(の内の二人の女性信者)も、小学生の頃、ノストラダムスの予言に衝撃を受け、一九九九年には自分が何歳になっているかといったことに思いを馳せた、と告白してくれた。

以上の諸事実に基づいて、ここでとりあえず確認しておきたいことは、次の諸点である。世界の終末を想定しているということは、オウムに固有の特徴ではない。終末論的な世界観は、かなりの数の新々宗教によって共有されている。それゆえ、終末論が説得力をもちえた社会学的理由を、われわれは、オウムに固有の事情に求めるべきではなく、新々宗教を興隆させた社会的文脈の内に探さなくてはならない。その「社会的文脈」とは何か? さしあたって、それは、「虚構の時代」とここで名付けてきた社会と意識の編成である。

この論点は、終末論のブームが狭い意味での「宗教」の領域を越えた文化的な現象であった、ということを確認することから、あらためて支持されるだろう。そもそも、五島の『大予言』に端を発するノストラダムス関連書の流行は、何らかの宗教の直接の信者や支持者の範域を圧倒的に越えた人々の間で生じたことであった。それだけではなく——サリン事件以降多くの論者が指摘したことだが——七〇年代後半以降のいわゆるサブカルチャーの中には、終末や最終戦争をめぐる想像力が、氾濫しているのである。

サブカルチャーの終末論的な想像力を示すものとしては、『宇宙戦艦ヤマト』(松本零士、劇場版一九七七年)、『風の谷のナウシカ』(宮崎駿、一九八四年)、『アキラ』(大友克洋、一九八二~九〇年)等の漫画やアニメーションが代表的なものであろう。これらの作品は、しばしば、核兵器を使用したと思われる世界大戦クラスの戦争(第三次世界大戦)の後の世界を場面として設定し、その上で、漫画やアニメー

ションの中で、真の最終戦争とも言うべき戦争の過程を描いている。ヘーゲルは、偶発的な出来事が現実化し、歴史の中で承認されるのは、反復によってである、と述べている。まるでこのテーゼに従うかのように、漫画の中の(最終)戦争は、既に始まっていたものの反復として、真に現実化しようとするのである。実際、大友克洋は、『アキラ』に先立って、矢作俊彦との共作で『気分はもう戦争』(一九八二年)を描いている。もう始まっている戦争だけが、歴史的な意味を獲得するかのようだ。

比較的新しい作品としては、『美少女戦士セーラームーン』(武内直子、一九九二年～)等も、最終戦争的な戦争を戦う戦士を描いていると見ることができる。『セーラームーン』は、主人公の戦士が普通の女子中学生であるという点で、注目に値する。この作品は、オウム真理教よりも新しいので、その教義や世界観に影響を与えている可能性はまったくない。しかし、それにもかかわらず、最終戦争以外にも、「オウム的な要素」をいくつも備えている。転生、前世の関係を根拠にした無意識の連帯、「ホーリー・ネーム」等。大和之宮の教祖安食天恵(あじきてんけい)に降臨した「テレペート様」の次のような終末を語る言葉は、たとえば『セーラームーン』に入っていたとしても何の違和感もなかっただろう。

「この地球はけがれにけがれ、泥にまみれ、ありとあらゆるものが破滅に近づいている。私たちはこの事実を一人でも多くの人に伝えたくて、遠く金星よりやって来た。救いを求める人は数しれない。しかし真実、この恐ろしい事実を一刻も早く伝えなければならない。…」

(一九八四年十月一四日、
島薗進著『新々宗教と宗教ブーム』より)

新々宗教の終末観とサブカルチャーの終末観は、明らかに、同時代的な現象として共振しているのである。

【2】最終戦争の直後に到来する終末の時は、一般に、究極の救済の時でもある。罪深い人々(異教徒)は最終戦争を通じて滅び、しかるべき人々から成る「理想の秩序を有する社会」が建設されるのである。一般に、終末の予想は、救済の希望と結託している。

オウム真理教の場合は、救済後の理想社会は「シャンバラ」と呼ばれる。シャンバラは、イスラム教による迫害の下で、仏教がヒンドゥー教から移入した観念で、救世主である理想の帝王(転輪王)によって支配された理想社会である。まず前提として、終末の破局への予感や予言は最初からオウム真理教(あるいは麻原師)の観念の内に含まれていた、ということを確認しておかなくてはならない。既に一九八五年に、麻原師は「シャンバラ王国」に言及している。シャンバラの建設には、異教徒を撃滅させる最終戦争が前提になる。最終戦争を通じて生き残り、救済されるのは、おそらく日本人(の一部)を中核とする、神仙民族である。その指導者もまた、日本から出ると予言された。

このように、最終戦争後の理想社会についてのごく初歩的な構想を、オウム真理教の場合も、通常の終末論と同様に、有してはいる。しかし、オウム真理教に関して言えば、理想社会についてのこれらの構想は非常に貧困で、具体的なヴィジョンを欠いている、ということが、特に注目されるのである。それでも、八八年頃までは、日本を拠点とする世界のシャンバラ化の計画が語られ、その一環として、「ロータス・ヴィレッジ」と名付けられたコミューンの建設が企図されていた。ロータス・ヴィレッジは、オウムの「真理」によって生活や社会秩序が律せられた理想の共同体になるはずであった。要するに、初期の段階においては、理想の共同体を積極的にイメージする比較的

明るい展望がもたれていたのだ。しかし、理想社会の内実についての積極的なイメージは、オウム真理教の展開につれて、急速に縮退していく。終末や最終戦争については雄弁に語られるが、その後に建設されるべき社会については、具体的な構想がほとんど主題化されることがなくなるのだ。たとえば、教団発行の雑誌『マハーヤーナ』31号（一九九〇年五月）で麻原師が、即刻建設すべきものとして語っているのは、ロータス・ヴィレッジではなく「完璧な核シェルター」である。

理想社会の構想が貧困化していくのに並行して、予言された終末の時が切迫したものになっていく。麻原師は、一九八八年に『ヨハネ黙示録』の研究に取り組み、その成果を八九年に著書として公刊したときには、ソ連の滅亡を二〇〇四年、中国の滅亡を二〇〇四～五年と予言している。だが、九二年の秋に各地の大学で行った講演では、麻原師は、二〇〇〇年までにハルマゲドンが起きると予告している。そして最近では、一九九七年にはハルマゲドンに突入すると考えられていた。

終末の急迫化とともに、予想されている終末や最終戦争の悲劇的・破壊的な性格も強まっていく。もともとは、最終戦争は何とか回避しうるかのように語られている。しかし、八九年の著書では、最終戦争が回避不可能な前提とされ、最終戦争後に選ばれたわずかな人々のみが生き残るということが、話題の中心となっていく。もっとも、このときには、オウム教団が、外部の人々の生き残りにいかに貢献しうるかが、問われている。しかし、やがて、ハルマゲドンを勝ち抜き、（とりわけ出家信者を中心とする）教団自身が生き残ることに、重点が移動していく（島薗進著『オウム真理教の軌跡』参照）。

そもそも、オウム真理教が予期している終末は、終末論を有する他の諸宗教の終末のヴィジョンと比較して、破滅的であり、要するに「暗い」。最終戦争の到来は確実で、回避不可能であると見なされており、またその後に生存しうると想定されている人口の比率も非常に低い。対馬路人は、一般に終末のヴィジョンは悲観と楽観の両義的なバランスの上に成り立つものだが、オウム真理教が描く終末と大本教が描く終末とを比較すると、オウムの場合には、圧倒的に悲観の方に傾いていることがわかる、と論じている。

このように概観してみると、次のように結論せざるをえないだろう。一般には、終末論を表明する者は、現状に対して何らかの強い不満を覚えており、現状を覆した後に建設される世界において――言わば「一発逆転」式に――救済されることを期待しているのではないか、と推測したくなる。しかし、オウム真理教においては、このような常識的な見解は成り立たない。オウム真理教においては――一方ではもちろん最終戦争後の理想社会が微弱には展望されているとは言え、それは「終末論」を表明することに対する一種のアリバイのようなものに過ぎず――無意識の内に真に欲望されているものは、世界を全的に否定する破局そのもの、つまり最終戦争ではないか、こう推測せざるをえないのである。希望をもって待たれていることは、終末後の秩序ではなく、終末へと至る全的な秩序破壊の過程なのだ。切通理作は、自動車で移動中、麻原師と一緒に『宇宙戦艦ヤマト』の主題歌を歌ったときのことを語るオウム真理教の出家信者の言葉を伝えている。このとき、麻原師は、「ヤマトは地球の命運を賭けた最後の船、自分たちみたいだなぁ」と言ったという。ここには、ハルマゲドンの到来を、わくわくしながら楽しげに待望している様子が、うかがえるではないか。

翻って考えてみると、終末論を唱える他の新々宗教においても、あるいはまた終末のヴィジョンを描く同時代のサブカルチャーにしても、オウム真理教ほどには明白ではないに

せよ、終末論が真に指向していることは、終末後の理想の秩序ではなく、むしろ逆に、世界そのものを終末へと導く破局ではないか、と問いたくなる。たとえば大友克洋の『アキラ』においては、アキラという名の少年の世界を破滅に導きかねない破壊的な超能力を封じ込めるために、そしてまたアキラの超能力を悪用しようとする者を滅ぼすために、主人公たちは戦っている。しかし、この戦争において主人公たちが賭けている積極的な理想や価値はほとんど何もなく――つまり主人公たちがどのような社会や共同性を実現しようとしているのかという構想は皆無に等しく――漫画は、ただ戦争の過程だけを活き活きと描くのである。つまるところ、アキラの爆発的な超能力による地球の破壊は防がれなくてはならないのかもしれないが、それに対置されるべき積極的な理念はまったく空虚であり、実際上は、アキラをめぐる攻防が、アキラの超能力が発揮したら実現したであろうような破局を、擬態してしまっているのだ。そうであるとすれば、この漫画が密かに――あるいはほとんどあからさまにというべきか――欲しているのは、理想化された共同的な秩序ではなく、戦争そのものであると言うべきであろう。

これに比べれば、いくぶん旧い『宇宙戦艦ヤマト』の場合には、守られるべき、あるいは実現されるべき積極的で気高い理想があるように見える。しかし、他方で、この作品は――あるいは同じ松本零士の作品で『ヤマト』と相補的な関係にある『宇宙海賊キャプテン・ハーロック』はより顕著に――まるで、人類が平和に過ごしていること自体を、悪いことであるかのように語るのである。平和（内的な葛藤をもたないこと）は、（理想の）社会秩序であることの、最小限の必要条件ではないか。平和を、精神の好ましからざる弛緩と結び付けるのであれば、戦争という破壊過程が、理想化されていると考えざるをえないことになろう。

われわれの仮説は、虚構の時代を支配する「虚構」を、極限にまで純化していった場合に、その「虚構」は、それ自身、「理想」として機能するようなものにまで反転していくのではないか、というものであった。しかし、虚構から反転してきた理想は、もともとあった理想――理想の時代の理想――とは、まったく異なったものになるらしい。それは、かつてだったら、どのような思想、イデオロギー、規範の下でも、決して理想化されえなかったような可能世界だからである。一般に、立脚する思想や規範が異なれば、異なった状態が理想として構想される。しかし、任意の理想において否定的に評価されるような、諸理想の間の最小限の合意がある。あるいは、そのように信じられていた。しかし、虚構から反転してきた理想は、通常のあらゆる理想が否定性の極値を割り振るような状態なのである。世界そのものの全的な否定、全的な破壊の過程が、理想として措定されているのだから。しかし、それにしても、虚構の時代の果てで、極端な否定のみが、理想たりえたのは、一体どうしてなのだろうか？

【3】 ボーヴォワールは、第二次世界大戦中に――したがってまだ「核兵器」の威力が現実化する前の段階で――次のように書いている。

「人類が消滅するであろうなどとわれわれが断言するのを、何ものといえども許しません。人おのおのは死にますが、人類は死ぬべきではないことをわれわれは知っています。」

真木悠介が、このボーヴォワールの言葉を、『時間の比較社会学』の冒頭で、近代社会の時間意識を代表するものとして分析している。この言葉が、特定の規範的な要請の下でしか発しえないものであるということは、「人類は死なない」という命題にいかなる実証的根拠もない――むしろやがて人類が死滅するだろうと予想する方が現実妥当性が高い――ことと

から、明らかであろう。真木は、ボーヴォワールにとって人類の不死ということは、カントにとっての「神の存在」や「霊魂の不死」のような、実践理性の要請になっている、と解説している。人類の不死がどうしても仮定されなくてはならなかったのはなぜか？

人類の不死を前提にしておかなくては、あらゆる思想、あらゆる実践、要するに人間の営みのすべてが、無意味化してしまうと、考えられているからである。このことは、われわれが、通常、行為の価値をどのように評価するか、ということを想い起こすと理解できる。行為が結果として――つまり未来において――何をもたらすことができるか、によって、われわれはその行為を評価するだろう。行為が、未来にもたらす状態の意味を、「目的」と呼ぶ。要するに、行為の価値は目的との相関によって、決定されるのである。しかし、その行為が未来にもたらす結果（目的）は妥当なものであろうか？　この妥当性は――行為を結果＝目的との相関によって評価するという態勢を維持する限りは――この第一段の結果がさらなる未来においてどのような結果（目的）をもたらしうるか、によって評価されるしかないだろう。もちろん、第二段の結果も、それが未来にもたらしうるさらなる結果（目的）によって評価されるしかない。このように、行為の価値がそれ自身に内在するのではなく、それが未来にもたらす結果によって決定されるとする態度を、真木は「時間への疎外」と呼ぶ。ともあれ、行為の価値を未来（目的）との相関で評価することが意味をもつためには、行為が準拠する単位が――つまり行為が誰（何）のためのものとして選択されているかというときに志向されている単位が――どのような未来においても同一性を保持し、永続していなくてはならない。ボーヴォワールは、そのような単位として「人類」を措定したのである。

準拠となる単位が、「人類」である必然性はない。それは、たとえば「個人」であってもかまわない。実際、「人おのおのは死にますが」という留保は、実存主義者ボーヴォワールの、本当は「人おのおの」の不死をこそ要請したい、という密かな欲望を示しているだろう。ただ、それでは、あまりにも不合理であると感じられたので、ボーヴォワールは、不死の要請を、「人類」という集合性の水準に求めたのであろう。たとえば、今日であれば、不死を想定する単位をさらに拡張し、「地球の生態系」の全体に求めることもできるだろう。

いずれにせよ、ここで確認しておきたいことは、次のことである。行為の価値を未来におけるその帰結において評定することが自明視されているわれわれの社会――真木の研究はそれが「近代社会」と呼ばれる社会類型に対応していることを明らかにした――の下では、ある単位が無限の未来にまで持続していることが、必須の前提となる。近代社会においては、政治も経済も思想も、無限の未来の存在を前提にして営まれているのだ。たとえば、経済的なコミュニケーション（売買）は、「企業おのおのは倒産するかもしれない」が、少なくとも、市場（コミュニケーションの連鎖）自身は永続することを前提にしてなされている。あるいは、思想の対立や論争は、いずれの思想が、人類の福祉に、したがって人類の存続に有利であるかによって、決着がつけられるだろう。どうせ人類が死滅してしまうのであれば、この思想があの思想よりも優っているという論拠を、失ってしまうように見える。

「理想」というものは、時間に対するこのような近代的態度――つまり営みの価値をその未来における結果において評価する態度――の中で、機能する。今し方見たように、行為の結果＝目的は、未来へと向けて連鎖していく。「理想」というのは、このような連鎖の終極に置かれる目的にほかならない。したがって、目的の連鎖の内部の他の諸目的は、「理想」のゆ

えに、正当化されるのである。

近代社会は、決して終わらない時間を要請せざるをえない。ところが、オウム真理教に即して検討してきた終末論は、徹底した終結が、つまり世界そのものの破壊が未来の特定時点に到来することを確実視し、(それに備えているという意味では)その終結を目的とさえしている。このような破局的な終末論は、近代的な時間の構成から見ればとてつもない倒錯であると、言わざるをえない。絶対の終わりを想定するこのような終末論は、近代的な時間——決して終わらない時間——のまったくの対極に、正反対の位置に置かれるのだ。

もちろん、厳密に言えば、オウムの終末論においても、生き延びる者が想定されている。選ばれた者たち、神仙民族が、最終戦争に勝ち抜き生き残るだろう。しかし、先に述べたことを再確認しておけば、生き延びた人々がどのような社会を建設するか、ということに関する具体的な内実は、非常に希薄である。重点は、明らかに、戦争そのものに、破壊の過程に置かれている。もちろん戦争を予想する以上、これに勝利する者を、そしてこの戦いに正統性を主張しうる者(神仙民族)を想定せざるをえない。言い換えれば、神仙民族の生存は、さしあたっては、究極の破局を予定したことの、論理的な随伴物に過ぎない。さらに言えば、戦争を特定の一群の人々の生存に指向させることは、議論を、近代的な時間の意識に寄生させるための方便であるかもしれないのだ。

われわれは、近代的な時間が永続的な未来を想定せざるをえない必然性を見ておいた。では現代のある種の新々宗教が、またサブカルチャーが未来の絶対的な断絶を求めなくてはならなかったのは、なぜだろうか?

4・無限の直進

【1】オウム真理教が提起してきたような破局的な終末論は、近代的な時間に対する完全な反措定である。しかし、それは、間違いなく、近代社会のただ中から、近代的な時間の転回として現れてきたに違いない。そうであるとすれば、われわれはここで、ごく簡単に、近代的な時間の存立を可能にしている仕組みを概観しておく必要があろう。このことから、近代的な時間が、そのすぐ脇に、自らと表裏をまったく逆転させてしまったような、対極的なタイプの時間についての感覚を生み出したのはなぜか、が明るみに出されるかもしれない。

近代の時間意識は——真木悠介が述べているように——二つの契機から構成されている。第一に、時間が帰無していく不可逆な流れである、ということ。したがって、時間は、直線あるいは線分によって表象される。第二に、時間の流れが、無限であること。時間は、過去や未来に——とりわけ未来に——いくらでも延長しうるものとして感覚されているのだ。このような二つの契機より成る近代的な時間が、どのような機制に媒介されて、成立しえたかを問わなくてはならない。

古代においては——原始的な共同体においても都市化された文明においても——時間を直線や線分として表象するよりも、反復や循環として表象する方が、圧倒的に主流であった。その中にあって、時間を、厳密に、直線(線分)として感覚するようになったのは、古代のユダヤ社会である。そして、原型的な近代、つまり西欧の近代は、明らかに、この古代ユダヤに起源をもつような精神的な伝統(ヘブライズム)の内から現れてくる。

古代ユダヤ教が、時間を不可逆な線分として描いたのは、そこにおいて、真正な終末論が完成したからである。ここで「真正な」と形容したのは、次のような意味である。広義の終末論であれば、ユダヤ教以外にも、たとえばバビロニアやアステカにも見出される。しかし、それらの終末論においては、終わりが同時に始

まりでもあるのだ。つまり、時間は循環するのであって、本当の終わりはここにはない。ユダヤ教においても、ブルトマン等によれば、その初期の思想は、循環する時間を念頭に置いている。始めと終わりが区別される真正な終末論は、後期ユダヤ教において、つまり『ダニエル書』などの黙示文学において現れる。真正な終末論においては、古い世界（現在）と新しい世界（未来）とを区別する終末は、一回起的であり、それゆえ時間は厳密に不可逆なものと見なされるのだ。

だがユダヤ教の終末論――もちろんこれがキリスト教に継承されていった――は、オウム真理教に代表される今日の新々宗教の終末論とは、根本的なところで、異なった様相を呈している。オウムの終末論は、破局の過程に、つまり世界を否定することに焦点をおいている。他方、ユダヤ教の終末論は、終末後の世界における救済にこそ関心の中心がある。両者を区別するために、オウム真理教型の終末論を「否定的終末論」、ユダヤ教のような古典的な終末論を「肯定的終末論」と、それぞれ呼び分けておこう。近代的な時間の起源に終末論（肯定的終末論）があったことを、まずは確認しておきたい。しかし、ここでは、終末が（そして創世が）想定されている以上、時間は無限ではありえない。（この現実世界の）時間は、有限長でなくてはならないのだ。近代の「絶対に終わらない時間」は、何らかの原因による、有限の「絶対に終わる時間」からの転換によって、生み出されたのである。

ユダヤ教において真正な終末論が確立されたことに関しては、ユダヤ民族が古代の先進的な大帝国に囲まれており、それらの大帝国に何度も迫害されたため、その歴史が民族的な規模の多くの苦難に彩られていた、ということが主要な原因となっているだろう。信仰の厚い者が、それにもかかわらずとりわけ不幸であるという事態は、ウェーバーが「苦難の神議論」と呼んだ神学上の難題を提起することになる。真木悠介が論じているように、現実＝現在の苦難は現実＝現在を否定する態度を産み、それは、未来にもたらされるはずの救済への希望によって補償されることで、耐えうるものへと変換されたに違いない。こうして、未来のある時点に、つまり終末の時点に、しかるべき者たちが――もはや逆戻りすることのないような形態において――救済される、とする終末論が帰結する。終末論の形成に特に与かった聖書中の重要な文章は、不幸なユダヤ民族の歴史の中でもとりわけ不幸な時期に成立している（ことばは、麻原師も予言の根拠の一つとしている『ヨハネ黙示録』は旧約ではなく新約の文献だが、これが書かれたのは、ローマ帝国のユダヤ民族への弾圧がとりわけ厳しく、エルサレムが陥落した時代に相当する）ということが、この推論を傍証するだろう。

もちろん、終末後の世界こそが、ユダヤ教を信仰する者にとって、究極の理想として想念され、それとの相関によって、現在と歴史に意味が付与された。この意味づけの奇妙な効果の一つは、苦難そのものが――未だに救済されていない（理想に到達していない）欠如の状態にあるということが――それ自身聖化され、逆説的に救済の確信を高めるように作用した、ということである。

【2】西欧中世のキリスト教世界は、後期ユダヤ教が生んだ（肯定的）終末論を受け継いだ。すなわち、西欧は、中世において初めて、キリスト教の影響で、時間の不可逆性＝直進性を確立するのである。一般の民衆の水準でこのような時間が受け入れられたのは、ほぼ紀元千年頃であったと推定されている。それ以前は、西欧においても、一般の人々にとっては、時間は円環するものだったのである。もちろん、西欧中世が確立した直進する時間は、終末論的な構成に規定された有限の時間であった。

したがって、われわれは今日もっているような「連続性」、「永続性」の観念は、中世人にとっては、馴染みのないものである。すなわち、時間の中を非常に長く――あるいは無限に――存在し続けるものという観念は、この段階には存在しない。「時間 tempus」は、可滅性、非持続性といったイメージと結合しており、連続性、永続性の反対語ですらあったのだ。教会は、時間の無限の長さを前提にするような発言を、公式に、「断罪された謬説」のリストに加えている。謬説とされたのは、たとえば、始まりの運動はない、消滅と生成は始まりも終わりもなく繰り返す、最初の人間も最後の人間も存在しない等々といった言明である。

このことは、決して、中世の人々が現世の儚さに悲嘆していた、ということを意味しているわけではない。そうではなく、始まりと終わりのある世界の拡がりが、彼らが具体的に身体をもって経験しうる範囲で、時間的にも空間的にもほぼ完結していたのである。その意味では、可滅的な時間内存在は、彼らのそれぞれの人生に即して、充実していただろう。

たとえば――ベネディクト・アンダーソンが指摘していることだが――中世の教会にあるレリーフや絵画が表現している「古代」や「起源」は、われわれの眼からみると、あまりにも「現代的＝同時代的」である。つまり「時代考証」がまったくなされていないように見えるのである。キリストの生誕を表す絵画の中で、聖母マリアは、一世紀のセム族の衣装を着ているのではなく、中世都市の商人の娘の典型的な衣装を身につけていたりするわけだ。このような表現が中世の礼拝者にとってまったく自然であったということは、彼らにとって、キリスト生誕や楽園追放や天地創造が、遥かな古代の出来事ではなく、彼らが具体的に経験したり、直接に伝え聞くことができる範囲を少しばかり外挿的に延長しさえすれば到達できる程度の過去であったことを意味する。時間的な深度が非常に浅いのである。

未来についても同じである。マルク・ブロックが述べているように、キリストの再臨は、もういつ訪れても不思議がない段階にあると考えられていた。世界の終末は、近いと実感されていたのだ。十二世紀の有名な年代記者、フライジング司教オットーは、「この世の終わりにめぐりあわせたわれわれ」という表現を繰り返し使っているという。ボーヴォワールが表明したような感覚は、西欧中世にとっては、縁遠いものであったことがわかる。

【3】だが、中世の大転換期に、つまり十二～十三世紀に、少なくとも、スコラ哲学に精通しているような知識人の水準では、時間意識に関しても大きな変化が生じた。時間に内在する連続性、永続性ということが有意味であると見なされるようになり、また、世界が時間的な始まりをもたない永遠のものであると理解してもキリスト教の教義と矛盾しないとすら考えられるようになったのである。時間の無限性への一歩が踏み出されたのだ。あるいは、少なくとも、各個人や共同体の直接の経験を遥かに越える時間の長さということについての想像力が芽生えたのである。問題は、何がこの転換をもたらしたのか、ということである。

少なくともキリスト教神学の領域では、時間意識の変容と並行していた二つの変化に注目しておかなくてはなるまい。第一に、アリストテレスの哲学が導入され、それがとりわけトマス・アクィナスによって消化されることで、人間の経験を越えた、神の絶対の〈超越性〉＝〈無限性〉が、厳密に確立したことが重要である（落合仁司著『トマス・アクィナスの言語ゲーム』参照）。もちろん、ユダヤ＝キリスト教にとっては、神は、もともと、人間の経験を通じて規定することができない、絶対的に〈超越（論）〉的な存在とされてはいた。しかし、

このことは、特に民衆的な想像力の中では、厳密には保持されてはいなかっただろう。神は、実質においては、人間の経験的な操作の及びうる〈内在〉的な存在者として扱われてきた。このような誤謬を撤去して、神の〈超越性〉を厳密に理論的に基礎づけたのは、とりわけアクィナスの功績である。

神の絶対の〈超越性〉が、神が創造した世界の時間的な無限性を基礎づける、という連関は、いかにもありそうなことに見えるかもしれない。しかし、神の絶対の〈超越性〉だけでは、まだ、決して時間に内在する永続という観念は帰結しない。今し方述べたように、中世において「時間 tempus」というカテゴリーは、可滅性を本性とする時間であった。これと対をなすカテゴリーは、「永遠 aeternitas」である。この「永遠」は、今問題している永続性と同じものではない。「永遠」が意味しているのは、無時間的な永遠性であり、それは、時間に完全に外在しているからだ。「時間」は、現世に〈内在〉するもの――つまり人間――の視点に対して現れる時間の様相である。それに対して、「永遠」は、現世を〈超越〉するもの――つまり神――の視点に相関している。〈超越性〉の理論的な整備は、さしあたって、「永遠」の水準の意味を厳密化するのみである。

したがって、中世の哲学が果たした第二の理論的な躍進とは、「時間」と「永遠」のどちらでもない、両者の中間に置かれるべきカテゴリーとして「永続 aevum」が導入されたことである。この革新の意義を強調したのは、カントーロヴィチである。

ところで、「時間」は人間の視点に、「永遠」は神の視点に、それぞれ相関しているのであった。非時間的な永遠ではなく、時間化された――あるいは時間に抗する――永続が概念化されうるためには、人間でも神でもない第三の視点が導入されなくてはならない。その第三の視点とは何か？　それは「天使」の視点なのだ。「永続 aevum」という三つ目のカテゴリーが成立できたのは、「神／人間」の単純な二項対立を越えた天使の概念が整備されたことの産物であった。天使とは、神と人間を媒介する存在者、〈超越〉と〈内在〉を往還する存在者にほかならない。天使の媒介的な視点を発見したことによって、終末論的な直進する時間に、永続性という性質が付加されたのだ。

【4】しかし、スコラ哲学のインパクトは、主要には、ラテン語を読む知識人の水準にのみ属している。中世後期のスコラ哲学が実現しようとしていたことが西欧において民衆的な水準で真に実質を獲得するのは、宗教改革以降のことであろう。

アクィナスの哲学が確認しようとしたことは、述べたように、神の〈超越性〉である。しかしそれは、さしあたって、理論や思弁の問題であった。ルター以降の宗教改革が果たしたことは、アクィナスが思弁の上でのみ確保した神の絶対的な〈超越性〉を、したがって逆にいえば人間の絶対的な従属性を、制度や実践においても実質的なものとし、それを一人一人の信徒の水準にまで一般化することであった。要するに、宗教改革とは、キリスト教の原理主義運動なのである。

ルターは、修道院的な秩序の価値を否定することを通じて宗教改革の端緒を開いた。修道院が否定されなくてはならないのは、修道院が、〈超越〉的＝彼岸的な価値を地上＝現実世界において具現する制度として受け取られてしまうからである。神が人間が経験しうる世界を絶対的に〈超越〉しているならば、特権的な何ものかがそれを経験的〈内在〉的＝世界の内に具現する、などということは決してありえないはずだ。つまり神＝〈超越性〉は、厳密に不可視の抽象的な実在でなくてはならない。ルターの修道院否定のモチーフはここにある。修道院の否定の結果は、しかし、修道院

の普遍化・世界化とでも呼ぶべきものである。ウェーバーは、こう言っている。「すでにセバスチャン・フランクは宗教改革の意義を明らかにしようとして、いまやすべてのキリスト者は生涯を通じて修道僧にならねばならない、と言っているが、これは宗教改革の性質の説明としてまことに核心を衝いたものである」と。

修道院に類する秩序を地上から排することは、〈超越〉的＝宗教的な目的＝理想を、直接に追求することの不可能性を結果するはずだ。〈超越性〉を具現する制度である修道院では、日常生活からの退却が是認され、行為が直接に宗教的な意味を帯びた――つまり救済に奉仕するとみなされた――だろう。しかし、このような制度を一掃すれば、宗教的な目的に直接貢献するような行為の場は失われてしまう。

ルターが先鞭を付けたこの方向を純粋化し、徹底させたのがカルヴァンである。カルヴァン派は、宗教上の究極の目的＝理想を、人間的な手段から完全に分離してしまう。宗教上の究極の目的＝理想とは、いうまでもなく、神による救済である。カルヴァンが唱えたのが有名な予定説である。予定説とは、誰が救済され、また誰が救済されないかは、つまり神の意志（神の選択）は既に決定されており、人間の行為はその神の意志にいささかも影響を与えることができない、というものである。たとえば、善行を積むことが因果応報的に救済に結びつく、と考えることはまったく拒否されるのだ。こうして、人間の一切の行為が、救済という最高の理想に貢献していると見なされる可能性が失われる。ところが、しかし、ウェーバーが熱烈に論じたことだが、救済と人間的な手段（日常の実践）のこうした完全な分離が、かえって、日常的な実践の全体を、宗教的な意味を帯びたものへと（つまり宗教的な手段へと）変換させることになったのだ。このような逆説的な帰結が生じたのはなぜだろうか？

とりあえずまず、究極の目的＝理想と人間的な手段との分離は、「目的／手段」図式の実効性を厳密に確保しようとしたことの結果である、ということを確認しておかなくてはならない。「目的／手段」図式が機能し続けるためには、先にボーヴォワールに言及しながら述べたように、常に、より遠方の未来に、後続の目的が設定され続けなくてはならない。さもなければ、未来のいずれかの時点で、目的と手段が直接に合致してしまう。そこではもはや、目的との相関において手段＝行為の価値を評価するという態勢が、すなわち「目的／手段」図式が機能しなくなる。それゆえ、「目的／手段」図式の実効性を厳密に確保するためには、究極の目的を、行為の経験的＝時間的な連鎖から離脱した、純粋に〈超越〉的な場所に設定するほかなくなる。その教義上の表現こそが、予定説なのである。だから、予定説における、目的（救済）と手段（人間の実践）の分離＝無関連化は――したがって「目的／手段」関係の破壊は――それ自身、「目的／手段」関係を恒常的に維持しようとしたことの結果なのだ。

このような構成の中から、初めて、時間の無限性が成立する。予定説も、もちろん、終末論（始めと終わりをもつ時間）である。しかし、究極の目的＝理想が、完全に〈超越〉的な場所に設定され、抽象化した結果、経験的な行為によって、目的に漸近する（救済の確率を高める）という構成自身が、無意味化してしまった。目的＝理想は設定されているが、行為をいかに積み重ねていっても、目的＝理想に到達することはない。要するに、終わりが設定されていながら、決して終わらないのである。このとき、経験的な世界に内属する者（人間）にとっては、時間は、無限の長さを有するものとして、実質的には現象することになるだろう。

以上の結果は――繰り返せば――神の絶対の〈超越性〉を、つまり人間の絶対の従属性を、厳密に確保したことの結果である。宗教改革

の産物である清教徒（ピューリタン）においてこの点がいかに徹底していたかということは、たとえば、ウィリアム・ペイドンの研究が示している。ペイドンは、四世紀後半から五世紀にかけて生きた修道僧ヨアネス・カシアヌスと十七世紀前半のニュー・イングランドの清教徒トマス・シェパードとを比較している。カシアヌスにとっても、傲慢は悪徳だが、数ある悪徳の一つにしかすぎない。それに対して、シェパードにとっては、人間がいささかなりとも救済のために何かをなしうると考えること自体が、根本的な過ちなのである。

プロテスタントが、神の〈超越性〉を厳密な意味で確保しようとして、神を抽象化したとき、その結果として、終末が、行為の経験的な因果連鎖の先端に、要するに此岸の世界に到来する可能性は、事実上否定されてしまう。その結果として、時間が無限化することになる。ここまで、このように論じてきた。しかし、誰もがここで疑問につきあたるだろう。

もし人間の行為が救済の可能性に何らの影響を与えることもないのだとすれば、予定説が人々を捉え、その行為を規定することは、およそ不可能なことではないか？　予定説に従えば、人間の行為は救済にまったく貢献しないのだから、結局、それは、人間の行為の形式をどのようにも方向づけることはできないはずだ。つまり、予定説は、救済の可能性を高めるものとして、つまり理想の実現の可能性が高まるものとして、特定の行為の形式を推奨することはできないだろう。そうであるとすれば、予定説を信じるということは、何も信じていないことと同じことに帰するのではないか？　言い換えれば予定説を信じるなどということは、不可能なのではないか？　予定説は、何ら人々に実効的な影響を与えることはできず、存在しないに等しいのではないか？

予定説が不可能な教義なのであれば、もちろん、それが時間の無限性を結果したという以上の議論も、すべて否定されなくてはならない。ところが、実際には、ウェーバーが論じているように、予定説は、人々の行為に絶大な効果をもたらしたのである。予定説は、なぜ機能しえたのだろうか？　このことに回答するためには、ここまでにはまだ論じていない、もう一つ別の要因を考慮に入れなくてはならない。別の要因とは何か？　先に、中世後期の神学が、二つの理論上の革新を導入した、と述べた。一つは、神の〈超越性〉（無限性）の定式化であり、もう一つは、天使の視点の導入である。宗教改革の意味についてのここまでの考察は、前者の契機が、プロテスタンティズムにおいて、いかに厳密に継受されたか、ということのみを論じてきた。付加されなくてはならない「もう一つの要因」とは、後者の契機に対応する働きを担った何かである。

5 最近の歴史研究によると、十六世紀後半から十七世紀にかけて、イギリスやニュー・イングランドの清教徒の間で、千年王国論が広く受け入れられ、大きな影響力をもったらしい。たとえば、イギリスの清教徒革命においては、千年王国論者が指導的な立場にあったことが、最近の研究でわかってきた。

千年王国論とは、本当の終末――つまり「神の国」の到来――の前に、この地上（経験的世界）に、千年間続く理想の王国が実現する、とする説である。だから、もちろん、これも終末論の一形態であることには間違いない。千年王国論は、一般に、千年王国の実現が非常に差し迫った近い将来であると予想する。千年王国の実現に先立って最終戦争が戦われ、反キリストが滅ぼされることになっている。最終戦争の後に地上に理想の王国「シャンバラ」を建設しようとするオウム真理教の終末論も、千年王国論的な体裁を取っていることがわかる。もっとも、何度も強調するように、オウム

の終末論は、千年王国そのものに対して積極的な明るい展望をもっていたとは必ずしも言えず、それに先立つ破壊の過程により大きな重点が置かれていたようにみえるのだが。

千年王国論は、通常、黙示文学、とりわけ『ヨハネ黙示録』の解釈から導かれる。しかし、すべてのキリスト教徒が、千年王国論者であったわけではない。というより、千年王国論は、一般的には異端的な教説である。たとえば、アウグスティヌスは、千年王国論者を「肉的な人々」として、つまり神よりも現世的な快楽に関心がある者として非難している。アウグスティヌスの見解は、中世カトリック教会に受け継がれた。宗教改革以後のプロテスタント諸派も、多くは千年王国論を拒否した。ルターもカルヴァンも千年王国論に否定的である。

前項で概観したような宗教改革の一般的な傾向を念頭においてみると、「肉的な人々」の教説とされている千年王国論が十七世紀の清教徒の間で流行したということは、たいへん不思議なことである。千年王国論は、現世利益への単純な願望に規定されているように見える。しかし、前項で論じておいたように、もともと、プロテスタントの運動は、現世的な目的を徹底して拒否するものであった。それは、行為の連鎖の先端に現れるような経験的な――つまり地上的な――事物を最終的な目標とすることを、徹底して拒否する運動だったのだ。そうであるとすれば、千年王国論は、宗教改革の方向性と真っ向から対立するように見えるのだ。それにもかかわらず、イギリスとニュー・イングランドの非常に優秀な清教徒が、今日の麻原彰晃師のように、差し迫った千年王国の到来を、具体的に予言してさえいるのである。十七世紀のニュー・イングランドの清教徒や、また清教徒革命の指導者を、不徹底なプロテスタントと見なすことはできない。むしろ、彼らこそ、最もラディカルなプロテスタントであったことは間違いない。そうであるとすれば、プロテスタントが志向していたことと千年王国論は、その外見に反して、本質的な親和性を有していると考えなくてはならないだろう。それは何か？

千年王国論とは、いわば終末を先取りしてしまうことである。そうすることで、終末へと向かう時間が、それ自身、終末論的に構成された時間の内部に、入れ子状に組み込まれることになるだろう。真の終末（最後の審判の日）は、はるかな彼方に――実質的には無限の彼方に――展望されている。他方、先取りされた、経験的な時間の内部に繰り込まれた終末（千年王国の到来）は、いつでも、非常に差し迫っている。この対照に注意しておこう。

【6】さて、ここで、懸案の問題、予定説が人々の行為を捉えることができたのはなぜかという問題を、考えてみよう。目的＝理想を追求する活動が意味をもつためには、当然のことながら、目的＝理想に未だに到達していない、ということが必要条件になる。しかし、「未だに到達しない」という構成が必然的で、原理的に克服されえないとすれば、目的や理想を追求することが、逆に無意味なものになってしまう。予定説を前にしてわれわれが困惑するのは、予定説が、まさにこのような場合に対応しているように見えるからである。それにもかかわらず、予定説がプロテスタントの心を捉え、彼らの行為に濃厚な宗教的色合い（ウェーバーが「世俗内禁欲」と呼んだもの）を与えるのは、そこで独特な視点の二重性が活用されているからである。

予定説によれば、神の選択は、（人間には）未知ではあるが、しかし、既になされてしまっている（つまり誰を救済するかは既に予定されている）。つまり神の意志は、一方では（人間にとっては）不確定だが、他方では（神自身にとっては）確定的なのである。プロテスタントの行為が宗教的な意味を帯び、方法的に合理化・

規律化を被るのは、彼らが、神の選択（意志）が現実化してしまっている、ということを前提にして行為を遂行するからである。すなわち、自分が救済されているだろうということを仮定してしまい、そこから因果関係を逆に辿るような推論を行い、救済されているほどの者であれば当然にそうするであろうと彼が予期するような行為を遂行するのである。

それゆえ、二つの視点の精妙な組み合わせによって予定説は実効性をもつのだ。二つの視点は、目的＝理想（救済）を規準にして、それぞれ、「（そこに）追いつかない視点」と「（そこを）追い越してしまった視点」として位置づけることができるだろう。一方には、目的（救済）に到達していない者の視点、つまり目的に「追いつかない視点」がある。しかし、神の〈超越性〉をあまりに厳格に確保してしまった予定説は、これだけでは機能しない。他方に、結果（救済）を見てしまった視点が、すなわち目的の時点を「追い越してしまった視点」が据えられているのである。もちろん、前者は人間の視点であり、後者は神の視点である。本来、神の視点に映ずるものは決して〈人間には〉開示されない。だが「追いつかない視点」にある者が、「追い越してしまった視点」を〈超越〉的な他者（神）に帰属するものとして確保し、予期することによって、さながら「追い越してしまった視点」に対して何が現れているかを知っているかのように振る舞うことができるのである。〈超越〉的な他者に帰属する「追い越してしまった視点」の内容は決して明示されてはならず（つまり誰が救済され、誰が救済されてはいないかは明示されてはならず）、潜在的なままに保持され、そのことによって、「追いつかない視点」にある者の「目的（理想）追求の行動」は有意味化されるわけだ。

予定説は、だから、人間の〈内在〉的な視点と神の〈超越〉的な視点とを〈人間が〉往復することによって維持されているのである。ここで、中世のスコラ哲学において、天使の視点が導入されたことによって、時間内的な「永続性」の観念が確立されたということを、あらためて想い起こしておこう。天使もまた、〈内在〉と〈超越〉の往復によって、すなわち〈被造物であるという意味では〉〈内在〉的な存在者でありながら〈超越〉的な場所に立ちうるということによって、定義されるのであった。

【7】だが、目的＝理想を「追い越してしまった視点」を採用しうる、ということは、その目的＝理想を無効化することにつながる（既に到達してしまっている目的＝理想を追求することはできないのだから）。したがって、神の〈超越性〉を――あるいは予定説を――維持し続けるためには、「追い越してしまった視点」をその度に「追いつかない視点」へと変換できなくてはならない。このような変換はいかにして可能か？　それは、目的＝理想を彼方＝未来へと置き換え、「追い越してしまった」地点を「未だに追いつかない」地点へと格下げすることによってのみ、果たされるだろう。このことから、プロテスタンティズムが千年王国論となぜ親和的であったのか、ということが理解可能なものとなる。

予定説にその完成形態を見るようなプロテスタントの時間の構成は、結局、次のような方法でしか厳密には維持できない。人はまず顕在的には常に目的＝理想に「追いつかない視点」に置かれていなくてはならない。だが、それを有意味なものにするためには、潜在的には、目的＝理想が実現される時点を「追い越してしまった視点」を先取りしなくてはならないのだ。つまり、潜在的には、目的＝理想が既に実現されてしまっていること（実現されることが確実であること）を、前提にしなくてはならない。しかし、「追い越してしまった視点」は、目的＝理想そのものを無効化してしまうだろう。それゆえ、直ちに、「追い越してしまっ

た視点」を「追いつかない視点」に変換するような彼方の目的＝理想が、再設定されなくてはならない。もちろん、この再設定された目的＝理想についても、同じ構成が反復される。

したがって、予定説は確かに時間を無限化するのだが、それは、常にその度に、目的＝理想をより先に再設定する操作が、無限に反復されるからなのである。究極の目的＝理想、すなわち（最後の審判のときの）救済は、反復的に置き換えられるこのような無限の目的＝理想を全体として積分したものである、ということができるだろう。他方、急迫しているものとして予言される千年王国は、廃棄されては再設定されていく目的＝理想の一つの様態なのである。千年王国という地上的な目的＝理想は、究極的な終末＝救済を言わば微分することによって得られるのである。このようにして、予定説的な終末論（積分）と千年王国論（微分）が互いに互いを支え合うようにして、共存するのだ。

このような時間の構成は、地平線への旅にたとえるとわかりやすいかもしれない。地平線は、限界づけられた目の前の目的として与えられる。しかし、その目的の地平線の位置に移動すると、その度に、地平線はさらに向こう側に退いてしまう。こうして、地平線への旅は無限の距離を歩む旅となる。この旅の中で、地平線は実はその都度置き換えられており、旅人は、いつも違う無限個の地平線（千年王国）を目指しているのだが、彼は、まるで唯一の――いわば大文字の――「地平線」というもの（最後の救済）を目指しているような印象を得ることになるのだ。

こうして、近代的な時間を構成する二つの契機――不可逆性（直線性）と無限性――が出揃う。次のように結論することができるだろう。近代の「決して終わらない時間」は、有限の時間を想定している肯定的終末論からの、つまり「必ず終わる時間」からの発展として生み出されたのだ、と。（肯定的）終末論は、最初は、時間を有限なものとして設定する。しかし、そこに伏在している原理を純化していった場合には、時間を無限化せざるをえないことになるのだ。こうして、われわれは、西欧のキリスト教の歴史をおおまかに辿りながら、近代的な時間を維持している内的な機制を剔出した。今や、長い回り道から本来の道へと戻り、間わなくてはならない。このような近代的な時間の内に、再び有限の時間が、つまり否定的終末論が結晶してきたのはなぜだろうか、と。

5・絶対の否定

【1】前節での考察から、次のような二つの結論を引き出すことができるだろう。第一に、〈超越〉的なものの存在こそが、目的の終極の形態である理想を実効的なものにする。たとえば、ユダヤ教の厳格な一神教的な構成の中で、逆戻りすることのない救済（理想の状態）の時へと一方向的に直進する時間が、はじめて基礎づけられたのである。〈超越性〉こそが、理想のまさに理想としての妥当性を構成するのだ。それゆえ、理想への時間の中では、人間は、規範的に要請されているもの（本来あるべきもの）の「欠如」として意味づけられることになる。このような「欠如」についての自己認知の過激な様相が、たとえば、ユダヤ人が民族的な規模で経験した「苦難」である。なお、ここで〈超越性〉と呼んだものは、（狭義の）神に限らない。詳しく論ずる余裕はないが、神と機能的に等価な働きをするさまざまな作用素が、社会的には存在しうるだろう。近代社会においては、たとえば「ネーション（国民）」が、あるいは「市民社会の理念」が、そのような作用素となりうる。そして〈超越性〉の最終的で集約的な形態は、（広義の）資本である。

第二に、〈超越性〉の原理が徹底され、純化された場合には、それによって担保される理想（究極の目的）を不断に置き換える反復が帰結する。置き換えは、理想＝目的を次々とより未来へと先送りするわけだが、このとき、以前の理想＝目的追求の行為は、より未来に設定された理想＝目的の追求過程に位置づけられ、その中であらためて意味を付与されることになる。このような不断の置き換えのゆえに、直進する時間が無限化するのであった。

さて、ここであらためて留意しなくてはならないことは次のことである。理想＝目的の置き換え運動は、〈超越性〉をまさに〈超越性〉として厳密に保持しようとした結果として出現するのだが、しかしそれにもかかわらず、やがてかえって〈超越性〉の存立可能性を脅かすこととなる。理想＝目的を置き換えていく反復は、いわば〈超越性〉を消耗していく過程でもあるのだ。この点を簡単に説明しておこう。

置き換えは、述べておいたように、目的＝理想に「追いつかない視点」と目的＝理想を「追い越してしまった視点」との緊張関係から生ずる。「追いつかない視点」に立つ者にとっては、〈超越者（神）〉の意志は、原理的に確定することができない。すなわち、彼または彼女が目的＝理想に到達しうるのか、目的＝理想へと向かう適切な過程の内にあるのか、究極的には決定することができない。「追い越してしまった視点」を潜在的に前提にするということは、こういった〈超越者〉の意志を先取りして確定してしまうことを意味する。しかし、その意志＝選択が十全には確定できないということは、〈超越者（超越性）〉の権能を構成する条件なのである。それゆえ、原理的に未確定であるべき〈超越者〉の意志を先取り的に確定してしまうことによって、〈超越者（超越性）〉は、事実上、廃棄されてしまう。たとえば、予定説の場合には、神の救済の意志は、人間には、いかようにしても知りえない。このような不可知性は、神が、〈超越性〉として人間に君臨することの証である。人間がそれをいささかでも知りえたり、また操作しうるとすれば、それは人間の傲慢であり、神の〈超越性〉は侵されるだろう。しかし、予定説に従う者は、まるで、神の意志を知っているかのように――つまり彼（女）の救済を既定された前提として――振る舞う。そうすることで、信者は、まったく自身の意図とは逆に、神の絶対的な〈超越性〉を浸食してしまうのである。

もちろん、一端〈超越性〉の権能が否定されたとしても、より遠方の理想＝目的が再設定され、「追い越してしまった視点」をあらためて「追いつかない視点」へと繰り込むような形態で、〈超越性〉が回復される。しかし、その度に〈超越性〉の権能を気がつかない内に否定してしまう――そして後でそのことに気がつく――という反復は、〈超越性〉の存在についての人々の現実性（リアリティ）を次第に希薄化し、消耗してしまうに違いない。だから理想＝目的がより包括的なものへと置き換えられるのに並行して、その背後で、理想＝目的というもの全般の効力を保証する〈超越性〉の機能が徐々に削減されていくのである。翻って考えてみれば、予定説の神は、〈超越性〉の合理化の極点にありながら、既に、その否定への決定的な一歩を踏み出してしまっている。神が提起する理想（救済）に人間的な実践がいささかも漸近できないとするならば、そのような神は人間にとって存在しないもほとんど同然なのだから。

【2】以上に確認した形式的な論理は、少なくとも、次のような諸事実を説明するだろう。ウェーバーの偉大な発見は、プロテスタントの宗教的な熱情が、まさにそれゆえに、資本主義の精神の発展に対して促進的な意義を担った、ということである。プロテスタントが果たしたことは、神の〈超越性〉の厳密化であった。それに対して、資本主義は、〈超越性〉を具現す

る社会的形象〈神〉をもたない、まったく世俗化された過程として現れる。ウェーバーの洞察が秀抜なのは、後者が前者の単純な否定や、前者への反動として登場したのではなく、まさに、前者の徹底化によってこそ現れ出た、ということを確認したことにある。このような逆説的な展開は、近代的な時間を支持する機制――理想を次々と置き換えていく反復――が、今述べたように〈超越性〉を次第に消耗させていく、ということを考慮に入れれば、説明がつくだろう。厳格な清教徒の直系の末裔として――ウェーバーがニーチェの言葉を借用しながら名付けた――「精神のない専門人、心情のない享楽人」が登場するのである。

こうして、ついには、〈超越性〉は、「神」のような自らを表象する積極的＝実定的な形象をもたない地点まで抽象化し、磨耗してしまうのである。近代の無限に直進する時間は、一見したところ「神」の実在に不関与に感じられる。だが、この外観に惑わされるべきではない。時間が、個体の生や共同体の具体的な関係性を越えて、抽象的に無限化していくには、強力な〈超越性〉の作用下にある終末論が前提になる。ただ、その終末論が純化されたとき、逆に終末論としては自己否定され、また〈超越性〉の積極的＝実定的な形象を還元してしまうのである。

同じ論理で、われわれが最初に確認した日本の戦後史の転換――「理想の時代」から「虚構の時代」への転換――の大枠を説明することができる。われわれが見たのは、「理想」が純化された場合に、やがてそれは自らを否定して「虚構」へと変容していく、という経緯であった。理想は、〈超越〉的なものの存在を前提にして機能する。〈超越性〉が、理想に、まさに理想たるに相応しい規範性を与えるのである。それゆえ、〈超越性〉が磨耗した場合には、現実（世界）の否定として提起されたヴィジョンは、人々を「欠如」として意味づけるような規範性を失ってしまうだろう。〈超越性〉の喪失は、同時に、何が本来の（あるべき）現実であるかを決する準拠の喪失でもある。そのような現実の規範的な様態は、設定されている究極の理想との相関で決定されるからである。それゆえ今や、現実の否定は、現実（世界）と等価的な可能世界として、つまりは「虚構」としてのみ提起されることになるだろう。

いわゆる「冷戦の終焉」を、〈超越性〉が還元されていく運動のきわめて現代的に顕著な現象形態の一つとして、挙げておく必要がある。冷戦は、それが意味する対立＝差異の構図を媒介にして、普遍的な妥当性がある（かのように見える）〈超越性〉を維持する機構であったと言えるだろう。たとえば、「ソ連」という否定的な項を有することができたからこそ、「アメリカ」が表象する「自由と民主主義」が、普遍的な説得力を有する〈超越〉的な理想として現象することができたのである。想い起こせば、戦後直後の「進歩」派知識人の最初の「理想」は、1節で述べたように、冷戦の対立に対応するものであった。しかし、対立が還元されてしまったとき、「自由と民主主義」は具体的には何を意味しているのか――言い換えれば何を否定しているのか――定かではない空虚な理想に堕してしまう。冷戦の終焉は、つまり、対立＝差異を通じて屹立することができた〈超越性〉を、最終的に解消してしまったのだ。そして、オウム真理教が生まれ、そして拡大していく過程は、まさしく、ソ連や東欧諸国の破綻が明確になり、冷戦の東西対立が無効化していく段階であったことを想い起こしておく必要がある（私が直接に知り合うことができたある元出家信者は、実際、冷戦の崩壊にともなう敵＝対立の不可視化が、オウムの世界観に影響を与えたとの推測を、手紙を通じて私に示唆してくれた）。

【3】オウム真理教の「諜報省」のトップである井上嘉浩（アーナンダ）が中学三年生のとき

に書いた童話に、次のような文章があるという（切通理作による）。

「時間に追いかけられて／歩き回る一日が終わると／すぐ、つぎの朝／日の出とともに／逃げだせない、人の渦がやってくる」
「救われないぜ／これがおれたちの明日ならば／逃げ出したいぜ／このきたない人波の群れから／夜行列車にのって」

ここには、日常生活から脱出したいとする願望が表現されている。しかし、そのような脱出を動機づける、具体的な内実をもった不幸や苦痛が描かれているわけではない。ただ、「時間に追いかけられて」いる一日とか、反復される日常性の一般（「すぐ、次の朝」）これがおれたちの明日ならば」）が、そこから脱出すべき場所として、指示されるのみである。具体的にどのような生の形態であれば、逃げ出したくないのか？　詩のこのような表現が意味しているのは、この人物は、どのような内容の生を営んだとしても、そこから逃げ出したいに違いない、ということである。たとえそれが、「成功」や「幸福」として意味づけられるような状態であったとしても、同じことである。そこでは、生の時間的持続そのものが、拒否されてしまっているからである。

近代的な時間を成り立たせている仕組みが、前項までに述べてきたようなものであるとすれば、それは、生全般の意味を無化していくような構造をもっていることがわかる。その論理的な構造は、次のように整理できる。(1)先にも述べたように、近代的な時間意識の下では、生に意味を備給するのは、未来に設定された理想である。しかし、どのような理想であっても、それが何らかの実質的・積極的な内容を有する限り、より未来に置かれた包括的な理想の中で相対化されざるをえない。理想の置き換えが生ずるのである。置き換えが必然であるのは、理想を設定すること自身が、「追いつかない視点」と「追い越してしまった視点」の二重化を強いるからだ。(2)この視点の二重性は、理想の置き換えと並行して、理想の固有の価値を保証していた〈超越性〉を廃棄しまた再構成する機制を発動する。この〈超越性〉を廃棄・再構成することを通じて〈超越性〉の権威はいくぶんか減殺されざるをえない。(3)同じことは再設定された理想に対しても反復されるだろう。だから、その度に〈超越性〉はその権威を逓減させていかざるをえず、したがって、それによって担保されていた「理想」は、実効的に人々を魅惑する力を失っていくことになろう。

結局、どのような理想もその度により本源的であると見なされた理想へと置き換えられるが、そのような置き換えを通じて、理想の魅力は次第に小さくならざるをえないのだ。それゆえ、生の意味が理想を準拠にして与えられている限り、その意味の密度は次第に低下していくことになる。このような機制が、近代的な時間そのものの構造の内に孕まれているのである。

もともと、近代の「終わらない時間」は、「目的／手段」図式の中で生の意味をより厳密に確保しようとする衝動から生み出されている。時間が無限化する場合にのみ、「目的／手段」図式の完全な有効性が保証されるのであり、その破綻から守られているのだ。ところが、こうして必然化した「終わらない時間」もまた、生の意味を奪ってしまう。

生の意味が空虚化してしまう理由は、生を囲い込む時間の形式的な構造の内にある。したがって、生のどのような具体的な内実によっても、奪われてしまった意味を再獲得することはできない。生が、たとえどのような行為によって満たされていようとも、その行為は総体として空疎であり、そこに望ましいと実感しうる生の秩序は回復されない。先の井上

嘉浩の文章の直前に、切通理作は、次のような女性出家信徒の言葉を引用している。

「現世で生きてても、なにをやっても楽しくないんです。旅行とかも、友達が楽しいっていう場所に、実際に自分が行くと楽しくないんです。」

【4】しかし、このような生の意味を空虚化する運動に抗して〈超越性〉の権能を回復する方法が、ただ一つだけある。既に見てきたように、どのような積極的な内容を有する理想を設定することも、〈超越性〉を磨耗するこの運動に対する対抗策とはなりえない。逆に言えば、任意の理想が排除し、否定せざるをえないことだけを内容とするような理想を設定する場合だけは、生の意味の空虚化に対抗することができるはずだ。任意の理想から排除されている行為とは何か？　それは――第3節で述べたように――〈現実〉世界の全的な否定、〈現実〉世界そのものの殺害である。

世界の全的な否定を理想として設定した場合にのみ、その否定の営みの反作用として、消耗されることのない〈超越性〉が、かろうじて回帰してくる。積極的＝建設的な理想は、より一般的な理想の中で相対化されるのを、避けることができない。だから、そのような理想は、それ自身としての直接の正統性を帯びることはなく（包括的な理想の内部で位置づけられてのみ、正当化されるのだから）、その価値を保証する〈超越性〉の権威も相対的なものとして立ち現われる。しかし、微塵も積極的＝建設的な志向性をもたない理想は、このような相対化の操作に決して捉えられない。それゆえ、世界の――部分的ではない――全的な否定を一個の理想として選択することは、他の理想に準拠することなく（他の理想によって二次的に意味づけられることなく）、それ自体として正統なものとして立ち現れるほかない。他に依存することなく、それ自身として正統であるような選択をなしうるもの、それこそが、定義上、〈超越性〉と呼びうるものであろう。こうして、全的な否定の操作の帰属点として、〈超越性〉が回復されるのだ。全的な否定を究極の理想として設定することは、〈超越性〉の効力を徐々に削減していく近代的な時間の中にあって、〈超越性〉を絶対的に回復する唯一の奇策である。

オウム真理教が奉ずる否定的な終末論が採用したのは、まさしくこの奇策である。それは、世界のこのような全的な否定を理想として掲げることによって構成されるのだ。この場合、世界を否定する瞬間は、つまり最終戦争は、十分に近接した未来に、しかも絶対的に確定されている時点として想定されなくてはならない。たとえば、世界の破滅のときが、ただ未来に漠然と想定されているだけであれば、それは、いつまでも未来へと先送りすることができるから、その効果は無化されてしまうだろう。世界の殺害を想定することが〈超越性〉を再設定する効果は、その世界が殺害される瞬間が現在に近接しているほど、そして確定的であるほど大きくなるはずだ。実際、ときを経るにつれて、麻原師は終末を、確定的なものとして、そしてまた現在に近いものとして、予言するようになっていく。

それゆえ、この生を含む世界の絶対的な否定を確定的なものとして想定することによってのみ、逆説的に、（現在の）生の内容に積極的＝建設的な意味が回復することになる。諸理想、諸目的の妥当性を構成する〈超越性〉が、全的な否定の反作用として設定されることになるからだ。根本的な破壊ということを前提にしてのみ、生を構成する諸行為の間に望ましい秩序が樹立されるのである。かつては、神の様々な営為の中で最も重要なことは、世界の創造にあった。しかし、現代では、神になりうるのは、世界を決然と破壊する者のみである。オウム真理教の主神がシヴァ神でなく

てはならない必然性はここにある。今度の事件をきっかけに脱会したある元信者によると――彼は教団の中でもトップ・クラスの仏教の知識をもっていたと思われる――、麻原師は、シヴァ神がまさに破壊神であるがゆえに創造神であると唱えることによって、「破壊」そのものを「救済」として提示しようとしていたように見えるのだ。

以上のような理由から、生の名状し難い空虚に苛まれていた若者が、否定的な終末論を掲げるオウム真理教に入信することによって救われるのである。かつての旧新宗教への入信者の場合のように、その生の中に、入信へと信者を追いやった明確な不幸や苦難を探り当てようとしても、まったく徒労に終わるだろう。そもそも、生のどこにもめりはりのきいた不幸や苦難がないということ、つまり〈理想状態に対する〉「欠如」がどこにもないということ、このことが、オウムへと参加する選択を規定しているのだ。もちろん、後から、ちょっとした理由が入信の口実として申し立てられることもある。しかし、その口実は、ほとんどの場合、一つの生（現世の生）の全体をかなぐり捨て、別の生（出家）を選ばせるには、あまりに些細なことである。まして、世界そのものを殺害するに足るほどの「恨み」を構成することはない。問題なのは、生の内部に散りばめられた個々の事情ではなく、生を全体として枠づける時間的な特性なのだ。しかし、このような特性は、生そのものの前提なので、誰にとっても、対自化することは非常に難しい。それゆえ、しばしば、信者は、入信動機を説明せざるをえないとき、最後の決心のきっかけになったに過ぎない瑣末な事情を、「理由（口実）」として申し立てることになるわけだ。しかし、これに惑わされてはならない。

オウム真理教が代表するような否定的終末論は、次のような弁証法的な過程の最終産物として、結実する。もともと、有限な時間を想定する肯定的終末論がある。このような時間の構成を発展的に否定するものとして、近代の無限の時間が現れる。そして、この無限の時間の否定的な相関物として、否定的終末論が編み出されることになる。だから、否定的終末論は、もともとの終末論の「否定の否定」である。この弁証法的な過程を経由することによって、終末の像は、肯定的な救済に重点があるヴィジョンから、否定的な破局（戦争）に重点があるヴィジョンへと裏返ってしまう。

今や、一端「虚構」の領域へと解き放たれた「理想」が、世界の全的な否定という形式で回帰してくる理由が、理解しうるものになっただろう。理想の純化した形態が、虚構へと近接することを知ったときにわれわれが得ることができる哲学的な教訓は――理想はもともと現実世界と地続きなものと見なされうる可能世界であったから――現実が虚構に依存して秩序化されている、ということだった。しかし、虚構の領域へと溶け込んでいった理想は、現実世界へと回帰してくる。ただし、回帰してくる理想は、驚くべき反転を被っている。それは、ただ、全的な破壊という否定的な形式でのみ――つまりいかなる構成的な帰結ももたないような形式でのみ――現実に関与しているからである。ここからわれわれが得る哲学的な教訓は、こうであろう。虚構は、否定的な形式において、現実に依存するほかない、と。現実を全的に否定する力を想定することで確保される〈超越性〉によってのみ、虚構（可能世界）の有意味性（魅力）が確保されるからである。

だが、それにしても、このような絶対的な否定に人が魅惑されるのを避けるには、どうしたらよいのだろうか。おそらく、人は、近代的な時間が宿命づけているような生の過激な空虚化から、決して逃れるべきではないのだ。破壊の神の力を凌駕する深遠な空虚をこそ、むしろ積極的に欲しなくてはならない。

オウムとサリンとはりぼて

白川昌生

しらかわ・よしお：一九四八年北九州市戸畑生まれ。一九七〇年九州産業大学芸術学部中退。一九八一年デュッセルドルフ美術大学卒業。一九九四年「日本人ですか」佐賀町エキジビットスペース、北関東造形美術館にて発表。個展多

1

一九九五年十一月早朝、一台のトラックが東京の中心をめざして走っていた。多くの人々が、まだ眠りについている都会には、朝もやがたちこめていた。改造された車の後部には、高級革製の椅子に身を沈めた村井が、コンピュータ端末をたたいていた。アルミ製の荷台の屋根からは、白い霧状のサリンが噴出し、朝もやの中に広がって行った。同じ頃、都心の阿佐谷自衛隊基地の真上に一台のソ連製ヘリコプターが現われ、サリンの入ったドラム缶が司令部の屋根をめがけて投下された。警視庁も、サリン攻撃を受け全滅状態であった。同日に、国内の主要都市、そして韓国、台湾、アメリカ、ロシア、ドイツでも同様のゲリラ、テロ攻撃が始まった。大混乱の中、まず中国が台湾へ上陸、北朝鮮が韓国へ進入、北海道へは極東ロシア軍が上陸、それに対抗してアメリカ軍が北海道に進軍、ロシア軍と交戦状態に入り…このようにして十一月に、麻原が予言していた人類最終戦争、ハルマゲドンが成就する。というのが、

日本の公安当局が見つけた「早川ノート」をもとに予想された「十一月戦争」の粗筋である。もっともこの先には、皇居はレーザー兵器で破壊され、麻原が天皇にかわって神聖法皇となって即位。オウム教を国教とした神聖社会主義体制の国家が発生するが、そのための憲法もすでに出来上がっていたらしい。

＊

七〇年代の終わりに、少数のグループではじまった「オウム神仙の会」が、九〇年代に国家解体のクーデターを実行するまでに巨大化し、力を持って変貌してきた活動は、サリン事件によってその頂点に達した。すでに、マスメディアを通じてさまざまな人が「オタクの反乱」「アニメ世代の逆襲」とか「無宗教教育の失敗」などなどと、これまで多くの論評や、対談が発表されている。

今年が戦後五〇年の年にあたることから、この事件が今日までの日本社会を——近代化の歴史それ自体を——総括するような象徴的事件であることは、否定できない。日本の社会の表層をぶちやぶって、内部からマグマ状になった反社会的、超社会的意志が姿を現わしたのだ。高度消費社会、また高度情報化社会体制の日本で、不満や不安がこれほど過激な実体となって現われることなど誰れも考えていなかっただろう。戦後五〇年という、高度経済成長を成しとげ、政治的発言力も身につけいよいよ「世界へ」と日本がのり出そうというときに、もうひとつの分身が一足先に「世界へ」とび出してしまったのだ。エイリアンを自らの内で育てあげてきていたことなど、日本人の誰れも知らなかった。戦後の貧しさから出発して、手に入れた平和と繁栄の五〇年が、関西の大地震と、東京のサリンによって一瞬にして破壊されてしまったのだ。この五〇年は、一体何だったのか。どこへ、私達は行こうとしていたのだろうか。近代の終焉がよく語られたが、地震とサリンによって、日本の近代の終焉が現実のものになった感がある。国際的場所で日本の姿が、世界の目にうつる今日的な状況で、近代の優等生であった者が、突然反社会的存在になるという——まるで第二次大戦直前の日本のような姿——離れ業をやってみせたことも、終焉を暗示していないだろうか。働きものの模範生は、実は他人に言えないさまざまな欲求不満と、成功しなければならないために自らを抑圧し続

ける不自然な生活をすごす中で、頭も体もおかしくなってきていたのだ。宮崎君も、佐川君も一見は、真面目な一般人で、ごく平凡なタイプの日本人なのだ。しかし、こういう平凡な人だからこそ、突然離れ業をやってしまうこともあるのだ。

何一つ欲望を持たないで生活を送ること自体が、おかしくないだろうか。あるいは、それほど健康で、健全な生活が今の日本には満ち満ちていると言えるだろうか。二十四時間仕事をしているコンビニエンス・ストアーというものは「便利」という名の「狂気」ではないだろうか。私達の生活は、どこかで何かがおかしくなってはいないだろうか。それともこれが普通で、健全な生活なのだろうか。戦後五〇年の到達点として、サリンとコンビニエンス・ストアーが無差別に、無時間で、日本中のどこにでも存在する豊さを、私達は心から喜べばいい。

ところで、私はオウムと日本の前衛美術について書けと言われたのだが、サリンとコンビニエンス・ストアーの明るさと、軽さと、効率の良さ、に今さらと言う気がしてきた。美術など、前衛など糞くらえだ。心から、この近代の生んだ二大消費形成物を喜ぼう。いくら、恐がったところで「便利さ」によって洗脳された私達の生活は、けっして前にはもどらないのだ。だからこそ、進む先にはハルマゲドンがあるし、近代の終焉という言葉も出てくるのだ。無意識にせよ、私達自身がどこかでこの今の生活にうんざりして、おさらばしたいと思ったりすることがあるのは事実なのだ、ということを見つめてから出発するしかない。さもないと、第二、第三の麻原が出てきてもおかしくない世の中である。ちがうだろうか。一九六〇年代には、二十四時間体制で動いていた工場もあったが、今や週休二日制で労働時間は短くなっている。その反対に、二十四時間の消費生活とマネーゲームが九〇年の今、起こっている。「コンピュータ、お前も少し疲れろよ」という川柳があるが、社会全体の蓄積疲労が、オウムという形で現われたと見ることもできるだろう。疲れを知らない人間はいないように、疲れを知らない社会もないだろう。もし、疲れを知らない社会があるとしたら、自らの破滅を、その社会は知らないでむかえるだろう。一瞬にして機械が壊れるように、一瞬にして破滅する社会というのもいいかも知れない。

2

関西大震災復興、信用金庫をめぐるスキャンダル、東京都知事選、円高と国際金融危機、経済構造の大改革、不況、対アジア戦争責任問題などなど、山積みの難問が一般の生活を重苦しくさせている。構造改革が、経済界でも、政治界、教育界、スポーツ界とあらゆるところで叫ばれながら現実には、改革らしきものは起こっていない。こういう不条理な中、オウム事件の異常さは破滅的であったが、その一方で非日常世界のカタルシス的な体験を人々に与えたと言える。九五年三月二〇日の地下鉄サリン事件発生から、同月二十二日上九一色村への警察機動隊の導入以来、はじまった二十四時間体制のテレビ報道を、ほとんどの国民が毎日見ていたのではあるまいか。オウム事件が他の人気番組を食ってしまい、オウムで明けて、オウムで暮れるという毎日であった。

確かに、毒ガスサリンを地下鉄で使用したこの事件は、これまで存在しなかった種類の無差別テロを覚醒、実行したことで世界を震憾させた。終わりなきアナーキーなテロの道を市民生活の中に開いたのだ。小説の中でしか存在しなかった犯罪が、一線を超えて市民生活の中に出現してしまったことは、ある宗教団体にとって日常生活が戦争の場になったという倒錯的判断が存在したからなのだ。彼等にとっての現実は、戦争がまず存在し、勝利のあとから始まるのであって今日の日常生活はすべて仮想のものでしかないという意識があったのだ。この仮想性に気付かない一般人に対しサリンは、覚醒剤として使用されたがそれは「死」において覚醒するものであった。この一方的テロ活動に、世界は驚き恐れたのだ。しかし、明治以来、これまで日本の宗教界や思想界が、夢見ても実現できなかった「世界性」を一瞬にして、オウムが獲得してしまったという逆説が成立していたのだ。宗教教義ではなく、サリンによって「世界性」を持った宗教の例は他にあるまい。麻原は、いずれオウムは「世界宗教」に

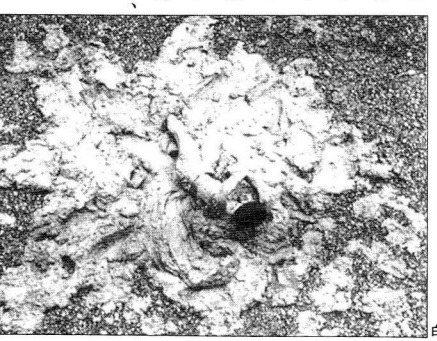
ハイレッドセンター「首都圏清掃整理促進運動」(1964) より

なれるのだ、と公言していたが、まさにサリンによって宗教史上、そして犯罪史上その名を残すことになった事実を、どう考えればいいだろう。私達は、オウムのテロ行為を認めることはできない。しかし、民族、国家という名の下で世界性を得るため暴力、戦争が聖戦として正当化されている歴史的事実はどうだろう。たとえば、日本という近代国家が世界に登場してその地位を獲得してきた今日までの基礎に「戦争」という過程を無視はできない。また、「世界宗教」とよばれている宗教も、深遠な教義と、献身的な愛の実践と、光に満ちた神秘体験と同じくらいに、人の血の流れた殺戮の歴史を持っていることも無視できないだろう。「聖なる狂気」は、血まみれの手を真理の名で、聖化してしまうこともあるのだ。理性だけで信仰に至ることはできないし、また国家とか、民族とか、教団とか、結社、企業といった組織を、理性的なレベルから出発して創造したことがあっただろうか。純粋な討議や話し合いによって国が誕生したり、独立したことはあっただろうか。創造への高揚した状況の中に、暴力、野心、狂信などはないのだろうか。「聖なる狂気」は、超越的であるにしても、この地上に両足をつけて生活する限り、自らの正当性を他人なしには証明などできない。その証明は、いつも事後的になされるだけである。超越者と本人との関係ではなく、本人と他者の関係こそが「聖なる」という称号を与えるのだ。このことは、狂気を知らない人々との共犯関係の中で成立するということである。この共犯意識が流れていればこそ、あれほど多くの人々がオウム報道にのめりこみ、恐れと混乱と驚きの中、上九一色村の施設へ記念写真をとりに出かけた人々の生気に満ちた表情の真意が理解されるのだ。「世界性」を得るということは、こうした共犯関係をいかに作り、いかに拡大化してゆくかにかかわっており、「善悪の彼岸」に立ってみせるというポーズが、不可欠になる。麻原が、オウムの世界性を強調し、それを強く求める中に暴力、テロ、犯罪を内包して行った必然性は、世界性への野心自体が生み出したものなのだ。「善悪の彼岸」に立って、坂本一家を殺害したり、サリンやＬＳＤの製造を行なったり、内部の信者をポア（殺害）し電子レンジで焼いたり等々の行動がなされたのだ。すべては、ハルマゲドンを越えて手に入

れられる予定になっていた「世界性」に向かってである。ともあれ、私達は思想や宗教や、イデオロギーが「世界性」を獲得してゆく過程で不可避的に所有してしまう矛盾と限界と変質のアポリアについて、無自覚であることはできないと思う。暴力と血と破壊によって「世界性」が、手に入ると考えるのは間違っているが、日本が朝鮮へ、そして中国、東南アジアへ侵略した歴史の示す「世界性」への欲望をみてゆく時、オウムの世界へ向かってゆくその執拗な姿勢に日本が育ててきた、官僚出世主義と幻想的な国際主義の結末を見た気がした。ここでも、ひとつの終焉が問われているのだ。同様に近代日本の中で求め続けられてきた「世界性」への欲望の中にいかなる「理念」があったのか、誰れも知らない。地震とサリンによって裸になってしまった日本は、自らの脆弱な理念性を「都市」においてもさらけ出した。オウムはそうした脆弱な理念が、頼りにならないことを知っていたために「宗教」と「科学」とを、お金と身体の力で結びつけようとしたのだった。そして、脆弱な理念を生み出す頭脳は、ヘッドギアをつけて管理、強化し、すでにそれらを生み出した政府、官僚体制を全破壊しようとしたのだ。戦争機械へと自らが変身することで、真理への戦士となって世のため、人のために働けると考えたことが彼らを一層過激にしたのだ。しかし過激になればなるほど、彼らは現実を見失い自らの破滅を妄想しはじめたのだ。

3

ところで美術や前衛など糞くらえと書いてしまったが、いくつかの点でオウムとこれらには共振する所があることを書いておこう。そのあとで美術に関係している私が、もっとも興味を引かれたことも書こうと思う。地下鉄サリン事件は、一九六〇年代に前衛美術作家集団のハイレッドセンターが山手線で行なった「事件」や、銀座通りでの「首都圏清掃整理促進運動」、また「シェルター計画」



白髪一雄「泥にいどむ」第1回具体美術展（1955）より

等々のハプニングが予感していた、一種犯罪的想像力をくすぐる撹乱的世界と結びついているのではないか、と私は勝手な妄想をふくらませていた。また、ふんどし姿に汗を流して組み立てあげた、工業廃物の構成によるテクノクラート的門灯は、一九二〇年代からタイムスリップをして第七サティアンの内部とつながっているのではないか、また、泥の中でもだえるパンツ姿や、ハトロン紙をぶちやぶってきてメガネをふきとばした姿は、これまた一九五〇年代をこえて、水槽タンクで水中クンバカをやっているオウム信者や、空中飛行を行なうためムーラ・バンダを実践してはねあがろうとする信者の姿と共振していないだろうか。なぜか、一九二〇年代から三〇年、一九五五年から六〇年という時代に出現した日本の前衛美術運動の活動が、各時代時代において見せていった断片が、オウムの活動や、その想像力において共通のものがあるというのは、興味あるところである。これらすべてのものが、「都市」へ向って照準が合わされていたことも同じである。美術の運動からみてくると、なぜかほぼ三十年周期の形をとっている上に、二〇年代、六〇年代とそれぞれ美術が「世界性」の意識に目覚めていた時期とも重なる。しかし、一九八〇年代に、ポスト・モダンという視点から「前衛」が、批判、解体されて以来、「前衛」とよばれる動きも、意識も美術から消えたと言える。そのため、三〇年、六〇年、そして九〇年とくる周期に対応する動きが、美術ではどうも見つけられない。むしろ、オウムの反社会的活動や発想においてかつての「前衛」とよばれていたものが、水脈としてつながっていったのではないかと考えられるのだ。少なくとも、八〇年代から九〇年のフォーマリズム的な作品、概念的作品、その他多様な表現形式においても、美術はその吸収力、破壊力、批判力、表現力において強さを失っていったようにみえる。アイロニーにあふれ、ゲーム感覚で、軽く、楽しく、カラフルなそれらはオウムの持っていたアナーキーさ、エネルギッシュさ、狂気さ、実行力、犯罪的想像力の点などでも劣っていた。お利口さんになった若者は、市場の動きにもすばやく対応し、「前衛」的手法はサクセスのための手段として使うことも知っている。「前衛」の抱いていた夢も、野心もこの時代には無関係のものになっている。かえ

って、カルト宗教団体のオウムの中に、世界性への夢、テクノロジーへの偏愛、身体性の露出、大衆へのコミット、犯罪や暴力やタブーへの接近的イメージ、現状の変革への夢など共通のものが見い出せるというのも、おかしなことである。確かに、九〇年代の美術は、イベント、インスタレーション、メディアと多様化し、先鋭化してはいるのだが、狂気と凶暴性はなくなり、知的で、お利口な良い子の集まりになっていることが、がっかりさせる。二〇年代、六〇年代の前衛活動には野生的な臭いが、体臭があったのだが、今日のイベントはハイテクノロジーによってクールに制御されている。テクノロジーによって非日常的世界を体験するというイベントもあるが、それならＬＳＤを飲んだ方が、はやいしハイにもなれるのに、そうしないというのは犯罪にかかわり合いたくないからなのだろうか。まだまだ幼稚なレベルの、ヴァーチャルリアリティの世界では、人間の想像力や知覚の方がテクノロジーより走ってしまい落差が残るだけではないだろうか。お利口さんは、犯罪には手を染めないで美術をやって、表現の

（上）第１回ネオ・ダダ・オルガナイザーズ展
オープニング・パフォーマンス（1960）
（下）地下鉄サリン事件（1995）

自由なるものを獲得しようという気持ちでいるのだろうか。麻原にあれだけの人間が魅力を感じてついて行った理由のひとつが、麻原のあの不潔さと野性だということは、心にとめておこう。いくら、コンピュータがブラウン管でがんばってみても、臭い大便は出せまい。お利口さんに似合うのは、オーデコロンであっても、数ヵ年も髪を洗わないで臭ってくる、不潔な動物的異臭ではない。村井はコンピュータと大便の両方に魅力を感じたから、解脱する決心がついたのだろう。今日の子供達は、水洗便所になれているから、自分の落とした大便の形、姿も見ない内に、水に流してしまうし、寄生虫にやられることもない近代的生活にいる彼らは、自分の大便からサナダ虫が出てきた時のショックを味合うこともないだろう。清潔で、無臭で、快いものにかこまれて生きてきた若者が、自然やアウト・ドアに出て行ったところで、とことんの野性に出会い、また気付くことは少ないだろう。超能力とよんでいる世界は、若者にとって空中をとぶことではなく、毎日を生き生きと新鮮におくれる活力を、自らの野性にめざめることを目標にしているのだと思う。「身体」とよばれるものは、そういう生体エネルギーにあふれた意志ある肉体のことを言うとしたら、今日の美術のイベントは死体ばかりである。

4

八〇年代に、ポスト・モダンの立場から「前衛は終わった」「前衛はスローガンだけであった」などという批判が行なわれた。また「大きな物語」の終焉が言われ、かわって「小さな日記」が中心になるとされた。「前衛」もその働きではなく、形態と方法が消費市場にとりこまれ使いすてられることになった。こうした状況の中で、オウムは逆に過激になり、現実の中で「善悪の彼岸」からゲリラ的行動を行い、日常生活の中に彼岸の姿勢を打ちたてようとした。この行動は、ポスト・モダン的な前衛批判には正面から対立するものであった。「小さな日記」が中心になってゆくという現状認識は一面的でしかなく、多くの人々の心には、ある大きな物語への欲望がいまだ健在であることを、オウムへ入信する若者の存在がそれを証明していた。私的世界の中で語

られる幸福幻想や、快楽追求といったものは存在しても、時に人はそれだけでは満足しないということを、関西大震災の若者のボランティア活動の実例が示していないだろうか。また、エイズが人々の間に芽ばえさせた共生、共存の意識も底ではひとつの水脈を作っていないだろうか。単なる権力ゲームや、マネーゲームによる喜びではないものを人は求めているのではないだろうか。アメリカに行ってしまった野茂が、人気になっている原因のひとつが、ビジネスマンの野球ではなくて、スポーツマンの野球をやるから、ということにあると解説されているが、「世界性」の姿も、少しずつ変化してきているのだと思う。これまでの「大きな物語」とは違うものを人は求めているが、それは「小さな日記」というものでもない。むしろ自己存在の理由、根拠、目的といった形而上的な回答を求めての——求道的物語が要求されており、それは「小さな日記」でありながら同時に「大きな物語」でもあるという両義性をそなえている。オウムは、ハルマゲドンのあとに始まる新しいドラマの主人公になれることを、若者達に約束し出家させた。いわば、アニメの『宇宙戦艦ヤマト』に乗りこめる選ばれた戦士——世界の、いや宇宙の平和に命をかけて戦う戦士という夢、使命感、目的意識の自覚が、たいくつで平板な日常生活を彼等にすてさせる決心をさせたのだ。しかし、上九一色村のサティアン群は永久に浮上することのないヤマトだったのかも知れない。富士山とヤマトと宇宙と真理と戦争と解脱とが、ひとつに結びついたあの風景の中、想像力は空しい永久運動をくりかえし、コスモクリーナーと共鳴し合ったマントラを唱えていただけになってしまった。「大きな物語」でも「小さな日記」でもあるような物語は終わってはいない。

5

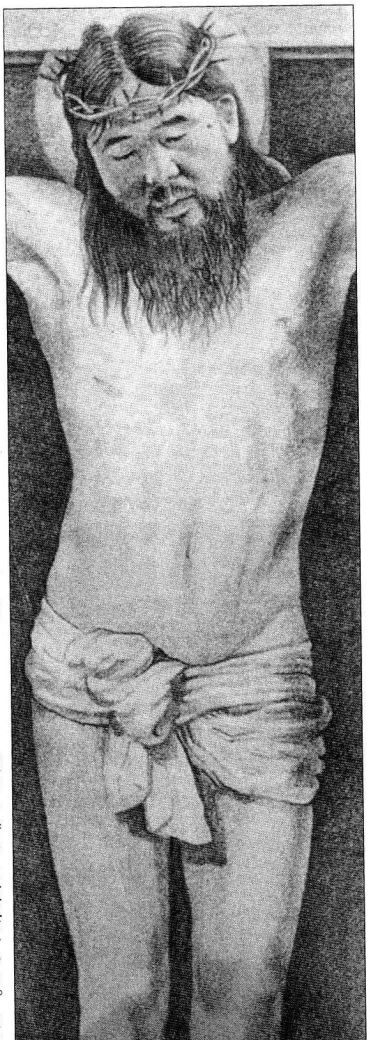
ところで、オウム報道を見ていて美術に関係するものとして、第七サティアンにあった発泡スチロールのシバ神をあげておきたい。その他には、放映された麻原のうしろにかかっていた瞑想用のタントラ画像や、キリストになった麻原を描いたイラスト画についても言っておきたいことがある。これら三つ

の作品について共通していることは、まず第一に御世辞にも美術として質の高い立派なものとは言えないこと。安っぽい仕上りで、キッチュで、ペンキ画のような感じがすること。シバ神にしろ、タントラ画にしろ、美術専門書に出ているインドや、チベット、ネパールの作品に比べて、どうしようもなくレベルの低いのには驚かされ、失望させられた。芸術的崇高さを感じさせるレベルでは、とてもないのである。キリストになった麻原の絵は、ブヨブヨして気持ち悪いし、精神性の高さなどあの絵にはない。あれほど、彼岸について話をしていた教団において、美術がこういう低いレベルにあったこと、また低い作品が全面に提出されていることが、一体何を現わしているのか、私は興味を引かれたのである。考えてみれば、オウムにおいてだけでなく、日本の社会に於ても音楽、踊りやグラフィック・デザインに比べ、美術はメディア性も、大衆性も低い。修業等々でも「身体性」を重視したオウムにとっては、偶像的イメージは北朝鮮や、ケンタッキーフライドチキンならいざ知らず、そこでは一切不用であったのだ。そういうものに金をかけるより、化学プラントがそうであったように、テクノロジーと宣伝と、営業拡大へは巨額のお金が使われていた。このことも、一般の企業に於ても同様ではないだろうか。動かない絵画、彫刻ではなく、動くしゃべるアニメーション映像が中心であったことも、企業、社会に於ても同様のことが見られる。ここでの中心課題は、美的であることなどではなく、いかに効率よく利益を得るかということにおかれており、すべてはその目的から測定されているのだ。人に崇高さや気高さや、感動を与えるものとしての美術は、ゼロに限りなく近くなり経済的法則が優先されている。しかし、私がこれらのこと以上に引きつけられたのは、あのサティアン建物周辺の汚さである。かつての水俣や、川崎とまで言わないにしても、まるで産業廃棄物処理場のような状態の中に、信者がくらしている光景が異様な感じを与えた。自然環境とか、生命重視ということを第一にしているはずの宗教において、これらが一切無視され生産と目的達成が中心になり、心の豊かさや、ゆとりを表現する美的表現が発見されないということが、この宗教教団の特異性でもあることを示していた。美術など糞くらえということな

オウムの仏画

のだ。おそらく美術は、ハルマゲドンのあとで生まれる、オウム神聖国家になってはじめて必要とされるのだろう。それまでは、生活の快適さ、安全性、豊さといったものは最低の最低におさえられている。ならばあのシバ神は、一体何だったのか。プラントをカモフラージュする「はりぼて」であることは明らかである。重要なのは、シバ神ではなくプラントなのだ。日本企業の美術にかかわるメセナというものも同様の関係を持っていないだろうか。税金対策であるメセナが、あたかも美術のために純粋に成立しているような幻想を与えているが、企業にとって重要なのは、企業それ自体である。シバ神が、あたかも神殿をかざるものとしても、本気で発泡スチロールに祈りをささげる人は、いるのだろうか。あの場所は一般信者には立ち入り禁止の場所になっていたとも聞くが、こうした矛盾も企業のメセナとそっくりである。イワシの頭も信心から、ということわざがあるが、ハイテクノロジーの夢であるような『鉄人28号』や、『マグマ大使』『ガンダム』が導く超テクノ的御神体のようなマシンは、羊の夢を見させるような妄想を抱かせてくれるが、発泡スチロー

ルは何を妄想させてくれるのだろうか。つまり、オウム自身ですらその像が崇高さを表現しうる質的高さを持つこと、また持ちつづけて存在することなどはじめから考えていなかったのだ。すべては、一時しのぎの仮設の迷彩物であったのだ。それにしても、破壊の神であるシバ神と、サリンのプラントとの合体は不思議ではない。シバ神の神力が、発泡スチロールを超越して実体的に作用し、調べにくる警察の判断力や、思考力を霊力で不可視にしてしまうとでも思ったのだろうか。麻原が発見されてしまった時、小さな箱状の室にかくれていたが、解脱したヨギは姿を消してしまえる能力を持つと教典にある。まさか彼は姿を消していたのではあるまいか。発泡スチロールに霊力が作用するなら大魔人の出現も朝飯前ということになる。オウムでの芸術は、身体に即効性のある音楽と踊りである。美術はどうも即効性にとぼしいものであると判断されたらしい。企業も会社宣伝をかねてのコンサートや劇や踊りにはお金を出すが、人も集まらない美術は即効性のない、無名作家の展覧会などとてもメセナの相手ではない。美術は今や現代社会の中で、自らの存在場所を見つけるのに苦労しなければならないようだ。いずれにせ

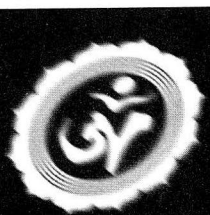


キリストになった麻原尊師のイラスト……

よ神殿になったプラントは、崇高性を持った神殿というより、美的要求を限りなくゼロに近づけた、政治的要求による「はりぼて」を作ったということなのだ。また、ここでは「はりぼて」で十分であったし、「はりぼて」であることが大切で、一番理にかなっていたのだ。そういえば選挙に使った麻原の顔も「はりぼて」だったのは、仏縁というか、カルマだったのかも知れない。一過性の使いすての「はりぼて」という形態は、今日的な美術の姿と重り合っているかも知れない。一時的な間に合わせとして存在する美術が、どこまで行っても「理念」も何もないからっぽの「はりぼて」であっても驚くことはない。近代化の、戦後五〇年の行きついた先が「はりぼて」であったとしても、誰れも悲しんだりはしない。オウムのシバ神は、「はりぼて」であることで、ひょっとして崇高であったのかも知れない。プラントを背中に担いで、サリンを隠しながら、ついにテレビにはその姿を見せることのなかった伝説のシバ神は、発泡スチロールを金に変えること以上の霊力を発揮したのだ。オウム教団を破壊するという——自らを崇めた信者達を、ハルマゲドンではなく、ごく当たり前の日常の中で解体させてしまうカルマを発動させたのだった。化学によって生まれた発泡スチロールもサリンも、この地上には自然物として存在するものではない。この両者を結びつけたものは、麻原ではなくシバ神そのものであったかも知れない。一九九五年四月に、そのカルマが成就してしまった時、同様に日本近代の作りあげた成果が「はりぼて」であることが、国民に分かってしまった時でもあった。地震で倒れた高速道路も、東京都市博覧会も、日本の円高対策も、戦争責任の問題も、日米自動車協議も、「はりぼて」ばかりで出来ていたものが、その実体を見せてしまった時に、私達はどう対応すれば良かったのだろう。第七サティアンの「はりぼて」美術のシバ神の姿は、数トンのサリン製造が計画だけに終わった欠陥プラントの夢と、世直しハルマゲドンの夢とをかかえて、粗大ゴミとしてどこかの山にあるゴミ処理場へ消えてゆくだろう。「はりぼて」の末路を、笑って見ていることはできないし、アイロニーを持ってながめるにしても「はりぼて」は、それより軽すぎるのだ。

だれが「オウム・サリン事件」を起こしたのか―「日本教」と「オウム真理教」

毛利嘉孝



もうり・よしたか：一九六三年生まれ。現在、ロンドン大学ゴールドスミス校メディア&コミュニケーション学部修士課程在籍。イギリスにおけるカルチュラル・スタディズの動向を追うと同時に、コンピュータから美術までユース・カルチャーの動向を各種のメディアでレポートしている。

昨夏からロンドンに居を移しているため、「オウム・サリン事件」と呼ばれる一連の出来事に対して、ぼくは、現実感を持つことができないでいる。

もちろん、三月二〇日の「地下鉄サリン事件」そのものと五月十六日の麻原彰晃逮捕の報道はイギリスのメディアにも大きく取り上げられ、阪神大震災と並んで、世界の優等生だったはずの日本の闇の側面として折に触れ報道されてきた。しかし、その間二ヶ月以上にも及んだ日本国内のオウム報道の嵐の期間、イギリスとの関係において最重要課題として論じられていたのは、むしろ五月七日の第二次世界大戦の戦勝記念日（VEデイ）の記念祝典にイギリス政府が先進諸国のなかで日本の参加を唯一求めなかったことに対する是非である。今年五〇周年をむかえたこの式典だが、テレビや新聞から知るかぎり、今回の決定は、「日本はなぜいまだに戦争責任を明確にしないのか」という一般のイギリス人の漠然とした憤りを正確に反映したものだといえるだろう。このようなイギリスの報道を見る限りでは、「オウム・サリン事件」とは、いまだに主要メディアのト

ップで連日報道がなされている「ルワンダ」や「ボスニア」はもとより、「阪神大震災」や「VEデイの日本の対応」よりは小さな事件であり、実際、三月二〇日の「サリン事件」はともかく、その後の東京で続いたと言われる一種の戒厳令状態とマスコミを中心とする集団ヒステリー状態については、ほとんど何も報じられていないといってもいい。

このことひとつを取っても、「オウム・サリン事件」の特殊性を示している。この「事件」は、日本人にとって戦後最大の事件のひとつとして受け取られているにも関わらず、たぶん世界的にはほとんど関心をひかない日本国内でのみ起こったローカルな事件なのだ。それは、この状況のなかで着実に上がり続けた円が端的に示している。本当に崩壊の危機をはらんでいるとみなされている国の通貨が上がりつづけるだろうか。

ここでぼくが言う「オウム・サリン事件」とは、その発端となった「地下鉄サリン事件」のみを指しているのではない、むしろその後のメディアのパニックのことを含めて象徴的に意味している。この論考では、あえてサリン・テロや具体的なオウムの活動には触れず、特にメディア・パニックに焦点をあわせて、できるだけ外側の立場から批判的に論じたい。とはいえ、ぼくが「事件」について得ている情報は、こちらでの報道と日本から定期的に送られてきていたいくつかの週刊誌と友人からの電子メールだけである。しかし、この情報量の少なさはネガティヴな側面ではなく、むしろ、オウム情報の大部分を構成した圧倒的なテレビの情報シャワーを浴びていないぶんだけ、権力と「事件」との関係について中立的に議論できるきっかけになっているはずである。

だからといって、ぼくはサリン・テロの犯人を擁護しようとしているわけでは決してない。犯人がだれであれ、彼らに対しては、ただ怒りと憤慨を覚えるとしか言うほかはない。しかし、この事件を単にオウム真理教の狂気や日本の社会のひずみ等々に帰し再発を防ぐ法を唱えるだけでは、「オウム・サリン事件」を生産し、「オウム・サリン事件」が再生産する権力関係をとらえることができないばかりか、「オウム・サリン事件」という言葉によって示される権力関係の再生産に加担することにしかならない。

これから、逃れる唯一の方法は「オウム・サリン事件」が何によって生産され、何を生産しつつあるのか見ることである。

「オウム・サリン事件」を考えるための理論装置

さて、いったい、「オウム・サリン事件」とは何だろうか。第一に、言うまでもなくこれは宗教に関わる事件である。第二に、これはメディアによって生産された事件である。そして、最後にこれは日本のアイデンティティに関する事件である。ここでは、特に三番目の日本のアイデンティティを中心に前者二項目について考えてみたい。大雑把にここで示そうとしているのは、「事件」における権力関係である。これからの議論の多くは、ぼくがロンドンにいることによって、と同時に、上野俊哉の的確なディレクションによって遭遇した、スチュアート・ホール以降のイギリスの「カルチュラル・スタディズ」の成果に負っている。とは言え、「カルチュラル・スタディズ」が何であるのか定義し紹介するのは本稿の目的から外れるし、また、「カルチュラル・スタディズ」の方法ということでは、本来的には具体的な「オウム・サリン事件」に関わる言説をきちんと検証した上で、権力関係の生成プロセスを描くべきだろうが、ロンドンにいるという物理的な制約のため、フレームワークといくつかのポイントを指摘するまでにとどめたい。

先に挙げた三つの領域は全て、アルチュセールならイデオロギーの国家装置（ＩＳＡｓ＝Ideological State Apparatuses）と呼ぶ領域に属している。アルチュセールはその理論の基本枠組の中で、伝統的なマルクス主義の中で権力が抑圧に用いてきた国家装置（ＳＡ＝State Apparatuse）、政府、国家、警察、裁判所そして軍隊のほかに、現代社会の抑圧には、ＩＳＡｓが決定的な役割を果たしていることを指摘した。ここで言うイデオロギーの国家装置とは、宗教、教育、家族、コミュニケーション・メディア、文化などであり、ＳＡが国家によって代表される公共の領域に属するのに対し、ＩＳＡｓはプライベートな領域に属している。この文脈では、ＩＳＡｓのフォーメーションは、単に既存の階級や経済的な生

産関係から決定されるだけではなく、逆に権力関係そのものを同時に決定する。この点が重要である。たとえば、文化は経済関係によって決定されると同時に、比較的自立したものであり逆に権力関係を同時に決定するのである。

このISAs自体、グラムシのヘゲモニー論に依拠していることはいうまでもない。実際、「カルチュラル・スタディズ」の論者の多くもこのヘゲモニー論を援用している。グラムシに従えば、現代の民主主義において権力関係は圧倒的な権力を手中に収めた絶対的な君主によって暴力的に支配されているわけではない。むしろ、支配する側の利益は、支配されている側の積極的な合意によって維持されている。

もちろん、今回の「オウム・サリン事件」は、そのヘゲモニーが働いた典型的な例だろう。誰の目にも明らかな権力による不当捜査、別件逮捕が、公共の利益という名前の合意のもとに、部分的な抵抗はあったにせよ、結果的には堂々と黙認されていく。このことが、権力の強化を大幅に認めることになることをうすうすは感じつつも、「でも、結局はあなたがた（支配されている側）にとっても利益があるでしょ」という幻想のなかで、合意が形成されてしまうのである。グラムシがこのヘゲモニーを論じたのは、なぜ、イタリアのファシズムが、血に狂った殺人鬼ではなく、「善良」を自負する「罪のない」市民たちによって形成されていったのかを分析するためであった。

さて、ここまでの議論で既に実は自己矛盾に陥っている。「カルチュラル・スタディズ」の本領は、全ての文化事象を解きあかす魔法の方程式を示すことではない。その理論の核の部分を明確にアルチュセールを経由したヘゲモニー論に負っていても、それは、少しでもラディカリズムを持つひとならば知っておくべき教科書的な確認にしかすぎない。

重要なのは、権力関係の主体にみえるものが、常に個別の事象の権力関係に対していわば事後的にその都度構築されるフィクションである、ということである。何か具体的な主体がアプリオリに存在して、それが、権力関係を生産するのではない。権力関係は権力関係からしか生産されないのである。もし、ある主体らしきものが、権力関係を支配しているよ

うに見えるとすれば、それは、その都度構成される権力関係のステレオティピカルな反復によって構成された産物に過ぎない。

とすれば、「オウム・サリン事件」の権力関係の主体は何か」という問いも実は一筋縄ではいかない。たとえば、ぼくが「日本教」とこれからとりあえず名付けるものにその主体の場所を与え、それがどれだけ昭和崩御の時に賑わした「天皇制」という権力関係と共通点を持っていても、やはり今回の「事件」から生産されたものにすぎない。何でもかんでも「天皇制」に帰すのは、やはり馬鹿のひとつおぼえであって、戦前の「天皇制」と戦後の「天皇制」と昭和末期の「天皇制」はそれぞれ異なった複雑なディスコースの関係のなかでその都度生産されたものであり、もしそれが同じ権力主体によって支えられている「天皇制」に見えるとすれば、それがあたかも連続した権力のように見せている権力関係こそ問われなければならないのである。「カルチュラル・スタディズ」の本領とは、その都度異なる権力関係をその都度愚直にほぐしてその権力関係の生産のプロセスを暴くことである。

「オウム・サリン事件」が生産する境界線の外と内

さて、フレームワークはこれくらいにして、「オウム・サリン事件」に話を戻そう。先の議論をフォローすれば、「地下鉄サリン・テロ」を犯したのは、もしかするとオウム真理教かもしれないが、「オウム・サリン事件」とここで呼んでいる、その後のマスメディアによって主導されたヒステリー状態は、まぎれもなく日本における権力関係が生産したものである。

しかし、ここでメディアがたとえば公安に代表されるような具体的な権力によって操作されている、ということを指摘しようとしているわけではない。「今回の事件の不気味さは、これが公安とオウムとの情報戦であることだ」とし、マスコミがいかに公安情報に踊らされているかを論じた立花隆の週刊文春の連載は、ジャーナリストとして彼が至極まっとうなものの見方を持っているのか示したものであり一読に価するものだったが、同時に彼もやはり古典的な「権力」と「反権力」としてのジャーナリストの対立を無意識のうちに想定してしまっていること

を露呈している。

ぼくにとって重要なのは、むしろ、国民がなぜメディア・パニックに巻きこまれたのか、ということであり、いいかえれば、「オウム・サリン事件」と呼ばれる権力の言説がどのようにして、あたかも昔からあった自然なものの考え方のようにふるまったのかということと、先のヘゲモニー理論を考慮すれば、どのようにして国民がそれを積極的に支持したのかということである。テレビと新聞という最大のメディアが意識的、無意識的に関わらず公安情報を垂れ流し続けたのもおそらくは事実だと推察されるが、それ以上に重要なのは、それが単に権力による情報操作を意味しているのではなく、むしろ国民が積極的に、具体的には視聴率という形で選択し続けたことが今回の集団ヒステリー的状況を生んだということである。

さて、このパニックの最大の理由は、この「事件」が日本という国家秩序に対する脅威として受け取られたことだろう。オウム真理教の疑似国家的な組織が、日本という共同体の中に巣くったおぞましい異物として認識され、このことが一斉にアレルギーをもたらしたのだった。

ところで、すでにアルチュセールのＩＳＡｓの指摘に見たように、日本の「国家」という概念は、通常私たちが無自覚のうちに国家機関と考えている政府や警察といったＳＡによってのみ維持されているわけではない。むしろ、現代社会においては、文化、宗教、メディアといったＩＳＡｓにその多くを負っている。これらの装置の役割は、日本の境界線を策定することつまり、「日本に内部にあるもの」と「日本の外部にあるもの」との区別をすることであ

る。日本のような海に囲まれているという地理的な境界線がそのまま同時に国家の境界線を形成している、というのは世界的には決して一般的な例ではなく、むしろ民族、文化、言語といった境界線が、領土の具体的な境界線の設定をめぐって衝突を起こすというのは最近のボスニアの例をはじめ、歴史が示すとおりである。

「日本」というアイデンティティが形成されるのは、この境界線が設定されるときであり、アイデンティティが境界線を設定するのではない。たとえば昭和天皇崩御から皇太子御成婚にいたる日本的アイデンティティに関わるはずのモチベーションが、「オウム・サリン事件」と比較すると、結局のところパニックを形成するほどの求心力を持ちえなかったのはまさにこのためである。繰りかえしになるが、国家的アイデンティティなどというのは、常に外部との境界線の設定のプロセスから生みだされるフィクションなのである。

「宗教戦争」としての「オウム・サリン事件」

今回の「事件」の最大のポイントは、その境界設定が「宗教」という領域でなされたことである。より正確には、国民が「宗教」という領域での境界設定を選択したのである。「外部」を設定することは、同時に「内部」を設定することである。ここで設定された内部とは何なのだろうか。

日本人の多くは、自分たちが何かの宗教に属しているとは考えていない。宗教とは、キリスト教やイスラム教や仏教やあるいはよくわからない新興宗教を意味しており、漠然と何か理解できない時には恐ろしいものだと感じている。宗教というのは「狂う」対象であり、多くの「普通の」日本人にとって「宗教に狂う」というのは、あまり日常的ではない「ダサイ」行為なのである。

この日本の自分たちの宗教に対する認識は、しかし、日本以外では通用しない。日本人以外にとっては、なによりも無神論者であれば単に合理的に行動するはずであり、その反対に正月には神社に出かけ冠婚葬祭には労力を使い、さらには天皇崩御や成婚

といった宗教的行事に圧倒的な時間テレビや新聞といった公共を標榜するメディアが占拠されても表だった批判はあらわれない日本は、十二分に宗教的な国なのである。「都合のいい時にしか信心深くならない」と日本人はしばしば自嘲するが、それ自体は、キリスト教徒でも似たりよったりであり、別に彼らにしてもみんながアダムとイヴの物語を信じているわけではない。

問題なのは、日本人が実はひとつの宗教ですっぽりと覆われてしまっていることに、日本人が無自覚なこと、より正確にいえば、無自覚であることを構造的に強制されていることである。とりあえず、そのひとつの宗教を「日本教」とでも呼んでおくが、その「日本教」は、それが宗教として自覚されないほど洗練された宗教になっているのだ。その意味では世界でも類のない宗教なのである。

この「日本教」は、宗教と呼ぶにはあまりにも日本の生活様式や文化と融解してしまっていて、独特の仕方で日本人の精神に浸透し規制し、結果、日本という国家基盤までも形成していく。そこで象徴的な役割を果たしているのは間違いなく「天皇」であるが、しかし、これは、敗戦によって、アメリカから語ることを禁止され、無意識の中に抑圧されてしまった事実なのだ。従って、この「日本教」は常にアンビヴァレントな環境におかれることになる。そのアンビヴァレンスとは、①なによりも日本の国家を構成する権力関係のディスコースの編成そのものが、「日本教」を中心とした権力関係に決定的に支配されているにも関わらず、②その「日本教」の中心を構成するはずの「天皇」に神性を求める言説が、精神分析なら父の役割を担っているアメリカによって禁じられ無意識の中に抑圧されている、ということである。しかし、皮肉なことに、このアンビヴァレンスこそが、「日本教」を「日本教」として決定的な外部からの批判をかわしこれまで存命させてきたのだった。

「オウム・サリン事件」を空前の事件に仕立て上げたのは、まさにこの「日本教」であって、その意味ではオウム真理教が主張するとおり、「宗教戦争」だったのである。この「事件」を未曾有の狂気として位置づけたのも、この無意識のなかにあり語ることを禁じられている「日本教」の神性に抵触したか

らであり、そこの境界線をひく領域は、政治でも民族でも言語でも文化でもなく「宗教」でなければならなかった。この「オウム・サリン事件」とは、何よりも宗教に関わる事件である、といったのはこの意味でである。

この「日本教」は無意識の中に構造化されているものであるが、同時に目に見える形で日本人の身体を型にはめていく。実際、電極をまいたヘッドギアと中立性を装いつつ「オウム・サリン事件」報道を垂れ流すテレビとでは、洗脳という観点ではどちらが効率的なのだろうか。オウム信者と平均的日本人のどちらのほうが、「目が飛んで」いるのだろうか。あるいは、例のオウム・ファッションとどぶネズミ色のスーツのサラリーマンや角刈り詰め襟学生を較べて、外国から見たときどちらのほうが異常なものと見られ恐れられるだろうか。この両者の間に差があるとみなすことは、日本の権力関係のなかでのみ可能なのであり、日本の社会性、基準、正常なものが、「日本教」によって定義された非社会性、逸脱、異常なものを否定することによって、その残滓として構成されていくのである。その基準そのものが常に逸脱との相対的な関係によってのみ決定されている以上、日本以外の文脈から身をはがしたときに、そこで「日本教」が囲いこんだ「正常な」もの自体が、時としてやはりとんでもない「不気味な」ものとして立ちあらわれることは言うまでもない。「日本教」は天皇制にその起源をもちつつ、「オウム・サリン事件」によって生産された日本人のアイデンティティであり、それはその徹底的な潔癖症、異物排除そしてセンセーショナリズムによって、同時に権力関係を再生産していくのである。

簡単に結論づけたい。

今回、徹底的に弾圧されたのは、表面上は「オウム真理教」という新興宗教であるが、同時に無意識の内に多くの付加物を抑圧している。例をあげれば、「日本教」に属さない、宗教一般ひいては世界の多くを占める宗教的なひとたちの存在を抑圧している。先進国以外のそして「日本教」以外の宗教は潜在的に何か恐ろしいものだと無意識のうちに排除する構造は決定的になったにちがいない。オウム真理教を狂信的とみる日本人の視線のなかに、たとえば同時

に湾岸戦争を通じてつちかわれたイスラム教徒は狂信的だと常日頃から抑圧してきた無意識が加担していないと、果たして言えるだろうか。

同時に、今回の「事件」は、日本の国内に国家以外の共同体を持つ可能性を排斥してしまった。日本という抽象的なアイデンティティに反対する擬似国家的な共同体自体の存在がおかしい、という言説が、さも当然のようになってしまった。しかし、国家のなかに国家以外の共同体ができていくのは、それ自体は悪いことではない。ポスト・植民地時代の国家において、国家がその中に国家よりも優先するような共同体を抱えてしまうのは、もはや不可避な状態になっている。たとえば、イギリスを例にとっても、アイリッシュはもちろんのこと、カリビアン、インディアン、チャイニーズなどなどかつて植民地だった地域から流入してきた移民たちが独自の共同体を構成しており、彼らはイギリスという国家の共同体に所属すると同時にその上位概念である民族の共同体に所属している。それは、実際の武器を保持しているのかどうかというのは別にしても（たしかにIRAのような例もあるわけだが）、あるひとつの国

家がその地理的領土的に外部にある別の国家と戦争状態になる可能性以上に、地理的な領土の内部で不断の戦争状態を潜在的に抱えてしまっている、ということを意味している。ポスト・植民地時代の国家の宿命とは、産業革命と近代化によって成立した国家と言う装置が時代遅れになったことを認めつつ、次の新しい政治装置が生まれるまで何とかやりくりしてうまくやっていかなければいけない、ということである。しかし、ここで生み出される「ハイブリディティ（雑種性／いかがわしさ？）」は、国家の危機ではなく可能性である。いかにその純粋性という幻想を解体させていくのか、ということが何よりも日本の急務にもかかわらず、その可能性も含めて「オウム・サリン事件」は否定してしまった。

さらに、この「事件」はある種の政治の想像力を抑圧してしまった。たとえば、仮にあるグループが日本国家転覆を想像していたとしても、それ自体は弾圧の対象ではない。あるいは、ぼくは極めて温厚な人間であるが、やはり何度かは「あいつ頭にくるから絞め殺してやりたい」位のことは思ったことはある。だからといって、いちいち殺人未遂で逮捕されてはかなわない。このことを、これを国家のレベルに拡大すると、単なる想像力の域を超えてより具体的な形であらわれる。たとえば、かつてソ連の核兵器はボタンひとつおせば東京を壊滅できるようにセットされていたかもしれないし、北朝鮮だってわからない。同時に核兵器をもっていないなどと言っている自衛隊も、有事の時には一両日に北朝鮮に核爆弾を落とすくらいの準備は既にしているかもしれない。だからといって、北朝鮮が日本に核ミサイルの弾頭がむいているから、即戦争だ、というようには実際のポリティクスはならない。むしろ、そこを実際の武器の行使を避けるように双方で権力関係を保持していくのが政治である。問題は、想像力と実践との間にどのように境界をひき、どのように実践を組み立てるのかということなのだ。にもかかわらず、今回の「事件」は、ある種の想像力を根こそぎ弾圧してしまった。このことは、同時に日本という国の政治システムが有事の際にやすやすとパニックにおちいり、政治を放棄してしまうということを如実にしめしている。

最後に、「オウム・サリン事件」によって何より

も抑圧されたのは、徹底的に標準化された大部分の日本人である。その標準化は、直接強制されたわけではなく、異物の排除という巧妙な権力の操作によってなされたもので、一見わかりにくいものだが、確実に各人の「身体」のレベルでの――フーコーなら「従順な身体」とでも呼ぶような――再編が施されてしまった。

いずれにしても、「オウム・サリン事件」の後、「日本教」はますます強化され、相互監視システムはますます強固になり、ゴキブリ一匹みつけては大騒ぎするメディアのおかげで、結果的に、世界でもっとも安全な国になるだろう。しばらくの間は。

しかし、その日本が守ろうとしている安全性は、「日本教」に属さない、いかがわしいもの、異質なものが排除され、同時に標準化された日本人が生産されていくことによってはじめてもたらされるものなのだ。ここでは、安全性の神話は、日本の「日本教」の純粋性、単一性とセットになっている。この純粋性そのものが、たとえば、労働コストの低減を計った生産工場の海外移転という名目のもとで、外国人労働力を日本から徹底して排除したあげくに、新たな植民地主義の過酷な低賃金政策による搾取を促進することによって経済的に保証されているような類のものなのだ。その意味では、「オウム・サリン事件」は、結果的にこういった新植民地主義までも再生産するだろう。

実のところ、ぼくは、オウム真理教自体には、何の同情も共感もないし、興味すらないかもしれない。彼らについて感じるのは、その潔癖さ、純粋さが、ぼくが本稿で「日本教」と呼んだものと相似であるということだけである。

(追記) オウム真理教の外報部長の上祐史浩というのが、経歴によればぼくと同い年で世田谷の小さな、とある公立中学の生徒会で書記をしていたらしい。ぼく自身、同時期に同じ学校で生徒会長などというものを勤めてしまったことがあり、経歴に間違いがなければ、一緒に生徒会執行部にいたはずなのだが、起こったことを片っ端から忘れる性格ゆえ、全く記憶にない。これって、お酒のつまみネタで、だからと言って、たとえ彼と会ってもきっと話すことも思いつかないけど。

「サブカルチャー的悪夢」と革命的想像力

清水アリカ

しみず・ありか：一九六三年兵庫生まれ。作家。代表作に『革命のためのサウンドトラック』『デッドシティ・レディオ』（集英社）『天国』（大栄出版）、訳書にウィリアム・バロウズ著『トルネイド・アレイ』（思潮社）などがある。

たとえば、はりぼての麻原彰晃マスク（実は防毒マスク）で顔をおおい、カラシニコフを肩にかついだ白装束のアニメ戦士たちが「彰晃マーチ」のリズムに乗せて、廃墟となった霞が関を行軍する。

あるいは、ディズニーのダンボを思わせる可愛らしい子象の帽子（実は尊師の脳波を移植するためのヘッドギア）をかぶったアニメ顔の女の子たちが、手に持ったサリン入りのビニール袋を振り回しながら、無人の地下鉄構内で自動人形のダンスを踊りつづける。

オウム真理教によって半ば現実化されることとなった、このグロテスクな悪夢の光景は、実際のところ、あり得べき悪夢のひとつとして、既に僕たちの「サブカルチャー的想像力」のなかで、きわめてリアルに描かれていたものではなかっただろうか。

このことは、一連の「オウム事件」がとりたてて不可解でも、不気味でもなく、むしろある種の既視感とともに僕たちの前に立ち現れてきたことを示している。メディアと現実の境界線上に紡ぎ出された「無差別テロ」の悪夢は、ひとつの内在的リアリテ

ィとして、あらかじめ僕たちの意識／無意識のなかにたたみ込まれていた光景ではなかったか。

それにしても、どうして暴力であり、テロリズムなのか。

それは、おそらくこういうことだ。つまり、いま僕たちを取り囲んでいる「現実」が現実として成立する起源において、ある歴史的な暴力が関与している。あるいは、起源における暴力（歴史）が隠蔽されることにおいてのみ、僕たちの「現実」が成立しているという事実。

どれほどマスコミが日本の「安全神話の危機」を煽り立てようとも、依然として日本が世界一安全な国であることは疑いようもない。この「神話」を保証しているのは、日本という社会の同質性、閉鎖性に他ならない。だけど、こうした閉鎖性、同質性がどのように形成されてきたのかを考えるとき、その起源に極めて巨大な暴力が働いていることに、あらためて注目しなければならない。

もちろん、この暴力とは第二次世界大戦のことだ。

少々乱暴な図式を描いて、日本の現代史を振り返ることにする。

明治以降、日本は自らを帝国という暴力装置に転化することによって、はじめて世界史の舞台に登場することになるだろう。その過程において、日本がアジア諸国に打ち振るった暴力については言うまでもない。一方で、世界史に対する日本の野望もまた「日米戦争」によって、とりわけ広島・長崎における「ハルマゲドン」によって、徹底的に叩き潰されることになるだろう。戦後日本は「平和憲法」による武装放棄を強いられると同時に、米ソの二極支配のもとで、世界史参入への権利を半永久的に剥奪されることにもなるだろう。

これ以降、日本は自らを世界史から隔絶された非歴史的な空間として生きることになるだろう。むしろ、そのことによって、つまり歴史から隔絶された閉鎖的、同質的空間を特権的に使用することによって、驚異的な経済成長を遂げることにもなるだろう。あるいは、六〇年代の革命運動（それは暴力を持って歴史に参入し、それを変革しようとする運動だったはずだ）の敗北が、七〇年代において「戦後日本」の内面化を押し進めるだろう。やがて、来たるべきメディア社会の到来によって、かろうじて残された

内面の奥行きさえも収奪され、すべては歴史から切り離された薄っぺらな表象の戯れと見なされることになるだろう。

これこそが八〇年代の日本において「ポストモダン」と呼ばれた事態に他ならない。

この「ポストモダン」とは、もちろんプレモダン-モダンに引き続くべき理念的必然などではあり得なかった。それは「日米戦争」と広島・長崎の「ハルマゲドン」によって暴力的に作り上げられた歴史的・特殊的な時空間に他ならない。

だとすれば、歴史から切り離された薄っぺらな表象の戯れに過ぎないと思われていたもの（たとえばサブカルチャー）は、実は宙吊りにされ、砕け散った歴史そのものであり、その断片のひとつひとつに、起源に打ち振るわれた暴力が直接に書き込まれていたのではなかったか。

だとすれば、メディアとサブカルチャーによって純粋培養された若い世代の人間たちが、その純粋さ故に、自分たちを取り囲む「現実」の根拠となっている「起源の暴力」を無意識に引き出したとしても、別に驚くべきことではない。

たとえば、八〇年代のアニメやコミックが核戦争後の世界を好んで描き出し、執拗なまでの暴力描写に取り憑かれているように思えるのは、このことと密接に関連がある。それらが描き出す「核戦争後の世界」とは、近未来の光景などでは決してなく、むしろ過去の広島・長崎を繰り返し想起させるものであり、その「暴力描写」は僕たちの現実において奪われてしまったものを取り戻そうとする無意識の試みに他ならないだろう。

言うまでもなく、日本のサブカルチャーが何らかのラジカリズムを獲得することがあるとしたら、こ

の文脈においてのみである。

それにしても、メディアの上に表現された「暴力」と現実に打ち振るわれた「テロリズム」にはまだ幾許かの距離がある。

もちろん、この距離は八〇年代と九〇年代の間に横たわる距離に他ならない。

八〇年代の終わりから九〇年のはじめにかけて起こった事態とは、言うまでもなく米ソ冷戦支配の崩壊である。このことは、僕たちの安全で、閉鎖的で、同質的な「現実」を保証していたはずの「　」（括弧）が取りはずされてしまったことを意味する。このことによって、僕たちの「サブカルチャー的暴力」もまた不可避的に現実と地続きとなることだろう。

こうした文脈を通して見る限り、一連の「オウム事件」は、敗戦と戦後の米ソ冷戦支配によって無理

やりポストモダンであることを強いられた日本が、冷戦構造の崩壊によって再び世界史の舞台に引きずり出されようとしている情況にアクチュアルに対応しているのだとも考えられる。

オウム真理教の想像力によって描かれた世界観から、幾つかの例をあげてみる。

①麻原彰晃の「ハルマゲドン」の予言が、必ずしも世紀末的未来を指し示すものではなく、過去における広島・長崎を想起させるものだということは、前述した通りだ。

②同様に、オウム真理教の持つ奇妙な「反米思想」も、来たるべき日米戦争にではなく、過去の日米戦争にその根拠を持っている。

③彼らの主張する「フリーメーソンの陰謀説」は社会主義圏崩壊以降の世界資本主義の展開とそれに対する異議申し立てを、ひとつのカリカチュアとして表現している。

④彼が製造したとされる「サリン」等の化学兵器は、明らかに湾岸戦争（冷戦崩壊後の最初の戦争）におけるイラクの戦略からの引用である。

⑤彼らによって構想された「オウム帝国＝神権国家」は、そのグロテスクさにおいて、既に回帰すべき場所のない日本のナショナリズムの性質を正確に表現しているように思える。（この意味で、オウム帝国は、小沢一郎などの主張する「普通の国」よりはるかに批評的でさえある。と同時に、このグロテスクなオウム帝国は「普通の国」をはじめとするあらゆる国家観の裏側に貼りついていることに注目すべきだ）

こうして見ていく限り、オウム真理教の世界観を薄っぺらだとか、リアリティがないとして批判することに必ずしも意味はない。むしろ、それはリアリティのなさにおいてリアリティがあるという奇妙な逆説を示しているはずなのだから。あるいは、オウム真理教が現実に対してある程度の批判力を持ち、若い世代の人間を惹きつける力があったのだとすれば、その「薄っぺらさ」こそが、僕たちの現実に合致していたからに他ならない。

ともあれ、戦後のポストモダン社会の現実的根拠となっていた米ソ冷戦支配構造が崩壊した現在、僕たちの無意識に抑圧された暴力が「サブカルチャー的悪夢」として、メディアの枠組みを超えて現実化されることは、いまや不可避である。（今回の事件を契機に、一定度の後退を余儀なくされるとしても）

だからこそ、この「悪夢」を、革命的想像力として読み替えていく作業がいま問われているのだ、と僕は考える。その方法論は必ずしも明確ではないが、僕たちの意識／無意識が依然としてメディア化された表象によって構成されていることは確かであり、僕たちの革命的想像力もまた、サブカルチャー的豊饒さ（あるいは貧しさ）において表現される他はないだろう。そして、サブカルチャーの断片のひとつひとつに、歴史が刻み込まれているのだとすれば、僕たちはそれを寄せ集め、重ねたり、ずらしたりしながら、世紀末をではなく、あり得べき未来を（あるいは、あり得ない未来を）組み上げる作業を進めて行かなければならないだろう。

（平成七年五月末日・記）

オタクの王様、オウム問題を語る

岡田斗司夫

おかだ・としお：一九五八年生まれ。映像、ゲーム、イベントプロデューサー、東京大学講師。代表作に『オネアミスの翼』『不思議の海のナディア』『トップをねらえ』『プリンセスメーカー』『サイレントメビウス』など。著書に『ぼくたちの洗脳社会』（朝日新聞社より近刊）がある。Nifty Serve・GFG04070

徐容疑者の愛犬は「ロデム」

いきなりこんな話題で悪いんだけど、『機動戦士ガンダム・逆襲のシャア』っていうトンデモないアニメ映画、見たことある？　昔、TVでやってた『機動戦士ガンダム』の続編で、アムロとシャアというライバル同士が戦う話だ。

映画が始まって、いきなり宇宙空間の戦闘シーン。反地球組織・ネオジオン総帥のシャアは、小惑星5thルナを地球に落とそうとする。直径何キロもある隕石が地球に落ちたら大変だ。で、主人公のアムロは必死で、その落下を阻止しようとするんだ。そこでモビルスーツ（ロボット）に乗って戦う二人は、何と議論し始める。

「アムロ！　邪魔するな。地球の奴等を粛正してやるのだ！」

ち、ちょっと待ったぁ！　アニメ映画で、そりゃマズいセリフじゃないの？　ところが、それに対す

るアムロのセリフも又、説得力がない。
「止めろ、シャア！　そんなことしたら核の冬が来る！」

そりゃ当たり前だ。シャアは「核の冬」という被害を出すことによって人類を「粛正」しようとしてるわけだ。それを止めようとするセリフが「そんなことをすると核の冬が来る」って言っても無意味。自殺を思いとどまらせるのに「そんなことしたら死ぬぞ」って説得しているようなもんだよね。

で、なんでこんな話を最初にしたのかというと、大量無差別殺人を実行するシャアに対して、主人公アムロの言葉は何でこんなに説得力ないんだろう、と思ったからだ。

もう少し、この映画の話を続けよう。

映画のクライマックスでシャアは、核エネルギー内蔵の小惑星アクシズを地球に落とそうとする。ワンパターンな奴だ。かっこいい新型のガンダムに乗ったアムロは、それを止めるために必死で戦う。こで又、二人はモビルスーツで戦いながら議論だ。

「地球の奴等はいつまでたってもダメだ。だから粛正する！」
「そんなことをする権利は誰にもない！」
「アムロ、貴様はいつも邪魔をする。貴様がいなければララァだって……」
「ララァ？　まだそんなことを！」

ララァっていうのは前の戦いで死んじゃった女の子の名前で、この後は二人の『大宇宙をバックにロボットで殴り合いながらの痴話喧嘩』というトンデモない話が続く。まあこの辺はどうでもいいけど、やっぱり僕が気になったのはアムロの反論の説得力のなさだ。

アムロは「そんなことしちゃいけない」とは言うんだけども、決してシャアの「地球人類がダメだ」には反論していない。反論できないどころか、共感しているようにすら見えるんだ。つまり「大量無差別殺人」という方法には反対するけど、じゃあ「こ

のままじゃダメな人類」という問題には目をつぶっている。

アムロの行動は只のアンチテーゼでしかない。「その方法はダメだ」というだけで「だからこうしよう」というヴィジョンを出していない、情けない主人公なのだ。

もう、何が言いたいか判るよね？「あの事件」と、その報道や言論を眺めながら僕はこんな事を考えていた。

まとまった話にはならないけど、まあ聞いてくれ。

尊師、発明の「ファイナル・クリーナー」

僕が生まれて育った大阪は、奇妙な場所だ。もし君が、天王寺あたりで鞄をひったくられたとしよう。そいつはあっと言う間に人混みに隠れて逃げてしまう。君はその経験を大阪生まれの友人に語る。

「いやあ、スゴい早さで逃げられて……」すると大阪生まれの友人はきっとこう言うだろう。「そら、ヒッタクリの人らも商売やから、早いわなぁ」

大阪人はおおむね、「それが自分の商売かどうか」に敏感だ。関係ないことには「そんなんワシの仕事ちゃう」といって関わらない。倫理的・道徳的問題は「そんなこと考えて何ボの得になるねん」という大阪リアリズムの前に無力だ。

そんな大阪人の血は、僕にしっかりと受け継がれている。何が自分に関係があり、何が関係がないかは敏感な方だ。

しかし、そんな大阪人でもタイガースに関しては必死でスポーツ新聞を読み、勝った負けた、また負けたで涙を流す。ところが僕は、野球に関心がなかった。周りの大人も子供もタイガースに一喜一憂しているのを「アホとちゃうか……」とすましているイヤなガキだったわけだ。

ところが仕事の都合で東京に来て驚いた。この街は大阪人の僕にとっての「アホ」ばっかしだったのだ。とにかくあらゆる人が、国際紛争とか金融とか政治改革とか、「オッサン、それあんたに関係ないやろ」と言いたくなってしまう人まで語る語る。

確かにマスコミの人は、いかにも「これは大切な

問題ですよ〜。みんなで考えなくっちゃいけませんよ〜」と宣伝するだろう。だってそれが彼らの商売なんだから。誰もが、政治や社会問題に関して考えなくなったら、そりゃ彼らの商売は上がったりだ。でも、だからといって僕らがいちいち他人の商売の都合に合わせなくちゃいけないという義理はない。マスコミが商売だからって、僕らが情報消費者にならなくちゃいけない理由なんてどこにもない。

大学で講義をしているとき、よく学生に「毎日、新聞なんか読んでたらバカになるぞ」という話をする。するとこう反問される。「近頃の学生は新聞なんか読まずに、社会問題なんか考えないからバカだって言われますけど……」

おお、なんて「いかにも新聞なんかに載ってそうな意見」なんだ！　サラ金のコマーシャルは「どんどん借りて消費生活」に決まってる。新聞は「新聞を読め」というに決まってるじゃないか。みんな、消費者根性が染みついてるなあ。

恐妻家ばかりが愚痴をこぼしている酒場で、一人の男が叫び出す。

「なんて情けない野郎どもばかりだ！　大事なことは何もかも全部、かあちゃんに決められてよ！」

一人の男が悔しげに「じゃあ、おめえん家はどうなんだよ」と訊くと、

「俺のとこは、大事なことは全部俺が決める。環境問題、資本主義の行方、宗教問題なんでもだ。カカアなんかに口ははさませねぇ」

「じゃあ、嫁さんはなんにも言わないのか？」

「ウチのカカアはもっとつまんねぇことを決めている。息子の大学はどこにするかとか、俺の次の転職先とか」

「サティアンは『銀河帝国の興亡』のファウンデーションです」

このあいだ、高名な言論人の方と話をしたら「パラメーター」という用語が通じなくて驚いた。「それってバロメーターってこと？」と訊かれて、初めて「ああ、パラメーターという考え方そのものが、ゲーム世代の感覚なんだよなぁ」と思い知らされた

わけだ。

パラメーターというのはRPGゲームなんかで出てくる用語だ。例えばプレイヤーが操るキャラクターなんかを『生命力50、魔法力35、攻撃力40』というパラメーターで表現したりする。これを見てプレイヤーは「うーん、生命力に比べてちょっと攻撃力が弱いなぁ」なんて考えたりする。受験生が「俺、世界史が弱いなぁ」と考えるのと同じだ。

この「パラメーター」という考え方をベースにオウムを考えてみる。

何かを評価するときに一元的評価で切り捨てない。「どんな子供にも評価できる価値がある」と教えられて僕たちは育ったからだ。だから世間の「オウムはとにかく悪い。なぜ悪いかというと、悪いことをするのがオウムだからだ（同義反復）」という論調を訊いてもやっぱり納得できない。逆に「そんなに主張するのって、何が不安だから？」と疑ってしまう。

だから自分で納得できるように、オウムをパラメーター分解してみよう。

さて、ぼくはオウムの人たちや、その「やったと言われていること」を次の四つのパラメーターに分解した。

（1）志　……80点
（2）実行力……100点
（3）センス……0点
（4）頭　……0点

これは僕が他人や団体を評価するときに採用している基準だ。一つずつ、説明してみよう。

じゃあまず、オウムを誉める

『志』……「志（ココロザシ）」とは、この世の中を何とかしよう、と言う気合いの大きさのことだ。僕はこう言う奴に弱い。多少、人間的に問題があっても「みんなの役に立とう」という気持ちは評価する。

さて、無差別殺人で拉致監禁、と言われているオウムだが、僕はその「志」に80点をつける。この場合、手段・目的なんかは別のパラメーターで評価するからだ。

オウムの人たちは、僕らがついつい目を背けがちな環境問題、資源問題、軍備、国家論、そして「最終的に人はいかにあるべきか」、といった難問に挑戦し解決しようとしていた。それは彼らがやったと言われていることとは別に評価してしまおう。

だいたい今時、本気で「世界」や「未来」のことを考えてたんだ。他の人だって考えているじゃないかと思うかもしれない。けれどそれは違う。「熱帯雨林が砂漠化する」って言ったって「核戦争が起きる可能性が高い」って言ったって、結局「これから自分たちの問題として真剣に考えていかなきゃならない問題ですね」でみんな終わってしまう。「考えてどうするのか」の先がない。せいぜい「じゃあ割り箸は使わないで」と「自分ができる範囲のこと」ですませてしまう。本気で「自分が何とかしよう」とは考えない。

でもオウムは違った。本当にその先を考えてしまう。最終戦争が止められないなら、その後の世界を築こうと考えたんだ。世界を救う気のない人には絶対世界は救えない。実は「志」ってすごく大切なのだ。

『実行力』……これに関しちゃオウムは文句なく100点だ。僕は滅多なことでは他人に「負けた」と思わないイヤな性格だけど、実行力ではオウムに負けたと認める。いや、殆どの日本人が完敗だろう。

まず「世界を、日本をこうしよう」というヴィジョンがある。次にそのヴィジョンを元に、選挙にたくさんの信者を出馬させたり、毒ガス工場を作ったり、ロシアに武器を買い付けに行ったり、どんどんやってしまったこの実行力。

そんなことをやっている人なら、いくらでもいると考えるかもしれない。でも、その人たちは仕事でやっている。仕事でやっている人はたいてい長い年月をかけて、上司からノウハウを学び、コネを引き継ぐ。その中でも優秀な人が、自分なりに改良したり拡張したりするわけだ。

自分で事業を興す人も、それまでのノウハウやコネを使う。また、同業者のやり方を勉強したり盗んだりもする。

その点、オウムには上司もノウハウも同業者もなかった。それはものすごく大変なのだ。

たとえばあなたがある日、麻原ショーコーから数億円の金と理系の優秀な学生数名を預けられ「サリン工場をつくれ！」と言われて、できるだろうか。もちろんこの場合、倫理的問題を抜きにして、だ。たいていの人は途方に暮れ、まず何をしたらよいか、誰かに聞きたくなると思う。しかし、そんなアブナイことは誰にも聞けない。

誰にも聞く人のないオウムは、それでもやってしまったのだ。武器の買い付けにしてもそうだ。軍隊の武器買い付け係の人が予算に沿って定期的に武器を買い足すのとは訳が違う。何のルールもルーチンもないところからコネクションを作り、法律の目を盗んでやり遂げたのだ。僕自身、世界で全く前例のない事業を興した経験があるので、これがいかに大変なことか考えただけでも寒気がする。公安当局がビビるのも当然だ。これまでの過激派とは「実行力」に圧倒的な差があるのだ。

オウムは何がダメだったのか？

これに対し、オウムの『頭』と『センス』は0点だ。まったく情けなくなるほどの点数だなあ。

頭というのは方法、つまり段取りのことだ。

いったいどんな見通しだったのか？

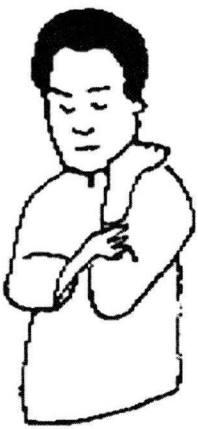
まずあの方法で順調に進めば本当に世界を変えられる予定だったのか。あんなに強引な方法で証拠を残しまくって何を考えていたのか。

とにかくあの教祖のヴィジョンは単なる叩き案にさえもならないことが判らないか？

超能力があるのは、認めてもいい。だからといって尊師の言うこと、そのまま信じるか？　スプーン曲げが出来る奴にもバカはいる。本物の超能力者だからと言ってペテン師じゃない理由にはならない。

ミニ国家を作って日本から独立する、というコンセプトはいいとしよう。独立を承認させるために、抑止力としての「貧者の核兵器」BC兵器。国連の常任理事国クラスに独立を承認させるためにロシアに近づく。抑止力兵器だけでは前線を維持できないので通常兵器の買い付け。

でもさぁ、この国の主要産業って何？　輸出品が「宗教」で、輸入品が「お布施」だったら、これは国際的に嫌われる。よその国の寄生虫だもの。独立、じゃないのなら日本国の乗っ取りか？　自分たちの宗教を中心にして日本国民がオウムの信者になると考えた？



頭が悪いというのは、自分たちの主張や行動に客観的になれないこと、相対的に見れないことだ。

センスというのは、何がみんなを喜ばせるか、という感性のこと。これが良くなければ他の人がついて来てくれない。ところがこれが「最悪」なんだ。

あんなヒゲダルマが頂点で、本当にみんなは救われると思ったのか？　どんなに体にも良く、環境にも優しいからと言って、毎日あんな粗食に耐え、お祈り体操ばかりの生活が、本当にみんなを幸せにできると考えたのか？

あのネーミング等のセンスはなんだ？「ファイナル・クリーナー」だと？　よく最後に「D」をつけるのをガマンしたな。尊師本人が作って歌ってる「アニソン・特ソンもどき」もトンデモない。おまけに音痴だ。尊師は「ガンバロン」辺りからカラオケ修行をし直せ。

修行場が汚い。あの汚さには見覚えがあるぞ。オタクの部屋とかサークルの溜まり場だ。

最終解脱してベンツ、ビフテキ、メロンか？　何か恥ずかしくないか？

せっかく金があるんだから、使うなとは言わない。もっとセンスのいい使い方をしてくれ。自衛用だったらロールスロイスじゃなくて対テロ装備のリムジンを買え。いいものが喰いたいなら、せめて海原雄山ぐらいのことをしてくれよ。

プラズマ兵器？　あすかあきお、読んだな

こんな本を読む「あなた」という人は「オウム事件に関しての新しい情報が知りたい」というより「オウム事件に関して、どう考えたらいいのか考えちゃってる」という人たちだと思う。

興味の対象はどちらかというと「オウム事件」そのものより「オウム事件で起こった大論争」。しかしどんな論争であろうとも、中心となっている対立点、つまり「両者の利害」がはっきりしないと何を話しているのかも解らなくなってしまう。で、意外なことに「右翼と左翼の対立」という視点で見ると、この論争、いきなり解りやすくなる。

右翼と左翼の対立？　社会主義が破れ去った現代で今更？

そう、「オウム論争」の本質は『平成右翼』と『平成左翼』の対立だ。

まず自分の勉強不足から告白しよう。いやあ、勉強不足だった。僕は「いわゆる右翼と左翼」に関して、全く思い違いをしていた。

僕のやっている「マルチメディア・ゼミ」は、ヘンな講義、として東大生に知られている。昨年は声優の女の子をアシスタントにしたバラエティ番組形式だった。今年は毎回、各分野のゲストを迎えて対談風に進行している。

この間、ゲストで一水会の鈴木邦男氏に来ていただいた時のことだ。当日の学生たちのレポートには「右翼の人、と聞いていたから怒鳴りまくりの軍歌かけまくり、と思っていたのに論理的な人だった」というものが多く、鈴木氏も苦笑していた。

このゼミで私は鈴木氏に「ところで右翼とは何ですか？」と聞いた。当然、「民族主義とは～」とか「天皇機関説～」とか、そんな答えを期待していたわけだ。ところが鈴木氏の答えは、全く意表を突いたものだった。

「左翼に反対するのが右翼です」

「そ、それだけですか？」

「それだけです」

つまりこういうことだ。日本とアメリカは一九六〇年に「日米安全保障条約」という奴にサインした。もし日本に敵が攻めてきてもアメリカ軍が守ってくれる、という条約で、もちろん敵というのはソ連のことだ。何でソ連が敵か、というとソ連は「共産主義国家」だからだ。

で、左翼というのは「共産主義は素晴らしくてソ連や中国は良い国だから、日米安保条約なんかケシカラン」という意見を言う人。右翼というのは「アンチ左翼」だから、当然主張はこうなる。

「アメリカは日本を占領したけど天皇制は残してくれた。共産主義者は天皇制反対なんだから許せん。だから共産主義者の言うことには全部反対するぞ。当然、安保には、ええと、賛成だ」

安保以前には色んな思想が日本にはあった。「天皇制反対の民族主義者」や「反米国粋主義者」や「天皇制賛成の共産主義者」なんかもあったわけだ。当然、言論界はグチャグチャの泥沼。おまけに日本全体が政治運動で盛り上がっていたもんだから、一般大衆にも判りやすいスローガンなんかが不可欠だった。

ところが大衆というのは判りやすいのを好む、つまりバカだから「思想的対立なんかどうでもいい。俺たち、何に反対すればいいの？」というノリでしかない。そこに登場した『安保』という命題を前にして、それまでグチャグチャだった日本の思想・言論界はいきなり二分された。

①「安保に反対が左翼」
左翼は右翼の言うことに全部反対。右翼に反対する奴は味方。
②「安保に賛成が右翼」
右翼は左翼の言うことに全部反対。左翼に反対する奴は味方。

すごく乱暴にまとめたが、これがついこの間までの日本の思想・言論界のフィールド・マップ。もちろん左翼同士・右翼同士の対立や、その他無限に混み合った『ダンジョン・マップ』もあるわけだ。

この対立の上でいろんな問題は討議される。例えば右翼の立場でベトナム戦争を考えてみよう。「ベトナム戦争賛成・反対」で右翼の意見に統一が出るはずがない。強国の非道に対して一矢報いんとする覚悟は立派、という右翼がいてもいいわけだ。

しかしベトナム戦争に反対してしまったら我々共通の敵、左翼どもを利することになる。だから米軍基地デモに繰り出す左翼たちを粉砕する、という行動が導かれる。けっして米軍を支援しているわけではない。左翼に反対しているのだ。

左翼の人たちも「戦争反対」という訳ではない。共産国家に対する暴行、だからベトナム戦争反対なのだ。だから「ベトナムがソ連の後押しでカンボジアへ攻め込んだりする」なんていう事態に関しては発言できない。左翼とは思想ではなく、あくまで「右翼から共産思想を守る」人たちのことだ。

で、こんな対立はいずれ形骸化してしまうのが宿命。いつの間にか「右翼・左翼」という呼称もイメージが悪くなって「保守・革新」という呼び方になった。対立の根っこも「共産主義思想」というのがぼやけてきてしまった。

「なんとなく国際義務優先で言論の自由反対、が保守派」
「なんとなく人権優先で権力批判、が革新派」

このあたりをホームポジションにしているが、もちろん「ファシスト保守派の批判をするのが革新」「平和ボケ革新派の悪口を言うのが保守」という悪口合戦がメインなのは同じだ。

補助線でラクラク・クリア！

そこへ起こったのが、いわゆる「オウム＝サリン事件」と「オウム論争」だ。今までのような、こんなぼんやりとした対立では一般大衆様は納得しない。混乱、異論の対立が、安保問題によって「右翼・左翼」の二つに分かれたのと全く同じ状況がやってきたのだ。

「オウム論争」によって今、『平成左翼』と『平成右翼』というグループができつつある。日米安保問題の時と同じく、一つの問題に対する態度で言論人は今、二分されつつある。『平成左翼』と『平成右翼』の簡単な見分け方・代表的なキャラクターを紹介しよう。

小林よしのり、江川紹子、朝生のレギュラーといった、「島田裕巳を非難している連中」が『平成右翼』。

彼らはあくまで「人間のあるべき姿」や「国際国家の現実」に立脚している。「人間には本質的に正しい生き方がある。社会に害を成さない言論の自由は認める」が主張の特徴。

鈴木邦男、宅八郎、パソコン通信の主流派といった、「国家やマスコミを信用していない連中」が『平成左翼』。

彼らは「人間のあるべき姿なんか無い」「オウム事件程度は情報社会のリスクの一つにすぎない」と考えている（と思う）。「思想・主張は自由。行動のみを法律の範囲で取り締まれ」が主張の特徴だ。

僕も「オウム論争」に関しては混乱していた。しかし、難解に見える幾何の問題も補助線一本で、いきなり楽勝問題に変わる。『平成左翼』と『平成右翼』という補助線を引いた瞬間、オウム論争は「誰と誰が、何についてケンカしているのか？」が解ってしまった。

オウムに対する国家・警察のやり方に「いいぞ頑張れ！生ぬるいぞ！死刑だ」という右翼と、「ちょっと待った！不当検挙だ！権力のマインドコントロール」という左翼の対立だったのだ。そっか、右翼と左翼なんだから悪口合戦も当然か。

よく解って良かったね。

『少年ジャンプ』の中で生きる手錬——『アキラ』の結末とオウム

村上隆

むらかみ・たかし　一九六二年東京生まれ。東京芸術大学大学院博士過程修了。美術家。代表作「DOB君」「ヒロポンちゃん」他。イベント制作も手掛け、アートメディアステージ「Tokyo Z」（出演者＝高城剛、竹熊健太郎、岡田斗司夫、松本弦人）や「P-HOUSE」プロジェクトルームにて、江川達也「エロボップ」展等をオーガナイズする。

空間プロデューサーやポストモダンの建築家たちが、バブルといわれた八〇年代につくった、いつ壊れてもおかしくない、その場しのぎの都市の街並み——そうしたバブルの文化に対する結論を、わたしは「マンガ」の中に見つけだした。

かつて『北斗の拳』や『アキラ』が、『マッドマックス』や『ブレードランナー』のイメージと絡み合う形でディストピア調の雰囲気を作り出し、そのエフェクトのみで八〇年代の物語は組み立てられていた。設定を最終戦争後として、そこからの再建をドラマにする。つまり、一度、過去をゼロ地点に戻すことでしか、立脚点を作れなかったのだ。『危険な話』で原発の危機を訴えた広瀬隆がヒットしたのも、終末への強い「願望」が日本人にあったから。物語をゼロからつくりあげたかったからだ。

そんな時代の中で始まった長編マンガは、九〇年代に入ると、いかに決着をつけるか、着地点を探し出せるかで、右往左往していた。そのたとえを、大友克洋の『アキラ』で語ってみよう。アニメーション映画の『アキラ』のラストシーンは、典型的な、安易な決着

であった。カタストロフ→覚醒→宇宙。ホワイトホールの中から聞こえてくる「僕の名は鉄雄」の声や、瓦礫がDNA状をして『2001年宇宙の旅』のスターゲートよろしく、画面の奥へとイメージを誘う、日本のSFアニメーション作品に多くみられる安易なエンドレス風なラストシーン……エスニック風味のガムラン調の曲が、強く八〇年代後半の気分を盛り上げる。

もともと大友克洋は、七〇年代中盤より登場した、完全に新しいタイプのマンガ家だった。手塚治虫が、まるで動いているような、映画における流れるような画面構成を、「止め絵」のマンガの中で構築したならば、大友は、凍っているような止まっているような、切り取られたような画面構成を、ゼロックス＋ヴィデオ・エイジとでもいえそうな、新しいコマ割りによって開発。手塚の運動曲線が重力から来るものだとすれば、大友のそれは無重力系とでもいえようか。それはストーリーにも言えることで、落ちが落ちない、寸どめの小話風、肩透かし、物語の無重力……。

アメリカのディズニーの影響を受けて、古い意味でのアメリカのバタ臭さを目指した手塚。彼がつくった日本マンガ史のひとつの流れを、大友は大きく変えた。気分で物語を終わらせられるというシステム。かくして、藤原カムイの『チョコレートパニック』のように、はじめから寸どめをコンセプトにマンガを構築する、大友ナイズされたマンガ家が続々と登場していった。

大友自身は、その後マンガの「ステージ」を上げるべく、次々と新しい実験に着手する。『童夢』において、映画を完全にシミュレートすることに成功。寸どめのストーリー構成を残しつつ、手塚の想い描いていた映画のような漫画を手に入れた。それは、まさしく八〇年代終盤のムーヴメント、アートにおけるシミュレーションという文脈を見越したかのような、圧倒的にコンセプチュアルなマンガであった。その完璧さは、アート界でのジェフ・クーンズを上回る徹底さで貫徹された。

そして、マンガ版『アキラ』のスタート。『アキラ』は、シミュレーションを手に入れた大友克洋が、今度は「オリジナリティ」および「ポピュラリティ」を手に入れようとした作品だ。『童夢』、『気分はもう戦争』、および『さよなら日本』にしても、日本マンガの持つ大衆性、たとえば『少年ジャンプ』系マンガなどよりはずっと、マニアックな層からの支持が強かったはず

だ。そしてついに彼は『アキラ』を生みだし、「ポピュラリティ」をも手に入れて、物語の終わったといわれた八〇年代に、物語の再建を目指して、というよりは作家大友克洋がストーリーテラーとして立ちうる立脚点を探そうとする冒険を開始することになる。

『アキラ』は、アニメーションやTシャツ、トレーディング・カード等の商品で、海外におけるポピュラリティを戦略的に造り上げてゆき、手に入れている。しかし、はたしてマンガ『アキラ』の中で物語は手に入れられたのか。

そして、ついに『アキラ』が完結したその時、八〇年代の物語の「終わり」について考えざるをえなかった。『アキラ』第六巻の巻末、四三二〜四三三頁にかけての見開きに、主人公である金田たちがバイクで瓦礫と化したビル群の中を疾走していくシーンがある。そこでは、瓦礫のビル群がイメージの中で再建されてゆく。アキラが、そして鉄雄がすべてを破壊したその街が、フィルムのコマを戻すように元に戻っていく。

再建されてゆく街、未来のTOKYO、ディストピアからユートピアへ。そして最終ページに書かれる手塚治虫へのオマージュの一文。十年をかけた「大作」の終わりが、さんざん迷いに迷ったかにみえた大友克洋が答えを出した。

なんと「物語」は手に入れられなかったのだ。

そして、このラストシーンによって『アキラ』は、現代のもっとすぐれたマンガ論となった。否。マンガ論としてしか終われなかったのだ。ビルの崩壊から街が立ち直っていくコマ戻しのシーンをも克明に描ききったその場面は、「手塚＝未来＝ユートピア」が目指してきた物語性への先祖返りを余儀なくされることで、未来を肯定する手塚に対する、廃墟の人＝大友の敗北宣言にもみえた。繰り返される崩壊は、けっきょく物語にはなりえなかったという、壮大な敗北宣言。しかし、少なくとも彼は、そのことを語り切った！

同じころ、『ドラゴンボール』におけるカタルシスも、誰もが知るように自家中毒を抱え込み、それをなんとかシステムに変えてゆくことで延命していた。主人公は、死んで生きる。天使の輪をつけて、死んでいるのに生きている。強敵―超強敵―超々強敵と繰り返される敵も、死者に痛めつけられるという理不尽。堂々めぐり。そこにしか解答をつくれずに終わった。

九〇年代に入って物語のカタルシスは、『あしたの

ジョー』や『宇宙戦艦ヤマト』のように、主人公が「死」を向かえるだけではつくれなくなってしまった。そこでは、「死」をも乗り超えていく堂々巡りが、まるで修行のようにえんえんと繰り返される。

『少年ジャンプ』の中で生きる手錬――読者と作者の修行は、比叡山の1000日修行のように終わることなく続いていた。それが、九〇年代マンガの唯一の生きている証。『ドラゴンボール』というシステム＝修行において、鳥山明自身がアジャリになる日を、読者は望んでいたではないか。また、マンガのパースペクティヴをつねに客観視していた大友克洋は、マンガ『アキラ』において繰り返された街の崩壊シーンによって、このジャンプ的もしくはドラゴンボール的な堂々巡りにおけるマンガの可能性をも実験したのではないか。

延々と続いていくシステム――ここが現在の争点だ。これを肯定するのか否定するのか？

オウム真理教はそんな時代に、なにがなんだかわからない延々の繰り延ばしを、『少年ジャンプ』の対戦マンガのようにつくり続けてきた。ゆえに、対戦相手よろしく、国家、異教徒、フリーメーソンと、次々と超々強敵を設定し、それに闘いを挑み続けるストーリーを仕立て、トーナメント表を作り、ホーリーネームというリング名も与えられる。

そして現在、教祖が逮捕されて一部の幹部が脱会を表明してもなお、信者がオウムを離れない理由は、『ドラゴンボール』の悟空よろしく、主人公が天使の輪をもって、死んでいるのに生きている生き物に、死者が闘いを挑めるパラドクスを受け入れられる時代だからなのではないのか。死んでいても生きていても何をしていても、システムができてしまっている以上、物語の起点はまったく無視され、堂々めぐりの自家中毒に身を浸し、まさに終わりなき修行が繰り返されていくことが大事なのだ。

そんな中で、大友克洋が唯一、同時代的中毒症状を自覚し、ケリをつけた。手塚治虫というマンガの起点まで引きづりだし、現代のパースそのものを現出させていたのだ。

あらためて『アキラ』という作品に深い感動を憶えてしまう。

キンタマを出したオウム真理教

伊藤ガビン

いとう・がびん：一九六三年神奈川県生まれ。成城大学経済学部卒。コンピュータホビー誌の編集を経て、ポストーク社を設立。文筆／編集のほか、映像・CG制作、ゲームデザイン等に従事する。主な展覧会に『アノーマリー展』（レントゲン藝術研究所）、著書に『魔窟ちゃん訪問』（アスペクト）。

確認しておこう、オウム真理教は人を殺した。そして面白かった、と。

もっと正確に言えば、人を殺したからこそ面白かったということだ。

人殺し（笑）。

ですかね。

人を殺すことの是非についてはここで私のようなものが論じてもしょーがない、っつーか、悪いですよねフツー。まあ、戦争とか死刑とか場合によっては正当化されてどーしたこーしたとかいう話もありますが（オウムのやっているのは戦争だし云々みたいな～）、それとこの文章で言いたいこととはまったく関係ないようでいて無関係である。

人殺しはどうもよくない。

でも、面白いときもある。なんちて。

そんなノンキなところから考えてみたいというのが私の立脚的のようでいて立場なのである。

今回のオウムとその事件の報道をかっぱえびせん

等を食しつつ見ながら、何度も考えたことのひとつが「これってオウムが人をひとりも殺してなかったら、これだけ面白いだろうか？」ということだった。

これは「オウムが無実だったら……」というのとは違う。ここまできてそんなことがあったらそれはそれで十分面白いが。

そうではなくて、今ある事実の中で殺人だけが欠落しているようでいて欠けていたらいったいどうだったのか？　それでも面白いのか？　ということだ。

はっきり言って、つまんなかったんじゃねーの、って僕は思ってるわけね。

オウムがこれだけ騒ぎを起こしているのに、実は殺人をおこしていなかったとしたら……これも実は面白い。だけど、実際には殺人事件じゃなかったら、こんな騒ぎになってないわけで、こんな騒ぎにならないってことはどーもインパクトに欠けてたってことだ。

殺人も犯さずに毒ガスをいっぱい持ってたり拳銃の部品を無闇に製造したならば、それじゃ、あんただの業者だよ、と言いたい。よくてマニアですか。『ニュース23』というよりは『トゥナイトⅡ』が取材に来てしまう。これでは万人が楽しめるとは言い難いし、楽しめたとしても2秒で飽きて忘れ去られていたことだろう。

殺人という派手なスペックが加わって初めてオウムの事件は強烈な魅力を放ったのである。

もちろん、彼らの妄想的なプランの数々は、それぞれを見れば十分に鑑賞に耐えるものだったと思う。仮に美術作品として見てみよう。

オウムのやってきたこと、作ってきたものを、ある種の「過激」な作品として見ることはたやすい。テクノクラートとかそーゆーので見慣れてますからな。かく言うワタクシも、九〇年には「レーザーを使って人を失明させるマシン」という作品を制作してるし、九四年にはＮＨＫ・ＢＳ-2のテレビ番組『無重力ＴＶ』においてＮＣ機器を用いた「印鑑のインスタントな偽造」制作パフォーマンスを行っている。

特にコンピュータ及びハイテク機器を用いた偽造のプロジェクトは、オウムによる免許証等の偽造とほぼ同じ内容のものである。ただしオウムはそれを犯罪に用いたが、私は犯罪にならないような使い方

をした。

こうした一歩間違えば的な犯罪、あるいは教唆としてお縄になる作品を作る場合、美術家としての言い分けは非常に簡単で「既存のシステムの持つ脆弱さを白日の元にさらけ出す」とかなんとか言っておきゃあいいのだ。いや、そんなことは言わずとも勝手に周りがそんな風な解釈をしてくれる。トホホ。しかし、実際には作者は単に面白いと思ってやっているわけである。オウムだって、免許のひとつやふたつ盗んだ方が早かろうに、銃だってテキトーに密輸した方が早かろうに、それでも造ってしまうのは、それが面白かったからなのではないかと私は思う。

つまりほとんど私と同じ気持ちだったと。

それでも美術家は法律の範囲内にとどまり、オウムはそこをやすやすと逸脱した。

まあ、そこの違いが重要だよね～、犯罪になっちゃ元も子もないっすよね～、という意見もあるだろうし、もっともなわけだが、オーディエンス（テレビの視聴者から美術館へ足を運ぶ人たちまで）は、そんな小さな差異にまで気を配るほど注意深くはない。それ系の美術家はやっぱりオウムに負けたんだと思う。だって、僕が偽造のプロジェクトの発展形として実行しようとした「データによってどこでも銃器を削り出す」プランも、今となってはそんなもの誰も見向きもしないはずだからだ。

出発点もゴールも違ったものだが、結果的には「あらゆる信用の土台となっているものが、ハイテクノロジーによって容易に複製可能である」とか、「ハイテクノロジーと3次元ハードコピー装置が妄想に実体を与える」みたいなことを世間に知らせたのはオウムであった。自分で作品を制作しなくてすんだぶんだけオウムに感謝したいくらいである。ありがとうオウム！

それでもオウムは犯罪者だ。

犯罪者を美術の文脈でほめてどーする？　という意見ももちろんあるだろう。

だが、いわゆるハッカーの存在についてはどうだろう。システムを打ち破りデータを盗み出す、いわゆる悪者としてのハッカーがマスコミに登場するとき、ほとんどの場合はロマンの皮を被せられ、巨大な敵に挑む孤独なアウトローとして語られる場合が多い。まるで芸術家か何かのように扱われているこ

ともしばしばである。

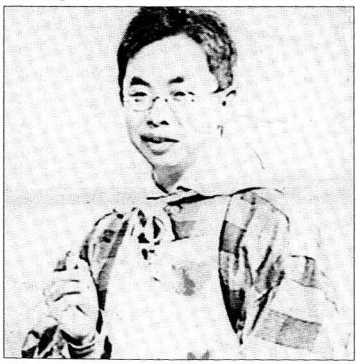
しかし彼らもまた犯罪者である。

おそらくはハッカーについての人々の認識は「難しいハードルを乗り越えて、データを盗み出すプロフェッショナル」みたいなもので、そこにあるのは理系的なあたまのよさや、魔術にも似たコンピュータ技術に対する畏怖とコンプレックスからだらしなくへりくだったココロの作用によって生み出されたものだと思う。だが、ハッカーにも優秀なものもいれば、まったくダメなヤツもいるのである。

まったくダメなハッカーは、いたずらが成功しない人物を指すのではない。いたずらの質が低級なヤツのことを指す。コンピュータのネットワークに脆弱な部分があるのはこれは自明のことである。むしろ、脆弱で危険をはらむシステムにむかい、その脆弱さをだましだまし危険を避けて使うのが知性であり、必要とされている倫理なのだと思う。データを盗む／壊すことが可能なのは誰もが知っている。でも、やるヤツはいない。それは、地下鉄のホームで他人の背中を押して殺しておいて、「地下鉄システムの脆弱さを暴く」と大声で叫んでいるような確信犯に似ている。んな、アホな。

では、優秀なハッカーについてはどうだろう？また、その優秀かつ犯罪者のハッカーとオウムとの間にどれだけの差異があるのだろう？

僕はその差異のコアの部分ってのはやっぱ人殺しなんだと思う。ハッカーじゃない話でもいいです。もっと芸術寄りの話だったら赤瀬川原平の千円札の事件や一連の猥褻裁判を例にとって考えてもいいだろう。それなりに当時は世間から冷ややかな眼で見られつつもウケたかもしれない、しかし少数の偽札



NHK-BS-2「無重力TV」(94)にて「印鑑のインスタントな偽造」制作パフォーマンスを行なう筆者、ガビン氏。

やマンコの毛では、オウムほど人を熱狂させることはできないよね。タブー順位の高い殺人がなくちゃね〜、気分盛り上がんないよね〜、じゃないっすかね？

殺人なくしてエンタテインメントは成り立たないっすよ〜、とウッカリ言ってしまってみたい。

殺人があってはじめて、オウムのほかのバカバカしい妄想にもつきあうことができた。

ではどうして殺人が必要なのか？　僕の持っている結論は、殺人が取り返しのつかないことである、という理由で魅力的なのだと思う。奇しくもオウムがこの事件で明らかにしてしまったように、ハイテクノロジーによって実現される環境は、徹底して「取り返しのつく世界」である。言い換えれば、「書き換え可能な世界」である。

免許証などの信用の寄りどころの偽造に始まり、親から貰った唯一無二の顔の変形（整形）、ＤＮＡふりかけご飯（遺伝子操作っすか？）、オウムは徹底して世界の「書き換え可能」化を明らかにしてしまった。ついでに生命（というか現世っつーか今生）でさえ「では来世行ってみよ〜、ポア！」という調子で「書き換え可能」であるとしたが、それはジョーシキ的には受け入れられなかったみたいね。

いずれにしろ世界の「書き換え可能」化がすすんでいるのは明らかで、たとえば従来のお手紙と、現在のE-mailでは、投函後の訂正のカジュアルさには大きな開きがあり、すべてが変化の途中であるという感覚はメディア環境の変化に伴い繰り返し繰り返し種子を埋め込まれ続けることになるのだ。しかしながら物理世界でなおも不自由な肉体にとどまることを強制されている我々だ、反動として（バランスをとるために）書き換え不可能なこと＝取り返しのつかないこと、に対するやみくもな希求が強まりまくっても不思議なことではない。

我々のエンタテインメントにとっては殺人は必要不可欠のものなのだ。なんちて。殺人は「殺人的なもの」（わかりにくいか？　殺人に類する暴力、とか言っておきます）では代替不可だが、『「殺人そのもの」のようなもの』、とは代替可能かも、と思っているのだが、そのへんはまた後で。

さてエンタテインメントとしての殺人について考えてみよう。これはなにも変態殺人ビデオなどにつ

いて語ろうとするものではない。なんつーか、みんな実は殺してるじゃ〜ん、みたいな話である。ひとつの例として交通事故を挙げよう。日本で毎年発生している交通事故による死者の数は約1万人である。1万人というと、阪神大震災の死者数よりも多いというとんでもない大災害である。しかし、交通事故死者1万人という数字は、死者数の少ない小さな事故で分割払いにされ、小さな事故は「仕方ないこと」であり「よくあること」として穏便に処理され続けている。これを今さら「1万人も死んでいるのは絶対に何かが間違っているので、道路も行政も絶対に人が死なない仕組みに作り替えよう」と叫んだところで、「アホか」「不可能」の一言で葬り去られてしまうだろう。

だが実際には歩道と車道の完全な分離や、クルマの安全性能の抜本的見直しと交通ルールの改正（時速5キロ制限とかね。人命尊重のためにバイクのヘルメット着用を義務づけるのと制限速度5キロとの間にどんな違いがあるっていうんだ？）などで、かなりの部分人命を助けることが可能なのである。

ではなぜ不可能と人は声を揃えるのかといえば、そんなことになったら面白くないからだ。正確にいえば、それじゃ商売にならん、ということだ。1万人死ぬことよりも、現在の自動車環境が持つ経済効果の方がプライオリティが高いということである。「人命よりも経済」という原則はこれはもう日常のあらゆる場所で見られる。

ところが、このルールがエンタテインメントに対して適用されることは滅多にない。経済効果が期待できようが、結局のところエンタテインメントは人命などにかかわる場においては「冗談を言っている場合か！」的な存在なのである。クルマに乗ることや、ヤマト便で運ばれてくるものを受け取ることもエンタテインメントだが、そこにはフィルターがかかっている。むき出しのエンタテインメントは悲劇に対して常に無力だ。だが同時にエンタテインメントは取り返しのつかない悲劇を導入しなければならない。すべてが「書き換え可能」になってしまえば、それはフィクションだけの世界になってしまうからである。フィクションは、ノン・フィクション（そんなもんないという意見もありましょうが）と比して、体験をシェアすることが難しいし、大きな出来

事そのものが存在できなくなってくる。そして人は、大きな出来事をシェアすることをこれまで必要としてきた。

わたしはある意味で、湾岸戦争を評価する者である。なぜなら、湾岸戦争ではあまり人が死ななかった（ベトナムとかと比べてね）。

しかし、アメリカのどうにもならないくらいにパンパンに膨れあがった軍産複合体のガスを抜き、人々の記憶に残るショーを展開し、国力を見せつけた。という意味では、対人命コスト的に優れたエンタテインメントであったということができると思う。

キンタマのでかい男

もちろん死にたくない人を殺したりね、許されざる行為が無数にあったわけだけど、悪意さえ感じさせずに人は毎日、やわらかいシステムの中で人を殺し続けているわけで、それと比べたら正直だよな、とか口をすべらせてみたいわけである。

オウムの場合はどうだったのか？　最終的に何人殺したかわからないが、つまんないバスの転落等で高校生が１００人くらい死んだりすることとくらべれば、メディアへの露出や人々の記憶に残るエンタテインメントを提供したという点で、対人命コストは低く押さえられた優秀なものだったと言わざるを得ない。困ったものである。

よし、強まった！

ここらで手のひらを返してオウム批判をしたい。私はオウムは案外バカで面白かったけど、つまんなかった。つまんねーんだよ！　という意見の持ち主である。

だって人殺しちゃうんだも～ん。人殺すのはよくないっすよ。なんちて。いや、いいか悪いかは別にいいんだけど（よくないか？）、今どき人なんか殺

してもそんなインパクトないっすよ。っていうか、やっぱ下品なんじゃないっすか？　人殺しって、宴会芸でいうと「キンタマを出す」ということに相当すると思うんですわ。場所や年齢によってはキンタマを出すのは恥ずかしかったりするし、そんな中でキンタマを出すのはそれなりにウケたりする。でも、キンタマはいつか出してしまうもんだってことくらい今どき誰でも知ってますよ。キンタマ＝過激は形骸化してるっていうか～。地下鉄のホームで人を突き落とすのとあんまり変わらないと思う。

殺し方のアレンジはいろいろと考えたってことはわかります。電子レンジでチンしたり、レーザー兵器とかね。面白いと思った。でもそれは結局キンタマを出してしまうことで場をしらけさせてしまう。

オウム真理教の大きな特徴は（教義も含めて）、あいだをすっ飛ばして直接核心に触れるということだったと思う。それは魅力的だった。ゲームで言えば、いきなり最終面に入ってしまうような方法。それはそれで過激ではあるんだけど。それは裏技ではなく、人がわざわざ遠回りしていくところを、単に直線で結んだだけだったのだと思う。そのためにプログラムではなくてデータを注入したのだと思う。その勇気ある短絡はいつしかただの安直になり、ついにはバカ相手に「本来はまったく関係ないけど、間違ってもいないもの」まで取り込むことにしてしまった。つまり焦りすぎた。

僕らが求めていたのはキンタマではなかった。キンタマはもう見飽きている。

プロセス、プログラム。

そんな回りくどいことを切断して短絡することがオウムの魅力だったのだろうが、やはり僕らの見たかったのは見慣れたキンタマでなくて、キンタマではないキンタマを発見するためのプロセスだったのだと思う。

データを入れ換えるぞ！

いやあ、データは重いっすから、シェルとかスクリプトとかプログラムをください。他人のデータじゃ融通きかないし。

使ったモデルが古すぎた！

僕たちに必要なのは「殺人」そのものではなくて、殺人の「インパクト」だった。あるいはその「インパクト」を得るためのシステムだった。なんちて。

カルトとしての父権制

小谷真理

こたに・まり：一九五八年富山生まれ。北里大学薬学部卒。生物薬品製造学専攻。湘南赤十字血液センター検査課を経て、現在、SF&ファンタジー評論家。主な著書に『女性状無意識』（勁草書房）、共訳書に『サイボーグ・フェミニズム』（トレヴィル）などがある。

オウム的創造力

「あのダサさがゆるせねえ」と、言ったのは友人のアニメ・メカ・デザイナー。もちろん、ヘッドギアを指してのことです。「おれにまかせてくれりゃ、もっとカッコいいのをデザインしてあげたのに」って。これは勿論冗談ですが、究極のアマチュア集団「オウム」を見ているとつい、そういう気分になってしまうことが少なくありません。アマチュアの天衣無縫さと洗練されていない粗雑さが際立っているときには、妙にクリエイティヴィティを刺激する場合があります。見ているこっちが自由参加しやすい変幻自在な構造で、だれでもどこでもいくらでもおもしろく語ることが可能な「原材料（ロー・マテリアル）」、参加者自体の「語り」の出来に依存するエンターテインメント、それがメディアを通して得た「オウム真理教」の印象ですね。

とりわけオウム報道は、一連の対象がノンフィクションであるにも関わらず、フィクションの、それもエンターテインメント物語の脚色と非常に相性が

よかったようでした。これは、テレビドラマで『もう誰も愛さない』というジェットコースター・ドラマが登場したときの衝撃に似ています。それまでのテレビドラマといえば、だいたいワン・アイディアで、アイディアそれ自体のセンセーショナリズムとテーマ追及で充分間にあっている感じでしたから。ところが『もう誰も愛さない』は陳腐でありきたりなステレオタイプのプロットを無数かつ高密度にドラマ内部に溶かし込んでしまっていて、「あ、こういうやり方もあったのか」と先の読めない何でもありの展開に目を開かれたものです。オウム報道の場合、ハイパーテクスト的というか、テーマパーク的というか、ワン・カリスマの作るひとつのステレオタイプな物語というのではなくて、信者や視聴者の数だけ——つまりマスの分だけ——物語が重層化している感じがありますね。

カルトとしてのメディア

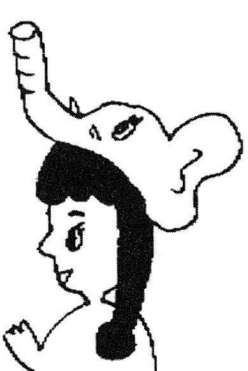
いまだに現在進行中の事件を語るのは気が進まないんですが、一応ぼんやりと気がついていることを言いますと、もう完全に重層化したメディア社会のなかに私たち自身が住んでいるのね、という感触です。オウム真理教自身、肥大したメディア時代の宗教といった感じが強いし、メディアの特質をよく知っている気がします。それも意識しているというより、メディア肥大社会ハイテク社会が当然の世界観になっていて、けっこう無意識的に「メディア」のなかを泳いでいる感じ。オウム事件について誰もが一家言あるにもかかわらず、だれもが語りにくいと感じる不透明さは、メディアやマス現象を語るときのやりにくさに通じるものがありますよね。これこそ、我々がもう身体内部にまで侵入したメディアのぶあつい層を通して、その向こう側に（あるかもしれない）現実を錯視しているだけかもしれないな、という、ダナ・ハラウェイがサイボーグ理論で明らかにしたような身体感覚に通じるものです。だから、今回テレビ報道を見て、なんとなくスジが通っているように思えたのは、メディアの性質をある程度知っていてきわだった個性（芸）を披露できる「政治的戦略家」のオウム真理教スポークスマンと、そうしたオウムの戦略をよく理解して方策をたてたオウ

ム真理教被害対策弁護団の関係者かもしれません。

メディアと宗教という点に関しては、アメリカのテレビ伝道師みたいなものを連想しがちですが、もともとメディアと宗教という話題がある種の「いかがわしさ」を媒介にしつつ、サブカル&カルト的なものと深く結びあっていったんじゃないでしょうか。アメリカSF作家ジョン・ケッセル描くカルト宗教小説『ミレニアム・ヘッドライン』（一九八九年）やホラー作家ロバート・マッキャモン作『ミステリー・ウォーク』（一九八三年）によって、そうした現象自体を思索する試みはすでに行われてきました。日本でも中島らもの『ガダラの豚』（一九九三年）が、新興宗教とその俗悪性を暴こうとするテレビ側の俗悪、つまり俗悪同士のかけひきの奇怪さをよく捉えて描いています。

政治的に間違った狂気

かつて、メディアに対するカルト的熱狂集団を、SF批評家のヘンリー・ジェンキンズは「メディア・ファンダム」と名付けました。彼は、アメリカの国民的人気番組『スタートレック』のファンを研究していたおり、「スタートレック」に群がるファンのグルーピー性を「宗教的熱狂」に例えたことがあるんです。今回、メディアを通してカルト的熱狂を感染させたカルト教団・オウム真理教の信者たちが、ヘンリー・ジェンキンズのいう「メディア・ファンダム」、メディアに対してカルト的な感性を持つ集団であることは、注目すべき点かもしれません。



わたし自身、ジェンキンズの指す「メディア・ファンダム」のなかの一SFファンとして、オウム真理教をうつしだすメディアの報道から、ルックスや好み、生活態度といったもろもろがSFやアニメ、オタクを含むメディア・ファンダムの要素と重なり

あうと感じていますし、じっさいSFファンダム（SFファン社会）と重なる部分も多いとは思います。ただ、既視感もあるけど違和感もなくはない。SFファンダムの歴史を振り返っても、オウム真理教と重なるのはやはり同世代のようですから。

というのも、SFファンダムでは、七〇年代前半までは極端に女性が少なく活字ファンばかり、その同人誌も創作中心だったのですが、七〇年代中葉からアニメ世代の勃興とともにオタク気質の少年や女性がぐっと増えてきました。ただ、八〇年代以前は、一般ファングループとしては大学SF研や一般の同人誌、特定の作家ファンクラブ、SF内部のサブジャンルなど雑多なグループのより集まりで、その時代時代において興亡と衰退を繰り返していたように思います。その後、八〇年代の前半から後半にかけては、大学SF研の活動が活発になった時期があります。オウム真理教信者のメンタリティは、ちょうどアニメ世代と大学SF研黄金時代のあたりを包括していて、SFファンダムの歴史の中でも比較的新しい世代に対応しているようです。

アニメ世代の特徴は、幻想の対象となる世界の現実化を促進する傾向があったこと。でコスプレやセル集め、イラスト同人誌の発行などマテリアルに固執するのとヴィジュアル面で幻想の現実化を謀ろうとする傾向が強かったと思います。それがのちにサバイバルゲームや（野外）RPGといったゲームを生む時代の原動力になっていきます。けれども、この世代で特徴的なのは、あくまでそれが祝祭空間として特殊な時期・場所に限られていたことでしょう。必然的にSF大会、SFフェスティバル、コミック・マーケットといったアマチュア主催のファン大会がこの祝祭空間の器になっていきました。また、一般の好事家団体の特徴として、それぞれ学校なり企業なりの片手間に月一で開かれる例会に参加する

といったような関係性がありましたが、市場がそれほど大きくなかったから趣味の場が職業の場に一変するということは予想外だった時代です。

けれども八〇年代頃から、この特殊なはずの祝祭空間が日常空間化し始めたな、という感触はありましたね。ひとつには、市場が大きく広がって読者が増加したこともあるのですが、一読者がファン活動を開始するには、実はかなりの心理的な決意がいるものです。そうした心理的跳躍にそれほどエネルギーを必要としなくなった原因のひとつがパソコンなど娯楽メディアの発達と共に到来した子どもの期間というより、学生気分の延長ではないかと考えています。オウム報道から時折もれてくる内部の雰囲気は学校内の研究会やクラブの楽しさを彷彿とさせるものだし、けっこう体育会系の部分もあるみたいですよね。で、学校にもうけられた「祝祭空間」は制度に囲いこまれたまま非日常性を喪っていくし、豊かな時代の到来とともに、この期間はのびる傾向にありました。その内部では市場の活発化とともに、サブカルの職業化も促進されていて、ますます日常の祝祭化がすすんだと思います。その結果、現実の崩壊もさることながら、反現実を支える狂気の質自体も政治的に間違った方向へ瓦解していったのではないでしょうか。

ただ、SFというジャンルにかぎらず、SMやフェミニズム、ロックンロールなどのアングラ文化でもそうだと思いますが、崇拝する対象をマニアックに追及すればするほど反社会性は増大します。だから、結果的にはサブカル社会そのものにも当然亀裂が生じてきます。もちろん、意識的にしろ無意識的にしろ現実世界観とそりがあわなくて、サブカルチャーに足を踏み入れてしまったひとたちですから、家族よりもわかりあえる同志／仲間に対する思い入れはけっこう強く、世間的な階級意識や価値基準とはまったく異なる価値観が重要な意味をもつ。だからサブカル内部で、自分の嗜好する「反社会的対象」と同志的ファンたちで成る世界の「疑似社会的構造」とのあいだの矛盾をどう解決するかというのは、サブカル構成員の永遠の宿命的課題になります。

したがって、SFの場合、こうしたファンのコミュニティを形成する読者は、当初こそ一定の蜜月期間を体験するんだけれども、SF作品を追究しよう

とすればするほどそうした初期のファン社会幻想は崩れかねない。で、しばらく離れて、にもかかわらずSFが捨てられなくてもういちど戻ってくると、今度は百家争鳴的なファン社会が築かれるというパターンがひとつできあがる。だれもが一国一城的なSFファンの繋がりになりますから、これはいい意味でディレッタント的寄り合いを形成し、絆もけっこう強くなり持続します。

ただ、八〇年代に祝祭空間の日常化現象が進み始めると、初期のファン社会幻想を捨てられない場合が往々に見られ、SF作品そのものに対して一種の思考停止状態を課さなきゃならなくなる傾向が発生していたようです。どういうものかというと、SF作品の価値付けに既成の権力構造、要するに普通の文学的価値観や科学的価値基準を持ち込んだり、SFのラディカリズムにはあくまで目をつぶって、SFファン社会内部の権力闘争に固執するとかいった状態。後者は平和な日本のごくありふれた日常風景で、それがサブカル内にもあったということです。

オウム真理教の場合、百家争鳴的というより、もっとピラミッド型で学歴重視の傾向（つまり既成の権力構造を反復）しているようですね。また、教義に関しても、あくまで非懐疑的信仰状態におかれているようだし、一種の幸福な思考停止状態が保たれていたように思います。その意味では、サブカル的寄り集まりでありながら、メンタリティにおいては、既成の社会構造にかなり依存せざるをえなかったようですね。でも、この矛盾が内部で解決されない場合、サブカルではけっこう致命的なことになると思います。

八〇年代パラダイム・シフトの影響

八〇年代にはSF界内部でも、ファンダムの一部で幸福なぬるま湯的恍惚状態が見られたこともあります。それは、おもにサイバー・カルチャーの勃興に伴って市場が拡大したため、一部のSF団体が業界に突入し、ファン・コミュニティーのメンタリティをひきずったまま、繋がりが長期化するという現象に象徴されるでしょう。バブル期には、コンピュータ産業の勃興という、比較的SF界の近いところでおきたハイテク勃興現象が絡んでいて——まあ日

本中がそうだったんだけど——実直な学齢社会の終身雇用制度的階級秩序とはあきらかに異質な一獲千金幻想を招き、この状態へいっそう拍車をかけた気がします。でも、同じサイバー・カルチャーの進展はSF界にハイテクに対応する新しい文学の形という新風を吹き込んでくれたわけで、当時の新しいSFの波サイバーパンクやサイボーグ・フェミニズムといった話題をめぐる活況が、とかく澱みがちだったSFファン社会をめぐる考え方の変化を促進していったと思います。

サイバー・カルチャーの勃興は、SFにおいても相当の変貌を迫るものでしたが、もともとメタ性というか文明批評的視点から出発したSFとオウム真理教とでは、その受容におけるかぎり、ずいぶん異なったものではないかと思います。とはいえ、究極の想像力を試みるSF自体、もともと危険な悪の文学だということはあります。高度な想像力は創造力の賜物として文明推進力にもなるけれど、一方で悪用の危機もはらむものです。毒にも薬にもなる両義性は意識されなければならない。メディアを通して感染する「何か」には免疫力が必要だと思います。そして、SFはもともと文明批評性が強くて、あくまで科学やSFそれ自体にすら批評性つまりメタ性を追及しようとする方向性を含んでいます。サイバーパンク関係の科学革新によるパラダイム・シフトの時にも充分懐疑的であったし、吸収するにも時間がかかったと思う。だからオウム真理教は、SFアニメやSF作品を推奨していたそうですが、どういうふうな読み方をしていたのかなという興味はあります。メディア・テクノロジーにあまりにも敏速に順応しているように思えるから、なおさらです。

サリン事件などの「犯罪」と直結していくハイテク・テロリズムの根底に、ブラットパックなどの現象を生んだメディア社会の記号性・幻想性が潜んでいるように思えるのも、そのためです。

ブラットパックとは、裕福なヤッピーたちが何もかもやりつくしてしまってあとは殺人や犯罪に手を染めるしかないという究極の消費感覚を形容するときに使われるのですが、その代表作にブレット・イーストン・エリスの『アメリカン・サイコ』（一九八八年）という長篇小説があります。マンハッタンで、あたかも過剰な記号を消費するかのように人間

をつぎつぎ手にかけていく殺人鬼を淡々と描いたものですが、出版後一大スキャンダルとなりました。一読するとホントーにつまんない小説で、とにかくモダン・ホラーやスプラッタ・パンクの血わき肉踊るでたらめな娯楽作品に比べて、淡々としていて、なんと単調なことよと思ったものでした。が、今の日本のコンテクストを考えると大量殺人に荷担するのは、じつはこういうメンタリティかもしれないなと感じます。とにかく被害者を見る視線がモノと等価で、そこにはなんの違いもないんです。殺人者にとってモノを消費しようがヒトを消費しようが、いずれも「消費」される対象という意味では等価。その意味では、今日の「殺人」というのも、すでに一定の因果関係に彩られたものではなく、もっと情報選択的で、もっと消費社会的なのではないでしょうか。

メディア社会の部族たち

ヘンリー・ジェンキンズは、メディア・ファンを、メディアという広大な草原を彷徨う文化的遊牧民なのではないかと述べてますが、オウム真理教は、まさにそうした文化的狩猟を楽しむ「部族」という感じですね。彼らは、現代社会のなかの異分子というより、彼らを包む背景である現代社会環境を「たわわに実ったすてきな密林＝自然」と見做しているようだし、その「自然」から刈り取るモノに対する価値判断は、必要に応じて合理的な選択をおこなっているようです。大昔に「自然」から我々の祖先がさまざまなものを搾取したように、その手つきはエコロジカル・フェミニズムいうところの「文明という名の父権制」のもっとも原初的なかたちを復活させているように思えます。結局彼らはメディア肥大社会という「自然風景」のなかで誕生した「文明」のもっともプリミティヴな部族かもしれません。多元的価値観が乱立し、大量情報が氾濫し、誰もが混迷する情況で、父権的な語り方は、だれにとってもわかりやすい物語を提供してしまうものです。

しかも、その父権制は現文明の根幹に蓄積された歴史的構築物というよりは、父権制を接続された母性といった趣があります。さきほども言いましたが、サブカルチャーは、対主流に関して、意識化・解決

されなければいけない矛盾点を抱えています。これが解決されないと、メインストリーム・カルチャーに対するコンプレックスをたえず内在させる階級観を持続させることになり、結果的にメインストリーム・カルチャーの構造をひたすら反復することになってしまいかねない。

ここで、おもしろいなと思ったのが、教祖と信者の関係性が、竹宮恵子『地球（テラ）へ…』で描かれたコンピュータ・マザーと彼女の統治する社会構成員の関係性にけっこうピッタリあてはまっていることでした。八〇年代以降には挫折した父性の行方が、さまざまに映画化されていましたよね。たとえば、映画『ターミネーター2』のなかでは、マッチョなシュワルツェネッガーが乳母的な父性を演じていたし、つい最近の『ガメラ』のなかでもガメラをささえる父性は強い男性性というより、柔和な小野寺昭演ずる「母のような父」です。でも、フェミニスト精神分析学上で分析された「（父権的）家族における母」とは、父性に抑圧され、子供を抑圧する「階級」に属していて、父に対するサブ的な位置関係から、通常よりも下位に対して必要以上に暴力性を示してしまう傾向があるんです。したがって、メディアを徘徊するこの「新部族主義」が母性的な構造に接続された場合、より暴力的な「父権制」に荷担してしまう可能性は高かったでしょう。

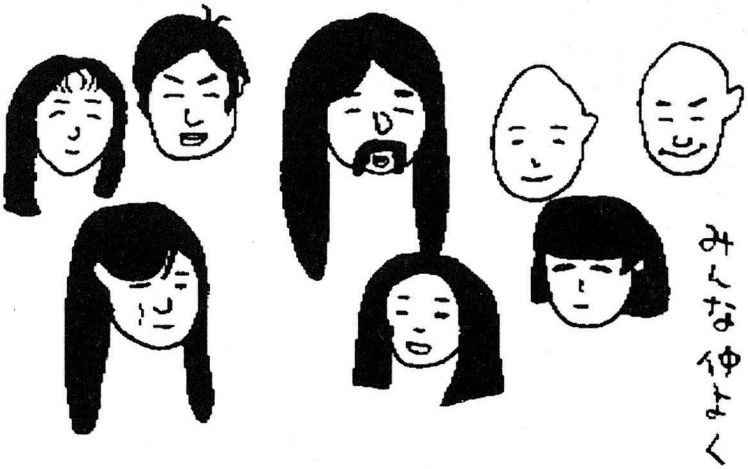
オウム真理教が使用したというタームの「ハルマゲドン」に関していうなら、それは終末論的ＳＦにかぎらず、男性的暴力の結末としてフェミニズムＳＦでも好まれた話題です。また、哲学・歴史・文学といった分野でも「終り」や「終末」や「終焉」はなんども宣言されてきた経緯があります。そこにあるのは、白人男性を中心とする西欧政治学への訣別といった概念がたしかにあったはずです。映画『ターミネーター2』などは、西欧政治学下における父権制が、挫折を迫られた結果どうやってサバイバルしていくのかというヒントをくれましたが、今日ではアメリカにおいて挫折した父性がサバイバルするいっぽう、わが国では、西欧政治学を接続され社会全般に「サブ的」なコンプレックスを植え付けられているというのが、八〇年代以降しばしば顕著に登場してくる日本社会の父のありようなのではないでしょうか。ともに「父性」の明日を模索しているよ

うに思えるけれども、母性と接続された場合において、サブカルチャーに接続される形でカルトとしての父権性が噴出し、より過激な組織的暴力性を提示してしまう可能性は——テクノロジーの発達とともに——まだまだ増える傾向にあるような気がします。個人の意識の問題より、集団の無意識がいくらでも噴出しかねない状況があるから、なおのことです。

この状況を打開するにはどうしたらいいのか。オウム報道を目の当たりにして、オウムやおいを書き続けた少女たちの感性が、けっこう希望の象徴に見えました。彼女たちもまた「オウム真理教」世代と同様に、メディア社会を生きている遊牧民ないしメタ遊牧民で、情報社会に対してもむやみな一方的な受容ではなく、ある種の情報選択能力によって能動的に行なっています。ただしその選択基準に関するかぎり、「オウム真理教」があくまで、メインストリーム・カルチャーを歪んだかたちで反復しかねないのに対し、「やおい」を目論む少女たちはラディカルなまでにメインストリーム・カルチャーをも包括しながら、「対象」の価値観変貌を潜在的に目論んでいます。サブカルによって生じた階級差を克服するために解脱を目論む男性性と、一括して「サブ」に属しながら煩悩の意味変革を目論みかねない女性性というコントラストがくっきり浮かび上がって、文字どおり性差社会の明暗をわけたメディア報道だったのではないでしょうか。高度情報社会のイデオロギーのみならず、その背後に蠢く記号編集上のポリティクスがますます問題化してしまった事件、それがオウム真理教だったのではないかと、いまのわたしは考えています。

（談・於三田95・7・14）

アンダーグラウンドで流通している同人マンガ、
『最後の晩餐—インコ真理教・入会マニュアル』より


みんな仲よく

その②

サブ・カルトの精神世界と身体宇宙

20世紀末を自己演出した〝脱聖〟の背後力学

武邑光裕インタヴュー
（聞き手＝谷崎テトラ）

たけむら・みつひろ：一九五四年生まれ。京都造形芸術大学助教授。メディア美学専攻。ハイテク・メディア論、電子ネットワーク社会論を展開。近代の秘教主義、異教的サイケデリック文化の解読者としても知られる。著書に『サイバーメディアの銀河系』『メディア・エクスタシー』等。

――○今回のオウム真理教にまつわる一連の事件を、武邑さんはどのようにごらんになっているのかを、まずお聴きしたいです。今回の出来事をきっかけに、ひとつの物語が始まったという見方もあるようですが、それを読み解くための視点を先に提示していただき、そのうえで海外におけるカルトとの比較、現在にいたる神秘主義の潮流の中での歴史的な意味合い、オウムにかんする世界のサブカルチャーの反応、それから今後の展望なども、併せてお聴きしたいところです。

武邑　世紀末を自己演出していくだろう、ある種の力学というのは偏在的に存在していました。とくに日本という場では、はじめて体験する「世紀末」だということもあったと思います。そうした時代状況のなか、いろいろな制度的力学の大きな変換期のなかで、おそらく様々な「世紀末」というものが多彩に演じられていくであろうという期待とある種の予感めいたものは、数年ぐらい前から存在していました。潜在的ではあるけれど、われわれの意識の深い層のなかで、予告的な刻印としてそれは存在していた。

たとえばある種の格言的なイディオムとして〝Writing on the Wall〟という言葉があって、壁に描かれた一種の刻印ということが元の意味なんですけど、これはヨハネの「黙示録」のなかでは〝災いの兆候〟という意味合いを

もつわけです。これが八〇年代くらいからさかんにいわれるようになった。つまり「壁」にある種のイコン、ある種の霊体、神そのものとか神を仲介してきた何者か、そういう非常にネガティヴな力学というものが、予兆として刻まれていることで、それは「これから何かが起こるよ」ということなんです。ところがこれは予言とはまた違って、予言とはまったく倒立した、ある種の予兆というものが徴しとして刻んであるということなんです。この言葉に象徴されるような、この世紀末にたいする自己期待と同時に、そのものにたいする自己演出というものが、潜在的に伏在していたことだけは、やはり厳然たる事実だと僕は思います。

――〇世紀末願望みたいなものが、集合的無意識として一挙に噴出した現象として捉えられる、ということですか。

武邑　そう、しかも僕がひとつの景観として想定していたような自己演出的な風景とは全く異なっていたこと。つまりこの「異なっていた」ということは、極端な話、ある種自分の立脚点だとか、自分と世界との関係みたいなものを、根底から打ち砕いてしまった、ということはありますね。

　つまり、偽装され、観念的にも系譜学的にも、ある種の歴史的連続性から本質的に断たれたカルト的な装いというのが、現実の中にこれだけ明確な形で出てくるとは、はっきりいって僕自身、予想だにしなかった。それは新新宗教といわれてきた系譜のなかで、このオウム真理教や八〇年代後半期から出現してきたある種の宗教団体というのは、僕にとってはきわめて異質なベクトルとして登場してきたものです。

歴史的連続性から分断された集団原理の脅威

武邑　ある意味で僕が非常に思い入れのある伝統的なエソテリズム、近代的なマジカル・トラディションやオカルティズム、神秘学的な景観、そういういろいろなレイヤーのなかで考えられてきたもの――それこそ未完の近代なのだけど――それらが六〇～七〇年代にある種の精算を経過してよりクリアになりつつ、そのなかで今だに系統だって、ある種の歴史的連続性というものを求め、そこに現在性を移植しようとした近代的な宗教カルトのもっていた力学というものは、当然減衰したわけです。それでも、今回の世紀末のなかで自己演出的に登場してくるカルト組織というものは、またもうひとつ、よりプリミティヴで退行的でアーカイックな風景、今日的な言葉でいえばデジタル・シャーマニズムみたいなものを景観とした、新しいフォーメーションで出現するものだと、僕はてっきり確信していました。

　ところがその一方で、歴史的連続性と称されているものと見事なまでに分断されて、七〇年代以降のサブカルチャーや奇想科学、ニューサイエンスにいたる、あらゆるメディア・エクスタシーの要素を、シンクレティックにしかもチープに、ここまで大規模に編成

されたフォーメーションで、これほど影響力をもつ集団原理として動かしたということ自体、僕にとってきわめてショックだった。

つまりそこでの深さ、歴史性、連続性といったものを求めていく力と、サイエンスとテクノロジーの有機的合体のダイナミズムを、どこかで追い求めていた自分自身にとっては、オウムのような団体は、どちらかというと薄められたエソテリズムの主要なエレメントがリミックスされ、しかも新しい力学へと変貌していったところはわかるのだけれど……いかんせん、あまりにもダサい（笑）というかチープですよね。今世紀末のダイナミズムを乗り切るだけのパワーなんか存在しえないと思っていた矢先に、そういうレベルとセンスの集団が台頭してしまった。そこが一番のショックだった。

では、これを揺り動かしてきた本当の背後力学は何なのか、というところに疑問が直結してしまうわけですよ。オウムは実体ではない、偽装されたひとつの姿にすぎない……と、当然ここにわれわれが求める、より本質的な力学が必ずといっていいほど存在しているはずだという、自分のなかでの物語の自己発動がのっけから起こるわけです。そのプロセス、つまりオウム問題をどう参照するかというところに、あらゆる人間との交歓が（インターネットをも巻き込んで）僕の中ではじまってしまったわけです。それはもう、あらゆる偏在点にいる奴らに電話しまくった（笑）し、向こうからもかかってきたし、メールの数もドンドン増える。そうすると逆説的に、自分があらゆるものから断たれているということにに気づくわけですよ。これが第二のショックだった。

そうすると、こいつは何なんだというと、出てくるのは当然わかりやすい背後力学ですよ。ただ、それもなんだか納得できない。ここでいうわかりやすい背後力学というのは、冷戦後の情報メディア社会におけるパワーシフト、それによって生じた力学の衰退が、もう一度その世界の危機管理構造を立体化するために、全く新しい危険を醸成することによって、みずからのアイデンティティを世界的に認知させるということ。それは北朝鮮であり旧ソヴィエト勢力であり、対日強行派ＣＩＡでありイラクであり、あるいは日本の隠されたパワーポリティックスである…そういった単純な景観へと直結していくわけです。

すると、これがある意味で常人のリアリティを保証する唯一の鍵になってしまったことにたいしても、またショックがあった。つまりこんなベクトルしかわれわれは想定できないのか、この程度の背後力学しか、今のグローバル・ヴィレッジのなかには存在しないのか。もっと複数の遍在的なデジタル・トライヴ連中が、これをこのままで済ませてもいいものか、デジタル・ペーガニズムがこういうかたちで乗っ取られてしまったことにたいする、空しさ、はかなさ、それも感じましたね。

だから今だに、彼らの背後力学は何

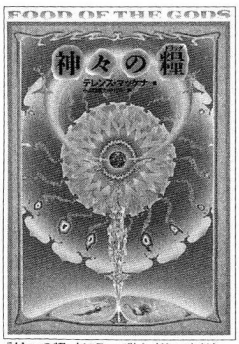
だったのか、あるいはオウムそれ自体が巨大な力学になりえてしまった「浅さ」というものが、逆に本質的な実体だったのではないかとか、そのあたりを行ったり来たりしているところですね。

――○それぞれの人間のなかで物語が発動していくというのは、まさにそのとおりでして、ちょうど本書のコンテンツに見られるように、それぞれの書き手がそれこそ踏絵のように、今までの自分の活動を参照していくポイントとして今回のオウム事件をとらえている。そのなかでも、武邑さんなりに注目すべきポイントというものは、どのあたりでしょうか。

武邑　僕はね、自分が捉えていた歴史の厚みというものが、結局はほとんど意味を持たなかったということで、非常に自己批判に陥りましたよ。つまり自分自身が今だに歴史という時間軸に大きく呪縛されていたんだと、つくづく感じました。ある種の時間性、歴史性の解体というのはすでに急激に始まっていた、それはもう自己確認せざるを得なかった。そのポイントのなかから出てきたのは、たしかにわれわれが想定していた脱二世紀末的景観にたいする破壊や崩壊だったり、あるいはすべての全質変化……かつてならアルケミーが想定していたような「変化」というのが、今回の出来事によって非常にはっきりしてきた感じがしました。

それは例えば、テレンス・マッケナみたいな見解を、まだ率直かつダイレクトに受け入れることができなかった側のこだわり、それ自体が崩れたということ。そうするとこれからは、ある種マッケナ的なアスペクトも「あり」だな、と、まさに現実化されうると思ったんですよ。

それから次に思ったポイントというのは、世界のパワーバランスのなかで秘匿されてきたあるブラックボックスが情報資本化し、流体的に噴出していったときのパワー、これが今回にかんしては思いのほか強かった、ということです。化学兵器や細菌兵器に関する情報回路とかドラッグの情報回路にしても、これがまさにオープンリソースとなって、非常にリアルな物質化／実質化というものに異常な速度を与えている感じがしました。今までどこかで



『神々の糧（ドラッグ）』（第三書館）

テレンス・マッケナ

覆われていた情報のもつ本来的な力が露出したんですよ。

生体に刻印された「サリン」情報

武邑　それは自分自身もそうだし、僕の知り合いもそうだけれど、強力な情報って、やっぱり生体に刻印されるんですね。そうするとアレルギーであろうと何だろうと、サリン情報といわれているものの生体にたいするサイドエフェクト＝副作用が、たとえば僕なんかでも実際にじんましんを起こしたりして、ダイレクトに身体にきちゃう。こういう情報の力はとにかく凄かった。現実のグローバル・ヴィレッジの住人達の、生体の細胞そのものや生体原理そのものに、サリンというひとつのメタファーが刻印した、つまり〝Writing on the Wall〟した影響はとても大きいんだけれど、それすら実は一次的な問題であって、これから起こるであろうサイドエフェクトは、こんなものではすまないだろうという予測もたつわけです。

――○実際にサリン事件で亡くなった方は合わせて二十数人くらいで、単に数字だけで考えれば、これは先日の神戸やサハリンの大地震の比ではないですけれど、サリン事件の情報的パワーは圧倒的に膨大でしたよね。

武邑　そう、そこで刻印された生体への本来的な情報のパワーには、凶悪なものがあった。核とコンピュータ、すなわちアトムとデジタルが、二〇世紀における僕らにとっての巨大な方向転換の二つのベクトルだと思っていた。ところがバイオケミカルというものが、本当にあったんだっていうこと。二つじゃなくてポイントは三つだったということですね。

――○Atom、Bio、Chemical、Digitalときて次がE(Ecstacy)なんですかね(笑)。

武邑　つまりね、いわゆる二〇世紀のこれだけ濃密な歴史時間のなかで、アトムとデジタルというアイテムがあったとき、この先、恐らくデジットなものが生体を侵食していくだろうっていうことは、僕自身、案外長期的な時間軸のなかでしか捉えることができなかった。

われわれは、自分達の生体、身体性みたいなものを、デジタルとの交歓のなかで、どちらかというと非常にオプチミスティックに捉えてきたんですよ。やっぱり化学の実験室よりは、もっとクリーンアップされた無菌状態のコンピュータルームの、いわゆるディスプレイ・モニターの中で繰り広げられる、ある種A-Life（人工生命）的なものに、どこか埋没していたところがある。どちらかというと、僕は非常にテクノ・オプチミストだった。だからそこでのリアクションというものは巨大なものでした。

ちょうど麻原彰晃が逮捕される直前に、名古屋でA-Lifeのシンポジウムがあったんです。ちょうど僕自身、サリン情報から膨大なサイドエフェクトが及ぼされていたときで、もう鼻声で、コメントもほとんど同席の方にま

かせざるをえないほど体調が悪かったんです。MITのメディアラボの人たちも集まっていて、ちょうど今注目されているトム・レイとかも会場に来ていたんですけど、そこで聴いた彼らの言説というのが、フィジカルなモノキュラー・デザインを本格的に試験管の中でやっているような化学の原風景からは最も遠くて、かつ最も危険なものに思えて、その場で「あなたたちの今やられている、そのディスプレイ上の遊技的な、科学とアートを偽装した実験を、たとえば第7サティアンでやったらどういうことになるでしょう」って、モロに言ってしまった（笑）。そうしたら彼らは、厳密に本来的なバイオケミカルの実験領域と、自分達のディスプレイ上の冒険というものは、完璧に区別しているという明確なスタンスを主張するわけですよ。だけどそのような明確なスタンスが、今のこの世の中のどこにあるのか、と、そういうことを問いたかったわけです。

ゲームについても、欲望の原理、手の延長の非常にプリミティヴでアディクトな電子ゲームの原理に対して、本当に自分自身も含めてそうなのだけど、そういう電子的な遊技性にたいするキャパシティというものが案外ない。みんな自分には、そういうキャパシティがあると思っているんですね。ところがジェネレーションによっては、このキャパシティが、もう自分の臨界値どころではなくて、ものすごく浅いプロテクションの中で維持されているということを痛烈に感じましたね。

要はそういうフィジカルな領域と、アート＋サイエンス＆テクノロジーの動き、つまりある種無菌の衛生的な領域といわれているものとの乖離の中に保証されてきたある種の原理が、もうすでに流出して解き放たれてしまっている。これは「オープン・リソース」とか「オープン・アーキテクチュア」とか、つまり世界的なネットワークの中で、ある意味では情報の往復運動といったものが、毎秒何万ビットと行き交っているこの地球上の被膜のなかで、何か僕ら自身が確認しなくてはいけない、一種の「凄み」でもあった。

そのときさらに思ったのは、情報流出というものが、今どこまでなされているのかということです。逆にいえば新たなるクライシスがあるとしたら、それはもうポエティック・アナーキズムではない。これはもう、具体的にわれわれのフィジカルなボディや自然生態系そのものに決定的な影響を及ぼしつつある「情報」という問題であって、これが相当大きいな、と感じました。あともうひとつは、サイバーパンクたちの能天気さも徹底的に批判する必要があるのではないかと。この二つのレイヤーをとにかく考えていきたいというのが、そのとき出てきました。

そうすると物語は今始まったばかりでね、麻原彰晃という人間がこの物語の生産力学の中心であるはずだという、当初の考え方はこれで崩壊したんです。だけど麻原は物語としては永遠というか、サブカルチャーやある種の文化的アンダーグラウンドへの影響は、非常

に強度なアイコンとして浸透していくだろうと思います。だけどこの浸透のケースというのは、よく歴史にありがちなメタファーにすぎない。ということは、この麻原という存在が信者の言うように本当に凄い存在であろうとなかろうと、そのサイドエフェクトを強烈に意識した人間が、受ける影響も最も大きいんだ、と。それはこれから先に起こる「何か」でもあるはずだから。すでに起こったことを物語として量産し生産していくプロセスの中から、その「何か」にいたることも可能かもしれないけれど、その時間は今の僕にはないな、と考えています。だとしたら、そうした様々な問題を、「麻原彰晃」という存在ごとひとまずどこかにしまってしまおうと思った。だけど、これがなかなかしまえないんですよ（笑）。やはりわれわれは物語の求心力、中心性の場所にどこかで帰っていくんですね。あいつはいったい誰だったのか、何だったのか。あるいはオウムそのものが起こしていったものは何だったのかということを、また考えはじめてしまう……そんなことの繰り返しですかね。

――○彼らのやっていることには、まるごととしか思えないチープさがありますからね。ただ、麻原氏の作った曲のチープさは、あんがい評価しているんですよ。メロディメイカーとしては天才ではないかと思うくらい。それを台なしにするかのように、主旋律のシンセサイザーなんかが、それこそボータサウンドのようなチープな音色で録音されているんです。ちゃんと聴くとハープや弦楽器のアレンジが背景にちゃんと入っているんですよ。キーレーンというロシアのオーケストラのレンジがきっちりとできていながら、一番目立つ旋律はポータサウンドのようなもので弾きつづける。弦だけで構成しちゃったら、それこそレイバッハみたいな荘厳な曲になるんでしょうけど、ペラペラのシンセ音楽にしか聞こえない。これはある意味で、なかなか凄いことではないでしょうか。

武邑　ちょうどグルジェフが晩年に、バンドネオンで即興演奏をしたんですけど、それがものすごく悲しい曲でね。あの人物の生涯からは考えられないくらい、ある種のエモーションの中でしか旋律が動いていないのね。それからアレイスター・クローリーが四〇年代とが晩年に録音したマントラのテープとかも残っていて、今ではCDも出ていますよね。ただ、過去のオカルティズムの中に出てきた人間たちとの参照をやったとき、麻原彰晃がクロウリーとかグルジェフみたいなものなのだろうかと考えると、かなり疑問がある。

僕らは歴史的文化の連続性のダイナミズムの中で、彼らをよくありがちな近代的オカルティストみたいなイメージでしか捉えていないけれど、実は今われわれがメディアを通じて経験している麻原という存在以上に、もっとエキセントリックでとんでもない人間達だったんじゃないかと思うんですよ。だから僕はさっき歴史的連続性はないと言ったけれど、逆にキャラクターと

しては完璧なくらいの力が麻原という存在にはあったんじゃないかと思う部分も、あるにはある。

オウムの背後力学を参照する

――○先ほども背後力学みたいな話をされてましたが、いわゆる秘密結社との流れでいうと、たとえばオウムは一般信者向けの広報誌や出版物だと「敵はフリーメーソンだ」とか「毒ガスをメーソンに撒かれた」とか書いていますよね。だけど、別の書籍の中では「一九九六年にオウムはフリーメーソンと合体する」と予言されていたりもして、そのあたりの矛盾した陰謀史観についてはどうお考えですか。

武邑　だけどフリーメイソンというのも、これは非常に誤解されている部分だけれど、時代や状況によってフォーメーションが180度変わるんですよ。そもそも何がフリーメーソンかという実体的な力学というのは、ほとんど一九世紀で終わっている。ただしある種のヴァリエーションやある種の歴史性だとか、リチュアルでエソテリックな儀礼的なフォーメイションは残影としてあるみたいだけれど、実体的にはまったく関係ないともいえる。アメリカ人だったらモルモン教徒だったり、いろいろな組織との複雑なフォーメーションがあって、つい二～三年前なら絶対にくっつくことのなかったものが今では一緒になっているとか、そんなことはいくらでもある。つまりフリーメーソンというのはひとつのメタファーなんです。ユダヤ＝フリーメーソンだとか、そういうシンプルな図式で描けるような単純な世界ではない。

だから僕らにとってのシークレット・ソサエティにしても、近代性みたいなものから抜け出てないのね。エソテリズムのポストモダンまで行ってないのよ。実は七〇年代にそういう地平というのはあったんだけれど、それはエポックアウトで、何でもペイパーバックで手に入って、もうありとあらゆるものが無限に消費された。それこそ、バロウズにおけるヤヘみたいな、そういう探査資源としてのエソテリックなインフォメーションなりナレッジというのは、もう七〇年代でほとんど消費されたと思っていた。そういう意味では、ポストモダンみたいなものの回路でいえば、あの時代にすでにけりがついたというか……僕も八〇年代の頭に、かつての近代的なエソテリズムやオカルティズムとの、ある種の明確なターニングポイントというのを自分自身が迎えた時代なんですね。それで、そこからメディア・テクノロジーに入っていったわけです。

ところが、それがやっぱりどこかで終わっていないんだね。だから、参照

する地帯には、つねに七〇年代的なある種のオカルト的エスタブリッシュメント、アンダーグラウンド的な景観というものを、つねに抱えてしまう。ヴァーチャル・リアリティだってマルチメディアだってインターネットだって、すべてそこと連動的に繋がっているわけですよ。そうなると、その文化的な資源とか、ある種の想像性／創造性のレベルでも、そういった源泉――それはドラッグカルチャーまでも含めて――がどのくらい大きいかというのは、計りしれない。だから、そこに連続性をもたないある種の力学なんて、ないとさえ思っていた。だからこそ、そこから全くといっていいほどチープに分断された実体であるオウムという存在自体が、ものすごくショックだった。

だけど、こうした懐疑、つまり永遠に自己増殖していく懐疑自体がどこから出てくるのかというと、本当の真理（笑）みたいなものを求め続けざるをえない人間の状態を、オウムがうまく利用したのではないか。かつて一八世紀にデュボワ・レーモンが「自然界の七つの謎」ということをいったんです。つまり、自然界には絶対に解くことのできない七つの謎がある、たとえばわれわれは何処からきて何処に行くのかとか、そういう七つのカテゴリーを決定した。もちろんいまでも七つの謎は存在しているのだけれど、それらの七つが逆に非常に免疫化されてしまったのではないか。グルジェフのいうクンダーバッファという幻覚装置、バロウズでいうところの言語、これら巨大な忘却装置の稼働によって、「謎」のもっている恐怖とか畏怖にたいする感応が極度に減衰してしまったのではないか。そうなると、まったく驚異的で身体的でありさえする巨大なる謎というものを"Writing on the Wall"としてふたたびセットする必要があったのかもしれない。そんなことすら考えてしまうんですよ。

八〇年代の後半ぐらいは、霊的にいっても物語が不在だった。それをある種のサイエンスやテクノロジーが包み込んで、謎でありつづける物語を逆にサイエンスやテクノロジーが自己生産していくかに見えたんです。だけど、やっぱり完璧な物語作者というのを求めていく、そういうアプローチはつねにどこかにあったんですね。つまり、何か永遠に秘匿された何か……本当は秘匿も何もされてないのかもしれないんだけれど、われわれ自身が作りだしてしまう秘匿性みたいなものがあって、それが情報のトラップであったりネットだったりする。ここから自由になり得るはずの人間というものが、はたして存在し得るのか。結局、感覚的にも身体的にも、ある種の変容装置を通過することで得られていく世界と現実との距離の虚しさみたいなものを反復して生きていかざるをえないわけでしょう。だからそういう意味でも、あらゆる歴史的な秘匿性から全く自立した「謎」というものが、ここでひとつ現われてきたかな、っていう気はしました。

世界のサブカルチャーが捉えたAUM

――○話は前後しますが、世界のサブカルチャーはオウム真理教に対して、どういう反応を具体的に見せていますか？

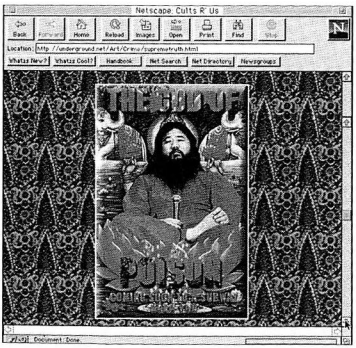
武邑　大方の予想を裏切って、予測しえた範囲を超えた「何か」、ということでしょうね。だけど、実際にそういう認識をしているサブカルチャーのベクトルは、まだそれほど多くないですよ。単純にファナティックなフリンジが仕掛けた、一種のカルト的な集団原理、そういうレベルにまだ収まってると思います。

だけど、それがひとたび、ある種の浅さと深さの謎みたいなところを生産していくプロセスの中に入ってくることで、今後は決定的な影響を与えていくと思います。それはもうチャールズ・マンソンの比じゃないでしょう。だから、ここでの物語生産がどこまでいくか、これが新たな物語作者にバトンタッチされていくであろう、その影響力は巨大だと思います。

――○西海岸やヨーロッパで、この事件に対応した動きは観測されましたか？　サイトとかでも、いくつか具体的に紹介してもらえますか。

武邑　インターネットの「クライム・アーカイヴ」というサイトが、ちょうどオウム事件のあとに立ち上がってきました。何でこんなものが出てくるのかということで見ていたら、Shoko Asaharaはすでに、マンソンと前後して"カルト・マーダー"という形でラインナップされていました。いわゆる「ゴッド・オヴ・ポワゾン」っていうネーミングの中で、麻原のアートポスターまでがオープンになってる。こういうキャッチ・アイコンは、ひょっとしてこれからTシャツとかにもなるかもしれないし、ものすごい勢いがあると思う。そのポスター自体も「Anti Copyright」つまりコピーライトはないんですよ。

この「クライム・アーカイヴ」は、わざわざその「Anti Copyright」のサ



Internet Crime Archivesより，
The God of Poison-Shoko Asahara

イトとリンクさせて「ここにおける情報はすべて自由だ」と表明してるサイトなんですよ。そうするともう、ほとんどこれを自由自在に流出させて構わないということでしょう。あらゆる偏在的な場所の中で「フリーウェアとしての麻原彰晃」が存在しはじめた。

つまり、これだけの電子情報社会の中で、オウムないし麻原彰晃というアイコンやキャラクターやインフォメーションが、かなり強度なフリーウェアたり得ていく。それはある種のサイキックなテロリズムの危険性を生み、無数に分散し、偏在するファナティックなトライブの出現を加速させていくだろう……だけど、これを麻原が狙っていたのかといえば、それはわからない。仮に彼が獄中ですべてを懺悔し、告白したところで、このエフェクトは止まらないと思いますよ。

――○「すみませんでした、松本智津夫に戻ります」と言ったとしても、それでは終わらないと。そういえば村井氏を追悼してオウム出版から緊急出版された『巨星逝く』というカセットブックに収録されていた音楽にも、凄いものがありましたね。オウム出版などのメディア戦略はどのようにごらんになっていますか？

武邑 僕はね、そういう一次資料であるオウムのいろいろな出版物や関連資料をほとんど見ていないんですよ。逆にいえば、見ることによって生じてくる別の物語のほうが非常に危ういというか、べつに言葉の意味での客観性とかいうつもりは全くないけれど、逆に言えばそれは限界にきていますね。だけどそういう一次的なマテリアルを見ることへの欲望を押さえきれない状態に、みんなあるんだよね（笑）。本当に困ったことだと思うんだけどね、それは。

――○実際に出版物とか読んでそこにヘヴィな情報が込められてる一方で、『オウムでアトピーを治す』といった調子で、箸にも棒にもかからないようなナンセンスなものもやたら出ていたりする。その辺のアンバランスにおいて、結局ハマるところまではいかないんでしょうけど。

武邑 まだ言語的な壁があるから、世界的なリソースとしての整備がまだないけど、逆にいえばそのあたりが「ワイアー・タップ」のアーカイヴとかに入り始めると、ＷＥＢ上でも大変な事になると思いますよ。ＷＥＢを無意識の結び目として考えた時に、それは単なるサブコンシャスとしてではなくて、生体とか細胞とか、そういったところまでを含みこんだＷＥＢとして機能してしまうのではないか。

オウムがもしインフォメーションとして、そこまで深いリソースとしてオープンになっていった時には、強力な装置になると思います。いまは、案外明るいポップさ、つまりチャールズ・マンソンのＴシャツ着て「これ、すごいだろ」っていうような七〇年代的なノリのレベルにとどまってるけど、この後はもっと変質していくような気がしますよ。

――○例えばアメリカ西海岸とかで、

そういう問題意識をどこまで感じ取れているかといえば、相変らず「アンビエント」という言葉で完結していたりしてるじゃないですか。

武邑　西海岸的レベルでいえば、例えば僕があちらの人間にこうした話をしても、案外リアリティはないでしょう。彼らなりのリアリティを持ったとしても、ある種のカルト的原風景みたいなものに回収しちゃう免疫力を、逆に向こうの連中とかは持ってるわけです。

ただやはり、ある種の謀略論的な見方は当然出てきてるけれど、逆に言えば、その力学が何の利害によって本質的になされてきたのかということが、たとえばアジア圏における北朝鮮だとか、そういうエキセントリズムの中で回収されていってしまうから、グローバルなポイントの中で、このオウム問題を処理しようっていう動きもあまりないですね。

あとドラッグの問題にしたって、結局「そんなの当たり前だろう」っていう認識しか、向こうの連中って持たないからね。われわれが日本という国にいるからこそ受け取っている強度なテンションみたいなものとは、根本的に違っているというのが、今の向こうの現状だと思いますよ。ただやはり、サリンに代表される毒ガス（poison gas）というもののリアリティが、世界レベルでも相当強力に刻印されたことは確かでしょう。ＣＮＮとかでも、もの凄くエキセントリックに報道してましたし。モロに鼻から血が出てるところとか、向こうのニュース映像では流れていたし。

――○日本人に今回与えられた情報量も凄まじいのでしょうが、たとえば「解脱」という言葉をみんなが当たり前のように耳にし、「カルマ（業）」という言葉をこれだけ一般の人達が使ったことがかつてあったでしょうか。もっといえば大乗と小乗仏教の違い、それからサティアンという言葉にしてもそうだし、文珠菩薩は知っていてもマンジュシュリーなんて言葉、それまで誰も知らなかったじゃないですか。

武邑　マイトレーヤとかもね。

――○修学旅行で弥勒菩薩を京都とかで見ても、マイトレーヤという言葉は知らないでしょう。そういう言葉が今、たくさんの人々の口にのぼってますよね。出家に対するお布施だとか、帰依するとか、イニシエーションとか輪廻転生とか、そういうことについて普通の人たちは誰も考えたことがなかったのに、最近では普通の電車の中での会話でも「それ、お前のカルマちゃうか」みたいな話をするようになったわけです。数年前なら一部の人たちの間でしか成立しなかったような対話や宗教用語が、これほど日常に浸透してしまったというのは、これまた大変なことになってしまったという印象もあるのですが。

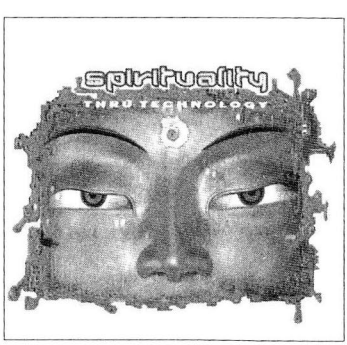
武邑　例えばビジネスの世界で、「創造的破壊」とか「クリエイティヴ・デストラクション」といった概念が、九〇年代前半期のリストラクチュアリングやリエンジの、究極のタームだったわけですよ。いわゆるＩＢＭのリスト

ラクチュアリングは「創造的破壊」という言葉で決定づけられた。これがいわゆるシバ神とか、こういうメタファーに取って代わられる。ちょうど時期的にも、日本人であるわれわれの産業構造が戦後五〇年を機に、一種の創造的破壊に直面するということになった。そこで「こんな社会構造なんかみんなブッ壊してしまえ」という全質破壊願望が、僕らの中にもあったかもしれない。それを一気に現象化してしまったことにおいて、オウム事件はひょっとして日本の社会基盤にとって、ものすごく大きなトリガーだったのではないか。つまりこのまま戦後の五〇年をひきずって、日本がアジアや世界の浮浪孤児化していくところだったのが、これらの出来事によって国としての問題をみんなが意識化したともいえる。それで本当に日本が再生しえるかどうかは別だけれど、今年に入って神戸の地震とオウム騒動が、わずか半年という短期間のあいだに発生し、これだけ圧縮された濃密な変換を社会にもたらしたことは、かつてないのではないか。

東洋神秘志向とオウム

――〇他にサブカルチャーの領域との関連性で連想するものとしては、例えばニック・フィリップのデザインで、仏像とサンスクリット文字を組み合わせたグラフィックがありますよね。あれは、西海岸のコンピュータ・グラフィックスのテクノロジーと一体化した東洋感覚として伝わってくるんですけれど、そういう洗練された仏教性、ハイテク東洋志向みたいなもの、そういう感覚が去年から一昨年にかけて日本にもドッと入ってきた、その直後ですよね、今の状況というのは。

武邑　例えばイスラム神秘主義とか、ある種の東洋思想が六〇年代に西側に伝播して、そこでミスティック・ビューティもしくはミスティック・エステティクスというシンクレティックな美学を形成しましたよね。だけど今思えば、それもサイケデリックと連動したフォーメーションだったと思う。



ところが、僕なんかがニック・フィリップとか見ていると、やっぱり単純にすごいチープさを感じるわけ。逆に言うとそこに新鮮さもあった。ところがその後、画像の解像度が上がっていったり、機材もＩＮＤＹとか使い込んでいくことで、ある種の「成熟」のようなものが見え隠れした途端、「ひょっとして、これって違うんじゃないか」と感じてしまった。つまり、プレステージの段階の彼のネオ・ミスティシテ

ィズムが持ってた力学――ちょうど「アナーキック・アジャストメント」のTシャツを作っていた頃のニックのプリミティヴな力のほうが、何だか大きかったような気がするんですよ。

もちろん今はそれなりの一種ハイエンド性みたいなものに突入しちゃったわけなんだけど、どこかあの時代の持っていたニックのプリミティズム、そういうものの力が、どちらかというと重要だったのではないかとさえ思います。だいたいコンピュータのマシン・パワーだって、今では32ビットで当たり前のように僕らは思っているけど、8ビットや16ビットの方が凄いことができるんじゃないかって思えてしまうポイントと、この話はすごく似てるんじゃないか。このまま64ビットに突入したとして、果たしてそんな代物にアーティストのコンテンツが追いついていけるのか、という感覚はありません？　ある種のビット・コンプレッションとか、ビット・スピードとユーザーの生体的なコンテントの間に、ものすごいギャップが生じてきている気がする。

いずれにせよ、ニック・フィリップっていう存在は、僕にとってはかなり唐突な存在でしたね。たしかに向こうのレイヴ・シーンや、マッケナ的なミスティックかつノンヴァーバル・コミュニケーションみたいな、その手の同時性の中で経験できる世界なのかもしれないけれど、それを醒めた視点で、日本のテレビ番組で観たときのシラケ方っていうか、そうしたギャップにも似た印象が、ニック・フィリップのTシャツを最初に見た時、あったことはいなめない。まぁ歳といってしまえばそうなのかもしれないけれど（笑）。

――○当時の六〇年代的な東洋趣味をニックがコンピュータ・グラフィックスに置き換えたというような流れというのは、いわばドラッグ・カルチャーをデジタル・テクノロジーで置き換えた六〇年代→九〇年代という流れの最新モードでもあったわけですよね。あの当時に乱発した仏像のTシャツとかって、仏教的なコンテクストとは完全に切り離されているわけです。ところが今、にわか仏教的なコンテクストが日本中に蔓延してしまうと、あれが全く別の意味あいに見えてくる。

「聖なるもの」からの離脱

――○最後に今後、僕たちはこの事件をどう参照していったらいいか、その手掛かりみたいなものはいかがでしょうか。

武邑　つまり僕はね、オウムは「脱俗」ではなく「脱聖」、聖なるものからの脱出だと思いますよ。つまり聖なるもの＝サクレ（sacre）というものは、歴史性やエソテリックなものを含めて、われわれにとっての巨大な幻覚装置だったと。だから逆にいえば、オウム真理教というのは「脱俗」ではなくて「脱聖」だ、ということです。われわれの秘教的観念的な世界というのは、あくまでも脱日常＝脱俗、つまり「俗なるものから脱出すること」なんですよ。オウムにしてもその原理的な風景は、単純にいえばそうでした。だけど僕が考えるに、あれは完璧に「聖なるものからの離脱」なのではないか。これまでセットされていた、あらゆる聖なるものからの根本的な離脱、「解脱」をしようとしたんじゃないかと解釈したい。それでなければ、これだけ反転された力学がこれほど稼働するわけがない。

本来だったら俗性みたいなものは、傀儡で隠しとおすでしょう。だけど完璧にオープンだよね。メディアの中にはまだ出回っていなかったから、こんなに俗な人だということが、メディアにとって非常にフィットした歯車になっていったけれど。つまり、信者には粗末な菜食主義を強制して本人はステーキだの、どこどこで何万円食ってましたという、あのメディアの言い方（笑）、あれがもう、ひとつの二元論的な聖なる存在にたいするイメージに、ハマっているんですよ。何となく宗教団体の教祖様というのはこうでなければおかしいとか。ところが連中はいかにも俗人だという、その部分をメディアが強調することで、オウムを乗り越えていくための自己確認をしていたところがある。でも本来はそれって非常に不可解なはずなんで、その不可解さというのを解読する必要がどこかにあったにもかかわらず、それを単純な原理で括ってしまったことで自己撞着してしまった。

――○マイケル・ジャクソンでもあるまいし、整形だの女装とかって、ふつう宗教団体と結びつきませんものね。しかもナチスからキリスト教的コンテクストまで、いわゆるポップ・オカルティズム的アイコンも全部入っていますし……

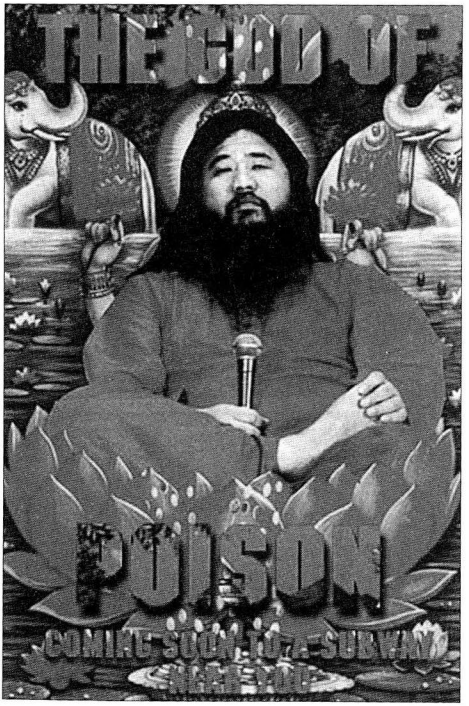
武邑　だから極端な話、世界に存在していた聖なるものを全部茶化したようなところがありましたよ。逆にいえば、もうそれ以上聖なるものはないっていうくらいに、聖なるコンテクストをことごとく埋葬した。逆にそこから「いや、これだけは本物なんだ」っていう価値を見いだす人間もいるのかもしれないけれど、僕にいわせるともうそれは「ない」ですよ。そうなってくると、俗なるものの凄さ、欲望の果てに組み立てられていく何かのほうが、結局は強力だよね。

――○神殿みたいなものがまったくなくて、倉庫には紙オムツの山みたいな宗教、それもちょっと考えつかないですよね。だけど一方で信者の談話によると、とにかくある程度テキストにのっとって訓練すると、再現性のある神

秘体験がちゃんとあったらしい。呼吸の仕方にしても身体の鍛え方にしても、それは密教という形で秘匿されていたものの片鱗があるのでしょう。いわば密教の、本当に密なる部分と、その周りのどうしようもなくアニメな世界の部分の対比……それから資本論やユートピア論などを、真摯に追究していこうとした生真面目さ……そういうエレメントにひっかかってしまった人も結構いたのではないでしょうか。音楽で言うとノイズを褒めるときの感覚に近い、どうしようもないロウファイな宗教という感覚……。

武邑　オウムの景観というのは、そういう意味ではアニメの線と面で単純に二次元化された、フラットなものに近いですね。宗教のディティールにこだわった、寺院建築や曼陀羅や細密な世界化というのはまったくない。あの服にしても、セル画のアニメーターが一色でパッと塗りつぶせるような感じだし、サティアンにしても単純な書き割り的な舞台装置でしかない。密度とか濃密さのようなものが、まったく感じられない。

とにかくオウムを「脱俗」の論理から描こうとすると、決定的な誤謬にいたると思うんですよ。聖なるものを完全に越えていくために新しい「俗なるもの」、新しい「俗世」を形成する欲望の原理だと考えなくてはいけない。麻原彰晃という人物には、そういうところがありますよ。逆にいえば「聖なるもの」を超えていくには、とことん俗なるエレメントだけを注入する必要があったのかもしれない。だから聖なるペイパータイガーなんですよ、彼はね。



カウンターカルチャー 対抗文化としてのオウム

谷崎テトラ

たにざき・てとら：一九六四年静岡生まれ。ライター&TV構成作家。ストリートやマルチメディアから発信されるサブカルチャー関連の執筆、CD-ROM等の企画に関わる。代表作に「アニマムンディ」「高城剛X」「ニューブリード」「浅草橋ヤング洋品店」のコーナー企画など。

正直に言おう。僕はオウムのファンである。もちろん信者ではないし、入信するつもりもない。宗教団体としては解散すべきであると思うし、法の下に裁かれるべきだと思う。ファンといっても、熱心なファンというわけではない。グレイトフル・デッドやスピルバーグに対する感情と同じ、ロマンティックな思い入れだ。言いたいことはわかる。ただ彼等はちょっと「いそぎすぎた」のだと思う。人類が何千年もかけて、ゆっくり進めてきた未完のプロジェクトを、一気にエンディングまでもっていこうとしたのだ。それは六〇年代にLSD革命がインスタント・サマディと言われたことと似ている。革命はいい。でも老人がびっくりするような、やりかたはもうやめよう。これが僕の主張だ。子供は無邪気に参加する。大人はいろいろ考える。でも老人はゆっくりとね。革命がおきたことが判らないぐらいのスピードで。ほおっておいても世界は変わる。革命に大切なのは思いやりだ。

世界は輪廻のサイバースペースにある？

オウム真理教の世界観のなかには、ニーチェ的に終焉してしまった世界、すでにデータベース化された歴史をシンセサイズしているような発想がある。彼等はサイバースペースに端末から参入するかのごとく、今回の個人の人生をとらえているのだ。輪廻のサイバースペースにセーブ／ロードをくりかえしながら霊的なレベルをあげていく。マルチプレイヤーで何度でもトライできるヴァーチャルなRPGの世界のイメージなのだ。しかし彼等は徹底的にこの世界の傍観者でありながら、さらに歴史に介入し、コントロールするテクニックを持っているかのように振る舞っている。それを黒魔術的な、といったところで一般的な理解には程遠いだろう。さらに「だからこそ」オウム的なるものを迅速な異端審問で、闇に葬むらねばならない、と考えるタイプの「正義」も現在みうけられるようだ。

歴史が膨大なデータベースだとしたら、我々が「現実」と呼んでいるものも、たんなるプロセッシングにすぎなくなる。僕の興味はそこだ。彼等の行動はたしかに一般的に理解し難い。しかしその思考のアルゴリズムは、「この現実」に対してハッキングする確信犯のアルゴリズムなのだ。シナリオは言語が解れば書き換え可能である。それは人間の最も邪悪な欲望であり、ゆえに極めて魅惑的でさえある。それは「対抗文化」のロマンティシズムといっていい。歴史において神秘主義が担っていた邪悪な役どころである。

オウム真理教がこの地球の今世紀末、忽然とあらわれたことに理由などないのかもしれない。この世界のプログラマーである神が歴史のあやまちをおかしてないのであるならば、である。彼等は一体何者なのか。どこからきてどこへ行こうとしているのか。僕はここ数ヵ月、この集合無意識のミュータントたちのプログラムを読み解いてくれる解説者の登場を待ち続けた。それにしても、この件に関して学者は、なぜ皆、ちゃんと語らないのだろう。宗教者はなぜ沈黙しているのだろう。判で押したようなオウム批判は聞き飽きた。評論の名の下に「傍観者」をきめこむならば、それは単なる情報の編集者だ。言葉は武器ではないのか、変革の力はないのか。オウムの

「存在」のボリュームに対峙するだけのカウンターイデオローグはすでに存在しないのか。

「魔女狩り」があった。しかしそれは本当の魔女であったので、火炙りにした。それが今の状況だろう。そしてみんな困惑している。みな本当に魔女がいるとはおもっていなかったのだ。評論者は魔女について、安易に陽気におしゃべりできなくなった。ふだん「魔女狩り」はあってはならない、と語っていた者も、ほんとうの魔女が存在していたのだったら「魔女狩り」もいたしかたあるまい。と押し黙るしかなくなった。常に魔女の存在を肯定し、アピールしてきたグループもリアルな「魔女」の出現に、無関係を装う。これから「異端審問」がはじまるからだ。偽者の魔女であったならば、いかようにも弁護できたろう。しかし本物の魔女なのだ。だれも魔女狩りを否定できない。次にはいったい何がおこるのだろう。魔女狩りをおこなう力は権力を行使しはじめる。牧歌的に魔女を弁護などしてられない。いま必要なのは文化人類学者の評論ではない。本物の悪魔払いのできる言葉のエクソシストである。相手の本当の力をリアルに認め、その力をてなずける。ちからずくで封印しようとするのではなく、その欲望を別な形で解放する。オウムの場合、彼等は彼等の教義を検討し、破壊する。パーリ語から直接翻訳したという仏典を相対化する。これは経営にあけくれる葬式仏教には荷が重いだろう。さらに彼等の神秘体験を相対化する。これは哲学者の使命だろう。僕は、LSDやメスカリンまで導入した神秘体験を、論理的に着地させるテクニックをもつ哲学者の登場を望む。

オウムに関する報道で学者が「用心」して、なにも語ることができないならば、それは結局、この世界の「傍観者」だ。歴史は変わる、などとうそぶきながら、小手先のテクノロジーやメディアの批評にあけくれるだけなのか。思想はたえず変化しつづける。無論、オウムがそうだとは言わないが、すくなくとも「この世界の共通言語は変わる可能性がある」と思えた。宗教の「ダメさ」もわかった。しかし人類が「宗教」を持ち続けてきた理由も、はじめて解った。

自分のなかに存在するシンパシー

僕は、正直言って今回オウム真理教の行動や言論に、確実に「心が揺らいだ」。地下鉄サリン事件は「事件」として、いちおうの着地点をみつけたかのようだ。被告人は法によって裁かれる。あとは宗教団体として解散してしまえば、これは一件落着である。世間一般の風潮がそう考えはじめている。しかし僕には彼等のなかに否定し難いシンパシーを感じる。その感じは僕の心をゆらし、それは「理性」でつなぎとめるのがやっとだった。世界の救済と人類の最終解脱、その言葉の甘く強い響きにもひかれた。

正直に告白しよう。それは、もしかしたら彼等が「本物」かもしれない、という「禁断の感覚」を持っていたからかもしれない。キリストが異端のユダヤ教エッセネ派からあらわれたように、われわれが無知ゆえに彼等のいう「真理」が見えないだけなのではないか、そんな考えすら沸き起こったのだ。煩悩を破壊する、彼等はそういう。はたしてそんなことが可能なのだろうか。僕は彼等の言う修行のステージや難解なヨーガの理論は知らないし、ましてやオウムの修行でアトピーがなおる！、超能力が身につくなどという新興宗教の常套手段は当然いぶかしいと思える。しかし人間の無尽蔵な欲望の制御に宗教的道徳観がはたしてきた役割は大きいと考えられるし、現代のやむことなき消費のゲームの退廃より、欲望の節制こそが美徳とされた社会のほうが清々しいのではと思う。むろん行き過ぎはいけないしバランスが重要であるのだ、という意見はもちろんのことだが。

ナウシカのメタファーが現実化する？

ここでアニメ映画の話を少ししたい。『風の谷のナウシカ』。ここでもなぜか王蟲（オーム）という巨大な怪物昆虫が登場する。ここから現実のオウムのメタファーをリーディングしてみよう。キーワードは「腐海」と「王蟲（オーム）」、それから「巨神兵」だ。ハルマゲドン映画としての最重要作である『風の谷のナウシカ』を今あらためてみると、奇妙な符合がいろいろ見つかる。防毒マスクやクルタといわれるあの青い服、暴走するオウムまでが、たんなるメタファーを超え、まるで予言のように重なってくる。なぜ、ナウシカにでてくる王蟲（オーム）は暴走しはじめたのか、そして王蟲（オーム）を生んだ「腐海」とはなんだろう。

風の谷のナウシカのなかで世界を蔽い尽くしていた「腐海」。現実のこの世界においてオウムを生んだ苗床である「腐海」とはなんだろう。僕にはこの世界は欲望の極限消費という「腐海」に沈んでいるように思えてならない。今世紀の終りになって共産主義という「建造物」は崩れたが、資本主義という「生き物」は腐れ落ちた。世界が自由と退廃の美酒に酔い、堕落し、快楽そのものに麻痺し、退屈と、虚無と、過剰な甘みの摂取で、末期癌になった状態。すでに臨界点である。しかしそれでもさらにわれわれが「腐海」を荒したら、その瞬間、「腐海」のなかから王蟲（オーム）があらわれる。王蟲（オーム）は怒りに目を赤くしながら暴走をはじめる、一度走り出すとそれはもう彼等自身でも、止めることはできない。自らの屍をのりこえ、餓死するまで暴走する。これはもはや地球の病は回復不可能なところまで来てしまっているからだろうか。

この世界が「腐海」にしずもうとしていることを、オウム真理教的にいえば、この世界そのもののカルマ（業）とでもいうのであろうか。欲望の消費を拡大しつづけるモラルなき資本主義。歯止めとなるべき倫理も宗教も不在となったこの世界そのものが「欲望」という腐海そのものにつつまれてしまっている。現実のオウムも、もともとはオーソドックスな仏教修行者集団であったという。そのオウムが武装をはじめたこととナウシカの王蟲（オーム）の狂暴化の過程は類似する。もしかしたら、みずからの命が尽きるまでさらに第2、第3のオウムは現われるのだろう

か。それはオウム真理教ではなく「同じ原理でうごく、まったくべつのグループ」として現れるかもしれない。資本主義が「欲望」の装置となって腐海に沈む前に、「失われたなにか」をとりもどさなければならない。風の谷に向かって暴走する王蟲（オーム）をすべて焼き尽くすことはできないように、宗教団体として解散したとしても千八百名の出家者とそのエフェクトはすべて消しさることはできないのだ。この世界が「腐海」のほとりにいるかぎり、オウムは決定的なカウンターイデオローグとして存在しつづける。

では、ナウシカのなかでのもう一つの化身、巨神兵とは何のメタファーなのか。いわずもがな。これはまさに旧世界の遺物として腐れ落ちてしまう「あの構造」のことである。

もう少し「ナウシカ」の話しをつづけよう。

リアリティがシャッフルされる

ナウシカの物語の原点はホメーロスの神話オデュッセイアである。オウム報道などのなかで最近の若者はアニメと現実の区別がつかない、と嘆く大人が登場するが、すくなくとも僕のなかではアニメやコミックの世界と神話や古典的な芸術の世界との優劣はない、と考えている。情報の量と質においてである。僕たちは『ドラゴンクエスト』や『機動戦士ガンダム』、『ヴァーチャファイター』からこの世界のヒントをもらっているし、スピルバーグの映画のリアリティがドキュメンタリ映画のリアリティを凌駕している。古典的な宗教画もアメリカンコミックもどちらも重要なアート作品だ。グレゴリオ聖歌がハウスミュージックにリミックスされ、街の噂が伝説となって現象化する。そんな世界に僕らはいるのだ。聖書よりアニメのほうが「リアル」。それが二〇世紀に生きるということである。情報の質とディメンジョンが違うのだ。僕はたかだか三〇年しか生きていない。その間の情報は平等にもたらされた。新約聖書の黙示録よりノストラダムスの誤訳の方が日本人のメンタリティに決定的な影響を与えている。何のへんてつもないように見える映画がまったく別な意味に読み替えられていく、各自の内部で「意味の大爆発」が起こる。古代の神話世界や旧訳聖書の世界観を、そのまま現実の規範にあてはめ、倫理の要

とする文化があったように、アニメの世界を現実に投影することは二〇世紀の神学なのだ。プラスティックの神学。

しかし「物語」と「現実」が地続きだからこそ、この日本だって東京のどまんなかに「神」が鎮座している。国民の税金でシャーマンの世界と、その交流ポイントを鎮守しているのだ。オウムについてさらに言及しよう。今回の一連の顛末は天皇霊と対峙しえた唯一の宗教・戦前の大本教が再生するがごとくである。このことの重要さが理解できないと、これから以降、起こることの「意味」がさっぱりわからないだろう。今回の出来事で学ばねばならないポイントはそこにある。大本教の出口王仁三郎になぞらえて「スサノオ」といったら言い過ぎだろうか。この世界に失われてしまった「聖性」をパロディ化し、ダメ化する。これでもかこれでもか、と宗教幻想を破壊する。最終解脱とLSDトリップを両方の手に持ってさしだす。発泡スチロール製のシバ神像で偶像崇拝を茶化し、パーリ語の仏典を翻訳することによって、日本の葬式仏教のナンセンスを笑い飛ばし、神の死によって再生を試みる。人間の罪深さを露にし、ジョン・レノンを超え、チャールズ・マンソンを超え、キリストを茶化し、仏陀を模倣する。物語を再生させるために。

われわれの世界はわれわれ自身がこの世界の内部に生産した「物語世界」との交流ポイントがいくつもある。そのインターフェイスはメディアの進歩とともに変化しつづけてきた。そして、現在最新最強のメディアはオウムの誇るケミカルテクノロジーである。

アシッドコミューンとしてのオウム

教団から押収されたLSDの総量は過去、世界中から押収されたLSDの総量をはるかに凌駕するものだったという。その規模とインパクトにおいて、六〇年代のヒッピーイズムから九〇年代のアシッド・トランス、ムーブメント、あらゆるサイケデリック・サブカルチャーの意味をはるかに越えるものだったのかもしれない。

オウムのアシッド・コミューンとしての性格はたとえば六〇年代の「永遠の愛兄弟団」に例えること

ができるかもしれない。「永遠の愛兄弟団」は六〇年代の西海岸に忽然と現われ、何千万錠ものLSDをあらゆるルートでばらまいた秘密結社だ。オレンジサンシャインと呼ばれた彼等のLSDは、アメリカ全土、ヨーロッパだけでなく、日本、インド、南米など、ヒッピーたちの移動にあわせて世界中にはこばれ、サイケデリック革命をもたらした。六四年までアメリカをはじめ、各地で合法的な精神薬であったLSDは、感覚、知覚の拡大をもたらし、その多くに宗教的な神秘体験をあたえるといわれる。その後、あらゆる国で最も危険なヘビードラッグとして非合法とされた。

二年程前から都内でかなりの量のLSDが出回りはじめた。ゴルバチョフやミッキーマウスの絵柄のいかにも、海外のヒッピーが持ち込んだと思われるものにまじって、白やピンクの無地のアシッドが安価で出回り始めた。そのLSDこそオウムの信者によるものだといわれる。くしくも六〇年代の愛の夏、サマー・オブ・ラブの再来といわれるセカンド・サマー・オブ・ラブ＝レイブカルチャーの余波で日本のクラブにも「奇蹟的な夜」がおとずれつつあった。アンダーグランドなクラブイベントはドラッグディーラーとのコラボレーションで行なわれるのが常であるが、おそらく国産のアシッド（LSD）をコンスタントに製造するファクトリーを持っていたのはオウムだけだったのではないか。夜明けの光をまちわびるクラブ・トランスカルチャーの陰の仕掛け人としてオウムは暗躍していたのだ。

オウムは今世紀最後の意識革命を プロデュースしようとしていたのか？

人間の意識に進化をもたらし、世界の在り方そのものを変えてしまおう、という意識革命のプロトタイプは一九世紀の神学者ティヤール・ド・シャルダンの思想などにも見られる。物質的な進化の極に達した生命は、その意識そのものを進化させはじめる。精神は肉体をはなれ、進化の最終点であるΩポイント（オームではない、オメガ。）に向かって融合する。さらにあくまで神秘主義的な進化思想のひとつであったシャルダンの思想に加えて、脳内の神経政治としてのヴィジョンを提示したのが六〇年代の心

理学者ティモシー・リアリーであった。いわゆるＬＳＤによるサイケデリック革命の思想である。リアリーはＬＳＤによって進化は加速し、重力圏をぬけて宇宙に飛び出すこともできると語った。そこで永遠の生命を得、すべての存在が融合するのだと説いた。このアイディアはジョン・レノンを始め、多くの若者を魅了し、実際何万人もの人間がＬＳＤによるトリップの夢見を体験した。同時期にアメリカの保健省の依頼でＬＳＤの臨床実験をおこなったジョン・Ｃ・リリーなどは、ＬＳＤによって仏教のサトリの状態がもたらされるなどとのべている。ヒッピーたちはこの薬によって世界はユートピアに変わると信じていたのだ。

しかし一二時間程のトリップから醒めたあと、結局はなんら変化することなく現実がもどり、リアリーのいうようなユートピアはいつまでたってもおとずれなかった。あいかわらずベトナムでは戦争が続いていたし、六五年にＬＳＤが非合法になってからは、ヒッピーたちはたえず警察の目をおそれながらのバッドトリップをくりかえすばかりで、あげくにリアリー自身がマリファナの所持で逮捕されてしまった。追いうちをかけるようにＬＳＤの影響下のカルト、チャールズ・マンソン教団によってシャロン・テートの惨殺事件が起こるにいたっては、ＬＳＤは意識の進化ではなく、単に幻覚、譫妄状態に人々を陥れる麻薬で、そこにはなんら救いがないように見えた。

六〇年代にＬＳＤの研究を最も大規模におこなったグループはなんとＣＩＡである。その使用法はまさに洗脳薬としてであり、意識をリセットし、別な情報をすり込む。または自白剤としての研究をしていた。さらにベトナム戦争での化学兵器として、ＬＳＤを敵地に噴霧するＭＫウルトラ作戦なる計画もあったという。ティモシー・リアリーは反体制ヒーローらしく、ＣＩＡに洗脳される前に、自らＬＳＤを体験し、自分の意識の変化になれておけ！と語っている。これはオウムにＬＳＤを服用させられ、これが超能力だと信じさせられた無垢な少年少女たちにもいえることで、あんがいクラブでしこたまアシッドを体験しているコギャルだったら洗脳されることはなかったかもしれない。

ところでオウムのイニシエーションに使われてい

たアシッドの量はリクリエーショナル・ドラッグとしての限界をはるかに超えていたとも、言われている。おそらく完全にリセットボタンが押された状態、『アキラ』の「はぢけちゃった」状態になった人も多いのではないか。直後に熱湯にはいるのもオーバードーズの対処療法といえなくもない。オウムでは、ほかにティモシー・リアリーやオルダス・ハックスリが『知覚の扉』を開き、サルトルの『嘔吐』のヴィジョンにつながるメスカリンや、ジョン・リリーがタンクで使用していたケタミン（ビタミンK）などの使用の噂もあった。サイキックが「科学的な能力」の一部であるなら、脳内の状態を科学的に（ケミカルに、電気的に）作り出すことも可能なのかもしれない。実際、薬物によって、テレパシーが可能になる、あるいは同じヴィジョンを遠隔地で共有することができる、という話をサンフランシスコのカルト関係者が話しているのを聞いたことがある。この「体験」が物質世界にまで影響をあたえたり、物理現象に干渉する「波動」のようなものを発生させたとき『アキラ』的な世界へと突入してしまうのかもしれない。本気でそれを実現しようとしていたのがオウムということになる。

　オウムがフィジカルな世界に対して遊戯的にたわむれていたのだとすると、オウム信者の目から見る世界は、すべてメタフォリカルにできていることになる。それは特権的な視点であったことだろう。オウムの信者ですら全員が「そのことの意味」がわかっているわけではないだろう。しかしオウムはまさしく、思考によって現実を変えようとしていたのだ。

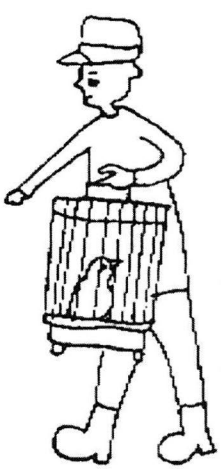
　しかし、なにが彼等をここまで「確信」させたのだろう。

精神に変化をあたえる物質の大半は「非合法」だが、物質に変化をあたえる意識は宇宙の「法」にふれることになる。オウムをつらぬく「法」とは、いったいどんなものなのだろう。

今回のプログラムの真意は？

だれが世界をハックした？

「法」をつかさどる叡智を社会は中世のギルドからシステムとして連綿と遺伝させている。そういったコンスピラシーとの関わりは実際のところどうなっていたのだろう。オウムは過去のカルト宗教と規模においても、セオリーにおいても根本的に違う。あらゆる秘密結社や政治団体、宗教団体が、組織をあげて「今回のプログラムの真意」をリサーチしたようだ。しかしどこも「スケジュールにない」出来事だった。この世界のシナリオライターたちにとっても異例の「非常事態」だったわけだ。あたかも世界史的にもまれにみる、こんなことは起きてはならない起こるはずのないバグのようである。偶発的なミュータントなのかプログラムなのか、その見極めがつかない。歴史の必然をつかさどる「時」の管理者たちは大慌てだ。



さらにオウムとはまったく関係ない終末論者までもが終末を錯覚しはじめる。強烈な確信として裁きをイメージしているのはオウムだけではないのだ。世界のあちこちで頻発する地震や異常気象、エボラウイルスなど、ハルマゲドンの演出に「理性」そのものがゆらいでいく。それはオウムエフェクトとでもいうべきものだろう。ドミノたおしのようにこのエフェクトはひろがっていく。今回の事件のもうひとつのポイントはこのエフェクトそのものである。

ところで、じつはこのサイドエフェクトが最も危

険なのだ。この原稿そのものがサイドエフェクトのたまものといえなくもない。僕は世界はあらゆるレベルでの読み解きが可能な現象化したマルチテキストだと考えている。思考にたちあがったものは、ディベートし、すべてを解放する。おそらくオウムエフェクトにはまった、言葉をいわぬパラノイアたちが世界中にいるだろう。悪魔払いが必要だ、と僕がいうのはそういう意味からである。

オウムがいうように世界は「虚無」にみちている。世界をつつむこの巨大な「虚無」とはなんなのか、それに対しての人間の叡知とはなにか。なぜヨーガのもたらす平安を捨て、シバ神のごとくオウムは「現実」へダイビングをしていったのか。ナウシカが巨神兵に名をあたえたときなぜ「存在のありかた」が変わった」のか。現実が溶解しようとしている。僕らが知っている「フィクション」の世界が「はじまろうと」しているかのようだ。

僕を「こちらがわ」につなぎとめたのは、皮肉にも麻原彰晃の「あの顔」であった。ステーキを食うグル、スケベおやじ、だらしなく太ったあの姿であったからこそ、帰依することに2の足、3の足を踏んだのだ。メロンずきがゆえに、崩壊しそうになる理性をつなぎとめたのだ。

もし彼が悲しいまでに美しい目をした覚者、菩薩のような容姿だったらどうだろう。張りのある美声でハルマゲドンを説いたらどうだっただろう。

あらゆる「聖性」や「信仰」が本来の機能を失い、ゲーム化され、もしくは過剰になる。この世界はたしかに最悪だ。われわれは彼等を真の意味で裁くことなどできない。なぜなら、彼等はわれわれの中から生まれたからである。だからこの世界の「腐海」化が進行すると、またオウムはあらわれるだろう。彼等は僕らの中にほんのわずかに残っている「自浄作用」をまもる化身なのだ。人間の欲望や罪が現象化した時、彼等は悲しく醜い姿をさらけだすのだ。

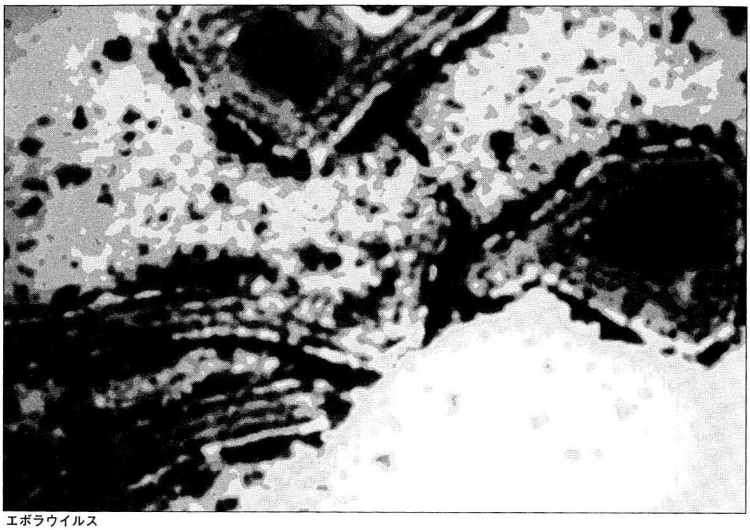
僕はオウムのロマンティズムに同情を禁じ得ない。それは救済者であろうとするがあまり最も邪悪な翼にふれてしまった堕天使をみるからなのだ。たとえば極楽浄土の到来が、天からの阿弥陀如来が光臨のイメージでとらえることができるのは、信仰があるまだましな時代の話。本当に最悪の、地獄の時代にはジャッジメントをする閻魔大王しか現れない。ハ

ルマゲドンやジャッジメントは救済の形としては最悪である。閻魔大王は地蔵菩薩の化身だというが、地蔵菩薩のサンスクリット語はクシティガルバである。サティアン（聖なる）という名が付く場所からもはずれたクシティガルバの化学プラントで「最悪の救済と信じてサリン」が製造されたのは単なる偶然だろうか。現実は揺らぎはじめている。神の戸（神戸＝こうべ）が割れ、神を食う意識（かみくいしき）が噴出した。単なる言葉あそびと思えるほど、僕はうぶではない。

プライマル・スクリームとしてのオウム

本来のサンスクリット語の「オウム」とは真言、すなわち単なる言葉ではなく、霊的なパワーを秘めたエネルギーそのものと考えられてきた。宇宙の源初の叫びを表すプライマル・スクリーム。宗教的なものいいではある。本当の「真言」とはなんだろう。それは人間の可聴域をはるかに越えた音そのもの、バイブレーションであると考えられる。言霊は山を崩し、大地を切り裂く。宇宙のはじまりからつづく、人間の想像をはるかに越えた強く、低く、太い、宇宙のベース音だ。最初はモノフォニックである。やがて共振する周波数が生れ、シンセサイズされる。単一の線は折り畳まれ、ハーモニーが生れ、世界は調律された交響楽であるかのように振る舞い始める。フラクタルに無数のバラエティが生れる。宇宙は真言オウムを積分していくプロセッシングそのものとなる。そこではやがて一見不協和にみえるノイズも全体のテンションとして生れ、世界全体を際立たせる。たとえばドビュッシーがカトリック教会の忌み嫌う悪魔の音を、テンションとして「印象」を表出させたごとく。

いまオウム真理教は、このテンションとして機能しはじめているように思う。輪郭を失った社会の輪郭を際立たせ、社会全体の免疫の機能を高める。細胞性粘菌のように、全体のステージを上げる。全体が安定した後、異端部分は死滅する。すでに飽和状態となった自然のハーモニーに原初の真言オウムのダミーをサンプリングして加えるというのは、レクイエム的なハーモニーにムーグシンセの音を加え、台無しにしながらも際立たせるというトランステク



エボラウイルス

ノの手法にも似る。オウムが必要悪であるとはさすがにいわないが、この世界はオウムが登場するまでもなく「十分最悪の末期癌患者」であった。摘出できる自覚症状が早期発見できたことは不幸中の幸いなのかもしれない。いけないのは癌細胞ではなく、癌細胞を生み出した不摂生なのである。

と、ここまで書き飛ばしてはみたけれど、ここらでクールダウン。静かに世界を観想してみよう。僕はまだまだこの世界を終わらせたくはない。いかにサリンが「死へと昇華させるほどの魔術的な快楽物質」であったとしても、エボラウイルスがもし「DNAレベルのエクスタシーをもたらす、ブラッドミュージック」だとしても、だ。この世界を永遠に、千代に、八千代に、終らせたくはない。たとえ世界がシリコン生命体のさざれ石になってもだ。

右道によらず、左道に曲がらず、極道にはまらず、外道におちいらず、それぞれの力学のあいだに生まれる真空地帯の真ん中、中道を静かに歩む、そのときはじめて、プラスチック製のオウム真理教でない、真言オウムとしての太古の響きがきこえてくるのではないか。

大本教霊学から見たオウム真理教

能勢 伊勢雄

のせ・いせお：一九四七年生まれ。エディトリアル・プランナー、ライター、映画作家。松岡正剛氏編集の『遊』に参画。その後、先進的音楽雑誌『ロック・マガジン』のライターや編集を務める。共著・共作に『E』（ノイ・プロダクト刊）や『サイバー・リボリューション』（第三書館刊）、CD『アナザーワールド』（水戸芸術館）等がある。

霊学からオウム真理教を捉える視点

地下鉄サリン事件と一斉捜査以降、マスコミは連日大量のオウム関連報道を流し続けた。教団の異常さや終末論、化学兵器サリンなどに注目した論説は多いが、ほとんど皆無だったのが、彼らオウム教信者がどのような霊性のもとに行動し、神界の経綸（けいりん）（仕組み）の内にどのように位置づけられるのか？という視点からの報道である。

現世の価値基準とオウムのそれとを対比させ、その異常さのみを強調する報道は、〝彼らは宗教者というよりは犯罪者〟という単調な世論を形づくりはしても、オウム問題の本質に迫ることはできないのではないだろうか。

そこで霊性の側面からオウム真理教事件に触れることも必要だと考えられる。

オウム真理教が社会からどんなに邪悪視されようと、人間の行った事には必ず〝霊的な意味〟がある。そう考えるのが、曲がりなりにでも一教団を形成したオウムに対する霊学の立場だろう。霊性には霊的礼節

を、である。

もちろん、地下鉄サリン事件やおそらく殺人までもが行われたであろう一連の拉致監禁事件等が断じて許されないことは言うまでもない。だが、「オウム真理教事件は、宇宙そのものである神霊界の一筋の皺が現界（人間界）になにかを告げるために顕われたものである」と、考えることは不遜なことだろうか？

日蓮宗から大本教に至る宗教史を振り返っても、程度の差こそあれ宗教はつねに反社会性とともに存在している。とくに明治以降の新興宗教や現代の新・新宗教においては、市民社会から逸脱した魂の持ち主や社会に馴染まなかった者たちの集う共同体としての側面は無視できない。そこで、オウム真理教という新宗教が巻き起こしたものの意味を探ってみたい。

霊統（神界観）を崩し狂気に走る、教義の捏造

オウム真理教の教義体系は混乱し、はっきりしたものは確認しづらい。彼らの出版物から教義を類推すれば、チベット密教界のアグニ・ヨガを用いて、幽体離脱で神智学で言うところのメンタル、アストラル、コーザル体を経て高レベルの神体と自己を合一し、神示＝予言を受ける、と理解できる。予言の体系（ハルマゲドン観）はオウム真理教が基盤として持つべきインド仏教の救世主・マイトレーヤー待望が原型であろう。だが東洋仏教観を飛び越して中東起源のハルマゲドン観の方がより強くなっている。

かつてカトリック系教会では、鬼塚五十一がリトル・ペブルの終末論に共感するあまり、教義と結びつけ暴走したことがあった。同様に、今回の事件もそれ以前からオウム教団全体に漂っていた狂気も、オウム真理教が終末論をあまりにも重要視しすぎたことにある。また彼らは本来ならばアーユル・ヴェーダ医学やチャクラの科学的解明に用いるはずの科学技術を種々の兵器製造や拉致監禁に用いた。

このような思考の背景には、修行を積み、ある霊的レベルに到達した者は〝何をしてもかまわない〟という超越者の発想がある。

余談になるが、オウム真理教は〝正常〟といわれる日本社会の一面をグロテスクに拡大して私たちに

突きつける存在でもある。彼らは、今の日本人が経済活動でやっていること（社員のマインド・コントロール→顧客確保（拉致監禁）→利益収奪）をもっとも極端なかたちで実践し、企業戦略や軍備の裏には常にオカルテックな事柄が連動していることを私たちに再確認させてくれた。大企業がとり続けてきた弱小企業の無視という〝少数派黙殺指向〟に対し、七〇年代学生運動やコンミューン無き後のカウンター・カルチャーが試みた反乱がカルト・ムーブメントに引き継がれ、最も奇異な形でオウム真理教に結晶化した、と考えることはできないだろうか。

話をカルト集団に戻そう。女優シャロン・テート惨殺事件（映画『ヘルター・スケルター』にくわしい）で有名なチャールス・マンソンの〝ファミリー〟同様に、オウム真理教にも教義捏造があった。『ヨハネ黙示録』の読み換えである。両者とも、『ヨハネ黙示録』を勝手な解釈で読み換えるというカルト教団に共通する「霊統（神界観）無視」を犯している。教典にはそれぞれの霊的背景があり安直な読み換えはむしろ霊統を崩すものでしかない。となると、霊統から外れた『ヨハネ黙示録』の教典解釈は教団に霊的狂気をもたらすことになる。

ここに宗教教典の恐ろしさがある。そしてまた逆に、正常な神界観に基づく教義は霊統によって教団を守り、決してオウムのようには暴走させない。新宗教の怖さはこの霊統無視が多いことにある（得体の知れない低級霊やとても神格に値しないモノまで信仰の対象とする教義まで現れているのが実状だ）。代表的なものが「幸福の科学」やオウム真理教で、一瞥して教典の引用・解釈が霊統を無視して都合良く用いられているのを確認できる。こうなれば宗教本来の機能が失われ、何が起こるか解らない怖さのみが残るといえよう。

オウム摘発は大本教弾圧と比較して語られることが多いが、大本教は霊統の逸脱から教団を守る霊学システムを早い時期（大本教の前身、金明霊学会（キンメイレイガッカイ）当時）に確立している。審神（サニワ）という神霊の審判がそれに当たる。これこそ、霊学を踏まえながら宗教弾圧を受けた大本教と、霊統を無視した勝手な教典解釈からくる狂気（＝霊的混乱）を体現したオウム真理教とを分かつ重要な一点である。オウムの機関誌『ヴァジラヤーナ・サッチャ』（No.9）では、大本教

弾圧と彼らが受けた大捜査とを付会して自らの宗教的正統性を訴えている。が、彼らが受けているのは霊的混乱者の鎮圧であり、彼ら自身が述べるような宗教弾圧では決してないことを銘記しておきたい。

オウム信者に残された霊的外傷
（スピリチュアル・トラウマ）

大本教においては、上田喜三郎（後の出口王仁三郎）と開祖出口ナオの末娘、澄との婚姻が教団内部の分裂騒ぎにまで拡がることがあった。

――「上田が霊学を持ちこんで綾部を汚しちゃつたさかい、大神さまは綾部から上谷に移られた。中村竹吉や福島寅之助などの神がかりにまことの仕組みなど分かんがな。お蔭ほしくば上谷のわが家にござれ。盤古大神のおかかりなされた四方春蔵が、根本のまことのまことを解いて聞かせる」ほとんどの信者たちが綾部を捨てて、上谷の四方春蔵館に参拝するようになった。澄が喜三郎と結婚したことによって、役員信者たちの心はおのが向き向きになっていく。この時とばかり足立正信は、中村竹吉・四方春蔵、そして時々八木からやってくる福島寅之助の神がかりを利用して喜三郎追放に暗躍する。東四つ辻の広間は、急激に参拝者が減っていた。（略）四面楚歌の時、喜三郎は常に思い切った手を打って局面の打開をはかる。四月二日（旧三月三日）、金明会と霊学会を合体させて金明霊学と改称し（略）――（出口和明著『大地の母』いずとみず刊）

減少する信者を引き戻すために王仁三郎は大本教に霊学を持ちこむ。稲荷講社の本田親徳より受け継いだ〝鎮魂帰神（チンコンキシン）法〟である。この法は、霊を信じない者が突如神懸り状態になり、一時間もすれば憑霊して「俺は天狗だ!!」などと、あらぬ言葉を言いだすために、本人に霊の存在を理解させる最も手っ取り早い手段であった。一時期はこの方法で神懸者を続出させ多数の信者を獲得したが、また同時に社会的には「あそこへ行くと気狂いができる」と風評がたち、〝神懸りという気狂いを生みだしたこと〟により警察に連行されるに至った。

こうした霊的な幽斎（ユウサイ）（神事）が大本教内部では金明霊学当時から第一次弾圧まで実践されていたという。弾圧後の大本教は鎮魂帰神から離れて次第に

〈教え〉に移り、教団自身も〈良識ある気狂い〉を生み出す鎮魂帰神法を禁じた。

オウム真理教と大本教を比較するのは大本教に対し大変失礼なことと重々承知しているが、この金明霊学会での出来事はオウム真理教事件を解読する際の重要な鍵となるものなのである。次に両者を比較しつつ論じさせて頂きたい。

オウム真理教が行った行為は大本教団の〝審神〟で用いられる鎮魂帰神法とは大きく異なっていたようだ。霊学的にみればアグニ・ヨガの瞑想法（による憑霊）だけを取り入れ、憑いた霊に霊界へと戻っていただくことはほとんどかえりみられなかった。そのため侵入した神霊（もしくは邪霊）をもとに戻し、信者をトランス状態から解放する手だてについては何の配慮もなされていなかった状況が充分想起できる。

しかも、オウム真理教の「キリストのイニシエーション」ではＬＳＤ等の薬物が多用され、また「ヴァジラヤーナの帰依のマントラ」では薬物とともにタントラ・ヴァジラヤーナと呼ばれる修行法が用いられたという。

タントラ・ヴァジラヤーナは仏教における三乗の一つ、真言秘密金剛乗を指し、〈狂気の悟り〉を意味する修行法である。チベットでは修行者の不動心を試すために墓地や斎場で修行を行う最終の行だとされる。このような行は集団を非常に危険な精神的状態に追い込むため、教団としては取り入れること自体避けるのが常識とされていた。この行をどうしても必要とするなら、グルと呼ばれる指導者のもとで、個々人が注意深く修行を行うものであった。にもかかわらず、オウム教団がタントラ・ヴァジラヤーナを表看板に掲げた頃からは、指導者のもとでの注意深い修行は不可能になった。このためオウム真理教信徒の一部は霊的な〈狂気の悟り〉を宿せたままで終わっている可能性が高い。そうした信者は、憑依した神霊（もしくは邪霊）を肉体から出し、もとに返す霊術を受けることなく、魂の深部に〈狂気の悟り〉をもたらした神霊を抱き続けながら、余後を〈良識ある気狂い〉として生きることになる。一般市民はその気味悪さを本能的に感じている。

〝筆先七分で霊学三分〟という神示（シンジ）中心の大本教にあって、王仁三郎が霊学で人心を騒がすことで信者

が爆発的に増加したと同様に、麻原彰晃は教団拡大のために、薬物とタントラ・ヴァジラヤーナをオウム流「霊学」として使用したと言えよう。オウムの行に参加した者たちは口をそろえてその体験の生々しさを告げ、加速度的な信者獲得を実現した。だが、その代償として多重人格のような抑制のきかない霊的外傷を信者達に残したのである。

霊的救済の問題点

大本教は幽斎の場で信者を守るだけのシステムを持っていたが、オウム真理教は野放し状態のまま神霊を迎え入れた。その結果今の教団は、神霊に「脳を喰われた」状態のまま放置されている。オウム真理教が超能力やオカルト・サイエンスの〝おたく〟集団に見えるのはこのためだろう。彼らに創造はなく、単にオカルトを消費し続けているのである。

教団や信者の反社会性が神業に吸収される間はサリン事件のように極端な行動は引き起こさない。

建築的に見て宗教団体の建物とは思われない、オウム真理教の「サティアン」の構造からしても、決してまともな神霊が降臨すると誰も考えないであろう。審神者が憑依状態を常に見守っている審神と違い、オウム真理教の信者に入り込んだ神霊はコントロールの利かない状態、つまり野放し状態で入り込んでいるため、これを元に戻すことは至難の業となる。大本教の場合は審神で入った神霊への対処法が確立されているため、〈脳を喰われる〉状態には至らない。降臨の場すら定まらないオウムのようなシステムではコントロールは期待できず、〈脳を喰われる〉状態にまで至ると復活の方法はなくなる。

米テキサス州のブランチ・デビディアン、南米ガイアナの人民寺院、スイスの太陽寺院などの一連のカルト宗教事件後の精神的ケアは近代精神医学では効を奏さない。理由は、神霊に〈脳を喰われた〉状態による霊的なダメージだからである。この霊的ダメージを治療するとすれば、より強力な審神者のもとで〈脳を喰った〉神霊をもう一度収め直すしか方法はないが、神撰使に訊ねてみると「霊学的にみるとオウムの場合、そのダメージは一生じゃないですか」とのことであった。ドラッグ経験者のフラッシュ・バック体験に似た現象が一生付きまとうという

のだ。

通常の審神ならば、憑依した神霊が神名を名乗るため対処できるが、多数の信者たちと土中の密室に隠り瞑想する「アンダーグラウンド・サマディ」の様子や、各自勝手気ままに修行に励む姿を道場の光景として見るにつけ、霊的コントロールの利いていない場所での瞑想（つまり鎮魂）ほど怖いものはないとわかる。

そして、彼ら信者に憑依する神霊は教団をコントロールするための意志を持って入っているため、霊的な救済はほとんど不可能にちかい。

もしも彼らの救済が可能となるとすれば、神様事の世界の経綸（＝仕組み）でオウム事件をとらえ、神界の混乱や戦いが現界に顕れたものと考えたケースのみであろう。

①神界の秩序が整えば現界の肉体に宿った混乱も収拾される。

②凄く力のある宗教団体に長い時間信者を預け神仏の光りを常に浴びながら除霊していく

（が、別の神仏の光りを感じたら肉体を連れて逃亡することが予測される）。

③そのため、霊統的に同種のチベット仏教ニンマ派の教団で預かってもらう。

といった方法が考えられる。政府は医療機関でのリハビリを発表したが、霊的な面から見るとかなり難しいこととなるのは言を待たない。

マージナリー・サイエンスや オルタナティヴ・メディスンの故郷、心霊科学

オウム真理教「科学技術省」の面々の学歴は高く、宇宙工学や素粒子論等の研究者であったことは改めて考えられてもいい。ライアル・ワトソン著『シークレット・ライフ（物たちの秘められた生活）』（筑摩書房刊）にも見られるように、最先端の科学の現場では物質すらも神秘性の内にあるも等しい。ハチソン効果などのフリー・エネルギーまでも手に入れようとニコラ・テスラを研究し、「日本秘密ニコラテスラ協会」を設立したオウム真理教。これらマージナリー・サイエンスの流れを辿ると、近代心霊科学の成立史と重なる。

近代心霊科学のリーダーといえる浅野和三郎は、第一次弾圧まで盛んに行われた大本教の霊学から現れた。彼は現在の「生長の家」開祖・谷口雅春が大本教時代に出版していた機関誌『心霊研究』に執筆するが、第一次弾圧後の大本教が霊学を行わなくなるとともに、教団から離れ、自らが主宰する研究団体「心霊科学研究会」を結成する。これを母胎として吉田寛を中心とする「心霊科学協会」が生まれる。金明霊学会から始まる大本霊学の流れは浅野和三郎を経て、「心霊科学研究会」と「心霊科学協会」の二つの大きな心霊科学会の拡がりをみせたのである。また、「心霊科学研究会」の流れは、同会に所属する脇長生から桑原啓善の「でくのぼう」や『サイキック・ニュース』を現在刊行する近藤千雄に分派していく。一方の「心霊科学協会」は大本教を念頭においた深見青山の「パワフルコスモメイト」にその精神が受け継がれており、現在でもそれぞれの会派が分派存続している。

政府系関連機関では、九二年に通産省の呼びかけで発足した「感性ビジネス研究会」（構成メンバーには、ユング心理学者として著名な河合隼雄を筆頭に大賀典雄ソニー会長、堤清二セゾングループ会長、中山隼夫セガ社長etc…現在解散）を中核に、金沢工大での超能力研究、筑波研究学園都市内の「脳機能開発室」などがある。「感性ビジネス研究会」人脈と重複しているが、日本版マッキンゼーと呼ばれる「船井総合コンサルティング」の船井幸雄や山田久延彦の「ハイポロジクス研究会」なども、最新科学理論と神秘思想を合体し、超能力からオカルト・サイエンスまでも含んだその内容で混迷する経済界の指南役を務めている。また、麻原彰晃は超能力宗教団体「ＧＬＡ・真理の会」主宰者・高橋信次に傾倒した時期があり、「幸福の科学」の大川隆法も同様に傾倒していたという。

このような風潮を生みだした要因を沼田健哉は『宗教と科学のネオ・パラダイム』（創元社刊）で次のように述べている。

――西欧近代科学は、まさしくユダヤ＝キリスト教を背景とする近代合理主義から生まれた。しかし、まことに皮肉なことに相対性理論、量子力学以降の科学の発展がもたらしたものは、ユダヤ＝キリスト教的世界観の見直しであり、東洋神秘主義との類似

性――があったために、経営コンサルティングや超能力やUFO研究などのマージナリー・サイエンスが新宗教団体と結びつく要因を生んだのである。

また、「シャクティ・パット」と呼ばれる、師の掌からエネルギーを弟子に送り込み、死者をも蘇らせると言われた秘技や、問題視されているオウム真理教付属病院の治療内容、例えば死者を出したことがとりざたされている「温熱療法」という入浴治療は、実は非正統医療の流れを引くキリスト教心霊科学（クリスチャン・サイエンス）の系譜と重なっている。その歴史は非常に長く、ロバート・C・フラー著『オルタナティブ・メディスン（アメリカの非正統医療と宗教）』（新宿書房刊）によれば、スウェーデンボルグ派とメスメリストによって推進され、その目的は――非正統的な医療体系は、神に近づき、神と一体化したいという個人の要求をかなえることによって、人間生活のひとつの重要な側面に関わっている――という。

拉致監禁等の自白手段として行われたオウム真理教の医療行為は、その目的さえ取り違えなかったならば、ニュー・エイジの宗教的包括医療行為として認知されるものであり、厚生省が推進する「健康文化都市計画」の代替医療（ウエルネス運動）として検討されるに充分な内容をもっている。オウム批判の材料として語られる「治療省」の医療法は本来、宗教的包括医療行為として長い歴史を持つもので、彼らが行った犯罪的医療行為とは分離して考える必要があろう。

このように見てくると、マージナリー・サイエンスやオルタナティヴ・メディスンは洋の東西を問わず、すべて宗教から生まれた心霊科学と呼ばれる研究によって発展してきたと言っても過言ではない。そして我が国では大本教の霊学に惹かれた浅野和三郎により心霊科学は夜明けを迎えたのである。

富士・鳴戸の経綸

オウム真理教は、インド精神文化圏に属するチベット密教のヨガとロシアに強く関心を示している。出口王仁三郎の『霊界物語』を下敷きにしてオウムを見れば、霊統的には諸悪の原因を生み出すインド地方の金毛九尾（キンモウクビ）の狐とロシア・ウラル地方に棲む

八岐大蛇（ヤマタノオロチ）の二大邪霊が集参したものとして読み解ける。『霊界物語』では、この邪霊の働きはヒトを経済欲と陰謀で霊主体従から体主霊従に変えるものとして扱われている。それはロッキード事件や金丸疑惑にみられた金を貯蓄するような〝日本的な悪の構造〟と全く異なる、金を集めて犯罪に使う〈悪〉となり、今までの日本的霊統からは全く異なった〈悪〉へと流れが変わったことを意味する。フリーメーソンやユダヤを彼らが問題視する理由でもある。オウムの行ってきたことは〝日本的な悪の構造〟とは全然異なる霊統が強く関わった事件なのだ。

しかも、その上、阪神淡路大震災が年頭に発生し、大本教でいう〝富士・鳴戸の経綸〟が共に発動したことは大きな意味がある。富士と鳴門（戸）は本来、地球の呼吸を司る世界の雛形として、富士は富士山＝火を表し、鳴戸は洲本（スモト）の元井戸＝水を象徴した。この両方の働きを一対にして火水（カミ）（神）をとらえ大本教は神業を行ってきた。それが今年、揃って動いたのである。今までは雛形としての「富士と鳴戸の経綸」であったが、こうして現界で動いた以上、雛形ではなく現実に機能してくると見るべきだろう。その意味は奥所一男著『淡路島国生みの秘義』（聖シャンバラの会刊）に詳しい。

――日本皇統の中古文明が「葺不合朝（フキアエズチョウ）」（七一代）であるが、それの覆滅は「神武紀元」前の数百年であった。それは天災地変で覆滅したというだけではない。自然現象というものも「八百万の神々」の勢力争いと関連性のあるものであった。（略）（そのような）理由から、日本国祖「国常立大神」による、末法世界建て直しのための「国祖三千年の仕組み」が用意されていたのであった。その「国祖三千年の仕組み」が「富士と鳴門の仕組み」であり、それの結論が淡路島の神代に「桃の宮」（元井戸・天之真名井）の建設となったのである。その「桃の宮」が昭和五八年十一月二三日の早暁に出火全焼した時点から、岩屋の「天地本宮」に「最後の一厘の仕組み」（岩戸開きの仕組み）が移ったのであった。――

岩戸開きに関しては、神界が統一されたという神示が「聖主台神示」として出され、その内容は出口王仁三郎没後七年、昭和三〇年に天ノ岩戸を開いたということを告げている。これは大本教でいわれる退隠させられていた国祖神の解放を再度「天ノ岩戸

の開き直し」で行うことを意味し、地球の主祭神であるところの国常立之尊が出られたという神示である。この神示によって神界が統一されたことを知ることができる。

深いところでの神界の統一が終わっているにも関わらず、新宗教界は混乱が続いている。これは統一後のハネカエリを反映しているといわれ、大半の新宗教やオウム真理教に余波があらわれている。また、「最後の一厘の仕組み」は人間の心に「改心する」最後の一厘の望みを託したものとも言われている。

霊の現れとオウム真理教

いま、霊界からの視点でモノが見えるように、事件を洗い直す必要があろう。変な倫理観や正義感などの感情に流された世論は、オウム真理教の真の姿から離れていくばかりで、ことの真相を決して浮き彫りにしない。

霊界的なモノは人であれ集団であれ、一番中心に宿って顕れてくる。総てのあらゆるものが「自分が中心」であるような出方をする。この霊的なものが現れくるときの宿命に負けたのが麻原彰晃でありオウム教団であった。

霊界に携わる高度の教育を受けた者は、現界を理性で見る目と、霊界から出てくるモノとのバランスを巧く取る必要性がある。一方的に霊界から出てくるモノだけを受けていると、自己中心的にならざるを得なくなり間違いを犯す。オウム真理教事件は霊的には大したモノでなくとも、霊が麻原彰晃の肉体を使えるということになれば、霊的なものは彼の内部で次第に大きく膨張する。オウム事件は、その結果引き起こされたと考えられる。

私たちはこのような時代に存在すること自体、理性で扱えないようなモノにしか救いを見いだせなくなる閉息感を抱かざるを得ない。もしも次にUFO関連でクーデターや大きな社会的問題を孕むモノが再び出てきたら、いよいよ救いは無くなるだろう。終末論もその一端である。

オウム真理教には最終戦争と終末論しかなかった。一般に終末論には〈希望〉は無い。が、大本教の神示は「立て替え、立て直し」であり、〝立て直し〟は大本教の、いや世界人類の〈希望〉としてある。

この文章を書くに当たり、大元教の教学部長・出原十珠氏に神界ならびに霊学的な校訂をお願いした。その時の話で「どうしてもやられた側（大本教）から見てしまう。国民そのものが流れを作りだし、批評家もソレをあおる。大本教弾圧から戦争に突入していったように、国民のエネルギーの持って行き場にされたのがオウム真理教事件である。すべての悪がオウムから読みとられる。だが、どこまで悪の教団として表出するかは、我々の中に住まう悪の質による。オウムはこの時代の鏡である。」と言われた言葉が心に強く残っている。大本教を知る者にとって$\sqrt{5}$は〝梅の五弁と五色人、開いてみれば富士山麓オウム鳴く……〟。オウム事件とは我々一般の人間が創り出した事件ではないのか。

（平成七年六月一日・記）

【注】　大本教を知らない人のために神界のことについて少し触れておく。大本教には「神界で起きることは現界（人間界・物質界）にも起きる。」という〈型の理論〉がある。〈型〉は〈経綸〉や〈仕組み〉とも呼ばれ、神示を通じて神界に仕え、神界を整えることを神業という。神界の乱れはそのまま現界（人間界）の乱れに通じるからだ。神示とは神霊が直接人間に語りかける現象で、神示は神威ある神霊から低級霊や邪霊までも含み、その内容は大本教開祖・出口ナオに降臨した艮の金神（ウシトラノコンジン）のお筆先からオウム真理教の教祖・麻原彰晃の予言までもが含まれる。また、大本教の霊統をひく霊学では神霊の現界での現れを、神霊体と聖霊体の二つの働きとして捉え、ヒトは神霊体を神界に具持し、神霊体の意思を地上で（現界で）実現する聖霊体としての肉体がある。という神道霊界観をもつ。

タントラ・ヨガのコミック化——阿含宗との対比からみたオウム真理教

若野行博

わかの・ゆきひろ：一九六〇年大阪府生まれ。京都大学工学部中退。大学時代には魔法使いにでもなろうかと思うが、八方美人的性格のために果たせず、オカルトから身を引く。国会議員秘書を経て、九一年にクラブ・サウンド・マガジン『remix』創刊に参画。現在はその編集長。

最初から関係ない話で恐縮だが、音楽雑誌の編集という仕事がらもあって、最近は毎日ジャングルという新しい音楽を聴いている。ジャングルは高速化したヒップ・ホップ系ブレイク・ビーツとゆったりしたダブ・ベースを基本にしたハウス以降のクラブ・サウンドだが、これが実に摩訶不思議な音楽だ。ブレイク・ビーツがBPM160程度まで高速化して白人的なハードコアさ、ヒステリックさが極まるかという地点で、それが楽天的なラテン・パーカッションのようになってくる。そこに半分のピッチのダブ・ベースが加わることで、BPM160であると同時にBPM80、ハイスピードであると同時にゆったりしているというマジカルなビートが生まれる。このビートの元に、あらゆる人種と、ソウル、レゲエ、ジャズ、テクノ、ハウス、バングラといったあらゆる音楽が結びついて、新しい音楽が生まれて続けている。「二元論を越える」という言葉は陳腐だが、ジャングルはまったく新しい形で、対極のものを結びつけて創造を行っている。この魔法の音楽に瞳目しハマりきっているにもかかわらず、今回

のオウム事件では二元論的に引き裂かれたように思う。（それにオウム・ソングをつい口ずさんでしまう。）

中沢新一氏によれば、チベット密教では修行の過程で輪廻と解脱の二元論を克服するところにいくらしいが、「悪業を行なう人間を成就者が殺すのは功徳だ」[1]というオウムのロジックは、二重三重の二元論のはてに形作られるように思える。一方、都心生活者の我々も、いつテロに巻き込まれて殺されるかもしれないという毎日のリアルな恐怖の中で、「安全（人命）」と「人権」との間を、言い換えると「戦争をちゃんと行なって勝てる国家」を希求すると同時に、もう一方で「戦争放棄をするできそこないでもいい国家」を期待する、という二つの間を揺れ動いた。

僕は単なるオカルト・ウォッチャーでしかないが、出版物と噂をたよりにタントラ・ヨガ（秘教的ヨガ）の観点から麻原オウムの教義とその源流を探りながら、逆にそのオウムに至る戯画化を眺めてみよう。オウムの教義にはハイブリッドな切り貼りという側面があるが、本来の中心をなしていたタントラ・ヨガの周辺にテーマを絞るため、終末論的予言やＰＳＩ、ドラッグ、点滴によるイニシエーションなどには触れない。もちろん出版物に書かれた教義や行法それ自体は「絵に描いたモチ」であるし、場合によっては単なる「エサ」であるかもしれない。またここで触れる内幕については、暴露本などを通して知られている範囲を越えるものではない。

オウム真理教は麻原彰晃を含めて多数の信徒がマハー・ムドラーを成就した解脱者である、という宣言をしている。[2]「マハー・ムドラー」は密教諸派やハタ・ヨガなどで様々な意味で使われる言葉だが、オウムではマハー・ムドラーはジュニアーナ・ヨガと同定され、最終解脱にいたる六段階のヨガの三番目で小乗の完成段階とされる。しかし、一般的にはマハー・ムドラーは密教の行法で、現在はチベット密教カギュー派に伝わる奥義。ナムカイ・ノルブによればこれを成就すると輪廻と解脱を不二のものと悟ることができるという。オウムにはチベット語のわかる信者は一人もいないらしいが、チベット密教でもヨガでもグルからの直接的な伝授なしにはまともな修行は不可能と考えられている。といっても、

チベットでは一つの伝統に閉塞したり一人のグルに従属することなく、宗派を越えてグルを渡り歩くことで開かれた修行が行なわれるという。ところが麻原はグルに従事することなしに自らを「最終解脱者」と独断し、弟子を持ってそれを縛りつけた。彼は自分にはグルはいないと自ら述べているが、オウムのすべてを彼が独創したわけではない。麻原は桐山靖雄の阿含宗から様々なものを、正統ならぬ戯画的に肥大化して継承しているように実のところ思えてならない。

鍼灸師であった麻原は当然ながら当初は、仙道や奇門遁甲などの中国系神秘主義に傾倒していた。また酒井勝軍[3]や川面凡児などの古神道系神秘主義にも関心を示していたようだ。麻原はその後、原始仏典、阿含経典に傾倒して、八十年頃に阿含宗に入信して修行した。（あるTV報道によると彼は阿含宗でトップになることを目指そうと思ったが、挫折して独立したらしい。ちなみに噂に聞いたところでは、桐山はチベット密教伝授者の某宗教学者に後を継がせたかったという。）麻原はその後ヨガ・スートラ、そしてチベット密教に傾倒していくが、麻原オウムには桐山阿含とそっくりなところが多い。

酒井勝軍

第一に「超能力ヨガ（密教）」を唱い文句に若い信者を集めたこと。また、そのために教祖自らトリックを使ったこと（桐山は超能力ブームや密教ブームが始まった七〇年代初めからいち早くこれを前面に打ち出してブームの先頭に立っていた）。他にも、教団とは別名でヨガ・瞑想教室を行ったこと。ダライ・ラマやローマ法王ら宗教的権威を詐欺まがいのやり方で宣伝に使ったこと（ただし、ダライ・ラマのノーベル平和賞式典に桐山が招かれたことは事実）。行法の観点から初期仏典を重視して正統性を

主張しつつ仏教諸乗の統合を掲げていること。強引に聖地（桐山の高野山、麻原のブッダガヤ）でパフォーマンス的な行を行ったこと。占星術に凝っていること。はては若い頃にハッタリ商売（桐山はニセ酒、麻原はニセ薬）での逮捕歴があること。などなどと、両者の類似点は多い。しかし、相違点も明瞭だ。

桐山は日本で初めて衛星回線を使って法会を放映したり、書籍を信者獲得の手段として使ったりと、メディアを巧みに使った点でも麻原のモデルになっている。しかし、桐山はあくまで生身の人間として

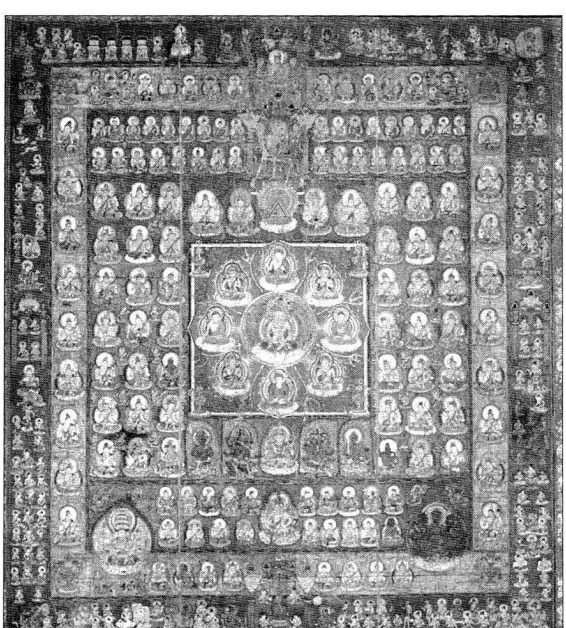
平河出版社の『ザ・メディテーション』

メディアを使っただけなのに対して、オウムは麻原をマンガ、アニメなどの映像メディア内のアイドルとして形作った（余談だが、東大に落ちた麻原と違って、東大出の幸福の科学の大川隆法が、当初は自分の顔写真を出さずに驚異的な量の書籍出版を行なうことで、活字メディア内アイドルになったことは麻原と対照的だ）。

また、桐山は「スリランカ仏教シャム派名誉大僧正」だとか「チベット仏教ニンマ派仏教大学名誉学長」といった権威の取得を行なっているし、また「成仏のための行法と教義を共に獲得した、解脱に

79年当時の平河出版社の広告より

近い日本で唯一の人物」と自らを規定している。だが、麻原にはそんな難しい正統性を主張したり、常識の許容範囲内で自らを規定することは必要なく、彼はただ「最終解脱者であり、超能力がその証拠」と宣言し、単純な神秘化を進めればこと足りた。また桐山は少なくともヨガや経典の研究に学究的なニュアンスを見せているし、様々なニュー・エイジ的、サブカル的なロジックをまとった理論武装も行っている。また教団関係の出版社からは、阿含宗の枠を越えて精神世界関係の幅広い出版を行っている。（例えば佐保田鶴治氏によるヨガ経典の翻訳・解説書『ヨーガ根本経典』などは麻原が決定的な影響を受けたし、後述する本山博氏と湯浅泰雄氏の共訳による神智学系タントラ書『チャクラ』は桐山が翻訳前から再三引用している。他にニュー・エイジ&精神世界系の雑誌である『The Meditation』、『月刊アーガマ』なども出版していた。）しかし麻原オウムはアニメ、TVゲーム世代にフィットする感覚でチャート化された教義を示し、経典研究は行っても学究的ニュアンスは持たないことで、逆に権威化、神秘化が可能だった。ただ、麻原の方がはるかにタントラ・ヨガの知識に詳しくオカルト・マニア度は高いし、十二縁起や三十七菩提分法のような仏教の基本教義も熱心に説いている。もう少し二人のタントラ的世界観を詳しく見てみよう。

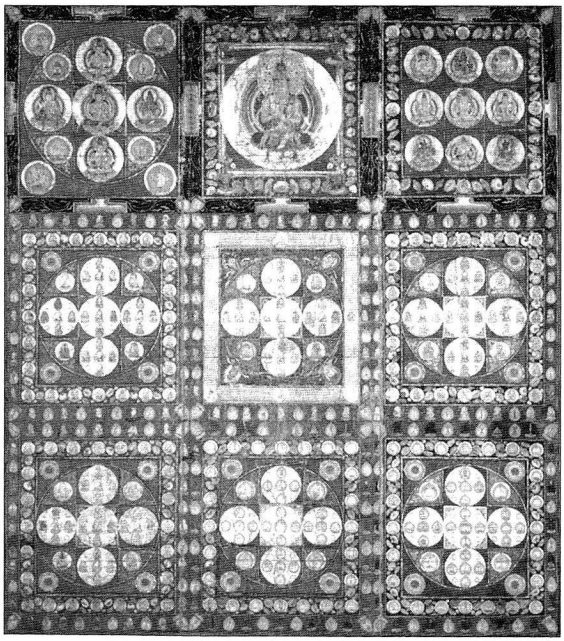


両界曼荼羅（胎蔵界）

麻原はヒンドゥー系ヨガの主要七チャクラ説をと

りつつ（密教は一般に四〜六チャクラ説）、それを独自のコスモロジーの階層と対応づけながら、クリアすべき六つのヨガ[1]と各段階とを仏教諸乗と関係づけながら体系化した。また彼は各段階のヨガがカルマと転生にどのように影響を与えるかといったことを、他の誰もが行なわなかったほど明快かつ巧妙に説いている。彼はそれを「ステージ」、「データの解析、消去、書き換え」といったコンピュータ、コンピュータ・ゲーム世代に分かりやすい言葉で説明している。その正統性は疑わしいものだとしても、秘教的知識が少なからず折り込まれていて、少なくとも『ムー』、『トワイライトゾーン』世代の若者にとっては瞳目すべき高度な教義と映るものだ。それに他のどんな仏教系の教義よりも、その世界観と行の階梯の全体像を明快に見せたという点では劣らない。しかしオウムの教義はヨガ教典と初期仏典（上座部系のパーリ経典など）を重視しているためか、タントラ・ヴァジラヤーナ（中・後期密教）を特徴づける各種の複雑な観想法や諸尊・諸部の分類体系などを欠いているようだ。

麻原は桐山に比べて、解脱への道程をより大きな枠組みで秘教的な高いレベルまで示しつつも、逆にその道程のインスタント性を強調した。麻原による信徒の各ステージ成就の認定は、信徒自身が疑惑を抱くほどの早さだという。オウム出版からのいくつかの刊行書には、信者による修行の具体的な神秘体



両界曼荼羅（金剛界）

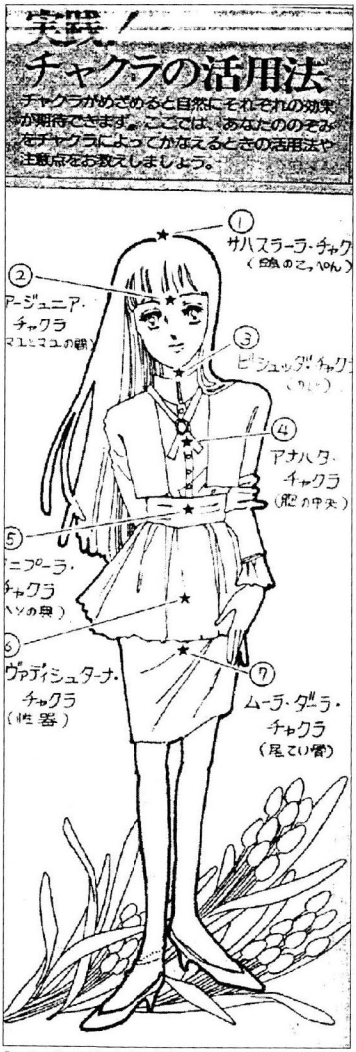
女の子向け占い雑誌『マイ・バースディ』増刊No32（87/9/20）より、女の子に平易なことばで「チャクラ」について説明する麻原彰晃。

験記が数多く掲載されている。これは読者にオウムでの修行に対して近づきやすさと憧れを感じさせるため、信者獲得に高い効果を発揮しているのではないだろうか。一般的にオウムの修行は解脱を目指すヨガタントラ・コース以外にも、超能力獲得を目指すシッディ・コース、良い転生を目指すポア・コースと三つのコース分けが用意されているが、総じて言うと、オウムはタントラ・ヨガや小乗の上座部仏教という少数者の教えを、通俗的なキャッチコピーなどで勧誘した信者に、パッケージ化された大衆的な形で説いているように思える。また行の階梯には細かい単位制度と料金体系による数値化が伴っているが、これもコンピュータ・ゲーム感覚なのかも知れない。

桐山は仏教系新宗教の歴史にクンダリニー・ヨガ（チャクラ・ヨガ）を持ち込み、「超能力密教」をアピールした人物だ。彼は行法重視の観点から初期仏典である阿含経を重視しつつ、その十七過程の行法に真言密教系の行法（求聞持聡明法）を重ねて、それらをクンダリニー・ヨガで解釈・強化し、独自の七段階の行体系を形作った。しかし阿含宗（正確に言うと、阿言宗の前身である観音慈恵会の頃から阿言宗立宗八年目の一九八六年まで）の中心的な行として機能していたのは、その第二過程までに相当する「千座行」と呼ばれる行だ。これは悪い因縁を落とすために千日続けるというものだが、阿含経や真言密教とは関係ない桐山の創作物だ。（麻原はこれを行って煩悩が増えたと語っている。）また桐山は当初はヒンドゥー系ヨガの七チャクラに手の二つのチャクラを付け加えて、金剛界マンダラの九会をチャクラ開発の九段階とこじつけたりした。本来後期密教は各経典によってその諸尊、諸部と対応させる

などして、四〜六輪説をとってチャクラを体系化し、また行法も分類・体系化している。また究竟次第という行の階梯の中でクンダリニー・ヨガを取り入れている。しかし彼はそんなことは知らなかったようだ。彼は後期密教が諸尊と行法を対応づけていることを、単に行を礼拝化した堕落とのみ捉えた。しかし桐山の説はまだ後期密教などが一般に知られていない時代にあっては、十分に魅力を放つものだったのだろう。付け加えるなら、桐山は現在までの流れの中で、密教から初期仏教へと教義の重点を移し、超能力の強調も徐々に減らしてきた。これに対して麻原は逆に、小乗から大乗、そして密教へと重点を移してきたようだ。

その桐山のヨガの師匠（ネタ元）と噂に聞いたのが宗教心理学研究所長の本山博氏だ。彼は本格的なタントラ・ヨガの具体的な行法を、最も早くから道場や書物で説いてきた人物だ。また、それを科学的に研究して（ライン派の超心理学を一九六二年からデューク大で学び、また独自の研究を行っている）科学と宗教の融合を目指している。といっても彼にはオウムが持つようなSF的な科学趣味はない。また彼は玉光神社の初代宮司（養母キヌエが教主）



『マイ・バースディ』より実践チャクラの活用法 by 麻原

でもあるが、宗教的には神道にこだわることなく、あくまで世界宗教的な普遍志向を持っている。彼には教祖的存在というより研究者という印象が強い。

さらにその本山博氏の師匠と噂に聞いたのが竜王会の三浦関造氏だ。彼はルソーやクロポトキンの翻訳者としても知られているが、近代神秘主義の総本山である神智学（ロシア出身の神秘家ヘレナ・ブラバツキーが創始）をベースに、アグニ・ヨガ（同じくロシア出身の神秘家でシャンバラ伝説を欧米に広めたことで知られるニコライ・レーリッヒに由来する）なども取り入れつつ、総合的ヨガを探究、公開した人物だ。神智学協会はいくつかのスキャンダルを持っていたことも事実だが、近代的、普遍主義的な観点から東西を統合する神秘主義的世界観の創造を目指し、現在、神智学は神秘主義の最後の古典としての位置を獲得している。（神智学に由来する用語は、知ってか知らずか、ヨガの用語としてオウムの世界観にも取り入れられている。）三浦氏の昭和二〇年代末からの著作では、当時の日本の状況からすると究めて難解高度な神秘主義的世界観とヨガの行法を公開している。また彼は、信楽香雲氏との交流から鞍馬寺で有名な鞍馬弘教にも影響を与えた。彼には求道者という印象が強く、本山氏同様、教祖的、教団的方向はすでに時代の要請ではないという認識を持っていた。

麻原のヨガの直接的な源流やネタ元が桐山、本山、三浦諸氏へと遡れないとしても、彼らの著作がオカルト・キッズの必読書であったことは事実だ。日本では、昨年あたりからチベット系の後期密教の行法がいくつかの書物で読めるようになったし、神智学系の出版も地道に続いている。ちょっと突っ込めばいくらでもコアな情報が得られるという状況がある一方で、そういった秘教的な行法を安売りするようなオウム的戯画化も進んでいる。

こういう二極化は、超メジャーとアンダーグランドで平行して輸入が進行する日本のジャングル・シーンにも現れている。ジャングルはこの「二極化」をどう越えうるだろうか？　様々な音楽のディープな部分とも、またポピュラーな部分とも接続できるジャングルの可能性は、我が『remix』誌のコンセプトに沿うものでもある。

参考文献
・江川紹子『救世主の野望』（教育史料出版会）
・廣野隆憲『阿含宗の研究　桐山密教の内実』（東方出版）
・滝田京介『現代宗教家に救世主はいるか』（コアラブックス）
・麻原彰晃『マハーヤーナ・スートラ』
『生死を越える』
『ザ・超能力秘密の開発法』他（オウム出版）
・桐山靖雄『密教―超能力の秘密』、
『人間改造の原理と方法―原始仏教から密教まで』
『オウム真理教と阿含宗』他（平河出版）
・本山　博『密教ヨーガ』他（宗教心理出版）
・三浦関造『神の化身』他（竜王文庫）

註

(1) 麻原は不殺生戒の理由を、死者が死の際に経験する「意識の断絶」がカルマとして殺害者にそのまま返ってくるために三昧に入ることが妨げられるから、と合理的に説明している。これは裏返すと、ポア的なオカルト・テクニックを使って意識を断絶させずに殺害するのはかまわない、ということになる。

(2) 中沢新一氏は月刊『現代』七月号掲載の対談『悪夢の誕生』で、麻原の著した『生死を越える』の記述が「ヨガの内的体験を「聖なる狂気」と結びつける仕方がインド的に正確」と述べる一方、麻原のマハー・ムドラーの体験について「僕がチベット僧だったら、まだまだと言ったでしょう」と語っている。

(3) オウムは竹内文書に記述され酒井勝軍が調査・発見したと言われる秘石ヒヒイロカネなるものを信者全員に渡している。また麻原はヒヒイロカネの記事を『ムー』で書いたことがあるが、この件について久山信氏が『インパクション』68号掲載の『ウーピー麻原彰晃の対ファシスト加入戦術and so forth』で、麻原が「学研と八幡（書店）が開拓したオカルト・オタク群を、いわば加入戦術によって自らの組織に糾合、オウムは急成長した」と考察している。

(4) 『生死を超える』で説明される六つのヨガは、それぞれの名前から判断してもカギュー派に伝わるナーローの六法と呼ばれる究竟次第系の行法をベースにしていることが明らかだが、この六つの行法は本来独立したものであるのに、麻原はこれを段階化している。その後、『マハーヤーナ・スートラ』では六つのヨガはまったく違った名前になって、本文に書いたような独自の体系化が行なわれている。

導師（グル）なき時代の覚醒論

黒田一郎

くろだ・いちろう：一九六一年北海道生まれ。明治大学文学部卒。編集者。オカルティズム研究。某・特殊版元にて主にウィリアム・バロウズ、キャシー・アッカー、デニス・クーパーらポストモダン小説の単行本等を担当。

グルと弟子

「冗談じゃねえよな」

大方のオカルティスト、精神世界愛好家、ニューエイジ、ヨガ修行者、宗教関係者たちは、今回のオウムの事件を見てそう感じたのではあるまいか。「全く冗談じゃない。あまりにも馬鹿げた話だ。こんな奴らと一緒にされたんじゃあ、たまらないぞ。だけど世間はこれで宗教は危ないとか、ヨガは悪いとか、オカルトは駄目だって非難するんだろうな。いつかの幼女連続殺人事件でロリコンの犯人が捕まってから〈おたく批判〉が起きたように、今度は〈オカルト冬の時代〉が来るんだろうか。やれやれ、全く迷惑な話だ。それにしてもこいつら一体何なんだ？　アタマおかしいんじゃねえのか」などと、あくまでも「自分はあんな馬鹿な奴らとは違う」という立場と意識のもとに「冗談じゃねえよな」と思ったことだろう。実は私もその一人である。

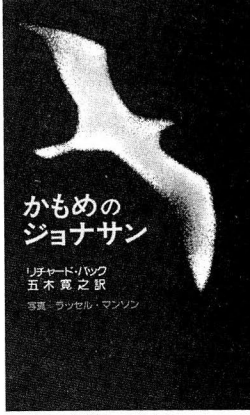
私などは、殺された村井秀夫が出家の際に「かもめのジョナサンの気分だ」と語ったという報道を目

にして、驚きのあまり意識を失ないかけながら本当に「冗談じゃねえ！」と思い、この報道であの小説が誤解を受けないことを心底願った。リチャード・バックの名誉の為にも言うが『かもめのジョナサン』という小説は、決して読後にサリンを撒いたり人を無差別に殺したくなるようなふざけた小説ではない。読者の解釈には無限の自由があるだろうが、この小説は基本的に、かもめである主人公が、鳥として「空を飛ぶこと」にこだわり、その技術を極限まで高める個人的な修行を通して、他者理解や同胞への限りない愛情に目覚めるという素晴らしい物語なのだ。更にいえば、バックがその次に書いた『イリュージョン』を読んでいれば、「凡夫や外道を救済する」などという短絡的な思い上がりこそが人類にとって大きな迷惑であることぐらい充分自覚できたはずである。死んでしまった人間に言うのも何だが、村井さん、今度転生して出家する折には、頼むから自分の尊敬する麻原の著書をあげてくれ……などとオウムに対しては、はなから独善的に「冗談じゃねえよな」と思っていた私だが、さすがに事件の捜査が進み、多くの事実と背景が報道されるうちに、「グルと弟子」、「出家と修行」、「ハルマゲドン思想から人類救済計画に至る発想」など、決して他人事ではなく、私自身の中にも共通して問われるべき問題が数多くあることに気がついた。オウムについての私の批判は、全て私自身へ向けられる批判でもある。とても一方的にオウムを責められたものではない。

私はここで反省の意味を込めて、今も自分にとってのテーマの一つである「グルと弟子」の関係について考えてみたい。これは何も宗教や神秘学の探求や、精神世界文化に限った問題ではない。拡大して解釈すれば、「人間として自己の向上を目指す者のつきあたる課題」というふうに、誰の人生にも共通する問題でもある。

高次元の精神や叡知に触れようと神秘学の道を志せば、必然的にそれらの道を指し示してくれる導師（グル＝霊的指導者）との出会いが第一の課題となる。

この出会いは一見非常に困難そうに思えるが、宗教・神秘学業界（なんてものがあるのか？）では、誰が言い出したか知らないが、昔から「弟子の側に準備ができれば導師は自然に現われるであろう」な



『かもめのジョナサン』
リチャード・バック著
五木寛之訳（新潮社）
74年度の大ベストセラー

どという神秘的（神秘学だからあたりまえか？）で親切な常識があった。真理を学ぼうとする者の態度や学習のレベルに応じてグルが姿を現わすというのだ。高次のグルになると、人間としての肉体を持たない者もいるらしい。声だけの「神霊」などがこれにあたるのだろうか？　いずれにしても、これは宅配ピザ以上に便利な制度で、来て欲しくもないのに毎日のようにしつこくやって来る○売新聞の拡張員とはエライ違いである。

しかしながら、この「グルと弟子」という特殊な師弟関係にはさまざまな問題がある。弟子を導き、自分も修行を続けるという、本来の意味でのグルの他にも、弟子を騙して金品を巻き上げるだけの偽グルの存在も充分可能なのだ。自分の目の前に現われたグルが正しいか正しくないか？　グルを求める人間は、自分がこれまで経験して培ってきた知性と感性をフルに働かせて、それを判断しなくてはならない。それもまた試練の一つなのだろうが、そんな危険といかがわしさがこの関係には存在するのだ。

グルは時として、弟子の能力や理解を超えた行動を強制する。弟子はグルが与えた様々な試練を乗り越えなければならないのだ。修行は危険なものだったり、世間一般の常識からかけ離れたものである事も珍しくなく、教えるものと学ぶものとの間には通常以上の信頼関係を必要とする。しかし、グルへの絶対的な帰依や服従には危険が伴う。それは今回のオウムの事件でも明白だろう。一連のオウムの犯罪のほとんどは麻原本人が直接手を下したものではない。弟子（それも高弟）達が中心となって、麻原の命令もあるだろうが、かなりの部分は麻原の意をくんで自主的に行ったふしがある。おそらく高弟ともなれば、明確な命令を麻原の口から聞かずとも、別の形で命令を受け取ることができただろう。世間の常識では考えられないかも知れないが、宗教の教団などでは驚くに当たらない瑣末なことである。いや、断じて驚いてはいけない。一見ありえなさそうなことが平気で起こるのがこの業界の特徴で、それをム

キになって否定したり、「奇跡だ！」などと有り難がるから話がこじれるのだ。

少し話はズレるが、誰かが空中浮揚をしようが、水中に一時間以上もぐろうが、地震や天災を予知しようが、別にあわてる必要はない。いいではないか。地球は広いし、長く生きてればそんなことにも出くわすだろう。どうしても感謝したいのなら、「いい見世物を見せてもらった。ご苦労様」と言って百円玉でも手渡せばいい。

私が言いたいのは、「奇跡や超常現象の真偽はともかく、**人間がひき起こした奇跡と、その人間の人格、品性、人間的成熟度は別問題である**」ということだ。我々はこれをきっぱり分けて考えなくてはならない。

予知や予言などの超自然的な能力は、真偽はどうあれ、単なる「技術」である。それらの技術を行う人間の人間性とは区別して考えよう。特異能力に対するあこがれから「超能力を持った人間＝超人、救世主、我々より人間的にも優れた人間」などという妄想を持ちたい気持ちもわかるが、それは間違いだ。珍しい技術を見せられる度に土下座していたら服が汚れてしようがない。これは心霊治療にしても同様だ。どんな技術を使おうが病気が完治すればそれは素晴らしいことだ。かかった医者には感謝して治療費を払おう。しかし、いちいち病気を治してもらう度に土下座されたのでは医者の方もたまらんだろう。

ことは単純だ。大道芸的な奇跡を見たら拍手をしよう。人命を救う奇跡を見たら、その人間には感謝と敬意を払おう。だが、どちらもそこで土下座して信者になる必要はないのだ。

つい、話が脱線してしまった。話を戻そう。

そもそもグルとは、俗な例えでいえば、「長く難解な研究を続けている大学の先生が、予備校のバイトをしながら、将来自分の研究を引きついでくれそうな見どころのある生徒を選んで、学業のめんどうばかりか親身に私生活の相談にも乗っている」ようなものだ。その先生に一生めんどうを見てもらうのが予備校生（弟子）の最終目的ではない。「悟り」や「覚醒」という希望の大学に入学して、やがては先生（グル）を乗り越えるような研究をしなくてはならないだろう。そして自分を育ててくれた社会に恩返しの貢献もしなくてはならない。決してグルの

弟子にとどまることを目指してはいけないのだ。

このへんの事情は神秘学の探求徒であればごくあたりまえの常識であり、オウムの信者たちも言葉では知っていたことだろう。しかし、残念なことにそれはあくまでも「言葉だけ」で終わったように見える。発覚した多くの犯罪や犠牲者、これだけ事実が明らかになったにもかかわらず「全ては警察のでっちあげ」と信じて疑わない信者たちの態度がそのことを物語っている。「グルと弟子の関係」はその性格上、「何でも命令を聞くだけのロボット」を生み出す可能性も持っているのだ。

しかし私は麻原が「全くの偽グルであった」と言うつもりもない。麻原のある部分は聖人で、ある部分は悪魔的であったというのが正しい表現だろう。麻原をグルとして、覚醒や悟りへ到達できるかは、弟子の側にかかっていたとも言える。偽グルについたら必ず破滅するというものでもないはずだ。いずれにしても、今回の事件はグルである麻原の側にも、弟子である信者の側にも双方に責任と問題があったと見るべきで、どちらかを一方的に責めるべき問題ではない。「グルと弟子」という関係のありかたそのものも問い直されるだろう。

実際「グルと弟子」の関係については批判も多い。

中世の暗黒時代ならいざ知らず、現在であれば、図書館に行けば有史以来の記録が残された思想や宗教の教義など、大抵のものは簡単に調べがつくし、研究書も数多く入手可能だ。それらをミックスして、さもありそうな教義を組み上げるのは簡単なことだ。このように現代では神霊の導きがなくとも、誰でも教祖になって宗教の一つや二つは簡単にでっちあげられるのだ。これでは、いかがわしい偽グルが増えても不思議ではない。私の目から見ても、オウムに限らず、日本の宗教団体には怪しいものがいくつもある。世界に目を向けてもそれは同じで、人民寺院やブランチ・ディビディアンなど、カルト宗教の信者による集団自殺や組織的な犯罪事件も起きている。そうした情況からも、安易にグルを求めることを危険視する声も増えているのだ。

たしかに、情報が溢れた現代であれば、いかがわしいグルを求めずとも、独力で過去の聖人や神秘家の著作や発言を研究し、深い思索を行い、叡知の探求や人間性の向上を目指すことも可能だろう。日本

でも昨年話題になったジェームズ・レッドフィールドの『聖なる予言』は、小説の形式をとってはいるが、覚醒の段階が九つの「予言書」で示された、グルの登場しない新しいタイプの手引き書である。そこで覚醒するのは、もはやグルの指導を受けた限られた特定の個人ではない。予言を読んだ誰もが、人を幸福に導く深い叡知を授けられ覚醒する。やがてその動きは世界中に広がり、人類は種としての新たな局面を迎えるだろう……という小説である。現状はそれほど簡単ではないだろうが、これなどは「グルを必要としない覚醒」の可能性を表現したものとして特徴的である。

こうした現状を踏まえて考えると、「真理や叡知の探求」イコール「グルと弟子の関係」という発想を改めなければならないのかも知れない。私には今回の事件の根源には、麻原個人の欲望以外に、「向上を目指すひ弱な人間の、完全なるものへの依存心」という問題があったと思う。そして、それこそが私自身や多くのオウム以外の人間にも問われるべき課題である気がしてならないのだ。

グルへの依存を超えて

「導師と弟子の関係」は、あくまでも「悟り」や「覚醒」など、人を向上させる知恵を獲得するための手法の一つである。ならば我々は今後、その関係にこだわらず、どのようにそれらを目指せばよいのか。そのことについて提言してみたい。その方が犯罪の批判よりも建設的だ。そう、あんな破壊的な事件の後だからこそ、私は意地でも建設的で前向きなことを提言したい。それが私の「反オウム」運動であり、自己批判なのだ。

もともと「悟り」や「覚醒」などというものは、学校教育で習う国語や算数などのように定まった教科書も明確な解も存在しない分野の知に属するものだ。それを考えることは自らの人生について考えることでもある。「どう生きるか、どう死ぬか」「われわれはどこから来て、どこへ行くのか」「人生の意義は？　なすべきことは何か」――どれもすぐには明確な答えなど出るわけがない。これらの答えは、私たちが実際に社会に出て、仕事をしたり遊んだり、

恋をしたり傷ついたりして、その中から導き出されるべき問題なのだ。とても一朝一夕で解決できるようなものではない。だが、それでいいのだ。

思えば私たちは、何でも単純に答えが出てくることに、あまりにも慣れ過ぎてはいなかったろうか。世界はどこもかしこも親切なマニュアルに溢れている。悟りや覚醒にしても巷には何十冊も手引き書が出回っている。遠からず「悟り」や「覚醒」そのものが商品化され街角のコンビニでトイレットペーパーの横に安値で並ぶ日も来ることだろう。それならそれでもいいが、我々はやはり手作りの面白さを満喫したい。時間がかかっても、苦労しても、それはそれでいいではないか。

私がここで提言したいのは、「悟りや覚醒に至る道は無数にあり、我々はどんな道を選んでも自由なんだ」ということだ。そのことを自覚しよう。

その場合、唯一無二の正しいグルを捜すには及ばない（いても一向に構わないけど）。自分にとっての絶対的な存在を求める気持ちもわからなくもない。しかし、それを特定の他者に求めるのはとりあえずやめよう。ある意味でそれは安易な選択だ。もちろん誰かを尊敬したい気持ちはわかる。誰も尊敬できない世の中なんて、あまりにも淋しいから。だけど人は他者に「完全」を求め、押しつけ、そこへ逃げてはいけないのだ。

しっかりと目を開いて生きよう。意識を変えれば退屈な日常生活こそ、格好の修行の場であることに気づくはずだ。実際、我々は何からだって学べるのだ。

そこに特定の個人の姿をした「グル」は必要ない。感覚をとぎすませ注意深く物事にあたれば、グルは何時でも断片的に姿を表すだろう。言い古されていることだけど、私たちをとりまくこの世界全体が、私たちを導くグルなのだ。

あなたを導くものは必ずしも偉い人の立派な言葉とは限らない。それはたとえば、親父のゲンコツに、お袋の小言に、友人との会話の中に、無数に存在しているだろう。その気になれば、小さな子供の素朴な問いかけにも無限の叡知への可能性を感じ取ることが可能なはずだ。

学ぶべき対象は何も人間ばかりではない。神秘的な月の光の中に、深夜に散歩する住宅地の静けさの

中に、虚空を見つめる猫の視線の先、鬱陶しい夏の暑さの中に、セミの鳴き声、鳥の声、そんなありふれた事象から呼びさまされる知識もあるだろう。小説、映画、音楽……目に触れたり耳にするもの全ての中から魅力的なものを見出そう。数多くの「感動」が多くのことを教えてくれるだろう。

あなたを導く魅力的な教えは、嫌な上司の小言や、あなたの大嫌いな人々の言葉の中にも数多く存在する。他人からの悪口をおろそかにしてはいけない。どんな嫌味も聞き逃がすな。悪意からだろうと嫌味だろうと、あなたの短所を指摘する声は、まぎれもなくその瞬間、グルなのだ。

徹底した自己分析と自己批判こそ修行の根本であるはずだ。それは強い意志さえあれば、ごく、あたりまえの日常生活の中でも可能なものだ。人里離れた山奥へ籠らずとも、教団や教主を頼らずとも、人間は日常の中で修行し、向上できるはずだ。

注意しなければならないのは、自分をとりまく現実との関係を軽んじることだ。たとえば、あなたが精神世界の本や神秘学の本、哲学でも現代思想でもいい、そうした本ばかり読んでいるとしよう。多くの本を読むうちに、それらの分野に興味を持たない、あなたのまわりの人々のことが、とても馬鹿でつまらなくて矮小な存在に見え出すかも知れない。そうなったら要注意だ。冷静になれ、頭を冷やそう。

たしかに本に書かれた「言葉」は立派だし、現実に生きている人間の見てくれはそんなに良いもんじゃない。だが、他人の知らない分野の知識を持つことがどれほどのことなのか？　叡知を学ぶのはエゴを肥大させる為でも、人を見下す為でもないだろう。

洗脳された新興宗教の信者たちが見せる、さも「自分は真理を知ってるんだ」という、自信に満ち

たあの不愉快なうすら笑いを思い出せ。信者以外の人間を「凡夫」と呼ぶオウムの信者を見てどう感じた？　度を越えたエリート意識や選民思想の醜さには不快の感を越えて哀しみすら覚えたのではないか。人は、そんなつまらない意識を持つために勉強したり、修行したりするのではないはずだ。それではあまりに情けない。

選民意識を持ち、自分達のまわりに見えない線を引き、「敵」を決めてそれらに向けての憎悪を育てることに何の意味があろう？　オウム信者だけの問題ではない。私やあなたたち、マスコミや評論家たちみんなへ向けられる問題だ。

たしか、ロバート・ワイアットの歌う、革命を題材にした唄の中に「私たちは指導者の為に闘っているのではない。敵を倒す為に闘っているのでもない。いま闘っている敵も含めて、みんなで一緒に幸せに暮らしたくて闘っているんだ」という意味の歌があった。

我々ももう一度、自らの行動の目的を問い直す必要があるはずだ。何の為のオウム批判か？　何の為の報道か？　何の為の糾弾か？　何の為の修行か？　何の為の悟りか？　私は誰かを見下す為の修行なんかいらない。誰かを苛める為だけの報道なんかいらない。誰かを差別し、傷つける為の理論や教義なんか絶対にいらない。私は、言葉にすればカッコ悪くて間が抜けていて、ちっとも現実的じゃなくて、どうにも青くてダサイ「どうしたら、みんなで争いや差別のない平和な世界を実現できるだろう」という課題を一生考え続けたい。

あなたも私もただの人間だ。本当に全く大抵の人間は徹底的にただの人間なのだ。

救世主なんかいなくてもいい。我々はあらゆる疑問に対してもっともっと、限界ギリギリの所まで自分自身であがいて答えを探す必要がある。絶対者を欲したり、何かにすがったりするのはそれからでも遅くはないはずだ。救世主を自称するペテン師は放っておけ。安易に救世主を求める心こそ責められよう。

くり返し言う。唯一無二の絶対的な存在を見つけ出して、それに己の全てを預けることは、どんな言い訳をしても己の人生に対する怠慢行為であり、背信行為なのだ。目に見えるグルがいれば楽だろう。

何でも決めてくれる指導者がいれば思い悩む必要はないのだから。だが、あくまでもあなたの人生はあなた自身のものだ。どんなことがあってもその運命を他人に預けてはいけない。

だからグルへの、批判精神を一切欠いた絶対的帰依など糞くらえだ。

人と話そう、書物だけでなく人間を読もう。多くの人たちと触れ合い、関係しよう。我々はくだらなく思ったり、つまらなく思った人たちからでさえも反面教師として多くを学べるのだ。それも、じっくりと観察すれば一人一人の人間の複雑さに気がつき、嫌な人間からも魅力を発見できるだろう。そこには「凡夫」も「外道」もいない。

あなたの身のまわりで現実に生きている人間は、マンガや映画に出てくるキャラクターのように善悪の役割分担が明確にあるわけではない。あなたがこれまで出会った人々について思い出してみるがいい。完全な善人もいなければ、完全な悪人もいなかったはずだ。誰にとっても、悪であり続ける人間など存在しない。ヒトラーは誰も愛さなかったか？　麻原は徹底して誰に対しても冷酷で無慈悲な人間だったか？　そうではないだろう。あなたの身近にいる、どう考えても存在意義の感じられない会社の嫌味な上司にしても、家に帰れば家族にとっては「良いお父さん」だったりするのだ。

そんなふうに善にも悪にも徹しきれないのが我々人間の本性ならば、他人からはできるだけ善い部分を見つけてあげよう。それが他者への最低の礼儀である。

観念の中に閉じこもるな。現実としっかり向かい合え。何度も言うが出家や教団に入ることだけが悟りや覚醒の道ではないのだ。

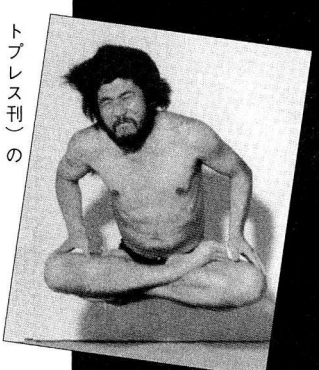
我々が生きるべき世界は、遠くヒマラヤの地下深くにあるというシャンバラでもなければ、ハルマゲドン後の千年王国でもない。今、まさにあなたが暮らしているその場所――限りなく平凡であたりまえの、退屈な日常の中なのだ。

そして覚醒も堕落も、創造も破壊も、あらゆる可能性は常に我々の内にあり、いずれを選ぶかは、常に我々自身の意志に委ねられている。その権利と自由を決して手放すな。

㊗

最終的な理想国を築くために神をめざす超能力者「麻原彰晃」（再録）

レポート／高井志生海



ヨガの達人、新手の超能力者として、例の有名な空中浮揚の写真を各メディアに熱心に売り込んでいた、ほぼ十年前の麻原彰晃代表。件の写真は、当時の女性週刊誌や各種オカルト誌などで取り上げられ何度も紹介されたが、ひとつ別格の扱いで、彼らの活動を記事化し扱ったものがあった。当時学習研究社の発行していた『ムー』と並んで人気の高かったオカルト総合誌『トワイライトゾーン』（ＫＫワールドフォトプレス刊）の八五年一〇月号に掲載された「編集部の不思議体験レポート」がそれである。

元外報部長の上祐史浩氏をはじめ、多くの中核スタッフがオウム／麻原氏の存在を知り、入信するきっかけになったとまでいわれる当レポートを、担当ライターの高井志生海女氏の了解を得て、ここに完全再録する。最初期の〝尊師〟の肉声を収めた、貴重な資料であると同時に、既にこの時点で「理想の王国を造るためには、戦いもやむなし……」という、その後の推移を考えるだに不吉な「意志」の萌芽が認められることもまた、注目に値するかもしれない。

同時に麻原当人に逢われ取材され記事を執筆された高井氏に、当時の経緯やオカルト業界・超能力などの「不思議産業」にまつわる所感を纏めていただいた（本書210ページ以降）。本レポートと併読されたい。

［編集部］

8年前、すべてを捨てて修行に入る

麻原彰晃氏。あと1年もすれば、空を自在に飛ぶ人である。

彼は、特定の宗派の僧でもなければ、団体のトップに座す人でもない。人間の師ももたない。彼の修行は独自で、しかも数千年も伝わる聖典の奥儀なのである。

麻原氏が修行を思いたったのは今からわずか8年前である。世の中すべてのものに強い矛盾を感じたのだ。何もかもウソだ。自分さえもウソツキだ。まわり中のこと一切が限りなくイヤになった。

どうしたら正しく生きられるか。彼は、その日からすべてを捨て、行に入った。

行は毎日2～5時間に及ぶ。仙道、大乗仏教、密教、チベット密教、ヨガ。ひとつに執着せず、数数の修行法をとり入れ、自分が納得する形で行なっていった。

修行を始めると、様々な神秘的なことが起こりだした。たとえば、トランス状態での異言。

その時のテープを聞かせていただいた。東洋系の言葉らしいが、私としては、TVなどでも聞いたことのない言葉だ。口調はかなり激しい。過激な説法、または、訴えのように聞こえる。

「アジアの、インド、中国、チベット、その辺の言葉だと思います。おそらく、自分の過去生と関係のある言葉でしょう」

麻原氏が、修行8年にして空を飛ぶということは、過去生でかなりハードな修行をしていたに違いない。彼は、テープに吹き込まれた自分の口から発した言葉を訳せる人を希望している。でも、もしかしたら、現在ではすでに死滅してしまった言語かもしれない。

修行3年にいたったころ、彼の魂は彼の肉体を抜け出し始めた。

「体が回転するような感じになったんです。ウォンウォンというモーター音に似た音がして、それからシューという音がしたんです。その時、魂が抜け出してゆきました。

抜け出した先で、魂は宇宙の星星を見たり、『人』と会ったりするんです」

こんなこともあった。シャヴァアサナ（屍のポーズ）をとり、トランス状態に入っていた。

彼は、大スタジアムのようなところにいた。観客スタンドは、裸の僧で埋まっている。中心で、やはり裸の僧の彼が説法をしている。

「霊界での説法なんですね。私はそこで説法をして帰りました」

聖典を読んで帰ることもあるという。魂が、修行において気になることを調べに行くのだ。

「自分が現実で読む本を先読みしているのです。だから、実際に読む本の内容は、すでに知っていることが多いのです」

魂が抜け出さずとも、本の内容を理解していることも度々ある。修行中「ああ、これはこういうことなんだ」と感じた通り、後に読む本に同じこと

が示されている。

もちろん、修行に危険が伴わないわけではない。普通だったら死んでいるというような目にあったことも1度や2度ではない。

「その時は、自分の守護神に頼むのです。そうすれば、必ず、元のところに帰ってこられる」

突然、天から聞こえてきた神の声

麻原氏には、たくさんの信仰している神、守護している神がいる。彼は、それらの神々から修行法を学んでいるようである。

「トランス状態のとき、神々が現われることがあります。神々はヒントを与えてくれることもあります。または私が質問し、神が答える。質疑応答形式のこともあります。その中で得たのは『生きることを否定せよ』ということです」

麻原氏は、いつも出会う神とはニュアンスを異にする3人の女性に出会っている。彼には、霊界人とも宇宙人とも感じられた。

「まず1度めは、5年前。妻の出産の時のことです。朝、自宅で目覚めるとロングヘアで緑色の服を着たグラマーで美しい女性が、私に向かってオイデオイデをしているんです。

全身はエーテル体とも思えるもので、炎の赤をしているのです。髪の色は、全身の色を薄くしたような感じで、ジャンパースカートのような形の服に茶色のベルトをしめていました。

会話はありません。『私があなたを守護しているのです』と私に見せているように思えました。

2回目は2年前です。自宅で、眠る直前のことです。髪は肩まで垂らし、オレンジ色の服をきた目鼻立ちの美しい女性でした。体色は人間と同じでした。この時も会話はありません。

3回目は今年の5月。ここ（麻原氏の道場）でです。髪の長さは肩ぐらい。やはりオレンジ色の服ですが、体の色は、何というか、この世にない色なんです」

3人の女性たちは、共通して美しく、グラマーであり、口をきかない。決まって、彼の左側に現われる。そして、彼女たちが去った後、場の空気が揺らぐという。

「最後はいつも、霧のようにかき消えてしまいます。ひとつ修行が進むと、異なった人が現われるんです」

麻原氏は、これまで世に出ようとは考えなかった。ところが、ある時、声を聞いたのである。

『地球はこのままでは危い！』

彼は今、シャンバラのような王国、神仙の民の国を築く準備を開始するため、多くの人に修行法を開放する必要を感じた。

今年の5月のことである。彼は神奈川県三浦海岸で頭蛇の行を行なっていた。五体投地をしていたときのことである。突然、天から神が降りてきた。神は彼に向かってこういった。

「あなたに、アビラケツノミコトを任

じます」

アビラケツとは、彼の初めて聞く言葉であった。彼は、サンスクリットを教えている人を訪ねた。

すると、アビラケツとは、地水火空の意味で、アビラケツノミコトとは、「神軍を率いる光の命」、戦いの中心となる者と判明したのである。

彼は、天から降りてきた神によって、西暦2100年から2200年頃にシャンバラが登場することを知り、これまでアビラケツノミコトとして戦うように命じられたのである。

彼は考えた。チベットのような王国を造らなくてはならないことはわかっている。しかし、チベットは戦争を好まない国である。理想国を造るため、戦さを用いてよいのであろうか。

彼は、シヴァ神や、ヴィシュヌ神などの自分の信仰する神々や自分を守護してくれる神々に相談した。神々は「命を受けるべき」と返答した。

完璧な超能力者たちの国をめざす

麻原氏は、神を感じるだけでなく姿を見るという。それによると、たとえばシヴァ神は、白銀のような色、ドライアイスのような色の神体を持っているという。

ところで、ここでいうシャンバラとは幻の国、聖人たちが住み、全宇宙の、そして過去から未来永劫に至るすべての英智が納められている国である。かつて、秦の始皇帝、アレクサンダー大王も求めてやまなかった土地なのだ。

シャンバラは、地下深くにあるといわれている。そして、地球上のある地点からは、シャンバラへの通路が開けているという。

その昔、チベットの首都ラサにあった古ポタラ宮の地下の一室はシャンバラへの入口であったと伝えられている。そこで、チベットはシャンバラの影響を受け、チベット密教を開花させたのだ。

聖者たちのひと握りの者たちはシャンバラを訪れることができる。そこで、ある者はシャンバラの住人となり、ある者たちは社会に戻り、許された者にだけシャンバラを伝えたのである。道教の祖・老子は、シャンバラの人になったといわれている。

麻原氏の話に戻ろう。

「2006年には、核戦争の第1段階は終わっているでしょう。核戦争なんて、ほんの数秒で終わってしまいます。日本も死の灰の影響を受けているはずです。

核戦争は、浄化の手段ですね。だから、私は『ノアの箱舟』も信じられます。選りすぐったレベルの高い遺伝子だけを伝えるんです。

だけど、人が『自分の分け前をさいて人に与えよう』というように考えない限り、『浄化』はなくならないんですね。そういう気持ちになかなかなれないのが人間でしょう。

もし、それが真実でないとしたら、

編集部の不思議体験レポート㉒

最終的な理想国を築くために
神をめざす超能力者

レポート／高井志生海

今月号の口絵14ページで、空中浮揚の連続写真を紹介した麻原彰晃氏。彼は師にもつかずに、独自の修行でこのレベルに到達した。だが、この超能力者の目的は、はるか先にある。

▶8年間の修行で、空中浮揚の初歩までをマスターした麻原彰晃氏。あと1年で自在に飛べる。

8年前、すべてを捨てて修行に入る

麻原彰晃氏。あと1年もすれば、空を自在に飛ぶ人である。

彼は、特定の宗派の僧でもなければ、団体のトップに座す人でもない。人間の師ももたない。彼の修行は独自で、しかも数千年も伝わる聖典の奥儀なのである。

麻原氏が修行を思いたったのは今からわずか8年前である。世の中すべてのものに強い矛盾を感じたのだ。何もかもウソだ。自分さえもウソツキだ。まわり中のこと一切が限りなくイヤになった。

どうしたら正しく生きられるか。

彼は、その日からすべてを捨て、修行に入った。

行は毎日2～5時間に及ぶ。仙道、大乗仏教、密教、チベット密教、ヨガ。ひとつに執着せず、数数の修行法をとり入れ、自分が納得する形で行なっていった。

修行を始めると、様々な神秘的なことが起こりだした。たとえば、トランス状態での異言。

その時のテープを聞かせていただいた。東洋系の言葉らしいが、私としては、TVなどでも聞いたことのない言葉だ。口調はかなり激しい。過激な説法、または、訴えのように聞こえる。

「アジアの、インド、中国、チベット、その辺の言葉だと思います。おそらく、自分の過去生と関係のある言葉でしょう」

麻原氏が、修行8年にして空を飛ぶということは、過去生でかなりハードな修行をしていたに違いない。彼は、テープに吹き込まれた自分の口から発した言葉を訳せる人を希望している。でも、もしかしたら、現在ではすでに死滅してしまった言語かもしれない。

修行3年にいたったころ、彼の魂は彼の肉体を抜け出し始めた。

「体が回転するような感じになったんです。ウォンウォンというモーター音に似た音がして、それからシューという音がしたんです。その時、魂が抜け出してゆきました。

抜け出した先で、魂は宇宙の星星を見たり、「人」と会ったりするんです」

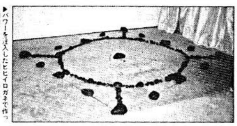
こんなこともあった。シャヴァアサナ（屍のポーズ）をとり、トランス状態に入っていた。

彼は、大スタジアムのようなところにいた。観客スタンドは、裸の僧で埋まっている。中心で、やはり裸の僧の彼が説法をしている。

「霊界での説法なんですね。私はそこで説法をして帰りました」

聖典を読んで帰ることもあるという。魂が、修行において気になることを調べに行くのだ。

「自分が現実で読む本を先読みしているのです。だから、実際に読



▶パワーを注入したヒヒイロガネで作った円陣。チャクラを司っている。

118

地獄・餓鬼・畜生・人間・阿修羅・天という六道はなくなってしまうでしょう。

私の目指すのは『最終的な国』なんです。それは、仏教的・民主主義的な国で、完璧な超能力者たちの国なんです」

神が授けた神秘の石
ヒヒイロガネ

そのためには、修行と解脱しかないのである。修行の意味を麻原氏に語ってもらった。

「修行とは、ジュースの1滴を、テーブルクロスの上に落とさず、水の中に落とす、ということなんです。1滴のジュースとは、人間のことです。1滴のジュースは、テーブルクロスの上に落とせば、ただのシミです。でも、水の中に落とせば広がるでしょう。水の中にただ1滴のジュースを入れたって、水は色を変えないでしょう。でも、水の中には確実に1滴のジュースが入ったんです。

魂の根元的な状態ですね。拡散した1滴は、水の中のことすべてを知り、経験できるんです。これが空であり、寂静です。高次元に昇華した状態ともいえます」

大きな水がめの中の世界を体験している麻原氏の身辺は、アビラケツノミコトを任じられて以来、急転しだした。修行で岩手県におもむいたときのことである。彼は、天からオリハルコン、またはヒヒイロガネと呼ばれる神秘の石を与えられた。

ヒヒイロガネとは、超古代文献『竹内文献』などにも登場する石である。神社の玉砂利のように滑らかだが、それよりずっとツヤがあって黒い。ズッシリと重たく、カネの名の通り、金属的な感じの石なのだ。

麻原氏は、この石の様々な利用法を考案中である。

水を張ったバケツに石を入れ、念を入れる。その石で円陣を作り円陣の中で瞑想する。

ヒヒイロガネは、手に入れた人誰にでもパワーを発揮するものではないという。念を入れられる者の手にわたってはじめて、パワーを与えられ、驚異の力を噴き出すらしい。

念を入れたヒヒイロガネは、多くの人々を同時にトランス状態にすることもできるという。この石については、いずれまた機会があったら報告したいと思う。

麻原氏に行法の一部を実際に行なっていただいた。

麻原氏は、座して、様々な印を結ぶ。印は2、3秒で変化する。

「これはチャクラ開発のための印です」

次に、立ち上がり、上半身を少し前方に傾けた。腸というか、腹の中がゴロゴロと動き出した。これは浄化法・ナウリのひとつ。腹にあるマニプーラ・チャクラの覚醒に役立つ行だ。

次は仰向けに寝てから足を天に持ち上げるショルダースタンドの形。空中浮揚に欠かせないビシュダ・チャクラの覚醒が目的だ。

それからライオンのポーズ。これは、クンダリニーの覚醒に必要なポーズである。

麻原氏の修行には、かなり危険なものも多い。たとえば浄化法のひとつで、幅7センチ、長さ3メートル半の布を呑み込むというものなどだ。この時は、呼吸ができなくなるほどだという。

重要なのは正しい生活と食事、修行

彼は、修行中、シャヴァアサナに入ったとき、チャクラの光を度度見るという。

ちょうどフラッシュがパッパッと飛ぶような感じで、下のチャクラから順

突然、天から聞こえてきた神の声

▲チャクラを開発するための一連の印

119

に光を放ち、同時にやはりフラッシュのような音がするという。音と画像がシンクロするのだ。

経験によると、音と光は様々な神秘体験には、共通して現われるらしい。たとえば未来や過去へタイムトリップするときは、マーチのリズムのような音、霊体が離脱するときはブーンという振動のような音。

これは、各種の教典とも矛盾しないという。そこで、そのような音を作って流せば、修行者は案外簡単にタイムトリップや霊体離脱を経験できるのではないかと麻原氏は考えている。

それでは私たちがすぐにでもできる修行法について尋ねてみた。

「それは、まず何よりも五戒ですね。1が殺生をしないこと。蚊が自分の血を吸っていたら吸わしておくことです。2が盗みを働かないこと。3が誠実にして、ウソをつかないこと。4が邪淫をつつしむこと。5が禁酒すること。以上の五戒に徹することですね。悪の行為をやめ、将来にするだろう善行をどんどんすることです」

集中的に瞑想などをしようと思うなら、空気のきれいなところの方が効果的だ。プラーナ（気）の満ちあふれた海や山を選ぶとよい。ただし、風のないところで行なう。地・水・火・風・空のエネルギーは想像以上に誘惑的なのだ。

次に、食物は、玄米菜食の方がよい。1日に1回、または2回。または少しずつ、数回に分けて食べる。ヨーガの激しい修行をする行者の場合、日に1800〜2000カロリーが理想といわれている。一般の人なら1200〜1500カロリーで足りるだろう。ただ、カロリーと栄養とは異なるから、栄養はしっかり摂らなくてはならない。

「(日に) 3食は獣の食事、2食は人間の食事、1食は聖者の食事という釈迦の言葉があるんですね。

でも、日に1食では、一般的には栄養が足りなくなってしまう心配がありますから。日に1度という場合は、夕方に摂るのが理想ですね」

玄米菜食だけで、スワジスターナ・チャクラ（腰・仙骨）までは開発できる。しかし、それより上のチャクラは、修行でしか開発できない。

「スワジスターナ・チャクラは植物を司るんです。ここが開発されれば、低い次元の超能力は身につきますね」

麻原氏は、腹のマニプーラ・チャクラが開くまでは、外食は一切しなかった。もっとも、化学物質などの変なものを食べることを体が受け付けなかった。

でも、今は多少腐ったものを食べようが何を食べようが平気である。火のエレメントがすべてを燃やしてしまうのである。

チャクラが開くということは、規制がなくなるということも意味しているのだ。

尾骨のムラダーラ・チャクラが開くと規制され、腰のスワジスターナ・チャクラが開けば性欲の規制がなくなる。腹のマニプーラ・チャクラが開けば食

欲の、胸のアナハタ・チャクラが開けば行為の規制がそれぞれなくなる。

規制がなくなるとは、「何をしてもいい」ではなく、規制をせずとも自動的にコントロールされるということである。

「食べ物に気をつけるのもいいが、もっと大切なのは精神です。食物の害より精神の害の方がずっと悪いです。肉を食べたからってすぐ内蔵が悪くなることはない。でも気持ちに及ぶ害は、すぐに体を悪くします」

つまり、肉体への栄養よりも精神への栄養の方が大切なのだ。適当な食事よりは、瞑想1時間の方がずっと栄養になるらしい。

「物質で人間は救えないということをもっとよく考えるべきなんですね」

超能力は自分を神々に変えていく

正しい食事をし、正しい修行から得られるもの、それが超能力である。最近は、魂の浄化・向上こそ第1義で、超能力は邪道という考えも広まりつつあるので、麻原氏における超能力の定義をしてもらった。

「魂の進化・向上という考え方がありますが、それは、人間の魂が阿修羅・神々に至ることなんですよ。つまり、超能力の獲得と魂の進化・向上ということとは、矛盾しないばかりか、正しい相関関係にあるんですよ」

それゆえ麻原氏は自分を神に変える修行をし、「完璧な超能力者の集団」と彼のいうところのシャンバラ王国を設立するべく、神軍を率いて戦うのだ。

麻原氏のまず当面の目標は、自由自在に空を飛べる空中浮揚。それと、大脱身（だいだっしん）を成功させたいという。

「これは、アジナ・チャクラから自分の魂を抜き出させ、目的としている相手の身体に入る超能力のことです。これが可能になると、三界（欲界・色界・無色界）を自由に行き来できるんですよ。ここまでくると、もう人間といっていいかどうかわかりませんけどね。また、核戦争の脅威から身を守るには、極熱にどれぐらい耐えられるか、放射能をいかに防ぐか、ということになると思うんですよ。今の修行方法でそれに耐えられる身体はできると思っています」

麻原氏は、空中浮揚の初歩までの修行を達成した。しかしながらこれは、全修行の段階の4分の1にすぎない。生きているうちに、全部達成できればいいという。

「私は、ハタヨガでいうところの解脱はすでにしています。真我も見ています。これから求めるのは仏教でいう真解脱です。それがいくつもの決め方がある解脱のうちでも最高のものとされています。

もし、真解脱ができたら——もっともっと修行しますね」

修行を達成した人間は、次の生を好きなように形づくれるという。麻原氏の中には、地球、自分、宇宙、神々…超大な計画がもくろまれているのかもしれない。

救済計画に踏みきった〝超能力戦士（ウォリアーズ）〟たちの誤謬

高井志生海

たかい・しおみ：一九五〇年代の東京に生まれる。高校生の頃から広告コピーをはじめ、後に雑誌ライターへ。専門はオカルトよりも人物インタビューと旅もの。現在の関心はホーリスティック医学とシャーマニズム世界の自然観。著書『元気が出た、不思議石』（サンデー社）等。

富士山麓にオウム集結す…

八八年三月。標高の高い富士の裾野はまだ真冬である。何もない荒くれたフィールド。真新しい白く巨大なテントが灰色の空に浮かび上がる。その脇に大きな箱のような建物がある。その間に二百人は超えるまだ歳若き人々が集まる。そしてそこは、妙な熱気に包まれていた。テントの外では、雨まじりのぬかった地に何かを思いつめたような面もちで五体投地する若者がいる。テントの中では、白い薄手の化繊サテンを着た若者たちが団体となって立っては平伏し、立っては平伏し、飽きることなく同じ動作を繰り返す……。

やがてはオウム真理教総本部が置かれることとなる富士宮の会場。今日ここでこれから、彼らが崇拝し、〝尊師〟と崇める麻原彰晃氏が一大宗教儀式を繰り広げるのだ。

〝尊師〟が現れた。胸に赤子を抱き、その周囲を彼の子供たちが前に後ろに楽しげに取り巻く。若者たちは上着がなくては過ごせないほど寒い日だとい

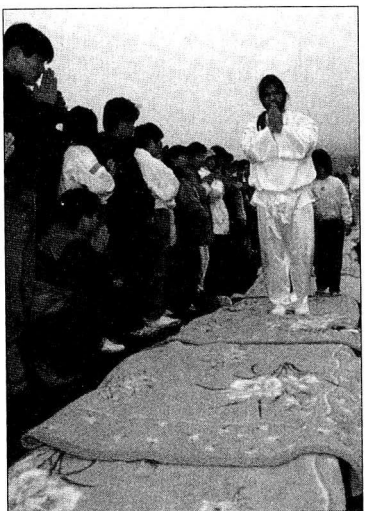
うのに、我先にと上着を脱ぎ、ぬかった地に自らの服を投げて師の歩く道を作る。師の踏んだ服は信者の修行を助けるという。彼らはすすんで麻原氏に帰依しようとする。彼らは麻原氏の姿に向けて一身に合掌する。これからはじまろうとする一大儀式に胸ふるわせて緊張する。寒空のもとで五日間のテント生活。師の苦行を自らの甘美な体験として分かつために、そして儀式を成功させるために……。

この日は私が麻原彰晃氏を見た二度目のときだった。私は雑誌の取材でここにやってきた。だが彼はすでに〝雲上の人〟となり、〝儀式を控えた大切なお体の尊師〟に話をきくことはできなかった。

このときのオウムは「オウム神泉の会」から「オウム真理教」と改称した半年後、まだ宗教法人ではなかったが、九五年五月二一日付けの朝日新聞から推測すると信者数は二千人を超えるだろうか。儀式の題目は、その頃、富士山爆発が騒がれていたこともあって、「日本沈没と人類滅亡の危機を救い、その前兆にあたる富士山爆発の回避」。富士山爆発は尊師の祈りによって回避されたと信者たちは信じているが、この儀式もその一環だった。

儀式は「水中エアタイトサマディ」と名付けられて、麻原氏が常人なら二・七日が限界という容積の箱に入ってその周囲を水で覆い、彼が密室の中で五日間を過ごすという。〝サマディ〟とは、経典「ヨーガ・スートラ」における心臓、呼吸、代謝などすべての肉体機能を停止させて一種の仮死状態を作る行および秘法で、経典はこれができることをもって〝解脱〟としているのだ。

信者たちは、その儀式に参加するために仕事を休んで全国から集まってきた。中心は二〇代前半の若者たち。彼らは一途な表情で儀式がはじまるのを待っていた。だが、中には誘われてきたような〝おがみ屋巡り〟好きのような年配の女性たちも混じっている。テントの中では、儀式がはじまる前の時間を利用してオークションが開かれることになっていた。信者たちは、箱の密閉のために使った水を〝修行の速度が早まる水〟として求める。記憶はあいまいだが、サテンのオウム服やそれに締める帯も売っていたように思う。私はこのオークションを見ることはなかったので、実際に行われたどうかはわからないが、例の年配の女性たちは儀式がはじまるまでの暇


五体投地をしながら2回目のサマディに挑む麻原氏

をもてあまして「御尊師のオヒゲとオカミがセットなら二〇万円でも安いわねぇ」などと話していた。

正直な感想をいえば、このとき取材者としての私は、この光景の中に入り込むことができなかった。なんとも、自分とはほど遠い。世界が違うのだ。二年半前のインタビュー時はひとりの修行者だった麻原氏が、今は「日本で唯一の最終解脱者」として新々宗教の教祖と様変わりし、人々の上に〝神となる修行をした尊師〟として君臨している！

あとになって、私がこの儀式に入り込めない〝何か〟を感じたのは、小さな会だったオウムが急成長し、麻原氏が新々宗教の祖となってしまったからではないことに気が付いた。私にとって、そこは異次元だった。そして、異次元を作っているのは信者たちの〝熱気〟だった。教祖となった麻原氏のような人は、オカルト雑誌業界をすでに五年見ていた私にとっては珍しくはなかったが、信者たちは私の考えの枠をはるかに飛び超えてしまっている。自分のありったけの想像力をもってしても、自分自身は絶対そこに入り込めない奇妙な熱気……。彼らはなぜ、麻原彰晃というひとりの人間にそこまで心酔できるのだろうか。なぜその教義をそこまで信じられるのだろうか。なぜそこまで従順になれるのだろうか。

結局、儀式はあたりが暗くなるまで待ってもはじまることはなかった。密閉の不備から五日後に延期され、それもまた同様の理由から延期となってしまったが、二度目の前夜は最初を上回る四百人の信者が師の講義に集まって成功を祈ったそうだ。

一般にいえば、ふつうに仕事をもっている者が儀式に参加するには仕事を五日を休み、延期となればさらにそこから五日を欠勤する。このとき私は、信

者の中から「延期になったらもうサマディに参加できない」とがっかりする声をきいたように思う。その一方、大多数の信者の熱気からは、仕事を休むことなどまったく意に介さないという気配も感じ取っていた。

ちなみに会は「次回サマディは四月某日、やがては釈迦が衆生の前で行なったという奇跡の水中サマディ（実際に水に入る）を行なう」と発表していたが、これが決行されたかどうかは、そのオカルト雑誌とオウムとの関係も徐々に希薄となってしまったため、今となっては不明である。

すべてのエッセンスはここにある…

九五年。世間は一連のオウム報道で沸き返っている。九〇年に麻原代表をはじめとするオウム真理教信徒二十五人が総選挙に立候補したときはさして不思議も感じなかったが、今の私は、オウムのことをあれこれと考えている。そして、報道に新しいものが加わると、考えもそれにつれて変化してゆく。

八五年。麻原彰晃氏は例の空中浮揚写真をもって、雑誌などマスコミに売り込みをしていたときく。あるオカルト雑誌――「トワイライトゾーン」（KKワールドフォトプレス刊、以下TZ）もそのひとつだった。そしてその夏、私はTZの意向で、オウムの道場だったマンションの一室で彼に会い、二～三時間話をきいて記事をまとめた。売り込みを受けた何誌かが浮揚写真を取り上げたようだが、TZの記事は、ほかとは一線を画していた。他誌は興味本位でそれを取り上げただけだったが、TZは浮揚写真の時間コマ送り写真を巻頭のカラー二ページで、私のまとめた「編集部の不思議体験レポート」では、彼を掲載した雑誌の中で唯一、彼が「空中浮揚」写真を媒介として「本当にいいたかったこと」を六ページにわたって紹介したのだ。

最近になってはじめてこの記事を読み直した私は、震撼とさせられた。そこには、現オウムと何ひとつ変わらない思想の原点――エッセンス――がある！私はテレビや雑誌からの一切の取材を拒否してきたが、マスコミが私に話をききたがったのも当然だ。現在伝えられていることが事実なら、彼らは、このエッセンスを〝実行〟しただけなのだ。

報道が事実と仮定するなら、最初の私の疑問は、「なぜ殺人まで」だった。だがそれは、個人の妄想が集団妄想となり、そこに薬物が関与したら一線は簡単に超えられるのではないかと思うようになった。最近では、疑問は「なぜここまで肥大化したか」に変わってきている。その〝肥大化〟を見せつけられたのが、「水中エアタイトサマディ」だった。そして、そのとき感じた〝熱気〟に、その疑問を解くカギがあるのではないかと思うようになった。

私はフリーランスのライターとして、TZで八三年の暮れから約六年にわたって原稿を書いていた。最初の五年間で、麻原彰晃氏を紹介することともなったレギュラー記事の連載を四十七回続け、単発の取材にも出かけ、取材対象となった代表に二時間以上は話をきき、その会やイベントに集まるオカルト雑誌の読者であろう〝未知のものを求める〟千人に近い方々とお会いした。

上祐史浩氏をはじめ、オウムの初期に入会した信者の一部はオカルト雑誌の愛読がそのきっかけとなったともきく。となれば、それはTZしかない。私は、取材でお会いした千人の人たちを思い巡らし、そこにオウムを作り上げた人々の像が浮かび上がらないかと考えはじめていた。

早すぎたオカルト総合誌「トワイライトゾーン」

TZは、ニューエイジのためのオカルト雑誌として、八二年十一月号で月刊誌として創刊した。その母体はUFO専門の「UFOと宇宙」（ユニバース出版）である。時代的にはUFOの目撃報告や映画「未知との遭遇」「スターウォーズ」が大ヒットし、ユリ・ゲラーやスプーン曲げによって〝超能力〟という言葉が浸透し、占い本やノストラダムスなどの予言本が売れ、ヨガがブームとなって、人々の目が未知の世界へ向きはじめた頃だった。

TZという雑誌は、前からの流れでUFOや異星人を主軸に、あえて特定のスタイルをもたずに、さまざまな超常的な現象や〝オカルト〟でくくれるもの全般――ノストラダムス、今をときめく風水、古代宗教や神秘儀式、ピラミッドパワー、古代遺跡や古代史の不思議、アトランティスにムー大陸、ハイテクを応用したマインドコントロール機器や超エネ

ルギー装置、神秘思想および思想家、特別な能力をもっていたと想像できる歴史上の人物、超能力者、霊能力者、魔術、占術や占星術、自然療法、夢、クリスタルムーブメントなど海外の精神世界の動向、恐怖体験、心霊写真、月や数の神秘力――といったものを、主として事象の〝発掘〟や〝伝える〟というかたちで取り上げていた。

TZが出た頃は、〝オカルト雑誌〟という新たな市場が見出されたときで、いわばオカルト雑誌乱立の時代、出版社はオカルト雑誌に意欲を燃やした。

それ以前からあったものといえば、今も現役の精神世界寄りの「たま」（たま出版）と「UFOと宇宙」という二大大御所だけで、TZと同時代に創刊されたものとしては「メビウス」（たま出版）、「ムー」「マヤ」（学習研究社）、「不可思議」（明文社）、「ゴッドマガジン」（徳間書店）、「アズ」（新人物往来社）、「ワンダーライフ」（小学館）などがある。各誌は精神世界に寄ったり不思議事象の実用を売りにしたりなどさまざまな特色を出していたものの、やはりどの雑誌も通り過ぎることのできない同類のテーマを時期をずらしては掲載していたから、各誌を支えている〝未知の不思議〟を求める読者は書店で各誌を比べて、好みのテーマを扱っている雑誌をそのときごとに求めていたことと思う。

TZは創刊から六年間、同じスタイルを守り続けてきたが、ソフトムードの占いや心理テストの流行とそれらを扱う女性占い雑誌の相次ぐ創刊に押されて、それまでのTZとはまったく異質な若い女性のための開運や占いの雑誌へと変容し、ついに八九年十二月号を最後に従来の読者に惜しまれながらも休刊となってしまった。当時、TZと読者を分けた

オカルト雑誌で今も残るものはごくわずかとなってしまったが、今思えば、オカルト雑誌は時代より十年かそれ以上、先を行っていた。だから、TZも今あれば廃刊の憂き目には遇わなかったかもしれない。でも見方を変えれば、かつてのオカルト雑誌ネタ——風水、α波、自然療法、能力開発セミナー、神秘思想など——が今ではすっかり一般化してしまったから、オカルト雑誌は専売ネタが日の目を浴びたときに役目を終えていたのかもしれない。

台頭する不可思議ビジネス

振り返ってみれば、TZがあった時代は、不可思議なところにビジネスの掘り起こしがされたときだった。高度成長期も過ぎ、余暇に照明を当てたもののまだまならず、第二次オイルショックのあとの次の発掘個所といえば〝精神的なもの〟〝既成科学を超えたニューサイエンス〟だった。人々は科学尊重や金だけが中心の文化に少し飽きてきた頃、子供たちは映画やアニメによるSFや超能力の流行とともに、ただ社会のコマとなって働くだけのわが未来を直観して仮想現実の世界に傾倒しだした頃だった。

そこで今だからこそはっきりわかるのは、当時〝不可思議新ビジネス〟によって世に出ようとしていた新々宗教家や霊的能力者は、オカルト雑誌を世に出る足がかりとしたということである。そこには〝未知の素晴らしいもの〟を求める読者がいる。心に空虚さを抱えた読者がいる。不可思議ビジネスなら、元手もわずかでいい。つまり、科学に受け入れられない突拍子もない持論を発表したい人のほかに、有名欲や権力欲、金銭欲というものが、はっきりしたかたちをもたないオカルト雑誌の中に売り込みや広告として入り込んできたのである。

一般の雑誌なら、メジャーになる寸前、編集者の嗅覚が〝ヒットの予感〟をキャッチしてはじめて、対象者に取材が来る。そこまでのフェロモンを発していない対象者が雑誌に出たいというなら、自ら料金を払って雑誌に広告を載せてもらう。だが、宗教や霊の匂いのするものは、いくら金を積んでも出られない雑誌がほとんどなのだ。だがオカルト雑誌の敷居は違った。この業界自体、まだ混沌として方向定まらず、みなが科学に押されて過去へと葬った古

来からの神秘や未知のことにあらためて目を向けはじめたばかりのときだったのである。

そして当時、超常的なことで世に知られたいと思う人なら誰でも、ターゲットとすべき雑誌は一般週刊誌をのぞけばオカルト雑誌の二大勢力だったTZと「ムー」誌だった。とくにTZは、あえて特定のスタイルをもたず、この業界に含まれるどんな分野もどんな人も取り上げ、読者に紹介するという性質から、彼らのかっこうの標的となった。とくに私が記事を書いていた「編集部の……」は、この世界へデビューする登竜門として、TZにしても取材される側にしても、ちょうどよい〝区割〟だったのである。

「編集部の不思議体験レポート」という聖域

TZがはじめて麻原彰晃氏を登場させたのは八五年十月号、「編集部の不思議体験レポート」というページでだった。これは約五年間続いたTZの長寿企画で、私がまだ読者に知られていないオカルティックな人やものを取材したり体験したりして紹介するという内容のものだった。

その中で紹介したのは、超能力者、霊能力者、気および気功、精神的な武道、メンタルトレーニング、α波、ピラミッドパワー、中国やチベットの秘法、宗教家、自然療法、超自然食、不思議な石や地蔵、自己開発セミナーといったややソフトよりの未知のものである。そこには今では有名な顔や理論や装置が並んでいる。テレビCFなどにも登場している発明王・ドクター中松、風水の大家・鮑黎明氏をはじめとする占術家、話題の新々宗教家、フローティングカプセルなどストレス解消機器やα波発生装置、脱税で逮捕となった女性霊能力者……。そして私の知るかぎりでは、幸福を呼ぶ絵を描く女性が〝天に招されて〟、まじない師が〝呪いを受けて〟という理由で、すでにふたりが若くして亡くなっている。

「編集部の……」は取材先でいつも非常に歓迎され、私は取材対象者やその会に集まる人々の言葉から、その記事がいかに楽しみに読まれているかを知ることとなった。そのページは、世に出たい人や自分の研究物を広げたい人、〝何か落ちている素晴らしいもの〟を探している人にとってのちょうどよい

情報源だったのである。理屈だらけの論文調の文章とは違うその記事はたしかに誰でもすんなりと読める。だがこれには私は多少、慌てた。私としては海千山千のものについては取材対象者の言葉をそのまま伝えて読者に判断を委ねていたのに、多くの読者は彼らの言葉をそっくりそのまま信じているのだ！

そしてTZは、売り込んできた麻原氏を、このページで取り上げた。それは、彼の空中浮揚写真に感動したからではなく、雑誌を活気付けてくれる人材発掘として受け入れたのだ。編集部は、俗にいう「カエル飛び」という方法でなら、このような写真は撮れることを知っていた。事実、その後のTZにはもっと高く飛んだ別の行者の浮揚写真が掲載されている。私もいつもどおり、編集長の「ちょっとこの人の話をきいてみて」のひとことで取材に行った。もちろん、狙いは「浮揚を目の前で見せてもらうこと」。その夢は残念ながら、叶わなかったが……。

若き修業者としての麻原氏

八五年の夏、私は麻原彰晃氏に会った。東京のとあるマンションの一室。ドア脇に「神泉の会」という札がかかっていて、そんな名はきいていなかったから、「たずねる場所はここでいいのかしら」と思ったことを覚えている。「神泉の会」に「AUM」と添えられていたような気もする。

玄関に迎え出てくれたのは、石井久子氏だった。細い肩紐のピンク色の水着（タンクトップ？）に素足、私は女性がいるなどと知らなかったせいもあって、彼女のいでたちにちょっと驚いた。私もヨガをしていたが、当時はまだ、露出度の高い派手なトレーニングウエアなどなかったからである。

麻原氏はといえば、まずは気さくな印象がある。年配の取材対象者が多かった中で、若く元気があったせいもあるだろう。話をはじめると止まらない。外へぐいぐい広がっていくような向上性と発展性を求める性質と見受けられる。雄弁闊達。野心ある理想家肌の人物。自分のペースで話をすることに長けている。相手が質問や反論をはさまなければ、氏の話は途切れることもない。不精なインタビュアーなら質問を用意する必要もないほどに彼の話は流暢につらなってゆく。霊能力者によくあるような陰の影、

静の印象がない……。

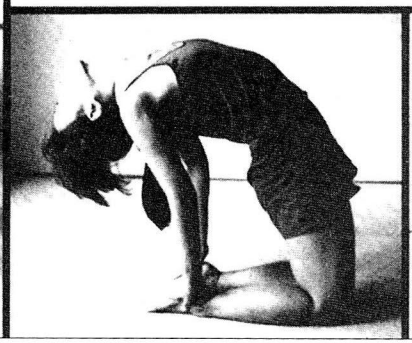
だが一歩引いてみると、まだ三〇歳の彼の背後に渦を巻くような陰の影を感じ取れる。ここまでになるには、さまざまな問題を抱え、矛盾に悩み、紆余曲折があっただろう青年。その自分を叱咤して目を外に向け、自己のエネルギーで自分を引っ張ってきた青年。だからこそ、彼の周囲には自身を牽引してきた陽のエネルギーの印象が陰の影を制して際立っているのだ。

そのマンションには、石井氏のほかに、やはり彼女と同じいでたちのふたりの女性がいた。ひとりは飯田エリ子氏だ。私は取材をするうちにだんだんと、ここはヨガの会で、このマンションは会の道場であること、彼女たちもヨガをする人なのだということがわかってきた。

彼の話をひとしきりきいたところで、彼女たちに目がゆく。石井氏のことはよく覚えている。面長の面だち、彫りの深い静かな美しい顔。活発な明るいトーンのてきぱきした言葉とそれに応じた振る舞い。だが、心に厳しさと激しさを秘めている。人に強い印象を与えるタイプの人だった。飯田氏はふっくらした笑顔の愛らしい控え目な女性のイメージ。やはり秘めた頑固さや意志のようなものが感じられる。陰陽の感触でいえば、彼女たちにはその積極性の裏にやはり陰の印象がある。それは、不屈なもの、発散させたい力、何かを成し遂げたい大きなエネルギーのようなものだった。

石井氏についてはTZの編集部に麻原氏の原稿を届ける姿を一、二度見かけたと思うが、シンプルでスポーティなウエアに身を包んだ街で見る彼女は、行動的で自主性があり、自分の生き方に自信をもっていることを人に感じさせる魅力的な女性だった。でも私には、テレビに映し出される警官に向かって「やめてください」と泣き叫ぶ彼女とそのときの印象が一致する。あれは彼女の中に秘められていたエネルギーが外に出ただけのこと、それは麻原氏にしても同じことなのだと思う。

このときのことでほかに印象に残ることといえば、たしかスウェットスーツの上下を着ていた麻原氏がそれを突然脱いで、黒のビキニの水着姿になってヨガの行を示したことだ。私はちょっとためらいを覚えた。そして、何というか、マンションの広いとは



いえない一室で肌を露出してヨガをする四人の男女になんともなまめかしいものを感じていた。

でも、このとき会った女性のうちのふたりは、現在もオウムの主要メンバーであることを思えば、麻原氏という人は女性に支えられ、その分、女性を大切にしてきた人なのだと思う。そして、これは私の直観なのだが、給料のほとんどを注ぎ込んで創世期のオウムに尽力した石井氏なしに、現在の巨大なオウムは生まれえなかったと思えてならない。石井氏は、彼の手足となり、実働力となって、麻原氏の夢に現実のかたちを与えていったのではないだろうか。

麻原氏はおそらく石井氏を見て、何かを一途に信じた女性の強さに感じ入った。彼が女性をオウムの重要なポストに就かせたのも、石井氏に女性の力を見出したゆえだとしたら、世間の噂はともあれ、オウムは男性優先の社会よりひとつ先進的な集団だったのだ。だからこそ、信者の4割が女性だった。

個人的な心情になるが、今のように何でもセクハラにしてしまっては、何のために男と女があるのかわからなくなる。男には男の、女には女の本能的な役割があるはずで、それを麻原氏は感じていたよう

に思う。指導者たる男性とそれを影から支える強く繊細な女性……。信者たちは、真のカップルとしてのふたりの姿に人間の理想の在り方を見る思いがした。そして、オウムこそ安心して身を委ねられる理想郷として、さらに傾倒していったのではないだろうか。ただし、噂が事実なら、麻原氏はそれをまったく過去の方法に戻してしまったことになるのだが。

率直にいえば、私は初対面の麻原氏に、特別の悪感情は湧かなかった。彼は霊的に脅かしてよい原稿に仕上げさせるなどといったこのオカルト界の常套の手法を一切とらなかった。取材時に見せた腹の内蔵をぐるぐる回す〝ナウリ〟というヨガの所作は、彼が少なくともヨガを懸命に続けた人であること示していた。私が甘かったのかもしれないが、ヨガをはじめてまだ一年半ばかりの当時の私が考えるヨガには、ヨガを続けて悪人になるなどありえなかったのだ。そして麻原氏と同様、私も地球の危機は感じていたし、ヨガなどの手段で肉体がクリアになれば思考もクリアになって、そのようにして〝正常〟に戻った人々がこれからの地球を変えていかなくてはならないという考えももっていた。

では私は、「軍神となり、神軍を率いて戦い、超能力をもった人間による理想国家を建設する」という彼の言葉に何の疑問も抱かず、現在に至るオウムの発展に何の直観も働かなかったのだろうか。

実をいえば、オウムの一連の報道がはじまったとき、私は深い反省と自責の念に苛まれた。もし彼らの容疑が確定したら、私はもっと、オウムを記事にした自分を責めるのだろうか。友は「キミが書かなくても、オウムにひかれる人は何かしらの道をみつけて入ったんだよ」といってくれるが……。

だがオカルト雑誌とは少なからず、近代科学の範疇に入れてもらえないものを取り上げて読者に提供し、あとは読者に委ねるという性格をもっていた。それを未知のものを求める読者が支えていた。だからそこには、一般的には「信じられない」ことをいう人もたくさんいて、明らかに虚言と思われるものをもち込んでくる人もいれば、これは将来は一般化すると思われる素晴らしいアイデアをもっている人もいた。そして、オカルト業界にいる人間はそこに飛び込んでくる人や情報の突飛さにはいたって〝なれっこ〟になっていた。ふつうから見れば異常と思

われるものも、〝オカルト〟という名のもとにひとことでくくれるのであれば、そして一本、自分との間に境界線を引きさえすれば、「それは異次元としてのオカルト業界の中に存在するのだ」と安心し、それらの存在をごくふつうのこととして対面できた。批評や非難で成り立つ雑誌ではなかったといえるが、でもそこに記事を鵜呑みにする純粋で従順な読者がいたことも否定できない。

オウムの危険な発展の予測については、私は会が大きくなるほどに、麻原氏の心の中にあって殻に包まれていた野望や理想のようなものの種が、信者たちの熱中、あるいはほかから来た何かによって芽吹き、エネルギーを注ぎ込まれ、途中から極端な発展をしたのではないかと感じている。そしてそのとき、彼に潜む陰のエネルギーにめらめらと火が点き、それはネガティブな炎にかたちを変えて噴き出したのではないだろうか。

短期間で膨張していった組織

「編集部の…」の取材時のことで、今回、当時の編集長とあらためて話したところ、すでに私の記憶からは欠落しているのだが、私の書いた原稿には麻原氏から山ほどの〝アカ〟が入って返ってきたのだそうだ。〝アカ〟とは校正、つまり〝なおし〟のことである。「編集部の……」の場合、校正の要求は皆無に近かったため、私もあえて先方にそれを望むか否かたずねることもなかった。ところが彼は校正を要求し、山ほどのアカを入れてきた。推測だが、これはマスコミから伝え聞く彼の完璧主義というか、何もかもを自分で管理したい性格の表れだったのではないだろうか。元の原稿はもう残っていないから、今となっては、彼が原稿にどう手を入れたか、もうわからないのだが……。

さて、ここからTZとオウムの関係がはじまり、TZは彼の主催する会の広告や彼自らが執筆する原稿を受け入れた。他誌は一度か二度、氏を登場させただけで関係は終わり。「ムー」誌は氏に宗教の匂いを感じ取り、宗教関係は扱わないという姿勢から読者投稿ページのみでやはり関係は終了。その他、ティーンのおまじない雑誌で八七年に二度ほど、麻原氏は〝超能力〟や〝チャクラ（体内にあるとされ

るエネルギーセンター）開発法“といった内容を執筆していたが、結局、関係をもち続けられたのがTZだけだった。

たしか、最高時はTZ一冊中にカラー二ページとモノクロ一ページの広告、編集ページでは、彼の執筆によるヒマラヤの聖者との会見や彼の考えを説いた連載（「解脱への道」など）が掲載されていたはずだ。そして、麻原氏の考えを詳細に紹介したそれら一連の記事は、麻原氏の賛同者を集めるきっかけのひとつとなっていった。

私が麻原氏を間近で見たのは三回、八五年の夏に一回と八八年春の儀式で二回だけである。その間、私がオウムに関して見ていたものといえば、編集部に置かれていた会報ぐらいなもので、それは日を追うごとに立派なものになっていった。編集部や広告部は原稿のやりとりなどで会との交流をもっていたが、彼らのうちで麻原氏に会ったのはたったひとり、それもほんの一時だったというから、麻原氏は会報が立派になると同時に、そうそうは外には出ない人となっていたのだろう。

編集部からオウムの話を聞くこともあまりなかったが、雑談の中できいた記憶に残る話といえば、世田谷の道場にはつねにたくさんの十代の人々がいて、会のさまざまな仕事を手伝っていたようだということである。彼らはいつも、柔道の稽古着のようなものかスウェットスーツを着ていた。そして彼らは編集者が夜遅く原稿を取りに行ってもいつもそこにいたそうだ。それを話してくれた編集者に「彼らは家に帰らないの？」ときくと、彼は「よくわからないけど、彼らは何だかいつもそこにいるようなんだ」と答えたと思う。

もしかしたら、そのときのオウムは、親からの依頼で自閉症や登校拒否などの子供を集団生活させ、ヨットの訓練を通じて問題を解決しようとした戸塚ヨットスクールのようなもの……それの、子供たちが自主的に門を叩いた……だったのかもしれない。

最近になって、中川智正氏の母親に取材したという女性週刊誌の記事から、私はオウムの「出家」の概念をはじめて理解した。それは、金や家族を捨てて道場でヨガなどの修行をすることではなく、自分を労働力として、会に供出することなのだ。金品の次に搾取するものは、会を肥やす労働力としての頭

脳や肉体……十代の少年たちが会を手伝っていた姿は、おそらくオウムの出家の走りだった。それが麻原氏に「出家制度」を思い付かせたのかもしれない。

神秘体験という〝真理〟と落とし穴

オウムは、ひとりの修行者を自称した麻原氏の心の中から生まれた。そして、それが集団を巻き込んで肥大化したのはいったい、なぜなのだろうか。

分析するに、まずそこには金や科学、学歴社会、終身雇用や年功序列制に嫌気が差した人々がいる。戦争という怪物も安保闘争もなくなって、そのありあまるエネルギーの向けどころを見つけられなくなった若者がいる。大人も青年も一様に〝精神的な何か〟を求めていた。TZの読者もオウムに集まった人々も共通して、〝何か落ちている素晴らしいもの〟を探していた。だが、その中の何割かの人々は、非常に純粋で従順で、ただの精神修養やただ話をきくだけの宗教のような超スローモーなものではあきたらなかった。超科学、自己改造、今の社会を否定できる筋の通った強力な何か。積極性があり、速度が速く、実感がつかめる何かを望んでいたのだ。

そしてこのとき、求める対象さえわからずにいた彼らの頭上に、輝ける光として、積極的で強力なオウムが現れた。麻原氏は彼らに、マニュアル通りに、上部からの指示通りに修行をすれば必ず、自己改造ができ、神秘体験や超能力が得られ、悟りが開けることを提示した。オウムの教義は彼らの求めていたこと以上のものだった。マニュアルにならされ、型破りを嫌う教育にならされ、お決まりのレールが敷かれたかのような社会に夢の種を蒔けない人々は、本能が呼び込むインスピレーションを失っていた。そして彼らはオウムのとりこになった。

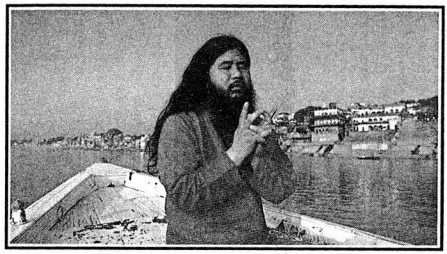
人間には向上心、学習欲、変化したい欲望、肉体を使いたい、真実を求めたいといった本能があるから、超能力や精神的な悟り、そして肉体を使う神秘的なヨガという行法はオウムの大きな〝引き〟になった。麻原氏もこれらが彼らの行き場のないエネルギーを〝引く〟ことを知っていたに違いない。だからこそ彼は、マスコミに訴える最初の手段を〝空中浮揚〟としたのだ。あるいは彼自身、超能力をもつ超人が作る理想国家を求め、集団のエネルギーの必

要性を感じて、途中からそれが人集めの〝引き〟になることに気付いたのかもしれない。

オウムの教義に熱中するほど、彼らには否定すべきものがたくさん出てきた。そしてもしかしたら、否定とは彼らがもっとも喜ぶものだった。否定することにより、理想社会の実現に向けて選ばれた戦士となれ、エネルギーを理想のかたちで放出して、理想実現のためにぶつけられるのだ。

だがここに、ひとつの大きな落とし穴が潜んでいた。ヨガなどの行をはじめると、たしかに光が見えたり聖者が現れたり、直観が鋭くなったり正夢をみるなどといったことが起こる。だがこれが罠なのだ。

AUM SHINRIKYO



煩悩にまみれて生きてきた前生の弟子たちよ
いよいよ君たちが目覚め、
そしてわたしの手伝いをするときがきた
君たちは死に際して
決して後悔しないようにしなければならない
君たちがもし選択を誤れば
君たちがこの人間界へ生まれてきた意味を
完全になくしてしまうことになる
君たちは確かに今生、情報により、煩悩により、けがれた
しかし、君たちの本質はけがれるはずはない
なぜならば、君たちはわたしの前生の弟子であり
そして本質的には他の魂と違い
救済の手伝いをするために生まれてきたからである
わたしは、君たちがわたしの手となり、足となり
あるいは頭となり、
救済計画の手伝いをしてくれることを待っている
さあ、一緒に救済計画を行なおう
そして、悔いのない死を迎えようではないか

真理の御魂　最聖　麻原彰晃尊師

（きりとり線）

ヴァジラヤーナ
サッチャ　8
資料請求券

※ハガキ（資料請求券貼付）、または電話で、最寄りのオウム真理教の本部・各支部道場までご連絡ください。詳しい資料をお送りします（本部・各支部道場一覧は199ページ参照）。

罠にもいろいろあるが、世間一般ではこれをひとことに〝神秘体験〟とくくってしまう。正しい指導者のもとにあれば心配はいらないのだが、きちんと説明されていない書物だけで想像した人々は、それに大きな憧れを抱く。もしその憧れの事態が我身に実際に起こると、この新しい未知の素晴らしい体験に酔い、これを求めていた本物の宝だと錯覚し、自分がほかから逸脱した者のように感じてしまうのだ。

ヨガなどにおいては、この〝イルミネーション〟とは、この先、くだらない宝に引っかからないために神が仕組んだものであり、〝ふるい〟あるいは道標としての機能をもつが、ではそれを本物の宝とみまごうとどうなるか。はじめはそれに酔うだけだが、深みにはまると、意識を何かにのっとられ、それにとらわれてしまうのだ。たいていの場合はまず、自分の格が上がったように感じ、次は他を否定する気持ちが芽生え、誰もが同じ魂の重さをもっているのを忘れ、自分が得た新しい考えを実践しない者を愚弄な者と感じてしまう。つまり、選民意識だ。このとき、積極性が刺激されれば、破壊者にも革命者にもなり、しいては〝神の意志を背負ったウォリアーズ〟にも変身する。

オウムに入った一部の人のエネルギーはおそらくはじめから、超能力と超人に向けられていた。彼らの中では、その教義によって、神秘体験と超能力と選別された超人はイコールにされてしまった。そこで、〝誰にでも起こるあたり前の神秘体験〟を〝超能力〟と錯覚し、自分が超人になった幻想を抱き、神秘体験を得られたのが師のおかげなら、師こそ神だと錯覚する。そして多分ここに、空腹と肉体の酷使を含めた洗脳と薬物が入り込んだ。ヨガによって神秘体験を得るのでは時間がかかりすぎる、だから、スピーディな神秘体験が必要なのだ。しかもそれは、人を集め、資金を稼ぐ。そして洗脳や薬物でまかなわれた神秘体験の約束は、教義を実行に移す大きな転換キーとなりうるに違いない。

他から圧倒的優位な人間〝超人戦士（ウォリアーズ）〟となった彼らはこう考える。超人は他の愚かな者たちを救済せねばならない、救済とは宇宙のひとつの星である地球という星の未来ビジョンから決定されねばならない、そのためには手段を選ばない、このときの絶対者は神となる修行を積んだわが師、その命は神の声

である……。

そこにはもう一般社会の常識も法律も入り込む余地はない。大自然、社会、家族、人にも、彼らを引き留めるエネルギーはない。信じられるものはオウムと師の外に何もない。他を否定することで生きる道が生まれ、彼らは大自然や既成社会や家族や恋人との絆を積極的に断ち切っていく……。そうなれば、もう悩むこともない。性格も前とはまるで違ってしまったようになる。使命に燃えて、あるいは背後の恐怖から、もう突っ走るだけだ。このとき戦士となった者は、自分が神軍の戦士なのか、いくらでも補充できる使い捨ての最前線の兵隊なのか、彼らは知らない。

ブラックホールとなった〝大いなる個〟

TZでお会いした人々の中には、〝何か落ちている素晴らしいもの〟を探している人がたくさんいたが、正直をいえば、そこにはもしかしたらイルミネーションにつかまることを望んでいるのではないかと思われるような、足元をすくわれる危険を感じずにはいられない人たちも大勢いたように思う。では、オウムに走った人と走らなかった人の違いといえば、まずはオウムより重いウエイトのよりどころ、信じられるものがあったかどうか。そして、どれだけ純粋で従順であったかどうかの違いなのだ。よりどころをもたない従順な彼らは、歪んだ既存社会の醜い歯車の一歯となることを許せず、かといって草の根となってそれを徐々に変革するビジョンなど抱けはしない。オウムの場合、〝生〟と既存社会を否定する教義にハルマゲドンが追い打ちをかけた。そこで彼らは破壊に走る。

結局、信者となった彼らは、〝歪んだ〟社会との接点も妥協線も作れない、アイデンティティーを構築しえていない人々だった。彼らは超能力や教義を自分のアイデンティティーとしようとした。迷うことのないアイデンティティー、安心して身を任せられる偉大なるアイデンティティー、〝大いなる個〟。

本来は麻原氏が自己を支えるために構築した〝大いなる個〟は、オウムという目に見えない国となり、オウムは〝絶対なる大いなる個〟として、そこに集まる彼らをブラックホールのように吸引した。「ひ

とたび〝国〟という名をもつと、それは実体のない化け物になる」というが、麻原氏自体、このひとたび走り出したら停まらない王国のとらわれの民となってしまったのではないだろうか。ここにもし洗脳や薬物が関与したら、常人の心の柵など、悩むことなくひとっ飛びに超えてしまう。このとき、誰かが彼を利用しようと考えたら、麻原氏はいとも簡単にダミーに落ちたことだろう。

オウムはおそらく、彼の中の〝陰〟を牽引した〝陽〟のエネルギーが発端だった。宗教が清貧を貫いてその教義のエッセンスを人々に広め、目に見えない精神にだけ入り込むものなら、オウムは理想社会実現のために〝陽〟のエネルギーで人々の精神を引っ張り、金銭なしには実現できない実質、目に見える実を重んじた。だからこそ、一途で純粋でオウム以外を信じられない人々が付いてきた。宗教はときに目に見える実を望み、手を下すものではあるが……、

実！

ここにキーワードがあるのではないか。一連の報道を事実とするなら、麻原氏の最初の考えが〝実〟になっただけだ。信者となった者たちは、実を求めていた。実の世界に存在する自分の内面には空虚さしかない。夢のもてない現実と未来。家族、人、学校、社会にも魅力がなく、つながりが見出せない。その空虚を埋めるのは、空想の世界、虚の世界の実なのだ。形而下の世界に実を求められない人々は、形而上の世界に実を求めた。ふつうなら、家族、仕事、社会……しがらみも形而下の実になる。たとえば、ここに体に不自由をもって生まれた子供をもつ親がいる。その親が、ある宗教に入信する。だが、形而下の世界に子供という実があるなら、虚の世界である宗教に実はいらない。心の支えとして、教義だけに頼っていられる。

だが、オウムに頼った人々は、実社会にも自分の心の中にも実を見つけられなかった。だから、虚の宗教は求められない。見えない教義、何も得られない教義、見えない神、触れない神はいらないのだ。だから、麻原氏だった。見えない神に祈るだけではなく実としての修行法がある、超能力が得られる、生きている神、自分に声をかけてくれる神、父と慕える、現人神（あらひとがみ）としての麻原氏なのだ。そこで彼らは、

彼の髪やヒゲや血や使った水を求めた。触ってもらえるイニシエーションを求めた。出家という実感、ワークの実感、真実の神として慕える彼に帰依できる喜び……。

ここにきて、麻原氏が一般に考える神の顔と違うわけがわかった気がした。彼は苦学してここまできた、度重なる挫折とコンプレックスを乗り越えた、神となる修行をした、そしてダライ・ラマやソビエト高官とも対等に話せる人間となり、解脱した……。これはコンプレックスも挫折も知らないエリートにはまさしく実なのだ。コンプレックスしかない人間にも、同じく実だった。はじめから、何もかにもに恵まれている人間では、けっして麻原氏にはなれない。ゆえに、彼らの教祖となるべき人の顔は、一般が考える神の顔であってはいけないのだ。そういえば、彼らが好んだという繊細な心をもつうだつの上がらないSFアニメの主人公は、どこか彼に似ている。そんな彼が、努力して、現人神（あらひとがみ）になったのだ！だから、麻原氏は彼らの〝実〟そのものだった。虚の彼らを麻原氏は一気に吸引して、さまよっていたエネルギーはひとつになり、オウムは日に日に肥大化していった。

教義の実行こそが、彼らにとって有彩の世界である。生きている実感。こんなことを中国では陰陽論にたとえ、仏教なら色即是空というのかもしれない。

オウムは現代社会に生まれるべくして生まれた、そして日本だからこそ生まれた。古代から個人主義の発達を一秒たりとも見なかった国、日本。終戦後、個人主義発達のチャンスをはじめて得た私たちは何をやってきたのだろうか。オカルト雑誌は、潜在しているものを浮き出させて、それらは今やすっかり一般化してしまった。そしてまた、どれだけたくさんの人の心が虚なのかをオウムというかたちで浮き出させた。第2オウム、第3オウムはこれからも生まれ続けると考えるほうが、現代の人間と人間の本能からみてより自然なことだ。だがそのときもし、教祖たるべき人が理想の具現というビジョンを我欲にすり替えていたら、あるいはそれが個人ないしは集団のとてつもなく巨大な妄想だとしたら。それを知ったとき、夢から醒めた魂の難民たちはさらに重い宿命を抱えて、その先いったい、どこへ行くのだろう。

ヨーガ実践者からみたオウム騒動

岸倉ベル

きしくら・べる：一九六三年生まれ。上祐氏らとほぼ同世代の兼業主婦。現在、ヨーガのインストラクターもつとめる。

五年ほど前から先生について、ヨーガの修行を少しずつ続けています。最近はインストラクターも時々やっていて、多いときで十五人、普通は六人ぐらいのクラスをもっています。教えていて授業が終わるころになると、みんなの顔つきとかもいきいきしてくるので、それはやり甲斐があります。ちゃんと常勤しているわけではないので、交通費はいただくけど、基本的に月謝をいただいているわけではありません。これもまた、カルマヨーガ（234ページ参照）（笑）ということですね。

今度の事件があって、他のひとから「どうなの、あなたのところオウムじゃないの」とか、いっしょにやっている友人とかも、「やーだ、いろいろ聞かれちゃった」とか、その程度の反応はあります。でも続けているひとはそのよさがわかっているから、相変らず真面目にやっていますね。ただ、マスコミによっていろんな誤解がインプットされてしまったので、知らないひとにとっては始めにくくなったかもしれません。

最初に入ったヨーガの教室がたまたまオウムの機

関だったために、運命を狂わせてしまったひとたちがいるということは、ほんとうに残念です。ヨーガについていろいろ誤解しているひともいるようなので、今の私の立場から少しでも説明できればと思ったのですが…。

自分のことを最初にいえば、もう十年近く前、会社勤めをするようになってから、体力づくりのために最初、ダンスのレッスンを始めたんです。ところがあれも意外とハードな世界で、なかなか体力がついてゆかず一曲分も踊れなかったり、そもそもからだがすごくかたいことがわかったので、そのあとでカルチャーセンターのヨーガ教室に通いはじめたのが、この世界との出会いでした。最初はハタヨーガといわれる、色々なポーズを中心に、からだからはいることを練習するコースだったんですが、生徒も女性ばかりで先生も綺麗なひとで、とても楽しかった（笑）。そのクラスでもたまに簡単な瞑想の時間があって、全体としてとても気持ち良く、からだも心もすごくリラックスする。それで、これは効果があると実感して、つぎに瞑想ヨーガ、ラージャヨーガといわれる授業も受けるようになりました。そのうち、カルチャーセンターでは限界があるので、本部の先生について習うようになったんです。

カルチャーセンターで始めた最初の頃は、他の先生の教室はどうなんだろうと、いろいろ試しに通ってもみました。でも、準備も何もせずにきついアーサナをかまわずガンガンやらせたり、急に一点集中瞑想をやらせたりで、個々のレベルに合わせずにとても無理がある気がして結局、他のところはすぐにやめてしまいました。

私の先生の場合、無理なく徐々にほどけていくような柔らかいやり方だったので、五年間ぐらいカルチャーセンターで続け、その後トータルなヨーガを本部の先生のもとで習うようになったんです。

カルチャーセンターのヨーガ教室に通うひとはまず、からだや心をほぐしたいと思って来ているひとが多いと思います。やせたい！とか美容面で始めるひとも多いですけど（笑）。病気のひとから忙しいOL、サラリーマン、家庭の主婦まで、みんな自分のからだと心をあらためて見つめ直すことで、なんともいえない清らかな気持ち、深いリラックスの感覚が味わえるというので、忙しいなかでも続けてい

らっしゃるんでしょうね。そして、だんだんにヨーガの奥深さを感じてこられるんだと思います。だからオウムの影響で、ヨーガの修行、即、超能力獲得のため、みたいに変に誤解されると困るんですけど…。

自分もそうですが、私達の世代が子供だった頃って、超能力や神秘的なものに対するある程度の共通の興味や関心があって、それこそユリ・ゲラーとかからUFOまで、みんなでいろいろ話題にしていましたよね。不思議なことを扱った雑誌とかからヨーガや精神世界に関心をもつひともけっこういるようですけど、そういう子供向けの雑誌や読み物は、それ自体はあってもいいと私は思います。でもそのあともうすこし成長した段階で、そういう神秘的なことがらにたいして興味本位ではなく、真面目に冷静にとりあげた雑誌とかが今はほとんどないように思います。実際私の場合ヨーガを深く実践していくにつれ、そういう超能力みたいなものにたいする興味は、かえってうすれていきました。

たしかにヨーガを深く実践していく過程で、視覚や聴覚等々、感覚器官に変化が起こる場合もあるんですが、そこに対して特別なことのように執着したり、まどわされることのほうが危険だということを理解していたほうがいいと思います。それはあくまで、そのひと個人の修行の過程のひとつのあらわれでしかないわけで、感覚的変化だけを目的とみなしたりするのには誤解が生じます。たとえば「超能力を開発する！」とかいって、そこだけ強調して、実際にからだを開発すれば、たしかにそうなるかもしれない。けれど、それによってそのひと自身にどういう影響がでるのか、何のための超能力なのか、そういう根本的なことがわかっていないと、また、わかった指導者につかないと、危険なことだと思いますよ。

インドの行者さんのなかには、人々に神への信仰心を深めさせるために、超能力を見せたりする方もいらっしゃるそうですが、そういった力は自分の力を誇示するために見せるものではないんです。また、あるレベル以上の修行をする場合、きちんとわかった指導者につかないで、自分勝手な方法でやったりすると、ある中途の段階で「自分は悟った！」と勘違いしたり、自分のなかで眠っていた潜在意識のエ

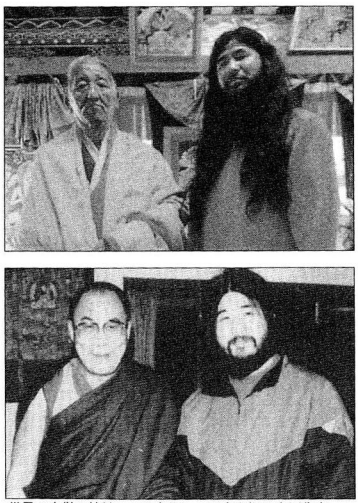
ゴのパワーが増大したり、妄想の世界がどんどん大きくなったり、いろんなことがおこるおそれがあります。

オウムの麻原氏の場合、インドの聖者さんに一時的に接触したことはあるようですが、長期に渡りきちんと弟子入りし、修行したわけではないようなので、この点が私には気になるところですね。

オウムのヨーガは継ぎ剥ぎだらけ？

オウムの話は、あの空中浮遊の写真が出たときから、私の周囲でも「あれなら飛べるよ」とか話していましたけどね。評判といえば、ダライ・ラマさんの場合もそうでしたけれど、インドのとても高名な聖者さんにお布施をし、ただご挨拶しただけなのに、さもそのひとと親しい仲であり、教えを受けたかのように写真を撮って公開しているという話を聞いたころから、なんかヘンだな、とか、そういうのはありました。でも過激な修行が売り物の、単に商売上手な団体なんだろうっていう程度で、それほど気にもとめていませんでしたけど…。

全部に目を通したわけではないので、断定するわけにもいかないのですが、事前にいくつか見せていただいた、オウム関係から発行された本や雑誌のなかでのヨーガにかんする記事や原稿を読んでみますと、ずいぶんいろんなところから、自分勝手に引用しているような感じはしました。だけど、それをあいった雑誌にいきなり載せて、ちゃんとした手順を踏まずにやらせていいのかといったら、それはまったく保証できません。ある意味、これって秘法に近いものなんですよ。書いてあることそのものが正しくても、それを一人一人に対してどういう手順で



世界の高僧に接触し、お布施し、写真を撮る麻原代表

行なうかという方がむしろ重要だから、そこまでわかってやってたのか、とても不安です。自分の知識をひけらかすとか、自分を大きく見せるとか、そういう感じがしなくもない。

麻原氏自身が、きちんとした指導者について修行しておらず、かなり勝手にヨーガやあらゆる宗教の修行方法の寄せ集め、切り張りをしていた気配もあるのではないでしょうか。ところが困ったことに、切り張りや寄せ集めの修行でも、ある程度の感覚的変化は起こるし、何も判断がつかないうちにその感覚を味わうと、「これこそ真理だ」と思い込んでしまっても、おかしくない。それでうっかり信者になって教団組織に利用されてしまったのかもしれません。しかも後期にいたっては、その切り張り寄せ集めのレベルの修行をしていたかさえも疑問で、今疑惑を持たれているよう、手っ取り早く意識の変化を味わわせるため、薬物にたよるようになったとしたら、もう、私は言葉もありませんね。

＊

ひとことにヨーガといっても、修行の特徴的なところで、さまざまな方法に分かれているんです。カルマヨーガというのは、ただ無心でことを行う、いわば無私の奉仕による行為のヨーガのことをいうのですが、これはオウムでいうところのワークですね（笑）。あと、ただ神様に帰依するバクティヨーガ、真言による祈りをとなえるマントラヨーガ、などなど。そういえば村井氏が生前、テレビで「化学物質を一から作るというのは、知識のヨーガのひとつです」という主旨の発言をしていたので、「案外いろいろ知っているんだな」と思ったことがあります。ジュニャーナヨーガというのは、知識のヨーガと呼ばれ、哲学的思索によって悟りにいたるヨーガのこ

とですから。ただし、この場合、ただはぐらかすために知識のヨーガということばを使っていたようですけど。それと、インドではみんなヨーガをやっている、みたいなイメージがありますけど、インドでヨーガというのは本来神聖なものだから、誰も彼もやっているというものではありません。バクティヨーガみたいに、ただ信仰するだけという主旨のものなら、一般のひとでもできますが、ラージャヨーガ＝瞑想ヨーガなどは、ほんとうに限られたひとしかやっていません。ヨーガスートラでいう⑥からの段階なわけですけど、本来は①～⑤までの段階をふまないと本格的な瞑想は教えてもらえないわけです。だから日本のカルチャーセンターとかでまず教えるのが、いわゆるアーサナに代表されるハタヨーガであるというのはよくわかります。導入としては、教えやすいのだと思います。

参考までに『ヨーガ・スートラ』という文献で説かれているヨーガの八段階のステップを、つぎにあげてみましょう。

①禁戒（ヤマ）＝行者としての最小限の道徳的規律。不殺生、正直、不盗、不淫、不貪など。
②勧戒（ニヤマ）＝心身の清浄、満足、苦行、経典の読誦、神への信仰。
③坐法（アーサナ）＝姿勢のとり方、ポーズ
④調息（プラーナヤーマ）＝気（プラーナ）の調整。
⑤制感（プラティヤハーラ）＝感覚器官の統御。
⑥集中（ダーラナー）＝意識を特定の場に結びつける。
⑦静慮（ディヤーナ）＝意識が一点に集中しつくす状態。
⑧三昧（サマーディー）＝悟りの状態。

ハタヨーガをやるにしても、本来はこういう段階を踏んで①からはじめていかないといけないんですよ。だけど日本人とかは①、②の生活規範の段階からきびしく言っても、あまり現実的にピンときませんよね。だからカルチャーセンターなどではやっぱり③のあたりからはじめるのがほとんどですね。まず、かたくなったからだと心をほぐしてから徐々に精神的意味あいに気付いていかれるという感じでしょうか。

それと、カルチャーセンターなどとは別に、最初から「超能力をもちたい」とか、「神秘体験がしたい」「もっと力を得たい、特別なひととして認められたい」という動機でヨーガを始められるひともいるかもしれません。

その場合、気をつけなくてはならないのは、もともとヨーガは自分のエゴを満足させるために行じられるものではないということなんです。でも、オウムの場合、階級社会になっていたり、超能力者になれるとうたっていたり、そのエゴをうまく利用してつくられているなぁという気がしました。

もし、オウムの信者の人々に最初はそういう動機があったとしても、立派な指導者のもとで、きちんとヨーガの修行を積んでいけば、エゴのパワーにふりまわされないで、清らかな平和なエネルギーの方向へ変わっていけたんじゃないでしょうか。

実際、どんな集団でもひとが集まると、そこには念の集積がおきますよ。ともすればそこからドロドロとしたパワーが発生することは、精神世界に携わっている集団でも珍しい話ではないわけで、それは指導者なり、しかるべき人物がじゅうぶん注意しなくてはならないんだと思います。

もちろん、指導者自身が自分のエゴのパワーにまわりをまきこんでいくことに注意するのは当然ですけれど…。

すべての神秘をごっちゃにするマスコミ報道

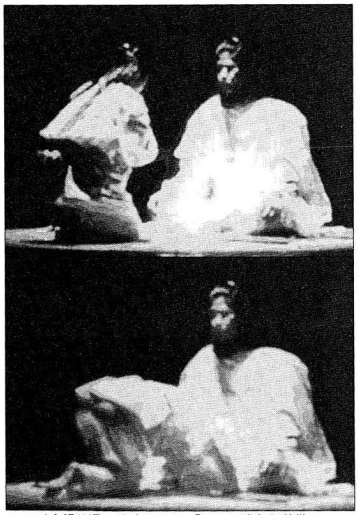
いっぽうで、オウム（がやったとされている活動）を否定するあまり、すべての神秘的なことがらを全否定する方向に、ここ数カ月マスコミは動いていましたね。そのほうが大衆の支持をえやすいし、安全なのでしょう。でもオウムがその教義に取り込み活用した、あらゆる宗教や神秘的な行為、昔からの教えや知恵などを、きちんとその出典から解説してくれるひとはほとんどいませんでした。むしろ事件の報道と重ね合わせて、ぐっちゃぐちゃの状態でたれ流されていたというのが現状です。

たとえばシヴァ神を例にとってみても、シヴァは瞑想修行をしている姿もあるために、ヨーガの行者さんたちはこれを崇拝することが多いんです。この点でオウムは、シヴァを引き合いに出したのでしょ

う。ただシヴァ神そのものには、髪の隙間からガンジス河を流すヒマーラヤの神としての性格、リンガの形で崇拝される土着的信仰の面、等々、様々な側面があるのに、一方的に単なる破壊の神、テロの神のようないわれ方をされると、それは大きな文化的誤解を生みます。

昔のオウムのビデオからだと思われますが、ヨーガのアーサナ（先ほど説明した八段階のステップでいう③のポーズですね）を大勢の信者さんがやっている場面や、弟子が麻原氏にインド式御辞儀をしている場面が、繰り返し繰り返し（それも不気味な音楽とともに）意味もなく放映されていました。でも、麻原氏が本物の聖者かどうかは別にして、この挨拶は、主に聖者など偉い方にたいして実際にインドでは行われているものです。これらにたいして「これはヨーガのアーサナの一種ですね」とか「インド式の御辞儀の方法です」といった説明は、私の知っている範囲では一切なかったと思います。つまり、これもただ観ているひとに、こういう動きをしている人達は胡散くさい奴らだという先入観をインプットしているだけでしょう。

オウムの医師の過去を報道する場合でも、「H医師はオウムに入信してから、患者に異常な治療を行なうようになり……」というので、何かと思ってみていたら、塩水を飲ませて吐かせたり云々、ということで、ヨーガの行やアーユルヴェーダというインド古来の治療法を利用してためしていたらしいんです。だけどこれらの治療法も、はなから異常ときめつけられるものではなく、なまはんかな知識で一般の患者にやらせようとするのがおかしいのであって、その治療そのものがどういう教えから引用されたのか、現代ではどう応用されているのかまでを含めて



ＴＶでも繰り返し放映された、「インド式」御辞儀

きちんと説明してほしかったと思います。

もっといえば「一日二食しか食べない」とか「肉も魚もなく大豆タンパクだけ」と、さも悲惨な食生活を出家信者は強制させられている、という言い方も繰り返されていたけれど、きちんとした考えのもとバランスよく食べていれば、実際にベジタリアンのひとで一日二食のひとや肉や魚を食べなくても元気に社会活動を営んでいるひとはいくらでもいます。むしろ私でも問題だと思ったのは、野菜など生き生きしたものがとられずに、後期のオウム食では化学合成された食品が、ほとんどだったらしいということ。それと、ひとりひとりの体質や体調、大人と子供、季節の変化などに応じた食事が、整えられていなかったということでしょう。オウム食が自然食主体から化学合成物混じりのものに変わってしまったことを問題に挙げられていたのも、江川紹子さんぐらいだったと記憶してます。

個人的に一番気になったのは、ある容疑者が逮捕されたさい、護送される車のなかでただ目をつむっていただけなのに、ニュースキャスターが「あ、N容疑者、瞑想をしています、瞑想をしています！」と大声で報じていたのには、思わず失笑してしまいました。そばにいた別のアシスタントのひとが「目をつむってましたね」っていい直してましたけど（笑）。「ちょっとちょっと、なんでも瞑想にしないでよー」って、私はテレビの前で言ってましたよ。

今でも新聞などは、取調べ中に容疑者が「都合が悪くなると、瞑想に入ってしまう」と報じていますよね。でもこれら全ては「瞑想」という行為にたいする世間一般の誤解をうむので、せめて「瞑想のような行為」という言い方に変えてほしかったです。瞑想には、いろんな方法がありますけど、根本は宇宙の神と自分の内なる神とが一体となるための、とても神聖な行為だという側面が、これでは全く認識されないからです。

麻原氏がいわゆる水中サマディを本当に行えたのか、それとも単に水中で呼吸を止める我慢較べをしていただけなのか、その点について私は実際に確認したわけではないので意見を言うことは控えますが、ある有名な学者の先生が雑誌で「水中で一時間息を止められると信じる学生がいること自体に愕然とした」という言い方をしていました。だけど現実には

公開で水中や土中で何日間にもわたるサマディを行なっているヨーガの行者さんは世界中に何人か存在しますし、私自身もまのあたりにしたことがあります。サマディに対する歴史的・精神的な意義を確認することなく、いきなり頭ごなしに「そんなことはありえない」と声高に叫ぶのは、とても残念です。

それに今まで、少しでも不思議な出来事があると、すべてものすごい現象のようにテレビでは流していましたよね。出てくるのは不気味な音楽とともに登場するいかにも胡散くさい霊能者か、もしくは、神秘的な事柄にまっこうから感情的に反対する科学者かどちらかという感じでしょう。真面目にやると視聴率がとれないのかもしれませんが。ついこの前だって、オウムの事件を緊急特集した二時間もの報道特番が終わったとたん、いきなりものすごい音楽が鳴って「さて来週のこの時間は、全国のビックリ占い師大集合」（笑）とか。そんなんでいいんか、って思いますよね。

マスコミにおいても、全否定の立場と盲目的な肯定の立場をくるくる変えるのではなく、神秘的・現代の常識外とされる出来事に対して、歴史的・実践的な立場から冷静に検討してくれるひとがもっと出てきてほしい。（…宗教学者・文化人類学者というのも最近ではあまりあてにならないようですが…）そこが変わらなければ、いざ些細な神秘現象を目の前にすると、それに対して無知な思い込みをしてしまうという事件は跡をたたないだろうし、そういう未熟な状態のままでいっこうにレベルがあがらないと思います。

オウムが引き起こした（と現段階でいわれている）事件をいろいろと考えていくうちに、今までの行政の対応、しくみ、教育問題から社会の構造、そしてマスコミの報道姿勢など、あらゆる問題点が浮き彫りになってきていると思います。でも、これをきっかけに、少しでも整理して変えていくことで、今後にいかしていかなければ、と感じます。

そのうえで、宗教や教義、主義主張などに関係なく、せめて一日一回、ひとりひとりが心の平安を見つめ直し、みんなの平和を祈るような習慣をもってすごしていけば、世のなかの状況ももう少し変わっていくんじゃないかと、私はそう信じているんですけどね。

（95・5・23　談）

鹿島とも子論——きたるべき身体について

小林昌廣

こばやし・まさひろ：一九五九年東京生まれ。京都芸術短期大学専任講師、医学哲学・生命論。著書に『病い論の現在形』、『「医の知」の対話』、訳書に『医療人類学』など。

1

数年前、鹿島とも子に会ったのは、当時（そして今も）私が関心をもっていたテーマがあって、それについて彼女から話を聞き出したかったからだ。

もちろん、宗教の話ではない。関心のあるテーマというのは「闘病記」だった。闘病記は、わが国にかなり固有に存在するエクリチュールであって、病気や怪我に見舞われた者（ないしはその家族）が、自身と病気（怪我）との距離を測定しつつ、最終的に「自分とは何であったか」と「病気（怪我）とは何であったか」というふたつの問いを自身につきつける作業を活字化したものである。

それは単なる記録ではない。そもそも単なる記録などというものは存在しない。何かが書かれる以上は、そこには確実に書き手の息遣いと読み手の欲望が仄かに焚きこめられているからだ。しかし、闘病記というジャンルは、そうした意味での記録とはやや一線を画している。無論、書き手の息遣いと読み手の欲望はじゅうぶんに感じられるのだが、それ以上に書き手の肉体があらゆるものを圧倒して、そこ

で強く存在を主張していることが特徴的なのだ。テーマが実際の病気（怪我）であるから当然と云えばそうなのであるが、闘病記は病気（怪我）について書かれたものであるという「常識」とはちがって、あくまでも自分自身の肉体について記述したものであるということが重要なのだ。

考えてみればいい。いったいヒトは自分の肉体について想いを寄せてみることなどあるだろうか。ヒトはむしろ肉体を忘れることで、つまりは精神そのものになりきることで日々を生きてはいないだろうか。情報社会とは、肉体を忘れること、肉体を消去することの別名にほかならないのだ。

ところが、ひとたび肉体になんらかの病巣なり外傷なりが生じれば、ヒトはそこに自分の肉体を物理的に感じざるをえない。そこにある。あるいはそこにあった。そんな感慨を肉体に対して抱くことなどついぞなかったのではないだろうか。だが、たとえば左足に怪我をする。歩くたびに痛みを覚える。あるいは痛くて歩くこともできない。そこでヒトは左足の存在を物理的に感じることになるのである。物理的な感覚（ないしはその消失）は、直接に実存的な思考を励起せしめる。すなわち、足一般について、あるいは歩くということについて、果ては歩くこの肉体というものについて考えないわけにはいかないのである。精神だけが寒々しく、それでいて刺々しいさまで活動している日常において、右足を出したあとに左足が出て、以後自動的に交互に足が前に蹴りだされるなどという歩行の原理を自らの肉体で思考するなどということは考えられなかったことだ。

肉体の思考。病気や怪我はそれを可能にする。そして、闘病記はその肉体の思考を高め、外部へと向けられていた精神を肉体の内部へと牽引する。精神は肉体となる。肉体中心主義、闘病記はそれを実現する。

2

闘病記というものの読解を進めることで、日本人の肉体の思考について考えてみようと漠然と思っていたころ、鹿島とも子の著書『車椅子からの出発ち』（鎌倉書房、一九八九年）にめぐりあった。著者鹿島とも子について、この本には次のように記されている。「一九五〇年木更津に生まれる。三育学院卒

業。一九六九年日劇ダンシングチーム入団。翌年主役の座を射止める。以後、日劇での活動と平行してテレビ、レコード、ミュージカルの舞台で、歌えて踊れるタレントとして幅広く活躍する。テレビの音楽番組『サウンド・イン・S』では四年間にわたって準レギュラーを勤め注目される。／一九八二年石打スキー場での事故で脊髄損傷を負う。『一生車椅子か松葉杖』という宣告を、四ヵ月の入院生活と不屈のリハビリで克服し、一九八八年八月、赤坂、コルドン・ブルーで舞台復帰を果す。二児の母」。

彼女は初めて乗ったスノーモービルの操作ミスによって雪山の崖下15メートルに転落し、枯れ木に背中を強打したのだ。それによって「外傷性胸椎椎間板ヘルニア。胸椎の第十一、十二関節がずれ、軟骨骨折。右肋骨二本、左肋骨三本の骨折。それらに伴う直腸障害と膀胱障害」という診断をされ、自立的な歩行が不可能になるだろうと知らされる。

闘病記『車椅子からの出発ち』は、鹿島とも子の生い立ちから日劇ダンシングチーム入団までの生涯を駆け足で語りながら、事故後の自分の肉体と精神の変化について表白しつつ、やがて舞台復帰を果たすまでを記述したものである。

通常、闘病記の作者は芸能人である必要はない。そもそも闘病記を執筆しなければならないほどの病気や怪我に襲われる芸能人がそう多くはないだろうという統計学的事実と、闘病記がゴーストライターを使って記述されるような手合いのものではないという、いわば「筆法の制約」とでもいえるものが、その理由としてあげられるからだ。前者において、実は闘病記を刊行する芸能人は増加傾向にある。もちろん、だれでも文章を書いて出版することができるようになったという時代がそうさせているのかもしれないが、闘病記を書く芸能人がふえたということは、それだけ病気や重傷といった肉体のできごとが以前よりも開放的になったことを示唆している。語られるという市民権を獲得したのは、まちがっても執筆者である芸能人本人ではなく、彼（彼女）に一時的ないし永久に同化してしまった病気（怪我）なのだ。だれによってかは定かではないが、「選ばれた人間」であるはずの芸能人でも病気や怪我に見舞われる。特権的な芸能人であればあるほど、病気（怪我）は一般的なものになってしまうという不思

議な現象がここから生じることになるのだ。

後者の「筆法の制約」というのは、云いかたこそいかめしいが、要するに病気（怪我）に支配されている肉体をもった人間しか書くことのできない時間と空間が闘病記から漂ってくるということである。その意味では、筆法の制約というよりも、ずばり執筆者の制約と云ってしまってもいいだろう。ちがう肉体、ちがう精神をもった健康体（？）のゴーストライターには決して到達することのできない深さと軽さとの両方を、本当の執筆者はもちあわせているのである。「わかる人だけがわかる」といったカルト的な云いかたは好ましくないが、むしろ、そうした差異が濃厚な「文学」であるはずの闘病記が不思議に互いに似てきてしまうところに着目しなければならないのだろう。

3

それはともかく、鹿島とも子の闘病記はそうした意味ではごくノーマルな闘病記である。舞台で踊り歌うことを仕事としていることが、私たちがこうした闘病記の執筆に際して比喩的に記述するであろう「人前に出る」「舞台に立つ」「スポットライトを浴びる」といった表現をリアルなものにしているという点を除いては、であるが。そうした点においては、歩くこと、食べること、排泄することをひたすら自立的に行なうことをめざしていたビートたけしの闘病記『顔面麻痺』とは対極に存在するのかもしれない。

事故に遭遇した鹿島とも子は、自身の肉体が徹底的に「物質」と化していることを思い知らされる。

> だらりと垂れ下った両足は、私のものではないかのように、雪の上に投げ出されたままです。立つのよ、さあ力を入れて。私の頭が命じても、まるで糸の切れた操り人形。だらりと垂れたまま、力も意志も失っています。
>
> （『車椅子からの出発ち』十八頁）

「真っ赤に焼けた鉄の棒がお腹につき立てられ、容赦なく掻き回されているような、切れ味の鋭い刃物で切り裂かれているような、一度も味わったことのない耐え難い痛み」によって、残酷にも自分の肉体

の存在を否応なく知らされている彼女は、病院に運ばれても痛みよりも「物質」であることをやはり感じざるをえない。

診察台の上で、むきだしになった人間の体など、お医者さまにとってはひとつの物体にしか過ぎないのでしょう。心も感情ももたない、様々なことを考える頭も持たない物体。呼吸し排泄する一個の物体。ものには、羞恥も恐怖も苦痛も感じることが許されていません。

（同書四十二頁）

しかし、彼女は心のどこかで「物体」でいることに「安心」があったのではないだろうか。「物体」であり続けるかぎり、その肉体は修理とか交換といった文脈で考えられる。歩行不可能と排泄困難といった状況も、ひとつの「故障」として把握され、やがては「回復」を迎えるのではないか。自分を「物体」と考えるとは、そういうことだ。無意識であれ、故意的であれ、どこまでも自分で居続けようと思うかぎり、自分を物質化したほうが「楽」であると考えたにちがいない。

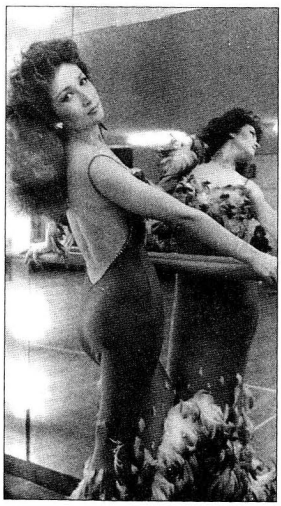
しかし、そうした物質的肉体（という意識）を崩壊せしめてしまうのが、小学校に入ったばかりの一人娘の存在であったり、手鏡や車椅子を通して知ることのできる外部の風景であったりするのだ。娘の存在は、自分の肉体をもとどおりにして、とにかく今までどおり一緒に暮らすという目標を設定させてしまう。舞台復帰を果たした鹿島とも子は、「娘がいたからこそ辛いリハビリに耐え、自力で歩くことを目指した」ということを語ってくれた。一人娘の存在によって、彼女は物質でいることの安心感から、自らの肉体を飛翔させようと試みはじめる。

4

そもそも彼女が闘病記を書きはじめたのは、リハビリを開始して、自分の不自由な肉体がどの程度自由度を獲得してゆくか、その記録のため、いわばリハビリ日記として記録されたのが最初だったのだ。身体の不自由を味わった者であればだれでも経験があるであろうが、毎日の身体の変化など微々たるものであって、劇的に身体がもとに戻るということは

ありえないのだ。そこで毎日の肉体の変化を記述する。どのくらい触覚が回復したか、どのくらい足が上がるようになったか、どのくらいのおもりを持ち上げられるようになったか、などを克明に記録するのである。少しでも前進している肉体を確認したい。その欲望が闘病記を執筆させるエネルギーとなってゆくのである。

リハビリ同様、日記をつけることもまた単調な作業である。むしろ、その単調さに驚くことで、日記は書かれ読まれるのだ。単調さという点においては、ビートたけしの『顔面麻痺』の記述に一致する。『顔面麻痺』では、顔面神経に損傷を受けたたけしは、病室のカレンダーを見続けるという作業を励行する。左右の眼球の位置がずれてしまって、ひとつの像を結ぶことの困難に見舞われた彼にとって、カレンダーの数字を見ることは、彼なりのリハビリの一環であった。二重に見えていた数字がひとつに結ばれる。そのことは、自身の肉体（眼球）が快復へと向かっていることを示すと同時に、数字の「進み」が病室に縛りつけられている日々の「長さ」を表わしているという点で示唆的である。



鹿島とも子の場合、たけしとはちがって、多くの周囲の人びとによって肉体が再編成されてゆく。ことに彼女の父親は、事故当初も一晩中「可視光線」（手かざしのことか？）を当てて、娘の心身をリラックスさせていた。三ヵ月の入院のあと、退院して五ヵ月後、ようやく立ち上がることができるようになった彼女に、父親は腹立たしげに手紙をしたためる。そこには「近代医学とやらの盲信患者だ」とか「リハビリもよいが光線こそもとの体に戻す唯一のものだろう」といったことばが見てとれる。

肉親による「手当て」が治療行為の起源であることはまちがいない。患部に触れること、苦痛をもった部分に触れることは、他者に自身の苦痛のありか

を知らせることになるだろう。それは同時に苦痛の軽減にもつながる。まず自分で自分に触れることが「手当て」すなわち自己治癒の第一段階である。それを肉親がおこなえば、触れるという実際的な行為に加えて、コミュニケーションの獲得という意味ももってくるだろう。現代医学において、医者と患者の関係が殺伐としたものになってしまったのも、この「触れる」行為を医者がおこなわなくなったからかもしれない。いや、たしかに彼らは触れる。しかし、素手ではなくさまざまな検査器具を通してである。物体化された患者の肉体。それに物質が触れる。そんな機械が機械を癒す状況も、患者によってはかえって「楽」であるのかもしれないが、「手当て」からは遠いものである。

5

この手当てを他人である医者が代行することで医療が開始された、とする医学史的見解もある。だが、事情は逆であるかもしれない。手当てをおこなう他者のことを医者と呼ぶようになったのではないだろうか。あるいは、医者でなくともいい。ひとりの「癒し手」がそこに誕生すると云ってもよいのだ。

古代ギリシア時代、医療行為は医神アスクレピオスによって統括されていた。アスクレピオスは、癒しの場所である神殿をギリシアのあちこちに造営し、そこに自分の弟子たち（アスクレピアデン）を派遣

今月のおすすめBOOK

鹿島とも子・告白手記
出家の真相
スポットライトを浴びた日々、
そして今オウム真理教で——

芸能界を突如引退、「出家」し、解脱・悟りを求めて修行に専念する決心を表明した、もと日劇トップスターの歌手、鹿島とも子。
スノーモービル暴走事故で「一生車椅子か、よくても松葉杖」との宣告を受けながらも血のにじむようなリハビリの末に舞台復帰を成し遂げたのは、彼女が歌と踊りが大好きな"夢売り人"だったから。
そんな彼女がすべてを捨てて出家をしたのはなぜ？
数多くの苦しみの中で救いを求めたのが宗教だったのでしょうか？　さまよう彼女の心をとらえたのがこの道だったのでしょうか？
「いいえ、そうではないんです」
と、鹿島とも子が初めて語る胸の内を聞いてください。

AUM PRES
B6判　860円

話題の新刊書

した。彼らの治療法は、古代ギリシアを通して普遍的であったギリシア的肉体のつくりかたに準じていた。すなわち、運動療法、食餌療法、マッサージ、沐浴などがメニューに含まれていた。もちろん、薬物療法や外科手術も盛んにおこなわれていたらしい。しかし、どの治療法よりもアスクレピオス的であったのは、患者を神殿のそばにある回廊で眠りにつかせ、夢のなかで神があらわれ患者を癒し、眼がさめれば治っているといった不思議な「夢治療」であろう。夢のなかに登場するのは神アスクレピオスでなくとも、その使いである蛇の場合もあった。いずれにしても、さまざまな身体イメージを駆使して病いや障害が克服されていった。

しかし、アスクレピオスにも「不得意」なジャンルの病気があった。それは精神病やらい病、それに身体障害などの、社会的な差別性のきわめて高い疾患である。こうした疾患の治療を「得意」としていたのが、あのイエス・キリストであったのだ。イエスの使徒たちは、東部地中海地方を遊行して奇跡的な治癒に成功する。以後数百年、アスクレピオス派とイエス派の「治癒戦」があちこちで繰り広げられることになる。どちらが勝利を収めたかは歴史が言明している。

ただ、ここで重要なのは、アスクレピオス型の治療法がなぜイエス・キリスト型の治療法に移行したのかという点にある。前者の健康獲得型、ギリシア的理想体形追求型の治療法は、完全な身体を得ることに目標があった。したがって、社会的に「弱者」であり続けるような病気や障害は治療のターゲットとはされなかった。それに対して、後者は、いかなる身体をつくりあげるかという理想などもちえなかった。大切なのは、病気や障害の「原因」をさぐり、それを身体に受容させることだった。であるから、聖書の記述にあるように奇跡的なできごとが実際にイエスによって為されたのかはわからない。それらを自然治癒か偶然の一致として「聖書と医学」というテーマを扱っている研究者もいるくらいだ。

イエス的治癒はやがて、「癒し手」を抽象的・精神的存在とする立場と、人間的な神とする立場に分裂する。前者がマインド・キュアと呼ばれるものであり、後者が信仰治療と云うものである。マインド・キュアは自己内省的、自己治癒力昂進型であり、

信仰治療は儀式的、イエス的治療再現型である。教会権力と医学権力とがヒトの生老病死の「担当」を奪い合い、ほぼ全権を掌握した現代医学の時代においても、これらの治療法はオルタネイティブ・メディシン（もうひとつの医学）として全世界でおこなわれている。現代医学はそこにある身体しか対象としない。だが、あまたあるオルタネイティブ・メディシンはいま眼の前にあるその身体（の病気、欠損）の由来を説き、きたるべき身体を予言する。身体を全面的にカヴァーすることで、次なる身体を獲得（リカヴァー）する。

6

鹿島とも子が辛かったのは、なによりも「未来の肉体」が予測できないということだった。舞台復帰という「夢」と日常生活という「現実」との距離がどれほどのものであるのか、見当もつかなかったのだ。だが、きたるべき身体は思わぬところからやってきた。長男の誕生である。退院して三年、おぼつかないながらも自立歩行は可能となり、娘にからかわれるほどにその身体は日常化してゆく。「こんな風に笑って一緒に散歩することができるようになるまでには、いくつもの傷を、心にも体にも作り、どれほど痛い思いでかさぶたをはがさなければならなかったことか。かさぶたを引きはがすごとに、私は逞しくなっていきました。母性に目覚めた女の強さが、日々備わっていったのは、私にとって大きな救いでした」と彼女は記す。かさぶたの下には新しい身体、そして新しい生命が隠れているのだ。

ごく普通の母親と同じく育児と家事に追われている彼女には、もうひとつのきたるべき身体、舞台復帰が待ち構えていた。きっかけは大阪の精神薄弱児の更生施設の「園歌」を歌うという仕事だった。それを無事やり遂げた彼女は、事故から六年後にライブで再起することになる。

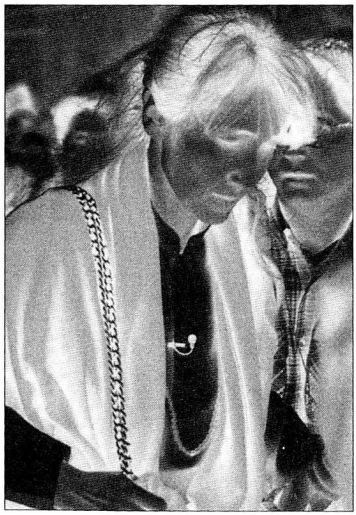
私が彼女に会ったのは、その後、大きな舞台での復帰を初めてする神戸においてであった。鹿島とも子は入院のときに付き添っていた女性を連れて、私の質問に丁寧に答えてくれた。「娘に会いたかったから」「ダンスを続けたかったから」辛いリハビリに耐えたということをさかんに話してくれた。また、整体やカイロプラクティック、電気治療といったオ

ルタネイティブ・メディシンの世話になっていることも語っていた。そうした医療行為（厳密には医業類似行為と呼ぶ）が、彼女のからだと心の両方のかさぶたを少しずつはがしてゆくことに貢献したのはまちがいないだろう。ところが頼りにしていたカイロプラクターが亡くなり、心の支えを失いかけていた頃、ヨーガとめぐりあう。それがオウム真理教の主催するヨーガ教室であった。

それだけのことである。

7

「癒す」ということばは、本来主語も目的語も同一である。英語やフランス語にある再帰動詞のようなものであって、自分が自分を癒すという文脈においてしか「癒し」は存在しない。ただし、神や精神的存在といった超越的な主語が用いられる場合もあるが、癒すのはあくまでも自分自身であって、医療者や他人ではない。ただ、鹿島とも子のように徹底的に身体にダメージを受けてしまったようなケースでは、「癒す」を再帰動詞として扱うことはむずかしい。癒しの地平からは離れるかもしれないが、だれかの力が必ず必要になるからだ。不自由な身体同様、受け身になりがちであろう。現代医学における治療やリハビリは、むしろ患者が物質的かつ受動的な反応体であることを歓迎する。オルタネイティブ・メディシンは、程度の差はあるけれども、基本的に「癒す」を再帰動詞化する。積極的にリハビリに通い、出産をして、舞台復帰を果たした鹿島とも子であるからこそ、カイロやヨーガといった世界に親和性をもったのである。それは「癒し」を自分だけのために実現しようと考える人間にとってはしごく当然のことである。



極楽をうしなった不幸——オウム真理教のつたない地獄

西原 珉

にしはら・みん：一九六四年東京生まれ　東京芸術大学美術学部芸術学科卒業。国内外の現代美術の紹介と批評記事の執筆、各種展覧会の企画・構成等を広く手掛ける。'95年秋には「Departures」展をキュレーションの予定、また目下、戦後日本の女性美術作家の研究に余念がない。

1　つたない地獄

この文章を書こうと思いたったのは、オウム真理教に関する情報騒乱がこれまでで最高潮に達していた今年4月、週刊誌およびTV等に元信者の証言というかたちで続々と現れた、ある〝イニシエーション〟（教団の用語に従えば）がどんなものだったかを知ったことによる。

証言の一つは、次のようなものだ。

真っ暗なその部屋でビデオを見せられる。これがバルドーの導きと呼ばれる恐怖のイニシエーションのはじまりだった。

「人が死ぬシーンをかき集めたビデオでした。海外で銃で撃たれた人だとか、サーキットの爆発、バイク事故、それに映画の場面から人が死ぬところだけを抜いて、そういうのをつなぎ合わせてあるんです。約一時間のビデオで、その間尊師の声がずっと『人は死ぬ、必ず死ぬ、死は避けられない』といういつもの言葉をずーっと繰り返すんで

す」

ビデオはもう一本あった。ところどころアニメーションがあるだけで、ほとんど画面は真っ暗。スピーカーからは、地獄の恐ろしい様相が語られる。

「地獄に堕ちた人が『お腹が減った』と地獄の番人にすがると、番人に口をこじ開けられるので顎の骨が折れて口の中が血だらけになる。そこに焼けた鉄を注がれるんです。体は焦げ、それでも死なない。オウムでそれまで地獄の様相を聞かされていました。何年か後の自分より、来世の地獄の方がリアルに想像できるくらいインプットされていたので、このビデオは本当に恐怖でした。それが五時間以上続くんです」[1]

この記事ではさらに、同じ元信者が目隠しをされたまま「尊師が閻魔様、マハーケイマが地獄に堕ちて裁きを受け、責められる役」を演じるデュエットや「ゴオーッ、ヒューッという風の吹きすさぶ気味の悪い音がして女の人の悲鳴が遠くに聞こえてくる」という一種のサウンド・インスタレーション（？）によってもひき続いて恐怖を体験したことが証言されている。

さらに、最近オウム真理教大阪支部で公開されたというセレモニーでは、紙製の面をかぶるなどして閻魔大王、獄卒、罪人に扮した信者が登場し、閻魔大王や獄卒に責めたてられながらも潔白を主張し、許されるという筋書の演劇も行われていた。その場で流れていたのは、もちろん、サリン事件のあとにロシアから放送されて話題となった「わたしはやっていない、潔白だ」のみを訴える『エンマの数え歌』（作詞・作曲　麻原彰晃）の歌である。感動など覚えようもない、あまりにもつたない演劇、あまりにもつたない歌、あまりにもつたない物語。

さて、最後にふれたセレモニーはさておくとしても、幾つかの同じような証言を目にしてわたしが非常に驚いたことは、かくも古めかしい「地獄」がオウム真理教においては宗教装置の一輪としていまだに機能し得ていたことだ——そのつたなさにもかかわらず。あるいはそのつたなさのゆえに？

前述の証言中にある地獄などは、「熱鉄の鉗（かなばさみ）を以

て口を鉗(はさ)みて開かしめ、三熱の鉄丸を以てその口中に置くに、即ちその口及以(および)咽喉を焼き、府蔵を下りて下より流れ出づ」[2]といった、『往生要集』に引かれた瑜伽論の一節が彷彿と頭にこだまするような超伝統的イメージであるが、信者（当然すべてとは言わないまでも）たちはそんなイメージにほんとうに恐怖を抱いていたというのだろうか？

もちろん地獄は、あるいは地獄とは、古くから人々を恐怖に陥れ、その恐怖のゆえになお多くの人々を宗教へと誘いこんできた観念ではある。

そして、そのための主たる誘惑の（正確には脅迫の）メディアは地獄絵であった。

地獄絵はごく最近まで寺社祭礼などで容易に目にすることができたし、その恐怖を幼児期の記憶の一片としている人も同世代あたりにはまだいるだろう。（その影響の、あまりの大きさに何かをしてしまった人の例には、ご存じ太宰治など多くの文学者らが名を連ねている）

今でも毎年日を定めて地獄絵、六道絵の絵解きを行う寺があるように、地獄絵はだが決して過去のものではない。（そればかりか、地獄なるもののイメージは宗教的な機能をとっくに逸脱し、恐怖のイコノグラフィーとして、少年漫画雑誌のグラビア、イラストレーション、ファミコンゲームなどに場を移してさらに拡大さえしている）

オウム真理教が教義上「地獄」を強調するにいたり、現実に信者が地獄を疑似体験できるような装置（遊園地のお化け屋敷にも同じ、にせよ）をつくっていたのは、実際にはどのような経緯と目的あってのことか、現段階では判然としないのだが、死後の世界（冒頭のバルドーの導きのバルドーはもちろん『チベットの死者の書』で名高いバルドゥ、いわゆる中有に由来する）、地獄、閻魔王、業（カルマ）などを恐怖の力点として教義を浸透させていた点においては、用いるメディアが画幅と筆からビデオやオーディオへと変わっただけで、中世の絵解き師と何ら変わるところがないだろう。

今までのところ、オウム真理教はもっぱら前にあげたようなイニシエーション等を通じて信者に対し「薬物と恐怖によるマインドコントロール」を行っていたと批判されている。

だが、「薬物」も「恐怖」も、それに支配されること自体はまったく奇異なことではない。（まったくの余談であるがわたし自身、卒業論文で聖衆来迎寺の六道絵を研究対象にその絵解きの底本となる『往生要集』とその図像との照合を検証したとき、約1カ月にわたって聖衆来迎寺のみならずさまざまな六道絵、あるいは地獄草紙などの絵巻、また十界図・地獄極楽図・二河白道図・九想詩絵巻などの参考図版を細部までスライドに撮影し、毎日自宅の壁にプロジェクターで映写していた結果、毎晩地獄の夢を見、また白昼夢に近い現象が起きるにいたった経験を持っている）薬物についてはまた今度。

問題は、その薬物がひきおこした状態であり、恐怖の質であろう。

ここでささやかな話題とすべきは、彼らが行使したイメージが、そして信者が信じたイメージが、あまりにも簡単な、あまりにもちゃちな「地獄」であったことだ――われわれが文化的に引き継いできたとばかり信じていた「地獄」の奈落の深さに比べて。

2　宗教装置としての地獄（絵）

では、日本では地獄（絵）がどのように宗教的な装置として機能してきたのか、美術史面から導き出される例を以下に見てみよう。

世界各地域に存在する地獄のヴィジョンは、各々が外来の世界宗教をどのように受容し、また自らの性格と在来の信仰を反映させたかという点の、適切なプレパラートとなるべきものだ。

日本に到来した地獄は、古代インドにその想を発し（ヴェーダ聖典の一部にはごく断片的に、そして古代仏教の文献『スッタニパータ』[3]には散漫ながらすでに十の地獄の記述がみられる）、インド、中央アジア、中国をへてそのイメージを変容させながら、『阿含経』『世紀経』『倶舎論』『正法念処経』『大智度論』『地蔵十王経』などに編纂されてきたものであり、のちにそれらからの引用集ともいうべき『往生要集』にまとめあげられることになる。

また、地獄とは言うまでもなく仏教のみならずキリスト教にも類似の内容もしくは図像を見いだされ

「地獄草紙」より雨炎火石地獄、むかし殺生、偸盗、邪淫および、酒でもって旅人を酔わせ宝物を奪い、時には命をも取った者が落ちる地獄とされる。

る、広範な地域で信じられたもっとも普遍的な概念のひとつであるが、仏教における地獄は、人間が死後どこへ去るのかという命題に対するひとつの回答として想定された他界のヴィジョンであると同時に、仏教のもっとも根幹にかかわる教義のひとつ――そして現世と来世をつなぐ論理の鎖である――因果応報説を補強する役割を担っている。そこには、因果応報が真理であるならば補完されるべき他界として地獄が存在し、また地獄が存在するのであればその説明としての因果応報説が充実をみるという関係が伺われる。

日本における地獄観では、特にこの因果応報が強調される。それは罪悪と懲罰の関係ではなく、自分のしたことが自分にかえってくる（『スッタニパータ』には「けだし何者の業も滅びることはない。それは必ずもどって来て、（業をつくった）主がそれを受ける」と記されている）という業の思想であり、その業を消滅させるためには仏教ではおおむね修行による他はない、とされた。

おそらく、地獄絵がその精神的作用を発揮したのは、平安時代の仏名会にはじまるといってよいだろう。仏名会とは「12月15日から3日間、あるいは19日から3日間、宮中ならびに諸国寺院・貴族階級で、過去・現在・未来の三世諸仏の名号を称え、一年間の罪障を懺悔しその消滅を願う法会」[1]であるが、こ

の法会では一万三千仏もしくは三千仏を本尊する一方で、相対して地獄絵の屏風を立て用いることが恒例であった。地獄絵屏風は当時の文筆家にも強い印象を与えたものか、『栄華物語』『枕草子』『北山抄』など多くの書物にこれへの言及がある。当の屏風に

オウムにとって「広島原爆被爆の図」もまた,一種の地獄絵と見做されているようだ…

描かれた地獄絵がどんなものであったかについては、『古今著聞集』に「(巨勢)弘高、地獄変の屏風を書けるに、楼の上より枠をさしおろして、人をさしたる鬼をかきたりけるが」という唯一の例があるのみだが、この時代には(それが地獄草紙なのかあるいは屏風絵であるのかなどは知るすべもないにせよ)地獄絵を見て詠まれた歌が西行の一大連作[3]をはじめとして幾つも残されており、重要な資料となっている。『金葉集雑下』には和泉式部の

地ごくゑにはかりに人をかけたるをみて
　罪はよに重きものぞと
　　ききしかどいとかばかりは思はざりしを

他がおさめられているが、この歌の西行などにくらべればはるかに淡泊な感想にさえ、地獄絵屏風があまりにも重い業報の恐怖をヴィジュアライズし人々の背を追い立てるように本尊と経文に向かわしめていたありさまが影を落としているように思える。地獄のヴィジュアル・イメージが当時の平穏たる藤原貴族にとってどれだけ恐怖感を与えたものであった

かは、地獄絵をみて「ゆゆしう、いみじきことかぎりなし」[6]とものかげに隠れてしまった清少納言をみても想像にかたくない。

さて、ここで地獄絵の一方の世界に目を移してみよう。

中国で七～九世紀の唐代に特に流行した「観無量寿経」にもとづく絢爛な浄土図の制作はやや遅れて日本でも隆盛をみ、平安時代中期以降にはわが国でもおびただしい来迎図が描かれている。念仏および浄土教はこれらの図像を通じて光と華に満ちた死後の楽土に憧れ、そこからの迎えをひたすらに待つ、来迎主義とでもいうべき独自の角度をもった死生観を流布させていくのだが、ここでは特に来迎図の実用的な側面を強調しておきたいと思う。

平安、鎌倉時代の念仏信者は臨終の際に「頭北面西」（西方浄土に向かって北枕、西向き）に横たわり、その枕もとに来迎像を飾り、阿弥陀如来の手にかけた五色の糸にすがって往生するのが普通の習慣になっていたという。日本の来迎図がチベット・中国のそれと反対に左から来迎の弥陀菩薩が進んでくる図様なのも、この臨終行儀ゆえのことと推理することができる。『頬焼阿弥陀縁起』と呼ばれる光触寺の絵巻物にはその臨終行儀の様相が仔細に描き残されている。また、時代が下るが、金戒光明寺の『山越阿弥陀図』には阿弥陀如来の手もとに糸自体が残存しているのを認めることができる。[7]

そしてここでもそれらの来迎図と対極にあって人々を浄土へとせきたてたものは地獄絵であった。糸にすがる信者の足元には依然として地獄絵が置かれることもあったのである。

また、大串純夫氏は早来迎の異名をとる新知恩院の阿弥陀二十五菩薩来迎図の「余りにもドラマティック」な表現や、四天王寺阿弥陀三尊像の脇侍像のような片足をあげるなどの動的な菩薩像がつくられたことの理由として「これは、わが国で流行した「迎講」という行事と密接な関係を持つのだと思われる」と記している。[8]

「迎講」とは、平安中期に恵心僧都（九四二～一〇一七）が始めたという宗教的なページェントで、浄土往生を願う念仏行者が、菩薩に扮して行

った弥陀来迎の演劇的「行道」のことである。平安、鎌倉時代の人々は、迎講を行うために、特別の建物を立てたり、特別の仮面や彫像を作ったり、特別の衣裳をととのえたりして浄土往生の法悦にひたったが、そのペイジェントの際に、菩薩の面をつけ美しい衣裳を着て、歓喜のあまり身をよじった信者の姿勢。それがこのような像容のモティーフになったのだと思われる。(9)

この恵心僧都は『往生要集』をあらわした源信であると考えられている。『往生要集』は外来の経典を整理、第一に地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の六道の様相、その筆舌につくしがたい苦しみ、不浄、そして生の無常を語ることをもって「厭離穢土」の心をうながし、第二に来迎、極楽浄土のさまざまな楽を述べて「欣求浄土」の心を強め、その後に念仏の法を授けるという、浄土教のフォーマットを準備する書となった。六道の諸相を述べたあとに「総じて厭相を結ぶ」として源信の『往生要集』にいわく、

一though は偏に苦なり。耽荒すべきにあらず。四の山合わせ来りて遮け遁るる所なし。しかるにもろもろの衆生は貪愛を以て自ら蔽ひ、深く五欲に著す。常にあらざるを常と謂ひ、楽にあらざるを楽と謂ふ。…（中略）…なほなんぞ厭はざらん。…（中略）…かくの如く展転して、悪を作り苦を受け、徒に生まれ徒に死して、輪転して際なし。…（中略）…当に知るべし、苦海を離れて浄土に往生すべきは、ただ今生きのみにあることを。しかるに我等、頭には霜雪を戴き、心俗塵に染みて、一生は尽くといへども希望は尽きず。…（中略）…願はくはもろもろの行者、疾く厭離の心を生じて、速やかに出要の路に随へ。

続けて源信は、この苦しみに満ちた人の世から離脱するには、弥陀の教えを受けて西方の浄土に生まれる他はない、そのためには念仏をする以外にない、と説く。源信の説く「観念念仏」とは仏典中でもイマジナブルなことで知られる『観無量寿経』に多くを拠っている。この経典はまた先にふれたように中国大陸での浄土図の典拠であるが、その幻想的な表

鎌倉時代の絵巻物『九相詩絵巻』より、女性が死に、腐敗し、バラバラの骨になる過程を９つの場面に分けて描く

現は日本の浄土図においてはるかに優美にヴィジュアライズされた。

源信が言う念仏とは、弥陀の名を唱えるほか、心に弥陀を思い、目に弥陀の姿を見、耳に弥陀の声を聞き、手は合唱して弥陀を拝む。つまり五感を通じて弥陀の姿や浄土や来迎の光景を昼も夜も想像し続ける、というものだ。そのため、源信は仏像、仏画、音楽などによって浄土のありさまや来迎を思い描くことも念仏のたすけとなるとし、これらを推奨しさえしている。

『往生要集』をひもとけば、この世に生きる人のほとんどがいずれかの地獄に堕ちならなければならなくなるであろう。殺生せる者、飲酒、狩りをした者、よこしまな欲望を抱いた者、衆道に陥った者、酒を以て人に与え、酔わせてあざけり戯れ弄び、羞恥させた者（コンパ？）、あるいは婦女を誘いたぶらかしその心を破りことに及んだり財物を与えた者……など、生活実感にもとづいた細かなそのとりきめは、因果応報の原則にもとづき、もし罪を犯せば犯した罪そのままの、あるいは連想され誇張されるイメージによって何千、何万倍の苦しみと、その苦

しみが与えられるほとんど永続的な時間をもって無限大の報復を受けることを定めている。しかしながら、その苦しみもまた「天道」の項で源信が気ままに遊び暮らす天人も滅びのときを迎えるその五衰の相を述べたあと

当に知るべし、この苦は地獄よりも甚だしきことを。故に正法念処経の偈に云く、
天上より退かんと欲する時　心に大苦悩を生ず
地獄のもろもろの苦毒も　十六分の一に及ばず

と記されるとき、六道の苦悩と無常のハイエラルキーは上下を失って回転し始めるのだ。

『往生要集』において強調されるべきは、本来は念仏の方法、特に観想と臨終儀式の要点にあったのであろうが、この世（人道）もまた天道でさえもまた無常と不浄と苦しみに満ちた離脱すべき六道のひとつであるとする六道思想、そして厭離穢土／欣求浄土という同書の骨子となる構成が「他界を設定しえた厭世観」として時代と合致し強くアピールするものであったこと、そして各種あった経典における六道の記述が体系的に整理されたことによって、この書は来迎図よりも六道絵の隆盛に力を貸すことになる。

来迎図は、コンプリートな観念の所産である。あわく光る金箔の切金文様が衣に冠にと踊り、空中には華が降り、涌きいでる雲の上で菩薩の優しくほほ笑む、それらの秀作の多くは官能的ですらある優美な線を備え、精神を高揚させる美をたたえている。それはまさに、視覚芸術とよばれるべき性質のものだ。新知恩院の雲流れる二十五菩薩来迎図や、高野山有志八幡講のみずみずしい聖衆来迎図、そして宇治の平等院鳳皇堂などは、その最も美しい結実である。平等院などは空間全体をも通じて人々を現世からすべり精神を上昇させずにはおかず、実際当時から現世にたちあらわれた浄土とたたえられた。

地獄絵・六道絵は、これとは対照的に、しかして教義上は浄土と対照をなすというわけでなく、現世、世俗の苦しみの画としての性格を強めて展開してきた。益田家本地獄草紙、餓鬼草紙などは、炎や獄卒などの描写をのぞけば非常に写実的なものである。地獄で用いられる拷問道具に調理、大工工具などの

日用品のイメージが多用されていることも――それは逆にリアリティの点で恐怖を強めるわけだが――決してそうした地獄絵自体の位置付けと無関係ではない。

『往生要集』は、以降、六道絵の図様を根本的なところで決定していく。その代表的な例が、かつては十界図と称されていたが、綿密に図様を照合していくと『往生要集』の忠実な絵解きであることが判明する、滋賀の聖衆来迎寺六道絵十五幅である。

この聖衆来迎寺六道絵がそれ以前の地獄絵・六道絵と決定的に異なる点は、主観的解釈を交えないその図像によって、また依然として写実的表現を用いつつも、それが戦乱の当時の現世と重なり合わされて、しかも六道をひとしなみに扱うことでそこに輪廻の輪にも通じる画面上の運動が生まれることによって、この画幅が宗教絵画たりえている点であると思う。

美術史上での地獄絵は、これら六道絵の体系のなかに描きこまれることによって、はじめて宗教装置としての機能と芸術的円熟をかねそなえた存在になったといってよいのではないか。

平安後期、そして鎌倉室町の末法の乱世において、現世は地獄となり、厭離穢土・欣求浄土の念はますます強く、念仏信者においてはより極楽往生のみを重視、焼身あるいは入水により自殺しても往生を得ようとするファナティックな風潮さえおこってきた。「極楽浄土の東門は、難波の海にぞ対へたる、転法輪所の西門に念仏する人参れとて」と『梁塵秘抄』にうたわれた四天王寺の海岸から船で漕ぎ出して入水した人々や僧もいた。あるいは、有名な補陀落渡海は、浄土を熊野・那智の南海にもとめ船で海を渡ろうとした。

しかしながら、地獄と俗世との境界が薄くなって地獄のイメージもより身体化されたものになるにつれ、地獄・極楽が宗教上の概念のみではなくなり、宗教絵画としての来迎図そして地獄図は鎌倉時代の山越阿弥陀図や二河白道図を最後にほぼ姿を消してしまう。あとに残されたものは、思想的支柱をもたない、地獄めぐり譚、あるいは絵入り往生要集などの庶民的レベルで流布される戯画化された地獄絵、あるいは七難七福図、河鍋暁斎といった風狂の地獄絵であった。

それらの多くには、ほとんど破滅的な信者を量産した一時期の浄土教と異なり、地蔵菩薩による地獄からの救済など何らかの猶予・救済が添えられている。そうして人々が地獄と折り合いをつけ強迫的な恐怖心の歴史を過去のものとしたとき、極楽もまた阿弥陀仏への崇拝の念だけを残し、遠のきうしなわれる結果になったのかもしれない。

その時はあたかも江戸の世であった。『往生要集』が再版されたのも江戸のことである。坂本要氏は民俗のなかでの地獄として、次のような行事にふれている。

江戸時代にこの地獄を見る行事として閻魔詣での行事があった。一月一六日、正月も一段落した時に江戸市中百カ寺あるといわれる閻魔をお詣りし、寺々に十王図や六道絵が掛けられ、地獄の様子もかくあると見て廻るわけであるが、この日は藪入りでもあり、奉公人や女中の遊び日でもあった。この日江戸では浅草寺や増上寺など大きな寺院の山門や仁王門が解放され、楼上にある十王や阿弥陀像を拝むわけであるが、仕事から解放された奉公人や女中が高所より市中を眺める晴れやかな日でもあった。晴れやかな地獄の日というのは一見矛盾するように見えるが、民俗心象としての他界に臨む日でもあった。地獄は中世の闇を抜けて原初の明るさを取り戻した。[10]

地獄はその暗い引力をうしない、好奇と猟奇に満ちたスペクタクルとしてのみ伝わっていく。ポップな地獄とでもいうべき表現が登場する背景である。

3　オルタナティブなき地獄

山梨県上九一色村の第7サティアン、実質上化学プラントであったにもかかわらず、強制捜査当初の段階では巨大なシヴァ神のレリーフがそれを覆い隠していた、あのシヴァ神を思い出すとき、わたしは同時に東大寺二月堂の十一面観音を（まったく思いがけず）思い出す。

造形の美しさでは比べようもない。この美しい十一面観音の光背には毛彫で獄卒と釜などの図様が描かれており、現存する最古の地獄絵の例であるとさ

れる。地獄を直にその背にひそかにしたがえた菩薩。

つまり、それは非常に未熟なレベルでの地獄の脅迫であり、地獄というひとつのイマジナブルなフィクションが、すぐれた地獄絵に見られるような喚起力をいささかも獲得することなしに造形されている、されざるをえなかった、というように見えるのだ。

源信は「人の世は無常である、生まれ落ちたときから死ぬときまで、苦しみつづけるようにできている、名誉も財産も、死ぬときにあっては苦しみを増すだけのものにすぎない」と説いた。

オウム真理教、麻原彰晃は、「人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ。死は避けられない」と件のマントラ口調で繰り返し説法したという。

「その死の前には、お金は無効だし、恋愛も無効だし、それから社会的地位も無効だし、権力も無効だし、一切のものが無効である」

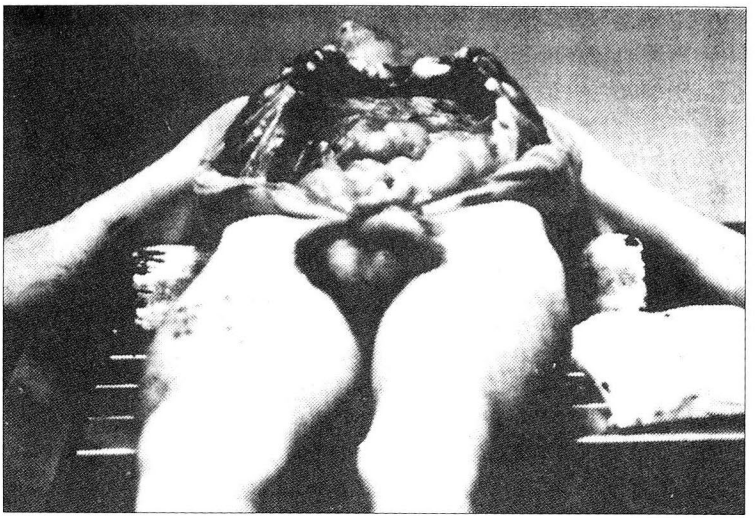
「わたしたちが肯定しようと否定しようと死ぬ。この命題を真剣に受けとめ、そして真剣に実践する魂こそ、本当の智慧者であり、そして本当の賢者であるとわたしは言いたい。そして、この人生でわたしたちがいつのときか修行の最終地点に到達するなら、わたしたちには、生死を超えた安らぎ・歓喜・自由の三つが備わるはずである」[11]

筆者はこの宗教の教義には関心を抱く者ではないが（それはあまりに変遷し、あまりにハイブリッドであるように思われるが）、これはごく普通の仏教的主張であり、何ら驚く要素はないように見える。

驚くのは、彼らの言う修行がチベット密教の要素を含むという意味をこえて、非常にというか単にフィジカルなものであることだ。

谷崎潤一郎老年の小説『少将滋幹の母』には、若い甥に妻を奪われるが恋情を断ち切ることができずに苦しむ老大納言国経が、煩悩を消し去るべく、「京都の街の死骸の捨て場」で「若い女の死骸の腐りただれたもの」を見つめ、不浄観をこらす一節がある。[12]

不浄観とは、摩訶止観によれば、「山河も皆不浄也、くひものきもの又不浄也、飯は白き虫の如し、衣は臭き物の如し」にはじまり、自分の肉体、愛する女性の肉体、すべての生き物、この世のすべてのものが不浄であると見定め、かくも不浄な現世のそ



の不浄への嫌悪の力を借りて、執着を断とうとする観想法のひとつである。

『少将滋幹の母』では老大納言は死ぬ直前に息子に「(恋慕の執着は)なかなか晴れるどころではない、不浄観を成就するということは、口で云うような容易いものではない」と語る。実際にこの観想に用いられていた可能性もある、美しい女性の死骸が腐り果てていくさまを幾つもの様相に分けて描いた「九想詩絵巻」などは、ある意味では地獄絵以上のこの修行のすさまじさを伝えていよう。[13]

しかしながら、オウム真理教の機関誌「ヴァジラヤーナ・サッチャ」などを見ると、彼らは死のイメージを(さきのイニシエーションのヴィデオ同様)多用してはいるが、それはショックを与えるためのスペクタクルにすぎず(さもなければ地獄のイメージと原爆投下後の広島の絵を同様に扱うのはどういう意図によるのか?)、イマジナブルな要素はまったくないと言ってよい。地獄にせよ死後の世界にせよ何にせよ、想像力の鍛練によって獲得できるはずの視覚的イメージは、彼らの修行によって一切得られることがなかっただろう。彼らは、ビデオや雑誌、

アニメーションなどを用いながら、ごく一義的に視覚的であるにすぎなかった。

同機関誌によれば、かれらの修行中の状態は次のようなものであるという。

正しく修行を行っていると、サマディという究極の瞑想状態に入る。…(中略)…サマディの状態は次のようなものである。

○感覚の停止
○イメージの停止
○呼吸の停止
○心臓の停止

これは、現代医学の定義では、まさに〝死〟である。だが、彼らは死んでいない。肉体的には死んでいるのに、精神は死んでいないという不思議な状態がこのサマディなのである。(1-4)

さらに麻原彰晃にいたっては、その脳波が脳死状態の人間のものと似ている、とまで主張されている。(もちろん、ギャグなどではない)

彼らが極限状況にまで肉体をさらしてまで得ようとしているのは、「修行によって生きながらにして自在に死を体験」という記述が同機関誌にあるように、一種の臨死体験であると言えなくもない。重大な交通事故から生還した者などによって語られる臨死体験によって得られた超常的なヴィジョン、そして宗教者によって厳しい肉体修行の結果〝悟り〟として語られるヴィジョン、さらにオウム真理教の一部の解脱者が修行の果てに会得したと語る悟りのヴィジョン、これらには実際、多くの類似点を見い出すことができる。

だがそれは、一定の肉体的なプロセスを経れば必ずやもたらされるヴィジョンであると言い換えることも可能だろう。スポーツなどにも存在する、肉体の極限の外に位置するものとしての悟り。

それは、かつて自殺も辞さず念仏修行にうちこむことによって死や地獄をのりこえることを願った者たちとはまったく異なるありかただ。そのような念仏者の臨終の際には必ずや彼らを包んだであろう、あの圧倒的な法悦はどこに行ってしまったのか。オウム真理教の修行にはその幻想の片鱗さえもない。

かつては地獄のオルタナティブとして存在し、機能した極楽はうしなわれて久しい。それを（実在はともかく）イメージとして思い描くことさえもはや困難だ。わたしたちはわたしたちの極楽をイメージする能力を、環境的にもうしなってしまった。極楽はもう、誰の上にもあらわれることはない。

そしてその不幸のなかで、オウム真理教は、地獄を現前させることにおいてあまりに稚拙であったばかりか、地獄の、あるいはこの世を地獄とするのならばこの世のオルタナティブを一滴も規定できなかった。彼らの建設（実際に建設したところがすごいのだが）したユートピアもまた、実際にはこの世のつまらぬ地獄（ディストピア）でしかなかった。

いや、オウム真理教に限らず、この時代において、生でも死でもない（あるいは生死をこえた）オルタナティブがあるとするなら、それはその両者のあいだにわずかに横たわるゾーンでしかないのかもしれない。現在のところそれはすなわち臨死や脳死であろう。その、（いまだ解明されていないという意味で）超常的な空白においてのみしか、宗教的生死観はもはや保てなくなっている。

現代の補完されるべき他界は、何千由旬のかなたの地底にはなく、また輪廻の漠然とした時間の輪でもなく、その空白を指すのだろうか。

＊

最後にドラッグのことについて触れておきたい。

現在まで、オウム真理教が製造していたとされるドラッグには、覚醒剤、ＬＳＤ、メスカリンのほか、ＰＣＰ（いわゆるエンジェルダストやスーパーグラス）などが報告されているという。これらは、資金を得るために売買されたほか、中途から信者のイニ

“人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ、死は避けられない”

シエーションに用いられたらしい。

法悦なき宗教が所持する多量のドラッグ。さきの「バルドーのイニシエーション」で思い起こさざるを得ない『チベットの死者の書』が、ヒッピーに熱狂的に支持されたことも思い起こさざるを得ない。七〇年代、彼らがこの書を必要としたのもドラッグによる一種の精神の空白への探査が、同書の示した限りない意識のバルドゥという概念と響きあったからであった。ドラッグの大量使用による体験がしばしば臨死体験に酷似し、またしばしば人生観を全面的に更改するものであることも、知る限りの経験談によれば明らかである。

オウム真理教がドラッグをイニシエーションに導入したのも、当初はそういう目的があったのかもしれない。しかしながら、他のカルト教団あるいはそれに準ずるドラッグ・カルトが、超絶的にしてインスタントな快楽、さもなければ精神の探査のためにそれを用いたのに対して、オウムの場合はドラッグは精神のレベルを低下（あるいは一定のレベルに集中）させ、支配手段のひとつとして用いられるにすぎなかった（それは一昔前のバッド・フューチャーものSFを思い出させる光景ではある）。

聞くところによれば、オウムで製造されていたドラッグは、覚醒剤に安息香酸ナトリウムが含まれていないことなど、徹底して快楽作用を抜き去ったものであったともいう。しかし、バッド・トリップのみを呼ぶドラッグ（何というドラッグ！　やはり、ドラッグというより「薬物」がふさわしい）によってさえ、彼らの地獄は決してその深淵を見せることがなかっただろう。

結局のところ、彼らは彼らのちゃちな地獄をつくりだすことしかできなかった。彼らのなかにははじめから、燃えさかる業報の恐ろしい炎さえもホログラフィであるような、ちゃちな地獄しかなかった。その地獄は、のっぺりとして一元的な、そしてエスカレートするスペクタクルのみでしか世界に対する関心を持続させることのできない、彼らのチープな世界観を反映している。

註

（1）週刊文春　一九九五年四月二〇号「儀式とは名ばかりオウムの拷問地獄」　江川紹子＆取材班

（2）『往生要集』からの引用は、以下すべて「日本思想大系6　源信　石田瑞麿」岩波書店刊による。なお、『往生要集』に説かれている地獄は「地獄もまた分かちて八となす。一には等活、二には黒縄、三には衆合、四には叫喚、五には大叫喚、六には焦熱、七には大焦熱、八には無間なり」。

（3）『スッタニパータ』、中村元訳、岩波文庫

（4）成田俊治「弥陀信仰と六道絵―地獄変から二河白道図への展開」

（5）西行『聞書集』中の「地獄ゑを見て」。刀葉林を歌ったのであろうとおぼしき……このみみしつるぎのえだにのぼれとてしもとのひしをみにたつるかな　他

（6）『枕草子』第八十一段（岩波『日本古典文学大系』一九による）

（7）大串純夫「来迎芸術―五色の糸をたぐって」（大串純夫『来迎芸術』法蔵館所収（8）（9）同右。さらに大串氏は新知恩院本が寺より「多田満仲公臨終の念持仏」とされていることから、『今昔物語』にみえる、殺生を好んだ満仲をその子が恵心僧都にたのんで信心深い人間にしようとしたという話をひいている。この話によれば菩薩の装束の人々が笛や笙を奏でつつ、池の西の山かげから来迎を演じ、満仲はこれを来迎と信じて縁から転げ落ちて泣いた、という。史実はどうあれ、迎講を考案した恵心は地獄のドラマツルギーを絵解き以上に信徒のうえに表出しえていたのであろう、と想像される。なお、迎講のおもかげは、今でも中将姫つづれ織りの曼陀羅でなだかい当麻寺などでかいま見ることができる。

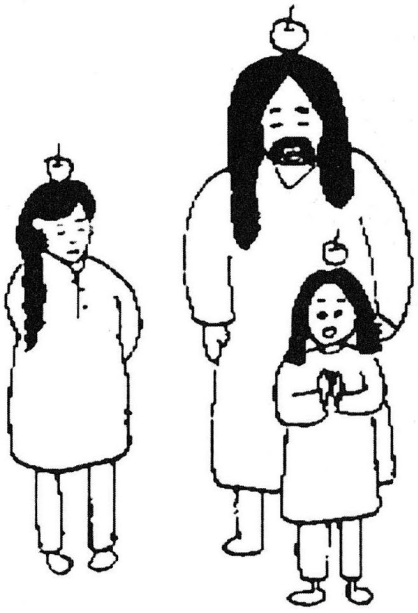
（10）坂本要「地獄の系譜」（坂本要編『地獄の世界』渓水社所収）

（11）九〇年一二月二四日、九三年三月二〇日、九三年三月二〇日の説法、『ヴァジラヤーナ・サッチャ』3号、オウム出版より

（12）谷崎潤一郎『少将滋幹の母』　新潮文庫

（13）往生要集の絵解き、例えば聖衆来迎寺六道絵などでは、全十五幅のうち四幅が人相にあてられ、戦乱、老い、病などを描いた苦相二幅、無常相一幅のほか、不浄相が一幅をしめる。この不浄相の図様はほとんど九想詩絵巻に相当するもの。

（14）『ヴァジラヤーナ・サッチャ』3号、オウム出版



その③

これって「オウム真理教」だよね～！

麻原彰晃の原風景

根本敬

ねもと・たかし：一九五八年東京生まれ。特殊漫画家。特異な画風と常軌を逸した深遠な世界は他の追従を許さない。代表作『生きる』（青林堂）も最近復刊。幻の名盤解放同盟としての『定本ディープ・コリア』（青林堂）も好評。最新刊は、特殊で因果な者たちについての長年にわたるフィールドワークをまとめた『人生解毒波止場』（洋泉社）。

麻原彰晃の原風景

(画・根本敬)

「帰って来たって、家には食べ物は何もなか、そげんこつなら、寮におったほうがよかぬ……」

そんなワケで、兄弟三人が盲学校の寄宿舎に暮らした麻原三兄弟の里帰りは盆と暮の年二回だけ。

全盲の長兄の手を引いて、全盲の智津夫と弟の二人が両側から引いて、夕日の中へ向かってトボトボと歩いて行く。

「メロン百個、メロン百個、メロン百個……やきいも百個、やきいも百個、やきいも百個……」

20余年後、この呟きはマントラへと昇華する。オウム真理教は麻原当人だけには正しい。

綺想科学と妄想兵器にまみれたオウム・テクノロジー

永瀬 唯インタヴュー
（聞き手＝黒田一郎）

ながせ・ただし：一九五二年生まれ。科学ジャーナリスト。SF史、技術文化史に造詣が深い。『現代思想』『文芸』『科学朝日』などに寄稿。著書に『疾走のメトロポリス』など。オタク世代とオウムを関連された論考「泥海の中から」を「イマーゴ」95年8月号カルト特集に寄稿している。

オウムの幹部は エリート科学者ではない！

まず最初に、オウム真理教にまつわる科学イメージならびに科学者イメージの問題からお話ししたいと思います。東大・京大・阪大などの有名大学の理工系の博士課程を修了した連中が幹部クラスにいるということを挙げて、オウム科学班のスタッフ、イコール理工系におけるエリート集団、というような言い方が、マスメディア・サイドではされていますが、これは根本的に間違っています。

なぜなら彼らは大学の理系のエリートコースを修了し、まさにこれから理工系の科学者・技術者としてのエリートになる為の出発点に立ったところで挫折し、オウムという閉鎖集団に逃げ込んだ、つまり、エリートに落ちこぼれた、元・エリート予備軍なのです。

今現在、科学や技術の世界では修士や博士といった存在は別に珍しいものではありません。とりわけエンジニアリングなど、工学関係の中で一流の技術者として名をあげるためには、現行のシステムでは十年や二十年でも足りないのです。たとえば某大手自動車会社が、東大・阪大・京大卒のドクター三人を使って、何をさせるかといえば、バックミラーの開発だったりするのです。

これは科学の現場も同じです。

ひとつ例を挙げます。オウムの厚生大臣こと遠藤誠一は京大ウィルス研究所でエイズ・ウイルスの毒性に関する研究をしていた。

だから、彼らの考えるハルマゲドンを積極的におこしてゆく一環として、エイズ・ウイルスの毒性部分の遺伝子を抽出するようなことを考えていても不思議ではなかった。つまり、遺伝子工学兵器ですね。正直、その可能性を一時期は非常におそれていました。

ただし、現在までの情報では、遠藤はそうしたことは、どうやらやっていなかった。

なぜか？

遺伝子工学と聞くと皆さんは世界の科学の最先端で、非常に有意義な研究のように思われているかもしれません。ところが、遺伝子工学の現在の現場は、もはや単純作業の繰り返しに過ぎないのです。例えば細菌の研究をする場合、その細菌の遺伝子をバラバラにする。バラバラに分解したものは、ウイルスの一種なのですがベクターと呼ばれるものを使って、大腸菌の培養細胞に植え込みます。これをさらに1細胞ごとに分離し、別々のシャーレで増殖させます。これらの大腸菌は、バラバラにされた遺伝子のカケラのパターンを、ひとつずつ植え込まれています。

で、確率的に考えれば、これらの大腸菌のシャーレが充分な数あれば、いずれかには、細菌の毒性に関する遺伝子がすっぽり全部入っているはずです。それが、何千分の一、何万分の一の確率かは、個々の事例で違ってきます。

識別には、毒性にかかわる遺伝子部位のうち、特徴的なごく一部の構造を合成した、識別用の遺伝子を用います。こうした合成装置では、毒性をつかさどる部位すべての合成はできないのですが、識別用のごく短いものなら合成できるのです。この識別用の遺伝子には、放射性物質をまぎれこませておきます。すべてのシャーレに、これを投入します。すると構造が同じために親和性が高い毒性遺伝子部位に、この識別因子がくっついてしまいます。くっついた部分は、この後、洗い流してもそのままですから、今度は一枚一枚のシャーレにフィルムをあてて、感光したかどうかで、問題の大腸菌を識別するのです。

この場合、単純な構造なら二千枚作って一枚くらいの確率ですが、もっと複雑なものになると何万枚作っても出てくるかどうか分からない、そういう気の遠くなるような作業です。こうした作業を終えてはじめて、抗毒素やワクチンの研究が可能になるのです。

エイズが発見されてから今日にいたるまで、こうした作業を十年以上の間、何千人もの世界中のエリート医学研究者がやっているけれど、十何年間経っても成果はあがっていない。エイズ・ウイルスにしても実際に、ワクチンはできたんですけど、エイズ・ウイルスそれ自身が平気で構造を変えてしまうのでほとんど役に立たない。

シジフォスのような作業です。あと十年やっても、二十年やっても、成果が上がるという保証はない。いや、突

破口はいつか開かれるかもしれないが、このまま、この方針で研究を続けるとしたら、その功績者が遠藤自身である可能性はゼロに等しい。

そこから遠藤は逃げたんです。ほかの理工系の連中もね。エリート・コースの頂点、ゴールだと思っていた、終点だと思っていたところを過ぎたら、はてしない単純労働が待ちかまえている。

彼らは逃げたんです。オウムという妄想の楽園にね。

この現実、しょうもない現実と付き合っていかなくてはいけない事態に直面したとき、彼ら理工系の幹部クラスは〝科学を越えるもの〟、超越的なものへ逃避したわけです。「科学で説明できないものもある」というふうに考えての上でのことですから、それまで受けてきた科学的な思考訓練はいっさい障害にはならない。逆に「科学で説明できないからすごいんだ」というふうに、自己正当化した上で、彼らは転向したわけです。

しかもそこには、現実の研究施設では、個人では絶対に不可能な額の潤沢な、しかも自由気ままに使える資金が用意されていた。ただし、これはあくまで、麻原を中心として、オウムというコミュニティーで共有されている妄想を、全面的に受容した上でのことですがね。

連中の中には望みの研究をするための方便として、こうした妄想を受容したものもいるかもしれません。しかし、その方便のあげくは、無差別殺戮兵器の開発と、実際の使用への道だったわけです。石井部隊の医師たちを連想させる話ですね。

オウムの武器・兵器を科学する その①（効力の認められるもの）

サリンと青酸ガス

つぎに今回の一連の騒動で、オウムが作ったとされる武器・兵器の類を、ひとつひとつ検証してみましょう。まず第一にいえること、それらの武器・兵器中で、多数の人命を奪うといった、甚大な、彼らにとっての「戦果」を挙げられたのは、サリンだけだったということです。

地下鉄サリン事件が起こるまでの経緯をおさらいしておきましょう。

まず、おそらくは昨年の十一月、どうさかのぼっても昨年の十月末になってからはじめて、上九一色村の教団施設の土壌からサリン残留物が検出されます。これを受けて十一月には、例の第7サティアンの化学兵器製造プラントの解体および偽装工作が始まります

明けて一月一日、残留物発見のリーク情報が、読売新聞一面に掲載されました。そして一月四日、オウム真理教側は、地元の肥料工場や米軍が教団施設に毒ガスを散布していると記者会見を行ない、殺人未遂で地元の会社社長を刑事告訴します。同じ日、オウム被害者の会の会長さんが、VXガスを首もとにまかれ、重傷となります。

この頃、警察は上九一色のオウム真理教教団施設への一斉捜索の一月末の実施を予定していました。この動きに対抗するため、オウム教団では、サリンなどすでに製造していたものを分解するなど、証拠湮滅のための作業が進められていたわけです。

ところがそれが阪神大震災が起こって、全ては順延されてしまう。

で、三月になってようやく、一斉捜索の日付けが二三日と決定される。この情報がオウム教団にもれた結果が、三月二〇日の霞ヶ関サリン事件だったわけです。

これまた、遠藤のオウムへの逃避と共通する現象ですね。

さて、この時、もし高純度のサリンと効率的な散布手段をもって連中がサリンを撒いていたならば……。たとえば松本サリン事件直後の、有機リン系神経ガスだと判明するまで十日間もかかったの同じ状態で、霞ヶ関の事件が起きたとしたら、もし松本での事件がおきていなかったら、その教訓が活かされていなかったとしたなら、場合によっては千を越える数の人間が殺されていた可能性があるんです。

非常に嫌な言い方ですが、あの程度の被害で済んで良かったといわざるを得ない。亡くなった方には失礼かつ申し訳ない言い方ですけれど、そういう事態が予想された。連中が純度のきわめて低いサリンしか作れなかったから、散布車もすべて処分し、傘の先でつつくという原始的な手段しか使えなかったから、あの程度ですんだのです。液状のサリンが袋から流れ出ている有名な写真がありますが、純度の高いサリンでしたら、撮影者は直後あるいは少ししてから、ほぼ一〇〇%死んでいたはずです。

また、ほどよい気温だったことも幸いしたと思われます。夏場で気温が高ければ、サリンの蒸散は盛んになりますし、冬のまっさかりで車内の暖房が効いていたとするなら、車輌の床はかなりの温度になっています。急速にガスが拡散されるために、各線とも、実際に最も被害が多かった日比谷線と同じか、数倍の被害規模になった可能性があります。

VXについても事情は同じです。注射器で暗殺に使う。液状のものを肌に注がれてはじめて、死ぬとか重傷といった被害が出る……。純度の高いVX

押収される膨大な量の薬品

というのは、そんなやわな毒物ではありません。サリンと比べても、さらに作るのがむずかしいために純度が落ちて、こうした使い方しかできなかったのでしょう。

さて、第7サティアンと呼ばれるプラントが完成していたとしたら、一日当たり数トンの神経ガスを作れたはずです。ただし、ここでも、僕らはオウム教団の無能さに感謝せざるを得ません。オウムはこれを数億円かけて建設したけれど、しかし、ついぞまともに機能させることはできなかった。他の大量に購入した薬剤やべらぼうに高い実験装置、自動合成装置などに何億円使ったか分からないけど、それであの程度の被害しかだせなかった。

あのくらいの死者の数なら、毒ガスでも、もっとお手軽な物質がいくらでもあります。皆さんよくご存じと思いますが、「まぜたら危険」の酸素系のトイレ洗剤と塩素系の漂白剤とかを混ぜれば、塩素ガスが出ますけど、閉鎖空間だったらこれで一〜二人は死にます。

また、青酸化合物について言えば、新宿駅の最初の事件なみの分量なら、無警戒の場合には、最悪数十人の死者が出るかもしれません。なのにどうしてか知らないけれど、オウムは、生身で防護服やマスクなしで使ったら、そして純度が高ければ、加害者自身も確実に死ぬような、およそ、ゲリラ戦やテロルには不向きな神経ガスを使ったわけです。

もっとも、伝えられている情報によれば、オウム教団は神経ガス治療薬とともに、同じく膨大な量の神経ガス予防薬をためこんでいました。湾岸戦争で多国籍軍が使ったものと同じ薬剤で、これを投与すると、神経ガスとよく似た、しかし、かなり軽い症状が出るという薬で、神経ガスが入り込むのと同じところを、予防薬で占領させておき、耐性を高めようというものです。これを呑めば、致死量は十倍くらいにもなり、つまり、致死量の五〜六倍、まわりの人間がばたばた死ぬような状況でも、治療さえ受ければ助かるようになるわけで、ほぼ確実に、犯行グループは、この予防薬をあらかじめ投与しています。

青酸化合物の場合、原料もその辺の事情をよく知っている人間なら、メッキ工場あたりから容易に盗むことができます。もちろん、大学などにも実験用に常備されていますし、現にオウムの連中は化学実験用の青酸化合物を大量に購入しています。

サリンと違って、青酸は皮膚から吸収されません。適切なフィルターさえ備えた、薄いマスクでもしていれば、自分が死ぬ可能性はきわめて少ないのです。つまり、霞ヶ関サリン事件の時のように、その場で撒いてしまえばよいのです。もっとも、呼吸器の他に、青酸の吸収度が高く、保護が必要な場所が人間の体にはもうひとつあるのですが、テロルのガイドになるといけないのでここでは省略します。

ところが、それをしなかった。長官狙撃事件にも共通するんですが、異様

なまでに、その場でつかまることを恐れている。そのためでしょう、二度にわたる青酸ガス事件には、いずれも時限装置が使われていた。この時限装置が噴飯ものです。

コンドームと高濃度の硫酸溶液を使った最初の時限装置は、一見するとシンプルかつ巧妙に見えますが、作動時間の設定がむずかしい。濃すぎれば、すぐに漏れだして自分たちが危ないし、安全を期すると、今度は作動まで時間がかかりすぎて、発見される可能性が高くなる。現に、掃除の女性がみつけて、場所を動かしておいたおかげで、燃え上がりこそしたものの、青酸ガスは放出されなかったわけです。

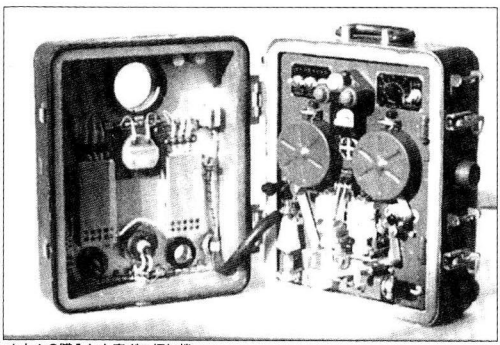
二度目の電池仕掛けですが、単3だかの電池二本、3ボルトでは、ろくなパワーは得られません。直列モーターの回転軸の先に刃物をつけたところで、プラスティックの袋をビリビリに破くどころか、途中でひっかかってしまって、ちっぽけな穴を開けるのがやっとというところでしょう。その場合には、ポタリ・ポタリと硫酸がしたたりおちて、青酸ガスの蒸気がゆっくりと発生することになるはずですから、異臭に職員あたりが気づき、最悪の場合でも死者はたかだか一人程度ですむはずです。現に、新宿の方では、硫酸は全部流れ落ちていましたが、蓄電池用の薄いものだったために、青酸ガスそのものは発生していませんでした。

現時点（七月半ば）では、まだ再度のテロの危険は去っていませんが、もし最悪の場合でも、被害は同じ程度でしょう。死者一人か二人。つらいことですが、今後ともわが日本は、常にこの程度のテロル被害は覚悟しておかなければならないのです。

しかも、対費用効率からいうと、彼らの作っていたものは、べらぼうな値段だった。

民族派の鈴木邦男さんが一九七〇年代に三一新書から『腹々時計と狼』という、東アジア反日武装戦線について扱った本を出しています。このあいだ読みなおしていて思い出しました。一九七四年の三菱重工爆破事件で使われた爆弾は、当時の物価で五千円ぐらいの原価だったんです。原材料は、塩素系の除草剤だったか窒素系の肥料だったか、今作ったとしても一万円がいいところでしょう。

かたやサリン事件の場合、死者ひとり億近い金がかかった計算になる。



オウムの購入した毒ガス探知機

第一、サリンの製法技術そのものを調達するのに、色々なデータベースを湯水のごとく使ってとんでもない金額をかけています。

化学班キャップの土屋正実が筑波の学術情報センターにある端末を使って、海外のケミカル・アブストラクツ（CA）などの網羅的なデータベースにアクセス、一回当たり六～八万円とか使って検索しまくっていたとの報道がありました。

ここで私なんかが哀れだなぁと思うのは、連中が科学エリートに落ちこぼれたばかりではなくて、オウムに入ってから以後、ネットワーク社会の発展というものからも落ちこぼれたという現実でしょう。インターネットのIDさえ取得すれば、土谷がわざわざ筑波まで出向いてやってた作業なんて、全部、自宅でできてしまう、もちろん、青山だろうが、上九一色村でもできてしまうわけです。

彼らオウムは、ここ三～四年くらいの情報化社会の発展から完全に締め出されていたのでしょう。妄想のコミュニティに入ってしまったおかげで、ヴァーチャルな部分における世界の変容にまったくついていけてなかった。だから筑波では非常に目立ったそうです。それはそうでしょう。個人の研究者で今どきそんなに金のかかることをやる人間がいるはずがない。内部の人間で作った幽霊会社で研究所を作ってインターネットを繋げるなんて、簡単にできたわけだし。

で、この他にもロシアで大量の文献を買いあさったあげくが、後からも話しますが、汚れ仕事が嫌いな連中ばかりであったために、系統的な大量生産さえできなかったわけです。理論さえ把握すれば、現場仕事なんてらくちんと、連中は思ってたんでしょうね。

松本の事件で噴霧車が使われたと聞いて、首をかしげたことがありました。たとえ純度が低いとはいえ、霞ヶ関事件の時くらいの濃さのサリンを効率的な噴霧機で散布したとするなら、はるかに大きな被害が生じたはずだからです。

この疑問は八月に入ってようやく解けました。彼らが使い、処分した噴霧装置は熱を加えてサリンを気化させるものだったのですが、この温度が高すぎて、サリンのほとんどが熱分解していたというのです。

彼らはこのドジに気がついていたのでしょうか？　気がついていたとするなら、超音波発振による霧状噴霧装置を作ろうとしていたことにもうなずける点があります。

また、一次・二次青酸事件で使われた青酸化合物とオウム購入の青酸の組成が一致、メーカーまで特定できたとの報道も後にされています。

細菌兵器

遠藤の管轄で、細菌兵器の研究棟もありましたけれど、ボツリヌス菌あたりは培養していたみたいですね。これは最近のスポーツ新聞の報道では、脱会を考えていた一般信者に食わせてい

たといいます。

この場合には、食中毒という形で、具体的な被害が出ます。

しかし、「兵器」としての使用という点からみると、ボツリヌス菌そのものだけでは、使いものになりません。

例の地下鉄での散布装置を内蔵したバッグによる予行演習については、ボツリヌス菌を混ぜろと命令を受けた信者が怖くなって止めたという話があります。しかし、ボツリヌス菌は酸素に触れると死にますから、もし空中散布したとしても、ほとんど無害です。

兵器として使うには、その毒の原因となっているボツリヌス毒素を、大量の培養菌から抽出していなくてはいけないのです。この抽出実験もオウムでは盛んに行なわれていたようですが、失敗しています。

ボツリヌス菌毒素兵器は第二次世界対戦中にナチスドイツが使うのではないかと恐れられていたけれど、実際には使われませんでした。その原因としてはいろいろ考えられていますが、一番大きな要因として、ボツリヌス菌毒素の不安定さがあります。この毒素は蛋白毒で、分子量12000。ちょっとした衝撃、たとえば、乳鉢でする程度で、また、乾燥のために与えたわずかな熱で分解してしまうのです。

毒素兵器にはもっと単純な構造で扱いやすいものもあるのに、なぜボツリヌスなのか？　サリンやVXなどと同様、麻原のにわか勉強で、とにかく目立つ、米ソが注目する最高級品だったからでしょう。

とにかく、彼らは毒ガスにせよ生物兵器にしろ、いきなり世界の一流品、米ソの国家レベルあたりでようやく作れるかという代物に手をつけようとするのです。それこそ五千円で爆弾が作れるのに、あるいはもっと安上がりで同じくらいの被害を生む毒物があるのに、いきなりそちらに飛躍してしまう。経済の問題が抜けているのです。

亀戸道場での悪臭事件は培養した炭疽菌をばらまいたものという報道がなされましたが、この「菌」のもととなった培養基は、おそらく腐ってます。

炭疽菌はきわめてたちのわるい病原菌であると同時に、胞子の状態では土壌中で半永久的に生き残ることができます。二次大戦中、英国では、米国との協力のもとで、無人島での炭疽菌爆弾の爆発散布実験を行ないましたが、この島はその後、永久的な立ち入り禁止地区となりました。

一九八〇年代の末、英国の反体制を称するグループが、この島の土壌を政府の官庁街のどまんなかに放置するというパフォーマンスに出ました。これを機会に島の土壌の再調査を行なったところでは、ヘクタール以上の面積の地域がいまだに炭疽菌で汚染されていました。

もしも亀戸で本当に、生きた炭疽菌、あるいは胞子状の炭疽菌をばらまいたとしたら、短期的に死者が発生するばかりでなく、あの建物一帯はへたをすると人が住めない状態になっていたかもしれません。

少なくとも、こと亀戸に関しては、満足な培養ができなかった、雑菌で汚染されて、炭疽菌は死んでしまった、と見ていいんじゃないでしょうか。

ただし、上九一色村について言えば、遠藤の研究棟の周辺などが炭疽菌に汚染されている可能性は否定しきれないと思います。国立予防衛生研あたりによる調査ってのは行なわれているんでしょうか、心配です。

狙撃事件、銃器の生産

例えば、これもまだ犯人が確定していませんが、国松警視庁長官の狙撃事件においても同様のことがいえます。あれも当初、プロのテロリストの仕業だという意見がありましたが、そう吹聴していた人がそもそも「パニック屋」さんですね。

以下は、ガン・マニアの中でも原稿などで稼いでいる、つまりは商売の域に達している人間たちに確認した情報です。

まず第一に、あの手のテロでハンドガン、ピストルは使いません。『ゴルゴ13』的な遠距離からの狙撃というのは、今現在ほとんど行なわれていません。プロのテロリスト集団だとしたら、最近の流行りでいえば、何といってもプラスティック爆弾を使用するはずです。爆弾を使ってあの現場なら、ビルとビルの空間すべてを長官ならびにその車ごと木端微塵にしてしまう。

仮に狙撃で仕留めるにしても、狙撃用ライフルを使ってかなり遠くからやります。さらにあの銃、精密照準ができるリヴォルバーのハンド・ガンしか使う道具がないとしたら、物陰に隠れて撃つ必要はありません。トコトコトコと歩いていって、あの半分の距離、十メートルまで行けば、あのくらいの射撃の腕なら一発で頭を打ち抜くことができます。

ちなみに射撃の腕前にしても、上手いといっても、海外の合法的な訓練場で、短い人なら一週間、長い人でも二週間もじっくり練習すれば、あのレベルにはなれます。ただし自衛隊に一～二年いたところで、実弾はなかなか撃たせてもらえませんけどね。

近距離に行って頭を打ち抜いたあとで、秘書、運転手を殺します。ちょっと遠くにいた警察官などは身体にさえ弾を当てればもう動けなくなるわけで、逆にそれをやらなかったってことは、本署通報までの貴重なタイム・ラグを、犯人はみずから放棄したわけです。

自転車で逃亡したことひとつとっても素人考えで、通勤通学の自転車の群れに紛れ込もうとしたのでしょうが、雨が降る可能性を考えていない。プロであったら逃走にはオートバイを使うはずです。交通渋滞の影響を受けにくいですからね。

だから結論としては、ある程度の中途半端な知識と腕前をもっているけれど、アマチュアで『ゴルゴ13』気取りの犯人像というのが思い浮かびます。

また、彼らオウムの連中は、AK74自動小銃を量産しようと企んでいた。それも、NCの工作機械あたりに本物の部品の形状を覚えさせ、どうやら、削り出しで作っていたらしい。しかし、この銃、組みあがっても多分弾は出るでしょうけれど、連射ができる保証はまったくない。

事実、実際に押収された試作銃は、報道をよく読むと、連射はできなかったようです。

なぜか？　もともとAKという銃は同じ工場の同じロットで出された銃同士の間でも部品の交換ができないんです。あの国は、その程度の生産管理能力もないんです。結局、やすりなどをかけて調節しながら組み上げてゆくんです。最後の工程は職人仕事まかせなんです。

そのうえこの話を聞いてガンマニアあたりが大笑いしていたのが、出来上がった模造品を見て、麻原こと松本智津夫が「ウン、よくできた。次は弾だな」といったという。

74の弾は特殊なもので、日本国内で入手できない代物です。しかも、弾の薬莢という部分は、プレスの搾り出しという加工を必要とするので、作るのが難しい。これまた、現場のカンを有する熟練労働者、つまり職人が必要とされる。

ところが彼らはそれに必要な加工技術については、村井の名義で通信講座を取ろうとしていた（笑）。通信教育ですませて、あとはマニュアル通りにすれば、簡単にできると思っていた。やすりがけのような現場の職人仕事の部分をいっさい飛び越して、参考書さえ見れば分かると思っていたわけです。

ここで気付かされるのが、連中には工学系が多いと言われていますが、意外にも、機械工学系が少ない。というか、生の機械や金属と向き合うような、まず汚れ仕事からおぼえなくちゃいけない学科の出身というのがほとんどいないんです。コンピュータを駆使するようなきれいな工科系ですね。

その後の報道によれば、オウムの連中は、AKの模造品を、最初は、本物のAKの部品を砂型というもので型をとって、鋳物として作ろうとしていたということです。報道の通り、この方法では誤差が大きくなりすぎるのですが、そればかりでなく、できあがった鋳造品は、熱がさめた時には、本物より一回り小さくなっています。で、この縮小率は、部品の大きさや容積で変わってくる。つまり、実物より小さい上にうまく組みあがらないのです。

さらに、鋳物は脆いので、強い力や衝撃がかかる部品には使えません。

彼らは、半分に切って持ち込んだ銃身も鋳造で模造しようとしたそうですが、正気の沙汰ではありませんね。

大型ヘリ、飛行船、ラジコンヘリ、散布車

以前に無人飛行船を購入してきて、上九一色で飛ばそうとして失敗した写真がでてきましたよね。あれはよく宣伝用に使われているもので、航空法に触れない高度にとどまって飛行し、ビラを撒いたりするんです。沢山の物資は運べませんし、風に流されるのでしょっちゅう電線に引っ掛かる事故を引き起こしています。風を見ることもできない人間が、ほとんど風まかせの無人飛行船を飛ばそうとしたら、実際そうなったように、木の枝などに引っ掛って一回でパンク、破裂ですね。

彼らの計画の中には大型ヘリコプターによる毒ガスの散布というのもありましたが、勝手に購入し輸入してきた場合、あとで運輸省に申請しても絶対に型式認知されないということを、知らなかったようです。製造元と交わした書類がなければ、もともと飛べなかった。そのあたりも体制側に妨害されたとか『ほふられた小羊』の中でも述べたてますが、要するに肝心かなめの必要な手続きさえ、ちゃんと調べていなかった。

オウムの中でも世間知は一番という評判の早川でさえも、この程度のいい加減さなんです。

それに購入したヘリですけど、一機だけですよね。例えば部品の交換ってことを、オウムの連中は何も考えていなかった。ネジひとつだって、日本とは規格が違います。

以前、イランのアメリカ大使館が原理派に占拠されて、アメリカ人が人質になるという事件がありました。ホメイニを長とする国家テロルですね。この時、アメリカは特殊部隊を導入、人質の強硬奪回作戦を実行しましたが、移動に使ったヘリが砂漠で立ち往生して大失敗に終わってしまった。事後に

おこなわれた詳しい分析によると、使ったヘリは、予想される作戦の持続時間の間には必ず、飛行に支障が及ぶような故障にみまわれることが判明しました。十何時間だったか、二十何時間だったかの飛行後には、必ず、どこかに交換しなければ飛べなくなる部品が出てくるんです。

もし、とりあえずにでも、一機のヘリをある期間、順調に運用したいんであれば、オウムの連中は少なくとも三機のヘリを購入し、足りなくなった部品を予備の機体から流用する、現場ではカニバリズム、つまり共食いと呼ばれる方法をとらなければならなかったんです。この場合、二機ですと、偶然が重なって、あっという間に使えなくなる可能性があります。

ヘリコプターの操縦にかんしては、早川や岐部あたりがロシアに行って訓練を受けていますけれど、四五時間程度の飛行訓練で大型ヘリを飛ばすというのははっきりいって無謀です。

また、最終的には、大型の農薬散布用のラジコンヘリをも使用しようとしてましたけど、あれは実機よりも操縦が難しい。自分が乗っているわけではないから、見た目でバランスや方向をチェックしなくてはいけないわけです。しかも、無線操縦では、そうした様子を、はっきりと見てとれる近距離からしか操縦できない。実のところ、彼らのもくろんでいいたようなテロ行為には不向きなシステムなんです。

実際に使おうとしたとしても、これは実機にも共通するんですが、いきなり、最もむずかしい空中停止――ホバリングに挑戦し、地面効果（ＧＥ）ってのにひっかかって横すべりして横転、おっこちるか、あるいは電線や高圧線にひっかかって墜落というのがオチだったでしょうね。

戦車や潜水艦、これも問題外です。ヘリコプターが一機だけでは運用できないように、いや、それ以上に、戦車や潜水艦の運用には、膨大な支援設備、支援要員が必要とされます。プロトン・ロケットとなると、支援設備だけで何兆円以上の経費と、全世界に配備される数千あるいは一万以上の要員が必要となります。一体、そんなもの、どこから調達するつもりだったんでしょうね。

レーザー兵器

レーザー車を作っていたという話もありましたけれど、これも既成のものを買ってきて、よせ集めただけだったようです。

報道された内容だけでは、本来何用のレーザーなのか、ピントと照準あわせに使う光学系も何用を転用したのかは読みとれません。工業用レーザーなのか、それとも、光学系もろとも、高層大気の遠隔測定用のレーザー・レーダー（ＬＩＤＡＲ）あたりを転用したのか、どっちなのかはわかりませんが、まず実用にはならなかったでしょう。

レーザーは通信とか至近距離、数ミリとか数センチの距離からの加工や熔接とかで使いますけれど、遠方のもの

を破壊する兵器としては非常に効率が悪いんです。SDI、戦略防衛構想の中の一連の話の中にも出てくるのですが、実はミサイルというのは側面の部分がそのまま燃料タンクの壁面になっている。すごく薄い金属壁で覆われているだけの弱い構造なんです。だから、そこに穴を空けてしまえば燃料は勝手に噴出してしまい、途端に軌道を変えてしまう。

ところが、充分な弾道速度が得られてしまうと、この脆弱な燃料タンクは、エンジンもろとも、核爆弾を搭載した弾頭から切り離されてしまう。ちょうど、弾道軌道の頂点あたりでのことです。この核弾頭は、その後、大気圏に突入、標的の至近距離で爆発するわけですが、核弾頭だけになってしまうと、余分な熱も発生しないし、大きさも小さいし、おまけにレーザーなどに対しても、燃料タンクほどには脆弱ではないのです。

そこで生まれたのが、上昇中のミサイルを宇宙から、レーザーなどで迎撃しようという発想だったわけです。

ところがこのあたりの実験をしても、数百メートルのごく近い距離から燃料タンクを爆発させた程度の成果しか、アメリカでもあげられていません。それを考えれば、本当の意味で兵器として役に立つものはできていません。

実際に彼らがレーザー搭載車をテロルに投入したとしても、車を止めてから発射できるまでには最低でも数分はかかるでしょうし、戦果といったらガラスが割れるとか、服が焦げる、運が悪ければ目が見えなくなるといった程度でしょう。

パルス発振という方法を使えば、小口径の砲弾程度の威力は得られるでしょうが、この場合には、瞬時におそう超高温の熱負荷に、光学系が耐えられないでしょうし、もし耐えられたとしても、次の発振までには冷却の時間がかなり必要になるはずです。

熱負荷の問題は、連続発振の場合も同じで、作戦の様相はというと、まるで『宇宙戦艦ヤマト』の波動砲発射の光景みたいなものになっていたはずでしょうね。もっとも、搭載車から油圧仕掛けで砲身だか、パラボラ・ミラーだかが現れ、エンジン全開、発電・蓄電装置がうなりをあげ、ワンダバ・ワンダバ、エネルギー充填率がどうしたと連中が盛り上がっている間に、パトカーか機動隊がかけつけないはずはないと思いますけどね。

爆弾・毒ガスマニュアル

都庁の爆弾事件は彼らにしてみれば水際立っているやり口なので、へぇーと関心したんです。だけど辞書を引きながらでも英語が読める人間でしたら、あの程度の爆弾の作り方は向こうの兵器マニア向けの参考書などに、いくらでも出てきます。サリンの製法が書かれた本と同じように、向こうの危ない本専門の通信販売会社からなら、誰でも入手できます。報道でも問題となった、サリンの作り方ガイド書を発売している通販屋では、つい最近、インタ

ーネットでの販売を始めたということです。クレジット・カードさえあれば、インターネットにアクセスさえできれば、あとは航空宅配便で、ほんの数日で、そんな危ないガイド書が手に入る、そんな時代に僕らは住んでいるんですね。

アメリカで連邦ビルを爆破した犯人たちは、ディーゼル油と窒素系の肥料だけで、あれだけのことをしでかしたわけで、これも作成ガイド、何と農務省が悪用防止のために作成した文献が、インターネットを通じて、フルテキストの形で入手できるらしい。それに比べれば、オウムなんてまだ可愛いものですよね。

日本国内でも、昨年あたりにアメリカから仕入れたものを、上前はねて通販ビジネスにしようと企んでいた人がいましたけれど、警察の捜索を受けて「サリンの作り方」あたりの本は押収されました。また、某ターミナル駅近くの有名な軍装品専門店なんかには、「手作りのナパーム爆弾」とか、「ナイフでの人の殺し方」とか、そういったぶっそうな本が、幅一メートルちょいの本棚の天井からくるぶしの平積み状態まで、今でもぎっしり並んでいます。危ないです。はっきり言って。

晴海で開催されたコミック同人誌の即売市で売られていた、別件で発行者が逮捕された『魔法使いサリン』は、さっき触れた英文のガイド書の翻訳で、まだ直接にチェックはしていないのですが、間違いだらけの翻訳だったようです。

おまけに、問題のサリンの章で原著が紹介している作り方のうちで、二つの直前物質については、市販のものを使えと指定してある。ところが、このうち、ひとつは『みどりの刺青』（ジョン・アボット著・福武書店）というサスペンスで紹介されたため、アメリカでも数年前から市場に流通されなくなった、日本でも入手できないんです。また、もうひとつの方は遺伝子工学で試薬として使われるんですが、流通の量が圧倒的に少なくて、せいぜいのところ、数十グラムくらいしか入手できない。

さらに、原著ではホスゲンを原料にする方法も紹介しています。ドイツが最初にサリンを作った時のやりかたですね。ところが、この同人誌の場合、そのホスゲンの作り方の章は翻訳していないようなんですね。

つまり、役に立たないんです。

しかも、オウムの連中は別の方式、ソ連方式を採用していた。

発行者のK君ってのは、左翼オタクで、これ以前には『逮捕の手引き』といった同人誌も出していたってことです。ところが、NTカッターを持っていたという別件で逮捕されて、家宅捜索を受けたらハルシオンが出てきて、おまけに聞かれてもいないのに、以前にLSDをやったことがあるとげろってしまった。

いくら左翼を気取ってみたところで、オタクはオタク、自分のしたことを人に自慢したくてしかたないんですね。

まあ、警察も化学知識が足りないか

ら、K君の翻訳の危険度というか、無害度も判定できずに、オウムの連中のガイド書とはなりえないにもかかわらず、かなり強引な逮捕劇を演じてしまったわけです。情けない話なんですが、K君ってのは、オウムのレベルにさえ達していなかったわけです。

今、化学兵器に関する本の改訂版を企画進行中なんですが、作り方のガイドになりそうな箇所が含まれる専門書はすべて、編集担当の会社の鍵のかかるところに保管してあります。テロリスト志望の連中の手に入っちゃことですし、もうありえませんが、別件でつかまってしまっては、しゃれになりませんからね。

オウムのトランスを科学する

PSI

PSI（Perfect Servation Initiation）はいくつものレベルで役に立ちません。そもそも構造は脳波の測定器で、テレビでも専門家がレポートしていましたけど、だいたい四〜五万円程度の機器ではないかと思います。それを一時期買い取り一千万円とかべらぼうな値段をつけていましたよね。ただし最近では、出家者にはタダみたなことになっていたみたいですけど。それで、莫大な資金を集められたから、あれを開発した功績で村井は幹部に抜擢された。日大あたりのドラッグ万歳学者がよいしょしてる、シンクロエナジャイなんとかという瞑想マシンなんかより、商品としてみれば、ずっと成績がよかったわけですね。

脳波の測定器なら計測データが流れてくるところ、腰の部分に電源とRAMがあって、そこに尊師の脳波と称せられるものを貯蔵しているわけです。

まず基本的に間違っているのは、脳波というのは思考活動が電気化されたものでも、脳の神経活動を測定したものでもない。脳があって硬膜があって頭蓋骨があって、そのあいまあいまに漿液があって、皮膚がある。こうした何重にも存在する障壁をこえて伝わってくる、脳の電気的活動の痕跡を、皮膚の電位の変動として読み取ったものが、いわゆる「脳波」なんですね。

逆に、この障壁をこえて、何らかの信号を脳内に送り込むことは、こちらはきわめて難しい。電流を流すだけでは駄目なんです。というのは、神経の電気的活動というのは、通常の「電流」とは異なるんですね。局所的な電気インパルスが移動するため、通常の電流に比べるときわめて遅い。こういった理由から、単に電流を流すだけでは、情報を脳に送り込むことは不可能なん

オウムのシールドルーム（?!）

です。

「脳波」というのは、だから、脳神経の電気的活動のおぼろげなエコーにすぎないんです。しかもあちこちで鳴っているものを全部いっしょに聞いている。いわば秋吉台の鍾乳洞の一番奥のホールでオーケストラが演奏していて、ジグザグに回り込んでいった音を出口から何百メートルも離れたところで聴いているようなものです。

だからそれ自身は、神経の思考活動を指し示してはいない。ただしそのかわり、この人は寝ている最中だなとか、夢を見ているなとか、その程度のことはわかるんです。だから、尊師の脳波を受信して云々がつまり、彼の思考を受信してということにはまったくならない。

彼らの文献の中で、麻原こと松本智津夫の脳波はフラットであるというふうに書いてあったと記憶していますが、だったら、PSIのRAMに入っているのは、あれは何なんでしょうね。

連中の機械にあった麻原の脳波の波形も、専門家に言わせると変だとのことです。変だと言っても、それは計測の仕方が間違っているから。きちんとした部位で計測しないと、正確な情報はわからない。で、その不完全な「脳波」をRAMに記録して直流の電流の形で送っているらしい。瞑想時には9ボルト、腰装着時には6ボルト、子供の場合は3～4ボルト。ところが瞑想時と称される9ボルトというのは、かなり危ない数値です。「痛かった」という声もかなりあったようですが、痛いどころか、直流電流が強すぎるので、子供とかに9ボルトの電流を流したら、脳に障害が起こりかねない。そこまで強い刺激ではなくても、低温やけどの危険は高いです。現に、電極をつけていた場所すべてに絆そうこうが貼られている信者の姿をテレビで僕も目撃しています。

さらに驚くべきことには、PSIは、計測した尊師の脳波と同じ信号を送っているのではありません。計測された信号は、モデムを使ってアナログ・データをデジタル信号に変換したうえでRAMに記録されるわけですけど、それを逆に送信する時には、またアナログのゆるやかなウェィヴに変換し直さなくてはならない。だけどあの器械にはモデムは付いていないのでデジタル信号しか送れていない。

無茶苦茶ですね。デタラメです。

だから針でつつくような痛みしか感じられなかった。集金手段、つまり商品としては有用だったのでしょうけれど、マシンとしては何の役にも立たないばかりか、身体に危険ですらある。

じゃあ、脳の神経活動を直接読み取る装置とか、脳の神経の電気活動を人為的に誘発する装置とかってのがあるかっていうと、これは実在します。

イルカの実験で有名なジョン・C・リリーは、イルカの脳に直接、電極を差し込んでいます。神経活動、神経細胞内の電気インパルスを、ピンポイントでですけど、直接読み取ったり、誘発したりするわけです。このあたりの実験は六〇年代にだいぶ流行ったんで

すけど、その後は鎮静化してしまった。

ただし非破壊的に脳の神経活動を直接記録する方法はまだあります。SQUID（超伝導量子干渉計）と呼ばれる装置です。超伝導現象を使って、量子1コ分くらいの微妙な磁場の変動を検出する装置で、これは既に実用化されています。例えば心筋梗塞の原因となる、神経信号の異常を電極をささずに直接測定したり、脳神経のどんな器質障害からてんかんの発作が起きるかを手術せずに外側から調べたりするんです。

映画『JM』の原作にもなったウィリアム・ギブスンの「記憶屋ジョニー」という短編の中にも、この装置は登場していました。

また、頭部の皮膚に電流を流すのではなく、強力な電磁パルス（EMP）を近くで発生させ、非接触的に神経インパルスを誘発するという研究も行なわれています。ギブスンの最新長編『ヴァーチャル・ライト』の「虚構の光」というタイトルは、EMIを使った現実に存在する人工視覚装置構想からとったものです。

ただし、特定の神経部位をねらうという、つまり、焦点あわせがきわめてむずかしい。この難点の克服というのが、今後の課題ですね。

また、アメリカの軍関係では、通常爆薬をエネルギー源とするEMP弾で、人間の意識を一時的に喪失させるという兵器の基礎研究を進めています。

オウムの連中が夢見ていたのは、こうした魔法の道具だったんでしょうが、現実にできたのは、役にもたたないPSIであり、あるいは、精神病治療用の電気ショック装置とか、きわめて強い向精神薬、つまりドラッグだったわけです。つい先日、スポーツ紙に報道されたところによれば、連中はロボミーらしき手術まで行なっていたと言います。

まさにオタク版『夜と霧』ですね。

ドラッグと超越体験

薬物にかんしては、ここ二年くらい、ちょうどおとしの暮れから去年のはじめにかけて本格的に製造し始めたみたいですね。

薬物と超越体験の関係で思いだすのが、在家のオウム信者で東京大学の文化人類学者の坂元新之輔です。彼は「オウムというのは、超越的な体験を再現可能な技術として一〇〇%可能にした世界史上初めての宗教だ」と言ってます。それでも人類学者か、と私はいいたいですね。

なぜならば、瞑想的なものや超越的な状態に価値を置く宗教は例外なく、超越体験のための再現性ある技術の体系だからです。坐禅にせよヒンズーの苦行、あるいはコカや神のキノコ、ハシシのような薬物を使う場合も、時間こそかかっても確実に超越体験をもたらすような技術大系があるからこそ、宗教として成立しているわけです。

それをたまたま自分がハイになっただけで勘違いしている。苦行の場合やスポーツ選手でもハイになると、幻覚剤類似の物質が血中に得られるわけなのにね。

またこれはカウンターカルチャー系列の人物に聞いた意見でもあるのですが、オウムの薬剤にかんしていうと、世間的に何からのプラスのイメージをもたれている薬物がほとんどない、あえていえばLSDぐらいだと。つまり伝統的に使われているコカでもない、神のキノコでもない、ハシシでもない。

覚醒剤とかそういうものが多いから、ドラッグカルチャーに好意的な人間でもマイナスなイメージしか持たないようですね。そういうものしか手に入れられない／作れなかったということもあるでしょうが、実はそれは、オウムにとって何のための超越体験、何のための幻覚なのか、という問題にかかわってきます。

そもそもヨーガの場合でも半年から一年とか修行やっていれば、ある程度のハイは得られ、しかも自分自身でコントロールできます。そのうえで出家させるというパターンで、当初はお金を集めていたんでしょうけど、それでは時間がかかる。そこで自前の薬物を使い始めた。まだかなり不明な部分もありますけれど、彼らの使っていた薬物というのは、今までわかっている範囲でいえば、催眠剤や、これよりも強い、自白剤として使っていたとおぼしきペントタールなどのバルビツール系の麻酔薬、アンフェタミンなどの覚醒剤、それから幻覚剤ですね。

催眠剤や麻酔剤を使って、半覚醒状態にしておくと、自白剤として使えるんです。つまり、「自白剤」という専用の薬なんかないんです。しかも、ペンタトールなどでは、半覚醒状態で色々と訊問すると、その状態で自分が見聞きし喋ったことなどについて、醒めた時には、その記憶が無くなってしまう。つまり訊問されたということを忘れてしまうため、重宝されているらしいですね。とにかく幻覚剤よりも催眠剤や覚醒剤系列の方が製造するのに手っ取り早かったので、量が多かったのだと思います。

オウムにまつわる薬物関係の使用法を見てみると「恐怖」、とくに死にたいする恐怖、次の生まれ変わりにたいする恐怖を徹底的に植え付けて、教祖への奴隷的な従属を強制しようという発想が目立ちます。

一連のマイナス・イメージの薬というのは、バッドトリップ的な効果の方が大きいから、そういう捉えられ方をするわけです。だからこそのマイナス・イメージでもあるんですね。恐怖体験やフラッシュバックを頻発させるような発想でしか、彼らは薬を使ってない。これはドラッグ・カルチャーの根本やヒッピー文化の発想とは全く正反対です。

逆にマンソン・ファミリーあたりとまったく同じで、恐怖から教祖に絶対的な従属を強いるという形式において、カルトというのは一見カウンターカルチャー的ないい加減な集団と似ている

ように思えるけど、実際は逆なんですね。そしてありとあらゆる超越体験的な宗教の目指しているものとも正反対です。そういう流れからいえば、完全に邪道、邪教ですね。

オウムの戦略・兵器を科学する
②（効力の認められないもの）

妄想兵器その1：プラズマ兵器

つぎに素性の怪しい、実効力があるとは思えない奇想天外なものを検証していきます。

プラズマ兵器というのはそもそも、ニコラ・テスラという科学者の「殺人光線」にルーツを有しています。

テスラはユーゴ出身、正確にはクロアチア生まれのセルビア人で、のちにアメリカに渡ってエジソンのもとで働いてすぐに喧嘩別れして、交流方式のモーターや発電システムの基本を確立した人です。ところが彼は晩年、二十世紀前後のあたりからおかしくなった。

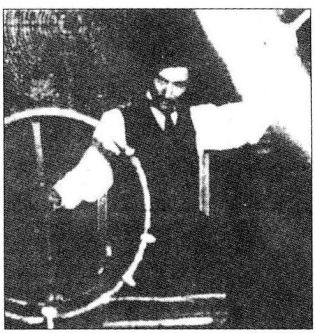
これについては、朝日新聞社刊、「科学朝日」編『科学史の事件簿』に「交流発電の父の没落――ニコラ・テスラ」と題した拙文をよせていますので、一読願います。

彼は一八九〇年頃から、無線交信の実験を始めたんですが、究極の目的は信号の伝達ではなくて、エネルギーの伝送でした。これが、途中から、地球そのものが持っている、無限に近いエネルギーを取り出すという発想に変わっていった。

望みの場所、望みの空間に、超高密度のエネルギーを送りこむことができる。アンテナを使って、電源とすることもできますが、別の言い方をすれば、任意の場所に破壊的な火の玉を発生させられるわけです。

つまり、殺人光線です。

テスラの発想の背景にある世界観というのは、現在の目から見ると異様なものでした。彼に言わせれば、地球そのものが一種の電気を帯びた球体で、大気の外側の宇宙空間すべては電気を帯びたような、それこそプラズマみたいな状態になっている。その間、地表とか大気圏とかは絶縁体で中和状態にある。


ニコラ・テスラ

その上空の境界として、現在、存在が知られている電離層とかバン・アレン帯に似たものを考えていたわけです。

この時に宇宙空間の電気を帯びた層とこちらの層との間の境界層で、振動が起きます。地球の電離層あたりをぐるっと回る波ができていく。その波というのは定在波といって、ロープの片隅を棒や壁に固定して、こういうふうに振ると波が止っているように見えま

すけど、ああいう格好で、定位置で振動しています。その定在波というのは壊れます。自然にであれ、人工的にであれ、壊れることがある。その際、定在波の波の高さの分だけの過剰な電気が生じます。その安定が破られた結果、起きるのが雷というものだというふうに、彼は信じていたわけです。理工系ならなるほどと手を打つところでしょうが、一九六〇年頃に発見されたレーザー現象ときわめてよく似た作動原理です。ここで、ちょっとした力をかけて、この波をうまく刺激してやれば、任意の場所にエネルギーを集中させ、火の玉を作ることができる。これがいわゆるニコラ・テスラの殺人光線です。

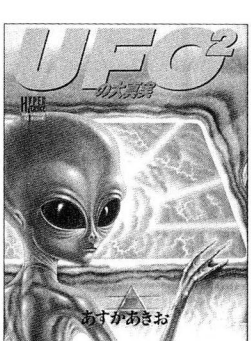
発想としては実に面白い。ただし、惜しむらくは、そんな都合のよい波は存在しなかったってことでしょうかね。

のちに一九七〇年代の後半あたりにアメリカのオカルティストあたりがスカラー兵器という名前で、この殺人光線に関する疑似理論をぶちあげました。その当時、旧ソ連でビーム兵器が開発されているという噂が流れて、のちにアメリカがSDI、戦略防衛構想などのレーザー兵器や核兵器を研究開発する時の引き金になった事件がありました。後になってからわかったことですが、荷電粒子ビーム兵器というのは、物理的には可能だけれども、実際に作ってみると、大気中で使いものにならないとわかりました。で、アメリカではレーザーなどの別方式によるミサイル防御へと方針転換していった。

ところが、スカラー兵器論者によると、これは粒子ビームでもレーザーでもなく、ソ連が戦後、テスラの故郷であるユーゴスラヴィア経由で手に入れた、「殺人光線」そのものだというのです。もちろん、テスラが言っていたことと、彼らの「理論」ってのは、根本的に異なります。そういったことを主張する人が一九七〇年代の末に出てきたわけです。

で、これをそのままパクって、あすかあきお（飛鳥昭雄）というオカルト・ライターがでっちあげたのが、彼の『UFOの大真実』という本にでてくるプラズナー兵器というものだったわけです。

彼の本に出てくるオカルト・ネタは全部、原型が別にあります。既存のネタを組み合わせて、結果オリジナルという形で提出しているわけで、つまり、矢追純一さんと同じたぐいの確信犯的



オカルト屋さんですね。ウソだろうといわれたら、だってネタはこっちにあるんだもんといって逃げられる。だから、確信犯「的」ではあっても、確信「犯」ではない。ずるいやりかたですけど、でも、うまいですよね。体裁としてはオリジナルとして提出しているけれど、抜け道はちゃんと準備されているわけです。

さらにこれにのってくれたのが、ミステリー・サークルはプラズマでできているんだとか言ってる早稲田の物理の教授さんですね。彼は最近、ミステリー・サークルばかりじゃなくて、どんな異常現象もプラズマだと、人間焼失からキャトル・ミューティレーションまでプラズマのせいだと言いはじめている。

ミステリー・サークルに関して言えば、現在ではすべてがイタズラだったことが証明されています。英国でミステリー・サークルを一番最初に作った、つまり、それ以前には存在しなかったミステリー・サークルの発明者自身が、犯人だということを告白し、作り方まで説明しているんです。ところが、この教授さんは、そういった事実を認めもしないで、すべてはプラズマだといっている。

オウムは、こうした妄想を、オカルト出版マーケットを通じて、あすかあきおの本だとか『ムー』だとかといった雑誌とかを通して、そのまま素直にとりこんでいます。一オカルト・ライターが商売で流した妄想を、マスターだか博士だかが本気で研究していたわけです。つまり、オウムは、オカルト・マーケットの一消費者だったわけです。

あっと、思い出しました。オウムではSDIがらみでアメリカで研究されている電磁砲、レール・ガンというシステムを試作していたようですが、これ、弾丸はプラズマの圧力で飛ぶんですよね。もっとも、オウムの工房での製造精度からすると、まず、まともに稼動したはずはないし、その場合も、得られた射出速度は、通常の銃弾にも劣っていたでしょうね。本来、レール・ガンは、火薬を用いた兵器では不可能な高速で弾を発射できるのがウリのはずなんですがね。

それから、レール・ガンではバレル（銃身・砲身）に相当するレール部分は原則として使い捨てです。オウムはこの難問をどう解決するつもりだったんでしょうか？

その後の報道によれば、オウムのレール・ガンは、発射実験で秒速二六〇〇だか二八〇〇メートルを記録したそうです。ハンドガン、ピストルの弾以下ですね。使い物になりません。

妄想兵器その2：地震兵器

次に地震兵器について。

ものには固有振動というものがあります。これまたテスラがアメリカで研究していた頃に、物理的振動にも関心を持っていて、ちょうどその頃行なわれ始めた、鉄骨方式によるビルディングに小型のヴァイブレーターを使って

実験していた。

有名な話で、タコマの橋という吊り橋がありまして、それが風で固有振動を発生したせいでブツンと落っこちる。建築工学や強度工学の世界では有名なフィルムが実際にあります。さらに昔だと、ヨーロッパのほうで軍隊がザッザッザッと行進してたら固有振動数になってしまって橋が落ちたりした。

現在は原発でも何でも、そういう固有振動や固有の周波数を散らして、いかに危険を避けるかというのが、建築や土木関係では非常に重要な事項ですが、そこらへんの解釈のまさに〝はしり〟みたいなことで、振動数を色々変えながら鉄骨のほうを揺らしていったら、あたりがゆっさゆっさと揺れ始めたという。

ニコラ・テスラという人は、基本的にはマスコミ向けに喋って自分の発明を売り込んでゆくタイプの発明家ですから、そこで地球の固有周波数……二時間何分くらいだったと思いますが……そのくらいの数値でうまく振動させれば、地球を真っ二つにすることだって可能だ、と豪語したわけです。これがいわゆる地震兵器のもともとですね。どうも地震兵器に関しては、ニコラ・テスラの伝説に尾ひれがついて、冷戦時代のソ連内部で実際にそういう兵器が開発されたという噂が、それこそ都市伝説みたいに流れたんだと思います。そのあたりの情報を、あすかあきお経由で、そのままオウムが取り込んでいるわけです。これがプラズマ兵器や地震兵器とか騒がれていたものの正体です。

ちなみに先ほど言ったことを補足しますと、テスラが死んだ時にデスマスクを取ったのがヒューゴー・ガーンズバックという、世界で最初のSF専門誌を作った人です。晩年のテスラというのは、毎年誕生日になるとマスコミを呼び集めて「殺人兵器が完成目前だ！」とか妄想を並べたてるわけですよ。それが三面記事あたりのネタになっていたわけです。

では、なぜ、テスラはそうした方向に行ってしまったのか？

テスラが袋小路に迷いこんでしまった一八九〇～一九〇〇年代というのは、アインシュタインの相対性原理から始まって、量子力学まで含めたいわゆる現代物理学が完了する時期なんです。実はこの時期には、多くの物理学者……つまりエーテル宇宙論の時代の人達が、革新時代に入って落ちこぼれているんです。

物理学のありかたがこの頃にガラリと変わった。しかし、それについていけない一線級の物理学者が、相対性理論は間違っているとか、量子論はおかしいとか、必死で言ってたりしたんですね。

一八九〇年代あたりまでは、実は、今言ったテスラの理論も、純然たる仮説としては妥当性があった。ところが新時代の宇宙観、世界観、物理観みたいなものが確立された時、その時に彼らは落ちこぼれていった。中身は一緒でも一八八〇年代にそういう理論を唱えるのと、九〇年代初め頃に唱えるの

と、二〇世紀に入ってもなお言いはっているのでは全く意味が違ってくる。ニコラ・テスラ自身が、物理界の現実の変化に落ちこぼれて、妄想の世界に逃げ込んでいった人だったので、オカルト雑誌に近かった当時の大衆向け科学雑誌あたりで珍重されたわけです。

そうした落ちこぼれゆえの妄説が、一世紀近くをへて確信犯的なオカルト屋さんと、まさにテスラ的マッド・サイエンティストであるプラズマ教授を媒介とし、オカルト出版マーケットやテレビ・ジャーナリズムを通じて、オウムの内部へと取り込まれていったわけですね。

結局テスラは、第二次世界大戦の末期頃、たったひとりで死んだわけですけど、その時にテスラの遺産や研究の成果を親戚が引き取ろうとした。アメリカにいた甥が引き取ろうとしたら、FBIの末端の捜査員が横槍をかけたんです。後に残された書類だとか論文だとかを一時的に押収する形で、その中身の検討をプロの物理学者に頼んだんです。要するにテスラの研究成果が外国に渡っては困る、国家にとって重要な情報が含まれているのではないか、と考えたのですね。

それで相談を受けた高名な物理学者は、まったく問題外だと回答しました。このFBI職員はともかく、物理学者の方は、なぜ、FBIが物理学の成果の海外流出に危機感を抱いていたのは知っていたはずです。

なぜFBIの人間がそれだけ神経質になっていたか？

マンハッタン計画。原爆の開発計画が当時進みつつあったのです。

もちろん、計画の存在を、末端のFBIの捜査官が知らされているはずはありません。物理学、軍事情報、外国への流出の阻止……。なるほど神経質になるはずです。

さらに戦後になってから、テスラの遺物を、甥がユーゴへ運ぼうとしたところでも、外国人財産管理局から横槍が入りました。テスラは外国人ではなく、とっくにアメリカの市民権を得ていたにもかかわらずです。

これは理由は簡単です。甥は当時アメリカにあったユーゴスラビア亡命政権の幹部だったんです。ところが今言ったようにテスラはクロアチア生まれのセルビア人ですよね。セルビアがロシア正教関係、クロアチアがローマ教会、そしてボスニア・ヘルツェゴビナのほうがイスラムという形でユーゴスラヴィアという国は構成されている。亡命政権は、実際には、クロアチアの王族の方が中心となっていたのですが、かの地での抵抗運動は、セルビア人であるチトーが代表となったパルチザンによって進められていた。そして、パルチザン兵力が優勢だということが明らかになると、亡命政権の幹部であった甥っ子は、チトー派の方に鞍変えしてしまったんです。

戦後のユーゴの権力はチトーの手にある。当時はまだ、スターリンのソ連とは仲が悪くなっていません。ということになると、テスラの遺産は共産圏に渡ってしまうわけです。そこで横槍

が入ったんです。

オカルティストたちはその後一年たって、ユーゴスラヴィアの方に運ばれた遺産の一部、テスラの殺人光線兵器や地震兵器の試作機の心臓部分と、それから秘密の論文がベオグラードに着いたらなくなっていたと主張しています。つまり、ソ連に殺人光線の秘密が横取りされたんだというわけです。

だとしたらですね、ベオグラードにあるテスラの記念館に行ったって、プラズマ兵器の謎がわかるはずがない。でも、オウムの幹部連中は物見遊山のためなのか、わざわざベオグラードまで出向いているわけですね。しかも、偽装団体の名前に、日本秘密ニコラ・テスラ協会という名前をつけている(笑)。ほとんど怪しんでくださいってなもんですね。

幻のサブリミナル効果

ものついでに、確認しておきたいことをもうひとつ。いわゆるサブリミナル効果の話です。オウムも自分のところの広報誌とかで吹聴している、あれは完全にウィルソン・ブライアン・キイの書いた『メディア・セックス』からのパクリですね。

で、『メディア・セックス』あたりの主張する「サブリミナルの恐怖」話は、そもそも、たったひとつのエピソードに根拠を持っているんです。

一九五七年、ニュージャージー州の映画館でコーラとポップコーンの映像を一瞬だけ、サブリミナルで映したら売り上げが伸びたという、あの話です。

しかし、ずっと以前から不思議だったんですけど、この話、各種の記事や単行本で見るたびにデータの詳しい部分が違ってたりするんですよね。

そしたら、超常現象の批判的研究者である友人の久保田裕さんから教えてもらいました。このエピソードをあちこちで吹聴していたJ・ヴィカリーという男は、一九六一年になってから、インタビューに応えて、まともなデータが得られていなかったと告白しているんです。

『メディア・セックス』は、本自体が確信犯のデタラメです。むしろ、余りのデタラメさに、エンターテインメントとして扱うべき本とも思えます。つまりはトンデモ本の世界ですね。

このあたりの事情は、久保田氏が以前にも『科学朝日』でも書いていますし、今度出る『別冊宝島』の「陰謀がいっぱい!」特集にも寄稿するそうです。また、『科学朝日』にも、九五年九月号では、記者の木元俊弘氏が「サブリミナル神話のウソ・ホント」という解説記事をよせていますので一読ください。

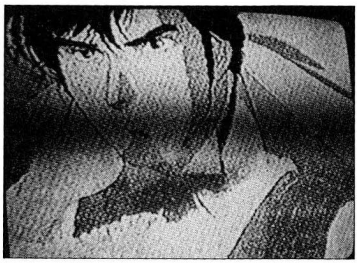
ただしです。ここで断っておかなくてはいけないのは、サブリミナル効果

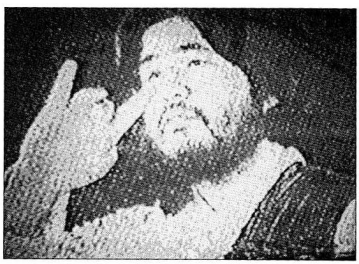
そのものの存在は、心理学でも認められているということです。しかし、言われているような劇的なものではなく、もっと曖昧。特定の商品を選択させるほどではないというのが、心理学者たちの一般的な見解です。

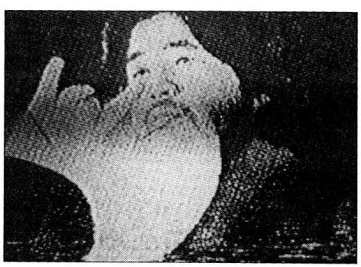
サブリミナル研究は、一九五〇年代に急激に進みました。その原因は、今で言う撮影用のストロボ、あれで発光の時間をすごく短く、しかも任意の幅でコントロールできるようになったんです。しかも、これはカメラの撮影用ストロボを流用したんではない。もともと、心理学の実験用に作られたストロボが、その光が日中白色光とよく似てるということでカメラのほうに転用されたんです。

で、どのくらいの間隔になったら人間が意識できなくなるかみたいな実験をやっていったら、意識には全く浮かばない映像を流しても、その記憶が潜在意識に入ってしまうような領域、サブリミナルと呼ばれる領域があったという研究が進んだわけです。サブ・リミナル、つまり識閾（リミナル）・下（サブ）です。

ちなみに、英語圏でサブリミナルという概念がひとり歩きしてしまったのには、もうひとつ原因があるようです。サブリミナルは語源こそまったく違うものの、サブライム・イナルとも読める。サブライム、つまり、「崇高」。美学や文学の分野では、キーワードとなっている概念です。レムリア大陸というのが、レムール猿の分布を説明するのに使われた純然たる学術用語だった







アニメ『シティ・ハンター』の、
問題の麻原尊師の顔が挿入されたシーン

のが、「幽鬼」の国とも読めるので、オカルティストに歓迎されたってのとよく似た話ですね。

サブリミナルについては、一般に広まっている大きな誤解がありますが、フィルムのひと駒を差し替えただけではサブリミナルにはなりません。フィルムのひと駒が映写される二十四分の一秒は、識閾・下ではなく、識閾の上なんです。何か変なものが映ったと、誰でも気付いてしまうんです。だから、映画館でサブリミナル広告をうつためには、横にストロボでも置いておいて、駒と駒の間の暗くなった一瞬の隙間に、ストロボをたいて映像を映すしかない。

ところが、テレヴィの1フレームは三〇分の一秒、ギリギリで識閾下です。

例のサンライズの制作したアニメ『シティ・ハンター』の中に麻原の絵とかが挿入されていたというのが明らかになったとき、映像関係者の間で話題になったのは、フィルム段階での挿入なのか、それとも、ヴィデオ段階なのかという問題です。

結局、『シティー・ハンター』の場合は、フィルム段階での差し込みで、厳密な意味でのサブリミナルではなかったわけです。単なるお遊びの領域ですね。

一方、この間TBSの番組でやった麻原の顔の映像の挿入というのは、これはビデオ処理ですから、もしも、映像の持続時間がサブリミナル領域なら、きわめて問題です。

もちろん、その効力というのは、何となく不快だとかといったレヴェルでしょうが、道義的に見たら言語同断ですね。見てる人間が意識できない領域で、その人たちをコントロールしようとしている。関係者は恥じるべきです。

図では見えないかもしれませんが、どうみても後から書かれたとしか思えない自作サブリミナル情報。「一昔前なら間違いなく不敬罪……」とあるが、今でも捕まります、これでは……（『ヴァジラヤーナ・サッチャNo.7』より）

落ちこぼれたマニアのテロル

さて、オウムをめぐる科学技術について簡単に解説してきましたが、総じて言えるのは、彼らが、エリートに落ちこぼれただけでなく、マニアにも落ちこぼれていた存在だったってことです。

彼らはアニメを内部で作っていた。マンガも発行していた。しかし、そのいずれもが、シビアなプロの世界では、せいぜいがセミプロのレベルでしかなかった。「コンバット・マガジン」や「アームズ・マガジン」あたりの一般読者、消費者レベルの銃器の知識は持っていたが、本当に使えるレベルの知識は、製造法から野戦のノウハウ、戦術にいたるまで、まるきりなっていなかった。それどころか、戦争や革命やるなら絶対に不可欠な、戦闘と戦争との違いさえまったくわかっていなかった。

大沢在昌の『新宿鮫』に、本人は銃器マニアのつもりの中途半端なキャラクターが登場します。根本がわかっていない。それを連想させましたね。

である以上、オウムのテロルが霞ヶ関を除けばみっともない結末にしかならなかったのは当然といえます。本当に銃器に詳しい人間なら、その世界のジャーナリストになればよい。射撃に熟練したければ、アメリカに移住すればよい。本物の戦争を体験したければ、フランスやインドシナの外人部隊に入ればよい。そんな時代にぼくらは住んでいるんです。

それができないから、マニアの共同体のまっとうな一員になれないから、彼らはオウムに行ったんです。妄想の中での対国家戦争の戦士を気取ってね。

それってすごくよく似ていますよね、左翼きどりのくせして、結局は使いものにならない『魔法使いサリン』しか出せなかったK君に。また、コミケあたりに出入りしていたけど、マニアとしてのレベルはきわめて低かった、幼児連続殺害犯の勤君あたりとね。

オウムを自分と重ねて自己憐憫をグータラ並べたてる奴らがいます。我が内なるオウムってね、ところが、逆なんですよ。内なるオウムなんかじゃない、オウムに連中が入ってしまったのは、マニアたちの共同体からさえも排除されたからなんです。オタクにさえなれないからオウムに行った。オタク世代、オウム世代とかいった立場からは、決して、そのオタク文化からさえも疎外され排除された連中の姿は見えてこないんです。

そういった、オタク世代論者の言うところの大人文化からも、またオタク文化からも排除されてしまった連中の最後の隠れ家が、妄想の楽園であるオウムだったとすれば、今度のような事件はまた起きるでしょうね。もちろん、今回そうだったように、ドジでノロマでグズなテロリストだろうけれど、でも、今度のようなことはきっとまた起こる。

その時に責任を負うべきは、彼らを排除した「大人」たちであると同時に、「オタク」たちでもあるわけです。

もちろん世界的に見れば、ドジでノロマでグズじゃないテロリストはいっぱいいます。イスラム原理派、キリスト教原理主義（ファンダメンタリズム）、各種カルト教団……。国連ビル爆破事件の時にすでに、イスラム原理派の連中は、青酸ガス散布をもくろみ、未遂に終わっていたことが、最近になって明らかになりました。しかも、このグループが、フィリピン南部でひとつの街を破壊しつくしたテロリストたちと深い関係にあったこともわかっている。

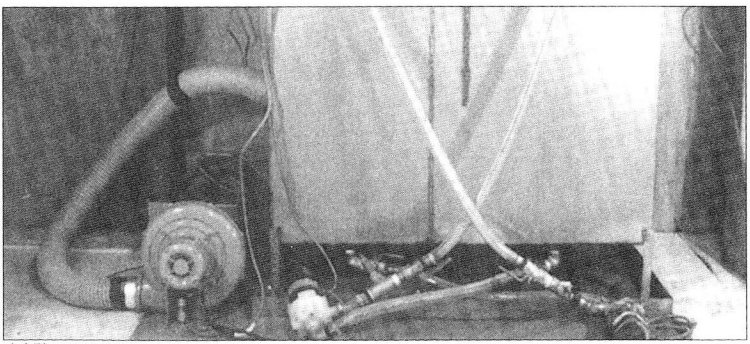
そして、ミリシア。連邦ビル爆破の犯人が所属していた、この武装市民グループは、それまでバラバラに存在していた、アメリカ国内の危ない人たち、ファンダメンタリストやＫＫＫ、ネオ・ナチ、銃器マニアなどを糾合する形で、ここ数年の間に急成長をとげています。で、糾合の鍵となったのが、インターネットです。

インターネットは、膨大な情報の流路です。しかし、その情報は正しい情報、精確な情報とは限らない。麻原たちがオカルト出版マーケットからつまみぐいしていた妄想の数々と比べて、二桁も三桁も上の分量の妄想が流通している。アメリカ政府はすでに乗っ取られているとか、ミシガンの事件は日本政府の陰謀で、霞ヶ関はその報復にアメリカが仕掛けたとか、いや、霞ヶ関はイギリス諜報部の犯行だとかいった情報が自己増殖しながら、ネット（ウェブ）上を徘徊しているんです。

そうした妄想の共同性を軸として形成され、今、注目されているのが、つまりミリシアなんです。

センデロ・ルミノソを最後として、海外においても、政治的なテロルの時代はその終末期をむかえているんじゃないでしょうか？　後に残るのは原理主義と、そして妄想の共同性だけでしょうね、テロルの根拠となりうるのは。

だとすれば、オウムが引き起こした数々の事件は、ドジさかげんはともあれ、新しい時代の新しいタイプのテロリズムの、先駆けというにふさわしいものだったというべきでしょうね。



室内型コスモクリーナー

ゲス事件／ゲスメディア／ゲス視聴者

村崎百郎

むらさき・ひゃくろう：一九六一年シベリア生まれ。東京荒川区の工場（こうば）に勤めるかたわら、ゲス原稿専門ライターを最近開始。『危ない1号』（データハウス）、『ユリイカ臨時増刊・悪趣味大全』『イマーゴ』（青土社）『GON!』（ミリオン出版）などに寄稿。茶髪で日焼けでナイスバディの彼女を急募。

この俗悪なゲス文章をしたためるにあたり、とりあえず以下の連中に謝辞を送りたい。

まずは、この腐った国と時代にはお似合いの、たぐいまれなゲス事件を起こして我々を楽しませてくれた麻原彰晃とオウムの信者たちに感謝する。江川紹子を筆頭に、正義の味方役をつとめてくれたオウムバスターズに感謝する。假谷さんや坂本さんなど、事件を盛り上げてくれた被害者の皆さん、世界に誇る日本の警察に感謝する。中沢新一や島田裕巳、そして陰ながら事件を育てた宗教法人法の存在にも感謝する。最後に、日夜事件を追いかけて我々に楽しい娯楽を提供し続けてくれた全ての報道関係者達に最大級の感謝を捧げる。

拍手！　パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ！

自称鬼畜派ゲス視聴者代表　村崎百郎（工員）

――これは妄想戦だ。細胞対細胞で戦え――醜悪な現実には更に醜悪な妄想をぶつけろ――コントロールが消えるまで――言語線を切れ！時間線を切れ！――現実スタジオ急襲

ウィリアム・S・バロウズ『ソフトマシーン』より（大ウソ）

ゲスメディアに栄光あれ！

俺は鬼畜系ゲス人間ナンバーワンの村崎百郎だ。このすかしきった日本の文化を下品のどん底に叩き落とすまで、日夜卑劣で矮小な下品行為を働いている超最低の層野郎である。最近は破壊活動の一環としてゲス文章の執筆も始めたが、日頃お上品なメディアのたれ流す情報を素直にありがたく受け取っている連中には、これから俺が書くことは読むに耐え難いと思われるので非常識と血圧に自信のない奴は読まない方が賢明だろう。

実際マスメディアなんてうわべばかり上品で、「正義」と「善意」と「良識」をはらんだ主張しか流せない、善人用の粗悪なクズメディアである。こんなものばかり素直に見たり読んだりしてりゃあ、良識に基づいてしかモノが考えられない善良な人間ができあがるのも無理はない。でも「これは良識という名の洗脳だ」なんてツマンネエ事は言いっこなしだぜ。そんなものは腐った心と豊かな妄想力があれば楽にクリアできるんだからな。

上品ぶって偉そうに正義を語り、それを正しいと信じて疑わない全てのメディアを俺は親しみを込めて「ゲスメディア」と呼んでいる。TVのワイドショーにチャンネルを合わせるとき、俺は夜の公園のアンモニア臭で目が痛くなる汚い公衆便所の中でひざまずいて、糞尿にまみれた大便器を覗きこんでいるような至高感につつまれる。その中からは見るのもけがらわしい太くて臭い大量の大便がもの凄い勢いで逆流して俺の体を包むんだ。糞尿の気持ち悪さと暖かさ——俺はそんなゲスメディアの下品さが死ぬほど好きなんだよ。

ゲス視聴者

さて、俺が言いたいのは、この最低の事件でゲスなのは何もオウムやマスコミだけじゃねえって事だ。いかにご立派な事件やメディアや意見があろうが、見てる側の人間がとことん腐りきっていれば、たとえば聖書だってズリネタになりうる事を、これから俺が偉そうに分かりやすく説明してやるってんだよ。有り難く思いな。

今度の事件では、早いうちから各マスコミで報道

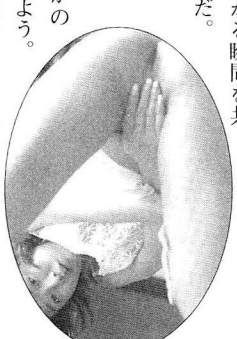
や捜査のあり方をめぐって様々な議論がなされてきた。しかし、それらの議論でも、報道を受けとる側の視聴者の問題が言及された事はほとんどない。もちろん、それは視聴者の意識調査や読者アンケートの話じゃないぜ。俺も含めて、事件報道を高見の見物で楽しんだ視聴者側の腐った心や意識の問題が語られた事なんかまるで無かったって言ってるんだ。

無理もない。所詮「お客様は神様」だもんなあ。

たとえばＴＶでは視聴者批判はタブーだ。ワイドショーでも、ゲストに「こんな番組見てる方がバカだ」なんて発言があったら、超特急で局に文句の電話が来るからな。断言してもいいけど、ＴＶ局にそういう文句を電話してくる人間の人格品性根性の悪さは相当なもんだぞ。だいたい俺も含めて、まっ昼間からＴＶ見てる奴、それもワイドショーなんて、どう考えても馬鹿なんだし、自分をかえりみない馬鹿ほど批判されればムキになって怒るものだ。何様のつもりか知らんが、趣味も特技もないヒマこいてつまらんプライドばっかり高い馬鹿、冷静に自分の批判ができないクズ。自分の事は棚上げして他人の成功や性交が妬ましくてたまらないカス。向上心もないくせにやたらに正義を主張したがるあほう。対岸の火事が大好きなゴミ。自分の人生に何の展望もないクソ。これら超一流のクズたちの妬みやひがみの心が支えるゲス番組の素晴らしさは、あまりに醜悪すぎてとても言葉では書き尽くせない。

俺はワイドショーを観ていると、分刻みどころか秒単位で自分の品性や根性がもの凄い加速ですさんだり腐ったりしていくのを実感する。体も心もケガレっぱなし。このマイナスの快楽は何物にも変えがたいものだ。自分も含めた日本全国の多くの視聴者が、刻々と下らない人間に成り下がる瞬間を共有する喜び……ゲスメディア万歳だ。

人知れず行われる鬼畜オナニー



では、視聴者がどれだけゲスかの例として、俺の鬼畜行為を紹介しよう。

俺はこの前の阪神大震災で震災報道をＢＧＭにして、アナル＆スカトロ専門誌『お尻倶楽部』を片手に鬼畜オナニーを楽しんだ人間のクズである。被災情況を告げる報道陣の非痛な叫び声やヘリコプター

の爆音が豊かな臨場感を醸し出してオナニーに花を添えた。さらに夜になっても燃え続ける神戸の夜景にもある種の「美」を感じる始末。いやぁ、これがいいんだ。興奮しすぎていつもの一・五倍は精子が流れたね。全く俺はあきれた「タナトス小僧（©中沢新一／たしか今、鬼畜行為の言い訳に中沢新一を引用するのが流行ってんだよなぁ）」だ。

こんな話を聞けば、被災者でなくとも腹が立つだろう。しかし諸君、安心してくれ。俺は反省するどころか更に卑劣なことに、社会生活を送る上ではそんな鬼畜なそぶりは全く他人に見せず、仕事先やご近所で震災の話になると眉をひそめて「本当に大変な事ですね、被害がこれ以上大きくならなければいいんですが」とか言いながら募金箱に小銭を入れる善良な一般小市民なんだ。家の外での行動だけは「誰が見ても普通の人間」をやってるわけだ。正直者には信じられないかも知れないが、鬼畜人には思ってもいない事をしゃべるぐらい何でもないのだ。外面は上品にしてその内面はドロドロというのがゲス人間のライフスタイルである。

酷いか？　酷いと思うかね？　俺も本当にそう思うよ。こんな人間は許せないし是非とも糾弾すべきだろう。しかし善人諸君、現実問題として、こういうのはどうやって告発し、どうやって裁くね？　本人が言わなきゃ発覚しない事だし、この場合も「ありゃあ嘘です。ぼかぁ知りません。たまたまオナニーしてる時にＴＶのスイッチが入ったままだったんです。藤田リナちゃんのけつの穴見て興奮しただけっすから」って言われたら、あとは自白剤でも打つしかないんじゃない？　妄想罪なんて罪が刑法にあるかね？

つまり、この世には犯罪とは言えないが、並の犯

罪以下の行為や妄想なんて人知れずいくらでもあるってわけだ。法や道徳では取り締まれない数々のゲス行為がね。

たとえば、俺は昼のニュースや夕方のニュースを街の定食屋のTVで見る。震災を報じた新聞を読みながら飯を喰う。飯を喰いながら震災報道を見るという行為は、人の不幸を飯のオカズにしているようなものではないのか？　しかし、こういう行為を不謹慎だと発言する奴はまずいない。そして、ブラウン管の向こう側からアナウンサーが「おい！　飯喰いながら見ていいニュースじゃねえぞ！　正座して見ろこの馬鹿！」なんて怒鳴ったり、新聞記者が記事の中に「俺の記事をみそ汁すすりながら読むんじゃねえ！　この低能読者野郎！」なんて書く日は永久に来ない。

実際に飯を喰いながら震災報道を見た人間は全国で数千万人以上いるだろう。安全圏でメシを喰いながら見るテレビの番組はやっぱり娯楽である。どんなにニュースを流す側が「報道」の意識を持って番組を制作しようが、見ている側が飯喰ったりオナニーしてたら、やっぱりそれは娯楽番組なんだ。そこにニュースとワイドショーの区別なんてない。人の不幸が受取りようによっちゃあ娯楽として楽しめるってのも現実なんだ。

くれぐれもジャーナリスト達は、メディアの受け手の妄想力をナメるなよ。そこに悪意を持ったゲス視聴者がいればどんな悲惨なニュースもお笑い番組だ。下品か上品かなんて視聴者の決める事なんだ。

「神よ、罪深い私をお許し下さい。私は今まで、聖書を読んでみだらな妄想に耽りこみ、通算二千九百八十七回の自慰を行い、その全てにおいて完璧に射精をしました。そして今後もそれをやめるつもりは毛頭ありません。私は私達の罪のために十字架にかけられたあなたを想うと股間のうずきが止まらないんです！　いいか、おれはてめえの腰に巻いた布を剥ぎ取って、そのかたくすぼまった上品なけつの穴に一発キメてえっていってるんだよ！　アーメン」ってな。

ゲスが見たオウム事件

さて、こうしたゲス視聴者の視点から見た今回の

事件はどんなだろう。

何故かこの事件が盛り上がる半年も前から、ワイドショーはゲス事件報道で盛り上がりまくりだ。順番がでたらめだが、ざっと振り返っても、筑波の医師による母子殺人事件、犬の調教師の連続殺人事件の発覚、品川駅構内での医師射殺事件、中学生によるいじめ自殺事件、阪神大震災と魅力的な事件が次から次へと続き、ワイドショーのボルテージは上がりっぱなし。お安い愛憎劇と、悲哀に満ちたお涙頂戴エピソードがテンコ盛りの感動ヒューマン・ドキュメントにアンニュイで醜悪なゲス国民どもは狂喜乱舞。更に麻原の逮捕で終わりかと思ったら、つい先日も十六年ぶりのハイジャック事件があり、素人のわりには芸のある犯人がドライバー一本で十六時間も日本中を沸かせてくれた。そして、ゲス国民はあい変わらず自分に被害の及ばない範囲での更に悲惨で深刻な事件の到来を待っている。TVがあれば電気代だけでこれだけ楽しめるんだから良い時代になったもんだ。

*

「ワイドショー」という呼び名でくくられる汚穢のような番組群は、可哀相な事に常に視聴者から馬鹿にされながら見られている。明らかに「くだらない」「見ると心がすさむ」「低レベル」「文化の恥部」などとさげすまれ、それでもそんな番組がいまだに存在しているのは、実は見ている視聴者がそれ以上にくだらないからにほかならない。もちろん、俺も含めてね。

ワイドショーを作っている連中は案外と馬鹿でもくだらなくもないんだろう。それこそプロデューサーもディレクターもオウム幹部に負けず劣らず、高学歴出身者が揃っていたりするしな。視聴者に「まあ、何てくだらないのかしら」とほんの少し優越感を持たせつつ番組を見せるというテクニックは素晴らしいとしか言い様がない。視聴者は番組が自分よりくだらなくて馬鹿にできるからこそ安心して見ていられるものなのだ。ワイドショーが真に啓蒙的で教育的でどこへ出しても恥ずかしくないテーマを扱うなら、それはもはやワイドショーではないし、大衆の支持は勝ち取れない。だから「視聴者に馬鹿にされてもいい。視聴率が取れればそれでいい」という製作者サイドのプロ根性は大したもんだ。それが

出演者にはギリギリの所で意図的に伝えてないのか、本気で勘違いしているのか、ワイドショーの出演者には一応プライドがあるようである。たとえば、リポーターは自分が追いかけている芸能人にハエ扱いされたり覗き趣味を批判されると本気になって怒る。視聴者は「まあ、ゲスのくせに自分がゲスなのがわからないのかしら」と、ささやかな優越感を持ってその事態を楽しめる。実のところ、それもリポーターの演技なのかもしれないが、とにかく視聴者はワイドショーを見ることで、優越感を持ちながら自らのくだらなさをほんの少し忘れる事ができるのだ。見ていても自分の現状は何一つ変わらないし、ただ見ることが時間の無駄にしかならないのに、なぜかワイドショーが視聴者の心を引きつけてやまない理由はここにある。この麻薬的現状逃避誘発アイテムに「フリーメーソンの愚民白痴化計画だ！」などという超国家的陰謀妄想を感じるのも自由だが、それにしても、絶えず自分以外の何かを馬鹿にしたり見下したりしなければ正気を保てないほど腐った人間どもってカワイイよねえ。

そんな中での今回のオウム事件は、鬼畜視聴者にとってまさにゲス犯罪のオンパレードで、報道されるゲス記事は一行も読み落とせないほど楽しみのつまった「おもちゃのカンヅメ」だった。

まず麻原の顔がなんとも味わい深くてイイ。ゲス顔合格。原始仏教をベースにチベット密教やらハルマゲドン思想を取り入れたごたまぜ教義のくそダサさも合格。「教祖と交わればステージが上がる」とかいうムシの良すぎる教義も合格。不殺生を基本にゴキブリやハエ、カも殺さない慈愛に満ちた不潔さも超合格。特にこの非衛生的な所はいいねえ。「汚れきった俗世を捨てて、更に不潔で汚らしいサティアンの中に身を投じ、崇高な精神を学び修行する」——うーん、なかなかの本物指向じゃないか。俺がメディアを通して受け取ったオウムの修行のイメージは、「グラグラに煮立った肥溜の中に首まで漬かってマントラをとなえ、底まで沈んで〈汚穢クンバカ〉を行う」って感じなんだけど。これこそ尊い修行者の姿ってもんだよなあ。

その他にも、ゲス合格物件は数え上げればきりがない。歌、踊り、ホーリーネーム……どれもダサくてクサくて正視できないくらいの超一級のアイテム

揃いだ。

わけても一般のゲス視聴者どもにウケたのは「エリートの転落」って物語なんだけど、これは「あの××なひとが何故あんな？」という意外性の物語とペアで、昔からワイドショーでバカウケしやすいパターンなのよ。でも俺はあんまりこの方面の物語には魅力を感じないので、これに関しちゃここではパスだ。まあ、こんな宗教にハマる奴がエリートだなんて到底思えないけどな。まあ、とにかく、こいつらのやることは何から何までおマヌケすぎて腹に力が入らないんだ。脱力感一二〇％。

法皇官房の事務受付嬢ことＫさん（21・ホーリーネームはバドラー）は88年に家族ぐるみで入信、上九一色村に出家するも92年に一度脱走、三谷静名義で念願のＡＶデビューをはたすが青山弁護士の懸命の抗議でビデオは回収、お蔵入りに……

こんなふうに、俺はオウムについてはかねがね無責任な好感を持っていた。だからあれだけ凶悪な犯罪を犯しても、ギャグとして享受できる部分があるんだろう。ヤクザみたいに殺人を「バラす」とか「タマを取る」なんて言わずに「ポア」の二文字で済ませちゃう。「ポア」って凄い語感だよなあ、全てがおマヌケにパアになる感じがして可愛くてたまらないぞ。同じ殺人でも「人を殺す」というと悪い事したような気になるけど、「ポア」なら可愛いからまあ、いいんじゃないって事になるのか？　殺す側が罪の意識を感じたり持ったりしにくいように、殺人者の精神衛生を考慮して、わざとあんな可愛いコトバを使っていたのかな？　物事をそこまで考えて、わざと他の分野もあんなにダサく見せてたとしたら大したもんだ。もちろん、そんなに知性的で戦略的な連中とは思えないけどね。

＊

実は、ゲス人間たる俺には正義感も倫理感もほと

んど無いので、「何故若者が宗教に走るのか」とか「何故エリートがオカルトに？」なんて、文化人がまじめに考えるようにはオウムについて興味が持てないんだ。宗教だろうがマラソンだろうが、走りたい奴は勝手に走ればいい。ゲス人間ってのは基本的に「他人が死のうが生きようがどうでもいい、できればみんな苦しんで死んでしまえ」って思ってる人間のクズだから、わざわざ宗教に走るような善人どもには共感などしないのだ。オウムに対する俺の正直な感想も「何だよ、あんなもん、教義なんか聞くまでもない。教祖の顔見りゃ分かるだろ馬鹿」ってなもんで、あれを救世主とあがめる連中の事なんか、まともに考えるだけ時間の無駄。自らの意志を放棄して、自分の人生を他人に預けるなんざ自殺もいいとこだ。そういう意味で、俺はオウムの信者を自殺して死んだ人間の屍体と同等の目で見ている所がある。死んだ人間は戻らない。だからあいつらがどうなってもいいじゃないか。頼むから家族との面会は恐山へ行ってやってくれ、死霊に街なかをうろうろされても迷惑だからな。奴らには納得の行くまで好きに修行させてやればいいんだ。んでもって死霊が懲りずにまたサリン撒くとか悪さをしそうになったら、「除霊」と称してきっちり皆殺しにすりゃあいい。どうせ、ああいう奴らだから社会に戻っても、せいぜい騙されて利用されて死ぬだけだろうしな。この世界は祈れば皆がもれなく幸せになれるようなしあわせな場所ではない。あんな教団について真面目に考えるのは無駄時間の無駄。

ただ、善良な人間どもの「世の中を良くしよう」とか「自分達が世界を救うのだ」などという善意の妄想を集めてうまく利用し、いとも簡単に罪の意識なしにゲス犯罪を起こさせるという麻原の悪魔的な所業は評価に値する。俺もゲス勲章をあげちゃおう。多分、この事件は後々まで語り継がれるだろう。多くの人間が麻原の研究書を書き、麻原の名はニセ救世主の代名詞として定着し、数百年後の日本史の教科書には写真入りで載っているかも知れない。

国民は本当に怒っているのか

国民のオウム事件に対する反応も、反社会的な行

動への怒りばかりじゃないのは明白だ。どのメディアも書かないだろうからここへ書いておこう。「自分に関係のない喧嘩と川を隔てた対岸の火事は大きければ大きいほど良い」という言葉が江戸時代あたりにあったはずだが、今も国民は心の奥底にそういう暗部を確実に持っている。少なくとも俺レベルの鬼畜はちゃんと意識化している。だから、たとえば北区や足立区の町工場の工員には、「霞ヶ関みたいなハイソで上品な場所にサリンが撒かれて、自分と何の関係もない偉そうな一流サラリーマンどもが何人死のうと知ったこっちゃねーんだよ」ってな風潮があるのをあんたらは理解できるか？　育ちの良い善良君や良識ちゃんは信じたくないかもしれないけど、人間ってのは恐ろしいことにつまんねえ事でとっても醜くヒガんだりもするんだ。更に心を鬼にして酷い事を書こう、**「何もテロで死んだ奴がみんな善人だったとは限らない」**という考えが頭をよぎったことのない奴はいないのか？　「いまのお気持ちを一言でいうと？」という、リポーターの「見りゃあ分かるゲス質問」とともに画面に映される悲しみの遺族のコメントを聞くと、被害者は常に皆良い人間だったかのように語られるが、そんなもんは実際どーだか分かったもんじゃない。公正な裁判でも、被告の親族が証言するアリバイは無効になるだろうが。ＴＶの映像を見ただけで被害者や遺族に一方的に感情移入するのは危険だよな、人権派、良識派の皆さんよ。

ああ、それにしてもつまんねえ建前でモノを言うのはホントに馬鹿馬鹿しくて楽しいな。

こんな事書いてるとお前はオウム擁護派かって言われそうだが、それは大きな勘違いだ。**俺はオウムもお前らもみんな大嫌いなんだよ**、そこんとこヨロシクな。

俺にはオウムに対して、サリン事件の犠牲者がらみの怒りはほとんどないが、もっと別の強い恨みがある。それは連中のテロのおかげで地下鉄はもちろん、首都圏のＪＲや私鉄各駅のゴミ箱が不審物警戒で使用中止になって、通勤時の楽しみだった新聞雑誌の拾い読みが困難になったことへの怒りである。これについては俺は本当に頭にきている。この件だけでもオウムの信者なんて皆殺しにしてもあきたらないと思っているぐらいで、それは多分、拾子（拾

った雑誌を一冊百円均一で売って生計を立てている人々）の皆さんも同じ気持ちだろう。駅のゴミ箱の無期限使用停止なんて、最悪の営業妨害だからな。

＊

逆にこの事件に感謝している奴らもいるぞ。

サリンテロが首都圏の住人達に与えた影響はかなり深く、人一倍心がナイーヴな人や、精神科や心療内科などの病院に通院している人たちに「サリンが自分の部屋に撒かれるかもしれない」という新種の不安を与えてしまい、怖くて夜も眠れないという悩みを相談する電話がカウンセラーや精神科医の所へ殺到したという。この不安は一人暮らしの女子大生やＯＬにも同様にふりかかり、俺の知人にも「オウムが襲ってくるような気がして、一人じゃ怖くて眠れないの」「じゃあ、ボクが君のマンションに行ってあげるよ」とちゃっかり女の部屋に泊まってサリンならずサーメンを膣内に撒いてきたというたわけ者がいる。そいつはオウム様々だと笑いが止まらない様子だった。こんなふうにオウム同棲とかサリン・カップルと呼ばれる世紀末現象が続発中だ。（ホントかよ？）

だから、正義とか善悪の対立構造だけで全てを説明しようとする報道姿勢はもういかげんにしろって事だ。マスコミもテロはテロとして断罪し、それによって派生した全ての事象を検証し、認めるものは認めて評価してやれよ。「オウム事件が取り結ぶ男女の愛」――トレンディードラマの良いネタにもなるぞ。警察は国民から見直され感謝され、残業が増えて収入も増えてホクホクだ。治安維持法も復活させ易くなったし、政府もニコニコ。この程度のマヌケな陰謀なら逆に国家権力を増強させるのに利用できるから万々歳だ。いいことずくめじゃないか！やっぱり麻原って救世主かも？

「正しい意見」は魅力がない

今回の報道の中でも「オウムの側の人権」や「正しい捜査の必要性」「警察の違法捜査」について厳しく発言していた良識派の文化人やらジャーナリストが何人かいた。民主的に考えれば彼らの主張は全く正しいし、冷静で立派な意見だと思う。しかし…悲しい事に彼らの意見は正しいが故に鬼畜な視聴

者には退屈なのだ。今回の事件では、彼らの主張は残念ながら俺の経験からいえば、強姦時にギャアギャアわめく女を殴り倒して下着を剥ぎ取り押さえつけ、さあこれからチンポをぶち込むぞとイキり立ったサオの亀頭の部分を膣の入り口にあてがったときに、女に泣きながら「お願い、やめて」とか「鬼、畜生、一生恨んでやる！」と言われた程度の説得力しか感じられねえんだよ。腐った人間には正論は通らないし、悲しい事に正しい意見がいつもみなさんに支持されるとは限らないわけだ。

これは俺が小学五年生の頃の事だが、となり村で火事があって、全焼した家の子供にノートや教科書を送るカンパを集めようという話が学校で持ち上がった。担任（五十近い男）の先生からその話があった時、よせばいいのにクラスで一番活発なA子が手をあげて**「くせになるから止めたほうがいいと思います」**なんて言うんで普段温厚な担任はもの凄い顔して**「おい！お前！何だって！いま何て言った？もう一度言ってみろ！」**って見たこともないくらい凄い剣幕で怒り出しちゃった。そん時は俺もキモを潰したねえ。まあ、被災のお見舞いに味をしめて二度も三度も火事を出す馬鹿がいるとは到底思えねえが、確かに理論だけはもっともな話なんだよな。人を頼らないように強く生きて欲しいから、あえて寄付しないというわけなんだろう。しかしこの意見は支持されなかった。俺は阪神大震災の後で、コンビニのレジに置かれた募金箱を見るたびにこの話を思い出したが、もちろん口には出さなかった。ＴＰＯをわきまえたオトナの鬼畜だからね。

ナイスミドル山崎哲

それにしても、今回そうした良識派の文化人の中に、俺の大好きな劇作家の山崎哲がいたのにはビックリだった。いつのまにかワイドショーのコメンテーターとして奥様方には人気の評論家になっているらしい。しかし、山崎の本来の仕事は「犯罪フィールドノートシリーズ」と言えば聞こえはいいが、要は猟奇事件マニアが人の不幸を芝居のネタにしてメシを喰ってるだけの事である。しかも山崎は誠実によくよく考えてから芝居を作るもんだから、世間が

その事件を忘れかけた頃にやっと芝居ができあがり、その公演は事件を忘れたい人にも無理やりイヤな事を思い出させるという鬼畜効果があって実に楽しいものだ。そういえば、バカ相手にバカな笑いしか取れない猿以下の劇団が多い中、ハードな社会問題ばかり扱っている山崎の「転位21」は小劇場劇団の中でも出家主義劇団っつー感じで、集団の中の個々人が真面目で純粋な連中に見えるという点でオウムに近いかもな。

山崎の芝居はテーマが重くて、普通の人が見てとホントに痛々しいんだろうが、俺のような鬼畜にとってはテーマが重ければ重い程、話が悲惨で救いようがなければない程、爆笑したくなっちゃうだけで、いつも客席の皆さんがすすり泣く最後のシーン近くで笑いをこらえるのが大変なんだ。まわりの客が泣けば泣くほど可笑しくてさあ。ホントに「隣の不幸は鴨の味」だよねー。猟奇犯罪マニアには山崎の芝居は超おすすめのゲスアイテムだ。

しかし所詮は小屋メディアの悲しさで、山崎の芝居は善人どもの「お涙頂戴娯楽」には適当だが犯罪の予防効果は全く期待できない。何故ならあんな芝居を見に来て涙を流すような善良人どもに猟奇犯罪を起こす根性などあるわけもないからだ。まあ、そんな風に現実には全く役立たずである事が「高い芸術性」ってやつなんだろうけどな。そういう鬼畜芝居野郎が正論を語るんだからこれはもうハタで見てると最高のギャグなんだ。ただ、その後雑誌で一連のオウムの犯罪を「あれは犯罪ではなく革命」と評価してるのを読んだ時にゃあ涙が出るほど笑っちまったぞ、こいつまだ革命にロマン感じてるんだなってね。いや〜ロマンだねえ〜何の関係もないんだけど、なぜか「戦没者遺骨収集団」っていうのを思い出しちゃったよ。昔、大学生の友達がそういうのにふざけて応募して、運の悪い事に当たってしまい、しかたなく爺さんや婆さんだらけの団体にまじってサイパンだかインドネシアだかにタダで一週間も遺骨収集旅行に行ったのがいてね、みんな現地に行くとわんわん泣いちゃうんだけど、そいつだけ悲しくも何ともなくて困っちゃったって話なんだ。俺もそんな団体に一人部外者でまじっちゃって爺さんの号泣をなすすべもなく見ぃ〜てぇ〜るぅ〜だぁ〜けぇ〜って感じだよ。いやあ、俺もロマンの分からない

男じゃないから山崎の気持ちも分かるんだけどねぇ～、「革命」と「強姦」はいつの時代もおとこのロマンだからなぁ～。でも「革命」だろうが「犯罪」だろうが人殺しは人殺しだ。女性器と呼ぼうがボボと呼ぼうがおまんこはおまんこだし、同じクソを大便と呼んでも一本糞と表現しても、それが臭えのは変わらねえんだよ。それにしても、オウム事件を語らせればオウムよりもその人間の事が見えてくるから面白いよな。俺は見た通りゲスゲスのゲス野郎だ。

革命なんてインテリの考えそうな事だけど、左翼の学生運動でもオウムの出家信者でも実社会でろくに働いた事もないような連中に世の中なんか変えてもらいたかないね。俺は肉体労働者なんで口ばっかりのインテリは大嫌いだぜ。だいたい、いまだに時代遅れの立て看書きと役立たずの花火作りに終止している左翼にゃあ体制を変革する力も、民衆に支持される魅力も皆無だろう。左翼も昔はヒーローだったんだろうが、バブル以前の八〇年代初頭には、すでに少年漫画誌じゃ左翼ゲリラは悪役で登場してたんだぞ、ヤクザや銀行強盗、下着泥棒なんかと同格でな。

まあ、夢見るおっさんの懐古趣味を批判しても始まらないからこれくらいにしとくけど、それでも山崎は非常に重要な事も発言している。それは「正義の無根拠性」についてである。

「正義」って何だ？

だいたい正義なんていうあやふやな物は「勝てば官軍」で、勝った側だけに存在が許される代物だ。今回はたまたま反オウムが勝っただけで、「反オウム側が正義」だったから勝ったというものではない。「反オウムがオウムに勝った」から正義を主張しているだけの事なのだ。

これが仮にオウム側が日本全土を制圧し、日本が「神聖太陽真理国（仮）」になっていたらどんな事になったろう。まあ、絶対にそんな事はこれからもないだろうが、信者たちの無念をくみとって俺がかわりに妄想してやろう。

まず、国民は全員強制的にオウム真理教の信者にさせられ、全財産のお布施を強制される。その上で修行の強制がはじまるのだ。教団に逆らう者はどん

どんポア。街も様変わりするだろう。ネズミ、ゴキブリ、ノミ、ハエ、カを殺す事は禁止され、国中が不潔になっていく。もちろんアースや金鳥などの製薬会社はお取り潰し。全ての製薬会社に協力させて巨大サリン製造プラントを制作し大量のサリンが作られる。核兵器の研究も進められ、同時にプラズマ兵器や地震兵器も国をあげて真面目に研究。ハルマゲドンに備えての富国強兵政策が強硬に進められる。国民の衣服は全て階級別のサマナ服に限られる。そのさい茶髪、日焼け、ボディコン、ミニスカ及びTバックは全て禁止。装飾(アクセ)、化粧(コスメ)も全て駄目。ディスコ全廃。カラオケボックスはそのまま個室修行兼拷問部屋に。既成の音楽は全て禁止。麻原を讃える歌以外は全て禁止。CDは全て叩き割られる。芸能界も解体、アイドルは、秋吉久美子やあべ静江みたいな教祖のお気に入りを除いて各幹部に支給される。放送局は国営真理放送のみに制限され、「ショショショ、ショーコー！」が国歌になって早朝と深夜には必ず放送される。もちろん国民の睡眠時間は四時間のみ。国民全員にヘッドギアの装着が義務付けられる。福祉問題も、無駄な老人をどんどんポアしちゃうので一気に解決だ。とりあえず六〇歳以上の老人の皆殺し……いや、救済計画が始まる。食事も肉禁止。松坂牛解放。肉の万世、吉野屋も解体。オウム食の配給制がはじまる。家は全てサティアンになるので「第十二万五千八百五十六サティアン」などという長い名前のものが出てくる。小学校から大学まで全ての教育制度が改正され、授業は教義の学習とヨガの修行以外何もなくなる。入試は空中浮揚と水中クンバカ、および熱湯入浴の実技が中心だ。

そして問題は、そうなった時の非オウムの人間たちの処遇である。既成の宗教団体は全て解体。各教祖は舌を抜かれて首輪をつけられ四肢を切断され、人犬（©バイオレンス・ジャックby永井豪）として皇宮で飼われてしまうだろう。奈良と鎌倉の大仏は顔の部分を麻原に改造してそのまま国宝だ。皇室の事はとても書けない。オウムに肩入れしてきた島田裕巳や中沢新一は文部大臣になったり法務大臣になるんだろうが、これまでことごとくオウムに逆らってきたオウムバスターズたちは、簡単に殺してはつまらないので時間をかけて凄惨なリンチが行われるだろう。見せしめのために公開処刑を行うに違いな

い。特に女性である江川紹子さんに対して行われるであろう破廉恥で酷い行為の数々を思うと、SM好きの鬼畜な俺はチンポが勃起してしごかざるを得ない。たまらんので妄想はここまでにしておく。本当のところは、まだまだこんなもんじゃないだろう。

オウム側が勝利した時に、現在メディアでオウムを糾弾し、好きな事を言っている文化人たちは、はたして今と同じ事を堂々と発言できるだろうか？やはり大部分の人間が命惜しさにオウム真理教を支持するに違いない。そして一斉に革命の成功を賛美し、麻原を讃えるのだ。もちろん、俺もそうなればまっ先に入信して修行にはげむよ。「長いモノには巻きつけ！」はゲス人間の基本姿勢だからな。

どこへ帰る？

反オウムの弁護士たちがワイドショーで出家した信者に「帰ってらっしゃい」と呼びかけるのは本当に気味が悪かった。山崎哲が「僕はどっちにも救われたくない。放っておいてほしい」と言うのはもっともだ。冷静に見れば、「オウムと反オウムのどちらかが正しいか」なんていう図式は成立していない。正義を愛さない鬼畜な俺には、この対立はオウムと反オウムという二種類の狂信者が争ってるだけにしか見えないのだ。

オウムの方はとても単純でわかりやすい狂信者だが、反オウム側は「正義」とか「良識」という一番やっかいな妄想にとりつかれた根の深い狂信者である（もちろん俺は正義感も倫理感もない最悪のキチガイだ）。

仮に百歩譲って反オウムの主張するように社会に帰れば信者にはどんな良い事が待っているというのだ？　だいたい「真に正常な社会人像」なんてあるのか？　たとえばそれは、国を愛し、天皇陛下を敬い、日本国の国民であることを誇りに思い、国旗を掲げ、君が代を涙ぐんで熱唱し、お父さんお母さんを大切にし、政府与党を熱烈支持し、先の太平洋戦争での日本軍のアジア諸国進出は遺憾に思うが謝罪はせず、税金はごまかさず、立ち小便はせず、一流国立大学を出て、官公庁に勤め、野心は持たず、決して目立たず周りに合わせ、ホモらずレズらず、適当な年で結婚し、性交は正常位で週に三回迄、子供

は二人でやめといて、浮気はなるべくしないで妻を信頼し、仮に浮気が発覚しても妻には遺憾に思うが謝罪はせず、風俗通いなどできるだけせず、子供との触れ合いを大切にして、時々ボランティア活動をしたり、町内会にも顔を出し、ご近所へのあいさつも忘れず、争いもせず、とにかく何があろうと遺憾に思うが謝罪はしない……そんな人間に誰がなりたいと願うかね？

かといってオウムにも未来はない。だいたい数ある宗教団体の中から、よりによってあんな教団を選ぶような連中だ。どんなに一流大学を卒業していようが、真に有能だなどとは到底思えない。騙されやすく無知で愚鈍なつまらん奴ら——つまりは人間のクズである。この先、生きていても碌な一生は送れないだろう。そんな連中は社会に帰って来るだけ迷惑だ。どこか場所を与えて好きなだけ修行させてやるのが寛大な処置というものだろう。適当な無人島でも用意してやれよ。そこで絶滅するまで放っておきゃあいいんだ。理論上はあいつら禁欲して妻帯しないはずだから人口はどんどん減るはずだし（でも、きっと実際はどんどんつがって増えちゃうんだぜ。そういういいかげんな奴らだよ）。

島田裕巳は無罪だ！

はっきり言ってゲス人間の俺にはこの先の事件の展開なんてもうどうだっていいのよ。それよりも周辺の連中の責任のなすり合いなんかの醜さがこれからの見どころだね。

当面注目すべきは、いまや事件の共犯扱いにまでされているオウム擁護の宗教学者だ。しかし俺は何が正義かなんてのはどうでも良い事なので、彼らを無責任に擁護したい。

どちらかといえば強制捜査の当日までオウムを擁護していた島田裕巳が一番罪深いらしくマスコミにもさかんに叩かれてるけど、こいつは俺にとっては学者としても人間としても興味のないどーだっていい存在だから特に感想はない。でもついでだから擁護してやろう。

全くマスコミの連中は、昨年暮れにあれだけ盛り上がった大河内清輝君の自殺事件をきっかけにしたいじめの問題をすっかり忘れているようだ。よく見

てみろよ、島田は顔からして可哀相だぞ。学者だからいいけど、こんなのが下町の工場に勤めた日にゃあ、初日の昼休みには先輩連中に倉庫の隅で寄ってたかってサンドバック代わりにタコ殴りにされるだろう。いくら殴りたくなるような顔をしているからといって、いじめていいなんていう無茶苦茶な話はどこにもないんだ……なんてのは擁護にも何にもならねえな。しかし島田がスケープゴードにされやすい顔をしているのは事実だから困ったもんだ。今回「いじめられ役」という大役が島田に回ってきたのは道を歩いていて事故にあったようなもので、まあ、適当に頑張れよとしか言いようがない。でも、あれだけ責められても一言も謝らないのは日本人らしくて立派だから評価してあげよう。島田は今後も一切この件で謝る必要はないし、どうしても謝罪が必要なら、「遺憾に思うが謝罪はせず」という便利なアレを使えばいいんだ。日本政府も良いお手本を示してくれた。これからは国民のみんなが見習うぞ。あれは子供たちの教育にもとっても良かったぜ。

島田がオウムをどれだけ擁護しようとも、信者に成るか成らないかは最終的に島田が決めるんじゃなくて、悩んでる本人が決めるんだから、島田を責めても筋違いというものだ。

だいたい人をオウムに入信させるだけの説得力や影響力が島田にあるのか？　先入観を捨てて、みんなもう一度頭を冷やしてよ～く考えてみろ。あんたらが責めようとしているのはただの島田裕巳だぞ！　中沢新一や浅田彰ならまだしも、島田裕巳なんだぞ！　島田の文章読んでオウムに魅了されるような救いようのない馬鹿なんているわっきゃねえだろ！　仮にいたとしても、俺はそんな桁外れの馬鹿はどう

「宝島30」95年7月号より

なったって知らねえよ。

だから島田裕巳は断固無罪だ！

それでも「島田はオウムから裏金を貰っていたんじゃないか」という噂話もあるだろう。しかしこうまで迷惑をかけられては少々の金ぐらい貰って当然で、もしもまだ貰っていないのなら、尚更のこと慰謝料を教団に請求すべきである。ひたすら哀れな島田にこれ以上何の責がある？

それに、島田は雑誌に書いた言い訳の文章が実に見苦しくて良かった。あれはいい文章だ。オウムを擁護したのは自分だけはない、誰それがこう言った、ああ言ったと人間の醜さをあますところなく見せてくれたので俺はとても満足だ。もう、いいじゃないか、あんな読むに耐えないゲス文章書いたんだから、もう許してやれよ。無罪だ無罪。

ついでに書くと、本人は「一度付いたスティグマはそう簡単には取れない」なんて雑誌に書いていたけど、おめえ、そんな格好の良いもんじゃねーだろ。この場合スティグマ（聖痕）というよりスメグマ（恥垢）の間違いだっつーに。

中沢新一先生のどこが悪い？

次は中沢新一先生である。俺は、これまでオウムを無責任に支持してきた中沢新一には、以前から鬼畜学者として深い敬意を払っているので、とにかく擁護するぞ。

島田裕巳が叩かれたＴＶ番組で日刊ゲンダイの二木啓孝が、その日の朝日新聞の記事にコメントを寄せていた中沢新一について「会社が築地にあるから僕はあの地獄のような惨状を見てるわけですよ……ワンラウンド終わった今ごろになって一段高い所からこんな発言するなんて、僕は許せまんね」と言っているのを見て俺は驚いた。オイオイ二木啓孝、お前**馬鹿**じゃないのか？　これまで中沢新一の著書をほとんど読んだり、新聞から雑誌のつまんねえコメントまで可能な限りを押さえてきた俺だから言うけど、中沢先生がこれまでただの一度だって俺達民衆と同じ立場に立って発言した事があるとでも思っているのか？　中沢先生は、普段は人の二段も三段も上の高みから、人を小馬鹿にしたような見下した文体で偉そうに高度なお話を語られてるんだぞ！

それを一段上まで降りて来て語って下さるんだから素直にありがたく思えよ。まったくそれだけでも先生のプライドはズタズタだぞ。だいたいお前、学者というものを何だと思ってるんだ？　ハナから人を見下して生きている中沢先生が、いちいちサリン事件の被害者一人一人に共感したり、遺族の心の傷まで思いやるようなつまらん神経持ち合わせてるわけねえだろ馬鹿！　学者先生ってのは人類の未来を背負ってんだ。私情を捨てて冷静に大局的なモノの見方をせにゃならん。無知な人間からは冷血漢呼ばわりされて、そりゃあ孤独なもんだ。それでも学問の発展の為に心を鬼にして、冷静に情況を研究されているのだ。お前らみたいに、あったことをそのまま伝えるしか能のないジャーナリストとは次元の違う所で活動されてるんだからそれくらい配慮しろよ！

「週刊プレイボーイ」95年4月25日号より

中沢新一インタビュー〈第2回〉

「宗教学者・中沢の死」

上九一色村の中の〈ロシア〉

しかし、そうは言っても、今度のオウム騒ぎにおいて中沢先生は雑誌「週プレ」で「宗教学者、中沢新一は死んだ！」などと語り、明らかにヘタを打っている。何だありゃあ？　ニーチェじゃあるめえに、何か悪い病気が脳まで回ったんじゃねえかと本気で心配しちゃったよ。どうせ、これで一度死んで三日後ぐらいに生き返って「今度の事件は僕の宗教学者としてのイニシエーションでした」って笑い飛ばすのがいつもの手なんだろうが、大衆相手じゃシャレにならんよ。まっ、確かに中沢先生は、基本的には抗議のハンストをたった二日であきらめたあげく、何もかもべしゃっちゃったあの脆弱な治療大臣こと林郁夫被告と同じインテリのおぼっちゃまくんであられるから、突然の事故にパニクって保身に走ってしまわれたんだろうが、そんなもん育ちがいいんだから仕方ねえよ。俺はそれでも支持するぜえ。

ただ、それにしても事件後にイキナリ豹変して露骨に麻原批判をするのは賢いとは思えないな。そんなに急に変わられると逆に「オウム被害者の会」からいくら貰ったんだろうってカングリられますよ、おれらゲス人間はホントに最低だから。

中沢先生が大きく勘違いしていなさるのは、ファンの心情を全く理解していない事だ。先生の本を全部買うようなチョー熱心な読者なら、たとえ先生が女を犯そうが人殺しをしようが、そんなもん気にしねえんだよ。ましてや雑誌の噂話であったように、女をあてがわれてオウムの提灯記事を書いていようが擁護していようが、そんなもんは先生の学者としての業績とは何の関係もねえんだから、堂々と「俺の見立て通りだ。やっぱりオウムはやってくれた」って能天気にしてりゃいいんだよ。自分が肩入れしていた教団がサリン撒いて人殺したぐらいでイモ引いてんじゃねえよ。金貰ったり女をゴチしてもらったりしてどこが悪い。そんなもん相撲取りだって「ごっちゃんです」ってさんざんやってるぞ。研究には金がかかるんだからいいじゃねえか！

それが「宗教学者、中沢新一は死んだ！」なんて言って、本当に大学を辞めるわけでもねえのにヒステリックにワメくだけワメくんじゃあ、ぶちこわしだよ。だいたい、中沢先生は宗教学者じゃなくて宗教人類学者だろうに。みっともなさは合格なんだが国会の不戦決議以上に意味がねえぞ。その後の信者に向けての慈悲深いコメントも優しくて異様に気持ち悪かったなあ。鬼畜中沢新一が世間並みの良識持ってどうするんだ！　まさかと思うけど本気で反省してんじゃねえだろうな？　俺は人を見下して全てを小馬鹿にしながらヘラヘラ適当にいいかげんでチャランポランで金や女に目がない中沢新一が大好きだ。そんな中沢の文章だからこそ、こっちも妙な崇拝や先入観抜きに馬鹿にしながら冷静に読めるんだよ。だいたい純粋培養されて善行しかしたことのない人間の言説なんて信用できるわけないし、そんな奴には教わりたくも救われたくもない。こんなくだらねえ事で学者を辞めるなんてとんでもねえ。今はとりあえず世間体もあるだろうから悔やんでいるフリをするのも何となく分かるが、ほどほどにして早いとこ元の鬼畜中沢に戻ってほしいもんだ。

宗教がその中に反社会的なものをはらんでいるよ

うに、学者や研究者にも「反」とまではいかなくても、「パンピーの生活なんか知ったこっちゃねえよ、おいらはただただ自分の研究するだけさ」ってな「非」社会的な側面はあって当然だ。だから、もともと倫理感なんか持ちあわせちゃいない中沢先生に反省しろって言う方がどーかしてんだよ。**わあったか、愚民どもー**

今後の展望

そして今回の事件がらみの今後の展開として、これから予測しうる最低の出来事の一つに加害者の家族の自殺がある。

たとえば、俺が見たところ宮崎勤の父親が自殺したニュースに反応したメディアや文化人はほとんどなかったように思う。自殺して半年後ぐらいにやっと出た話だし、阪神大震災の報道が盛り上がっていた時だったからよけいにそうだったのだろう。俺も久々に人を殺したような気分になれた。犯人の宮崎勤の罪はともかく、宮崎の親父に死ななければならない義務などこれっぽっちもなかったはずだ。彼を自殺に追い込んだものは明らかにマスコミ報道と、俺も含めたこの世界そのものだろう。多くの正義の有言無言の圧迫と良心の呵責が彼を死に追い詰めた。人を死に追い込んでも誰も罪に問われない行為がここにあるのだ。

この犯罪未満のサブリミナルゲス犯罪に乾杯だ！正義が最も醜悪な形で現われるイイ例だからな。

オウム事件でも、すでに何人かの被告の母だの父だのが痛々しい懺悔の告白をワイドショーの取材で語っている。「すいません……本当にすみません……」あれこそワイドショーの醍醐味、見るに耐えない極悪鬼畜ショーそのものだ。取材するリポーター、取材される加害者の家族、そしてそれを見る善良な視聴者の三者がみんな傷つくナイスなゲス企画だ。傷つきあって仲良しこよし、人間っていいなあ！

＊

確かに麻原は法によって裁かれる人間かも知れないが、そのことで麻原の両親が自殺に追い込まれなければならない理由など一片も無いはずである。だから俺は麻原の両親の事を考えると胸が痛むね。

麻原が弱視という障害をかかえてこの世に生まれ

てきたとき、多くの障害児の親がそうであるように、麻原の両親はとても悲しかったに違いない。母親は五体満足な子に生んであげられなくてごめんねと自分の事を何度も責めたろう。父親も何とか治療する方法はないかと行く末をとても心配したに違いない。ありふれた言葉だが親が子を想う気持ちはとても強いものだ。それが障害を持った子供であれば尚更である。「この子が障害を乗り越えて、幸せになれますように」「生まれてきて良かったなあと言える人生を送れますように」と何度も泣きながら神仏に手を合わせた事だろう。伝え聞く所によれば麻原家は貧しいうえに長兄が全盲で、麻原の下の弟も弱視だったという。障害児を三人かかえた生活は、我々には想像もつかないぐらい辛いものだったに違いない。俺には、苦労に苦労を重ねた麻原の両親のこれまでの人生は「良い事なんてちっとも無かった」ようにしか思えない。その人生も終わりにさしかかってきた所でこの騒ぎである。麻原がどんな罪を犯していようが、客観的に見れば麻原の両親は「障害児を3人もかかえて貧しく暮らした、苦労の多い人生を送ってきた夫婦」なのである。こんなふうに字で書けばほんの何文字かですむが、彼らの辿ってきた苦しみは気が遠くなるくらい長く辛いものだったろう。せめて、年老いたこの二人には静かな余生があっても良かったのではないか？　善人どもなら考えれば考えるほどやりきれない思いがするんじゃねえか？

あの松本サリン事件の冤罪で騒がれた河野さんの例でもわかるように、現在も、そして今後もずっと、善良な人々が正義の名のもとに多くの電話や手紙を送りつけ、無言の圧力で麻原の両親に襲いかかるだろう。それは徹底的に正義に裏打ちされた行為である。追い討ちをかけるようにワイドショーのリポーターがマイクを片手に「世間に対してどう責任を取るつもりですか」「親として何か一言」「あんたら、どういう育て方したんだ」「遺族の方に申し訳ないと思わないんですか」とやってくる。全く、誰の何を代表して偉そうに聞けるのか知らないが、リポーターの一言一言が鋭い刃となって両親の心の傷を更に深くエグる。この非人道的な攻撃は両親が死ぬまで容赦なく止むことはないだろう。

これが笑わずにおられるか！　「弱者を死に追いやる勘違いの正義」それこそオウムが我々に仕掛け

たサリン攻撃と同じくらい醜悪なものではないか。くっくっくっ、ああ、たまんねえ。もう駄目だ！笑わしてもらうぜえええええ。救いようのないお祭り騒ぎだ。けけけけけけけけけけけけけけけ。そうやって人殺しをして正義を守るがいい。この国は「正義真理教」の狂信者でいっぱいだ！ けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ。感情の壊れている俺にはひたすら喜劇にしか見えねえから楽しいぜ！けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ。

がんばれゲスメディア
がんばれ鬼畜リポーター
がんばれ「正義と善意の人々」たち
罪は一緒に感じてやるよ、
「遺憾に思うが謝罪せず」ってな。

【付記】この原稿を書いてから少しばかり時間があいた。俺の心配は杞憂で、中沢先生は見事に立ち直られ、勢力的に仕事を続け、雑誌『イマーゴ』ではオウム事件についての別冊特集に自ら責任編集をかって出、自分に批判が及ばないような本作りをするという掟破りのウルトラCを見せてくれた。俺は生まれ変わっても解脱するまで中沢先生を見習うぞ～！『諸君』での浅田彰氏との対談でも確実に調子を取り戻している。よかった！ 全然反省していない！ それでこそ中沢先生だ。この姿勢は、俺も含めてオウムをダシに文章を書き散らかした宮台真司ほか大勢の論者も徹底的に見習うべきだろう。

さて八月中旬現在のオウム報道の中での断トツ最低は誰が何といっても大林高士による「八代亜紀と麻原彰晃の親戚疑惑報道」である。いやぁ待った甲斐があったなあ～俺はこういう事件から遠く離れたゲス報道を心待ちにしてたんだ。これぞゲス報道の鑑だねえ。俺がエリザベス女王なら迷わず大林にピューリッツアー賞をやるね（意味不明：編集部註）。このとことん無意義で無意味な報道は、**①「真実の報道」なら何だっていい ②その事で誰か傷つこうが知るもんか ③話題になりゃあ俺の勝ちだ。**という「ゲス報道の三原則」を見事に兼ね備えた、冷酷非情、超ド級のスーパー鬼畜ゲス報道だ。いいお手本を見せて貰った。今後はこの姿勢もきっちり見習ってやる。

この俺の文章を読んで不愉快な気持ちになった奴も多いことだろう。ハイハイ、そういう人には、いくらでも、いつまでも好きなだけ遺憾に思ってあげまちゅからね～。バブバブ、遺憾でちゅ～。

だけど謝罪はしねえぞ。俺は醜い日本人だからな！

やっぱり逃げないわけにはいかないじゃんか！——4・15東京脱出

小泉雅史

こいずみ・まさふみ：一九六二年埼玉県生まれ。某音楽誌の編集者を経て、九一年にクラブ・サウンド・マガジン『remix』を創刊。現在はその発行人。共著『クラブ・ミュージックの文化誌』（JICC出版局）

〝恐ろしいことが起こる〟とウワサされていた魔の4・15（'95年4月15日）の前夜、僕は飼い猫を連れて高校時代からの友人達と一緒に秩父の実家に帰った。目的はもちろん東京脱出だった。いったいどこでどんなことが起こるのかもわからなかったけど、新宿が狙われるだとか、ラジコン・ヘリでサリンが空中散布されるだとか、水道水に細菌兵器を混ぜられるだとか……何のことだかサッパリわからないけどそんな恐ろしい情報を聞いたら、やっぱり逃げないわけにはいかないじゃんか。そんな非現実的でバカなことが起こるはずはないとも思ったが、非現実的でバカなことをやるのがオウムなわけだし……。とりあえず、僕らは忌まわしい事件が再び起こる可能性がまったく0％でない限りは逃げるべきと判断し、東京脱出計画決行となったわけだ。しかし、僕らの4・15、実際には、その当日は温泉&花見を満喫していたのだが……。

確かに今となっては4・15も笑い話かも知れない。

でも、〝恐ろしいことが起こる〟説が単なるデマだとわかっていたなら、あれだけの警察官が街中を警備したり、新宿のデパートが休みになるはずもないだろう。つまり、あの日、オウムが〝恐ろしいこと〟を起こす〝可能性だって充分にあったってことだ。それにしても、あの前夜の街の物々しさ、無気味な感じは何だったんだろう？　まるでハルマゲドン前夜の疑似体験??……だけど、あんな不安な夜はもう二度と体験したくはないな。

当時、地下鉄サリン事件からずっとＴＶや新聞・雑誌の報道も錯綜していたし（特にスポーツ誌と夕刊）、その中から情報の真偽を判断するのは非常に困難な状況だったのも事実だろう。特に4・15の直前なんて、マスコミの情報と、街角で小耳にはさんだウワサ話とで、いったいどちらが信憑性が高いのかもわからないような状況だったし、ＴＶのオウム報道にしても、まるで〝オウムがまたやる〟ことがわかっていながら、パニックを恐れて、それを公表することができないでもいるかのようなもどかしさが感じられたし……（あれでマス・メディア不信になった人も多いだろうな）。

僕の場合は、もっぱら信頼の置ける友人達から得た情報を信じるということにしていたが、その中で僕が最もビビったのが〝キベ情報〟というやつだ。これはその昔ユーミンのアルバムのジャケット・デザインもやったこともあるという元グラフィック・デザイナーのオウム防衛庁長官こと岐部哲也から、その逮捕直前にかつての業界の知人に電話があり、その内容は「4月の15から17日頃まで東京を脱出してくれ」というものだったという話。このウワサがどれだけ信憑性の高いものだったのか、今となってはわからないが、それは一部音楽業界にも流れ、僕もこの話を友人から聞いたことが4・15の東京脱出を決意する直接のきっかけになったほどだ。もしもその〝キベ情報〟が事実だったとするならば、オウムはやはり自作自演によるハルマゲドンを起こすつもりだったのだろうか？　それとも……。

後の情報によると、その4・15にはオウムの信者の多くも上九などに脱出していたという。とすれば、これは信者が麻原の予言を信じて地震か何かを回避するための行為だったとも考えられる。ちょっとオカルトじみた話だが、地震占星学（惑星の配置など

によって地震の起こる場所や確率を予測するものらしい）によると、あの4・15前後にはかなりの高い確率で日本で地震が起こる可能性があるという見方もされていたようだ。これは麻原だけじゃなくて、多くの地震占星学者（って言うんだろうか？）も予知（予言？）していたらしい。実際に、あのドクター中松も4・15前後の地震を予測し、記者会見まで行なっているが、意外にこのことはオウム報道の陰に隠れてあまり知られていないようだ。

幸いにも4・15には大きな地震は起きなかった。しかし、翌日の4・16には新潟で震度4の地震が、また4・17には静岡で震度3（だったと思う）の地震が起こっている。恐ろしいことに、この事実は殆どまったくと言っていいくらい無視されてしまったようだけど、これって単なる偶然なんだろうか？（ちなみに、ドクター中松はその翌日、地震の予知に成功したとTVで自慢していたが…。）いずれにせよ、この地震占星学というものはちょっと気になるんだよなぁ。

悪魔狂団のハルマゲドン思想なんてクソくらえだけど、ただ、永遠に続くはずだった僕らの平和な日

うわさ話迷走

「15日異変」

都内 ビル臨時休業 鉄道など警戒

オウム真理教の一連の事件に絡んで「四月十五日に異変が起きる」という情報が独り歩きし混乱を引き起こしている。麻原彰晃代表（四〇）の「予言」がきっかけ。都内では、駅ビルが臨時休業、百貨店や鉄道が特別警戒する騒ぎになっている。

◇駅ビル

新宿駅南口のルミネ新宿店（約二百店舗）は十五日の臨時休業を決め、十二日午後から入居の各店舗に事情を説明した。同店は「空調関係の機械の点検をするのが主な理由。でも世間で騒がれていることも心配。駅のそばだけに、要警戒の意味も含めて休業を決めました」と話す。同駅東口の「マイ・シティ」（二百五十五店舗）も十五日の全館臨時休業を決め、十三日に各店舗に通知した。当日は従業員も入館できない。同ビルを経営する新宿ステーションビルディング総務部は「電源設備点検のため」と説明している。

また、京王百貨店新宿店では、「うわさで動くのも変だが警戒するに越したことはない」と十四日から十六日までの三日間、社員によるデパート周辺の見回り要員を増やして警戒に当たる。また、三越新宿店でも警察の要請を受け、十三日から十六日まで、化粧室の中まで社員が巡回するなど警備を強化している。

◇鉄道

首都圏の鉄道各社も警戒態勢を強化。JR東日本では、現在一日当たり延べ約千人の職員が巡回するなどして不審物などをチェックしているが、ターミナル駅を中心に増員を検討。営団地下鉄も要員を増やす。小田急、西武鉄道なども警察の要請を受け、全駅のコインロッカーを十四日から十七日まで使用中止にする。東武鉄道は都内のロッカーの使用を中止している。

◇予言

同教団外報部によると、予言とされているのは一月八日に放送したロシアからのラジオ番組の内容。麻原代表が対談の中で地震が起きる時期に触れ、「四月十五日にも起きるんだよね」と話している。今月になって夕刊紙、テレビなどが、麻原代表が信者向けに「四月十五日に新たな出来事が起きる』と予言したという」などと報道した。予言について、上祐史浩外報部長は十三日の会見で「麻原尊師を信じており、備えあれば憂いなしということですか。地震に備え、物は片付け、倒れてきても大丈夫なようにしたい」と語った。

◇街・学校

この話は都内の飲食店街や職場などで尾ひれもついて拡大。「鉄道の××線が攻撃される」「○○百貨店が狙われている」「サリンがまかれる」など、さまざまな会話が交わされるようになった。

東京・赤坂の女性飲食店従業員（二〇）は「十五日は出勤日だけど休みたい」と心配そうな表情。新宿区の女性塾講師（三〇）は「塾の子供たちには『××線には乗らない方がいいよ』と注意した」と話していた。

首都圏の小・中学校でも、子供たちの話題に。横浜市内の女子（一三）は「地震が来ると聞いてちょっと怖い。遊び気分で話しているだけだけど、十五日はなるべく家にいるつもり」。千代田区内の小学六年の女子（一二）は「先生に怒られるから、友達同士でこっそり話している」と話している。

「うわさとニュースの研究会」代表の川上善郎・文教大教授（社会心理学）の話　麻原代表の予言能力というより、サリンが使われる可能性があるという不安が第一。あれだけ大規模な捜査をしながら、サリンが出てこない不安、厳重な警戒の中で警察庁長官が銃撃された不安がある。テレビの扱い方が過剰で、メディアは十五日前には確実な情報がない限り、取り上げるべきではないと思う。

不安だが…冷静になるしかない

劇作家、山崎哲さんの話　うわさが広まった背景には、円高、阪神大震災、サリン、警察庁長官銃撃事件と続き、世の中、どこかで何かが変わりつつあるという不安がある。東京、大阪の知事選もそうした意識の反映ではないか。受け取る側は冷静になるしかない。

常も、もしかするとそれはいつか終りがくるのではないか？……などと時々考えるようになった。これはオウム事件以来、というよりも、あの阪神大震災以来のことなんだけど。

　必要最小限の社会性は持ってるフリをしてうまくやりつつも、実は社会に対しては徹底的に無関心のまま流れに身をまかせ、好きな人達との小さなコミュニティーの中だけで、争うことなく、闘うことなく、のほほんと人生を送りたかった僕としては、日本が社会的にヤバくなるのが最もマズいことなんだよな。これまでに一度しか選挙で投票したこともなく、しかもＵＦＯ党に入れてしまった大バカな俺が(泣)、いよいよこの先、投票とかも本気でしなくちゃならないような時代が訪れつつあるのかも知れない。この社会的大事件を引き起こしたオウムは、僕の未来に対するイージーなライフ・ヴィジョンをちょっとだけ狂わせたということになるのかもね。

　たとえ世界が終わったとしても、僕と僕の好きな人達だけはみんな生き残る——これは子供の頃にノストラダムスの大予言の話を聞いた時に僕が想い描いた理想的なヴィジョンだった。きっとそうなると信じていた。そのことを想像すると、なぜか幸福な気持ちになったものだ。僕は今でもこのヴィジョンをちょっと引きずっているのかも知れない。だけど、これってもしかしてオウムっぽい発想なのでしょうか？（トホホ……）

（追記）少し前に週刊誌で読んだ情報ですが、地震占星学によると'95年9月10日前後が危ないという説もあるようです。いったいどのくらい信憑性があるものなのかサッパリわかりませんが、念のため、僕はまたどっかへ友人と逃げようかなと思っています。なるべくなら国外脱出がいいかも。そう、ハワイ辺りが楽しそうだな……（逃げるが勝ち？）。

地球征服を企む、ある男臭いアジア人の話

中原昌也

なかはら・まさや：一九七〇年東京生まれ。無職。音楽ユニット『暴力温泉芸者』主宰。ブリクサやソニック・ユースやナイナイや小山田圭吾をはじめ多彩な共演でも知られるニュータイプのノイズ系ミュージシャン。映画研究家としても知られる。共著に『悪趣味洋画劇場』（洋泉社）など。

地球征服を企む悪者は過去にもたくさんいた。当然彼らの野望はもろくも崩れ去ることになるわけだが、今回はその中でも特に印象的に残った人物をひとり紹介しようと思う。

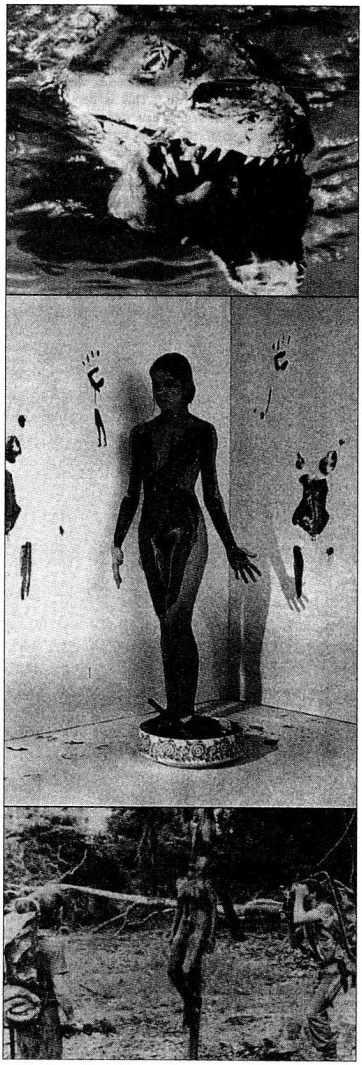
＊

日本ではビデオのみの公開となった作品で『**香港シンジケート　人類みな殺し10秒前！**』というのがある。これはフィリピン映画の巨匠リノ・ブロッカのもとで助監督を務めていた**ヨルリ・スワンキ**が香港のショー・ブラザースに呼ばれて製作したものだ。

ヨルリ監督は六〇年代南カリフォルニア大学で映画を学び、イタリアのネオ・リアリズムに感化され、いくつかの試作短編映画で様々な国のアマチュア映画祭で賞を取っている。本国では三つの映画学校で教鞭を執り、フィリピン初のロッセリーニについての研究書『**ロッセリーニ　その人と映画**』や、世界的なロベール・ブレッソン再評価のきっかけとなった論文を『カイエ・デュ・シネマ』に発表したりと、評論家活動が高じての商業映画界入りとなるわけである。

経歴を見ればわかるとおり、バリバリの理論家である彼は、実生活においてよき夫でありよき父であるらしいが（彼の家族や近所に住む人々の証言に基づく）、ひとたび撮影現場に入れば鬼となり、暴力行為も辞さない男だった。六八年の処女作『マニラ特急』（日本ではシネクラブにて上映）は、「ロレンスの『息子と恋人』をカミュ風にアレンジし、スタン・ブラッケージ風の難解なイメージ・ショットをプラスして、ラストは原作にないアクション・シーンで終る」（仏『ポジティヴ』誌六八年五月号本人インタビューより抜粋）という作品にもかかわらず大ヒットした。次回作の『人民教会の掟』（七〇年日本未公開）ではアメリカからロバート・ミッチャム、音楽監督としてジョン・ウィリアム（無論『スター・ウォーズ』のではなくクラシック・ギターの名手）を起用するという従来のフィリピン映画では考えられない企画に着手するが、資金面やアメリカ人スタッフ、キャストのスケジュール等の問題から何度も製作を中断せざるをえなくなり、最終的にはプロデューサーの手によって完成したもの（ミッチャム出演シーンはたった五分に削られ、音楽もフィリピン民謡に差し替えられた）が公開された。よってみずからのフィルモグラフィから消されている呪われた作品になってしまった。ヨルリ本人によればそれはアメリカン・ニュー・シネマを意識したものらしいが、詳しくは不明だ。

その後テレビ用のドラマ脚本をいくつか手掛けたのち、渡米。B級映画専門会社AIPでフィリピン映画買い付けのコーディネーターとして働き、当時『刑事コロンボ』等の演出で活躍していたジョセフ・サージェント監督と意気投合し、製作プロダクション〝プラスティック・フィルムズ〟を設立。ヨルリが学生時代に大学で結成した劇団〝ルラーダ〟（主にブレヒトやベケットを上演していたらしい）のための書き下ろし戯曲を映画用脚本に作り直した作品『手のひらの上の自由』（七二年）がユニバーサルの重役たちに認められ、七四年にはリチャード・マティスンのオリジナル脚本で『SF／悪魔のボディ・ペインティング』（日本ではTV放映のみ）をゴードン・ダグラスと共同監督している。

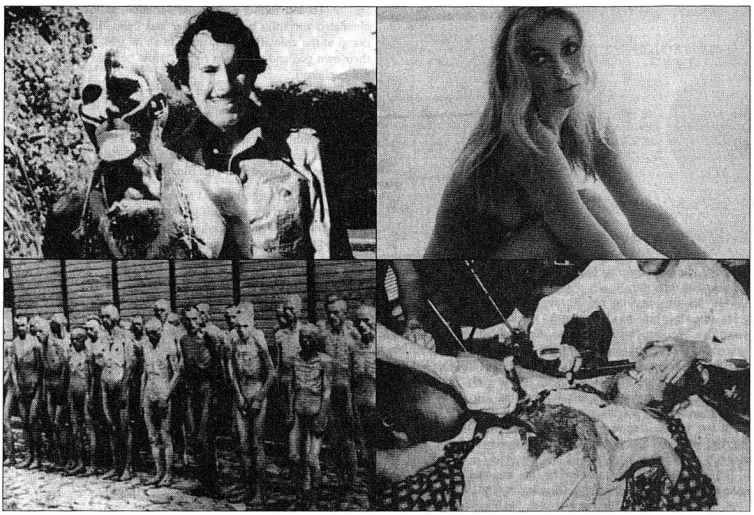


デビッド・ソウル扮するテニス・プレイヤーが企業スパイ戦争に巻き込まれたあげく、ＬＳＤのような幻覚剤〝**オルダス581**〟を投与され、ラストでは全身にボディ・ペインティングを施したヒッピーの群団に惨殺されるという悪夢のような作品（本人によれば〝カフカ的〟なものを目指したという）だが、近年カルトムービーとして人気が高い（余談だがヒッピー集団の中に、スターになる寸前のスタローンの姿が見られる）。その後〝プラスティック・フィルムズ〟が倒産。ヨルリはフィリピン帰りを余儀なくされる。

その後七六年まで音楽プロモーターとして、アイズレー・ブラザース、クール&ザ・ギャング、ティナ・ターナー、オージェイズ、アイザック・ヘイズ、スティービー・ワンダー、ジャクソン・ファイヴ等のマニラ公演を行う。そして七七年には映画の世界にふたたび足を踏み入れ、香港で撮影に入ることになる。主演にオーソン・ウェルズを予定していたが結局クランクイン三日前に断られ、学生時代の経験を活かして、ヨルリみずからが出演することになっ

た。

その凄まじい演技もさることながら、映画そのものが発する狂気によって『**香港シンジケート**』は人々の脳裏に刻まれることになった。ヨルリ演ずる**Mr.サンダー**は映画史上最悪の悪人である。これは映画に限っての話ではない。**サドの小説に出てくる人物など、Mr.サンダーに比べれば保父や保母の職が似合いそうな**人々に見えてくる。それほど、Mr.サンダーはすごい悪党なのだ。一応、敵対するヒーローとして007のような男が出てきて、普通のアクション映画として見ていると、始まって二十分くらいのところで、その男はMr.サンダーの手下によって残酷かつ卑劣な手段で殺されてしまう。その後はひたすら誰も止めることができぬまま、人類を滅亡させるための悪事が羅列されていくのみなのだ。そして各国を核攻撃する前に世界中の美女を誘拐し、**あらゆる性技を調教し、すべての歯を抜いてしまう**のだ。水爆で世界中の人々が焼け死んでいる最中、Mr.サンダーは地下五千マイルの核シェルターで**約三百人の美女とSEXしまくる**のだ。その間、狂ったかのよ



うにリヒャルト・ワーグナーが鳴り響く。

荒野となった地上を生き残ったわずかな人々が食料を求めてさまよう。そこへ人工衛星から映像が投影され、雲でできたスクリーンに料理番組やお菓子のコマーシャルが映し出される。これは**もしかすると文明批判なのかもしれない**が、あまり効力があるように思えない。

それが終わると今度はその年の**国際美人コンテスト一位のアメリカ人金髪女と熱いＳＥＸをしている様子**が生中継で雲に現れる。それを見て生き延びた男たちは手に手にペニスを取り出して**オナニー**を始める。最後、Mr.サンダーのいく恍惚の表情がストップモーションで現われ、その上にスーパーが重なる。**〝今からでも遅くない。人類はこれを食い止めなければならない〟**見てる側は何も悪くないにもかかわらず説教されてイヤな気分になる。〝食い止める〟どころかこれを見た男性全員、明日にでもMr.サンダーになりたいと思うにちがいない。そういう意味では生きる希望を与えるよい映画なのかもしれない。

が、ヨルリ監督の映画界でもキャリアはこれで終

（編集部註）なお本稿の図版および内容には事実と関係ないものも含まれていることをおことわりしておきます。

る。**当然興業的にも失敗**し、それ以来精神病院へ出入りするようになる。そして七九年十一月、タイにあるハンバーガーショップで謎の爆弾テロに遭い、死亡する。

その後、当局の調査でこれが**ヨルリ氏の作ったプラスチック爆弾によるものではないか**と疑惑が持たれたが、いまではすべてが藪の中だ。しかし『香港シンジケート』撮影中に書かれた手記にその真実が語られているのだ。彼はこの映画がヒットして億万長者になるつもりだったらしい。そしてその金でMr.サンダーと**まったく同じことをする**つもりであったというのだ。結局それは失敗に終り、彼を死に導いた。

＊

現実という壁に彼なりの方法で立ち向かった勇気を僕らは忘れてはいけない。良識ある人々から見ればそれは風車に突進していったドン・キホーテと何ら変わりないのかもしれない。しかし、方向性はどうであれ、**スケールのでかい夢を捨てずに生き急いだ、男臭いロマンを感じさせる男**、ヨルリ監督を僕は否定することができない。

すべては70年代ってこと？——オカルト、超能力、大予言

木村重樹

きむら・しげき：一九六二年東京生まれ。東京芸術大学美術学部芸術学科卒業。株式会社ブランク取締役。編集者。本書では、本文組レイアウトも兼任してつらい目に逢う。共著に『２００ロック語事典』（立風書房）、ユリイカ臨時増刊『悪趣味大全』など。

ハルマゲドン、イニシエーション、カルマ、チャクラ、輪廻、解脱——きっかけは何であれ、今回のオウム真理教の一連の事件の発覚に伴う、彼らの世界観、使用していたジャーゴンや活動内容の顕在化は、これまでの日本なら、ある種の宗教、科学、哲学思想として、限定された層にしか理解され所有されえなかった教養や専門知識を、にわかオーヴァーグラウンドへと引きずりあげたような感すらある。どうせ、すぐ忘れられるだろうけど。

無差別テロに駆り立てられたオウム信者を、理解不能の異物／狂気として忌み嫌う言説が日々まき散らされる一方で、そこにたちあらわれた用語や世界観を「懐かしいもの」「既知の風景」として受けとめたひとも少なくなかろう（まして、本書を読んでいただいてる奇特な方なら尚のことだ）。だが、それをオカルティズムや神秘学や隠秘学と呼ぼうが、あるいはニューサイエンスとかニューエイジと呼ぼうが、そういった「学校では教えてくれない」世界観や叡知の大系を、私たち日本人が、学者や特権階級ではなく、ごく一般大衆のレベルで知るようにな

ったのは、ほんのここ二〜三十年の間だろう。さらにいえば、その端緒はおそらく七〇年代というディケイドに認められる。

＊

英米文学評論家の風間賢二氏は「恐怖、この永遠なるもの」というモダンホラー論のなかで、ことアメリカにおいて恐怖小説が七〇年代以降、かくも大衆の支持をえ（ペイパーバックとはいえ）百万部以上のベストセラーを頻発した背景として、それに先行する六〇年代という〈死と暴力〉の時代の存在を指摘する。ケネディ大統領、マルコムX、キング牧師等の暗殺事件、ヴェトナム戦争の泥沼化、黒人による公民権運動など各所で勃発する暴動……これら日常生活において顕在化した〈死と暴力〉のみならず、テクノロジーの発展がもたらす機能的合理主義は、「隠れた次元」での〈死と暴力〉にも自分たちアメリカ国民が支配されていることを呈示した。対抗文化（カウンター・カルチャー）とは、時の若者たちがそうした機能的合理主義から逃走するための運動にほかならず……

「その逃走の際の若者たちの足になったのが、〝意識の脱近代化〟と〝十九世紀末から一九二〇年代の感性への回帰及びその拡大〟であった。

〝意識の脱近代化〟への衝動は、必然的に神秘主義・オカルティズムの復活を将来した。その結果、若者たちは夢と現実、狂気、幼児期の空想、超自然的現象、幻覚剤による内宇宙へのトリップなど、従来の社会規範からは影の部分として排除されてきた異常な経験を通して〝内なる本来の自己〟を探索することになったのである（後略）」

教科書的な記述を試みれば、戦後の急速な経済復興にも陰りがみえ、あまつさえ狂乱物価やオイルショックをもろに受け、公害や交通事故など文明社会のツケが本格的に回ってきた時代……それが日本の七〇年代初頭だった。同時に、欧米におけるカウンター・カルチャーに相当するものこそ、ついぞ持ちえなかったとはいえ、学生運動や様々な若者文化の萌芽が認められた六〇年代を経た日本の七〇年代は、いわゆるサブカルチャー的な領域が、様々なメディアを経て拡張されていった時期だった。人々の不安や恐怖は興味や好奇心と表裏をなし、覗き見趣味的なオカルト感覚（後述するが、この言葉もまた、こ

の時代に流布し、定着した)、幻想文学や異端思想などへの関心、超自然・超宇宙などの志向、のちに精神世界とされる広義の宗教性を込めた領域への憧憬……こうした知識や情報を流布した《メディア》として、あまたの書物や雑誌などの活字媒体の存在と活躍は見逃すことができない。

かくいう筆者も七〇年代当時といえば、まだ小中学生の鼻タレ小僧の時分だったのだが、今回の「オウム騒動」においてたち現われた、あまたあるトピックの大半は、自分にとってはそういうジュヴナイル期の、青臭い想いを想起させずにはいられないものだった。別段そういった世界や分野に、成年後も尚執着している御仁を「子供じみた輩」と見做しているわけでは決してないのだが。

前述したような経済成長から一転しての景気崩壊や環境問題の噴出で、七〇年代冒頭は日本人に払拭することのできない未来への不安感、終末幻想を擦りこむことになった、とされている。たしかに象徴的なタームとして、人口に膾炙した「オカルト」「超能力」「大予言」……これらが一斉に噴出したのが一九七〇年代初頭のことだった

「オカルト(不思議)」大好き

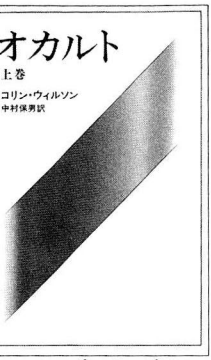
七三年はウィリアム・フリードキン監督による映画『エクソシスト』が日本公開された年だった。十二歳の少女リーガンがある日、部屋から外に出なくなり、親に下品な言葉を投げ、十字架でオナニーをし、緑のゲロ(胆汁?)を吐きつけるなど、奇異な言動を取りだす。最初は複雑な家庭の事情からきた、重症の『積み木崩し』か?と疑った母親も、心理学や医学では解明できないこの憑依状態から娘を救うため、二人の悪魔祓い師を雇う。ところがこの悪魔祓い師もまた母娘同様、心にトラウマをも(ち、なおかつ科学/宗教、家族/個人といった、しごくオウム的なアポリアにハマ)っていたため、少女に取り付いた悪霊はそうそう簡単に宿主を明け渡さない……あまりの恐怖から欧米では失神者や気絶者が続出した本作だが、そもそも熱烈な信仰的素地をもたない日本では、そこまで社会的な現象こそ起きなかったものの、派手でショッキングな特撮シーンが話題を呼んで映画は大ヒット。ピーター・ブラッディ

による原作小説は新潮社から発行された。

処女作『アウトサイダー』の国際的なヒットで時代の寵児となったコリン・ウィルソンが「出版社の要請から職人的に仕上げた」『**オカルト**』もまた、七三年に新潮社から邦訳が刊行される。

おりからの世界的なオカルト・ブームと同期した同書は、世界中でベストセラーを記録し、ウィルソン自身にとっても『アウトサイダー』以来、久方振りのヒットとなり、日本だけでも（上下巻合わせて）二〇万部という売り上げをみせた。

伝統的神秘主義と心霊学や超能力、超自然現象などを併せて扱ったという意味でも、同書のスタンスは、『ムー』、『トワイライトゾーン』、『メビウス』、『不可思議』、『ゴッドマガジン』、『AZ（アズ）』、『ワンダーライフ』『マヤ』、『パワースペース』など、七〇年代後半～八〇年代に乱立した「オカルト総合誌」のコンテンツを取り揃えたものといえる。



ちなみに同書が初訳された七〇年代前半は、まだこうした神秘学、心霊学分野の紹介が今ほど進展してなかったらしく、初版時におけるオカルティストなどの表記も、現在のそれとずいぶん違っている。ざっと捲っただけでも、ディアン・フォーテュン、アレイスター・クラウリー、ゲオルギウス・イヴァノヴィッチ・ガルジェフなどが散見される。翻訳の名手として誉高い中村保男氏の訳業であることを思えば、いかに当時は神秘思想の領域がマイナーなものだったかを知らしめる話だろう（ちなみに同書は八〇年に平河出版社より改訂され今年には河出文庫で再刊された）。

こどもの国のカタストロフ

また七三年のベストセラーとして、小松左京の『**日本沈没**』（光文社）も忘れるわけにはいかない。急激な地殻変動によって、日本列島が海面下に沈没するという趣向の同書は、上下併せて五〇〇万部近い大ヒットとなり、映画やラジオドラマにもなった（その後小説自体は永らく品切状態だったが、なんと今年頭の阪神大震災を機に光文社文庫で復刊）。

漫画の世界でも七〇年代前半は、楳図かずお『**漂流教室**』や永井豪の『**デビルマン**』『**バイオレンス・ジャック**』などのカタストロフをモティーフにしたマンガが相次いで発表、時の青少年にただならぬ影響をあたえたことはつとに知られている。

人類により地球の先住民であったデーモン一族と、そこからドロップアウトして人類と合体した（堕天使ならぬ堕悪魔こと）デビルマンの地球を賭けた最期の戦いは、明らかに地球規模での最終戦争を匂わせた黙示録的な結末だったし、おりからの災害不安、破滅パニックブームにたいする永井からの回答ともいえる『バイオレンス・ジャック』は、そのスケールの遠大さと残虐描写で、連載半ばにして中断。のちに月刊誌や青年誌へと舞台を移していく。

＊

同年のもう一冊の国民的ベストセラーである五島勉の『**ノストラダムスの大予言**』については、今回のオウム騒動でも様々な所で追究や論評があったし、ここで繰り返すまでもなかろう（なかでも『宝島30』九五年七月号の宮崎哲弥氏による「すべては『ノストラダムスの大予言』からは始まった」が秀逸）。

とにかく九五年五月時点で、じつに四五〇刷を記録する、凄まじい国民的ロングセラーでもあることは、いくら強調してもしすぎではない。

八〇年代以降大予言ブームが再燃し、オウムのみならず、一連の（有名な）新新宗教団体が、こうした滅亡予知や黙示録的終末観を大仰に吹聴し、大衆の不安心理につけこむことで、教勢拡大に利用した経緯も、また記憶に新しいところである。

ところで私的な記憶から、ここにあえてつけ加えさせていただくならば、ノストラダムスという人物

▼世界最大の予言を詩で綴わした、ノストラダムスも、当時はだれも知らず、とてもさびしい生活だった。

(189)

▶ノストラダムスの像

★ノストラダムスの予言

- 十八世紀紀のフランス革命と、ルイ十四世の死を予言。
- ドイツにヒトラーが現われ、第二次大戦が起こると予言。また、日本とアメリカの戦争（広島と長崎の原爆）を予言している。
- ロシア革命を予言。
- 一九九九年には、宇宙から侵略者がやって来るが、地球人がこれを防ぐと予言。
- 紀元七千年には、世界の終わりがやってきて、人間は神のさばきを受けるという。

世界最大の予言者

「陛下は、四十一歳のときに決闘をして、頭にけがをし、盲目になって死にます……」

一五四八年のこと、そのころ医者をしていたノストラダムスは、フランスの王、アンリ二世の運命をこう予言した……。

もちろん、これはずばりと当たったが、ノストラダムスが世界最大の予言者といわれるようになったのは四百年以上もたった最近のことである。

一五〇三年、フランスのサンレミというところに生まれたノストラダムスは四行の詩の形で、一五五五年に、フランス革命から紀元七千年までを予言する「ノストラダムスの諸世紀」という本を書いた。

(188)

一五六六年七月一日、ノストラダムスは机に向かったまま死んだが、自分の死はもちろん、世界の歴史を王の表のように次つぎと当てているのだ。予言は百パーセント当たり、日本がアメリカを急襲した真珠湾攻撃やアメリカの戦死者が三十万人という数まで当て、最後には原爆で日本が負けるとまで書いている。

の存在と彼の予言の凶々しさを子供心に知らせしめ、不安と恐怖と好奇心をかきたてた書物として、五島勉の『～大予言』に先行するものが、たしかあったはずだ。

七一年の十二月にジュニア・チャンピオン・シリーズの一冊として学習研究社より刊行された『**世界のなぞ世界のふしぎ**』がそれである。

子供向けのノンフィクション読本として佐藤有文の著した同書には、ヒマラヤの雪男やネス湖の怪獣から、セントエルモの火、シーラカンス、アトランティス大陸、ストーンサークル、ブードゥー教、ニューギニアのミイラ、アポロの見たUFO等々、タイトルどおり《世界の謎と不思議》のトピックが網羅されている。

そして、それらの《なぞとふしぎ》に混じって、世界の超能力者や予言者のコーナーが設けられていた。「未来を見る予言者のなぞ」として、まずケネディ大統領の暗殺を予言したジーン・ディクソン夫人が紹介され、そして続いての188～189ページの見開きにあるのが、世界最大の予言者「ノストラダムス」である。

「陛下は、四一歳のときに決闘をして、頭にけがをし、盲目になって死にます……。」

一五四八年のこと、そのころ医者をしていたノストラダムスは、フランスの王、アンリ二世の運命をこう予言した……。

もちろん、これはずばりと当たったが、ノストラダムスが世界最大の予言者といわれるようになったのは四百年以上もたった最近のことである。

一五〇三年、フランスのサンレミというところに生まれたノストラダムスは四行の詩の形で、一五五五年に、フランス革命から紀元七千年までを予言する『ノストラダムスの諸世紀』という本を書いた。

一五六六年七月一日、ノストラダムスは机に向かったまま死んだが、自分の死はもちろん、世界の歴史を上の表のように次つぎと当てているのだ。予言は百パーセント当たり、日本がアメリカを急襲した真珠湾攻撃やアメリカの戦死者が三十万人という数まで当て、最後にが原爆で日本が負けるとまで書いている。

ちなみに上の表とはこのようなものである。

★ノストラダムスの予言

●十八世紀末のフランス革命と、ルイ十四世の死を予言。

●ドイツにヒトラーが現われ、第二次世界大戦が起こると予言。また日本とアメリカの戦争で広島と長崎の原爆投下を予言している。

●ロシア革命を予言

●一九九九年には、宇宙から侵略者がやって来るが、地球人はこれを防ぐと予言。

●紀元前七千年には、世界の終わりがやってきて、人間が神のさばきを受けるという。

ここでの佐藤氏の説明によれば、一九九九年には「宇宙から侵略者がやって来る」が「地球人はこれを防ぐ」とあっさり断定している。幼な心に、大人になれば宇宙からの侵略者に対面できるんだ！ということへの期待と不安が交錯したものの、決して五島氏や一連の新新宗教教祖の煽り立てる、目先のハ

ルマゲドン的な「終末観」は、ここからはうかがえない。たしかに「紀元前七千年には、世界の終わりがやってくる」のかもしれないけれど、そんなロングスパンのヴィジョンなど子供が、いや一般人がいだけようはずもない。

佐藤氏の説明には、なまじ背景や歴史や国際情勢などにたいする説明や推測が一切ないし、その解釈の論拠も曖昧だとはいえ、そのぶん逆に、じつに簡潔にノストラダムス伝承のエッセンスを汲んだコラムになっており、私じしん本書を熱読したのちに『〜大予言』に接したクチとしては、後者のまわりくどく、うしろ向きでダウナーな予言解釈と未来予告には、子供ながら辟易した記憶がある。

＊

余談といえば、本書『世界のなぞ世界のふしぎ』のような「謎・不思議」路線の単行本の思いがけぬ好評に気をよくしたのだろう。学研は七〇年代終盤に、中高校生を中心読者対象とするオカルト娯楽雑誌『ムー』を創刊。「世界の謎と不思議に挑戦するスーパー・ミステリー・マガジン」がキャッチフレーズ。南山宏、中岡俊哉らを顧問に据え、UFO、超能力、予言、古代文明、心霊などをテーマとし、ノンフィクション・ミステリーの読み物を主体に、現地取材記事などを交え、カラー図版による怪奇現象の分析や不思議体験ページなどが好評をはくし、最大部数は三五万部をほこった。

後発の『トワイライトゾーン』と併せ、多感な青少年少女に「謎と不思議」を散々吹き込みつづけてきた経緯は、皆様も御承知のことだろう。

不死身なら、殺してみよう、BC兵器……

大予言とともにこの時期ブームになったトピックといえば「超能力」は外せないところだ。スプーンを曲げる超能力者という触れ込みで、これまた七三年に来日したユダヤ人ユリ・ゲラーにいたっては、先程ソロCDがモンドミュージックの延長上で復刻されたことでも記憶に新しいが、ここではちょっとばかり飛躍して（超能力といってもスプーン曲げといったケチ臭い代物ではなく）、スケールのどデカい能力……不死身というテーマを引き合いに出してみたい。

ハルマゲドンなる言葉を「ムー」の読者レベルから、一段とポピュラーなものにした物語が、かの角川映画で配給された『幻魔大戦　HARMAGEDON』だった。『幻魔大戦』はもともと、一九六八年頃『少年マガジン』に連載されたマンガで、石森章太郎が絵、原作者が平井和正だった。ところが七八年に『新・幻魔大戦』をトクマノベルで上梓、さらに七九年より角川文庫版『幻魔大戦』、ほぼ同時期に『真・幻魔大戦』といくつかのパラレル・ワールドとして展開、一大叙事詩的な大作となった。

ちなみに平井氏の『幻魔大戦』以前の代表作として衆目の一致するところが「ウルフガイ・シリーズ」だった。不死身の狼男を主人公にしたこのシリーズは、大藪春彦の系譜に乗り、のちの菊地秀行や夢枕獏らに先駆けるサイキック・バイオレンス・ピカレスクSF小説の白眉として、時の若者に「カルト」的な熱狂をよんだ。

ところがその一流バイオレンス・ロマンの風向きが怪しくなったのが、七六年の『人狼白書』だった。不死身の狼男は片隅に追いやられ、天使やら悪魔やらが跳梁跋扈してくる。この路線は続編『人狼天使』でさらに顕著になる。

また前後して平井は「天使と出会った」と公言しはじめる。これは大天使ミカエルの生まれ変わりを自称する高橋佳子との邂逅を示していたようだ。高橋佳子は新興宗教団体GLAの始祖高橋信二の長女であり、父亡き後、弱冠二十歳で教団の指導者となる。彼女の主著『真創世記』三部作は（当時のウルフガイ・シリーズの版元）祥伝社ノン・ブックスから刊行されたのだが、その際、口述筆記を担当したのが、他ならぬ作家の平井氏だったという。

この「転向」後のウルフガイの衣鉢をついだ『幻魔大戦』は、明確な展開が認められるのはせいぜい1～2巻のうちで、そのあとは延々と小説に登場する宗教サークルの内部抗争や新宗教団体の確執の話に終始してしまう。本作を契機に平井離れをする読者も相当数いたが、それ以上に「魂の覚醒を迫られる」として熱狂的なヒライストに入信した新たな読者も少なくなかったと伝え聞く。『幻魔大戦』をオ

ウム事件後に読み直すというのも、興味深い経験かもしれないが、どちらかというと、あの時期に脱落した古参の読者としては、むしろ「ウルフガイ」の方にこだわってみることにしよう。

平井和正の「ウルフガイ」には大きく二つのシリーズがある。**「ウルフガイ」シリーズ**は三人称小説で主人公の犬神明は若い青年、**「アダルト・ウルフガイ」シリーズ**は、中年のルポライターの犬神明を主人公とした一人称小説。慣れないとややこしいが、ともに同名の主人公は満月の前後になると不死身になる特異体質の生命体で、その超人的な体質を狙うCIAや中共工作員らが跋扈する国際的謀略へと、主人公の犬神明は巻き込まれていく。

ヨーロッパの「狼男伝説」に着想をえた異色の伝奇SFは、六〇年代終盤～七〇年代に書き継がれ、著者の予想を大きく上回るファンを獲得していった。

今回読み返していて驚愕したことは、これらのシリーズの双方に、様々な化学兵器が実名で登場することである。二箇所ほど例を挙げよう。

「ドクターの話を聞いてたまげたよ。あんたは、世界にまたとない基調な学術的生物だそうだ。ネス湖のモンスターをしのぐ、な。この二日間、あんたがどれほど大量の毒物を投与されたか知ってるかい？シアン化合物、サリン、ソマン系の神経ガス、ハブやコブラの蛇毒、毒フグのテトロドトキシン。並みの人間だったら千回死んでいるそうだ」

（『狼男だよ』ウルフガイ別巻1
第2部・狼は死なず、p164
ハヤカワ文庫版より）

ちなみに同書は一九六九年に既に執筆され、立風書房より刊行されていた。以下は数年後に文庫化された際の著者の弁だ。「一九六九年には、まさに野放図な人類萬歳の俗流バラ色未来学が猖獗をきわめていたのです。七〇年万博を境いに、澎湃と盛り上がってきた環境破壊に対するきびしい反省への推移を考えると、信じがたいほどです。」（同書文庫版への「第二のあとがき」より p347～348）

「諸君は化学生物学兵器の威力をご存じだろうか。たとえばナチス・ドイツが開発したGガス、タブン、サリン、ソマンの場合はこうだ。諸君のいる六畳ほどの部屋に、Gガスをスポイトで一滴落とす。Gガスが気化すると同時に、諸君は鼻汁と唾液と涙をとめどもなく流し、滅茶苦茶に全身を痙攣させてぶっ倒れ、七転八倒する。すべての臓腑を雑布のようにぎりぎり絞られる言語を絶した激痛が襲いかかり、呼吸はできず全身の水分を冷汗にかえてしぼりだしながら、胃の内容物と粘液と血を嘔吐する。むろん汚物はたれ流しだ。すべての筋肉がでたらめに痙攣し、四肢は奇怪な形によじれ、倒れたまま何度も何度も跳びはね、恐ろしい苦悶の中で死んで行くのだ。この間十五分、地獄の苦しみが続く。しかも諸君がなぜ死んだか、医者も死因を知ることができない。

　このように恐ろしい死に方を諸君にもたらすGガスは、農薬を製造する工場でいくらでも大量生産がきく。生産コストも安い。

　十トンのGガスを飛行機でエアロゾルすれば東京都民一千万人は瞬時に全滅だ。少数のゲリラが浄水場にGガスを投入しても同じことが起きる。水に溶解したGガスは、効力を半減するのに三〇時間もかかるのだ。さらにGガスの数百倍の効力を持ち、治療薬の使えない神経ガスも続々登場している。

　生物学兵器として使われるボツリヌス菌はもっと凄い。わずか一オンス（二八・四グラム）で二億二千万人を殺すことができる（以下略）」

（『狼よ、故郷を見よ』ウルフガイ別巻2
地底の狼男、p54〜55、ハヤカワ文庫版より）

　もちろん、単なる偶然なのかもしれない。そもそも化学兵器や生物兵器にかんして一般人が得ることのできる情報には限界があるだろうし、著者の平井氏が執筆のさいにあたった資料のレベルが、オウムのそれとさほど違わないものだとしても、驚くにはあたらない。とにかく不死身人間＝超人という設定なしには、かくも残虐非道きわまりない殺人システムがこと細かに描写されることもなかったろう。不死身の英雄……死を超克した者たち……選ばれし戦士たち……（ウォリアーズ）

何はともあれ、確実にいえることはふたつある。ひとつにはここでの登場人物の言い草が（多少の誇張こそあれ）二〇余年後に実体化したという悪夢の具現化の側面、もうひとつはマスコミが一時期、声高に喧伝したほど、サリンなどの毒ガス兵器や細菌兵器にかんする知識は、けっして専門家でもない限り知りようもないマイナーな情報などではなく、エンターテインメント小説の想像力の中でも容易に登場する程度の代物だ、ということである。

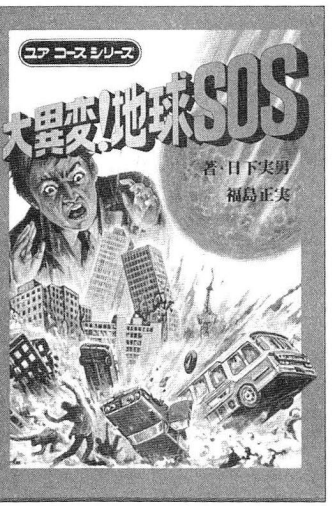
ちなみにフリーライターの安藤尚彦氏は、別冊宝島114号『いまどきの神サマ』収録の「教祖になったマンガ家、天使と交信するSF作家」というレポートの巻末で「ちなみにオウム真理教の教義には幻魔シリーズとの共通点が異常に多い。オウム幹部のなかにヒライストがいることは、ほぼ間違いないと私は思う」としめくくっている。

私もそう思う。

＊

ほかにも七〇年代的なトピックとして……のちのニューサイエンス、ニューエイジを準備する（とはいえ、往時はオウム顔負けのタコ壺合宿制編集集団として異名をなした）工作舎の『遊』、あるいは『たま』、『UFOと宇宙』、『エニグマ』、『地球ロマン』、『オカルト時代』、『幻想と怪奇』、『牧神』、『パイディア』、『エピステーメ』などの専門誌の類にみられる先見性や、大掛かりな精神世界フェアを後日プロデュースした平河出版社を筆頭にたま出版、春秋社、めるくまーる社などのスピリチュアルな版元、そして澁澤龍彦氏から荒俣宏氏にいたる「神秘学」研究の系譜などもまた（オウムとの直接／間接的関連の如何にかかわらず）回顧するだけの値打ちはあると思うのだけど、それらはまた次の機会に……

でも次の機会って、一体いつの何なんだろう？



『チベットのモーツァルト』中沢新一（せりか書房）
『新世紀への贈りもの』（平河出版社）
『ホロン革命』アーサー・ケストラー（工作舎）
『死後の世界の証明』丹波哲郎（広済堂出版）
『死ぬ瞬間の書』丹波哲郎（広済堂出版）

84年○『ＧＳ　たのしい知識』（冬樹社／ＵＰＵ）
雑誌「へるめす」創刊（岩波書店）
『エピステーメ』復刊（朝日出版社）
……ニューアカデミズム、脚光をあびる

85年○『モモ』『はてしない物語』など
……ミヒャエル・エンデ人気
『首都消失』小松左京（徳間書店）
『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』村上春樹（新潮社）

86年○「少年ジャンプ」400万部突破
『ニューロマンサー』ウィリアム・ギブスン（ハヤカワ文庫）　サイバーパンク・ブーム
『大殺界の乗り切り方』細木数子（ごま書房）
『運命を読む六星占術入門』細木数子（ごま書房）

87年○雑誌『AZ』創刊（新人物往来社）
『Bungei Critic2 / 神秘学カタログ』（河出書房新社）
『ノルウェイの森』村上春樹（講談社）
国民的ベストセラーに、

88年○『危険な話』広瀬隆　ベストセラー
……反原発、フェミニズム、エコロジーへの注目
『消えるヒッチハイカー』ジャン・ハロルド・ブルンヴァン（新宿書房）
……うわさ、都市伝説ブーム
「季刊哲学」創刊（哲学書房）

89年○雑誌「イマーゴ」創刊（青土社）
『キッチン』吉本ばなな（福武書店）
『メディア・セックス』ウィルソン・ブライアン・キイ（リブロポート）　サブリミナル効果

90年○『ノストラダムスの大予言・中東編』五島勉（祥伝社）
「1988年日本崩壊、エドガー・ケーシーの大予言」五島勉（青春出版社）
『アメリカン・インディアンの教え』加藤諦三（扶桑社）

91年○『宜保愛子の幸せを呼ぶ守護霊』（大陸書房）
『宜保愛子の死後の世界』（日本書院）
『真説ノストラダムスの大予言』加治木義博（ロングセラーズ）
『永遠の仏陀』／『アラーの大報告』／『ノストラダムスの戦慄の啓示』大川隆法（いずれも幸福の科学出版）
「パワースペース／月刊空手道増刊」（福昌堂）
自己啓発本、加藤諦三の人生論などが売れだす（書泉ブックマート、グランデなどでコーナー充実）

92年○『それいけココロジー』（青春出版社）
「Ｇ感性で「あなた」が見える」（ＴＢＳ編、ワニブックス）俗流「心理ゲーム」本のブーム
『こころの処方箋』河合隼雄（新潮社）
『アルジャーノンに花束を』ダニエル・キイス（早川書房）突然のヒット
『24人のビリーミリガン』ダニエル・キイス（早川書房）

93年○「磯野家の謎」（飛鳥新社）

94年○『理性のゆらぎ』青山圭秀（三五館）
などによるサイババ・ブーム
『アムリタ』吉本ばなな（福武書店）
『大往生』永六輔（岩波新書）
岩波書店史上空前の大ベストセラー
『臨死体験』立花隆（文芸春秋）
『完全自殺マニュアル』鶴見済（太田出版）
『ＦＢＩ心理捜査官』ロバート・Ｋ・レスラー（早川書房）
……死体写真、猟奇殺人ブーム
『ノストラダムスの大予言・地獄編』五島勉（祥伝社）
『聖なる予言』（角川書店）

95年○『光の手』（河出書房新社）
石垣ゆうき＆マガジンミステリー調査班
『1999日本崩壊の地獄書』（講談社）
『ジ・オウム』（JBD／太田出版）！

オカルト／神秘学／精神世界／ニューエイジ 関連書・出来事　略年譜（本文中で触れたかったものなどを中心に）

71年○ 雑誌「遊」創刊（工作舎）
『世界のなぞ世界のふしぎ』（学習研究社）
72年○『密教・超能力の秘密』桐山靖雄（平河出版社）
……密教ブーム
『デビルマン』永井豪（少年マガジンで連載）
『漂流教室』楳図かずお（少年サンデーで連載）
73年○『オカルト』コリン・ウィルソン（新潮社）
幻想文学専門誌「幻想と怪奇」創刊（三崎書房）
『ノストラダムスの大予言』五島勉（祥伝社）
『日本沈没』小松左京（カッパ・ノベルス）
『バイオレンス・ジャック』永井豪（少年マガジンで連載）
74年○ 日本テレビ「ユリ・ゲラーのスプーン曲げ」放映
……超能力ブーム
アメリカ映画『エクソシスト』公開（小説・新潮社）
……オカルトブーム
『かもめのジョナサン』リチャード・バック（新潮社）
『スーパー・ネイチャー』ライアル・ワトソン（蒼樹書房）
『偶然の本質』アーサー・ケストラー（蒼樹書房）
『ドンファンの教え』カルロス・カスタネダ（二見書房）
「月刊MY BIRTHDAY」創刊（実業之日本社）
75年○ 幻想文学評論誌「牧神」創刊（牧神社）
『神秘学序説』高橋巌（イザラ書房）
『複合汚染』有吉佐和子　公害問題
『謎のバミューダ海域』バーリッツ（二見書房）
……心霊写真、コックリさんブーム
76年○ 雑誌「オカルト時代」創刊（みのり書房）
雑誌「地球ロマン」創刊（紘映社）
『大異変！　地球SOS』（学習研究社）
77年○ 季刊「ザ・メディテーション」創刊（全７号）（平河出版社）
『別世界通信』荒俣宏（月刊ペン社）
……アニメ『宇宙戦艦ヤマト』ブーム
78年○ アメリカ映画『未知との遭遇』『スターウォーズ』日本公開
……密教、インド、瞑想ブーム　横尾忠則
サンリオＳＦ文庫創刊
「意識の進化と神秘主義」セオドア・ローザク（紀伊国屋書店）
79年○『天中殺入門』和泉宗章（青春出版社）
……天中殺ブーム
……占星術ブーム
機関誌「アーガマ」創刊（阿含宗出版社）
"精神世界の本" ブックフェア
『タオ自然学』フリッチョフ・カプラ（工作舎）
『未知の贈りもの』ライアル・ワトソン（工作舎）
総合オカルト誌「ムー」創刊（学習研究社）
「月刊ＳＦアドベンチャー」創刊（徳間書店）
80年○『コスモス』カール・セーガン（朝日新聞社）
『神秘学講義』高橋巌（角川選書）
別冊宝島『精神世界マップ』（JICC）
……NHK特集「シルクロード」ブーム
『ノストラダムスの大予言II』五島勉（祥伝社）
81年○『世界神秘学事典』荒俣宏編
『理科系の文学誌』荒俣宏（工作舎）
雑誌「超宇宙マガジン」創刊（三崎書房）
『生命潮流』ライアル・ワトソン（工作舎）
雑誌「マーキー・ムーン」（マーキー・ムーン社）
82年○雑誌「DECODE」創刊（東邦出版）
雑誌「幻想文学」創刊（幻想文学出版局）
……ニューサイエンス・ブーム
機関誌「プシケー」創刊（日本ユングクラブ会報）
『神秘学オデッセイ』高橋巌＋荒俣宏（平河出版社）
『時代の未明から来たるべきものへ』間章（イザラ書房）
『悪魔の飽食』森村誠一（光文社）
映画『ブレードランナー』『ET』公開
83年○……軽薄短小ブーム
『東京漂流』藤原新也（情報センター出版局）

忘れ形見はおんな唱法——オウムVSカルト軍団ドバドバ大進撃!!

宇川直宏

うかわ・なおひろ　一九六八年生まれ。メディアレイピスト。マムンダッドプロダクションズ主宰。タイの狂人祭ベジタリアンフェスティバルと秘宝館本の編集に明け暮れる。近作は、秋田昌美氏のアートディレクションその他多数。また石原豪人氏との『スイッチ』での新連載は期待大。

一九六四年、ロンドン郊外のバルハムに住むローズマリー・ブラウンというオバサンが、突然リストの亡霊に乗り移られた事件がある。過去一度もピアノを弾いたことのなかったブラウン夫人は、その後というものベートーヴェンやバッハやブラームス、ショパンなど名のある音楽家の亡霊だけに体を空け渡し、なんと七〇年にはピーター・ケイテンという一流ピアニストと一緒に初の心霊レコーディングに成功している。彼女は今までに四〇〇曲を作曲し、現在ベートーヴェンの未発表作である**「第十交響曲」を作曲中**だという話だ。

*

麻原の曲**「進め真理教」**を聴いていると、ふとブラウン夫人の奇妙なエピソードを思い起こした。この曲「進め真理教」は麻原がドイツの首都ボンへ行って瞑想し、帰国後自然と口からわき出てきたというフレーズから構成された**凡作**（ボン）だ。ボンというと麻原自ら大ファンであると公言するベートーヴェンの出生の地でもあり、この曲自体もどこかで聞いたようなクラシカルな旋律が執拗に展開されている。

後に麻原は神通力を駆使して、ボンの空間データを読み取りこの曲を作曲したと広言し、**ベートーヴェンの霊の介在をほのめかしている**が、取って付けたように仰々しいこの曲を聞く限りでは、ただ単にそんな《気分》だったんだろうとしか思えない。

麻原の全ての表現においてこの《気分》というのは重要な役割を果たしているような気がする。ゴロワーズを吸っただけでパリに行った気分を満喫できる**ムッシュかまやつ**のように、ボンに行ったぐらいでベートーヴェンに会った気分になれる麻原の思考回路は、安上がりで合理的だ。《気分》……。まさにこれこそがオウム（＝麻原）の**無敵の図々しさ**であり、現在関与したといわれる一連の事件の引金となっているのではないだろうか。

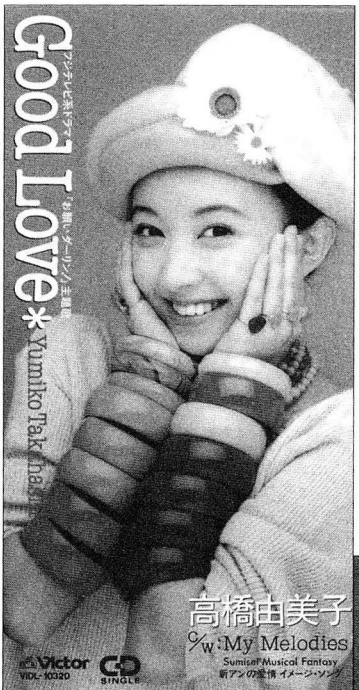
《気分》に重きをおくそんな麻原だが、歌人としての評価は散々たるもので、「**まるっきり気分が伝わってこない、心がこもっていない**」とその筋の評論家が**メッタメッタに罵っている姿**をＴＶで見た。

やしきたかじんのバイセクシャルな「**おんな唱法**」（わかる人にはわかる）から《うたごころ》をそっくりとり除いたような、必要以上にセンチメンタルな麻原の歌声は確かに薄っぺらで奥行きに欠け、不安定このうえない。俗にはそれを《音痴》と呼ぶのだが、深く帰依する信者にとってはそうは映らないらしく、「**尊師の涼しげな歌声**」と巧みに粉飾を施していた文を読んだ覚えがある。**何億歩**か譲って確かにそう聞こえたとしよう。だとしても、麻原の《涼しさ》とは**銭湯の脱衣所にある扇風機を一人独占してる様な涼しさ**であって、歌ってる方は心地良いが聞かされる方は暑苦しいという自分勝手な清涼感だ。**いくら聴いても風を運んでくれるようなシロモノではない**はずだ。

全ての音楽的表現は成立直後に作者と隔離するわけであって、成立後は本質を洞察しようとする受け手の想像力によって再生されるものである。そういう送り手と受け手の関係は、**ほとんどが誤解の上に成り立っている**のであって、音楽そのものよりも両者の間に横たわるそれを取り巻く環境が直接評価に影響を及ぼしている場合が多い。

大好きなアイドルの新しいシングルがリリースされれば内容に関係なく買いに走るだろうし、それが音楽的にみてどんなに**クソ下らない**ものだとしても、

実際聞いてみると自然とよく聞こえてしまうものなのだ。例えば**高橋由美子のニューシングルが、インキャパシタンツのようなハードノイズに絶叫を施しただけのものだったとしよう。勿論筆者はその方が嬉しい**が、従来ファンだった奴の殆ども恐ろしく受け入れてしまうものなのだ。しかも**「これからはノイズ一筋でがんばります。」**などと宣言した日には、逆にノイズに興味を持ってどんどんのめり込み、ヌカルミな無限地獄にはまってしまうファンだって大勢いるはずだ。勿論これは悪ではない。信仰心の現われだ。しかし、昨日まで信じてきた由美子像を守りたいのなら、本当はそこで納得なんかしていいはずがない。**「ノイズにはしらないで、今までの由美子でいてほしい。」**と一言諫め、思いとどまらせる勇気が必要なのではないだろうか。しかし、ここに純粋な帰依は存在しない。



高橋由美子『Good Love』（C/W: My Melodies：92）はCOME ORGANIZATION のコンピレーション（82）には収録されていません。念の為……

「尊師の涼しげな歌声」という評価がもし心から出てきたものだとしたら、それは厚い信仰心の現われであって筆者があれこれいっても仕方ない。しかし連中の心に一瞬でも**「音痴」**の漢字二文字が浮かび上がっていたにもかかわらず、その二文字を打ち消すように「尊師の涼しげな歌声」と取り繕っていたとするならば、そんなの所詮本当の信仰などといえるはずはない。無条件の、無心の帰依が

できているならば、心の傾向によって、身・口・意は支配されているはずだから、それは一〇〇パーセント純粋な帰依ではない。見返りを期待するウソッパチな信仰心だ。しかし、後者の心の葛藤はクールな視線がまだ存在している証しである。

これをそのまま、逮捕された幹部達が関与したといわれている一連の事件にあてはめてみることは容易だ。しかし、本当はどうだったのかを詮索する気は微塵もない。なぜなら麻原の《気分》を、信仰から実行にうつしたにせよ、動揺する心を抑えながら実行にうつしたにせよ、どちらにしても事件は起こっていたのだから……。たとえ一部の幹部が諫言していたところで個人の力でどうなるわけでもなかったはずだ。**集団とはそんなものだ。**

「♪わが弟子たちよ、よく聞け。
立て！行け！
そして　すべての凡夫・外道を救済し
この日本を　地球をシャンバラと化すのだ。」
作詞・作曲：麻原彰晃
進め真理教（Forge Ahead! Aum Shinrikyo）より

これは前述した「進め真理教」の詞であるが、いうまでもなくこのシャンバラとは、宇宙の全真理を究めた魂のみが入るとされている、シバ神が統治する理想郷のことである。しかし、この詞に登場する外道とは**福生の伝説**となった暴走族バンド『**外道**』を指しているはずは無い。4番の詞にも「わが身を捨てて立ち上がろう　外道のために」というフレーズが登場して**脇腹をくすぐられる**のだが、勿論外道とは仏教から見た仏教以外の教え（場合によっては教徒）をさす。しかし『外道』がライブハウス「UZU（ウズ）」で毎夜の如く吠えたてていた時期は、麻原が東大受験の為、熊本から上京していた時期と一致し、また当時秋吉久美子の大ファンだった麻原は、リリースされた彼女のソロアルバムのバックを担当した『**四人囃子**』から奥手ながらロックに目覚めた可能性だってありえたはずだ。

もし当時麻原が『外道』や、『村八分』や、『フラワー・トラベリン・バンド』や、『ファー・イースト・ファミリー・バンド』、また灰野敬二がいた『ロストアラーフ』を通過してたら、ファザー・ヨッド率いる『ヤホワ13』のようなアーシーなサイケデリ

ックカルトに成りえていたかもしれないし、後のYMOにのめり込んでいたらもっとおもしろいシンセの使い方だって（指導）できていたはずだ（しかしこの場合ケン・イシイのような有能な信者が必要だが）。要するに麻原はそこに居なかっただけなのだ。

そこに居て聴いてさえいれば必ず音に表われていたに違いない。わかりやすさによる勧誘の戦略とはいえ、ベートーヴェンやアニメ主題歌などの現世的な情報を一番引きずっていたのは実は麻原自身だったのだから。宇宙戦艦ヤマトを見ながら晩ご飯を食べ、秋吉久美子で手淫に耽ったあと、ベートーヴェンのBGMで寝る（こう書くとケッコー豪快な奴だ）。それが麻原を取り巻いていた環境だ。

＊

音楽とは、受け手の想像力によって再生されるものであるがゆえ、音楽的表現がひとつの人生に与える影響は計り知れない。金属バッドで両親をブチ殺した一柳伸也が、シリアル・キラーを崇拝する『ホワイト・ハウス』を愛聴していたことは周知の事実だし、寺内タケシのギターに励まされ、ようやく立ち上がることのできた半身不随の少年だっていた。

だからといって、オウムの信者がマインド・コントロールから抜けきれないのはあの音楽の呪縛の為だと、タカを括るマスコミは安直だ。だいたいあんなシロモノがそれほどの影響を与えているとは思えない。前述したが、音楽はそれを取り巻く環境ができあがっていてこそ始めて生きてくるものである。「かえっておいで」とサブリミナルの入った、《逆洗脳テープ》を作って、信者の親に配る発狂した被害対策弁護団の奴らもいるが、そんなもの効果がある訳はない。

しかも、現世において大衆を支配している価値体系を一度否定した信者達にとって、「かえっておいで」なんて呼びかけが、どれほど後の人生において意味を成すものかさえ疑わしい。解脱や、救済などの、ゆるぎない価値を求めて日々修行に明け暮れていた信者達に、帰ってきていったいどんな喜びが待っているというのだろう。吉原にでも連れていくのか？それともざこばの落語でも聞かせとくのか？

＊

衰亡の瀬戸際に立っている教団に対して、あれこれいったところで事の動静を変えられるはずもなく、

なんの効果があるものでもない。しかし、もし信者が死中に活を求めるとするならば、狭い教団内部に閉じこもるのでもなく、徒らに社会の表層に意匠をあわせるのでもなく、断ち切られた根の方向からつまりは、自らが、社会の底に沈んだ微かな真理のうねりを取り出してくる努力をする以外ないと思う。

しかしなにも残されたオウム信者だけが、こんな苦い体験を余儀なくされてきた訳では無い。一九世紀から二〇世紀にかけては、数多くのカルト、セクト、および宗教団体が日本にも存在してきたし、第二次世界大戦以降、更にこれらは急速に成長し、またおのおのの理由で瓦解している。それらの現象をH・N・マックファーランドの言葉を借りて呼ぶならば**「神々のラッシュアワー」**といえるのだが、それくらい多くのカルトが日本に拡がったということだ。それら非伝統的な日本の宗教団体については新宗教研究会の『新宗教ガイドブック』や、松沢呉一氏の『新宗教の素敵な神々』に詳しいが、それらを読むとその勢いは今日もなお衰えていないということがわかる。

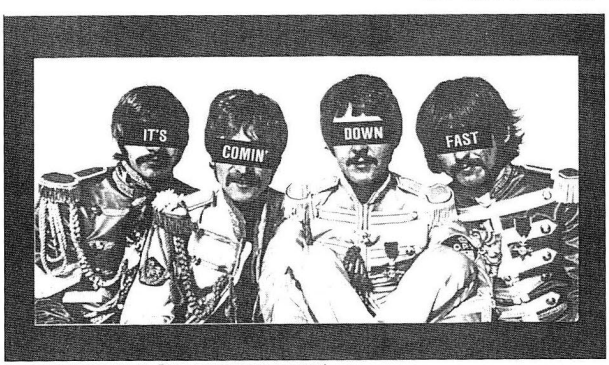
また、反カルト組織としての最大の国民連合である、**市民解放協会**によると、現在「破壊的カルト」とレッテルをはられる団体は、アメリカだけでも三千以上あるといわれるが、**その実態は明らかではない**。いずれにしてもマニアックな思想を掲げた団体として活動する以上、一般に謎が多いのは当り前だ。しかし、指導者の意向や教団の思想が、殺人やテロもしくは集団自殺などといった、社会の枠組みから大幅にはみ出す行為に発展した瞬間、それら団体は国家の手により迫害をうけ、奴ら**カルトの生活は突然として公の場に露呈される**運命にある。

迫害による絶滅、後継者なき段階での指導者の死、また指導者が信者の信頼を失うなどカルトが絶滅する理由はさまざまだ。だが、それら絶滅したカルト達が**布教の為、儀式の為、また自らの記録の為に残した音や映像**、そして勿論その思想などの**わすれ形見**は、信仰の厚い一部の信者達によって、また**死や恐怖などのどす黒いイメージを好むキワモノ好きなマニア達**によって、**引き取り人のいない死体**のように、今もなお歴史の暗部をさまよいつづけているのだ。

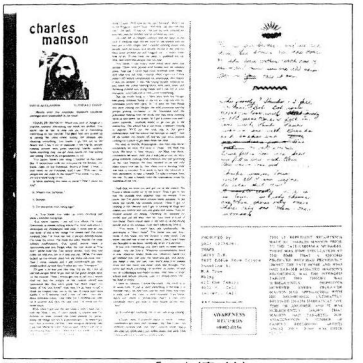
やはりこのジャンルのパイオニアは**チャールズ・マンソン**であろう。ビートルズより偉大になろうと心に誓ったマンソン(1)〜(7)は、**『ファミリー』**を率い、エンスト寸前のワーゲンバスで放浪して、毎夜の如く演って回った。カリフォルニアの各地を巡回した後、気付いてみるとワーゲンには収容できないほどに『ファミリー』(7)の数はふくれあがっていたという。マンソンの音楽はそれ自体が説法だったのだ。絶望のどん底から這いあがってきたかのような、あの悟り果てたアシッドフォークを聞いていると、自らの内面に潜む刹那な陰の意識を、無理やり呼び覚ましてしまいそうな衝動にかられる。**犯ってみたい**とか、**襲ってみたい**とか、**殺ってみたい**とか……恩讐を超越したマンソンの歌声が、**すこしずつ追い詰めながら王手、王手とたたみかけてくる**のだ!!。そんなマンソンもシャロン・テートその他の計画的大量殺人で終身刑を宣告され、現在は服役中の身である。ゆえにその**不敵なツラがまえとその歌声**も永遠に封印されたかと思いきや、

(4) CHARLES MANSON
「GARBAGE DUMP & PEOPLE SAY I'M NO GOOD」
自然に適応できない種族、品種はみな滅亡する。恐竜も消滅した。簡素な環境に適応しながら一億年も生きたえてきた人類もまた亡びる運命にあるのかもしれない。マンソンのこの狂暴な形相を見よ!!殺りたいやつは殺るし、犯りたいときもまた犯る。人類の消滅後までも生き延びる種族は、ゴキブリなみの打たれ強い種を持つ、奴らファミリー達かもしれない。ヘルタースケルターは永遠だ!!

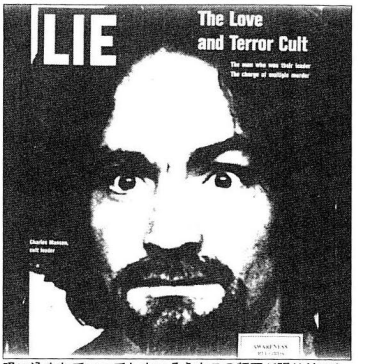
問屋が卸すはずもなく、鉄格子の彼方から録音された不死身のレコード(5)(6)がリリースされたりもしている。マンソンは追ってくる。何処までも……。



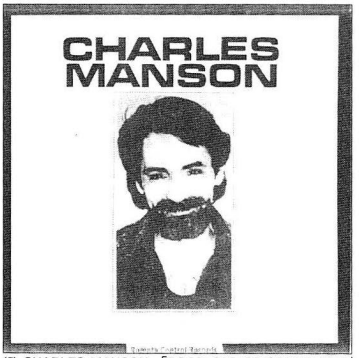
(2) CHARLES MANSON 「IT'S COMIN' DOWN FAST」
『サージェント・ペッパーズ』の内ジャケに手を加えただけの軽薄なカバーが目をひくこのシングルのB面は音なしのエッチングで、子供だましなファンタジーが爆発!! センスいい。



(1) CHARLES MANSON 「LIE」（裏／表）
自己形成のあまい奴が眺めていたら、(→)



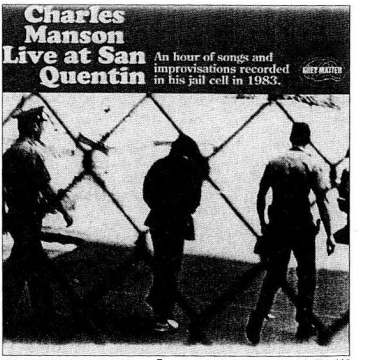
吸い込まれていってしまいそうなこの顔面が張り付いた
Tシャツが巷に氾濫している亡国日本は殺人斡旋国家。



(5) CHARLES MANSON 「POOR OLD PRISONER BOY」
マンソン務所盤一枚目。音の悪さが有難みを強調して効果を生むレコードはきまって殺人鬼のもの。もしくはTRAXなどの初期シカゴハウスの再発盤。

(3) V.A.「FUR ILSE KOCH」マンソン収録のウルトラレア盤。クロウリーや、ヒトラーや、日本の軍歌にMBが絡むこれをリリースしたカム・オーガニゼイションは狂気のツボを知り尽くしている。エライ。

(7) FAMILY 「THE SONGS OF CHARLES MANSON」
極マレにヌケる奴もいるファミリーのねーちゃん達が大集合して録ったファミリー版ウイ・アー・ザ・ワールド。これを聞いて毎回ボッキできる器の持ち主を、俺は支持する。

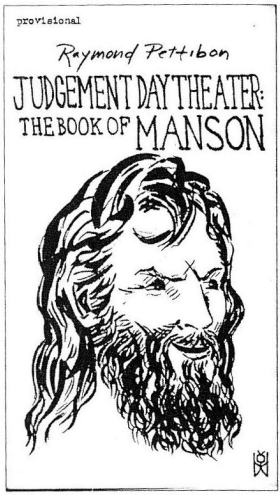


(6) CHARLES MANSON 「LIVE AT SAN QUENTIN」務所盤二枚目。サン・クエンティンの住所を調べて励ましの便りをした筆者は、三菱銀行強奪事件の翌日からしばらく名前が似ているという理由で、"梅川"と呼ばれた深い傷の持ち主。

『ファミリー』と同じく、フラワームーブメント直下のヒッピーに支持された教団に**『ラジニーシ・アシュラム』**(8)がある。インド西部を拠点とするこの教団は瞑想用にシタールをサンプリングして、延々ループさせたリラクゼーションを導入している。フリー・セックスを唱えているラジニーシだけあって**性感のツボ**をバッチリおさえており、**所構わずムズムズ腰を動かしたくなる**ような魅惑の旋律を奏でる。最盛期五〇万人もの信者を集めたこの教団（一時日本にも支部があった）も、幹部による検事総監暗殺計画により逮捕者相次ぎ、教祖であるラジニーシも国外追放となり、惜しくも瓦解した。しかし、雑草のように根強い一部の信者が経営するラジニーシショップは西荻に健在と聞く。店名を聞いて二時間笑った覚えがあるが、ラジニーシの愛称に因んで**「おしょう」**（笑）という。

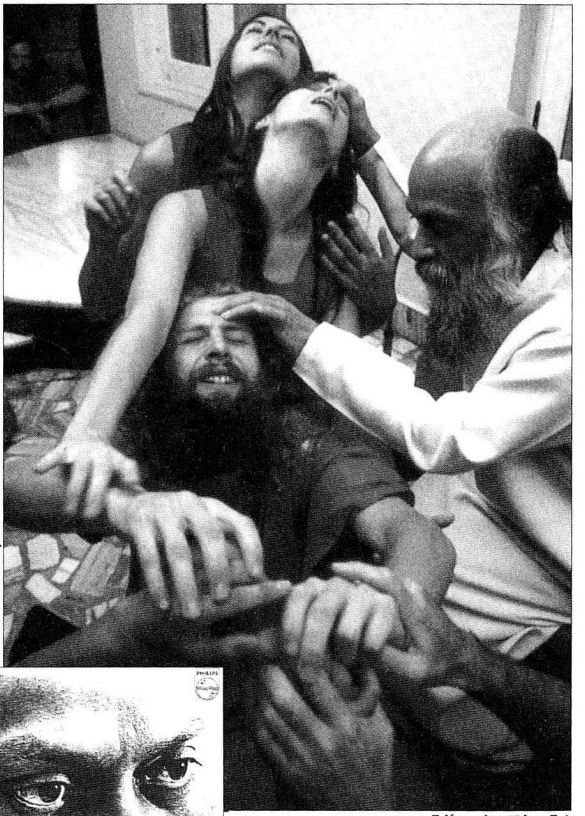
ウイークエンダーまっ青の猥褻な再現シーン収録のこのビデオは、グッズの中でもかなりレア。これを観て毎回ボッキできる器の持ち主を俺は支持する。かの藤原ヒロシも所有。

(V1)『シャロン・テート殺人事件』



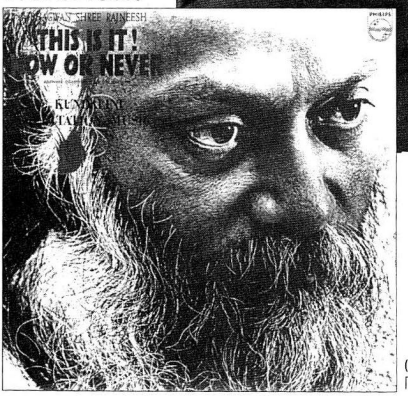
生存への闘いのなかで、ある動物は牙を発達させ、他の動物は鋭い爪や長い鼻を発達させた。ところが人間は頭脳を発達させるに至った。マンソンのIQが示すとうり頭脳は強力な武器である。牙や爪よりも有利だ。

(V2) JUDGEMENT DAY THEATRE
「THE BOOK OF MANSON」

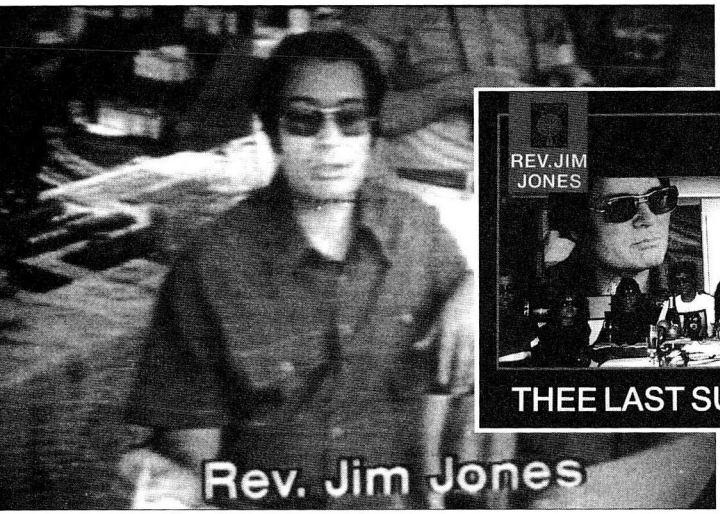


フランスの革命家バブーフが「政府とは多数者に対する少数者の陰謀である」と発言したことに対して、政府はそく首をはね、その発言が正しいことを証明したという話がある。この発言は現在でも有効だ。この世がそっくりラジニーシ・アシュラムにならないかぎり、絶対的な自由も幸福も存在しない。苦しいことがあったなら"おしょう"の音楽をBGMに死ぬほどセックスをしょう。一時的な悦楽は死のうらがえしでもある。

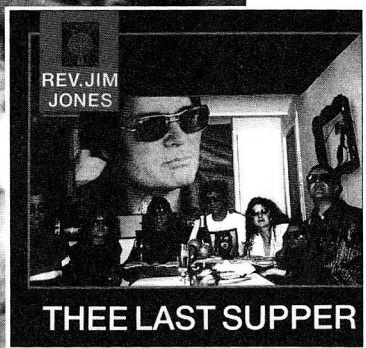
ラジニーシ・アシュラム



(8) BHAGWAN SHREE RAJNEESH
「THIS IS IT! NOW OR NEVER」



「人民寺院」のジム・ジョーンズ



(右上) T.O.P.Y. REV JIM JONES
「THEE LAST SUPPER」

(10) PEOPLE'S TEMPLE CHOIR「HE'S ABLE」

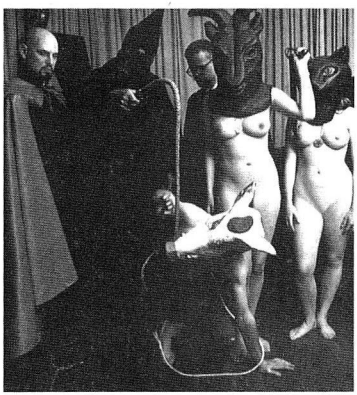
(9) VAGINA DENTATA ORGAN : JIM JONES「THE LAST SUPPER」
ヴァギナ・デンタータ・オルガンは、
真のエンターテインメントとはセックスや暴力や死だと
いう現実をクールに見極めている。ジム・ジョーンズの
強烈なアジテートによって、いとも簡単に900人の命の
ともしびが吹き消された瞬間、大金を払っても得られない
ドキュメンタルな迫力の圧倒的な娯楽が成立する。
マイケル・ジャクソンも参考にするしかない。

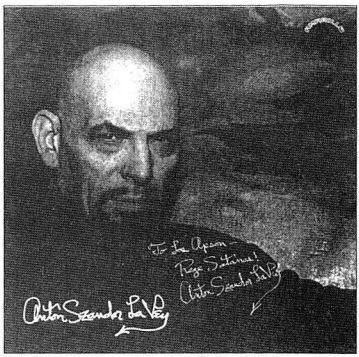
また、**『人民寺院』**のジム・ジョーンズ(9)は、貧しい黒人層を中心に支持を得ていた為、自ら設立した教会で、何の変哲も無い**クソ真面目なゴスペル**を指導していて結構笑える。(10)人種共存という寛容で揺るぎない思想を掲げる人民寺院であるが、演ってるゴスペルのせせっこましさときたら、**低予算の黒人ミュージカル「ママ・ドント・クライ」**のワンシーンを彷彿とさせる程のお粗末加減だ。必要以上に力んだその歌声に耳を傾けてみよう。しばらく聞いていると脳裏に焼き付いたあの鮮烈な集団自殺シーン（ジョーンズと九〇〇人以上もの信者がブッ倒れている）に、**気張りすぎて膨らんだ黒人の鼻の穴**のイメージが、オーバーラップされ頬がゆるんでくるではないか。

集団自殺といえば、昨年山小屋に火をつけて五〇人の信者と自殺を計った悪漢**リュック・ジュレ**率いる**『太陽寺院』**がある。中世ヨーロッパの秘密結社であるあの『薔薇十字団』との関連も指摘された教団だけあって、ミサで使用された音楽は、やはりオカルティシズムただよう、**取って付けたような脅かしのハモンド・オルガン**だったと聞いているが、ハモンド・オルガンとくればアントン・ラヴェイだろう。

『太陽寺院』のリュック・ジュレ

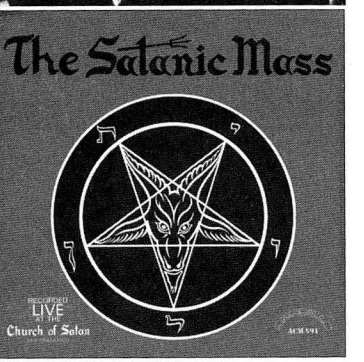
H・G・ウェルズの『モロー博士の島』と、30'sのオカルト詠唱『ソスのエメラルド』を組み合わせたスローガンが渦巻く、チャーチ・オブ・サタンの儀式『動物劇』は人間の獣性への賛歌だ。半人半獣をシンボライズに象ったラヴェイデザインのストレンジなカブリモノはサンリオのキャラクターに加えたいほどのファンタジーに満ちている。



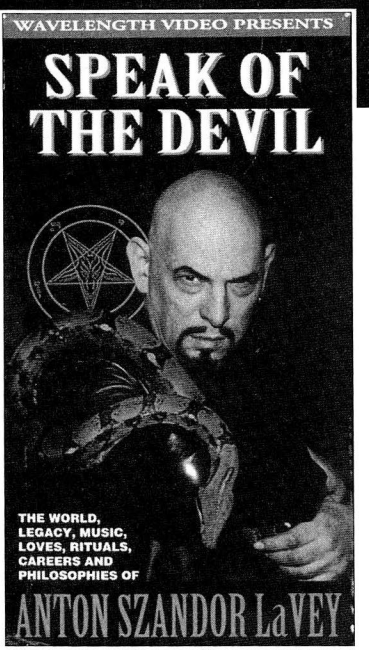


(11) ANTON SZANDOR LaVEY「STRANGE MUSIC」
元警察の写真班員、元ライオンの調教師、元高級クラブのオルガン弾きでありながら、なぜか現在筋金入りのサタニストであるラヴェイパパは営業もこなす器用な男。呪われた風貌とは裏腹に、ファンレターを書いただけでロスアプソン宛にサイン入りレコードを5枚もくれる太っ腹な奴。もし宗教にはまるのなら布施を強要する愚劣な奴らにではなく、こんな男についていくしかない。

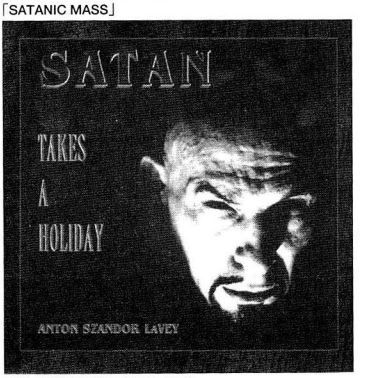
アントン・ラヴェイは言わずとしれた**『チャーチ・オブ・サタン』**の指導者であるが、その筋では顔の利くオルガン奏者でもある。六〇年代には、**チンポこそ隠していたものの半裸でソフトコア**まがいのフィルムを制作したり、サタニスト丸出しのラヴェイという名を伏せて、名のあるシンガーのバックを勤めたりもした。また当時自らのソロも録音しているが、最近のリリースラッシュ(11)(12)(13)はあまりにも強引だ。中でも(11)は非常に難解すぎる。親に勧めても納得されそうな**爽やかなオルガンムード**だったかと思えば、いきなりミサの生録が割り込んで真っ暗になり、次の瞬間どういうわけか**富田勲ばりの希望の光**に満ちたりする。サタニストであるがゆえ、**感情の起伏が激しい**音楽なのだと解釈することもできなくはないが、どちらにしても親が聞いたらむせびなきそうな内容にはちがいない。**苦虫を数十匹噛みつぶしたような凄んだルックス**とは裏腹に、**個人的にコンタクトとったかぎりでは気のいいパパ。**(V3)ではその素顔がのぞける。勿論この教団は現在でも健在でカリフォルニアでは正式な法人としても認定もされている。



(12) ANTON SZANDOR LaVEY
「SATANIC MASS」

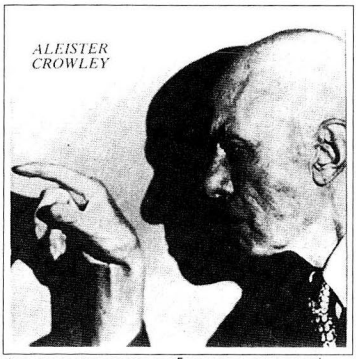


(V3) ANTON SZANDOR LaVEY『SPEAK OF THE DEVIL』

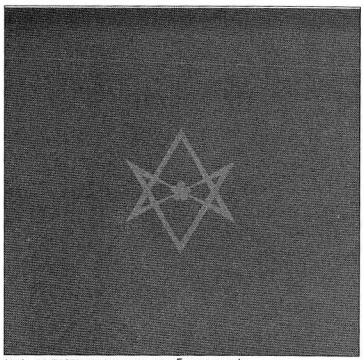


(13) ANTON SZANDOR LaVEY
「SATAN TAKES A HOLIDAY」

切り抜いた新聞記事の裏にジェーン・マンスフィールドのグラビアが載っかっていたことによって、自動車事故で彼女の首をスッ飛ばしてしまったラヴェイは、相当なうっかり者だ。しかしこの事件がいたずらな宣伝効果を得ることに …… 末期ガン並みの悪質なカルトで病んだ国アメリカに、無垢な清風を吹き込むアントン・ラヴェイは、純真なサタニスト。サミー・デイビスJr.が魅せられた理由もわかる。

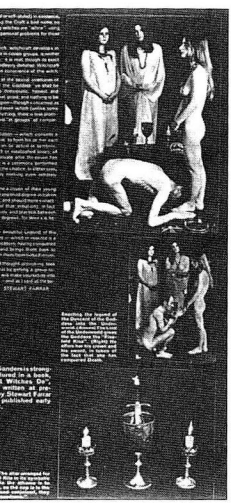


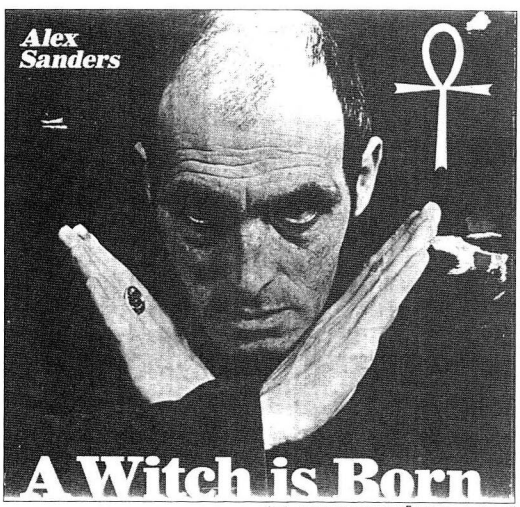
(15) ALEISTER CROWLEY「ALEISTER CROWLEY」



(14) ALEISTER CROWLEY「ELEVEN」

事の起こりは登山中に出会った「黄金の夜明け団」メンバーとの友情から。後にキリストのステージをめざし、
「A.∴A.∴」を設立するが挫折。「O.T.O.」入団後のドラッグと性魔術にどっぷりつかったクロウリーの人生こそ真理。
伊達にツルッパゲなのではない。全てはこれを聞けばわかる。



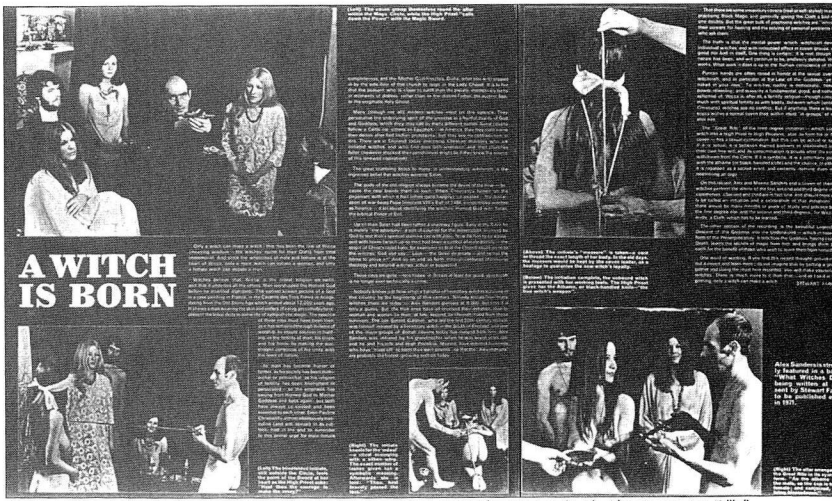


(16) ALEX SANDERS「A Witch Is Born」

まるで幼児が戦隊ゴッコに陶酔し果てた様な
アレックス・サンダースのこの無垢なポーズを見よ。魔術の全てはゴッコから始まる。

魔術結社といえば後に**アレイスター・クロウリー**をイギリス支部長として迎えたドイツの『O・T・O』が有名だが、クロウリーによって朗読された散文詩収録のレコードもジャケ違いで多数リリースされている(14)(15)。後に『O・T・O』はクロウリーを首領として本部もロンドンに移すのだが、日々卑猥な性魔術にふける単なる**インモラルなエロオヤジ**みたいなクロウリーに見切りをつけた一団の別派もこのころ設けられる。『O・T・O』はクロウリーの死後**カール・ゲルマー**に引き継がれたが、後の総帥を指名せぬまま彼も死去。以後、事実上崩壊。

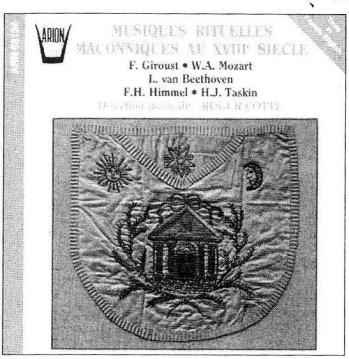
クロウリーと交流があったとされる**アレックス・サンダース**は、妻マクシーシを女司祭とした『**アレクサンドリア**』派の魔女術活動で六〇年代後半メディアを賑わした。その模様は(16)によって聞くことができる。玉も棒もブラつかせたままの**こっぱずかしい姿**でボンテージまがいの儀式にはしるサンダースは、一見**その辺にいるセクハラなおやじ**にも映るが、**性器の露出よりメディアへの露出**の方に重きをおいていたため**一時的にブレイク**。しかしその後マクシーシと離婚。以後天涯孤独の身となった。



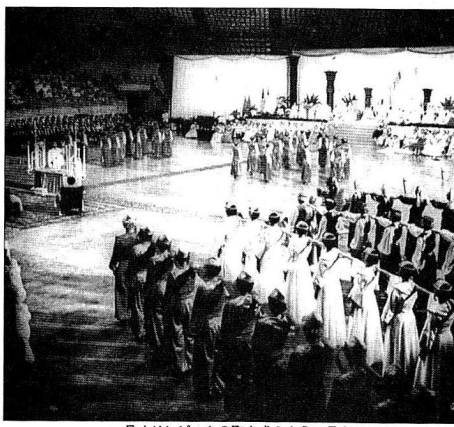
『A Witch Is Born』の内ジャケット、玉も棒もブラつかせたこっぱずかしいサンダースによるボンデージまがいのセクハラ儀式。

カルトとはいいきれないが、やはり、その暗黒さにおいて他の追随を許さないのは、**『フリーメーソン』**だ。古代ギリシャにおける、ディニオスをまつる記念碑や神殿の建築集団の一員であったヒラム・アビフが開祖といい伝えられるこの集団は、後に石工の組合組織になり、その後には**政財界人の親睦会**となる。第二次大戦中に発覚した世界制服の計画書**「シオンの議定書」**によって**《魔王ルシファー復活を画策してる》**と噂され、侵略者扱いをうけるが、**誤解が多い**ようだ。なお組織内部は、経済的メーソン、政治的メーソン、宗教的メーソン、社会福祉的メーソンなどに細かく分かれ、全世界はすでに『フリーメーソン』によって支配されつくしているとも噂される。**オウムもこっそり計画すれば第二の『フリーメーソン』に成りえたかもしれないと悔やむのは友人信者**。一員だったといわれるモーツァルトや、ベートーヴェン達の手によるミサ曲は、(17)で聞ける。フリーメーソンは現在も世界最大の秘密結社として健在だが、実は平和と平等を唱える宇宙意識が覚醒した有識者集団。日本にもグランドロッジが東京タワーのすぐ隣にあるので、筆者も入会したいのだが、推薦と投票がある為、断念。

ここでついでにフリーメーソンよりさらに謎な、**モノホンのカルト**？が残したレコードを紹介しておこう。

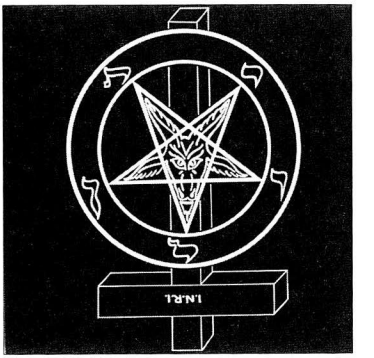


(17) MUSIQUES RITUELLES MACCONNIQUES AV XVIIIe


一見オリンピックの聖火式のように見えるが、
これがアメリカで開かれた
フリーメーソンの大集会だ!!

(18) BUILDERS OF THE ADYTUM SIECLE「AN ASOTERIC QABALISTIC SERVICE」
清川虹子が説く宇宙とは、ありとあらゆるババアの亡霊が渦巻く死の桃源郷。

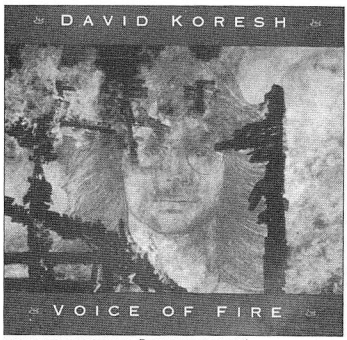
(18)の清川虹子のような呪われそうなオバハンの、『**ビルダース・オブ・アディタム**』や、一番煎じを行くサタニストの『**ジャムラ**』(19)、またキダタロー似の狂人が指揮するスーフィーらしからぬ『**スーフィー**』のダンス集(20)などがそれだが、爆裂した狂気と、マヌケを秘める奇作のオンパレードである。



分子レベルでものを考えることを悟ったジャムラは、原子や、原子核、またそれを取り巻く電子にまで目を凝らした。しかし目を凝らすことによって、つぶることで見えてくるものがあることを知る。ラヴェイにしろジャムラにしろそうしてサタニストになったんだ。みんなで見習おう。
(19) JAMRA「THE SECOND COMING」

(20) THE SUFI DANCE & SONG RECORD「SAN FRANCISCO, CALIFORNIA」
キダタローにいくら似ているからといってなめてかかっていいはずはない。
しかもそいつが狂人だとくれば注目に値する要素は全て揃っている。このレコードが5万円とは安い。

FBIとド派手な銃撃戦をかまし（戦車も出たっけ）、挙句の果てにはビルごと信者八〇人が黒焦げになった『**ブランチ・デビディアン**』は記憶に新しい。自称キリストで**甘いもの大好き**なデビッド・コレシュの説教をわざわざ聴きたくなったら、今のところ(21)しかない。こっそり一人だけ裏口からにげて、テキサスのウェイゴで**文房具を買っていたとのウワサ**も入手。オクラホマの連邦政府ビルをダイナマイトでブッ飛ばし二百人殺したのもコレシュのシワザ？なにしろ肩書きが「**世界の終りをもたらす最後の天使**」だもんな……。



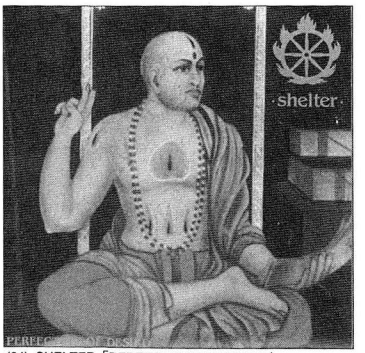
(21) DAVID KORESH「VOICE OF FIRE」
炎の奥に微かにディゾルブするコレッシュの肖像画が怖すぎる。

デビッド・コレシュとブランチ・デビディアンのチャーリーズ・エンジェル

バンド・ブームの原宿ホコテンで、**ジュンスカイウォーカーズらの《バンドやろうぜ軍団》**に混じって、**ここぞとばかりに布教活動**を行っていた教団がある。タンバリンを打ち鳴らしながら、「ハレー・クリシュナ～」とマントラを唱える**ツルッパゲのチンドンヤ**のような集団を目撃したことはないだろうか？　奴らこそアメリカで大弾圧をうけた**『クリシュナ意識国際協会』**である。略称ＩＳＫＣＯＮ、通称**ハレー（ハリ）・クリシュナ**と呼ばれるこの教団、ヒンドゥー教の宗教伝統の流れをひく、Ａ・Ｃ・バクティヴェダンタ・スワミ・プラブパーダなる舌を噛みそうな長い名前のインド人を教祖とする（七七年に死亡）。プラブパーダは、数々の著名なミュージシャンに支持されていたらしく、あの**ジョージ・ハリスンも師と仰いで**いた。信仰が高じたハリスンは、アップルにバックアップさせてまでこの教団のアルバムをプロデュースしている(22)。また、また教団メンバーが作ったファンクアルバムの(23)や、全員信者というパンクバンド、シェルター(24)は、アルバムラストに説法を入れ、布教にいそしんでいたりする。

(22) THE RADHA KRSNA「ラダ・クリシュナ・テンプル」
邦盤（東芝EMI TOCP-7685）

(23) J.O.B. ORQUESTRA
「OPEN THE DOORS TO YOUR HEART」

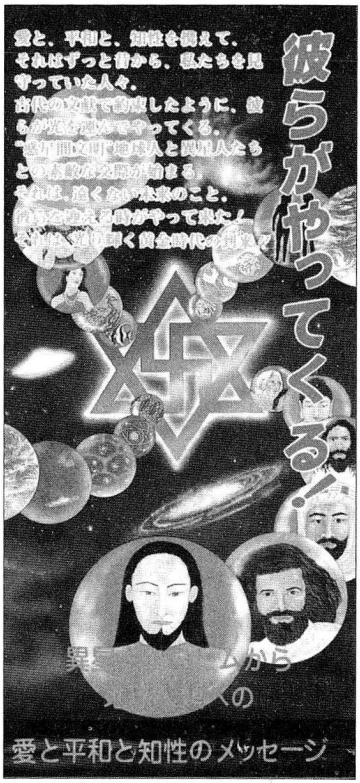


(24) SHELTER「PERFECTION OF DESIRE」

カルトとは言いきれないがUFOフリーセックス教団?として話題になった『**ラエリアン・ムーブメント**』も忘れてはいけない。

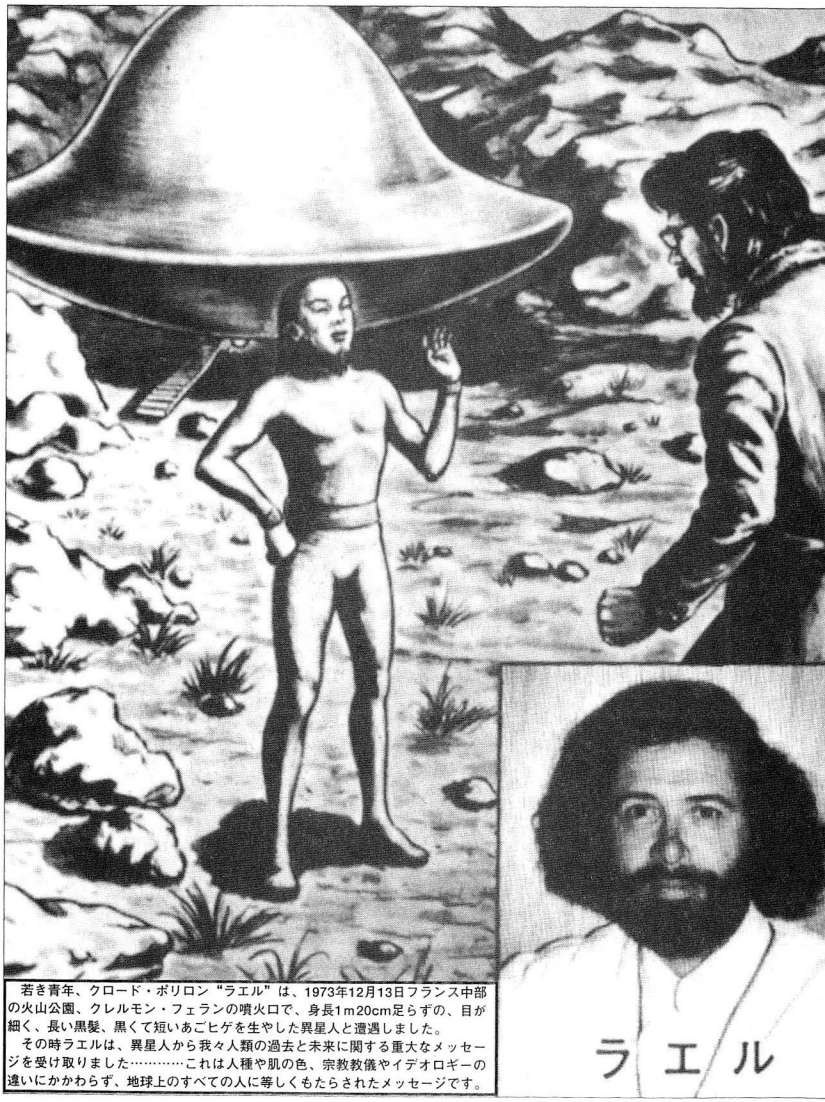
異星人**エロヒム**と遭遇したラエルはアポカリプスの時代にむけて、UFOエア・ポートと大使館の設立を計画中!!

ダビデスターと逆卍が絡むシンボルマークはグッドデザインだが、サウンドの方(25)といえば**ジャーニーみたいに世紀末の王道をいく無駄な音。**



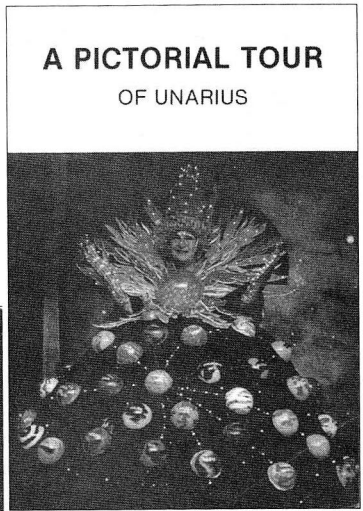
ラエル来日特別講演会　優待券より
平成2年4月
入場料　(東京　日本教育会館)　¥1、500-
(沖縄　ハーバーヒューホテル)
(北海道　札幌サンプラザ)　¥1、300-
※当日この券をご持参の方は300円割引いたします。
主催　日本ラエリアン・ムーブメント
沖縄ラエリアン・ムーブメント
協賛　アオム出版(*!*)

(25) 日本ラエリアン・ムーブメント：監修　ラエル：著「無限との調和」　発行：アオム出版(*!*)



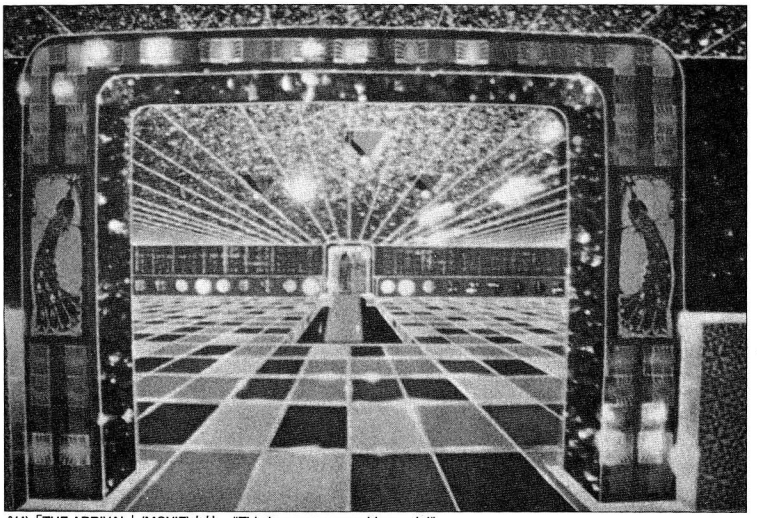
若き青年、クロード・ボリロン“ラエル”は、1973年12月13日フランス中部の火山公園、クレルモン・フェランの噴火口で、身長1m20cm足らずの、目が細く、長い黒髪、黒くて短いあごヒゲを生やした異星人と遭遇しました。
その時ラエルは、異星人から我々人類の過去と未来に関する重大なメッセージを受け取りました……これは人種や肌の色、宗教教儀やイデオロギーの違いにかかわらず、地球上のすべての人に等しくもたらされたメッセージです。

UFOの飛来を**宇宙人と約束**した教団だったら、すでにその土地を購入している**『ユナリアス』**の方が**一枚上手**だろう。ユナリアス（宇宙統一的次元間相互理解の科学）という原理に基づいて活動する彼等はもはや肉体など必要としておらず、完全な霊的存在によって構成された宇宙組織をめざす。それは非常に高次の領域に位置しており、二千年前のナザレスの神と同時期に生きた者や、**元レオナルド・ダ・ヴィンチだった者**などの光の世界に位置する超越した魂によって構成されている。石器時代や、エジプトへの**ウソつき輪廻話**でUFOがビュンビュン飛びまくるそんなユナリアスのビデオ(V4)(V5)は凄い!!

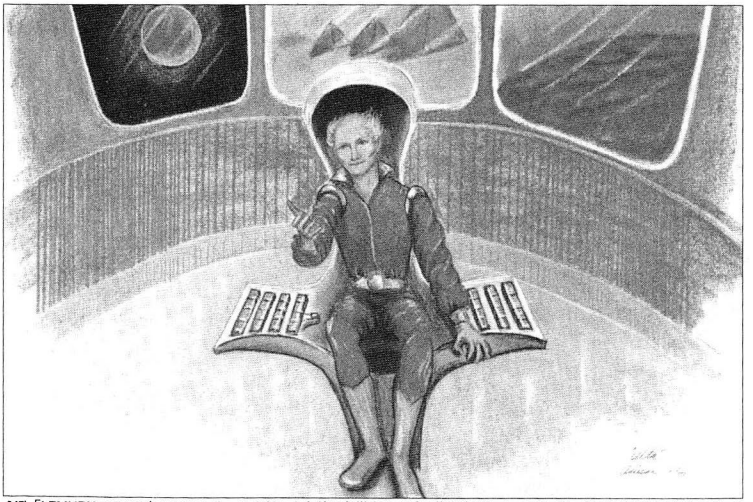


「A PICTORIAL TOUR OF UNARIUS」

オウム真理教も熱心に研究していた「テスラ・コイル」もユナリアスは所持！



(V4)「THE ARRIVAL」(MOVIE)より、*"This is a new spaceship movie!"*



(V5)「LEMURIA RISING」(MOVIE) は、このドヘタな絵に象徴される手の抜き方がかえって恐ろしく悪趣味な効果を生んでいる。

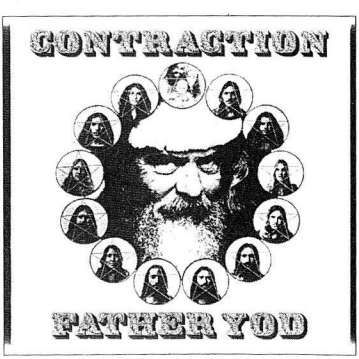
人こそ殺してないが、音楽的胡散臭さにおいて群を抜いているのが**『ヤホワ13』**(26)~(35)である。教祖**ファザーヨッド**は、愛車ロールスロイスのボンネットに**インディアンを平気で座らせる**事のできる器のでかい奴だ。

そんなスケールのでかい奴から湧いて出る音は、やはり壮絶。一言でいうと襲われそうな音。クンタキンテの名を聞くと思いだす、残酷ＴＶプログラム**「ルーツ」のテーマ**のように、そこはかとない不安と悲しみを、湿った風が運んでくる。基本的にはダークなヘビーサイケだが、**オオカミ少年チャイノのボンゴ**を彷彿とする、無垢なパーカッシブサウンドへの展開がむせび泣く(26)(35)はベスト。ガレージパンクの雄**スカイ・サクソン**とぶっちぎるラストアルバム(34)も泣ける。

押し付けがましくひとりよがりな作品が氾濫するカルトの世界で、音楽的にみてもここまで完成度の高いアルバムを多数残す『ヤホワ13』は偉い。おもわず入信したくなるが、ファザーヨッドは八〇年代に**ハングライダーであっけなく墜落死**。

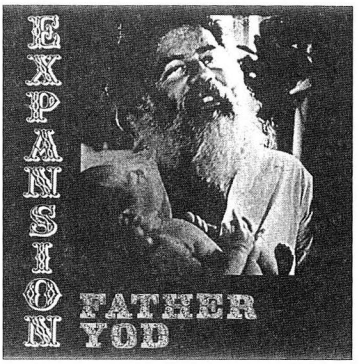
(26)「KOHOUTEK (Father Yod and Spirit of 76)」

(27)「YA HO WA 13」

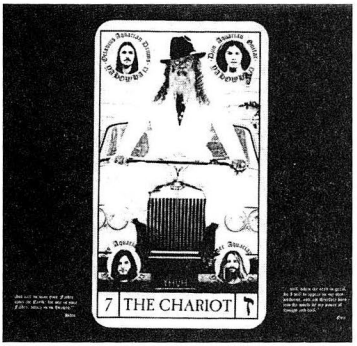


(28)「CONTRACTION(Father Yod and Spirit of 76)」

(30)「SAVAGE SONS OF YA HO WA」



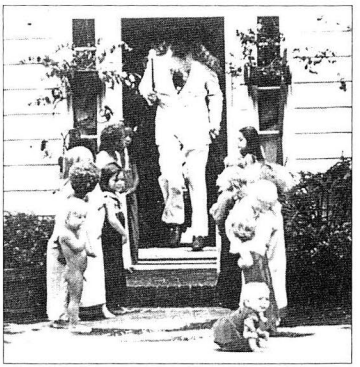
(29)「EXPANSION(Father Yod and Spirit of 76)」



(32)「I'M GONNA TAKE YOU HOME」裏ジャケット

(32)「I'M GONNA TAKE YOU HOME」

(33)「PRINCIPLES OF THE CHILDREN」裏ジャケット



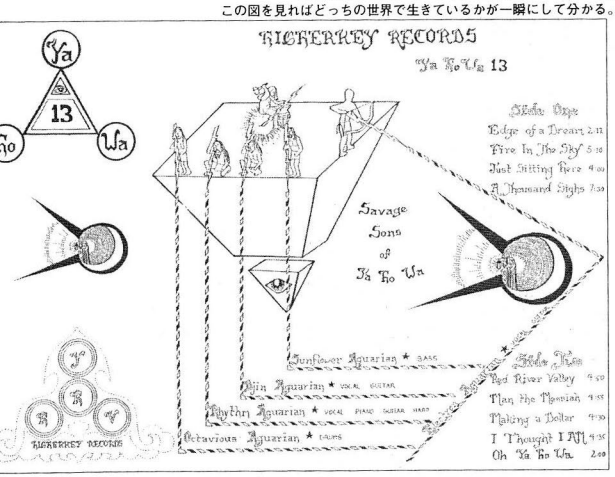
(33)「PRINCIPLES OF THE CHILDREN」

(35)「YODOSHIP」

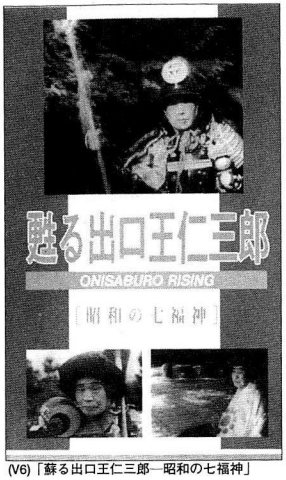
(31)「PENETRATION AN AQUARIUM SYMPHONY」

(34)「GOLDEN SUNRISE
(With Sky Saxon)」

(30)「SAVAGE SONS OF YA HO WA」のリーフレットより
雷を落とそうとしているヤホワ軍団（バンド）の図。
この図を見ればどっちの世界で生きているかが一瞬にして分かる。



突出したカルトが生まれにくいわが国にも、『ヤホワ13』並みの大仕事をやってのけた偉人がいる。『**大本教（大本）**』を率いていた未曾有の大予言者**出口王仁三郎**がその人だ。(V6)は王仁三郎によって昭和十年に制作された布教のためのフィルムであるが、自ら七福神全てに扮する。暗い谷間に落ち込んでいく日本の前途を予見していたという王仁三郎は、まるで**キューティーハニーのような変わり身の早さ**でコスプレる。しかし、この映画が撮影された四か月後には、二度目の大弾圧をうけ国家の手によって**容赦なく神殿を爆破**され、これらセットもダイナマイトで吹き飛ばされた。このフィルムをビデオ化した八幡書店は立派。



(V6)「蘇る出口王仁三郎―昭和の七福神」
発行・発売：八幡書店　定価￥9,800-

船に乗った「昭和の七福神」　この大事業は、かとうれいこと阪東英二の乗った船や観月ありさを指揮とする七福神CMの示唆。

みずから七福神をコスプレって得意満面の出口王仁三郎、この得意満面の笑みの奥にはダイナマイトが待ち受けていたとはなんともセッショウ。昭和初期の警察はとにかく爆破しないと気がすまなかったらしい。

大本教の大弾圧から半世紀、同じく国家の手によって衰亡の瀬戸際に立たされている『**オウム真理教**』であるが、本文で触れたとおり、音の方はかぎりなく素人だ(36)〜(39)。ロシアで雇った**キーレーン**というオーケストラもあったが、弾圧によって事実上解散。笑って聞くしか方法のないオウムのお陰で、やはり日本のカルトは音に疎いと印象づけられた。こうなれば**マジカル・パワー・マコが法人をとるしかない**と本人もいっているが、オウムの映像作品だけは別格だ。

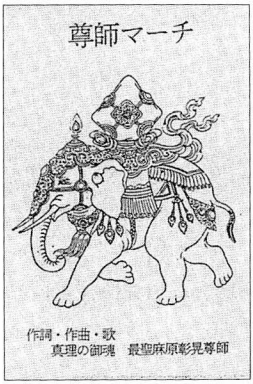
麻原彰晃の「ザ・コンサート」ポスターより、演奏:コスミックにはケイマ正大師やサクラー正悟師、ウッパラヴァンナー正悟師などヌケる奴らが大集合

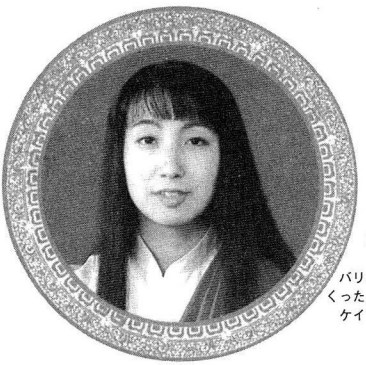
ニューロマンティック時代の麻原尊師

(39)「巨星逝く―悲劇の天才科学者　村井秀夫」(CASETTE BOOK)　オウム出版
死人を即商売に……村井氏の怨念渦巻く名作。

老人ホームにてシンセサイザーコンサートをするオウムだが、一見ゲオメトリコのようなハードノイズ・バンドに見える。手前の客は全員ハゲ！

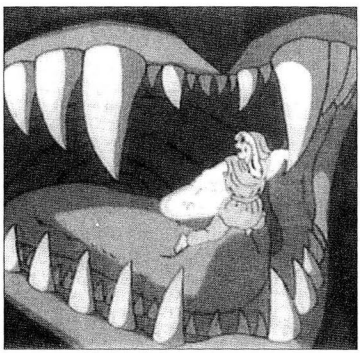
(36)「進め真理教」/(37)「尊師マーチ」/(38)「魔を祓う尊師の歌」3点とも(TAPE)

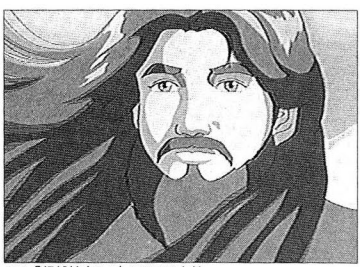




「ザ・コンサート」のポスターより、バリバリに化粧キメまくった、ハクいマハー・ケイマ正大師はヌケる。みんなでヌコう!!

(V7)「超越世界1-10」(VIDEO) より

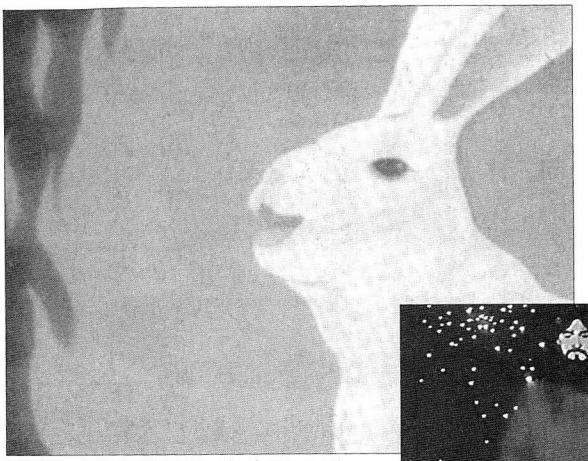

(V7)「超越世界1-10」(VIDEO) より


(V8)「超越神力1-5」(VIDEO)より

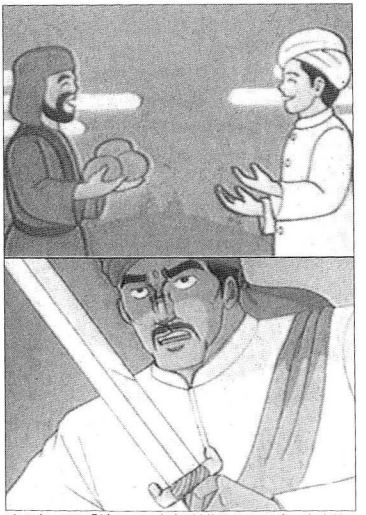
ヤマトやガンダムからの影響を指摘された(V7)(V8)のシリーズや、(M1)～(M6)の漫画もよいが、オウムとアニメの距離が語られ尽くした今、特筆すべきはやはり(V9)のシリーズではないだろうか。このシリーズのジャータカとは、サキャ神賢（シャカ）の前世を数々の逸話で綴った**南伝経典**のことで、そこには十億生もの長きにわたって功徳を積むだけの生を費やしてきた氏の輪廻の証が綴られている。

手塚治虫の『ブッダ』もこの経典を引用している部分は多数見受けられるが、その冒頭で描かれたウサギが自らの肉を有能神に布施する話は、オウムもアニメ化していて感心だ。登場するサル、ヤマイヌ、カワウソ、ウサギの吹き替えは、**長女、三女、妻・松本知子**とそして**麻原**というファミリーによる心暖まるものだが、中でも**アーチャリーの怒濤の吹き替え**が笑える。ちょうど歯の生え変わる時期だったらしく、**何を言っているのかサッパリ聞きとることができない。**このシリーズは、仏教の盛んなスリランカにおいて毎月一回、警戒行の日に国営でテレビ放映され好評を博したらしい。これを見ずして、アニ

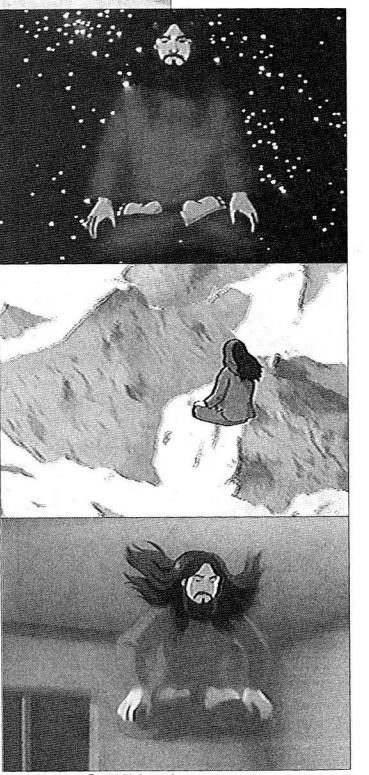
メの影響という現世的な一面のみを強調するのは、マスコミの浅はかさであり、**ある意味オウムに対して失礼だ。**



(V9)「ジャータビデオ紙芝居シリーズ1-7」(VIDEO) より、このシーンは手塚の『ブッダ』なみに泣ける。
麻原の哀れな叫びには、エリック・バードンのシャウトをある意味超えた、悲愴感が漂う。

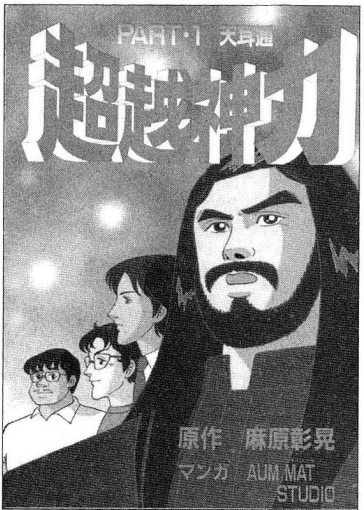


上2点、(V9)「ジャータビデオ紙芝居シリーズ1-7」より

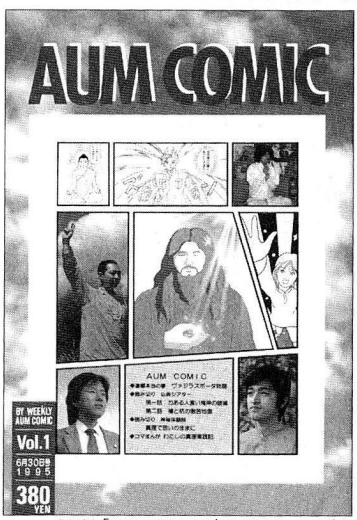


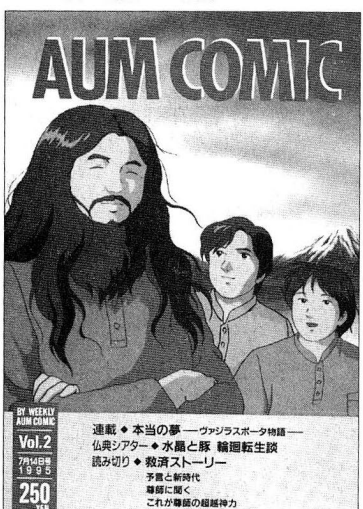
上3点、(V8)「超越神力1-5」

(M3)「滅亡の日」(COMICS)
髪の毛のハイライトがとっても怖い「黙示録大預言」の書。

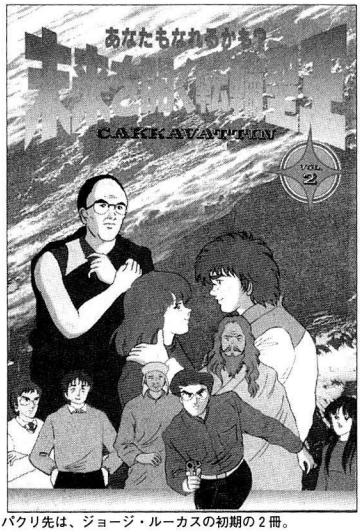


(M4)「超越神力」(COMICS)
アニメにもなった原作のマンガ化。

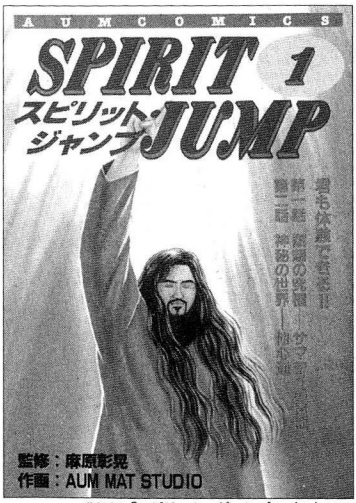




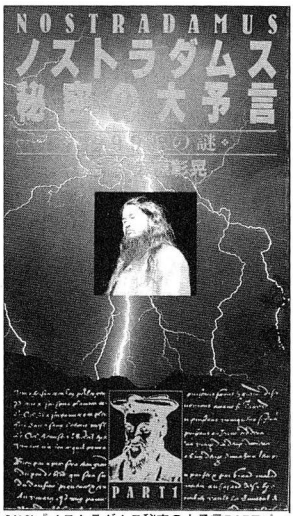
(M7/8)「AUM COMIC 1/2」(COMICS)　ＲＣサクセションに影響を受けた高校生バンドが真理にめざめる「本当の夢」の作者は多田かおるの「愛してナイト」で時間が止まっている証拠。



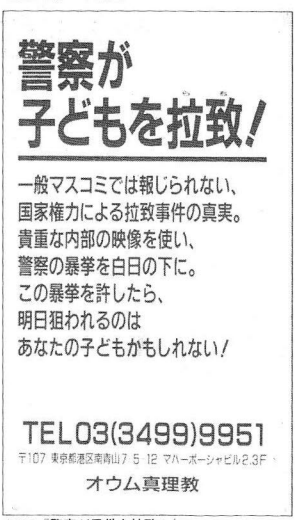
(M1/2)「未来を開く転輪聖王１／２」(COMICS)　パクリ先は、ジョージ・ルーカスの初期の２冊。
アルタ前でバンバン配って「いいとも」帰りの客が新宿駅に捨てまくっていた光景がなつかしい。



(M5/6)「スピリット・ジャンプ１／２」(COMICS)　「スピリッツ」と「ジャンプ」が真理で融合！
最近のオウムは、信者の素人マンガを狂ったようにリリースしている。まるっきり意図がみえない。



(V10)『ノストラダムス秘密の大予言PART1』
VHS 45分　¥1000-



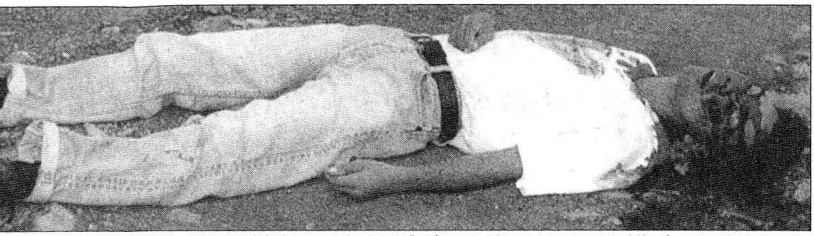
(V11)『警察が子供を拉致!』

またオウムは(V10)のような力作や、一連の弾圧とただ子供が延々と泣き叫ぶのみの(V11)などもリリースしていて**ハードコア**だ。そしてやはり謎なのは、(V12)のイニシエーションで使われていたという**死体ビデオ**だろう。

中味は、**ディスチャージの「WHY」**におけるアートディレクションを彷彿とさせる壮絶な内容で、『ジャンク』や『アメリカン・バイオレンス』などの映画から抜き取った、ゴロゴロ死体が転がっているシーンや、もしくは死の瞬間をとらえたニュースなどをコラージュしたのみ。そこに麻原の**「人は死ぬ。絶対死ぬ……。死は避けられない……。」**というナレーションがループで被さるという谷底へ突き落とされそうな内容だという。

また、子供向けのエデュケーショナルものでは、**「ヒトラーは生きていた」**という「まんがはじめて物語」のようなヒトラーをヒーローとした**発狂した伝記物**もあったらしいが、**強制捜査に紛れて没収**。入手は大変困難だ。

*



(V12)幻の『バルドーの導き死体ビデオ』は、恐らくこうしたブルジェリアー派のメキシカンクラスト系ヴィジュアルに溢れていただろう。

一〇〇本以上の作品を発表してきた（公にはしていないが）オウムであるが、国家によって編集機材じたいを没収された今、**新作が生み出されることはたぶん無い**だろう。

これらカルトの忘れ形身は、流行や、技術などの陳腐な価値を超え、レコードや、CDまたビデオといった**記録媒体のもつ真価を永久に問いつづける。**またそこに記録された内容は**後世まで伝わり続ける運命にあり**、カルトは死んでも、その思想や哲学はいつまでも生き続けるのだ。

塩化ビニールの溝や、磁気テープの中で……。

永遠と……。

参考文献

『これはすごい世界の心霊写真集』佐藤有文（立風書房）

『黒魔術のアメリカ』アーサー・ライアンズ（徳間書店）

『魔術』ムー特別編集事典（学研）

『アメリカ新宗教事情』（ジャプラン出版）

『狂ったサル』セント・ジェルジ（サイマル出版会）

『世界宗教事典』（青土社）

『A Pictorial tower of UNARIUS』Unarius Educational Foundation

『SATANIC WITCH』Anton Szandor LaVey

『KOOKS』Feral House

資料提供

（株）コアマガジン土屋静光・広中利彦・ロスアプソン

このコーナーで紹介したレコードは入手困難なものが大半ですが、現在入手可能なものは新宿ロスアプソンで取扱っています。

Los Apson?（tel: 03-3369-9616）

ジ・オウム——サブカルチャーとオウム真理教
プランク 編

プロデュース：　永田陽介（JBD Co.,Ltd.）

企画・編集・構成：　椹木野衣、木村重樹（Plank.,Co. Ltd.）*KFG02454 @ niftyserve.or.jp.*
本文DTPレイアウト：木村重樹（Plank.,Co. Ltd）

表紙・カバー装幀：　中島 浩（Plank.,Co. Ltd）
編集協力：　黒田一郎
　　川畑健一郎（Plank.,Co. Ltd）

本文イラスト：　浅生ハルミン

1995年10月30日　第1刷発行

発行者／平尾忠信
制　作／株式会社ＪＢＤ
　　〒150 東京都渋谷区渋谷1-5-5　ローゼ渋谷　tel. 03-3409-9920
発行所／株式会社太田出版
　　〒160 東京都新宿区荒木町22　エプコットビル1Ｆ　tel. 03-3359-6262
印刷所／有限会社北陽社

©1995 JBD Co.,Ltd. / Plank / and all authors.
Printed in Japan

● 定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、お取り替えします。

ISBN4-87233-249-0 C0095